

国立国語研究所学術情報リポジトリ

国立国語研究所年報 2023年度

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立国語研究所 公開日: 2025-05-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/0002000503

国立国語研究所

年報

2023 *NINJAL YEARBOOK*

国立国語研究所の活動（2023 年度）



総合研究大学院大学日本語言語科学コース除幕式（2023 年 4 月）

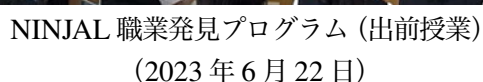


宮古島市との連携・協力協定書締結式（2023 年 10 月 24 日）

第 1 回宮地裕日本語研究基金
学術奨励賞授賞式
（2023 年 6 月 23 日）



言語学レクチャーシリーズ Vol.26
「質的研究へのいざない
—日本語教育学を中心に—」
(2024年1月、WEB公開)

[illegible][illegible]

第18回 NINJAL フォーラム
「国語研の言語生活研究の75年
生きたことばをつかまえる・追跡する調査研究」
(2023年12月16日)

国立国語研究所の活動

目 次

2023 年度年報の発刊にあたって	1
I. 概要	3
1. 沿革とミッション	4
2. 2023 年度の活動の概略	5
3. 組織	7
(1) 組織構成図	7
(2) 運営組織	8
・ 運営会議	8
・ 外部評価委員会	8
・ 所内委員会組織	8
(3) 構成員	9
・ 所長・研究教育職員・特任研究員	9
・ 客員教員	10
・ 名誉教授	10
・ 外来研究員	10
・ プロジェクト非常勤研究員・共同研究員	11
4. 2023 年度の予算および決算	12
II. 共同研究と共同利用	13
1. 共同研究プロジェクト	14
2. 人間文化研究機構基幹研究プロジェクト	34
3. 外部資金による研究	38
4. 2023 年度公開中のコーパス・データベース	40
5. 学術刊行物	56
(1) 所員による著書・編書	56
(2) 国立国語研究所論集	57
6. 研究成果の発信と普及	59
(1) 国際シンポジウム	59
(2) 合同シンポジウム・研究発表会	59
(3) プロジェクトのシンポジウム・ワークショップ・研究発表会	60
(4) NINJAL コロキウム	82
(5) NINJAL サロン	83
(6) 講習会・チュートリアル・セミナー	85
7. センター・研究図書室の活動	87
(1) 共同利用推進センター	87
(2) 言語資源開発センター	89
(3) 研究図書室	89
III. 国際的研究協力	91
1. 世界の大学・研究機関との提携	92
2. 国際シンポジウム・国際会議の開催	92
3. 日本語研究英文ハンドブック	92
4. Mouton-NINJAL 言語学ライブラリー	94
5. Endangered and Lesser-Studied Languages and Dialects	94
6. 海外の研究員の招聘・受入	95
IV. 社会連携と広報	97

1. 地方自治体との連携	98
2. 見学・研修・視察等	98
3. 学会等の後援・共催	98
4. 広報	99
(1) 刊行物	99
(2) Web 発信等	99
(3) 一般向けイベント	100
(4) 児童・生徒向けイベント	101
V. 大学院教育と若手研究者育成	103
1. 総合研究大学院大学	104
2. 連携大学院	104
3. 特別共同利用研究員制度	104
4. NINJAL チュートリアル	104
5. 優れたポストドクターの登用	105
VI. 教員の研究活動と成果	107
学位, 学歴, 職歴, 専門領域, 所属学会, 学会等の役員・委員, 受賞歴, 参画共同研究, 科研費・外部資金による研究課題, 研究業績 (著書・編書, 論文・ブックチャプター, コーパス・データベース類, 展示など, その他の出版物・記事), 講演・口頭発表, 研究調査, 研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営, 一般向けの講演・セミナーなど, その他の学術的・社会的活動, 大学院教育・若手研究者育成	
VII. 資料	185
1. 運営会議	186
運営会議規程	186
2023 年度の開催状況	186
運営会議の下に置かれる専門委員会	187
2. 評価体制	188
(1) 自己点検・評価委員会	188
(2) 外部評価委員会	188
(3) 基幹研究プロジェクトの評価	189
3. 所長賞	189
4. 研究教育職員の異動	190
VIII. 外部評価報告書	191
令和 5 年度業務の実績に関する外部評価報告書	193
はじめに	194
評価結果報告書	197
令和 5 年度機関拠点型基幹研究プロジェクト実績報告	199
令和 5 年度機関拠点型基幹研究プロジェクト評価結果	209
令和 5 年度基幹型プロジェクトの評価	211
令和 5 年度センターに関する評価	331
令和 5 年度管理業務に関する評価	345
資料	350

2023 年度年報の発刊にあたって

2023 年度の年報をお届けします。2023 年度は第 4 期中期計画期間の 2 年目にあたります。中期計画に沿った研究はおおむね順調に進展しています。これについては本冊子後半に収録されている外部評価報告書をご覧ください。

中期計画に記載された以外の研究としては、公募による共同利用型共同研究を 14 件新規に採択し、企業との共同研究を 5 件実施しました。これらにくわえて、所員が研究代表者となっている科学研究費助成事業が 31 件あります。

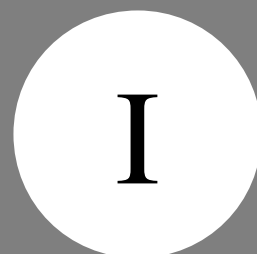
研究以外の面で特記すべき事項がふたつあります。ひとつは、総合研究大学院大学に参画して「日本語言語科学コース」(定員、博士後期課程 3 名)を開設したことです。総合研究大学院大学における大学院教育への参画は当研究所が 2009 年に大学共同利用機関法人に移管されて以来の課題でした。我が国には、言語学・日本語学関係の大学院がすでに多数設置されていますから、それらとの差異化が難しい宿題でした。この度、移管後 14 年を経て、当研究所の特徴である言語資源の活用と、言語学・日本語学の範囲を超えた幅広い教育を特徴とする大学院を設置することができました。幸い学生諸君にもアピールするところがあったようで、国内外から予想を超える応募者があり、入学者 4 名を迎えることができました。

もうひとつの特記事項は、国立国語研究所の「ミッション」を成文化したことです。従来、当研究所の研究上の方向性や社会において果たすべき役割については、折々に様々な作文がなされてきており、その一部は過去の『年報』に記載されています。しかし、それらは研究所員による熟議を経たものではありませんでした。今回は、所員全員によるブレイン・ストーミングを経て原案を作成し、そこに運営会議委員の先生方のご意見を反映させて完成に到りました。新しい「ミッション」は研究所のホームページでもご覧になれますが、本冊子の「沿革とミッション」の欄にも記載されています。どうぞご覧ください。

最後に、2023 年度には、概算要求等において、新しい研究計画やそれを支える設備について様々な予算要求を行いました。これについては来年度の本欄で報告させていただきます。

引き続き国立国語研究所をよろしくお願いいたします。

2025 年 3 月
国立国語研究所長
前川喜久雄



概要

1 沿革とミッション

国立国語研究所は、国語に関する総合的研究機関として 1948 (昭和 23) 年に設置された。第二次世界大戦の敗戦後、我が国が新しく民主国家として再出発するに当たって、国語に関する科学的、総合的な研究を行う機関の必要性が官民の双方から強く望まれた結果であった。「国立国語研究所設置法」(昭和 23 年 12 月 20 日法律第 254 号) の第二条には研究所が行う調査研究として「現代の言語生活及び言語文化に関する調査研究」「国語の歴史的発達に関する調査研究」「国語教育の目的、方法及び結果に関する調査研究」「新聞における言語、放送における言語等、同時に多人数が対象となる言語に関する調査研究」が挙げられ、これらの調査研究に基づいて行う事業として、「国語政策の立案上参考となる資料の作成」「国語研究資料の集成、保存及びその公表」「現代語辞典、方言辞典、歴史的国語辞典その他研究成果の編集及び刊行」が挙げられていた。

ここから分かるように、国立国語研究所は政府の言語政策立案に資する研究所として設立されている。しかし、ここで注意すべきは、言語政策の立案そのものは、文部省が設置する国語審議会と文部省に委ねられており、研究所の業務に含まれていないことである。国立国語研究所は、言語政策の科学的基礎を確立するための、独立性をもった研究機関として設立されたのである。その後、1950 年代から 70 年代にかけての時期に、国立国語研究所は、現代日本語研究の基礎を確立することに貢献した。

1970 年代中頃からは、我が国の経済発展にともなう日本語学習者の増加や、ベトナム戦争終結にともなうインドシナ難民受け入れに対処するために、日本語教育の振興が重要な言語政策として認知されるようになった。国立国語研究所には 1974 年に日本語教育部が設置され、1976 年に日本語教育センターに改組された。各大学における日本語教師養成が軌道にのる 1980 年代後半までの時期に、国立国語研究所は日本語教育教材の開発と教師養成に大きな役割を果たした。

2000 年代に入ると、政府による行政改革の一環として、2001 年には独立行政法人への移管が、次いで 2009 年には独立行政法人国立国語研究所の廃止と大学共同利用機関法人への移管が行われて現在に到っている。このふたつの設置形態は、国民への行政サービスの効率化と、言語政策から切り離された純粋にアカデミックな研究という、ほぼ正反対のベクトルを持っていたため、研究所の活動にかなりの混乱を生じたが、現在では、自発的かつアカデミックな科学研究をもとに、世界の日本語研究の進展に貢献することが研究所のありかたとして定着しつつある。2023 年には、総合研究大学院大学へ参画して「日本語言語科学コース」を開設し、あわせて国立国語研究所のミッションを以下のように明文化した。

国立国語研究所ミッション

国立国語研究所は日本語に関係する学術研究の進展を牽引することをミッションとします。そのために以下の取り組みを重点的に進めます。

- ・言語研究のための高品質な言語資源の開発など、日本語・日本語教育研究のインフラ整備を大規模かつ組織的に推進し、利用を促進します。
- ・日本語ならびに日本語と関連する諸言語について、諸科学と連携しながら先端的な研究を実施して新たな研究領域を開拓し、国内外の研究ネットワークを構築します。
- ・言語資源開発や先端的研究によって得られた知見を大学院教育などによって次世代の研究者に継承させます。

このミッションは現時点において国立国語研究所が果たすべき役割を明文化したものであり、これからの研究計画立案・評価の指針を与えるものである。

国立国語研究所では、国内外の諸大学・研究機関と連携して、個々の大学ではできないような研究プロジェクトを全国的・国際的規模で展開しているが、第4期中期計画の6年間に於いてそれらの土台となるのは「開かれた言語資源による日本語の実証的・応用的研究」という第4期機関拠点型プロジェクトの研究目標である。この目標の達成に向け、2022年度より7件の基幹共同研究プロジェクトを中心に活動を開始した。詳細は次のとおりである。

(1) 共同利用・共同研究

- 各プロジェクトは計25件の共同研究発表会(参加者延べ1,310人)を開催してプロジェクトの活動を推進するとともに、14件の国内シンポジウム・ワークショップ等(参加者延べ2,012人)、2件の国際シンポジウム・ワークショップ等(参加者延べ53人)を開催して研究成果を広く発信したほか、4冊の書籍を国際出版、3冊の書籍を国内出版、1冊の教科書を国際出版、1冊の教科書を国内出版、2冊の報告書を研究所のリポジトリで公開した。国際出版4冊のうち3冊は、De Gruyter Mouton社との出版協定に基づくシリーズで刊行されたものである。
- 異分野融合研究を推進するために第4期に新たに開始した外部研究者をリーダーとする公募型の異分野融合型共同研究を継続して3件実施したほか、研究所が保有する研究資料や蔵書、実験機器等を活用する公募型プロジェクト「共同利用型」について新規に15件(継続を含めて計28件)採択するなど、開かれた大学共同利用機関として外部公募型共同研究を積極的に推進した。
- コーパスの一部は言語資源開発センターが管理するオンライン検索システム「中納言」で公開されており、ユーザ総数50,952名、うち令和5年度の新規登録ユーザ数は9,066名、年間検索数は272万件(前年度比124%)と、広く研究に活用された。
- 外部機関と連携して言語資源・検索ツール等の整備をおこない、①コーパス2件、データベース2件、アノテーション9件、辞書・語彙表5件、映像画像データ29件の新規公開、②コーパス3件、データベース2件、アノテーション1件、画像データ1件の追加公開、③コーパス2件、データベース1件、ツール等1件の更新、④コーパス1件の再公開、⑤データベース1件の機能拡張をおこなった。新規公開のコーパス2件は、昭和・平成期の日本語を通時的に研究できるように設計した『昭和平成書き言葉コーパス』完成版、日本語を勉強している中国語母語の大学生の発話及び作文データを、4年間にわたって収集した『B-JAS 北京日本語学習者縦断コーパス 中納言版』である。

(2) 若手研究者の人材育成

- 若手研究者のキャリアパスとして特任助教4名とプロジェクト非常勤研究員68名を雇用したほか、日本学術振興会の特別研究員PDを4名受け入れ、プロジェクトへの参画などを通して実践的に日本語研究を推進できる人材の育成につとめた。その成果を含む大学院生筆頭著者の発表が言語処理学会第30回年次大会において委員特別賞を受賞、また学振特別研究員の論文が2023年度日本言語学会論文賞を受賞した。
- 若手研究者を育成するために、各プロジェクトの研究テーマに即した若手研究者向けのチュートリアル・講習会を16回開催し、合計で741名が参加した。このうち5回はコーパス利用のための講習会とした。こうした取り組みにより、大学の授業でコーパスを利用できるオンライン検索アプリケーション「中納言」の講義用アカウントを131件、計4,019名の学生等に発行するなど、コーパスが授業で広く活用された。
- 大学生・大学院生向けに「言語学レクチャーシリーズ」を新たに8本作成してYouTube国語研チャンネルにて公開し、既公開分とあわせ年間60,292回再生された。

(3) 社会連携・社会貢献

- 研究成果を学生や一般に分かりやすく発信するため、NINJALフォーラム「国語研の言語生活研究の75年: 生きたことばをつかまえる・追跡する調査研究」をハイブリッド開催し、対面・オンライン併せて190人の参加があった。また大学共同利用機関協議会主催の大学共同利用機関シンポジウム2023「現代の社会問題に挑む日本の科学」(日本科学未来館)の主担当機関として、シンポジウムの企画・運営を実施し、対面で68名、ニコニコ動画によるオンライン視聴者数延べ31,352人の参加があった。
- 研究成果を一般に向けて伝えるために2024年6月に書籍『日本語の大疑問2』(幻冬舎新書、初版発行

部数 10,000 部) を刊行した。これは令和 3 年 11 月に刊行した『日本語の大疑問—眠れなくなるほど面白いことばの世界』(累計発行部数 74,000 部) の続編にあたるもので、ポータルサイト「ことば研究館」に掲載した記事を改定の上、書籍化したものである。

- 国語研ポータルサイト「ことば研究館」において、ことばに関する一問一答式の記事「ことばの疑問」25 本および各種催し物、メディア掲載情報など、ことばに関する一般向けコンテンツを発信した。また研究所の研究活動や研究者などを紹介する一般向け広報誌『ことばの波止場』Vol.13 を 3 月に刊行した。
- 鹿児島県大島郡和泊町・知名町(沖永良部島)との協定に基づき、知名町中央公民館講座町職員研修会「しまむにサロン」を毎月 1 回、計 11 回開催したほか、沖永良部島の継承文化・言語イベントである中高生対象のヘリテージ・キャンプや、島ことばと絵本制作トーク「星の話をみんなで語り継ごう」などを通して、延べ 380 名を対象に、地域言語コミュニティ内で地域言語の記録と継承を行うことのできる市民科学者の育成をおこなった。このうち知名町中央公民館講座は、国内では先例のない消滅危機言語活動の先進的な取り組みにつながった。研修会で言語の記録訓練を学んだ受講生が中心となり自主的に調査チームを組織した上で、国語研作成の基礎語彙リストを活用して自ら約 1000 語の音声データを収集し、国語研のサイトからオープンデータとして公開するなど、住民の自発的・主体的な活動と研究所との実質的連携を産み出した。
- コーパスを活用した産学連携研究として、民間企業 6 社と共同研究をおこなった。リクルート社やホンダリサーチインスティテュート社との共同研究をおこなった。ホンダリサーチインスティテュート社と共同で構築した位置情報参照表現データベースについて言語処理学会第 30 回年次大会で発表し、優秀発表賞を受賞した。また SB Intuitions 社と共同でおこなった研究について情報処理学会 NL 研究会で発表し、第 1 著者(SB Intuitions)が若手奨励賞を受賞した。
- 作文の自動評価システム開発のため、富士通研究所を中心とした AI の専門家と連携して研究を進めた。

(4) 国際連携・国際発信

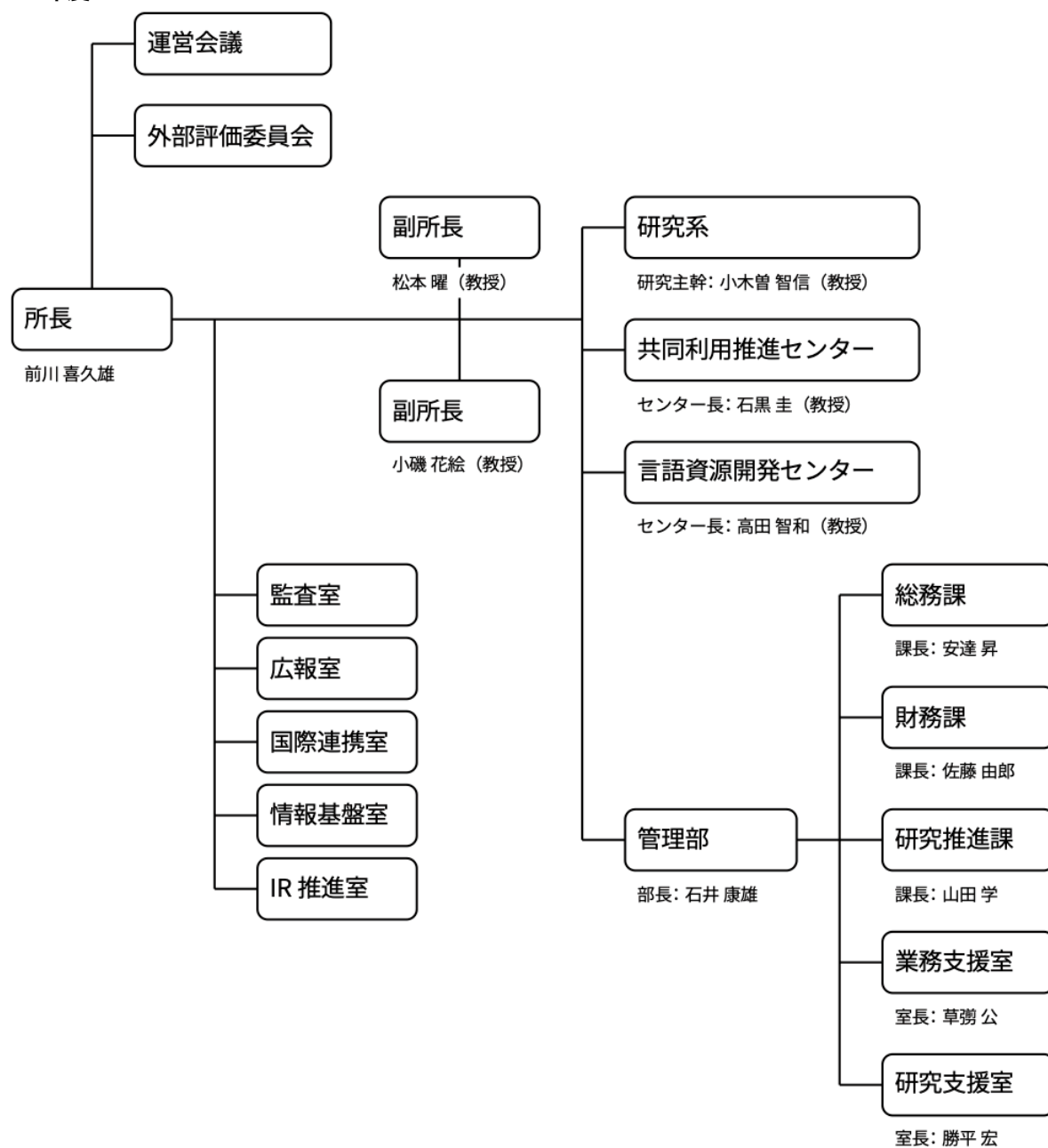
- 研究成果を国際発信するために、De Gruyter Mouton 社から 3 冊の書籍をオープンアクセスで出版した。これらはいずれも De Gruyter Mouton 社との協定に基づくシリーズ Mouton-NINJAL Library of Linguistics (MNLL) によるものである。また同社との協定に基づく Handbooks of Japanese Language and Linguistics シリーズ (HJLL) のうち、残る 1 巻と 7 巻も来年度出版予定である。
- コーパスを活用した国際的な日本語研究促進のために、言語資源の欧州を中心とする頒布に実績のある ELDA (Evaluations and Language resources Distribution Agency) と協定を結び、「日本語話し言葉コーパス (CSJ)」(有償版コーパス) の配付を開始した。

(5) その他

- 令和 5 年度外部評価委員会にて指摘を受けた研究所ホームページについての意見を踏まえ、共同利用推進センターのページを新設したほか、言語資源開発センターのページに同センターのミッションなどの記載をおこなった。

(1) 組織構成図

2023 年度



(2) 運営組織

運営会議

(外部委員)

伊東祐郎	国際教養大学専門職大学院特任教授
河原達也	京都大学大学院情報学研究科教授
金水敏	放送大学大阪学習センター所長/特任教授
呉人恵	富山大学名誉教授/北海道立北方民族博物館館長
小泉政利	東北大学大学院文学研究科教授
近藤泰弘	青山学院大学文学部名誉教授
滝浦真人	放送大学教養学部教授
田中牧郎	明治大学国際日本学部教授
皆川泰代	慶應義塾大学文学部教授

(内部委員)

小磯花絵	副所長/教授
松本曜	副所長/教授
小木曾智信	研究主幹/教授
石黒圭	共同利用推進センター長/研究系/教授
高田智和	言語資源開発センター長/研究系/教授
横山詔一	広報室長/教授
浅原正幸	情報基盤室長/教授

任期：2023年4月1日-2025年3月31日(2年間)

外部評価委員会

上山あゆみ	九州大学教授
片桐恭弘	産業技術総合研究所人工知能研究センター長
坂原茂	東京大学名誉教授
清水康行	日本女子大学名誉教授
砂川裕一	群馬大学名誉教授
陳力衛	成城大学経済学部教授
日比谷潤子	聖心女子学院常務理事
橋田浩一	東京大学教授
米田信子	大阪大学教授

任期：2023年4月1日-2025年3月31日(2年間)

所内委員会組織

- ・連絡調整会議(所長, 専任研究教育職員, 管理部長)

連絡調整会議のもとに, 各種委員会を設置

・管理・運営関係

- 自己点検・評価委員会
- 情報セキュリティ委員会
- 情報基盤運用委員会
- 知的財産委員会
- 情報公開・個人情報保護委員会
- ハラスメント防止委員会
- 研究倫理委員会
- 施設・防災委員会
- 将来計画委員会

- ・学術・発信関係
 - 言語資源開発センター運営委員会
 - 共同利用推進センター運営委員会
 - 広報委員会
 - 論集編集委員会
- ・共同研究プロジェクト推進会議
- ・安全衛生管理委員会
- ・危機管理委員会

(3) 構成員

所 長

前川喜久雄 音声学, 言語資源

教育研究職員・特任研究員

- ・研究系
 - ▶ 副所長 / 教授
 - 松本曜 意味論, 認知言語学
 - 小磯花絵 コーパス言語学, 談話分析, 認知科学
 - ▶ 研究主幹 / 教授
 - 小木曾智信 日本語学, 自然言語処理
 - ▶ 教授
 - 浅原正幸 自然言語処理
 - 朝日祥之 社会言語学, 言語学, 日本語学
 - 五十嵐陽介 言語学, 音声学
 - 石黒圭 日本語学, 日本語教育学
 - 大西拓一郎 方言学, 言語地理学, 日本語学
 - 高田智和 日本語学, 国語学, 文献学, 文字・表記, 漢字情報処理
 - Prashant Vijay Pardeshi 言語学, 言語類型論, 対照言語学
 - 松下達彦 応用言語学, 日本語教育 (特に語彙の学習と教育)
 - 横山詔一 認知科学, 心理統計, 日本語学
 - ▶ 准教授
 - 井上文子 方言学, 社会言語学
 - 柏野和佳子 日本語学
 - 窪田悠介 理論言語学 (統語論, 意味論), 計算言語学
 - 新野直哉 言語学, 日本語学
 - 野山広 応用言語学, 日本語教育学, 基礎教育保障学, 社会言語学, 多文化・異文化間教育, 言語政策・計画研究
 - 福永由佳 日本語教育学, 社会言語学, 多言語使用, 識字, 移民に対する言語教育政策
 - 山口昌也 教育工学, 言語学
 - 山田真寛 言語学, 形式意味論, 言語復興
 - ▶ 助教 (テニュアトラック)
 - 宮川創 古代エジプト語・コプト語, エジプト学, コーパス歴史言語学, 自然言語処理, デジタル・ヒューマニティーズ
 - ▶ 特任助教
 - 井戸美里 言語学, 日本語学, 統語論, 意味論
 - Celik Kenan Thibault 記述言語学, 歴史言語学, アクセント, 宮古語
 - 本多由美子 日本語学, 日本語教育学, 漢字教育, 語彙教育

横山晶子 言語学, 方言学, 社会学 (社会調査)

・言語資源開発センター

・特任助教

川端良子 コーパス言語学, 談話分析, 認知科学

客員教員 (2023 年度在籍者)

・客員教授

窪蘭晴夫	国立国語研究所名誉教授
福井直樹	上智大学大学院言語科学研究科教授
山崎誠	国立国語研究所名誉教授
金田章宏	千葉大学名誉教授
柴谷方良	ライス大学名誉教授
田窪行則	国立国語研究所名誉教授
砂川有里子	筑波大学名誉教授
竹本浩典	千葉工業大学先進工学研究科知能メディア工学専攻教授

名誉教授

角田太作	2012.4.1 称号授与
John WHITMAN	2015.10.1 称号授与
迫田久美子	2016.4.1 称号授与
Timothy VANCE	2017.4.1 称号授与
影山太郎	2017.10.1 称号授与
相澤正夫	2019.4.1 称号授与
木部暢子	2021.4.1 称号授与
野田尚史	2021.4.1 称号授与
窪蘭晴夫	2022.4.1 称号授与
前川喜久雄	2022.4.1 称号授与
田窪行則	2023.4.1 称号授与
山崎誠	2023.4.1 称号授与

外来研究員

石原俊一 (オーストラリア国立大学准教授, 受入教員: 浅原正幸)

「日本語の書き言葉に見られる個人性の言語学的研究: テキストメッセージを中心に」 (2021.8.1–2023.6.30)

張盛開 (静岡大学教授, 受入教員: 大西拓一郎)

「『漢語』方言の地理的展開研究」 (2022.10.1–2023.9.30)

BAUDEL Étienne (日本学術振興会外国人特別研究員, 受入教員: 五十嵐陽介)

「八丈語の共時的・通時的的研究」 (2023.1.3–2023.7.2)

Vincent Wilhelmus Johannes van Gerven Oei (日本学術振興会外国人特別研究員, 受入教員: 宮川創)

「古ヌビア語インターリニアアグロス付きオンラインテキストコーパスの開発と分析」 (2023.3.20–2023.6.19)

鈴木彩香 (日本学術振興会特別研究員 (RPD), 受入教員: 浅原正幸)

「日本語副詞節におけるテンス解釈メカニズムの理論的・実証的解明」 (2023.4.1–2023.12.31)

大川孔明 (日本学術振興会特別研究員 (PD), 受入教員: 小木曾智信)

「中世日本語文体の計量的研究」 (2023.4.1–2024.3.31)

諸隈夕子 (日本学術振興会特別研究員 (PD), 受入教員: 松本曜)

「通方言パラレルコーパスに基づくケチュア語示差的項標示の分析」 (2023.4.1–2024.9.30)

鴨井修平 (日本学術振興会特別研究員 (PD), 受入教員: 大西拓一郎)
 「日本語諸方言の持続形式における総合的研究」 (2023.4.1–2026.3.31)
 大原由美子 (ハワイ大学ヒロ校教授, 受入教員: 山田真寛)
 「消滅危機言語の使用状況調査、自己アイデンティティと言語イデオロギーの理解、継承活動の支援」 (2023.5.26–2023.6.26)
 WAŚNIEWSKI, Grzegorz (ワルシャワ大学応用言語学研究所日本応用言語学センター講師, 受入教員: 朝日祥之)
 「日本語の表意文字辞書学における言語的方法論と記述法」 (2023.6.15–2024.5.31)
 遠藤智子 (東京大学大学院准教授, 受入教員: 小磯花絵)
 「子どもを含む相互行為における言語行動と身体行動の協働」 (2023.10.1–2024.3.31)
 BUČAR SHIGEMORI, Lia Saki (ミュンヘン大学音声学・音声処理研究所ポスト・ドクター研究員, 受入教員: 五十嵐陽介)
 “Modelling the influence of standard Tokyo on the Kagoshima variety in the production of Japanese pitch accents” (2023.10.23–2023.11.21)
 LAMERIS, Tim Joris (ライデン大学言語学センター・ライデン大学付属地域研究所日本語学助教, 受入教員: 五十嵐陽介)
 「日本の継承言語話者に関する音声学的研究」 (2024.1.1–2024.2.24)
 陳夢夏 (寧波大学専任講師, 受入教員: 松下達彦)
 「日本語漢字語に関する認知処理と語彙データベース作成」 (2024.3.24–2025.3.23)

プロジェクト非常勤研究員・共同研究員

主な共同研究プロジェクトにおけるプロジェクト非常勤研究員 (2023 年 5 月 1 日現在) および共同研究員 (2023 年度の延べ数) の人数を以下に示す。

	非常勤研究員	共同研究員
多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創	7 名	150 名
実証的な理論・対照言語学の推進	2 名	175 名
消滅危機言語の保存研究	3 名	75 名
多言語・多文化社会における言語問題に関する研究	2 名	59 名
多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究	4 名	128 名
多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究	11 名	133 名
開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張	1 名	52 名
その他の共同研究プロジェクト (人間文化研究機構のプロジェクトを含む。)	5 名	127 名
その他 (共同研究プロジェクト以外の経費による雇用を含む。)	23 名	0 名
合計	58 名	899 名

国立国語研究所の 2023 年度の予算および決算を下表に示す。

(単位：千円)

	予算額 (当初)	決 算 額
収 入	1,113,234	1,278,507
運営費交付金	1,045,719	1,175,193
版権料	0	22,757
科学研究費補助金等間接経費収入	9,621	26,186
その他雑収入	1,062	5,392
寄附金収入	21,990	17,430
受託研究等収入	13,176	8,829
受託事業等収入	2,371	1,549
施設費収入	0	0
目的積立金繰入収入	0	0
総合研究大学院大学収入	19,295	21,171
支 出	1,113,234	1,182,692
研究経費	7,365	5,476
共同利用経費	436,706	436,982
教育研究支援経費	20,997	20,699
人件費	490,732	552,830
一般管理費	131,846	140,532
受託研究経費	13,176	3,409
受託事業経費	2,371	1,494
施設整備費	0	0
総合研究大学院大学経費	10,041	21,270

II

共同研究と共同利用

本章では、共同研究活動として、(1) 各種の共同研究プロジェクト、(2) 人間文化研究機構基幹研究プロジェクト等、および(3) 外部資金による研究をまとめるとともに、共同利用のための成果として、(4) 2023 年度公開中の各種コーパス・データベース、(5) 学術刊行物、(6) 研究成果の発信・普及のための国際シンポジウム、研究系の合同発表会、プロジェクトの発表会、コロキウム、サロンなどの催し、および(7) センター・研究図書室の活動状況を掲げる。

1 共同研究プロジェクト

第4期中期計画における国語研全体の研究課題は「日本語・日本語教育分野における基幹研究の推進」である。これを達成するため、「語彙・辞書」「理論・実験」「フィールド・社会調査」「教育・発達」という四つの研究領域を設定し、領域ごとに次に示す六つのプロジェクトを構成して機関拠点型プロジェクト「開かれた言語資源による日本語の実証的・応用的研究」を実施するとともに、言語資源開発センターのプロジェクトとの連携によりコーパス・アーカイブ化を推進することで、オープンサイエンス・オープンデータの体制を強化している。

共同研究プロジェクトは、プロジェクトリーダーを中心とし、国内外の共同研究員の参画によって成り立っており、研究系・センター間、プロジェクト間で連携しながら研究を進めている。また、この研究課題は、国語研が所属する人間文化研究機構における、機関拠点型基幹研究プロジェクトの一つとして位置付けられている。

2023 年度は、「開かれた言語資源による日本語の実証的・応用的研究」のプロジェクトとして、機関拠点型(7 件)、異分野融合型共同研究(3 件)、および共同利用型共同研究(31 件)を実施した。

なお、機関拠点型プロジェクトの概要については、『大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所令和5年度機関拠点型基幹研究プロジェクト評価報告書』の各プロジェクト・センターの評価から抜粋した。

詳細は、第VIII章を参照。

(1)【機関拠点型】7 件

機関拠点型基幹研究プロジェクトは、国語研における研究活動の根幹となる大規模なプロジェクトで、日本語・日本語教育分野における基幹研究の推進という学術的目標に向けて研究所が総力を結集して取り組むものである。研究系専任教員のリーダーシップのもと、国内外の研究者・研究機関との協業により全国的、国際的レベルで展開している。

・多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創

・プロジェクトリーダー：小木曾智信(研究系・教授)

・研究期間：2022.4–2028.3.

《研究目的および特色》

日本語の語彙データを扱う下記のサブプロジェクト群を統括し、その全体を結びつけるキーとなる語彙資源の整備を行うとともに、合同でシンポジウムやチュートリアルを開催し、共同研究を行う。

- ・学習者の辞書資源使用の実態調査
- ・言語資源の空間接続
- ・学習者用辞書資源の構築
- ・語彙資源ポータル拡張
- ・学習者用「日本語機能語バンク」の構築

各サブプロジェクトではさまざまな日本語語彙に関わるデータを構築する予定であるが、これらがばらばらで互換性のないものにならないように、相互接続性を持つ統一的な枠組みの中で扱えるようにするため、これまで国語研のコーパス構築に利用されてきた UniDic の見出し語データベースを軸に、分類語彙表などの国語研作成のリソースや、日本語最大の国語辞典である『日本国語大辞典』の見出し語

を統合し、語彙資源統合キーとなるデータを開発する。その上で、共同研究を通して、各サブプロジェクトが整備する語彙資源統合 ID を共通に用いて相互に連携・統合できるようにする。このキーを介して既存のコーパスの用例・統計情報とリンクすることで、全体の利用価値と相互運用性を高める。

プロジェクト全体で、年 1 回以上、語彙資源の活用に関するシンポジウムを開催(サブプロジェクト持ち回り)、また年 1 回以上、サブプロジェクトとともに語彙資源活用チュートリアルを開催する。

最終年度までに「言語資源学シリーズ」の 1 冊として語彙資源を活用した研究論文集をサブプロジェクトと合同で 1 冊以上刊行する。

《2023 年度の主要な成果》

- ・語彙資源プロジェクト全体で行う語彙資源に関するシンポジウム・講習会は、日本語学会秋季大会のワークショップ「コーパスと語彙資源の連携」(2023 年 10 月)として実施し、プロジェクトで構築する語彙資源について利用法とともに発信した。
- ・サブプロジェクトでは、計画にそって語彙資源の整備を順調に進めたほか、特に重要なものとして次のような成果があった。(※詳細は各サブプロジェクトの報告書を参照)。

語彙資源統括

- ・『日本国語大辞典』と UniDic の対応付けを行い UniDic データベースに見出し語を追加・整備を行った(15575 語彙素, 18406 書字形を追加)。
- ・複数短単位対応版の分類語彙表を構築して公開した(2024 年 3 月)。
- ・古文用の UniDic 11 種類を整備・公開した(2023 年 9 月)。
- ・「Web 茶まめ」を更新し、新しい UniDic に対応したバージョンを公開した(2024 年 3 月)。また、DH2023(2023 年 7 月, グラーツ)でこれに関する研究発表を行った。

学習者の辞書資源使用の実態調査

- ・予定を前倒して、2022 年度末に、中国 48 名、台湾 11 名、韓国 22 名、ベトナム 10 名、英国 3 名、ドイツ 3 名、日本 13 名の合計 110 名の学生を対象に 1 週間の辞書検索行動調査を完了し、データを収集した。
- ・海外の共同研究員を中心とする分科会を本年度 7 回行い、論文集出版に向け、執筆内容にかんする検討等を行った。
- ・韓国、中国、台湾、ベトナム、英国、ドイツの大学や機関に属する研究者とも連携をとりながら調査を実施し、データ整備を進めた。とくに、ハノイ国家大学外国語大学と 2024 年 1 月に学術交流に関する協定書を締結し、すでに締結済みの天津外国語大学と合わせて 2 校となった。

言語資源の空間接続

- ・国内言語地図 12 冊のスキャン画像データを作成した。
- ・国内言語地図 12 冊のジオタグ付き画像データを作成した。
- ・語彙資源ポータルへ言語地図データベースのデータを提供した。
- ・物類称呼データ作成作業として全 5 巻の粗入力を行った。

学習者用辞書資源の構築

- ・科研費「文章の語彙レベルの学習者適合度の判定方法の開発—日本語教育・国語教育への応用—」と共催で「学習者辞書用語彙資源の構築」共同研究発表会(2024 年 2 月 27 日)を開催し、報告 2 件、発表 2 件、招待講演 1 件を行った。
- ・島村直己(編)(2009)『日本語基本語辞典—初級 500 語—(試行版)』国立国語研究所日本語教育基盤情報センターを電子化し、DB 化した。
- ・『分類語彙表』に欠けている多義語のブランチを増補するため、『IPAL』の意味に『分類語彙表』番号の付与を進めた。

語彙資源ポータル拡張

- ・「ことばに関する新聞記事見出しデータベース」中の単語を取り上げた記事データの整備を行った。
- ・近代以前の辞書類の見出し情報データ作成として、十卷本和名類聚抄、和英語林集成の整備を行った。
- ・大正期～昭和期の総合雑誌の言語関連記事のデータ作成を継続して実施した。

学習者用「日本語機能語バンク」の構築

- ・「日本語格助詞データベース」は2022年度で執筆・校閲が完成した176見出し(1056語義)の用例に含まれる格助詞に意味役割のアノテーション作業を進めた。また、新たに和語動詞210語を選定し、見出し執筆作業が年度末に完成した(496語義)。
- ・「日本語文型バンク」は、2022年度で執筆した文型342見出し(初中級284見出し、中上級の文型58見出し)の校閲作業を進め、完成させた。また、新たに250文型を選定し、見出し執筆作業を進め、完成させた。

・共同研究員数：150名

・共同研究員所属機関：

北海道教育大学、筑波大学、群馬大学、東京大学、東京外国語大学、東京農工大学、一橋大学、東京海洋大学、信州大学、静岡大学、名古屋大学、京都大学、大阪大学、神戸大学、奈良先端科学技術大学院大学、岡山大学、徳島大学、鳴門教育大学、九州大学、鹿児島大学、国際教養大学、高崎経済大学、東京都立大学、福岡女子大学、跡見学園女子大学、目白大学、神田外語大学、青山学院大学、桜美林大学、昭和女子大学、拓殖大学、東京女子大学、日本大学、明治大学、早稲田大学、神奈川大学、静岡英和学院大学、南山大学、同志社大学、同志社女子大学、立命館大学、阪南大学、関西学院大学、奈良大学、四国大学、実践女子大学短期大学部、東北芸術工科大学、ハノイ国家大学外国語大学、澳門大学、トリーア大学、コートダジュール大学、ユライ・ドブリラ大学プーラ、寧波大学、ジョージタウン大学、ボン大学、ベトナム国家大学ハノイ校、ルーヴァン・カトリック大学、高麗大学校、ソウル大学校、釜慶大学、国立政治大学、国立中央大学、天津外国語大学、陝西師範大学、中山大学、北京外国語大学、清華大学、統計数理研究所、国文学研究資料館、国立情報学研究所、独立行政法人国際交流基金、株式会社ネットアドバンス、小学館、株式会社ピコラボ、特定非営利活動法人トルシーダ

・実証的な理論・対照言語学の推進

・プロジェクトリーダー：浅原正幸(研究系・教授)

・研究期間：2022.4–2028.3.

《研究目的および特色》

認知言語学や生成文法などの理論的研究や類型論的研究においては、伝統的に話者の内省や直観に基づく個別研究が方法論的に主流だったが、近年その方法論の見直しが各理論、各分野で急速に進んでいる。具体的には、理論的考察にコーパス資料、実験データ、フィールド調査などを多角的に組み合わせて言語研究の中心的課題に取り組む、新たな実証的方法論を模索する動きが世界的に加速化している。本プロジェクトでは、音韻、意味、形態・統語という言語研究の中心的三分野における理論的・類型論的な研究の核心的課題に取り組み、このような世界的潮流における最先端の研究を参照しつつ、それを先導する研究を進める。具体的には、言語学と隣接分野、あるいは言語学の複数の下位分野の知見を融合する形で研究を進めるサブプロジェクト4件と、自然言語処理の知見を活かしてそのような研究に資する言語資源を開発するプロジェクト1件を、それぞれの独自性を保ちつつも相互に連携させて展開することで、国内外の言語研究の最前線に貢献することを目指す。

個別の課題に取り組む4つのプロジェクトは、イントネーションの構造の言語間・方言間変異(イントネーションP)、体言化・名詞修飾構造の形態・統語・意味的類型(体言化P)、状態変化述語の意味構造(述語の意味論P)、統語変換操作の理論言語学における位置づけ(計算言語学P)という、音韻、意味、形態・統語のそれぞれの分野における鍵となる概念の定義そのものを再考察することを目的としている。この目的のために、個々のプロジェクトは、解明の対象である概念に迫るために最適な分野横断的手法を複数組み合わせた多角的なアプローチを採用することで研究を進める。具体的には、イントネーションPでは、コーパス構築とフィールド調査、体言化Pではフィールド調査と文献資料調査、述語の意味文法Pではビデオ実験とコーパス調査、計算言語学Pではコーパス構築と計算論的モデリングを中心的な手法として採用する。これらの具体的な課題に取り組むサブプロジェクトと連動し、それを後方支援するアノテーションPでは、既存のコーパスで手薄だが、言語資源に基づく言語の科学研究をより一層進めるために必要となるタイプの言語資源の構築に注力する。プロジェクト全体で開催する合同の研

研究会やサブプロジェクト間での共同研究や言語資源活用のノウハウの共有を通して、サブプロジェクト間の連携を強めて研究推進の相乗効果を得ることを模索する。

《2023 年度の主要な成果》

理論対照統括

継続して Evidence-based Linguistics Workshop を開催するとともに、言語学フェス 2024 を共催した。2024 年 8 月に開催予定の Oxford 大学・神戸大学国際シンポジウムの共催の準備を進めた。

アノテーション

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』『日本経済新聞記事オープンコーパス』のアノテーションデータを整備した。ジャーナル論文 4 件・紀要論文 2 件・招待論文 1 件・学会記事 1 件・査読付き国際会議発表 5 件。

イントネーション

- ・フィールドワークを通じて南琉球八重山語の韻律調査を複数回行った。
- ・音声学系国際学会で 1 件の口頭発表を行った。
- ・日本言語学会で琉球語諸方言に関する公開ワークショップを行った。

計算言語学

日本語比較構文アノテーションデータの公開に向けて作業を進めた。査読付き英語論文 1 本。

体言化

前年度に引き続き、諸言語の体言化・類別詞・性標示に関するデータを収集するために、インド (23 名)、インドネシア (8 名)、アメリカ (文法書や他の文献に基づく調査)、ペルー (10 名) でフィールドワーク・文献調査を実施した。また、今まで国内外で収集したデータの分析を進め、研究成果を英語版の論文 (2 件) の形でとりまとめ、著名な研究雑誌およびハンドブックに投稿した。

述語の意味と文法

状態変化動詞に関するデータ収集と研究発表、移動動詞に関する成果出版、および格標識に関するデータ収集と発表を行った。具体的には、英文論文集 i) A cross-linguistic perspectives on motion event descriptions, Vol. 1 (Mouton) の原稿提出に向けた最終作業と、ii) Revisiting Deixis in Motion-Event Descriptions (John Benjamins) の編集を行った。英文ブックチャプター 1 件、査読付き国際会議発表 3 件、国内学会発表 2 件。

- ・共同研究員数：175 名

- ・共同研究員所属機関：

北海道教育大学、弘前大学、東北大学、茨城大学、千葉大学、東京大学、東京外国語大学、東京農工大学、一橋大学、総合研究大学院大学、上越教育大学、金沢大学、信州大学、岐阜大学、名古屋大学、京都大学、大阪大学、神戸大学、岡山大学、広島大学、福岡教育大学、九州大学、長崎大学、熊本大学、琉球大学、横浜市立大学、愛知県立大学、神戸市外国語大学、熊本県立大学、名桜大学、藤女子大学、北星学園大学、弘前学院大学、目白大学、麗澤大学、神田外語大学、慶應義塾大学、工学院大学、國學院大學、駒澤大学、上智大学、大正大学、大東文化大学、東海大学、東京理科大学、日本女子大学、武蔵野大学、早稲田大学、東京工科大学、神奈川大学、静岡英和学院大学、名古屋学院大学、南山大学、立命館大学、追手門学院大学、関西大学、関西外国語大学、近畿大学、関西学院大学、関西国際大学、美作大学、広島経済大学、安田女子大学、別府大学、沖縄国際大学、有明工業高等専門学校、SOAS, University of London, Ludwig-Maximilians-Universität in Munich, メキシコ国立自治大学, Christian-Albrechts-Universität zu Kiel, Gauhati University, IIT Madras, Central Institute of Indian Languages Manasagangotri, ワルシャワ大学、リヨン第 2 大学、カリフォルニア大学ロサンゼルス校、Tripura University, Deccan College, Federal University of Pará, フランス国立社会科学高等研究院、雲南省民族学会、内蒙古大学、ネワール言語文化研究所、Resemble AI、情報・システム研究機構、国立障害者リハビリテーションセンター (研究所)、株式会社リクルート

- ・消滅危機言語の保存研究

- ・プロジェクトリーダー：山田真寛 (研究系・准教授)
- ・研究期間：2022.4–2028.3.

《研究目的および特色》

1. いま話されている日琉語諸方言データの収集：担当地域でフィールド調査

国内 40 地点で調査を行っている 3 期から継続して、共同研究員が各担当地点で {語彙、文法記述、談話資料の蓄積} を進める。第 3 期プロジェクトを以下 3 つの観点で発展させる。

増やす：3 点セットを拡充し、「日本・琉球語諸方言におけるイントネーションの多様性の解明」プロジェクト（代表 | 五十嵐）や日琉祖語再建・系統関係解明、対照言語学的研究に資するデータなど、特定トピックに関するデータを増やす。

深める：3 期までに個別文法現象の記述がある地点は文法スケッチを、文法スケッチがある地点は参照文法を執筆する。

広げる：琉球諸語に比べて不足している本土諸方言に調査対象を広げる。また消滅危機言語の再活性化など、言語の継承保存に資する基礎資料としてのデータ収集も行う。

2. 過去の諸方言データの電子化：諸方言談話資料の文字化・電子化と公開準備

1977 年度から 1985 年度にかけて行われた「各地方言収集緊急調査」（文化庁）のうち「全国方言談話データベース 日本のはふさとことば集成」（2001～2008、全 20 巻）で未公開部分の文字化・電子化し公開準備を進める。

3. オープンサイエンスの促進：アーカイブ

上記 1, 2 で蓄積されるデータを「危機言語データベース」（<https://kikigengo.ninjal.ac.jp/>）などで随時公開し、利用可能な段階から研究情報共同利用センター（仮）も利用する。またコーパス共同開発センター（仮）と協働して、それぞれのデータ保持者自身がフィールドデータを平易かつ適切にアーカイブするしくみをつくり、データのアーカイブと共同利用の準備を進める。

4. 消滅危機言語・方言の認知向上や記録保存・継承保存の推進：イベント

- ・危機言語サミット（危機言語コミュニティや社会一般向け；文化庁、地方自治体と共催）
- ・フィールドワークチュートリアル（大学院学生向け）
- ・データデポジットワークショップ（共同研究員向け）
- ・共同研究員のフィールド調査成果発表会（国内発表会、ハワイ大学と共同開催するワークショップ）
- ・その他、言語コミュニティや社会一般に向けて、危機言語の認知向上や公開データへのアクセス・利用促進を目的としたイベントや発信を行う。

《2023 年度の主要な成果》

1. 共同利用・共同研究に関する計画

- ・共同研究員が各自の担当地点でフィールドワークを行い、語彙・文法・談話データを収集した。その成果については、イントネーションプロジェクトと共同でプロジェクト研究会を開催して報告し、プロシーディングス 2 冊を機関リポジトリから公開した。
- ・語彙データベースを改良し、プロジェクトウェブサイト上で公開しているオンライン辞書の機能を拡充した。
- ・データの公開としては、1) リポジトリで公開されている文化庁談話資料をまとめたウェブページを作成し、音声ファイルを公開したほか、2) 文化庁データ「各地方言収集緊急調査」は 10 地点 16 items の電子化したテキストと音声区切りファイルを機関リポジトリとプロジェクトのウェブサイトで公開した。
- ・「みんなで談話整備プロジェクト文化庁「各地方言収集緊急調査」資料の整備と活用説明会 & 講習会」（8/26）を開催し、談話資料電子化のチュートリアルを行った。
- ・沖永良部語諸方言など、地域言語コミュニティによる語彙収集プロジェクトが収集したデータは、プロジェクトウェブサイト上のオンライン辞書を、データの公開・利用プラットフォームとして活用している。

2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

- ・山田真寛と五十嵐陽介がフィールド言語学（総研大）を担当した。
- ・イントネーションプロジェクト（リーダー | 五十嵐陽介）と共同で研究発表会を 2 回開催し（6/10, 3/17），若手研究者へ発表機会を提供した。
- ・プロジェクト非常勤研究員として 3 名を雇用、4 名の大学院生が共同研究員としてプロジェクトに参加し、フィールドワークや研究会発表参加の機会を提供するなどして若手育成につとめた。

- ・「みんなで談話整備プロジェクト文化庁「各地方言収集緊急調査」資料の整備と活用説明会 & 講習会」を開催し、談話資料電子化のチュートリアルを行った。
- ・フィールド支援プロジェクトの一部として、学部生と大学院生を対象にフィールドワークチュートリアル(座学と実習)を行った。

3. 地域・社会との連携に関する計画

- ・与那国町(沖縄県八重山郡)、文化庁などと共催で「消滅の危機にある言語・方言サミット」を開催した。
- ・和泊町との連携協力協定にもとづき、玉城集落住民と協働して玉城方言辞典編集チームを立ち上げ、辞典制作を開始した。玉城公民館は辞典制作を含む事業予算を和泊町に申請し、採択された。
- ・和泊町文化協会と協働して「宝をつなぐチャレンジ応援事業」(奄美群島広域事務組合)の事業助成金に申請し、採択事業を実施した。
- ・知名町中央公民館講座「しまむにサロン」を開講した(毎月1回時間、通年)。
- ・田皆集落住民と協働して田皆方言辞典編集チームを立ち上げ、辞典制作を開始した。
- ・フィールド支援プロジェクトの一部として、静岡県葵区井川支所と協働してフィールド調査とシンポジウムを行った。
- ・沖縄県宮古島市と談話資料のデジタル化・アーカイビングを目的とした連携協力協定を締結した。

4. グローバル化に関する計画

- ・米国ハワイ大学マノア校との協定を、ヒロ校を含むハワイ大学全体との協定として更新した上で、1) 米国ハワイ大学マノア校の教員2名国立国語研究所を訪問し、総研大との連携、Brill社シリーズ、その他今後の連携事業について議論、2) 琉球語のフィールドワークに同校の学生1名を招聘しフィールドワークをサポート、3) 同大ヒロ校の共同研究員を外来研究員として招聘し、危機言語の継承保存について議論、などの活動を通して連携を深めた。

・共同研究員数：75名

・共同研究員所属機関：

東北大学、東京大学、東京外国語大学、金沢大学、信州大学、島根大学、岡山大学、広島大学、福岡教育大学、九州大学、長崎大学、鹿児島大学、琉球大学、横浜市立大学、熊本県立大学、名桜大学、北星学園大学、弘前学院大学、國學院大學、駒澤大学、大正大学、大東文化大学、東京理科大学、立正大学、静岡英和学院大学、中京大学、南山大学、立命館大学、関西大学、広島経済大学、別府大学、沖縄国際大学、静岡理工科大学、近畿大学工業高等専門学校、有明工業高等専門学校、SOAS, University of London、カリフォルニア大学ロサンゼルス校、ハワイ大学、フランス国立社会科学高等研究院、情報・システム研究機構、北海道博物館、国立障害者リハビリテーションセンター(研究所)、独立行政法人国際交流基金

・多言語・多文化社会における言語問題に関する研究

・プロジェクトリーダー：朝日祥之(研究系・教授)

・研究期間：2022.4-2028.3.

《研究目的および特色》

本プロジェクトは、多言語化が進んだ日本社会で発生している言語問題の中でも、日々の言語生活に欠かせない分野である行政、医療福祉分野を中心としたにおける言語問題の所在を明らかにするための社会調査、ならびにそれを支える基礎調査を実施する。その上で言語問題の解決を目指すことを目的とする。

多言語化・多文化による社会変容により、特に行政・医療福祉分野における言語問題が生じている。国立国語研究所においても、「外来語言い換え提案」「病院の言葉」に関するプロジェクト、大規模自然災害をきっかけとして提唱された「やさしい日本語」など、その成果は少なくない。ただし、これらはそれぞれ「国語問題・国語施策」、「日本語問題・日本語施策」のための研究であり、多言語化・多文化した日本社会の言語問題を包括的に捉えることにはならない。本プロジェクトでは、国立国語研究所で実施された「国語・国字・日本人の視点」による言語生活研究の再定義を行い、行政・医療福祉分野における言語問題を把握する。本研究の最終的な目的は、言語生活の現在を的確に捉えた上で行政、医療福祉を中心とした分野に内在するにおける言語問題をリアルタイムに捉える、その解決に向けた提言を行うこ

とにある。

本プロジェクトでは、多言語化・多文化による社会変容によって生じた日本社会において、行政と医療福祉の専門家・非専門家のそれぞれに生じている言語問題の所在を把握する社会調査をについて、専門家、非専門家双方を対象にした社会調査を実施する。社会調査のデータを公開するとともに、言語問題を的確に把握するための基礎調査の実施、そこで得られたデータを活用した分析を実施する。

なお、実施にあたっては、人間文化研究機構共創先導プロジェクト「コミュニケーション共生科学の創成」、並びに同機構共創先導プロジェクト「ハワイにおける日系社会資料に関する資料調査と社会調査の融合的研究」と連携する。

【研究組織】

本プロジェクトは次のような研究班を組織する。

- ・【総括班】研究全体の運営，研究組織化，研究班間の連携，共同研究発表会・シンポジウム等を企画・運営する。
- ・【自治体研究班】自治体を対象とした社会調査を企画・実施する。
- ・【外来語研究班】外来語に関する社会調査を企画・実施する。
- ・【言語変異研究班】言語変異（音韻・アクセント・形態等）に関する調査研究を企画・実施する。
- ・【言語景観研究班】言語景観に関する調査研究を企画・実施する。
- ・【手話研究班】手話（日本手話・日本語対応手話・外国手話等）に関する調査研究を企画・実施する。
- ・【言語使用研究班】日本に居住する外国人の言語生活，ならびに日本人リタラシーに関する調査研究を企画・実施する。
- ・専門家調査班では，専門家を対象とした社会調査を企画・実施する。
- ・言語生活調査班では，非専門家を対象とした社会調査を企画・実施する。

【研究成果】

- ・各調査班専門家調査班では，実施した社会調査を集計をしたデータ集を刊行し，調査結果をリアルタイムに発信していくとともに，調査データの公開を行う。
- ・各調査班言語生活調査班では，専門家調査班による社会調査の動向を踏まえた調査研究を実施し，その成果を学会，国際会議での口頭発表，シンポジウムの開催，研究論文集の刊行などを通じて発信する。

《2023 年度の主要な成果》

1. 共同利用・共同研究に関する計画

- ・日本に住む外国人とその子弟の用いる日本語と第一言語（スペイン語・ブラジルポルトガル語），ならびに日本人の用いる日本語の自然発話データの収集を行うフィールドワーク，ならびに日本語のアクセントの体系記述のためのフィールドワークを神奈川県愛川町，群馬県前橋市・高崎市，静岡県静岡市・磐田市で実施した。
- ・オーストリア科学アカデミー・消滅言語文化継承委員会との協定にもとづいたオンライン研究打ち合わせ会を行ったほか，人間文化研究機構「コミュニケーション共生科学の創成」との共催によるオンラインシンポジウムの開催，科学研究費補助金（JSPS 科研費 JP21K00551）と「コロナ関連用語に関する意識調査」を共同で企画・実施した。
- ・令和3年度，令和4年度に実施した大規模社会調査データの整備を進めたほか，「日本の多言語多文化状況における言語問題に関するウェブ調査」「現代日本語における外来語使用実態調査」については報告書を刊行した。
- ・調査会社による社会調査について，コロナ関連用語意識に関する全国調査（4回），プロソディ変異調査（札幌市，東京都，鹿児島市），アクセント実態調査（広島市）を実施した。
- ・オンラインシンポジウム「日本のことばを知る・学ぶ：手話と日本語とが飛び交う飲食店の日常空間」を2023年10月1日に開催したほか，第18回NINJALフォーラム「国語研の言語生活研究の75年：生きたことばをつかまえる・追跡する調査研究」（2023年12月16日），また，シンポジウム「ダイバーシティ研究の最前線：インクルーシブな社会の実現のために」を社会言語学会との連携して2024年2月10日に開催した。

- ・プロジェクト研究発表会（オンライン）を2024年2月17日と3月17日に開催した。
- ・2022年度、2023年度に実施した調査（自治体調査、外来語調査、音韻調査等）で得た調査データを活用した分析結果をまとめた論文を計量国語学、CLS, Journal of Sociolinguistics, 国立国語研究所論集に投稿した。
- 2. 大学院教育・若手研究育成に関する計画
 - ・プロジェクト非常勤研究員を新たに3名雇用し、プロジェクトで実施されている調査の担当をさせた。このほかには大学院生7名をプロジェクトに参画させ、フィールドワークに参加し、インタビューの担当をさせたり、大規模調査データの整備を担当させたりした。
- 3. 地域・社会との連携に関する計画
 - ・フィールドワーク対象地域の自治体（神奈川県愛川町、群馬県前橋市、静岡県静岡市、磐田市）との連携を図った他、自治体が主体となって実施した定住外国人調査データ（群馬県地域創生部ぐんま暮らし・外国人活躍推進係）の共有を自治体から提供してもらい、調査データの分析を進めた。
- 4. グローバル化に関する計画
 - ・海外の研究者と共同での調査を神奈川県愛川町に居住するブラジル人・ペルー人を対象に2023年7月より開始した。また研究の進捗を話し合うためのオンラインミーティングを月に1回、計12回、実施した。
 - ・研究成果（母音の無声化の調査、アクセント習得）を取りまとめた英文論文をCLS, Journal of Sociolinguisticsに投稿した。
- ・共同研究員数：59名
- ・共同研究員所属機関：

筑波大学、電気通信大学、大阪大学、鹿児島大学、国際教養大学、群馬県立女子大学、東京都立大学、北星学園大学、青山学院大学、学習院大学、上智大学、大東文化大学、日本大学、明治大学、関東学院大学、名古屋商科大学、立命館大学、宇都宮共和大学、獨協大学、大正大学、早稲田大学、愛知淑徳大学、La Trobe University, Australian National University, University of Helsinki, ハワイ大学、モナシュ大学、ウィーン大学、デュースブルク＝エッセン大学、ヨーク大学、国立民族学博物館、人間文化研究機構本部、データサイエンス共同利用基盤施設、海外移住資料館、文化庁、NHK放送文化研究所

・多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究

- ・プロジェクトリーダー：小磯花絵（研究系・教授）
- ・研究期間：2022.4–2028.3.

《研究目的および特色》

本プロジェクトは、子どもを中心とする多様な場面・相手との会話を含む映像付きコーパスを新たに開発し、成人中心の既存のコーパスと接続させることで、コミュニケーションを含む言語の発達・変化の過程を、子どもから高齢者まで多世代に渡り実証的に研究できる基盤を構築することにより、日本における言語発達研究を幅広い分野の研究者との連携体制のもとで展開させることを目的とする。また、各種会話コーパスを活用した技術開発を見据えた基礎研究を推進する。

これまで乳幼児を含む子どもの言語発達に関する研究が数多く行われてきたが、発達研究は乳幼児に限られるものではなく、学童期、青年期、成人初期、壮年期、老年期など、多世代に渡り見ていく視点も不可欠である。特に、高齢者や子育て世代の孤立など家族の問題が複数世代化し、多世代交流が国の重要施策の一つとして掲げられるなか、乳幼児から高齢者までの多世代を対象に、日常生活の中で交わされるリアルな会話を映像まで含めて記録したコーパスを構築・公開し、各世代の言語使用・コミュニケーション行動の実態やその発達・変化を実証的・多角的に研究することは、学術のみならず社会的にも重要な課題である。

そこで本プロジェクトでは、『子ども日常会話コーパス』『幼稚園話し合いコーパス』『小学校話し合いコーパス』『昭和子ども会話コーパス』（いずれも仮称）を整備した上で、第3期までに構築してきたコーパスと合わせて活用することにより、話し言葉の特性を、①言語発達、②言語教育、③時代による言語の変化、④話し言葉のレジスター的多様性の観点から明らかにすると同時に、⑤各種話し言葉コー

パスを活用した情報工学的応用可能性について探る。

《2023 年度の主要な成果》

1. 共同利用・共同研究に関する計画

- 『子ども版日常会話コーパス』『小学校会話コーパス』『昭和子ども会話コーパス』については順調に収録・文字化を進めた。『子ども版日常会話コーパス』のうち、2024 年度に一般公開予定の 50 時間について、プロジェクト共同研究員に限定して先行公開した。
- 第 3 期の研究成果である『日常会話コーパス』の研究可能性を高めるために、追加アノテーションなどを新に施し公開する活動を進めている。今年度は次のデータベース 1 件、アノテーション 4 件、計 5 件を公開した。
 - 1) リレーショナルデータベース (各種アノテーションを統合した DB)
 - 2) 話者間関係性・年齢の上限関係アノテーション
 - 3) 分類語彙表番号アノテーション CEJC-WSD Version 202403
 - 4) 『日常会話コーパス』短単位語彙表 (分類語彙表番号つき)
 - 5) 会話分析式トランスクリプト Ver.202304
- 国立障害者リハビリテーションセンター研究所と連携し、『日常会話コーパス』に付与した自閉症スペクトラム傾向指数調査に基づき自閉傾向と終助詞使用との関係に関する研究を行い、その成果を第 48 回社会言語科学会研究大会で発表したところ、大会発表賞を受賞した。
- 計画していたシンポジウム 2 件に加え、プロジェクトの活動と関連する諸学会と連携したシンポジウム・研究会を 3 件共催し、共同研究員が計 46 件の発表を行った。参加者は合計で 725 名であり、研究成果を広く発信することができた。
 - 1) 人工知能学会言語・音声理解と対話処理研究会第 14 回対話システムシンポジウム
 - 2) 音響学会音声研究会・電子情報通信学会バーバル・ノンバーバル研究会
 - 3) ことば・認知・インタラクションシンポジウム 12
 - 4) 人工知能学会第 100 回言語・音声理解と対話処理研究会
 - 5) 日常会話コーパスシンポジウム IX
- 2023 年度は『日常会話コーパス』など既存のコーパスを中心としつつ、構築中の『子ども版日常会話コーパス』も合わせて研究を進めた。これらの成果を、論文 10 本、ブックチャプター 6 本、発表 82 件、コーパス・データベース 5 件として公表した。コーパスについては言語資源の代表的な国際会議 LREC2022 で報告しているが、当該論文は SciVal の調べで Top 5 % の被引用数であり (令和 6 年 5 月調査)、このことから本コーパスが広く活用されていることが分かる。

2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

- コーパス言語学分野の人材を育成するために、「学習者辞書」プロジェクト及び言語資源開発センターと共催で、若手研究者や大学院生を主対象とする『日常会話コーパス』活用のための講習会・チュートリアルを 2 回開催した。こうした取り組みにより、オンライン検索システム「中納言」の同コーパスの登録ユーザ数・年間検索数は、13530 人 (7095 人増)、20 万件 (前年度比 130 %) となるなど、広く活用された。
- 大学院生の共同研究員や、共同研究員が指導する大学生・大学院生に『日常会話コーパス』『子ども版日常会話コーパス (構築中)』を優先的に提供してコーパス活用の研究支援を実施することで、卒論 23 本、修論 1 本、博論 3 本の成果に結びついた。
- 『日常会話コーパス』について、大学の授業でコーパスを利用できるオンライン検索アプリケーション「中納言」の講義用アカウントを 86 の授業・講義 (受講者計 2813 名) に対して発行し、大学の授業に貢献した。

3. 地域・社会との連携に関する計画

- 『日常会話コーパス』の情報工学的応用可能性について検討する「応用研究班」を設け、民間企業の研究者 5 名も共同研究員等に加えて研究を推進した。また人工知能学会言語・音声理解と対話処理研究会と共催で「対話システムシンポジウム」「第 100 回言語・音声理解と対話処理研究会」を国語研究

所で開催して連携を深めた。

- ・プロジェクトで継続して整備・公開を続ける『日本語日常会話コーパス』『名大会話コーパス』『職場談話コーパス』『昭和話し言葉コーパス』を、インターネットを通して一般に発信した。今年度合計で無償版 7887 件、有償版 64 件の新規利用申請があった。有償版のうち 5 件は商業利用であり、学術のみならず産業界でも活用された。

4. グローバル化に関する計画

- ・『日常会話コーパス』『名大会話コーパス』『職場談話コーパス』『昭和話し言葉コーパス』を、インターネットを通し海外も含めて発信した。このうち『日常会話コーパス』について、今年度の新規登録ユーザー 7095 名のうち 1100 名が海外機関所属者である。
- ・『日本語日常会話コーパス』を活用した Advanced CA Seminar (講師: Paul Drew and Monica Simone, 2023 年 3 月 1-6 日) が開催された。

・共同研究員数: 128 名

・共同研究員所属機関:

筑波大学, 宇都宮大学, 埼玉大学, 千葉大学, 東京大学, 東京外国語大学, 東京学芸大学, お茶の水女子大学, 横浜国立大学, 新潟大学, 富山大学, 金沢大学, 北陸先端科学技術大学院大学, 名古屋大学, 愛知教育大学, 京都大学, 京都工芸繊維大学, 大阪大学, 神戸大学, 奈良教育大学, 岡山大学, 九州大学, 熊本大学, 公立はこだて未来大学, 東京都立大学, 滋賀県立大学, 東京福祉大学, 明海大学, 十文字学園女子大学, ものつくり大学, 千葉工業大学, 神田外語大学, 青山学院大学, 慶應義塾大学, 國學院大學, 国際基督教大学, 昭和大学, 専修大学, 玉川大学, 東京家政大学, 東京女子大学, 日本大学, 日本女子大学, 武蔵野美術大学, 立教大学, 早稲田大学, 駒沢女子大学, 神奈川工科大学, 岐阜女子大学, 静岡理工科大学, 愛知大学, 中京大学, 中部大学, 京都産業大学, 同志社大学, 関西学院大学, 神戸松蔭女子学院大学, ノートルダム清心女子大学, 東北工業大学, 立命館大学, 福井工業高等専門学校, University of Basel, モナシェ大学, アルバータ大学, 崇実大学, 国立研究開発法人理化学研究所, 国立障害者リハビリテーションセンター (研究所), 弥彦村立弥彦小学校, 独立行政法人国際交流基金, ミイダス株式会社 (HR サイエンス研究所), 日本電信電話株式会社 NTT コミュニケーション科学基礎研究所, 株式会社リクルート, NHK 財団 NHK 放送研修センター, フェアリーデバイセズ株式会社, NHK 放送文化研究所

・多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究

・プロジェクトリーダー: 石黒圭 (研究系・教授)

・研究期間: 2022.4-2028.3.

《研究目的および特色》

本プロジェクト「多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究」は、日本語非母語話者 (日本語学習者および定住外国人) の言語運用の縦断的調査によって多様な言語資源を構築して研究し、その研究成果を教育支援に生かすことを目的とする。その目的を達成するため、以下の六つのサブプロジェクトを設置する。

(1) 多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究統括 (担当: 石黒)

下記の (2)~(6) の五つのサブプロジェクトの研究成果を収集・整理し、インターネット上においてその公開・発信を支援する。

(2) 日本語学習者の作文の縦断コーパス研究 (担当: 石黒)

中国, 台湾, 韓国, ベトナムの複数の大学と日本語学習者の作文の縦断コーパス調査のネットワークを形成し、学習者 600 名 (開始時) を対象に、1 年間に 3 回, 4 年間にわたる計 12 回の作文調査を行うプロジェクトです。収集したデータに基づき、学習者の作文執筆能力の縦断的な発達過程を明らかにすることを旨とする。

(3) 日本語学習者の談話の縦断コーパス研究 (担当: 石黒)

中国の 2 大学の日本語学習者を対象に、大学入学から卒業までの 4 年, 1 年間に 2 回, 計 8 回の I-JAS 準拠のインタビュー調査と、それに関連する作文調査を行い、縦断談話データベースを構築する。収集したデータを用いて、談話能力の縦断的な発達過程を作文能力との関係で総合的に明らかにすることを

目指す。

(4) 日本語学習者の作文教育支援研究 (担当: 山口)

協同型の作文教育向けの作文・添削支援システムを開発し、授業への導入手法を検討する。また、システムを用いた授業実践の結果から作文・添削データベースを構築し、作文技能の習得過程とシステムの教授効果を明らかにすることを目指す。

(5) 定住外国人の談話の縦断研究 (担当: 野山)

2007 年から継続してきた東北地方における外国人定住者の縦断インタビュー調査について、第 4 期も調査を継続する。それとともに、過去の収集データの整備を行い、それらのデータを公開、分析することで、長期間にわたる生活者の言語習得の実態を明らかにすることを目指す。

(6) 定住外国人のよみかき研究 (担当: 福永)

生活者としての日本語学習者を対象に、日常生活における文字を介したコミュニケーション (よみかき実践) の種類、方略の使用、新しいメディアの活用等についてデータ収集を行い、よみかき実践研究の発展とよみかきに関わる外国人支援の充実を目指す。

《2023 年度の主要な成果》

(1) 非母語話者日本語運用統括

① 五つのサブプロジェクトの研究情報を収集・整理し、インターネット上においてその公開・発信を支援した。【共同利用・共同研究】

- プロジェクトのサイト (<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/>) の管理を行い、公開を継続した。
- 上記 Web サイトより、サブプロジェクトの 2023 年度の研究成果の公開を行った。
- 上記 Web サイト、および X (https://twitter.com/js1_ninjal) を用いて、サブプロジェクトの 2023 年度のイベント情報の発信を行った。

(2) 日本語学習者の作文の縦断コーパス研究

① 海外の 19 大学と共同調査を実施した。【共同利用・共同研究】

- 作文縦断調査は各大学の日本語学科に入学した学習者を対象に 1 年に 3 回ずつ実施し、4 年間で計 12 回行う予定である。2023 年度は計 1,691 本分の作文データを収集した。調査対象となった大学は、中国 7 大学 (北京語言大学、天津外国語大学、東華大学、重慶山峡学院、福建師範大学、華中科技大学、長春師範大学)、台湾 2 大学 (国立政治大学、東呉大学)、ベトナム 3 大学 (フエ大学外国語大学、ドンア大学、ハノイ工業大学)、韓国 2 大学 (韓国外国語大学校、仁川大学校)、タイ 2 大学 (タマサート大学、カセサート大学)、フランス 1 大学 (フランス東洋言語文化学院)、スロベニア 1 大学 (リュブリャナ大学)、イギリス 1 大学 (オックスフォード大学) の計 19 大学である。

② 収集した作文データのデータベース構築に着手した。【共同利用・共同研究】

- 2023 年度までに収集した作文データについて、データベースの構築に向けて、作文が所定の形式に則って書かれているか、各種の情報のファイルがそろっているかの確認を行った。

③ 国際的な研究拠点形成のための準備を進めた。【共同利用・共同研究】

- すでに学術交流協定を締結している天津外国語大学 (中国)、東呉大学 (台湾)、韓国外国語大学校 (韓国)、に加え、連携して調査に当たる福建師範大学 (中国) と 2023 年 12 月に、フエ大学外国語大学、ドンア大学 (ベトナム) と 2024 年 1 月に、それぞれ学術交流協定を締結した。その結果、学術交流協定を締結して共同研究を行っている大学は計 6 大学となった。

④ サブプロジェクトとの連携を強化した。【共同利用・共同研究】

- サブプロジェクト「日本語学習者の作文教育支援研究」と連携し、収集した作文データの活用方法を検討した。

⑤ 工学系研究者との共同研究を継続した。【共同利用・共同研究】

- (株) 富士通の富士通研究所の研究者 2 名、および明星大学情報学部 of の研究者 1 名と 5 回ミーティングを行い、計算機によるテキスト処理の効率化の方法を検討した。

⑥ 研究成果として、次のような発信を行った。【共同利用・共同研究】

- 国内外の学会や研究発表会、講演等で計 9 件の研究発表・講演を行った (口頭発表 1 件、ポスター

- 発表 1 件, ワークショップ 1 件, 講演 6 件)。
 - 学術誌に論文を 1 本公表した。
 - ⑦ 若手支援として, 次のような活動を行った。【大学院教育・若手支援】
 - 総合研究大学院大学での講義および一橋大学との連携大学院での演習において, 本サブプロジェクトで収集中のデータを活用した授業を行った。
 - 4 名のプロジェクト非常勤研究員を雇用した。
 - 12 名 (一橋大学 7 名, 明治大学 1 名, 早稲田大学 2 名, 筑波大学 1 名, 金沢大学 1 名) の大学院生がプロジェクトのミーティングに参加し, それぞれの研究観点に基づき, 収集中の作文データの分析法の発表を行った。
 - 大学院生 1 名の研究討論会での発表旅費を支援した。
 - 東呉大学 (台湾) と共同して NINJAL チュートリアルを開催し, 構築中の『日本語学習者縦断作文コーパス (W-CoLeJa)』の概要と分析事例の紹介を行った。
 - ⑧ 産業界との連携として, 次のような活動を行った。【地域・社会との連携】
 - 作文の自動評価システム開発のため, (株) 富士通を中心とした AI の専門家との共同研究を継続し, 会議を 6 回 (4 月に 1 回, 5 月に 1 回, 6 月に 1 回, 7 月に 1 回, 8 月に 1 回, 1 月に 1 回) 開催し, 検討を行った。
 - ⑨ グローバル化のため, 次のような活動を行った。【グローバル化】
 - 共同研究を行っている海外の大学に所属する研究者, 中国 16 名, 台湾 4 名, 韓国 6 名, ベトナム 4 名, タイ 3 名, スロベニア 3 名, フランス 1 名, ブラジル 1 名, 計 38 名を共同研究員に加え, 現地調査を推進した。
 - すでに学術交流協定を締結している天津外国語大学 (中国), 東呉大学 (台湾), 韓国外語大学 (韓国), に加え, 連携して調査に当たる福建師範大学 (中国) と 2023 年 12 月に, フェ大学外国語大学, ドンア大学 (ベトナム) と 2024 年 1 月に, それぞれ学術交流協定を締結した。その結果, 学術交流協定を締結して共同研究を行っている大学は計 6 大学となった (③と重複有)。
- (3) 日本語学習者の談話の縦断コーパス研究
- ① 海外の 3 大学と談話・作文の共同調査を実施した。【共同利用・共同研究】
 - 西安外国語大学 (中国), ハノイ国家大学外国語大学 (ベトナム), チュラーロンコン大学 (タイ) の学生を対象に, 『I-JAS』に準拠した内容の談話・作文のオンライン縦断調査を実施した。2023 年度は 2 回分のデータを収集し, 合計 97 時間分の談話データ, および 258 本分の作文データを収集した。
 - ② 収集した作文データのデータベース構築に着手した。【共同利用・共同研究】
 - 2022 年度に収集した談話データのうち, 西安外国語大学 (中国) 第 2 回調査分 25 名分, 約 21.3 時間 (平均 45 分) について, データベース構築に向けた文字化およびアノテーション付与を行った。作文データについてはデータベース構築に向け, 2023 年度までに収集したデータ (第 1 回～第 5 回の 3 か国合計 704 本分) すべてに目を通し, 所定の形式に則って書かれた作文であるかの確認を行った。
 - ③ 先行データのデータベースを構築し, 公開した。【共同利用・共同研究】
 - 先行データである中国の北京師範大学の学習者 17 名分, 約 136 時間 (17 名×平均 1 時間×8 回) のデータベース (『B-JAS』) の構築を行い, 2024 年 3 月に中納言上で公開した。
 - ④ 国際的な研究拠点形成のための準備を進めた。【共同利用・共同研究】
 - 連携して調査に当たる西安外国語大学 (中国) およびハノイ国家大学外国語大学と 2024 年 1 月にそれぞれ学術交流に関する協定書を締結した。
 - ⑤ 他のサブプロジェクトとの連携を強化した。【共同利用・共同研究】
 - サブプロジェクト「日本語学習者の作文の縦断コーパス研究」と連携し, 共同で開発した文字入力ツールおよびシステムを用いて作文のデータ収集を進めた。
 - ⑥ 研究成果として, 次のような発信を行った。【共同利用・共同研究】

- NINJAL シンポジウムにおいて、『I-JAS』『B-JAS』利用のべし・べからずについて」というタイトルで発表を行い、YouTube 上に公開した。
- 先行データである中国の北京師範大学の学習者 17 名分、約 136 時間(17 名×平均 1 時間×8 回)のデータベース(『B-JAS』)の研究成果をまとめた論文集の刊行に向けて最終準備を行った。
- 『B-JAS』の広報および研究者によるデータの利活用を推進するため、9 月 I-JAS 研究会において、『B-JAS』の概要や使い方を紹介する講習会を行った。
- データベース構築に向けた文字化、アノテーション付与を進めるために、作業従事者のためのオンライン講習会を行った。
- 『B-JAS』を使った研究成果として、9 月 I-JAS 研究会において、口頭発表を行った。
- 『B-JAS』を使った研究成果として、第 26 回専門日本語教育学会研究討論会においてポスター発表を行った。

⑦若手支援として、次のような活動を行った。【大学院教育・若手研究者育成】

- 連携大学院の演習において、2 名の博士後期課程の大学院生が『B-JAS』を活用した研究発表を行った。
- 3 名のプロジェクト非常勤研究員を雇用した。
- 3 名(一橋大学 2 名、東京外国語大学 1 名)の大学院生が本プロジェクトに参画した。
- 大学院生 1 名の研究討論会での発表旅費を支援した。
- NINJAL シンポジウムにおいて、『I-JAS』『B-JAS』利用のべし・べからずについて」というタイトルで若手研究者等を対象としたオンライン発表を行った(⑥と重複有)。

⑧グローバル化のため、次のような活動を行った。【グローバル化】

- 現地調査を行う西安外国語大学(中国)2 名、ハノイ国家大学外国語大学(ベトナム)4 名、チュラーロンコーン大学(タイ)2 名、および現地調査を共同で行った北京師範大学 2 名(中国)、北京外国語大学 4 名(中国)、計 14 名の教員を引き続き共同研究員とし、共同研究を推進した。
- 連携して調査に当たる西安外国語大学(中国)と 2024 年 1 月に、ハノイ国家大学外国語大学と 2024 年 1 月にそれぞれ学術交流に関する協定書を締結した(④と重複有)。

(4) 日本語学習者の作文教育支援研究

①プロトタイプシステムにかんする情報収集と予備実践を行った。【共同利用・共同研究】

- 共同研究員全員(13 名)に対してプロトタイプを用いたデモを行い、共同研究員自身の行っている教育実践に即して、個別にプロトタイプに対するフィードバックを受けた。
- プロトタイプシステムを用いた予備実践を 4 大学(京都外国語大学、南山大学、一橋大学、日本国内の大学)で実施した。その際、4 種類の実践プログラムを作成した。

②システムの設計・構築・共有を行った。【共同利用・共同研究】

- ①に基づき、作文・添削支援システムの振り返り支援機能として、少グループでの振り返り、付与されたアノテーションのビューワー、外部ファイルへの作文データのエクスポート、振り返り後の作文の改訂管理機能などの設計を行った。
- 前年構築分のプロトタイプシステムに対して、予備実践に即した拡張(匿名での添削、作文全体へのコメントなど)を行った。また、1 の設計に基づいて、振り返り支援部分の実装を行った。ただし、作文の改訂管理機能など、一部の機能は設計段階である。
- 課題の文章に対してコメント付けして、グループで振り返りを行うタイプの実践プログラム 3 種(読解、輪読、間違い探し課題)、相互添削タイプの実践プログラム 1 種を設計した。

③他のサブプロジェクトとの連携を強化した。【共同利用・共同研究】

- 教育現場における日本語学習者の作文執筆支援のために、「日本語学習者の作文の縦断コーパス研究」との会議を 2 回(8 月、9 月)開催し、収集した作文データの検索・結果の集計方法(教師用)を検討した。
- 「多世代会話コーパス」(プロジェクトリーダー：小磯花絵教授)のシンポジウム「日常会話コーパス」IX で、支援システムを用いたグループ学習における談話に関する予備的な研究発表を 1 件

行った(2024年3月18日)。

④研究成果として、次のような発信を行った。【共同利用・共同研究】

- 共同研究員が予備実践を行うために、機能拡張・改善した(「②システムの設計・構築」参照)プロトタイプシステムを限定公開した。
- ②で作成したプロトタイプ、および、予備実践について、日本教育工学会 2023 年秋季全国大会、日本教育工学会 2024 年春季全国大会、日本語教育学会 2023 年度秋季大会、韓国日語教育学会で計 7 件の口頭発表を行った。

⑤若手支援として、次のような活動を行った。【大学院教育・若手研究者育成】

- 2 名の非常勤研究員を雇用した。
- 共同研究員(大学院生)2 名が実践プログラム 1 種を設計し、担当している大学の授業でプロトタイプシステムを用いた実践を行った。
- 上記の非常勤研究員 2 名と共同研究員 2 名が学会で実践結果など 4 件を口頭発表する際の費用を支援した。

⑥地域・社会との連携として、次のような活動を行った。【地域・社会との連携】

- 今年度実施した実践プログラムを参考に、2 種類のタイプの活動(単一の文章をグループで評価する活動、相互添削タイプの活動)に対して、教師用・学習者用の計 4 種の作成を開始した。

⑦グローバル化のため、次のような活動を行った。【グローバル化】

- プロトタイプシステムのユーザインターフェイスを、多言語表示できるよう実装した。現在は、日本語・英語について表示用テキストを用意している。

(5) 定住外国人の談話の縦断研究

①縦断調査を実施した。【共同利用・共同研究】

- 縦断調査及びフォローアップ調査を 4 月 25 日～26 日にかけてフィールドで実施した。
- 地域の学習者に対して、リテラシーに関するパイロット調査を 7 月 23 日(S 市)及び 3 月 19 日(M 市)に実施した。

②公開に向けたデータの更新、整備を行った。【共同利用・共同研究】

- 公開に向けたデータの更新、整備を予定通り行った。
- 個人情報の取り扱いについては、改めて配慮を行いながらデータの整備を行った。

③国内外の共同研究体制を整備した。【共同利用・共同研究】

- 「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」のミーティングや開催された行事に等に参加しつつ、プロジェクトや調査研究の充実に向けて参考とした。
- 社会言語学、会話分析、教育人類学を含む学際的な観点から共同研究を進めた。

④研究成果として、次のような発信を行った。【共同利用・共同研究】

- 本プロジェクトの内容に関するサイトを維持しながら、拡充を図った。
- 講習(研修)に関する情報の概要については、本プロジェクトのサイトに報告、発信した。
- オンライン講座(研修)を 2 回行った(サポート 21 主催、文化庁委託研修、2023 年 8 月、12 月)。

⑤若手支援として、次のような活動を行った。【大学院教育・若手研究者育成】

- 1 名のプロジェクト非常勤研究員を雇用した。

⑥地域・社会との連携として、次のような活動を行った。【地域・社会との連携】

- 研修を 2 回行った((1) 西東京市日本語ボランティア研修、2023 年 5 月、(2) 江戸川区教育委員会主催副校長研修、2023 年 11 月)。

(6) 定住外国人のよみかき研究

①本調査を実施した。【共同利用・共同研究】

- 生活者としての定住外国人による字をよみかきする社会的実践についての調査を研究会議で検討を行い(オンライン 6 回、対面 1 回)、調査 1(言語生活調査)と調査 2(インターアクションインタビュー)として設計を行い、データ収集に着手した(のべ 6 名分、約 300 分)。なお、インフルエンザの蔓延により、調査実施予定が大幅に変更(延期、中止を含む)することになった。さら

に 2024 年 1 月に発生した能登半島地震により、北陸地方の調査は当面の間延期することにした。
これらの事情により令和 5 年度に実施予定の調査は大幅な変更を余儀なくされた。

◦収集したデータについては、分析・公開に向けた準備作業を順次行った。

②国内外の共同研究体制を整備した。【共同利用・共同研究】

◦北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院との共催で、研究集会を開催した（2023 年 8 月 26 日）。

◦言語（言語教育）以外の社会学や移民研究等を専門とする研究者との連携・協業を積極的に進め、引き続き研究者 2 名の参加を継続した。

③研究成果として、次のような発信を行った。【共同利用・共同研究】

◦調査データ等の研究成果を公開するために、総括班主導のもと他のサブプロジェクトと連携して、本プロジェクトのサイトを開設し、データと情報公開の充実に努めた。

◦研究集会を北海道大学で開催した（2023 年 8 月 26 日）。

◦論文 3 件が学術誌に掲載された。

◦口頭発表を 3 件行った（日本言語政策研究会第 25 回研究大会、第 7 回キルギス 2023 日本学・日本語教育国際研究大会、NINJAL サロン）。

④若手支援として、次のような活動を行った。【大学院教育・若手研究者育成】

◦一橋連携大学院および総合研究大学院の講義で本プロジェクトの問題意識や方法論等について話題にした。

◦非常勤研究員 1 名の（博士課程在籍者）の雇用を継続した。

◦共同研究員として 2 名（博士課程後期在籍者 1 名、博士課程後期進学予定者）がプロジェクトに参加し、調査を担当した。さらに、1 名が文献レビューの執筆に携わった。

◦共同研究員 1 名が NINJAL サロンにおいて口頭発表を行った。

◦英語文献のレビュー 3 本を本プロジェクトのサイトおよび学術情報リポジトリのサイトにおいて公開した。

◦共同研究者 1 名に研究費・調査旅費を支援した。

◦共同研究者 1 名の研究費・旅費（研究集会および研究会議への参加）を支援した。

◦調査シミュレーション動画を作成し、若手研究員を中心とした共同研究員が調査方法の理解を深めるための支援を行った。

⑤地域・社会との連携として、次のような活動を行った。【大学院教育・若手研究者育成】

◦国際交流協会等を訪問し、連携（調査協力、共同研究者）の強化を図った（長野県（長野国際化協会長野県多文化共生相談センターほか 1 団体）、北海道札幌市、埼玉県川口市）。その結果として、調査協力 3 地域と共同研究者 1 名の参加が実現した。

◦北海道大学で研究集会を開催した（2023 年 8 月 26 日）。

◦先行研究文献のレビュー論文 8 本（外国語文献 3 本、日本語文献 5 本）を国立国語研究所学術情報リポジトリに登録、さらに本プロジェクトのサイトには学術情報リポジトリへのリンクを掲載し、研究成果のより広い範囲への発信に努めた。

⑥グローバル化のため、次のような活動を行った。【グローバル化】

◦日本語教師セミナー（ジャカルタ国立大学、2023 年 9 月 25 日）においてプロジェクトの紹介を行う活動を行い、海外の研究者を共同研究員として受け入れるための働きかけを積極的に行った。

◦共同研究員 2 名の参画を継続した（ロシア出身 1 名、韓国出身 1 名）。

◦海外に向けた研究成果発信を行った（「第 7 回キルギス 2023 日本学・日本語教育国際研究大会」2023 年 8 月）。

・共同研究員数：133 名

・共同研究員所属機関：

北海道大学、茨城大学、筑波大学、埼玉大学、千葉大学、東京外国語大学、東京工業大学、一橋大学、富山大学、豊橋技術科学大学、三重大学、大阪大学、岡山大学、東京都立大学、静岡県立大学、東京福祉大学、

城西大学, 駿河台大学, 中央学院大学, 日本大学, 日本女子大学, 法政大学, 明治大学, 明星大学, 早稲田大学, 常葉大学, 南山大学, 京都外国語大学, 同志社大学, 関西学院大学, 甲南大学, 武庫川女子大学, 実践女子大学, 中央大学, ハルビン師範大学, ドン・ア大学, 深圳大学, カセサート大学, 上海对外経貿大学, ハノイ国家大学外国語大学, ウズベキスタン日本センター, タマサート大学, チュラーロンコーン大学, ブラジリア大学, フランス国立東洋言語文化研究所 (INALCO), フェ大学, ハノイ大学, ベトナム国家大学ハノイ校, 韓国外国語大学校, 仁川大学校, 国立政治大学, 東呉大学, 長春師範大学, 天津外国語大学, 東北師範大学, 華南農業大学, 福建師範大学, 北京語言大学, 華中科技大学, 重慶三峡学院, 中山大学, 東華大学, 北京外国語大学, 北京師範大学, 西安外国語大学, オックスフォード大学, リュブリャナ大学, 独立行政法人国際交流基金, 公益財団法人茨城県国際交流協会, 富士通株式会社, ARC 東京日本語学校, にほんごスペースつなぎめ, 山野日本語学校, アクラス日本語教育研究所

・開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張

- ・プロジェクトリーダー：小木曾智信（研究系・教授）
- ・研究期間：2022.4–2028.3.

《研究目的および特色》

第3期までの構築分では不足する日本語史研究資料の増補を、本プロジェクト主体による整備だけでなく、開かれた共同構築環境のもとで全国の（世界中の）研究者と連携して行う。そのために、国語研の『日本語歴史コーパス』と親和性の高い標準データ形式を共同で策定し、この形式でデータを作成するための補助ツールを開発、チュートリアルを開催して普及を図る。そのうえで、標準データ形式のデータを国語研で受け入れてコーパス検索アプリケーション「中納言」を通して公開、共同利用に供する。さらに、「昭和・平成書き言葉コーパス」科研（代表者：小木曾）と連携することで上代語から現代語まで接続した真の通時コーパスとして成立させる。

なお、『日本語歴史コーパス』の増補に際しては、フィージビリティスタディを継続して機械翻訳による現代語訳付与を模索する。

《2023 年度の主要な成果》

- ・『コーパスによる日本語史研究 近世編』をひつじ書房から刊行（2023 年 12 月）
- ・『昭和・平成書き言葉コーパス』完成版を公開（2023 年 6 月）
- ・『日本語歴史コーパス』「明治大正編」に「布哇日本語教科書（第1期）」を、「キリシタン資料」に「天草版金句集」を追加し公開（2024 年 3 月）
- ・「上方絵入狂言台本」「古今集遠鏡」の整備
- ・能楽研究所との協定に基づき「謡曲百番」のコーパス整備を準備
- ・OpenCHJ 外部データの受け入れ準備「抄物コーパス」「雑誌キング」「帝国議会議事録」
- ・Web 茶まめをコーパス構築に利用できるよう改修（2024 年 3 月）
- ・歴史資料用 UniDic 11 種を整備・公開（2023 年 10 月）
- ・現代日本語史研究会を4回開催（2023 年 6 月, 10 月, 12 月, 2024 年 3 月）
- ・「通時コーパス」シンポジウムを開催（2024 年 3 月）
- ・共同研究員数：52 名
- ・共同研究員所属機関：

東北大学, 茨城大学, 筑波大学, 群馬大学, 東京大学, 東京外国語大学, 東京学芸大学, 東京農工大学, 一橋大学, 総合研究大学院大学, 大阪大学, 奈良先端科学技術大学院大学, 高知大学, 九州大学, 東京都立大学, 京都府立大学, 和洋女子大学, 青山学院大学, 上智大学, 成蹊大学, 専修大学, 東洋大学, 日本大学, 日本女子大学, 明治大学, 常葉大学, 立命館大学, 関西学院大学, 甲南大学, 神戸松蔭女子学院大学, 啓明大学, オックスフォード大学, 大葉大学, 統計数理研究所, 国立研究開発法人産業技術総合研究所, 国立研究開発法人情報通信研究機構

(2) 【異分野融合型共同研究】3 件

異分野融合研究を推進するために第4期に新たに開始した外部研究者をリーダーとする公募型の異分野融

合型共同研究 3 件を採択し、国立国語研究所教員 3 名がコーディネーターとなり連携して研究を進めた。

- 歴史的音源アーカイブに向けたオープンコーパスの整備と AI 音声復元技術の開発

- ・プロジェクトリーダー：高道慎之介（東京大学大学院情報理工学系研究科・助教）
- ・研究期間：2022.10–2024.3.

《研究目的および特色ならびに 2023 年度の研究成果》

本研究の目的は、歴史的音源を現代音質に蘇らせ解析するための、オープン音声コーパスと、深層学習に基づく音声自動復元技術の開発・公開である。音声言語に関する歴史的音源（当時の日本語話し言葉の音声など）の多くは、デジタル化されないまま経年劣化が進み、仮にデジタル化したとしても音響的な歪みや欠落を多く含む。本研究課題では、オープンリール等に保存された東北地方（宮城県、岩手県の一部。以下同じ）方言を最初の例として、日本語解析に資する音声コーパスと、音声復元のための深層学習技術を開発する。前者は、歴史的音源を多数貯蔵する仙台文学館と連携し、後者は、少データからの音声復元を可能にする自己教師あり転移学習を提案する。期間終了後には、コーパスと復元技術を研究目的に限り誰でも無償で利用できる形式で公開し、歴史的音源の高品質アーカイブと解析の促進を狙う。

歴史的音源コーパスの整備においては、昨年度に引き続き東北地方方言による昔話朗読を扱う。現在、オープンリールに保存されていた 176 時間（全体の 50 %）の音声のデジタル化、および約 14 時間（デジタル化音源の 8 %）のアノテーションと一般公開が完了した。今年度は、未デジタル化音源のデジタル化、未アノテーションの音源のアノテーション及び公開を行う。

音声復元技術の開発においても、昨年度と同様に、その音響的な歪みや欠落を自動修復する深層学習技術を開発する。現在、平均オピニオン評定で 0.2 程度の改善が見られている。今年度は、その改善度を向上させると共に、当該方言のための音声認識・音声合成の開発を行う。

本年度の事業成果を、歴史的音源コーパスの整備と、音声復元技術の開発に分けて述べる。

歴史的音源コーパスの整備については、昨年度末時点で現在、オープンリールに保存されていた 176 時間（全体の 50 %）について音声のデジタル化を完了していた。本年度末時点ではこれに加えてカセットテープに保存されていた 283 時間のデジタル化を完了し、予定していた全ての音源についてデジタル化を完了した。また、その一部についてアノテーションを実施した。アノテーション結果については、次年度に公開予定である。

音声復元技術については、その品質改善に取り組んだ。具体的には、複数の歴史的音源を同時に復元する技術、音質を改善するような学習法改善に取り組んだ。本研究成果のソースコードは公開済みであり、学術論文は IEEE Access に採択された。

- ・共同研究員数：4 名
- ・共同研究員所属機関：

東京大学、公益財団法人仙台市市民文化事業団

- テキスト読み上げのための読みの曖昧性の分類と読み推定タスクのデータセットの構築

- ・プロジェクトリーダー：新納浩幸（茨城大学大学院理工学研究科情報科学領域・教授）
- ・研究期間：2022.10–2024.3.

《研究目的および特色ならびに 2023 年度の研究成果》

本共同研究ではテキスト中の読みに曖昧性のある単語に読みを付与するというタスクに関する研究を行っている。具体的には 3 つのサブテーマに分けて各テーマに担当者を定めて研究を進めている。1 つ目のテーマは読みの曖昧辞書の作成であり古宮（農工大）が担当である。2 つ目のテーマは読み曖昧性解消システムの評価用データセット構築であり白井（JAIST）が担当である。そして 3 つ目のテーマは読み曖昧性解消システムの開発であり新納（茨城大学）が担当である。各自が並行して研究を進め、約 4 ヶ月毎に会合を開き、各自の進捗と議論を行っている。本年度は 2023 年 6 月 19 日に農工大、2023 年 11 月 10 日に金沢に会合を開いた。また、2024 年 2 月 28 日に国語研にて本プロジェクトの報告を行うワークショップを開いた。

本年度の成果を以下に述べる。古宮が担当の読みの曖昧性の辞書構築に関しては、読みの曖昧な単語の語義間の関係に「内包」「部分一致」「完全一致」「不一致」の4種を設定し、分類することを進めている。白井が担当のデータセット構築に関しては対象の50単語と各単語の100用例の構築が完了した。低頻度語の読みの用例を追加する作業を次年度に行う予定である。新納が担当の読む付与システムに関しては、BERTのtokenizerを利用するものは完成している。ただし対象単語がBERTの語彙集合に含まれていない場合が問題であり、そのために漢字列を平仮名列へ変換するシステムを構築中である。外部発表の成果としては、本プロジェクト関係の論文を3件、2024年3月に開かれる言語処理学会の第30回年次大会(NLP2024)にて、以下の3件の発表を行う予定である。

- [1] 小田康平, 白井清昭. 語義の箱埋め込み学習とその応用. 言語処理学会第30回年次大会, A10-5, 2024.
- [2] Ganbat Naranbuuvei, 浅田宗磨, 古宮嘉那子. 翻訳とBabelNetを利用した日本語の語義曖昧性解消. 言語処理学会第30回年次大会, 2024.
- [3] 浅田宗磨, 古宮嘉那子, 浅原正幸. 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に対する分類語彙表番号悉皆付与. 言語処理学会第30回年次大会, 2024.

本研究では概略以下の3点を目標にしている。

- (1) 読みに曖昧性のある単語の辞書を構築,
- (2) 読み曖昧性解消システムのためのデータセットの構築,
- (3) 読み推定システムの構築,
- (4) 読み上げシステムの作成。

ただしそれぞれのどのようなテーマで研究を行うかは定まっていなかったが、本年度1年間の研究を通して、各項目において具体的にを行うことが定まった。(1)に関しては既存の辞書から単に読みに曖昧性のある単語を抽出するということではなく、ある単語が複数の読みを持つ場合、それら読みと語義の関係を「内包」「部分一致」「完全一致」「不一致」の4種に分類することを行っている。(2)に関しては読み曖昧性解消システムの評価用データセットという位置づけで、低頻度の読みの用例をどのように収集するかを検討している。(3)は利用する形態素解析システムに依存しない読み付与システムのアーキテクチャを考案し、その実装を行っている。(4)については実装のみであり、研究のテーマとしては深めない。実装については、簡易ではあるが、カタカナ列から読み上げるシステムは完成している。

全体の計画からみた進捗としては順調に進められている。残りの研究期間は1年半だが、この間で(1)については読みと語義の関係について研究を深め、その関係を記した読み曖昧性の辞書を構築する。(2)については本年度作成したデータセットが標本データであり、読みの頻度を均衡にした均衡データを作成する。また用例の(半)自動構築の手法を開発する。(3)については現在構築している形態素解析システムに依存しない読み曖昧性解消システムを完成させる。また現在はモデルの学習をMeCabの出力を正解データとして行っているが、正しい読みのあるデータセットを用いた学習も行う。

- ・共同研究員数: 3名
- ・共同研究員所属機関:

茨城大学, 東京農工大学, 北陸先端科学技術大学院大学

- ・国内の観光エフェメラ資料の包括的アーカイブに向けた基盤構築および実証研究
- ・プロジェクトリーダー: 香月歩(東京工業大学環境・社会理工学院・助教)
- ・研究期間: 2022.10–2024.3.

《研究目的および特色ならびに2023年度の研究成果》

本研究は、国内で発行される観光に関するパンフレット、チラシ、ポスターなどの印刷物(以下、観光エフェメラ資料)の包括的なアーカイブ化を目的とするものである。本年度は①エフェメラ資料アーカイブの先行事例の調査・ヒアリング②観光エフェメラ資料データベース試作のためのメタデータモデル構築③観光パンフレットの収集およびデータ整理を行った。

①エフェメラ資料アーカイブの先行事例の調査・ヒアリング

エフェメラ資料アーカイブの先行事例として、コロンビア大学 Avery Architectural & Fine Arts Library の1. 建築エフェメラコレクション(Avery's Architectural Ephemera Collections)、イェール大学東ア

ジア図書館の2. 日本映画エフェメラコレクション (Japanese Film Ephemera Collection) および3. 日本LGBTQエフェメラコレクション (Japanese LGBTQ Collection), ハーバード大学 Baker Library の4. 広告エフェメラコレクション (Baker Library's Advertising Ephemera Collection) について各大学図書館を訪問し、コレクションの見学とアーカイブの運用に関するヒアリングを行った。

1 および4のコレクションは19世紀から20世紀初頭にかけての歴史的資料の完結したコレクションであり、アメリカ公立図書館における非商用利用に対する著作権免除の規約に則りデジタルデータでの公開がなされている。メタデータの構築と入力は一原則1名によってなされ、情報の一貫性が保たれている。デジタルデータおよびメタデータは折りたたまれた状態と開いた状態など、できる限り紙の資料の状況が把握できるように記録され、図書館で現物を見ずともある程度の研究ができるように配慮されている。一方、2は1970年代以降現在まで、3は1990年代以降現在まで発行されているエフェメラ資料のアーカイブであり、現在進行形で収集が続けられている。収集は関係する研究者の協力によって実施されている。著作権の配慮や、特にLGBTQ資料は関係者のプライバシーに特に注意する必要があることから、メタデータの公開およびデジタルアーカイブの作成はされていない。イエール大学図書館のホームページでは、メタデータのかわりにFinding Aid (エフェメラコレクションの概要を説明したもの) が公開されている。現在進行形で収集する資料の場合は、どれだけの人員や時間を今後もさいいけるのか、こういった機関と連携できるのかも想定しながら全体像が構築し、コレクションの作成活動そのものの持続可能性が配慮されている。

物理資料の管理についても、完結したコレクションか否かで異なる状況がみられた。1と4では全資料がナンバリングされ1点ずつフォルダに保管されているのに対し、2と3ではシリーズとしての分類はあるものの一点一点の整理はなされず、ボックスやフォルダで大まかに管理され、研究者はFinding Aidをもとに図書館で物理資料の閲覧を行う。

②観光エフェメラ資料データベース試作のためのメタデータモデル構築

メタデータモデルの構築にあたっては、前年度に実施したFRBR (書誌レコードの機能要件)、IFLA LRM (IFLA 図書館参照モデル)、「ミュージアム資料情報構造化モデル」(東京国立博物館, 2005)、「メディア芸術データベースメタデータスキーマ」(文化庁, 2021)の調査結果、および「メタデータ流通ガイドライン」(国立国会図書館, 2023)と①の先行事例の現地調査で得られた知見を参考にした。

メタデータモデルの要件として、(a) コンテンツの利活用につながる情報を十分に備えていること、(b) 相互運用性が担保されていること、(c) 情報の一貫性、均質性が一定程度保たれていることの3点を挙げた。構築に際しては、次の手順に従って項目を選定した。(i) 前述した「メタデータ流通ガイドライン」の項目を列挙する、(ii) コロンビア大学のエフェメラ資料コレクションのメタデータ項目を列挙し、(i)を補完する。(iii) 観光パンフレットを用いた研究に必要なと思われる項目を列挙し、(i)と(ii)を補完する。(iv) 列挙された項目を確認し、取捨選択する。最終的には、39項目からなるメタデータモデルの初期プロトタイプを構築することができた。具体的には、このメタデータモデルに基づいてメタデータ入力ツールと観光パンフレットデータベースの試作を行い、250件程度のメタデータの入力を試みた。

③観光パンフレットの収集およびデータ整理

データベース試作のため、観光パンフレット資料を収集した。収集にあたってはサンプルとして、全国観光PRコーナーで配布されている国内の観光パンフレット247点を入手した(1都道府県あたり4-10資料程度、47都道府県から入手)。全国観光PRコーナーは都庁1Fに設置された観光案内施設であり、各都道府県の観光パンフレットが一般向けに展示・配布されている。これらの資料について、②で構築したメタデータ入力ツールを用いてメタデータをのを入力しを行った。次年度はこのデータを元にデータベースの試作版を作成する予定である。また物理資料については、①で調査した先行事例を参考に、中性紙製の保管用ボックスとファイルによって整理・管理することとした。

また、前年度にヒアリングを行った佐賀市立図書館より、当図書館で収集した九州8県の観光パンフレットの提供をいただいた。佐賀市立図書館では全国の市町村の観光パンフレットを悉皆的に収集し、これらは5年おきに更新され古いものは廃棄されるため、この廃棄される分を提供いただくことになった。資料提供は今後も継続される予定である。

- ・共同研究員数：5名
- ・共同研究員所属機関：
東京工業大学，椙山女学園大学

【共同利用型共同研究(A)】8件，【共同利用型共同研究(B)】10件，【共同利用型共同研究(C)】10件

【共同利用型共同研究(A)】

共同利用型共同研究(A)は，大学等に所属する研究者が，国立国語研究所が保有する研究資料・言語資源・分析装置等を利用して研究を行い，日本語学，言語学及び日本語教育研究のさらなる発展を図ることを目的とするもの。(資料等を利用するための旅費を支弁。)

- ・見かけ時間と実時間を統合的に活用する言語変異・変化の研究
プロジェクトリーダー：久屋愛実(立命館大学文学部・准教授)
- ・北海道調査データを再活用した個人語の生涯変化の研究
プロジェクトリーダー：高野照司(北星学園大学文学部・教授)
- ・点本片仮名字形を精緻に記述できるデータベース構築手法の研究
プロジェクトリーダー：田島孝治(岐阜工業高等専門学校・准教授)
- ・方言音声と共通語音声の使い分け調査における発話回答データの文字化と分析
プロジェクトリーダー：尾崎喜光(ノートルダム清心女子大学文学部・教授)
- ・日本語に関する社会調査資料の系統的整備と現代的再解釈
プロジェクトリーダー：久野雅樹(電気通信大学大学院情報理工学研究科・教授)
- ・現代漢字における異体字の諸相
プロジェクトリーダー：安岡孝一(京都大学人文科学研究所附属東アジア人文情報学研究センター・教授)
- ・『日本言語地図』カード画像資料の意義と活用
プロジェクトリーダー：半沢康(福島大学人間発達文化学類・教授)
- ・林大氏寄贈資料から明らかにする戦後の国語施策の展開
プロジェクトリーダー：斎藤達哉(専修大学国際コミュニケーション学部・教授)

【共同利用型共同研究(B)】

共同利用型共同研究(B)は，大学等に所属する研究者が，国立国語研究所が保有する研究資料・言語資源・分析装置等を利用して研究を行い，日本語学，言語学及び日本語教育研究のさらなる発展を図ることを目的とするもの。(研究経費の配分はなし。)

- ・小学校で学ぶ日本語学習者の学習に有効な教材の試作：紙教材とタブレット端末の比較
プロジェクトリーダー：市川章子(一橋大学大学院言語社会研究科・博士研究員)
- ・東北・東京方言における有声性の対立への音響指標の影響
プロジェクトリーダー：鈴木成典(国際基督教大学大学院アーツ・サイエンス学科・博士後期課程)
- ・Waveを用いた歌い手のフォルマントと口腔形状の関係性解明
プロジェクトリーダー：高橋純(大阪芸術大学短期大学部・特任講師)
- ・グイ語を対象とするMRIを用いたリアルタイム調音運動計測
プロジェクトリーダー：中川裕(東京外国語大学総合国際学研究院・教授)
- ・ヘブライ語・ロシア語の語頭子音連続における調音の実態調査
プロジェクトリーダー：横江百合子(東洋学園大学グローバル・コミュニケーション学部・専任講師)
- ・文頭における接続表現の通時的な研究
プロジェクトリーダー：多田知子(青山学院大学社会情報学部・非常勤講師)
- ・歴史的日本語資料のためのジオパーズング
プロジェクトリーダー：大内啓樹(奈良先端科学技術大学院大学先端科学技術研究科・助教)
- ・東北・東京方言における有声性の対立への音響指標の影響
プロジェクトリーダー：鈴木成典(国際基督教大学大学院アーツ・サイエンス学科・博士後期課程)
- ・外国籍児童・生徒の日本語学習に有効な教材の試作：紙教材・タブレット端末・翻訳教材の比較
プロジェクトリーダー：市川章子(一橋大学大学院言語社会研究科・博士研究員)

- ・昭和期大衆雑誌『キング』のコーパスの構築
プロジェクトリーダー：宮内佐夜香（中京大学文学部・教授）

【共同利用型共同研究 (C)】

共同利用型共同研究 (C) は、大学等に所属する研究者が、国立国語研究所が保有する言語資源を利用して研究を行い、日本語学、言語学及び日本語教育研究のさらなる発展を図ることを目的とするもの。（研究経費の配分はなし。）

- ・指標性に着目した日本語記述
プロジェクトリーダー：野村和之（千葉大学大学院国際学術研究院・助教）
- ・係り受け情報を用いた日本語母語話者の情報処理過程解明のための基礎的研究
プロジェクトリーダー：庵功雄（一橋大学国際教育交流センター・教授）
- ・BCCWJを用いた日本語統語情報・名詞コロケーション辞書作成のための基礎的研究
プロジェクトリーダー：庵功雄（一橋大学国際教育交流センター・教授）
- ・BCCWJ/CSJ への生理指標アノテーション付加
プロジェクトリーダー：小泉政利（東北大学文学研究科・教授）
- ・LF-based Collocation Translation 語彙関数を用いたコロケーションの機械翻訳
プロジェクトリーダー：西尾広介（ボンペウ・ファブラ大学）
- ・統計的指標を用いた日本語テキストの数理解明
プロジェクトリーダー：田窪洋介（高エネルギー加速器研究機構素粒子原子核研究所・研究機関講師）
- ・Corpus Research on Clausal Center-Embedding
プロジェクトリーダー：Emily DAVIS（Linguistics department, University of California San Diego・Graduate student）
- ・介護施設で働くベトナム人実習生の「書く」「話す」能力の縦断的研究
プロジェクトリーダー：古田朋子（大阪大学日本語日本文化教育センター・非常勤講師）
- ・『日本語日常会話コーパス』に対する代名詞代用・呼びかけ表現アノテーション
プロジェクトリーダー：野元裕樹（東京外国語大学総合国際学研究院・准教授）
- ・デジタルフォレンジクスのための日本語著者識別システムに関する研究開発
プロジェクトリーダー：財津亘（目白大学心理学部・准教授）

2 人間文化研究機構基幹研究プロジェクト

人間文化研究機構では、国内外の大学等研究機関や地域社会等と組織的に連携し、現代的諸課題の解明に資する「基幹研究プロジェクト」を推進し、人間文化の新たな価値体系の創出を目指している。国立国語研究所もそれらのプロジェクト等に参画している。

(1) 広領域連携型基幹研究

人間文化研究機構を構成する6機関が協業して、国内外の大学等研究機関や地域社会と連携し、新たな人間文化研究システムを構築するとともに、異分野融合による新領域創出を目指すもの。

- ・横断的・融合的地域文化研究の領域展開：新たな社会の創発を目指して

《研究目的および特色》

現代の地域社会の多くは、多発する災害や共同体内外の変貌により、危機的な状況にある。既存の伝統文化を継承しつつも、新たな担い手とそこで更新される文化を通じた社会の創発が必要とされている。本研究では、地域の知恵や歴史が凝縮された伝統文化を取り入れ、持続可能で多様性にみちた社会のあり方を、保存科学、人類学、民俗学、歴史学、生態学、言語学等の横断的な領域から検証し、社会／文化の創発に積極的に参与することを目指す。

〈国語研ユニット〉地域における市民科学文化の再発見と現在

- ・研究代表者：大西拓一郎（研究系・教授）

・研究期間：2022.4–2028.3.

・共同研究員数：14 名

・共同研究員所属機関：

東京大学，名古屋大学，奈良大学，長野工業高等専門学校，獨協大学，神奈川大学，同志社女子大学，国立天文台，長野市立博物館，茅野市八ヶ岳総合博物館

・「地域における市民科学文化の再発見と現在」と題して，方言研究（言語地図の作成など）も含む市民による研究活動＝市民科学文化に光を当てる研究を新しく立ち上げる。市民科学は，学術コミュニティの学界と一般社会のリエゾンであるとともに，アカデミックには実現できない継続的観察・観測，広範な対象設定により，その活動実績が学術世界から注目されることが少なくない。近代以後，100 年以上の歴史を持ち，学術への貢献や長期的継続・実践にもかかわらず，やや見過ごされがちな市民科学の歴史と今に光を当て，それを基盤とした地域文化の継承と創発を実現する。

・異分野融合による総合書物学の拡張的研究

《研究目的および特色》

主として江戸時代以前の書物群を対象とし，《語彙レベルや文字組成といった単位に基づく情報の断片化》→《付加価値を有するデータとしての再構築》という共通のフローを各ユニットに設定し，研究成果を現代社会や大学院授業等へ還元すると同時に，適宜 AI の技術と融合しながら，研究方法や領域そのものの拡張というメタレベルでの刷新をも狙いとしている。失敗例もプロセスをオープン化することにより，将来のブレイクスルーを呼び込む，いわば人文学の知の実験場である。

〈国語研ユニット〉古辞書類に基づく語彙資源の拡張と語彙・表記の史的変遷

・研究代表者：高田智和（研究系・教授）

・研究期間：2022.4–2028.3.

・共同研究員数：17 名

・共同研究員所属機関：

東北大学，筑波大学，東京大学，京都大学，和洋女子大学，慶應義塾大学，岐阜工業高等専門学校，国立ハンバツ大学，ルール大学ボーフム，ドイツ日本研究所，中国海洋大学

・古辞書類ならびに他二つのユニットにおいて扱う書籍群を中心に，表記情報や形態論情報を加えながら，語彙資源の拡張を行う。これまでに開発された語彙資源には，現代日本語の語彙調査に基づく分類語彙表や，各種コーパスに基づく形態素解析辞書 Unidic が知られているが，語彙調査やコーパスに出現しない語彙は収録対象とならず，特に，日本語語彙において重要な位置を占める歴史的な「漢語」の収集が手薄となることが問題であった。そこで，中世や近世の古辞書・語彙集，訓点資料，漢字音資料などの漢字資料に基づく漢語収集によって，従来の語彙調査やコーパスを補完し，語彙・表記・文字の史的研究を展開する。

(2) 共創先導プロジェクト共創促進研究

・コミュニケーション共生科学の創成

《研究目的および特色》

あらゆる特性をもつ人が同等に参加できる「コミュニケーション共生」のための新しい研究分野を確立することを目標とする。「コミュニケーション弱者」「障害者」と呼ばれる人たちが，他の人々と同等に社会活動に参加できるようになるためには，現状のメカニズムを解明し，それぞれのニーズの違いとバランスをとるための基礎研究を進める必要がある。このような研究を進め，それをインフラ整備というハード面と一般社会の認識というソフト面の変化につなげていく。

・実施機関：国立国語研究所，国立民族学博物館

・国語研代表者：小磯花絵（研究系・教授）

・研究期間：2022.4–2028.3.

・共同研究員数：9 名

・共同研究員所属機関：

昭和大学，国立研究開発法人理化学研究所，国立障害者リハビリテーションセンター（研究所）

- ・障害者や高齢者，外国人を取り巻くコミュニケーション問題を主として取り上げ，これまで蓄積してきたコーパスや調査データなどの言語資源を，脳科学など関連他分野の研究者や地域社会などとの連携体制のもとで拡充して研究を推進する。

・学術知デジタルライブラリの構築

《研究目的および特色》

日本国内の研究者・研究機関が現地調査を通して蓄積してきた写真・動画・音声資料等の資料を保存し有効に利用するため，人文機構の国立民族学博物館・国立国語研究所と国立情報学研究所が共同して，デジタル技術を活用しながら資料のアクセス性を高めていく。さまざまな分野における過去の現地調査成果を現代において見直す作業を通して，学術の進展を加速させる。

- ・実施機関：国立国語研究所，国立民族学博物館

- ・国語研代表者：高田智和（研究系・教授）

- ・研究期間：2022.4–2028.3.

- ・共同研究員数：14 名

- ・共同研究員所属機関：

東京大学，公立はこだて未来大学，国立情報学研究所，情報・システム研究機構（機構本部施設等），SOAS，University of London

- ・国立民族学博物館・国立情報学研究所と連携して音声・映像による言語の記録を言語資料として蓄積するシステムの開発に取り組むとともに，関連分野の研究者との協同により，音声・映像による言語の記録に対するドキュメンテーション手法の精緻化，デジタル化手法の高度化をはかり，音声・動画資料の整備・公開を促進する。

・日本関連在外資料調査研究「ハワイにおける日系社会資料に関する資料調査と社会調査の融合的研究」

《研究目的および特色》

海外に点在する日本関連資料の中でも，19 世紀以降のハワイで生み出された資料はその数も種類も多いが，現地のスタッフに日本語を理解できる者が減少しているために，資料廃棄の危険が高くなっている。本プロジェクトでは，現地の言語史，社会史，生活史を基点とした研究を推進するとともに，資料の所蔵調査と関係者への聞き取り，および現地社会の人達との協働により，資料管理の現状と将来の見通しを得ることを目指す。

- ・実施機関：国立国語研究所

- ・国語研代表者：朝日祥之（研究系・教授）

- ・研究期間：2022.4–2028.3.

- ・共同研究員数：22 名

- ・共同研究員所属機関：

京都大学，大阪大学，東京都立大学，日本大学，早稲田大学，名古屋外国語大学，大阪工業大学，明治大学，海外移住資料館，国文学研究資料館，国際日本文化研究センター，国立国会図書館，Austrian Academy of Sciences，ハワイ大学

- ・本プロジェクトは，次の四つの班を設ける。

1. 資料班：資料調査を担い，その成果をとりまとめる。
2. 地域研究班：資料を支える地域社会の状況を調査し，資料状況とともにまとめる。
3. 言語研究班：言語学に即した資料の分析を行い，研究成果をまとめる。
4. 歴史研究班：ハワイへの移民史の再検討・調査を行い，研究成果をまとめる。

以上の4班のうち，プロジェクトの核になるのは「1. 資料班」と「2. 地域研究班」である。そして，「3. 言語研究班」「4. 歴史研究班」は，資料調査のなかで発掘した資料の評価に資する研究を行う。

(3) 共創先導プロジェクト(共創促進事業「知の循環促進事業」)

- ・開かれた人間文化研究を目指した社会共創コミュニケーションの構築「市民科学文化の共創と発信」
《研究目的および特色》

人文機構の各機関が所有する資料・データ等を、デジタル技術を用いて整備し、博物館や様々な展示を活用して可視化するとともに、研究のプロセスや成果を多様な方法や多様な場で共有・公開することにより、本機構と大学等研究機関と社会との間に「知の循環」を生み出し、国内外の様々な人々との共創による開かれた人間文化研究推進モデルの構築を目指す。また、視覚的あるいは聴覚的困難等のコミュニケーション課題を解決するための共同研究を実施し、その成果に基づき、多様性を踏まえた展示手法を開発する。

- ・国語研代表者：大西拓一郎(研究系・教授)、横山晶子(研究系・特任助教)

- ・研究期間：2022.4-2028.3.

- ・共同研究員数：16名

- ・共同研究員所属機関：

東京大学、名古屋大学、九州大学、獨協大学、神奈川大学、同志社女子大学、奈良大学、長野工業高等専門学校、国立天文台、茅野市八ヶ岳総合博物館、長野市立博物館

- ・【1】展示手法の高度化、その新たな展示コンテンツ・展示観覧システム・データベース等の構築への取組状況

①webサイト「市民科学文化」(<https://shiminkagaku-pj.org/>)を更新し、講演会の動画公開(1件)、講演会の集録公開(2件)、シンポジウムの動画公開(7件)、シンポジウムの集録公開(7件)、展示のブックレット公開(1件)、Webbook公開(2件)、広報誌「市民科学ニューズレター」(2件)公開を実施した。

②webサイト「ことばミュージアム」(<https://museum.ninjal.ac.jp/>)を更新し、地域言語の音声や、取り組みについてまとめた記事を3件公開した。

③国立国語研究所の「方言談話資料データ」および「方言録音資料データ」について、国立国語研究所デジタルアーカイブNINDAでの公開に向け、データ整理・音声区切りを完了した。

- ・【2】大学等研究機関の教育・研究等への貢献及び社会的課題解決への貢献状況

①2023年7月22日開催の講演会「諏訪の市民科学と天文」は、上諏訪駅前交流テラスすわっチャオを会場にオンライン併用で広く一般市民も参加できる形で開催し(参加者63名)、開催にあたって「長野県は宇宙県」連絡協議会、長野県天文愛好者連絡会、日本天文教育普及研究会の後援を受けた。2024年1月20日開催のシンポジウム「諏訪の地理、信州の地理と市民科学」は、上諏訪駅前交流テラスすわっチャオを会場にオンライン併用で広く一般市民も参加可能な形で開催し(参加者181名)、また、開催にあたって、日本地理学会と共催とし、「長野県は宇宙県」連絡協議会の協力を得た。以上の模様は、長野日報(2023年7月23日刊)、信濃毎日新聞(2024年1月23日、2024年3月12日刊)で報じられた。茅野市八ヶ岳総合博物館における展示「観測者たちを夢中にさせる星々の魅力」にともないギャラリートーク「諏訪の変光星観測者」(2023年7月22日)「諏訪清陵高校の太陽観測の歴史」(2023年7月30日)を行い、それらの様子は長野日報(2023年7月30日、2023年8月21日)でも報じられた。

②「市民科学ニューズレター」を2回刊行し(2023年10月、2024年3月)、活動の様子を広報した。

③2023年3月に長野県茅野市と結んだ協定を更新し、自治体との連携を継続した。

④危機言語継承に関するロールプレイング教材を制作し、ホームページ「ことばのミュージアム」において公開した。

- ・【3】各機関における展示等の開催状況

①2023年6月30日から2023年10月9日まで茅野市八ヶ岳総合博物館・長野市立博物館において展示「観測者たちを夢中にさせる星々の魅力」とそのデジタル展示を行った。期間中の入場者数は、茅野市八ヶ岳総合博物館4351名、長野市立博物館6267名であった。2023年12月26日から2024年1月31日まで茅野市八ヶ岳総合博物館においてミニ展示「知らなかった！諏訪ことば」とそのデジタル展示を行い、737名の入場者があった。また、2023年8月5日から2023年8月27日に長野県伊那文化会館において展示「信州天文文化100年」と同年度に作成したプラネタリウム作品「トモエゴゼンは眠らない」の上演を行った。

②2023/12/16-2025/1/26 まで、竹富島の旧与那国家住宅(重要文化財)で、「みる・よむ・きく・つくる 竹富島の島ことば絵本星砂の話」展を共催・一般財団法人竹富島地域自然資産財団、後援・地縁団体法人竹富公民館、竹富町立竹富小中学校で行った。1/8 には島の子どもたちとともに、竹富のことばや文化について考えるトークイベントと、星砂の話の物語をイメージしたモビールづくりを行った。展示全体で 500 名ほどが来場し、イベントには約 50 名が参加した。イベントの様子は八重山毎日新聞に掲載された。

・【4】展示コンテンツ・データベース等の利活用状況

- ①展示「観測者たちを夢中にさせる星々の魅力」の展示コンテンツをもとにブックレット「星や太陽のキホンがわかる展示解説 星と太陽」、ならびに Webbook を作成した。
- ②竹富島のことばや文化を継承保存し、普及するという目的で出版された多言語表記の昔話絵本『みる・よむ・きく 南の島ことば絵本—竹富島—星砂の話』をもとに、朗読とアニメーションが付いた動画を公開した (https://youtu.be/oS0j_Zhm3qQ?si=XbjOWpS8deyRuzAX)。

・【5】人文知コミュニケーションの養成、若手研究者の育成状況

- ①人文知コミュニケーションの養成として、シンポジウム「諏訪の地理、信州の地理と市民科学」(2024 年 1 月 20 日)にオンライン参加を実施した。
- ②若手研究者の育成として、講演会「諏訪の市民科学と天文」(2023 年 7 月 22 日)において若手担者の早川尚志(名古屋大学)が「太陽観測データ整備・校正」と題した講演を行い、また、早川尚志はニューズレター 3 号(2023 年 10 月)に「三澤勝衛の黒点観測と黒点相対数再校正の試み」を発表した。
- ③地域における市民科学者の育成事業として、鹿児島県沖永良部島知名町公民館において「しまむにサロン」を月 1 回、年間 10 回実施し、毎回 20 名ほどが参加した。

・【6】国際連携・協力の状況

- ①早川尚志(名古屋大学)が Astronomy Astrophysics に Revision of the strongest solar energetic particle event of 23 February 1956 (GLE #5) based on the rediscovered original records を投稿・掲載 (DOI: 10.1051/0004-6361/202348699), また、早川尚志・陶山徹(長野市立博物館)・大西浩次(長野高専)が Monthly Notices of the Royal Astronomical Society に Katsue Misawa's Sunspot Observations in 1921–1934: A Primary Reference for the Wolfer-Brunner Transition を投稿・掲載 (DOI: 10.1093/mnras/stad2791) に至った。
- ②マヒドン大学(タイ)の Suraratdecha Sumittra 准教授と共に、2024/1/27–28 の 2 日間、沖永良部島において Heritage camp (沖永良部島の継承文化・言語イベント)を、2024/2/13–18 にタイ少数言語コミュニティにおいて、沖永良部島民とタイコミュニティの交流事業を実施した。Heritage camp には島内の中高生 15 名が参加し、奄美新聞、南海日日新聞、奄美南三島経済新聞に掲載された。

3 外部資金による研究

科学研究費助成事業(科研費)

研究種目	研究代表者	研究課題名	直接経費 交付額 (千円)
国際共同研究加速基金 (国際共同研究強化(B))	迫田久美子	日本語学習者コーパスによる教育と研究のグローバルネットワークの構築	4,500
基盤研究(A)	窪蘭晴夫	消滅危機方言のプロソディーに関する実証的・理論的研究と音声データベースの構築	3,400
基盤研究(A)	木部暢子	日本語諸方言コーパスによる方言音調の比較類型論的研究	8,300
基盤研究(A)	石黒圭	海外縦断作文コーパスの構築に基づく文章産出能力の発達過程の実証的研究	5,600
基盤研究(A)	小木曾智信	日本語諸方言の形態素解析用辞書の構築と活用	11,600

基盤研究 (A)	松下達彦	文章の語彙レベルの学習者適合度の判定方法の開発 ―日本語教育・国語教育への応用―	5,700
基盤研究 (B)	前川喜久雄	リアルタイム MRI 動画による日本語調音運動データベースの構築と公開	3,400
基盤研究 (B)	山田真寛	琉球沖永良部語を中心とした地域言語コミュニティ参加型の消滅危機言語復興研究	3,200
基盤研究 (B)	田窪行則	時空間マッピングの認知的基盤に関する理論的・実験的研究	3,500
基盤研究 (B)	浅原正幸	日本語コーパスに対する単語心象性情報付与とその利用	4,800
基盤研究 (B)	Prashant Pardeshi	学習者のニーズを反映した大規模な動詞用法データベースとオンライン教材の開発と公開	2,600
基盤研究 (B)	小磯花絵	子ども会話コーパスの開発とコミュニケーション能力の発達に関する実証的研究	3,400
基盤研究 (B)	松本曜	百科事典的意味論に基づくレキシコンの研究: 大規模コーパスを用いた実証的研究	3,700
基盤研究 (C)	田中弥生	修辞機能と脱文脈化の観点からの日常談話テキスト分析 (延長)	1,550
基盤研究 (C)	山崎誠	シソーラスの整備・拡張のための分類基準の作成と活用 (延長)	2,250
基盤研究 (C)	朝日祥之	北海道北見市常呂町岐阜方言の方言敬語に関する調査研究 (延長)	759
基盤研究 (C)	鎗水兼貴	首都圏における言語資料の高密度収集と言語動態分析 (延長)	532
基盤研究 (C)	大島一	複数性の本質を求めて: 統一的な枠組みで捉えた日本語諸方言における「ら」の意味用法 (延長)	1,500
基盤研究 (C)	籠宮隆之	韻律ラベルを付与した補聴システム装用者の発話データベースの構築	800
基盤研究 (C)	福永由佳	言語レパートリーの構造と形成に関する研究 (延長)	2,018
基盤研究 (C)	山口昌也	多段階の振り返りに対応した協同型教育活動支援システムに関する研究 (延長)	400
基盤研究 (C)	五十嵐陽介	日琉祖語の再建を目的とした同源性タグ・意味タグ付き語彙データベースの構築	900
基盤研究 (C)	窪田悠介	ハイブリッド CG パーザの開発	1,100
基盤研究 (C)	横山詔一	難解な感染症関連用語の言い換えや説明の案出と理解促進効果の検証	700
基盤研究 (C)	飛田良文	明治・大正・昭和の文学作品における外来語の分析	1,100
基盤研究 (C)	宮川創	エジプト語歴史音韻論におけるコプト語の母音組織の研究	500
基盤研究 (C)	烏日哲	アカデミック・スキル育成を目指したオンライン縦断ゼミ談話の多角的分析	800
基盤研究 (C)	山口昌也	学習者ごとの評価指針を考慮したピア相互評価の支援手法に関する研究	900
基盤研究 (C)	田中弥生	修辞機能分析を用いた相関調査による文体的特徴の研究	1,600
挑戦的研究 (開拓)	大西拓一郎	古辞書・古典籍データへの地理情報付与による人文学の横断的展開	4,000
挑戦的研究 (萌芽)	高田智和	時代差・地域差・分野差を集積した漢字字形情報通覧基盤の構築研究 (延長)	1,200
挑戦的研究 (萌芽)	中川奈津子	フィールドデータのアーカイブに向けた問題点の整理と解決策	1,500
挑戦的研究 (萌芽)	浅原正幸	文脈化単語埋め込みによる 1 億語規模の比喩表現実態調査	2,000
若手研究	鈴木彩香	属性叙述を含めた包括的なテンス・アスペクト体系の解明	0
若手研究	宮崎早季	ハワイ日系人の戦時抑留体験をめぐる記憶のポリティクス (延長)	1,786
若手研究	片山久留美	コーパスを用いた近世読本のルビと漢字表記の研究	1,000
若手研究	大村舞	日常対話コーパスにおける述語項構造アノテーションの作成と分析 (延長)	2,300
若手研究	井戸美里	日本語とりたて詞の複合における否定呼応現象の統語と意味 (延長)	1,600
若手研究	佐藤久美子	日本語諸方言におけるイントネーションの対照研究 (延長)	0

若手研究	松平けあき	日本滞在経験を持つ日系二世の「アメリカ従軍」の意味—ライフヒストリーを中心に (延長)	2,064
若手研究	横山晶子	危機言語コミュニティにおける言語生態系と言語移行の関係—琉球沖永良部語を事例に— (延長)	777
若手研究	居關友里子	幼児のコミュニケーションにおける相互交渉の多様性に関する実証的研究	1,100
若手研究	川端良子	多様な談話状況における照応規則の解明	800
若手研究	黄海萍	消滅危機言語としてのチワン語諸方言の記述的研究	700
研究活動スタート支援	菊地礼	中世期日本語比喩表現の収集とその分析	900
研究活動スタート支援	宮川創	古ヌビア語の母音組織と母音字重複の音価の研究 (延長)	0
研究活動スタート支援	氏家啓吾	日本語の名詞の複数性と相互性についての研究	500
特別研究員奨励費	諸隈夕子	通方言パラレルコーパスに基づくケチュア語示差的項標示の分析	1,000
特別研究員奨励費	鴨井修平	日本語諸方言の持続形式における総合的研究	1,200
特別研究員奨励費	鈴木彩香	日本語副詞節におけるテンス解釈メカニズムの理論的・実証的解明	700
特別研究員奨励費	大川孔明	中世日本語文体の計量的研究	500
特別研究員奨励費	横山晶子	危機言語の復興に向けたアクションリサーチ	100
特別研究員奨励費 (外国人)	五十嵐陽介 (Celik Kenan)	日琉祖語で再建される語の語形成の解明	1,000

上記の表は、2023 年度に交付のあった研究課題および補助事業期間を 2023 年度まで延長した研究課題を掲載している。

寄附金 (2023 年度受入金額)

1,000,000 円

4 2023 年度公開中のコーパス・データベース

ウェブサイトにおいて、共同研究の成果としてのコーパス、データベース、データセット、研究成果物、ウェブアプリケーション等を公開しているが、2023 年度は、下記の資料の公開 (過年度から継続して公開しているものを含む。)をおこなった。

コーパス

国立国語研究所で構築したコーパス (言語を分析するための基礎資料として、書き言葉や話し言葉の資料を体系的に収集し、研究用の情報を付与した言語資源) およびコーパスを利用するためのウェブアプリケーションを記す。

- ・現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ) (<https://clrd.ninjal.ac.jp/bccwj/>)

現代日本語の書き言葉の全体像を把握するために構築したコーパスであり、現在、日本語について入手可能な唯一の均衡コーパスであり、オンライン (無償版: 登録不要で文字列検索 (全文検索) をおこなうことができるシステム『少納言』 (<https://shonagon.ninjal.ac.jp/>) および登録が必要であるが形態論情報を利用したコーパス検索アプリケーション『中納言』 (<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>)) および DVD (有償版) で公開している。書籍全般、雑誌全般、新聞、白書、ブログ、ネット掲示板、教科書、法律などのジャンルにまたがって 1 億 430 万語のデータを格納しており、各ジャンルについて無作為にサンプルを抽出している。収録対象の刊行年代は、最大 30 年間 (1976–2005 年) であり、メインとなる書籍の場合は、20 年間 (1986–2005 年) である。すべてのサンプルは、長単位および短単位の二つの言語単位を用いて形態素解析 (テキストを語に区切って品詞に分類すること) されており、文書構造に関するタグや精密な書誌情報とともに、XML 文書に整形してある。なお、著作権処理も施されている。

- ・日本語諸方言コーパス (COJADS) (<https://www2.ninjal.ac.jp/cojads/index.html>)
 日本各地の方言の談話音声を大量に集めた、日本で初めての諸方言コーパスで、元のデータは、日本全国 47 都道府県の 200 地点あまりにおける、約 2500 時間の方言談話の録音テープからなり、一部は『全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成』(2002–2008, 国書刊行会)として刊行されている。本コーパスは、コーパス検索アプリケーション『中納言』で利用可能であり、標準語と方言の両方で検索することができる。標準語検索は、短単位検索と文字列検索を利用することができる。方言検索は、現在のところ文字列検索のみ可能である。また、検索結果はダウンロードできる。
- ・日本語話し言葉コーパス (CSJ) (<https://clrd.ninjal.ac.jp/csj/>)
 日本語の自発音声を大量に集めて、多くの研究用情報を付加した話し言葉研究用のデータベースであり、国立国語研究所、情報通信研究機構 (旧通信総合研究所)、東京工業大学が共同開発した、質・量ともに世界最高水準の話し言葉データベースである。オンライン (無償版: コーパス検索アプリケーション『中納言』(<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>) で利用) および USB メモリーに格納したデータ (有償版) にて公開しており、音声言語情報処理、自然言語処理、日本語学、言語学、音声学、心理学、社会学、日本語教育、辞書編纂など幅広い領域で利用されている。
- ・日本語日常会話コーパス (CEJC) (<https://www2.ninjal.ac.jp/conversation/cejc.html>)
 日常場面の中で当事者たち自身の動機や目的によって自然に生じる会話を対象としたコーパスで、多様な場面の会話 (200 時間の日常会話) をバランスよく集め、音声だけでなく映像まで含めて収録し、転記テキスト、数種類のアノテーションも含まれる。形態論情報 (短単位・長単位) での検索と文字列検索は、コーパス検索アプリケーション『中納言』で無償で利用できる (要申請)。また、利用契約を結んだ上で、音声・映像・転記・各種アノテーション・ツール・メタ情報等を有償で利用することができる。
- ・中国語・韓国語母語の日本語学習者横断コーパス (C-JAS) (<https://www2.ninjal.ac.jp/jll/lsaj/cjas-search-info.html>)
 日本語学習者 6 人 (中国語母語話者 3 人、韓国語母語話者 3 人) の 3 年間の縦断的発話データをコーパス検索アプリケーション『中納言』上で公開している。収録データ量は、約 46.5 時間分で、総語数は約 57 万語であり、形態素単位や文字列で用例を検索することができる。
- ・多言語母語の日本語学習者横断コーパス (I-JAS) (<https://www2.ninjal.ac.jp/jll/lsaj/ijas-search-info.html>)
 日本を含む 20 の国と地域で、異なった 12 言語を母語とする日本語学習者 1000 人および日本語母語話者 50 人の話し言葉および書き言葉の収集を完了し、コーパス検索アプリケーション『中納言』上で公開している。発話データ (ストーリーテリング、ロールプレイ、対話、絵描写)、作文データ (ストーリーライティング、エッセイとメール文 (任意))、発話の音声データを所収している。
- ・北京日本語学習者縦断コーパス (B-JAS) (<https://www2.ninjal.ac.jp/jll/bjas/bjasindex.html>)
 日本語を勉強している中国語母語の大学生の発話及び作文データを、4 年間にわたって収集した縦断コーパスである。大規模横断コーパス I-JAS と対応するコーパスで、対話だけでなく、ロールプレイやストーリーテリングなど、様々なタスクのデータを収集している。
- ・名大会話コーパス (NUCC) (<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/nucc/>)
 科学研究費基盤研究 (B) (2) 「日本語学習辞書編纂に向けた電子化コーパス利用によるコロケーション研究」(平成 13–15 年度, 研究代表者: 大曾美恵子) の一環として作成された、129 会話、合計約 100 時間の日本語母語話者同士の雑談を文字化したコーパスで、文字化テキストなどを公開している。
- ・現日研・職場談話コーパス (CWPC) (<https://www2.ninjal.ac.jp/conversation/shokuba.html>)
 1993 年 9 月から 10 月にかけて、現代日本語研究会が首都圏の有職女性 19 名 (20–50 代) を調査協力者として、それぞれの職場での自然談話を録音し、文字起こしデータを収録した『女性のことば・職場編』および 1999 年 10 月から 2000 年 12 月にかけて、現代日本語研究会が首都圏の有職男性 21 名 (20–50 代) を調査協力者として、それぞれの職場での自然談話を録音し、文字起こしデータを収録した『男性のことば・職場編』の二つの調査研究を元に作成されたコーパスである。これら二つの調査研究は、1990 年代にいち早く行われた先駆的な試みで、職場での会話を調査協力者自身に録音してもらい、自然な談

話を収録するという方法で得られた、たいへん画期的なものであると評価されている。国立国語研究所では、現代日本語研究会およびひつじ書房松本功氏のご理解、ご協力によりご提供いただいたこれらの文字化テキストに形態論情報（短単位情報）を付与した上で、オンラインコーパス検索アプリケーション『中納言』で公開している。

- ・国語研日本語ウェブコーパス (NWJC) (<https://masayu-a.github.io/NWJC/>)

ウェブを母集団として 100 億語規模を目標として構築した日本語コーパスである。ウェブ上の日本語テキストを利用して 100 億語を超える規模の現代日本語コーパスを構築することによって、稀言語現象の言語学的、心理学的および情報処理的視点からの究明の可能性を開くことを目的としている。具体的な応用として、言語研究のための用例収集、日本語使用実態の定量的な把握などを想定している。一部 (86,277,772 語) をコーパス検索アプリケーション『中納言』で公開している (収集時期と比べて、リンク切れのデータが増えてきたため、2024 年 2 月 29 日で廃止。以降は、共同利用型共同研究 (C) にて国立国語研究所の所内サーバで利用可能。) ほか、2014 年 10–12 月収集データ (収集 URL 数: 83,992,556; 延べ文数: 3,885,889,575; 異なり文数: 1,463,142,939; 国語研短単位数: 25,836,947,421) から構築した n-gram データ、単語埋め込みデータ、事前学習モデルなどを言語資源協会より有償で公開している。

- ・近代語のコーパス (CMJ) (<https://clrd.ninjal.ac.jp/cmj/>)

明治・大正時代の日本語を研究するために構築されたコーパスであり、現代日本語の書き言葉が整備されていく過程をとらえることができる。これらのコーパスのデータを更新したものを、『日本語歴史コーパス』の「明治・大正編 I 雑誌」の一部としてコーパス検索アプリケーション『中納言』でも公開している。

- ・昭和話し言葉コーパス (SSC) (<https://www2.ninjal.ac.jp/conversation/showaCorpus/>)

国立国語研究所は、1950 年代の初頭から、「オープンリール型録音器」を使って、日常のさまざまな場面における会話や、講演・講義・挨拶などの独話を録音している。当時の録音資料を再編したコーパスである。本コーパスには、1950 年代から 1970 年代に録音された約 44 時間分の音声データ (17 時間分の独話、27 時間分の会話) と、その関連データ (転記テキスト、約 53 万語分の形態論情報データ、メタデータなど) である。コーパス検索アプリケーション『中納言』および関連データ配布の二通りの方法で利用することができる。

- ・日本語歴史コーパス (CHJ) (<https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/>)

日本語の歴史を研究するための資料を集めたコーパスであり、将来的に上代から近代までをカバーする通時コーパスとすることを目標に開発が進められている。全てのテキストに読み・品詞などの形態論情報が付与されているため、従来の紙の総索引の代わりになるだけでなく、より高度な検索や集計がおこなえる。構築済みで、公開中のものは以下のとおりである。

- ・奈良時代編

- I 万葉集, II 宣命, III 祝詞

- ・平安時代編

- I 仮名文字

- 収録作品: 古今和歌集, 土佐日記, 竹取物語, 伊勢物語, 落窪物語, 大和物語, 枕草子, 源氏物語, 紫式部日記, 和泉式部日記, 平中物語, 堤中納言物語, 更級日記, 讃岐典侍日記, 蜻蛉日記, 大鏡

- II 訓点資料

- 収録資料: 西大寺本『金光明最勝王経』平安初期点 巻一

- ・鎌倉時代編

- I 説話・随筆

- 収録作品: 今昔物語集 (本朝部), 宇治拾遺物語, 十訓抄, 方丈記, 徒然草

- II 日記・紀行

- 収録作品: 海道記, 建礼門院右京大夫集, 東関紀行, 十六夜日記, とはづがたり

- III 軍記

- 収録作品: 保元物語, 平治物語, 平家物語

- ・室町時代編

I 狂言

収録作品：虎明本狂言集（底本：大塚光信編（2006）『大蔵虎明能狂言集翻刻注解』（清文堂出版））

II キリシタン資料

収録作品：天草版平家物語，天草版伊曾保物語，天草版金句集

▶ 江戸時代編

I 洒落本

収録作品：大坂：聖遊廓，月花余情，新月花余情，陽台遺編・姁閣秘言，異本郭中奇譚，短華蘂葉，北華通情，南遊記，当世粋の曙，色深狹睡夢；京都：原柳巷花語，無論里問答，風流裸人形，青楼阿蘭陀鏡，昇平楽，当世嘘之川，竊潜妻，誰が面影，河東方言箱まくら，興斗月；江戸：郭中奇譚，俠者方言，南閨雑話，甲斐新話，当世左様候，深川新話，総籬，仕懸文庫，花街鑑，花街寿々女

II 人情本

収録作品：比翼連理花酒志満台，春色梅児与美，おくみ惣次郎春色江戸紫，梅暦余興春色辰巳園，小三金五郎仮名文章娘節用，浮世新形恋の花染，春色連理の梅，浦里時次郎明烏後の正夢

III 近松浄瑠璃

収録作品：曾根崎心中，薩摩歌，心中二枚絵草紙，卯月紅葉，五十年忌歌念仏，丹波与作待夜のこむろぶし，卯月の潤色，心中重井筒，堀川波鼓，淀鯉出世滝徳，心中刃は氷の朔日，心中万年草，冥途の飛脚，今宮の心中，夕霧阿波鳴渡，長町女腹切，生玉心中，大経師昔暦，鍵の権三重帷子，博多小女郎波枕，山崎与次兵衛寿の門松，心中天の網島，女殺油地獄，心中宵庚申

IV 随筆・紀行

収録作品：紀行文：鹿島詣，野ざらし紀行，更科紀行，笈の小文，嵯峨日記，おくのほそ道；随筆：養生訓，西洋紀聞，折りたく柴の記，駿台雑話，うひ山ぶみ，蘭学事始

▶ 明治・大正編

I 雑誌

収録雑誌：明六雑誌，東洋学芸雑誌，国民之友，太陽，女学雑誌，女学世界，婦人倶楽部

II 教科書

収録した期（使用開始年）と教科書名（小学校）：

第1期（1904年）：尋常小学読本 一～八

第2期（1910年）：尋常小学読本 卷一～十二

第3期（1918年）：尋常小学国語読本 卷一～十二

第4期（1933年）：小学国語読本尋常科用 卷一～十二

第5期（1941年）：ヨミカタ 一～二／よみかた 三～四／初等科国語 一～八

第6期（1947年）：こくご 一～四／国語 第三学年～第六学年

収録した期（使用開始年）と教科書名（高等小学校）：

第1期（1904年）：高等小学読本 一～八

III 明治初期口語資料

収録作品：『交易問答』，『安愚楽鍋』 初編／二編／三編，『開化のはなし』，『文明開化』 初編／二編，『よりあひばなし』 初編，『百一新論』，『開化問答』 初編／二編，『明治の光』，『文明田舎問答』 初編，『民権自由論』，『春秋雑誌会話篇』（『会話篇』 第3部）

IV 近代小説

収録作品：

二葉亭四迷『浮雲』（1887年），森鷗外『舞姫』（1890年），幸田露伴『五重塔』（1891年），樋口一葉『たけくらべ』（1895年），広津柳浪『今戸心中』（1896年），国木田独步『武蔵野』（1898年），徳富蘆花『思出の記』（1900年），泉鏡花『高野聖』（1900年），夏目漱石『吾輩は猫である』（1905年），田山花袋『蒲団』（1907年），正宗白鳥『何処へ』（1909年），有島武郎『或る女』（1911年），徳田秋声『あらくれ』（1915年），永井荷風『腕くらべ』（1916年），佐藤春夫『田園の憂鬱』（1918年），宇野浩二『蔵の中』（1919年），志賀直哉『暗夜行路』（1921年），

瀧井孝作『無限抱擁』(1921年), 宮本百合子『伸子』(1924年), 梶井基次郎『檸檬』(1925年), 川端康成『伊豆の踊子』(1926年)

V 新聞

資料:『読売新聞』

1875年5月2, 3, 4, 5, 7, 8, 9日, 11月2, 4, 5, 7, 8, 9, 10日

1881年5月2, 4, 5, 6日, 11月2, 4, 5, 6日

1887年5月3, 4, 5, 6日, 11月2, 4, 5, 6日

1895年5月2日, 11月2, 3日

1901年5月2, 3日, 11月2日

1909年5月2日, 11月2日

1917年5月2日, 11月2日

1925年5月2日, 11月2日

VI 落語 SP 盤

資料: 金澤裕之・矢島正浩編(2019)『SP 盤落語レコードがひらく近代日本語研究』(笠間書院)

・和歌集編

収録作品: 古今和歌集, 後撰和歌集, 拾遺和歌集, 後拾遺和歌集, 金葉和歌集, 詞花和歌集, 千載和歌集, 新古今和歌集

・昭和・平成書き言葉コーパス(SHC) (<https://clrd.ninjal.ac.jp/shc/index.html>)

昭和・平成期の日本語を通時的に研究できるように設計したコーパスである。上代から近代までの日本語の歴史的变化を追うことのできる『日本語歴史コーパス』と、2001–2005年のデータを中心とする現代語の書き言葉のコーパスである『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の間の空白期間をつなぐコーパスであるとともに、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』以降のデータも一部含む通時コーパスとなっている。『昭和・平成書き言葉コーパス』には、(1) 広く読まれて社会的な影響が大きい、(2) 明治から平成まで継続的に刊行されてきた、(3) 『日本語歴史コーパス 明治・大正編』や『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に収録されておりコーパスを接続可能である、という観点から雑誌・書籍・新聞の三つのレジスターを採用した。また、『日本語歴史コーパス 明治・大正編 I 雑誌』が1874年から1925年までのおよそ8年おきにデータが収録されていることを承けて、各レジスターの1933年から2013年までの11か年のデータを収録している。収録語数は、雑誌レジスター 2740 万語、ベストセラー書籍レジスター 345 万語、新聞レジスター 256 万語であり、合計 3340 万語である。

・アイヌ語口承文芸コーパス—音声・グロスつき— (<https://ainu.ninjal.ac.jp/folklore/>)

非常に優れたアイヌ語話者で語り部でもあった木村きみさん(1900–1988, 沙流川上流域のペナコリ出身)がアイヌ語で語った物語 23 編(ウエペケレ(散文説話) 20 編, カムイユカラ(神謡) 3 編) 約7時間分の音声およびアイヌ語千歳方言話者の小田イトさん(1908–2000)がアイヌ語で語った物語 15 編(ウエペケレ 9 編, カムイユカラ 6 編) 156 分間の音声に、日本語と英語による訳とグロスや注解を付けた、初めてのアイヌ口承文芸デジタル集成である。本コーパスに含まれるアイヌ語の延べ語数は 59,002 語である。

・オックスフォード・NINJAL 上代語コーパス (https://oncoj.ninjal.ac.jp/front_page_Japanese.html)

オックスフォード大学と国立国語研究所との長期の共同研究プロジェクトで開発している上代日本語のテキストを対象とした、包括的な形態・統語解析アノテーションを付与したコーパスである。現在では、萬葉集を始め、上代日本語の歌謡テキストのすべてを収録している。収録作品は以下のとおりである。

- ・古事記歌謡: 112 歌; 2,527 語; 712 年成立
- ・日本書紀歌謡: 133 歌; 2,444 語; 720 年成立
- ・風土記歌謡: 20 歌; 271 語; 730 年代成立
- ・仏足石歌: 21 歌; 337 語; 753 年以降成立
- ・萬葉集: 4,685 歌; 83,706 語; 759 年以降成立
- ・続日本紀歌謡: 8 歌; 134 語; 797 年成立
- ・上宮聖徳法王帝説: 4 歌; 60 語; 成立年不明

- 統語・意味解析情報付き現代日本語コーパス (NPCMJ) (<https://npcmj.ninjal.ac.jp>)
現代日本語の書き言葉と話し言葉のテキストに対し、文の統語・意味解析情報を付与し、多様な日本語の機能語や句構造、節の諸類型および複雑な構文を大量の言語データから検索・抽出して研究に活用できることを目的として構築したコーパスである。合計 90,069 ツリー (文)、1,304,508 語を公開している。出典並びにツリー数および語数は以下のとおりである。

・ 青空文庫: 12,810 ツリー; 246,568 語	・ 聖書: 1,664 ツリー; 26,089 語
・ ブログ: 219 ツリー; 3,218 語	・ 書籍: 553 ツリー; 10,992 語
・ 辞書: 25,279 ツリー; 141,297 語	・ 国会会議録: 1,698 ツリー; 32,715 語
・ エッセイ: 3,264 ツリー; 70,167 語	・ フィクション: 7,597 ツリー; 84,169 語
・ 法律文: 337 ツリー; 6,943 語	・ ニュース: 5,979 ツリー; 90,570 語
・ ノンフィクション: 234 ツリー; 4,118 語	・ 特許: 261 ツリー; 8,636 語
・ 会話: 2,382 ツリー; 12,720 語	・ テッドトーク: 1,453 ツリー; 21,420 語
・ 教科書: 6,950 ツリー; 63,952 語	・ 白書: 13,433 ツリー; 398,347 語
・ ウィキペディア: 2,745 ツリー; 59,833 語	・ その他: 2,211 ツリー; 22,754 語
- BTSJ1000 人日本語自然会話コーパス (<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/btsj/>)
語用論的分析のため、514 の自然会話 (約 127 時間) を文字化したコーパスである。トランスクリプトと音声データを公開している。また、会話フォルダ 30 から 32 に含まれる 40 会話については、共同構築型多機能データベース「自然会話リソースバンク (Natural Conversation Resource Bank: NCRB)」から動画が視聴できる (<https://isplad.jp/ncrb/>)。
- コーパス検索アプリケーション『中納言』 (<https://chunagon.ninjal.ac.jp/auth/login>)
国立国語研究所で開発されたウェブアプリケーションで、短単位・長単位・文字列の三つの方法によってコーパスに付与された形態論情報を組み合わせた高度な検索を行うことができる。無償で利用することができるが、著作権保護の観点から登録が必要である。
- 現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ) 全文検索サイト『少納言』 (<https://shonagon.ninjal.ac.jp/>)
国立国語研究所で開発されたウェブアプリケーションで、初心者でも簡単に BCCWJ 内の文字列を検索することができる。
- NINJAL-LWP for BCCWJ (NLB) (<https://nlb.ninjal.ac.jp/>)
現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ) を検索するために、Lago 言語研究所と共同開発したオンライン検索システムである。レキシカルプロファイリングという手法を用いたコーパス検索ツールであり、名詞や動詞などの内容語の共起関係や文法的振る舞いを網羅的に表示できるのが最大の特長である。
- NPCMJ Child Language Development Timeline (NPCMJ-CLDT) (<https://npcmj.ninjal.ac.jp/cldt/>)
そよごツリーバンク (子供の日本語の統語解析情報付きコーパス) を時系列に沿って対話的に表示するインターフェースである。このインターフェースの大きな特徴は、子供の言語の形態・統語的分析を年齢・月齢フィルターを通じて、検索したり精査したりすることを可能にしている点である。このインターフェースを利用することで、特定の語彙や構文に関して、個人の習得過程に容易に焦点をあてることができ、日本語を習得しつつある子供の形態・統語的発達のパターンを発見するチャンスにつながる。そよごツリーバンクと NPCMJ-CLDT は、NPCMJ プロジェクトの一環として開発された。

オンライン辞書

オンラインで検索できる辞書・用例集である。

- 基本動詞ハンドブック (<https://verbhandbook.ninjal.ac.jp/>)
日本語学習者・日本語教師が基本動詞の理解を深めることができるように、基本動詞の多義的な意味の広がりや図解なども用いて分かりやすく解説したオンラインツールである。例文、コロケーションなどの執筆には、国立国語研究所の「現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)」(約 1 億語) や筑波大学の「筑波ウェブコーパス」(約 11 億語) などの大規模日本語コーパスを積極的に活用し、他の参考文献には見られない生きた情報を提供している。

- 複合動詞レキシコン (<https://vvlexicon.ninjal.ac.jp/>)

「光り輝く、投げ入れる、書き上げる」のように日常よく使われる動詞＋動詞型の日本語複合動詞(2,700語以上)に意味や用法の情報を付与した、言語研究および日本語学習用のオンライン辞書である。日本語研究の専門家だけでなく、外国人日本語学習者を含む一般の利用者にも使っていただくことを意図しており、様々な検索方法が可能である。個々の複合動詞の見出しから、コーパス検索システム(NLB: NINJAL-LWP for BCCWJ)にリンクを張り、現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)の例文と関連づけることを可能とした。また、外国人学習者や、言語対照の研究者にも使っていただけるように、新たに、意味定義と用例に英語・中国語・韓国語の翻訳を付け、利便性を向上させた。本データベースは、国立国語研究所が基礎データを作成し、Lago NLP(旧Lago言語研究所、赤瀬川史朗)がオンライン検索システムとして構築したものである。

- トピック別 アイヌ語会話辞典 (<https://ainu.ninjal.ac.jp/topic/>)

1898年に刊行された『アイヌ語會話字典』を底本とし、底本の表記のほか、口語訳、アイヌ語のローマ字およびカナ表記、語釈(グロス)、英訳など、アイヌ語学習の助けとなる項目を付け加えたコンテンツであり、アイヌ語沙流方言(貫気別)の音声も収録した上で、2010年にブエガワ(他)がロンドン大学のウェブサイトで公開した『音声付きアイヌ語辞典—新編 金澤版アイヌ語会話辞典』のコンテンツにトピック検索(日本語・英語)と見出し語(アイヌ語・日本語・英語)検索機能を追加し、さらに未公開のビデオ資料(約130見出し)と動植物や道具の写真(72見出し, 86枚)も加え、見出し語数3,510項目とした新たなバージョンとして公開するものである。本データベースは、国立国語研究所が基礎データを作成し、Lago言語研究所(赤瀬川史朗)がオンラインシステムとして構築したものである。

- Webデータに基づく形容詞用例データベース(開発版) (<https://csd.ninjal.ac.jp/adj/>)

形容詞の用例のデータベースである。用例は、語ごとに構築した専用のWebコーパスからおこなっている。構築に際しては、(1)語ごとに一定量以上の用例を収集できること、(2)収集用例の偏りの軽減に配慮している。

- Webデータに基づく複合動詞用例データベース(開発版) (<https://csd.ninjal.ac.jp/comp/>)

複合動詞研究用の基礎データの提供を目的とした用例のデータベースである。用例は、語ごとに構築した専用のWebコーパスからおこなっている。構築に際しては、(1)語ごとに一定量以上の用例を収集できること、(2)収集用例の偏りの軽減に配慮している。

- Webデータに基づくサ変動詞用例データベース(開発版) (<https://csd.ninjal.ac.jp/sahen/>)

サ変動詞の用例のデータベースである。用例は、語ごとに構築した専用のWebコーパスからおこなっている。構築に際しては、(1)語ごとに一定量以上の用例を収集できること、(2)収集用例の偏りの軽減に配慮している。

- 語誌情報ポータル (<https://goshidb.ninjal.ac.jp/goshidb/>)

『日本語歴史コーパス』と併用することにより、日本語史の理解をより深めることができるデータを検索できるサイトとして公開している。コーパスからの統計情報、古辞書、言語地図、言語記事(言葉について書かれた新聞・雑誌の記事)が収録されている。検索結果の多くはグラフや画像(外部サイトを含む。)で確認できる。

- 基礎日本語活用辞典(インドネシア語版) (<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/kamus/>)

日本語の基礎語彙約4,000語を収録している。日本語の初級を終了した、インドネシア語を母語とする日本語学習者のための辞書である。

言語地図

言語の多様性・分布を地図に表現した資料である。

- 使役交替言語地図(WATP) (<https://watp.ninjal.ac.jp/>)

世界の言語の形態的関連のある有対動詞を収集した地理類型論的なデータベースであり、約80名の研究者から提供された、日本語を含む諸言語(約95言語)の有対自他動詞の類型論的な情報を、世界地図およびチャート(表)上で可視化し、有対自他動詞を個々の動詞対の派生型の選好(意味と形式の類像性の可

視化) および各言語の派生型の選好 (各言語の「類型論的な特徴づけ: typological characterization」の可視化) の 2 つの観点から分析できる。データは、研究目的でダウンロードし、利用することができる。なお、使役交替動詞対データのデータベースの構築およびシステムの設計・開発は、Lago NLP (赤瀬川 史朗, 旧 Lago 言語研究所) が担当した。

- 『日本言語地図』地図画像 (https://mmsrv.ninjal.ac.jp/laj_map/)
各地の方言で、どのような語形や発音がどこに現れるかを表示した言語地図 (方言地図) で、全国の方言の地理的分布を一望できる基礎資料である『日本言語地図』所載の地図の画像 (全 300 図) を公開している。また、『日本言語地図』各集の別冊・付録は国立国語研究所学術情報リポジトリで閲覧することおよびダウンロードすることができる。
- 『方言文法全国地図』地図画像 (https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/gaj-pdf/gaj-pdf_index.html)
文法事象の全国的な分布を展望できる言語地図 (方言地図) で、方言研究における基本的な資料である『方言文法全国地図』所載の地図の画像 (全 350 図) を公開している。
- 言語地図データベース (https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/ladp/ladb_index.html)
日本語方言の言語地図集とそこに収録された言語地図のデータベースである。言語地図目録データベースと言語地図画像データベースの 2 種類のデータベースで構成されている。
言語地図目録データベース: 日本の方言学・言語地理学において 1905 年から 2006 年の間に作成された言語地図集とそこに収録された言語地図および全国方言分布調査 (FPJD: 2010–2015 年度実施) とその準備調査 (全国方言準備調査) の調査項目に関する情報も含まれている。
言語地図画像データベース: 言語地図目録データベースで対象とした言語地図の画像データベースである。各言語地図を閲覧するとともに、論文等での引用、GIS ソフトでの利用が可能になっている。著者・編者等の許諾手続きを経た上で、順次追加する予定である。
- 全国方言分布調査 (FPJD)・新日本言語地図 (NLJ)
(https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/fpjd/fpjd_index.html)
国立国語研究所の共同研究プロジェクト「方言の形成過程解明のための全国方言分布調査」で実施した全国方言分布調査 (2010–2015 年度実施, 全国 554 地点) のデータおよび関連情報 (調査項目, 準備調査結果, 調査マニュアルなど) に加え、調査結果を地図化した『新日本言語地図』関係のデータを公開している。学術・教育での利用においては、自由に利用可能である。
- 首都圏大学生の言語使用と言語意識の地域差に関する調査 (https://mmsrv.ninjal.ac.jp/shutoken_atlas/)
首都圏の大学生における言語使用・言語意識の調査結果を言語地図で示したものである。

画像・PDF

方言地図や貴重書の画像ファイル、論文の PDF ファイルなどである。

- 日本語史研究資料 (国立国語研究所蔵) (<https://dglb01.ninjal.ac.jp/ninjalddl/>)
国立国語研究所研究図書室蔵書および研究資料室収蔵資料のうち、日本語史資料として著名なものや、歴史コーパスの原材料として利用できるものを選定し、デジタル画像を順次公開している。なお、デジタル画像の IIIF マニフェストも公開している。
- 米国議会図書館蔵『源氏物語』画像 (https://cid.ninjal.ac.jp/lcgenji_image/)
米国議会図書館アジア部日本課が所蔵する『源氏物語』(LC Control No.: 2008427768) のうち、桐壺・須磨・柏木の原本画像を閲覧できる。米国議会図書館から提供された原本画像を用いている。また、原本画像と翻字本文を対照表示させることも可能である。現在は、試験公開中である。
- 大英図書館蔵天草版『平家物語』『伊曾保物語』『金句集』画像 (https://dglb01.ninjal.ac.jp/BL_amakusa/)
大英図書館提供の天草版『平家物語』『伊曾保物語』『金句集』『言葉の和らげ』『難語句解』(Shelfmark: Or.59.aa.1) のカラー画像 (JPEG 形式) をパブリックドメインにて公開している。表紙から裏表紙まで、順番に 1 ページずつ並べることにより、「三部合綴」と言われてきた大英図書館本の姿を実感できるようにした。
- 東京語アクセント資料 (https://mmsrv.ninjal.ac.jp/tokyo_accent/)
現代東京語でアクセントのゆれが予想された 12,803 語について、年齢、地域 (山の手と下町)、性別に偏

りのないよう考慮して選ばれた 19 名の話者のアクセント型を個人別に記載した資料である。加えて、準備段階でアクセントをチェックした 2 名の話者と 4 種のアクセント辞典記載のアクセント型が併記されている。原著は『文部省科学研究費特定研究「言語の標準化」資料集』であり、その pdf 版のほか、データ版 (Excel 形式)、調査票も公開している。

- 国語研究変体仮名字形データベース (<https://cid.ninjal.ac.jp/hentaiganaDB/>)

字形データベースから、平仮名、片仮名、漢字、合字、踊り字、その他の字形画像を閲覧することができる。平仮名 (変体仮名) を、音価、字母、Unicode の 3 階層に分類して示しており、音価、字母、Unicode の各階層の見出しラベルから、「学術情報交換用変体仮名」サイトの該当文字 (または検索結果) へのリンクがある。また、個々の字形画像から、原資料の該当箇所へリンクしている (該当文字を矩形で表示します。)。『資料一覧』にリストする資料名から、個々の原資料画像を閲覧することができる。原資料画像に埋め込んだ翻刻テキストから、「変体仮名字形データベース」の字形一覧にリンクしている。以下の作品の字形データを収録している。

- ・春色梅児与美: 巻一, 巻二, 巻三
- ・比翼連理花廻志満台: 初編上, 初編中, 初編下
- ・諸国方言物類称呼: 巻之一, 巻之二, 巻之三, 巻之四, 巻之五
- ・和漢朗詠集: 上巻, 下巻
- ・伊勢物語 (国文研 200014445)

- 雑誌『国語学』全文データベース (<https://bibdb.ninjal.ac.jp/SJL/>)

日本語学会の (旧) 機関誌『国語学』全巻 (第 1 輯: 昭和 23 年-終刊第 219 号: 平成 16 年) の全文テキストデータベースである。誌面の PDF ファイルも公開している。

ツール

言語資料を扱うためのプログラムや Web 上で利用するツールである。

- UniDic (<https://clrd.ninjal.ac.jp/unidic/>)

国立国語研究所の規定した斉一な言語単位 (短単位) と、階層的見出し構造に基づく電子化辞書の (1) 設計方針およびその実装としてのリレーショナルデータベース, (2) UniDic データベースとそのデータベースからエクスポートされた短単位をエントリ (見出し語) とする形態素解析器 MeCab 用の解析用辞書, (3) 解析用 UniDic, の総称である。現代書き言葉 UniDic, 現代話し言葉 UniDic, 古文用 UniDicS (近代口語小説 UniDic, 旧仮名口語 UniDic, 近代文語 UniDic, 近世江戸口語 UniDic, 近世上方口語 UniDic, 近世文語 UniDic, 中世口語 UniDic, 中世文語 UniDic, 和歌 UniDic, 中古和文 UniDic, 上代語 UniDic) の三つの解析用 UniDic を公開・配布している。

- 形態素解析ツール Web 茶まめ (<https://chamame.ninjal.ac.jp>)

各種の UniDic を使って形態素解析を行うためのツールであり、形態素解析に必要な一連の作業を、Web 上でわかりやすいインターフェイスによっておこなうことができる。

- 方言研究の部屋 データとプログラムの公開 (https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/dp_index.html)

全国方言分布調査 (FPJD)・新日本言語地図 (NLJ), 『方言文法全国地図』全データ (1-6 集), PDF 版『方言文法全国地図』 (1-6 集), 『方言文法全国地図』作成の機械化 (イラストレータ用プラグイン・白地図・記号), 『方言文法全国地図』準備調査 (調査票と地図・データ), 言語地図データベースを公開している。

- 全文検索システム『ひまわり』 (<https://csd.ninjal.ac.jp/lrc/index.php?himawari>)

言語研究用に設計された全文検索システムであり、XML 文書 (Unicode に対応) から特定の文字列を高速に全文検索し、検索結果の KWIC (Key Word In Context) を表示し、資料に適した形で閲覧することができる。『太陽コーパス』, 『日本語話し言葉コーパス』, 『分類語彙表』などの既存の言語資料に加え、自分で作成した XML 文書も検索することができる。

- 教育活動観察支援ツール FishWatchr (<https://csd.ninjal.ac.jp/lrc/index.php?fw>)

ディスカッションやプレゼンテーション練習などの観察と振り返りを支援するためのツールである。本システムでは、ディスカッションを観察対象としているが、進行中の活動に注釈づけする (FishWatchr で

録音,あるいは,別機器で録画し同期),録音・録画ファイルを再生しつつ,注釈づけするなどの状況で利用することを想定しており,協調学習の観察,日本語教育,議事録作成支援などでの活用も考えている。

- 教育活動観察支援ツール FishWatchr Mini (<https://csd.ninjal.ac.jp/lrc/index.php?fwm>)

モバイルデバイス向けの観察支援ツールである。ボタン操作で,二つの属性(例:話者,評価)をリアルタイムに記録することができる。また,複数の観察者が一斉に観察することができるほか, FishWatchr に読み込んで,同時に撮影したビデオと同期する,観察者全員の結果をまとめてグラフに表示する,タブ区切りのテキストとして保存することなどができる。ウェブアプリケーションであるため,インストールは不要である。

- まとめて検索「KOTONOHA」(<https://clrd.ninjal.ac.jp/kotonoha.html>)

複数のコーパスを同時に検索し,その集計結果をグラフ化して視覚的に観察できるサービスである。言語資源開発センターがこれまで提供してきた従来のコーパス検索システム『中納言』は,現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)や日本語話し言葉コーパス(CSJ)などのコーパスをそれぞれ“個別”の画面で検索し,結果を閲覧する(個別検索)のに対し,KOTONOHAは,「まとめて検索」の名前の通り,中納言の中のコーパスを一度にまとめて検索し,その集計結果を表示する(これを専門的な用語で「包括的検索」「串刺し検索」「横断検索」という)。

- 一貫処理プログラム,日本語情報処理プログラム集(<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/mcl/>)

国立国語研究所で開発された,日本語研究のための一貫処理プログラムおよび日本語研究用プログラム集MCLである。1996年時点のプログラムおよびその説明を,計量国語学,特にパソコンによる日本語研究の歴史の一つとして公開するものである。

データベース・データセット類

国立国語研究所が調査・研究で収集したデータを中心とする資料である。

- 北海道調査データベース(<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/hokkaido/>)

国立国語研究所は,1958–1960年に「方言の共通語化」に注目した言語調査の一つとして,北海道に移住した1世から3世を対象に調査を実施した。調査結果から,北海道に移住した1世の出身地の方言の影響は,2世では残っているが,3世ではほとんどなくなり,「北海道共通語」が形成されることが分かった。一方で,「全国表通語」に近づく傾向もあったため,1959年に富良野町(現:富良野市)で調査を実施した。さらに,同じ内容で,1986年に富良野市で,1987年に札幌市で2回目の調査をおこない,地域社会のことばの使い方が,社会構造の特性の違いによってどのように変化するかを明らかにした。これらの北海道調査のうち,富良野市・札幌市における経年調査の結果を「北海道調査データベース」として公開している。調査地点のインフォーマントはランダムサンプリングによって選んでいる。富良野市の調査では,1959年に調査を受けた人に対しても再度調査をしており,同一個人の回答の変化を見ることができる。本調査は,国立国語研究所の定点経年調査(鶴岡調査・岡崎敬語調査・北海道調査)の一つである。

- 鶴岡調査データベース(<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/tsuruoka/>)

国立国語研究所が中心となって,1950,1971,1991,2011年の4回にわたって山形県鶴岡市でおこなった共通語化調査の回答データである。2011年調査(第4回)は,国立国語研究所と統計数理研究所との共同研究である。なお,第3回調査の音声データは,国立情報学研究所を通じて利用することが可能である。本調査は,国立国語研究所の定点経年調査(鶴岡調査・岡崎敬語調査・北海道調査)の一つである。

- 岡崎敬語調査データベース(<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/okazaki/>)

国立国語研究所が中心となって,愛知県岡崎市でおこなった敬語調査のデータベースである。岡崎敬語調査(OSH)は,1953(昭和28)年,1972(昭和47)年,2008(平成20)年におこなわれ,戦後の55年という長いタイムスパンの実時間の変化が分かる。報告書は,国立国語研究所学術情報リポジトリで公開している。本調査は,国立国語研究所の定点経年調査(鶴岡調査・岡崎敬語調査・北海道調査)の一つである。

- 甑島方言アクセントデータベース(<https://www2.ninjal.ac.jp/koshikijima/>)

甑島(鹿児島県薩摩川内市)の方言音声を教育研究に資する目的で公開している。甑島の各集落について2名ずつの話者のアクセントを,各話者の許諾を得て公開している。データベースのもととなったア

クセント資料は、10年間にわたる甌島アクセント合同調査で得られたものである。

・危機言語データベース (<https://kikigengo.ninjal.ac.jp>)

日本の消滅危機言語・方言の音声データを紹介しており、様々な方言の基礎語彙、生の方言で語られているたくさんのお話(談話資料)、文化庁が1977-1985年度におこなった「各地方言収集緊急調査音声資料」を公開している。

・「国民の言語使用と言語意識に関する全国調査」データ (<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/zenkoku/>)

研究プロジェクト「国民の言語行動・言語意識・言語能力に関する調査研究(日本語の地理的多様性に関する多角的調査研究)」(2006-2009年度前期:国立国語研究所研究開発部門言語生活グループ)における、研究課題「国民の言語使用と言語意識に関する全国調査」(企画・実施:尾崎喜光)の調査結果データである。

・「国語力観」に関する全国調査 (https://mmsrv.ninjal.ac.jp/krk_survey/)

何を「国語力」と見なすかは、人により立場によりいろいろな考えがあるため、国民が「国語力」というものをどのようにとらえているか(国民の「国語力観」)を探る目的で、2006年2月に国立国語研究所が実施した意識調査および2006年8月に実施した補充調査の回答データである。

・「学校の中の敬語」アンケート調査データ (<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/gakkoukeigo/>)

国立国語研究所が「現代敬語行動の研究—学校生活における敬語の研究—」(1988-1990年度)および「現代敬語行動の研究—小集団内の敬語行動—」(1991-1992年度)の研究課題で、東京・大阪・山形の中学生・高校生を対象に実施した敬語使用と敬語意識に関する調査のうち、無記名自記式によるアンケート調査で得られたデータである。中学生は、東京:2,456名;山形:339名,高校生は、東京:2,222名;大阪:1,004名が回答している。回答データ,調査票,設問対照表を公開している。

・「病院の言葉」にかかわる調査 (<https://www2.ninjal.ac.jp/byoin/tyosa/>)

「病院の言葉」を分かりやすくする提案に取り上げる語彙の選定と、問題点の把握と改善の方法を検討するためにおこなった調査(医師に対する問題語記述調査,医療者に対する用語意識調査,非医療者に対する理解度等の調査)の集計データを公開している。

・『幼児・児童の連想語彙表』データ (<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/remsougoi/>)

国立国語研究所報告69『幼児・児童の連想語彙表』(1981)の「全連想語彙調査表」および「頭音連想語彙調査表」を電子化(Excel形式)したものである。

・『方言談話資料』データ (https://mmsrv.ninjal.ac.jp/hogendanwa_siryo/)

『方言談話資料』(国立国語研究所資料集10)全10巻(1978-1987年刊)の本文テキストデータをPDFファイルおよびテキストファイルで、音声ファイルをデジタル化(wav形式)して公開している。

・『方言録音資料シリーズ』データ (https://mmsrv.ninjal.ac.jp/hogenrokuon_siryo/)

『方言録音資料シリーズ』全15巻(1965-1973年刊)の本文テキストデータと音声ファイルを公開している。本文はPDFファイルおよびテキストファイルで、音声ファイルはwav形式で公開している。

・『日本語教育のための基本語彙調査』データ (<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/bvjsl84/>)

国立国語研究所報告78『日本語教育のための基本語彙調査』(1984)の「基本語彙五十音順表」,「意味分類体語彙表」および「分類項目一覧表」を電子化したものである。「留学生等外国人の日本語学習者が、専門領域の研究または職業訓練に入る基礎として、はじめに学習すべき日本語の一般的・基本的な語彙」選定のために妥当な標準を得ることを目的としている。

・ことばに関する新聞記事見出しデータベース(DL版) (<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/sinbunmidasi/>)

国立国語研究所が作成した1949年から2009年9月までのことばに関する新聞記事を集めた「切抜集」に所収の新聞記事の発行日・新聞名・見出し等を収録した「見出し(目録)データベース」である。なお、本データベースは、人間文化研究機構統合検索システム(nihuINT)にも掲載されているため、nihuINTを通じた検索も可能である。

・作文対訳データベース (<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/essay/>)

日本語学習者による日本語作文,作文執筆者本人による母語訳,日本語教師等による添削,作文執筆者・添削者の言語的履歴に関する情報を大量に収集し、相互に参照することが可能な形で電子化したもので

ある。作文データ数は1,754件である。

- 外来語に関する意識調査(全国調査) (https://mmsrv.ninjal.ac.jp/gairaigo_zenkoku/)
社会的な情報の伝達に使用されている外来語・略語およびそれらを使う場面のコミュニケーションについて、国民の意識と言語生活の実態を明らかにすることに加え、分かりにくい外来語・略語を分かりやすく伝えるための、受け手に配慮した言葉遣いの工夫など、問題解決策の検討に資する科学的データを蓄積・提供することを目的としている。調査は2回(2003年10月9日-11月11日, 2004年10月6日-11月4日)おこなわれ、それぞれのデータをExcel形式で公開している。また、それぞれの報告書は、国立国語研究所学術情報リポジトリから公開している。
- 尚書(古活字版第三種本) 訓点情報データベース (<https://cid.ninjal.ac.jp/kunten-syousyo3/>)
国立国語研究所蔵尚書(古活字版第三種本の巻1-9)の加点情報(訓点情報: ヲコト点, 音合符/訓合符, 声点, 語順点など)のデータベースを公開している。
- 日本語ブックレット (https://mmsrv.ninjal.ac.jp/nihongo_bt/)
各年の日本語関連の話題についての動向を、図書、雑誌記事、新聞記事等の資料からまとめたものであり、文献目録をあわせて掲載している。2007年版, 2006年版, 2005年版, 2004年版, 2002年改訂版を公開している。
- 日本語史研究用テキストデータ集 (https://www2.ninjal.ac.jp/textdb_dataset/)
国立国語研究所共同研究プロジェクト等で作成した訓点資料, キリシタン資料, 辞書類, 洒落本・人情本, 日本語読本などのテキストデータ(TXT, XMLなど)を公開している。公開資料は以下のとおりである。
 - ・ 訓点資料: 西大寺本金光明最勝王経平安初期点(巻一)
 - ・ キリシタン資料: 大英図書館蔵 天草版平家物語, 大英図書館蔵 天草版伊曾保物語, コンテムツス・ムンデ(ヘルツォーク・アウグスト図書館蔵本)
 - ・ 辞書類: 二十巻本和名類聚抄[古活字版], 諸国方言物類称呼, 哲学字彙
 - ・ 洒落本・人情本: 吉原楊枝, 浦里時次郎明烏後の正夢, 小三金五郎仮名文章娘節用, 春色梅児与美, 梅暦余興春色辰巳園, 浮世新形恋の花染, 比翼連理花廻志満台, 春色連理の梅, おくみ惣次郎春色江戸紫
 - ・ 源氏物語: 米国議会図書館蔵 源氏物語
 - ・ 日本語読本: 日本語読本 尋常科用[布哇教育会第1期], 日本語読本[布哇教育会第2期], 日本語読本[布哇教育会第3期], 日本語初歩[布哇教育局]
- 日本語学習者会話ストラテジーデータ (<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/strategy/>)
1981-1984年度にかけて国立国語研究所日本語教育センターでおこなわれた研究プロジェクト「日本語教育における基本文型に関する研究」の一環としておこなわれた日本語学習者の会話の録音を基にして作成した。英語を母語とするか英語能力の高い外国語母語話者である日本語学習者で日本語能力がある程度ある者を対象として、外国語母語話者である対象者の日本語使用の実態を把握することを目的としたもので、外国語母語話者と日本語母語話者との日本語による会話の文字化データを公開している。
- 日本語学習者会話データベース (<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/kaiwa/>)
日本語の学習を必要とする住民(言語生活者)の需要に応じた言語教育の充実へ向けた基礎資料として活用されるべく、(1) 多文化共生社会に対応した日本語教育方法・内容の構築に向けた基礎資料を提供すること, (2) 多角的な観点からのデータベース作りを試み, 成果を報告することによって, 複合領域としての日本語会話研究や日本語教員養成の新たな展開に貢献すること, (3) 口頭能力テストの重要性や多義性について喚起するとともに, その評価の過程やフィードバック等を通じて得られる情報の有意義性に関する認識の深化を促すこと, の3点を目標として構築されるものであり, 全米外国語教育協会認定の面接式口頭能力テスト(ACTFL-OPI)を活用して収集されたものである。
- 文章理解研究「日本語学習者の文章理解過程データベース」(<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/l2com/文章理解研究/>)
日本語学習者がどのように文章理解をおこなっているか, その読解過程を調査・収集したデータベースである。「語彙の理解」, 「文脈の理解」, 「全体の理解」, 「アイ・トラッキング」の4種類のデータを公開している。

・文章表現研究 (<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/l2com/文章表現研究/>)

作文や論文など、日本語学習者が長い文章を書く機会はたくさんある。「文章表現研究」では、日本語学習者がひとまとまりの長い文章をどのような過程をたどって書いているのかを調査した。「プロダクトとしての作文」および「プロセスとしての作文」の2種類の作文コーパスを、準備ができたものから順次公開している。

・教室談話研究「大学授業の教室談話データベース」(<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/l2com/教室談話研究/>)

日本語を使用する場面はさまざま考えられますが、「教室における日本語でのコミュニケーションはどのようなになっているのか」を明らかにするために、教室場面でのコミュニケーションを対象に調査・収集したデータや研究を次の4種類公開している。

- ・ピア・リーディング：読んだ文章の内容をグループで話し合う読解の授業であるピア・リーディング活動の談話をととして、日本語学習者の文章理解過程を可視化する教室談話データ
- ・留学生ピア・レスポンス：アカデミック・ライティング技術の習得を目的とした留学生のピア・レスポンスの授業において、他の学習者のアドバイスや教師の添削・コメントが、学習者の作文の推敲にどのような影響を与えているか、日本語学習者の文章執筆過程を可視化する教室談話データ
- ・学部生ピア・レスポンス：アカデミック・ライティング技術の習得を目的とした日本人法学部生の初年次教育のピア・レスポンスの授業において、他の学習者のアドバイスや教師の添削・コメントが、学習者の作文の推敲にどのような影響を与えているか、日本語母語話者の文章執筆過程を可視化する教室談話データ
- ・講義理解：日本語学習者(一部、日本語母語話者を含む。)が日本語の講義を聞くときに、講義の内容をどのようなまとまりで理解しているのか、語句の意味をどのように理解しているかを可視化する講義ノートのデータ

・専門日本語研究 (<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/l2com/専門日本語研究/>)

ビジネス場面やアカデミック場面で必要になる専門的な日本語について、「ビジネス日本語」および「アカデミック日本語」の二つのプロジェクトで調査したデータを公開している。

- ・ビジネス日本語：「クラウドソーシング」の日本語の調査・分析を通じて、これまで守秘義務の壁に阻まれてきたビジネス日本語の実態を明らかにする産学共同のプロジェクトである。わかりやすいビジネス文書の条件を言語学的に探り、その成果を作文力の養成につなげたいと考えている。加えて、「クラウドソーシング」が海外で日本語を学んだ経験のある元学習者への国境を越えた仕事の提供という面でも魅力あるシステムであることから、日本語母語話者・非母語話者を問わず、労使双方に貢献するために、日本語ビジネス文書に用いられる語彙リストや文型リストの公開も目指している。
- ・アカデミック日本語：商学、経済学、法学、社会学、国際政治学という社会科学の5分野から、学部生が学ぶべき文献を5-8冊、それぞれの分野の専門教員がバランスよく選んで作成した社会科学全体および各分野のコーパスデータである。

・ヲコト点図データベース (<https://cid.ninjal.ac.jp/wokototendb>)

漢文訓読の記号であるヲコト点図のデータベースであり、ヲコト点図の種類、付与位置、記号形状、読みなどをキーに、ヲコト点を検索することができる。現在は、築島裕(編)『訓点語彙集成第1巻』(汲古書院、2007年)所載の主要ヲコト点図26種をデータベース化している。今後、他のヲコト点図の情報を増補収録していく予定である。

・全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成 (https://mmsrv.ninjal.ac.jp/hogendanwa_db/)

方言談話のテキストファイル(文字化テキストと共通語訳)と音声ファイルを収録したデータベース(国立国語研究所(編)、国書刊行会、全20巻、CD-ROM付き書籍、2002-2008年)である。方言音声を試聴することも可能である。

・分類語彙表一増補改訂版データベース (<https://clrd.ninjal.ac.jp/goihyo.html>)

分類語彙表とは、「語を意味によって分類・整理したシソーラス(類義語集)」である。書籍版(pdf)の『分類語彙表一増補改訂版』の元となったデータを、データベースソフトに取り込めるよう、CSV形式に加工したものである。レコード総数は101,070件である。なお、書籍版(有償)では、五十音順索引や逆引き検索などの検索環境が整えられている。

- 国立国語研究所言語処理データ集 (<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/lanpro/>)
『国立国語研究所言語処理データ集』(国立国語研究所(編), 全8巻, 1985–2001年)を公開している。
- 国語研変体仮名字形データベース (<https://cid.ninjal.ac.jp/hentaiganaDB/>)
変体仮名の字形画像を、音価・字母・Unicodeで層別したデータベースであり、各階層見出しラベルから「学術情報交換用変体仮名」サイトの該当文字(または検索結果)にリンクしている。また、個々の字形画像から原資料の該当箇所にもリンクしている。2022年3月現在、春色梅児与美(巻一, 巻二, 巻三), 比翼連理花廻志満台(初編上, 初編中, 初編下), 諸国方言物類称呼(巻之一, 巻之二, 巻之三, 巻之四, 巻之五), 和漢朗詠集(上巻, 下巻), 伊勢物語(国文研200014445)の字形データを収録している。
- うちなーぐち活用辞典テキストデータベース (<https://doi.org/10.15084/00003211>)
「宮良信詳(編著)『うちなーぐち活用辞典』, 東京: 国立国語研究所言語変異研究領域, 2021」を原本とするデータベース(txtファイル)である。国立国語研究所学術情報リポジトリを通じて公開している。
- 鳩間方言音声語彙データベース (<https://www2.ninjal.ac.jp/hatoma/>)
『鳩間方言音声語彙データベース』(txtファイル)を国立国語研究所学術情報リポジトリを通じて公開, DOI: 10.15084/00003209)をhtml化して音声ファイルとリンクさせたものである。なお, 当該データベースは, 『鳩間方言辞典』(pdf版)を国立国語研究所学術情報リポジトリを通じて公開, DOI: 10.15084/00002991)をもとに作成している(すべて同じデータから作成している)ため, 原本は一つである。
- ビデオ刺激による言語行動意識調査 (<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/video-shigeki/>)
国立国語研究所が1996–1998年にかけておこなった母国と現住国における自分の言語行動, 現住国の人々の言語行動についての観察や予測について調べる意識調査(ブラジル, フランス, 韓国, アメリカ, ベトナムの在外日本人, 同5か国出身の在日外国人を主な対象とした。)のうち「場面6: 頼みごとへの返事(頼んだ側の用件のきりだし, 頼まれた側の曖昧な返答)」のデータ(在外日本人211人, 在日外国人159人, 国内日本人60人)を公開している。本調査の成果報告書として, 『「言語事象を中心とした我が国をとりまく文化摩擦の研究」ビデオ刺激による言語行動意識調査報告書 資料編』(DOI: 10.15084/00002319)および『「言語事象を中心とした我が国をとりまく文化摩擦の研究」ビデオ刺激による言語行動意識調査報告書 分析編』(DOI: 10.15084/00002328)の2冊が作成されており, 国立国語研究所学術情報リポジトリを通じて公開されている。
- リアルタイム日本語調音運動データベース第2版(The real-time MRI articulatory movement database Version 2.0: rtMRIDB_v2) (<https://rtmridb.ninjal.ac.jp>)
医療用MRI装置を特殊な設定で稼働させることによって, 日本語分節音生成時の声道正中矢状断面の形状変化を毎秒約14ないし27フレームの速度で記録した動画のデータベースである。調音運動の可視化という調音音声学の夢を実現したデータであり, 調音音声学理論の批判的検討や日本語音声の研究, 日本語音声の教育, 声道形状からの音声合成などに広く活用できる可能性がある。話者25名, 約3万発話のデータを改良された検索系と共に公開している。検索したデータを1本のmp4形式の動画に編集することが可能で, この動画は, 再生することに加え, ダウンロードすることも可能である。
- 国立国語研究所が行った世界の言語研究機関調査 (<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/world/>)
国立国語研究所が2001年にCD-ROMで公開した世界の言語研究機関調査の結果をウェブ上で閲覧可能にしたものである。(英文)
- 外来語定着度調査 (https://mmsrv.ninjal.ac.jp/gairaigo_yoron/)
国立国語研究所が2002–2004年にかけておこなった外来語定着度調査の集計データである。外来語405語について, うち120語については750人を, 295語については2111–2118人を対象に, 認知率, 理解率, 使用率を調査した。
- 日本語観国際センサス (https://mmsrv.ninjal.ac.jp/n_census/)
国立国語研究所が1997年1月–1998年8月にかけておこなった日本語観, 母語観, 英語観についての国際比較調査「日本語観国際センサス」(International Census on Attitudes toward Japanese: ICATJ)の回答データである。調査は, 日本を含む28の国と地域(アメリカ, ブラジル, アルゼンチン, 韓国, オーストラリア, シンガポール, タイ, イギリス, フランス, ドイツ, オランダ, ハンガリー, イタリア, スペ

イン、ポルトガル、ロシア、イスラエル、インド、インドネシア、フィリピン、ベトナム、モンゴル、トルコ、ナイジェリア、エジプト、台湾、中国、日本)で32,471名を対象に実施した。

- 沖縄語辞典データ集 (<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/okinawago/>)
国立国語研究所資料集5『沖縄語辞典』(第9刷, 1963年刊行, 2001年改訂, DOI: 10.15084/00002266)の本文篇, 索引篇, 地名一覧表のデータ(Excel形式)である。
- 発話対照データベース (<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/speech/>)
日本語学習者(中国語, 韓国語, タイ語母語話者)による日本語の発話と, それとほぼ同内容の母語発話とを収集・整理するとともに, 比較のため, 同じ課題に基づく日本語母語話者の日本語発話データも収集したものである。発話課題は, スピーチとロールプレイ(あらすじあり/あらすじなし)の二つのカテゴリに分かれている。それぞれの文字化データを公開している。
- 行政情報を分かりやすく伝える言葉遣いの工夫に関する意識調査(自治体調査)
(<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/zititai/>)
自治体の首長・職員を対象とした, 住民に分かりやすい言葉で伝える工夫や, 住民との円滑なコミュニケーションを図る工夫についての意識調査(2003年実施)の回答データ(Excel形式)である。
- 寺村誤用例集データベース (<https://www2.ninjal.ac.jp/teramuradb/>)
我が国の日本語教育研究の礎を築かれた故寺村秀夫教授(1928–1990)が大阪大学で残された最後の仕事の一つである『外国人学習者の日本語誤用例集』(1990)を, 先生のご遺族の承諾を得て電子化し, オンラインで公開したものである。

カタログ類

図書・研究資料などの書誌情報を中心とする資料である。

- 日本語研究・日本語教育文献データベース (<https://bibdb.ninjal.ac.jp/bunken/ja/>)
日本語学, 日本語教育研究に関する研究文献のデータベースである。国立国語研究所が発行していた『国語年鑑』『日本語教育年鑑』に掲載されている文献情報を元にしており, 1950年代から現在までに発行された関係論文・図書が検索できる。
- 国立国語研究所蔵書目録データベース (<https://libgw.ninjal.ac.jp/drupal/>)
国立国語研究所研究図書室の所蔵する図書約15万冊と雑誌約5,800タイトルの目録・所蔵情報が検索できるデータベースである。また, 貴重書や視聴覚資料, 特殊文庫の目録・所蔵情報の検索ができる。
- 国立国語研究所学術情報リポジトリ (<https://repository.ninjal.ac.jp/>)
国立国語研究所における学術研究・教育活動の成果および国立国語研究所が所蔵する学術資料を電子的形態で収集・保存し, ウェブ上で公開している。なお, 従前から公開していた「国立国語研究所刊行物データベース」(国立国語研究所の創立(1948年)から現在に至るまでの国立国語研究所の刊行物を検索することができるデータベース)のデータについても, 本リポジトリへの移管をおこなった。
- 国立国語研究所研究資料室収蔵資料 (<https://rmr.ninjal.ac.jp/>)
国立国語研究所がこれまでに実施した調査研究において収集・作成した研究資料(調査カードや収録音源など)の概要および目録類を公開している。
- 研究資料室収蔵資料目録 (<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/itemlist/>)
国立国語研究所がこれまでに実施した調査研究において収集・作成した研究資料(調査カードや収録音源など)を研究資料室で収蔵しており, 収蔵資料の全点(2024年8月23日現在で17,026点)目録をExcel形式で公開している。
- 中央資料庫地形図地勢図所蔵リスト (<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/topographicmaplist/>)
日本言語地図, 方言文法全国地図の作成において, 調査地点確定用に使用した地形図・地勢図の所蔵リストをExcel形式で公開している。
- 中央資料庫映画台本所蔵リスト (<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/filmscriptlist/>)
国立国語研究所の話しことばの調査の際に収集した映画台本の所蔵リストをExcel形式で公開している。

- 中央資料庫未製本雑誌所蔵リスト (<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/magazinelist/>)
国立国語研究所の語彙調査等において収集した雑誌原本の所蔵リストを Excel 形式で公開している。
- 中央資料庫言語地図草稿所蔵リスト (<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/dlingmaplist/>)
『日本言語地図』・『方言文法全国地図』・その他各研究で作成された地図の草稿、参考地図などの所蔵リストを Excel 形式で公開している。
- 国語学研究文献総索引データ (<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/bunkenkw/>)
国語学会 (現: 日本語学会) と国立国語研究所の共同事業である「国語学研究文献総索引」のデータを公開している。このデータは、1954–1991 年版の『国語年鑑』に採録されている雑誌論文の一覧による文献データ (約 12 万件) である。なお、国立国語研究所では、文献データを引き続き、「日本語研究・日本語教育文献データベース」として更新・整備をおこなっている。
- 北米における日本関連在外資料目録
(<https://www2.ninjal.ac.jp/nikkei-studies/catalogue/cataloguelist.html>)
人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「北米における日本関連在外資料調査研究・活用—言語生活史研究に基づいた近現代の在外資料論の構築—」において収集した資料 (音声・映像資料、写真等) の目録を公開している。これらの資料は、現地の言語・文化・歴史・社会を調査研究するために、現地の人々が収集している。日系社会の言語生活史をより知るために広く使用されることを目指している。
- 「語彙研究文献語別目録」データ (<https://www2.ninjal.ac.jp/gobetsumokuroku/>)
「語彙研究文献語別目録」(佐藤喜代治編『講座日本語の語彙別巻』(明治書院, 1983 年) に収録) の全文テキストデータ (Excel 形式, TSV 形式, PDF 形式) を公開している。全文テキストデータは、著作権継承者の許諾を得て、機関拠点型基幹研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」において作成した。
- 海外における日本語研究文献目録 (<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/kokusai1/>)
科学研究費補助金国際学術研究「国際化時代における日本語研究文献情報の収集と分析」(1994–1995 年度, 課題番号: 05041017) において収集された、日本国内を覗く世界各地で発表、出版された日本語研究文献 (論文・図書) の 1997 年当時の書誌データである。
- 社会言語学関係報告書総合索引 (<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/ind/>)
国立国語研究所が 1998 年までに出版した研究所報告の社会言語学関係の報告書のうち、出版時に索引がついていた 12 冊の本について、索引をデータ化したもので、総件数は約 1 万件である。
- 首都圏の言語に関する研究文献目録 (https://mmsrv.ninjal.ac.jp/shutoken_bunken/)
国立国語研究所の萌芽・発掘型共同研究プロジェクト「首都圏の言語の実態と動向に関する研究」(2010 年 11 月–2013 年 10 月) において作成した首都圏の言語研究および地名、地誌などの関連分野を含む研究文献目録である。

その他データ

研究成果資料を含む種々のデータ類である。

- 先駆的名論文翻訳シリーズ (<https://www2.ninjal.ac.jp/plwj/ja/>)
日本語学的・言語学的にパイオニア的価値を持ち、その評価がほぼ確立した日本語論文を選定し、英訳して公開している。
- 学術情報交換用変体仮名 (<https://cid.ninjal.ac.jp/kana/>)
国際文字コード規格に提案するために選定した「変体仮名」の文字画像と文字情報を公開している。また、NINJAL 変体仮名フォント (IPAmj 明朝フォント (Ver.005.01 以降) に包含されており、IPAmj 明朝フォントのサブセットである。) も配布している。
- 寺村秀夫連体修飾論文英訳集 (<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/adnominal-modification/ja/index.html>)
1970 年代から 1980 年代にかけて日本語学・日本語教育の学術的基盤を築くのに大きく貢献した故・寺村秀夫教授 (1928–1990) が残した学術論文の幾つかを英語に翻訳して提供している。

- ・X線映画「日本語の発音」(<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/x-sen/>)
日本語発音時の調音運動を撮影したX線映画(1965, 1967年撮影)である。
- ・日本語教育映像教材シリーズデータセット(<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/evmds/>)
国立国語研究所が1974–1995年に製作した3種類の日本語教育のための映像教材(日本語教育映画 基礎編(1974–1983年製作), 日本語教育映像教材 中級編「伝えあうことば」(1986–1989年製作), 日本語教育映像教材 初級編「日本語でだいじょうぶ」(1993–1995年製作))のデジタル化映像(要申請), シナリオ集データ, 語彙表データを公開している。
- ・東京のことば 研究者インタビュー(https://mmsrv.ninjal.ac.jp/tokyo_interview/)
東京・首都圏の言語研究の第一人者であり, 自身がネイティブスピーカーである研究者2名に対して, 「東京のことば」についてインタビューをし, 一部の映像と文字化データを公開している。
- ・東京語アクセント資料(https://mmsrv.ninjal.ac.jp/tokyo_accent/)
文部省科学研究費特定研究「言語の標準化」資料集である『東京語アクセント資料』上下2巻(柴田武監修, 馬瀬良雄・佐藤亮一編, 1985年)のデジタル化データを公開している。
- ・現代雑誌200万字言語調査語彙表(<https://clrd.ninjal.ac.jp/mag200.html>)
「現代雑誌200万字言語調査」(2001–2005年度実施)の成果として, 学術研究・教育利用を目的として語彙表を公開している。
- ・発声発語訓練例文集(<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/oral100/>)
韓国人日本語学習者, タイ人日本語学習者, 中国人日本語学習者, マレーシア・インドネシア人日本語学習者のための発音学習用例文音声データ(WAVE形式)を聴くことができる。この例文は, 2002–2005年にかけておこなわれたe-Japan戦略対応事業の一環として作成された。
- ・コーパスアノテーションの基礎研究(<https://masayu-a.github.io/anno/NINJAL2.html>)
国立国語研究所基幹型共同研究プロジェクト「コーパスアノテーションの基礎研究」(平成21(2009)年10月–平成27(2015)年9月)の成果物を公開している。
- ・コーパスアノテーションの拡張・包括・自動化に関する基礎研究(<https://masayu-a.github.io/anno/NINJAL3.html>)
国立国語研究所コーパス基礎研究プロジェクト「コーパスアノテーションの拡張・包括・自動化に関する基礎研究」(平成28(2016)年4月–令和4(2022)年3月)の成果物を公開している。
- ・擬音語って? 擬態語って? ー日本語を楽しもう! (<https://www2.ninjal.ac.jp/Onomatope/>)
日本語の擬音語と擬態語をマンガ, イラスト, 例文を見ながら学習できるサイトである。
- ・ことばのミュージアム(<https://museum.ninjal.ac.jp/>)
日本各地で話されている色々なことばを見たり, 聞いたり, 学んだりできるウェブサイトである。日本語共通語に似ていることばもあれば, まったく違うように見える/聞こえることばもあり, まずは興味のあるタグをクリックして, 出てきた記事を読んでみることで, 地域を訪れて, そこで話されていることばを少し話してみたい, と思えるようなウェブサイトを目指している。

5 学術刊行物

(1) 所員による著書・編書

- ・石黒圭(著)
『コミュ力は「副詞」で決まる』, 光文社, 2023.4.30, ISBN: 9784334046606.
- ・小林隆, 大西拓一郎, 篠崎晃一(編)
『方言地理学の視界』, 勉誠出版, 2023.5.25, ISBN: 9784585380030.
- ・石黒圭, 楊秀娥, 費晓东, 董芸, 田佳月(著), 楊秀娥, 費晓东(編)
『日语学术写作与研究方法』, 外语教学与研究出版社, 2023.9.1, ISBN: 9787521347968.

- 石黒圭 (著)
『ていねいな文章大全—日本語の「伝わらない」を解決する108のヒント—』, ダイヤモンド社, 2023.9.20, ISBN: 9784478069516.
- 大西拓一郎 (著)
『方言はなぜ存在するのか—ことばの変化と地理空間』, 大修館書店, 2023.11.1, ISBN: 9784469213959.
- 岡部嘉幸, 村上謙, 矢島正浩, 村山実和子, 橋本行洋, 銭谷真人, 高谷由貴, 北崎勇帆, 市村太郎, 片山久留美, 宮内佐夜香, 上阪彩香, 常盤智子, 小木曾智信, 松崎安子 (著), 岡部嘉幸, 橋本行洋, 小木曾智信 (編)
『コーパスによる日本語史研究 近世編』, ひつじ書房, 2023.12.11, ISBN: 9784823411342.
- Mika Härmäläinen, Emily Öhman, Flammie Pirinen, Khalid Alnajjar, So Miyagawa, Yuri Bizzoni, Niko Partanen, and Jack Rueter (eds.)
Proceedings of the Joint 3rd International Conference on Natural Language Processing for Digital Humanities and 8th International Workshop on Computational Linguistics for Uralic Languages, Association for Computational Linguistics, 2023.12, ISBN: 9798891760127.
- 国立国語研究所 (編)
『日本語の大疑問 2』, 幻冬舎, 2024.1.31, ISBN: 9784344987180.
- 川平老人クラブ寿会, セリック ケナン, 麻生玲子 (著)
『川平方言会話集』, 国立国語研究所, 2024.2.7.
- 石黒圭 (著)
『この1冊できちんと書ける!【新版】論文・レポートの基本』, 日本実業出版社, 2024.2.16, ISBN: 9784534060808.
- 小木曾智信 (編著)
『マインクラフトでおぼえるちょっとむずかしい言葉 1205』, 西東社, 2024.3.11, ISBN: 9784791633296.
- 平子達也, 五十嵐陽介, トマペラル (著)
『日本語・琉球諸語による 歴史比較言語学』, 岩波書店, 2024.3.19, ISBN: 9784000256773.
- 朝日祥之 (編著)
『現代日本語における外来語使用実態調査 (2023年2月調査) 報告書』, 言語問題プロジェクト (報告書), 2024.3.29, DOI: 10.15084/0002000252.
- 福永由佳, 朝日祥之, 鎌水兼貴 (著), 朝日祥之 (編)
『日本の多言語多文化状況における言語問題に関するウェブ調査 (2021年度調査) 報告書』, 言語問題プロジェクト (報告書), 2024.3.29, DOI: 10.15084/0002000253.
- 松平けあき, 宮崎早季 (著), 朝日祥之 (編)
『フーバー・タテシコレクション (ハワイ日本文化センター所蔵) 資料集』, 在外資料プロジェクト (報告書), 2024.3.29, DOI: 10.15084/0002000254.
- 宮崎早季 (著), 朝日祥之 (編)
『移民資料館アワー (国立国会図書館憲政資料館所蔵) 資料集』, 在外資料プロジェクト (報告書), 2024.3.29, DOI: 10.15084/0002000255.
- 大西拓一郎 (編)
『「市民科学」プロジェクト 2023 年度講演会・シンポジウム集録 諏訪の市民科学と天文・諏訪の地理、信州の地理と市民科学』, 2024.3.29.

(2) 『国立国語研究所論集』 (NINJAL Research Papers)

国立国語研究所における研究活動の活性化と成果の発表および所内若手研究者の育成を目的として、各年度に2回(原則として7月と1月)、オンラインの形態で発刊している (ISSN: 2186-1358)。

第25号(2023年7月)

- ・加藤祥, 浅原正幸
『「比喩表現の理論と分類」データの電子化および情報付与』, 1–19 頁, DOI: 10.15084/0002000009.
- ・金青華
「「質問-応答」連鎖の応答発話に用いられる無助詞「私〇」と「私は」」, 21–33 頁, DOI: 10.15084/0002000011.
- ・夏雨佳, 中井陽子
「接触場面のナラティブにおける母語話者の調整行動: 中国人日本語中級学習者との協働構築に向けて」, 35–58 頁, DOI: 10.15084/0002000012.
- ・加藤祥, 浅原正幸
『「現代日本語書き言葉均衡コーパス」の小説サンプルに対する分類情報付与」, 59–74 頁, DOI: 10.15084/0002000013.
- ・伊藤薫, 森田敏生
「ChaKi.NET lite の開発」, 75–88 頁, DOI: 10.15084/0002000014.
- ・李婷
「ビジネス文書の評価による動詞の出現傾向: クラウドソーシングの発注文書を中心に」, 89–101 頁, DOI: 10.15084/0002000015.

第26号(2024年1月)

- ・臼田泰如
「不正確な引用: 日本語日常会話における複合助詞「とか」による語りの構造化」, 1–15 頁, DOI: 10.15084/0002000152.
- ・福村真紀子
「よみかき実践の視点による日本語学習支援の再考: リテラシーに内在するイデオロギーを批判する文献の検討から」, 17–38 頁, DOI: 10.15084/0002000153.
- ・吉田暁, 市江愛
「簡便な日本語能力測定を目的とした新たなテストの開発: 「かんたん日本語テスト」の予備的实施結果の報告」, 39–50 頁, DOI: 10.15084/0002000154.
- ・鈴木英子
「I-JAS インタビューデータにおける学習者の副詞「やはり」の使用実態: 日本語母語話者との比較を通して」, 51–68 頁, DOI: 10.15084/0002000155.
- ・CELIK Kenan, NAKAZAWA Kohei, and ASO Reiko
“UniCog: A Framework Proposal for the Dynamic Compilation of Comparative Data for the Reconstruction of proto-Ryukyuan”, pp. 69–97, DOI: 10.15084/0002000156.
- ・セリック・ケナン, 中澤光平, 麻生玲子
「[関連データ]「琉球祖語の再建に向けた比較データ構築用の枠組提案 (UniCog)」の関連データ」, DOI: 10.15084/0002000162.
- ・山本空
「独立語的な対称詞と指示詞系フィラーの使用実態: 日本語諸方言コーパスと大分県の談話資料を用いて」, 99–123 頁, DOI: 10.15084/0002000157.
- ・Kyoko MASUDA
“Interactional Particle Use in a Japanese L2 Learner Corpus: Usage-based Analysis and Application to Teaching Japanese”, pp. 125–149, DOI: 10.15084/0002000158.
- ・賀茂道子
「日本民主化における言語改革の背景と意義」, 151–169 頁, DOI: 10.15084/0002000159.
- ・三好優花
『「分類語彙表」増補のための「カタイ」と「ヤワラカイ」の多義性の考察: BCCWJ の用例をもとに」,

171–196 頁, DOI: 10.15084/0002000160.

・武中清香

「身体部位詞「口」の派生表現に関する一考察」, 197–205 頁, DOI: 10.15084/0002000161.

6

研究成果の発信と普及

国立国語研究所では, 研究成果を社会に発信・還元するために, 各種のシンポジウムや研究会を開催している。ここでは, 専門家向けのものをあげる。

(1) 国際シンポジウム

国立国語研究所が主体となって実施する研究や, 他機関との連携研究による優れた研究成果のうち, 時宜を得た課題を取り上げ, 海外からの専門家も交えて, 論旨を深めながら学術界に公表するため, 国際シンポジウムの開催や国際学会の共催をおこなっている。

国際研究発表会・国際研究交流会

The Linguistics Colloquium [2023.9.8, The University of New Mexico (ニューメキシコ・米国)]

・Prashant Pardeshi (国立国語研究所)

“Genders and classifiers in the perspective of dynamic functional typology”

国際講演会

危機言語プロジェクト講演会 [2023.7.21, 国立国語研究所・オンライン (ハイブリッド)]

・Sebastian Ohara-Saft (University of Hawai‘i at Mānoa)

「大阪在住の済州島 (チェジュ) 出身者のチェジュ語知識についての調査」

・講演は英語でおこなう。質疑は日本語でも受け付ける。

(2) 合同シンポジウム・研究発表会

複数のプロジェクトが共同でおこなうシンポジウムや研究発表会。

令和 5 年度第 1 回「危機言語の保存と日琉諸語のプロソディー」合同研究発表会

[2022.6.10, 国立国語研究所・オンライン (ハイブリッド)]

・研究発表

・五十嵐陽介 (国立国語研究所)

「日琉諸語の韻律体系における culminativity と obligatoriness」

・質疑応答

・セリック・ケナン氏, 平子達也氏, 青井隼人氏によるコメントおよびディスカッション

・研究発表

・サルバトーレ・カルリノ (大東文化大学)

「北琉球沖縄語伊平屋方言のアクセント体系を考え直す」

・セリック・ケナン (国立国語研究所), 麻生玲子 (名桜大学)

「八重山語小浜方言の 3 型のアクセント体系について」

・大島一 (国立国語研究所), セリック・ケナン (国立国語研究所)

「宮古語諸方言での名詞句階層でみる複数性表現に関する予備的調査報告」

・谷口ジョイ (静岡工科大学)

「衰退・消滅の危機にある静岡井川方言の現状とその再活性化」

シンポジウム「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」[2023.10.1, オンライン]

※ 日本手話と音声日本語の通訳つき

- ・開会のごあいさつ
- ・飲食店インタビュー動画紹介
 - ▶ 串あげ居酒屋 ふさお：吉岡富佐男さん
 - ▶ Sign with Me：柳匡裕さん
 - ▶ 麺屋 義：柳匡裕さん
- ・座談会
- ・閉会のごあいさつ

国立国語研究所 異分野融合型共同研究 ワークショップ

[2024.2.28, 国立国語研究所・オンライン (ハイブリッド)]

- ・セッション 1：テキスト読み上げのための読みの曖昧性の分類と読み推定タスクのデータセットの構築
 - ▶ 新納浩幸 (茨城大学)
「読み付与プロジェクトの紹介」
 - ▶ 大井恵奈, 古宮嘉那子 (東京農工大学), 柏野和佳子, 浅原正幸 (国立国語研究所)
「『日本経済新聞記事オープンコーパス』の漢字読みの調査」
 - ▶ 白井清昭 (北陸先端科学技術大学院大学)
「日本語読み推定タスクのデータセットの構築」
 - ▶ 新納浩幸 (茨城大学)
「漢字列から平仮名列への置き換えによるテキストへの読み付与システム」
- ・セッション 2：歴史的音源アーカイブに向けたオープンコーパスの整備と AI 音声復元技術の開発
 - ▶ 高道慎之介 (東京大学)
「プロジェクト概要」
 - ▶ 佐伯高明 (東京大学), 高道慎之介 (東京大学)
「歴史的音源のみから学習可能な音声復元技術」
 - ▶ 丹治尚子 (東京大学), 庄司潤子 (仙台文学館), 佐藤照一 (昔話採集家), 高道慎之介 (東京大学)
「東北方言昔話のオープンコーパス化」
- ・クロージング

令和 5 年度第 2 回「危機言語の保存と日琉諸語のプロソディー」合同研究発表会

[2024.3.17, 国立国語研究所・オンライン (ハイブリッド)]

- ・研究発表
 - ▶ セリック・ケナン (国立国語研究所)
「八重山語の韻律体系」
 - ▶ 松倉昂平 (金沢大学)
「白山麓方言の授与動詞体系」
 - ▶ 中澤光平 (信州大学)
「動詞接辞を中心とした高知方言の TAM 体系」
 - ▶ 阪上健夫 (東京大学 (大学院 人文社会研究科博士課程))
「理由の接続助詞と終助詞・間投助詞の接続—首都圏・熊本・倉吉方言を対象に一—」
 - ▶ 金田 章宏 (千葉大学 (名誉教授))
「宮古語大神方言 助辞カミとターシのふるまい」

(3) プロジェクトのシンポジウム・ワークショップ・研究発表会

プロジェクト等の主催やプロジェクトに関する科学研究費助成事業（科研費）との共催で、日本各地を会

場として公開研究発表会や学術シンポジウム等を開催している。2023年度は、現地開催のほか、オンラインあるいは現地開催とオンライン併用のハイブリッド形式で開催した。

「体言化の実証的な言語類型論—理論・フィールドワーク・歴史・方言の観点から—」及び「類別詞と文法的性を中心にした文法的体言化に関する類型的研究」プロジェクト合同研究会

[2023.7.15, 東京大学本郷キャンパス・オンライン (ハイブリッド)]

- ・ 桐生和幸 (美作大学)
 “The use of classifiers in nominalization in languages of Nepal”
- ・ 田中智子 (関西国際大学)
 「美濃客家語における《形容詞＋類別詞》構造」
- ・ 若狭基道 (東京外国語大学)
 「体言化の実証的な言語類型論のためのウォライタ語 (エチオピア) 資料」
- ・ 仲尾周一郎 (大阪大学)
 「バリ語 (Bari) における性標示」

生活者識字 2023 年度研究集会「私たちの知らない外国人生活者のたくましく豊かな言語生活—よみかき実践を中心に—」 [2023.8.26, 北海道大学学術交流会館]

- ・ 司会: パイチャゼ・スヴェトラナ (北海道大学)
- ・ 開会の辞・趣旨説明: 福永由佳 (国立国語研究所)
- ・ 第一部: 講演
 - ・ 高畑幸 (静岡県立大学)
 「在日フィリピン人結婚移民の「日本語」のよみかき戦略—代読・代筆を依頼する人間関係—」
- ・ 第二部: パネルディスカッション「生活者のための日本語支援を考える: 日本語運用から生活者のためのホリスティックな日本語支援へ」
 - ・ 谷光 (札幌子ども日本語クラブ)
 「外国につながる子どもたちと共に—私たちの日本語学習支援—」
 - ・ 加藤雅春 (茨城県国際交流協会)
 「地域の構成員としての外国人をみつめる茨城での事例紹介—日本語支援を中心に県域対象の国際交流協会職員が思うこと」
 - ・ 西千津 (カトリック札幌司教区難民移住移動者委員会)
 「お隣は外国人—カトリック教会に集う人々」
 - ・ 福村真紀子 (茨城大学大学院「多文化ひろばあいあい」主催)
 「私の地域日本語教育は何をめざすのか—人的ネットワーク構築をめざす親子サークル」
 - ・ 全体ディスカッション
 ディスカッサント: 福村真紀子
- ・ 閉会の挨拶

言語資源ワークショップ 2023 [2023.8.28–29, オンライン]

2023 年 8 月 28 日

- ・ オープニング: Zoom
- ・ 口頭発表セッション 1: Zoom
 - ・ 石川慎一郎 (神戸大学)
 「学習者コーパス研究における横断・縦断データ統合の意義: I-JAS と B-JAS をめぐって」
 - ・ 黄海洪 (京都大学大学院人間・環境学研究科), 金丸敏幸 (京都大学国際高等教育院)
 「介護分野における専門用語の平易化に向けた語彙リストの構築」
 - ・ 宮本華留 (大阪大学人文学研究科日本学専攻基盤日本学コース基盤日本語学講座)
 「日中対訳コーパスの構築と公開に向けて」

- 口頭発表セッション 2: Zoom
 - 金敬玲 (國學院大學大学院文学研究科)
 - 「近代中国語関係書における自律移動表現の日中対照研究」
 - 渡邊幸佑 (兵庫教育大学)
 - 「説明的文章の要点把握のための読解方法の有効性評価に用いる正解文データセット (CAKeS) の作成」
- 招待講演 1: Zoom
 - 大須賀智子 (国立情報学研究所データセット共同利用研究開発センター)
 - 「国立情報学研究所における言語資源共有の取り組み」
- 口頭発表セッション 3: Zoom
 - 李海琪 (浙江大学日本語科)
 - 「親疎関係で見る上昇下降調の使用率—『日本語日常会話コーパス』を用いて—」
 - 劉悦 (筑波大学人文社会科学研究群国際日本研究学位プログラム日本語教育専攻)
 - 「論文指導の場面における終助詞「かな」の配慮機能—『BTSJ 日本語自然会話コーパス』のデータから—」
- 口頭発表セッション 4: Zoom
 - 日暮康晴 (筑波大学大学院人文社会ビジネス科学学術院人文社会科学研究群国際日本研究学位プログラム)
 - 「程度副詞使用実態の横断的・縦断的調査—「通時話し言葉コーパス」の試み—」
 - 王鑫 (筑波大学, 言語学)
 - 「「歩きスマホ」のコロケーションと意味—新聞データベースを用いた使用実態調査—」
- ポスターセッション 1: Zoom/ブレイクアウトルーム
 - 尾崎誉治 (東北大学文学研究科)
 - 「国語教科書の説明的文章における疑問-解答の段落構成—各学年テキストの比較から—」
 - 鈴木成典 (国際基督教大学大学院アーツ・サイエンス研究科, 日本学術振興会特別研究員), 鎌野慈人 (ストーニーブルック大学大学院), 坂本誓 (国際基督教大学 RA), 鎌倉欧亮 (国際基督教大学教養学部), Seunghun Lee (国際基督教大学, ヴェンダ大学), Yu Yan (立命館大学), Jeremy Perkins (会津大学), 五十嵐陽介 (国立国語研究所)
 - 「アーカイブデータを利用した言語研究とその応用可能性」
 - 近藤泰弘 (青山学院大学名誉教授)
 - 「コンパクトな LLM による古典日本語生成」
 - 田中弥生 (国立国語研究所), 柏野和佳子 (国立国語研究所), 加藤祥 (目白大学)
 - 「書籍の文体と修辞機能の分析のパイロットスタディ」
 - 麻子軒 (関西大学)
 - 「ゲームコーパスの設計方針と構築方法」
 - 本多由美子 (国立国語研究所)
 - 「二字漢語の意味的透明性における仲介語の検討: 同一サンプル内での出現位置に着目した調査」
 - 中渡瀬秀一 (国立情報学研究所)
 - 「テキスト生成型 AI による研究課題のクラスタリング分析」

2023 年 8 月 29 日

- ポスターセッション 2: Zoom/ブレイクアウトルーム
 - 加藤恵梨 (愛知教育大学), 角谷昌範 (愛知教育大学附属岡崎小学校)
 - 「読書感想文の分析と指導法—書き出しと結びに注目して—」
 - 菊池そのみ (筑波大学), 菅野倫匡 (筑波大学)
 - 「中古和文資料『夜の寝覚』のコーパス構築の試み」
 - 安芝恩 (なし)
 - 「日本語学習者の語りに見る語彙学習ストラテジーのプロセス」

- ・川端良子 (国立国語研究所)
 - 「日本語地図課題対話においてソ系指示詞はいつ使われるか？」
- ・柏野和佳子 (国立国語研究所), 大阿久志緒理
 - 『分類語彙表』への多義語の意味増補のための『計算機用日本語基本辞書 IPAL』との対照
- ・小磯花絵 (国立国語研究所), 居關友里子 (国立国語研究所), 柏野和佳子 (国立国語研究所), 川端良子 (国立国語研究所), 田中弥生 (国立国語研究所), 西川賢哉 (国立国語研究所)
 - 『子ども版日常会話コーパス』の構築に関する中間報告
- ・石本祐一 (ものづくり大学/国立国語研究所)
 - 『日本語日常会話コーパス』にみる日常会話音声の基本周波数と談話行為の関係
- ・口頭発表セッション 5: Zoom
 - ・李文超 (中国浙江大学日本語科)
 - 「形態的豊かさと語順自由度との相関関係：類型論の視点」
 - ・姚一佳 (上智大学)
 - “Subjective frequency norms for 100 Japanese verb-verb compounds: The first step toward constructing a behavioral database for Japanese compound words”
 - ・青山文啓 (桜美林大学大学院)
 - 「用言の結合価に見る、体言のブランディング」
- ・招待講演 2: Zoom
 - ・李勝勲 (国際基督教大学)
 - “Building collaborative language resources with and for language communities”
- ・口頭発表セッション 6: Zoom
 - ・菊地礼 (国立国語研究所)
 - 「中世期日本語比喩表現の収集の試み」
 - ・宮川創 (国立国語研究所)
 - 「江戸期・明治期の日本語・琉球語訳『ヨハネによる福音書』パラレル・コーパスの構築と翻訳間の影響関係の分析」
 - ・岩崎拓也 (筑波大学), 波多野博顕, 伊藤秀明
 - 「日本語教師向け Web コンテンツ「つくば語彙チェッカー」の概要」
- ・ポスターセッション 3: Zoom/ブレイクアウトルーム
 - ・宮崎由美 (昭和女子大学人間文化学部日本語日本文学科), 日文コースプロジェクト 5 メンバー
 - 「昭和女子大学近代文庫所蔵『與謝野晶子書簡』コーパスの設計」
 - ・東泉裕子 (東洋大学), 高橋圭子 (東洋大学)
 - 「近現代語コーパスにおける漢語「是非」」
 - ・居關友里子 (国立国語研究所), 小磯花絵 (国立国語研究所)
 - 「親子の共同行為場面における振る舞いの調整—お菓子作りの事例から—」
 - ・片山久留美 (国立国語研究所)
 - 「近世読本コーパスの設計と活用—表記研究での利用を目指して」
 - ・野口大斗 (上智大学大学院言語科学研究科/東京医科歯科大学)
 - 「YouTube を利用した関西方言アクセント辞書の作成」
 - (“Building a Kansai accent dictionary using YouTube”)
 - ・大野剛 (アルバータ大学), 白田泰如 (静岡理工科大学)
 - 「例外的な「基本形」：日本語会話における動詞終わりの発話」
 - ・山崎誠 (国立国語研究所)
 - 『分類語彙表』における多義語について

- ・ポスターセッション 4: Zoom/ブレイクアウトルーム
 - ・新山聖也 (筑波大学), 竹本理美 (筑波大学非常勤研究員), 澤田浩子 (筑波大学)

「教科学習における抽象的思考と結びつく言語形式—数学における「とする」をケーススタディとして—」
 - ・近藤明日子 (東京大学)

『昭和・平成書き言葉コーパス』雑誌レジスターに見る順接・逆接の接続詞の通時的変化」
 - ・古田龍啓 (九州大学)

「抄物コーパス構築に関する課題と方策」
 - ・相良かおる (奈良先端科学技術大学院大学), 黒田航 (杏林大学), 東条佳奈 (大阪大学), 西嶋佑太郎 (京都大学), 麻子軒 (関西大学), 山崎誠 (国立国語研究所)

「実践医療用語_語構成要素語彙試案表 Ver.3 の公開にむけて」
 - ・堀一成 (大阪大学全学教育推進機構)

「科学技術系ライティング教育改善を目的としたシラバス分析のための spaCY-GSDLUW を利用した日本語長単位解析」
 - ・東条佳奈 (大阪大学)

「雑誌コーパス作成の試み—2015 年の資料をもとに—」
 - ・田中弥生 (国立国語研究所), 江口典子 (国立国語研究所), 小磯花絵 (国立国語研究所)

「家庭での食事場面における親子会話の脱文脈度の観点からの分析」
- ・クロージング: Zoom

2023 年度共同利用セミナー [2023.9.8, オンライン]

- ・開会挨拶: 石黒圭 (国立国語研究所 共同利用推進センター長)
- ・研究紹介
 - ・前田忠彦 (統計数理研究所)

「社会調査データのライフサイクル管理—ことばの社会調査を例として」
 - ・尾崎喜光 (ノートルダム清心女子大学)

「多人数音声調査の発話回答文字化資料から見えてくる方言的特徴—山形県鶴岡市における「(蛇が) 嫌いだ」および「(あれは) 駅かな? / (あれは) カラスかな?」の表現」
- ・リソース紹介
 - ・小磯花絵 (国立国語研究所)

「幼児の言語資料」
 - ・中川奈津子 (国立国語研究所)

「諸鈍方言辞典」
 - ・高田智和 (国立国語研究所)

「国立国語研究所研究資料室所蔵音声・映像データベース」
 - ・中島彩花 (国立国語研究所)

「国立国語研究所研究資料室利用案内」
 - ・研究推進課 (国立国語研究所)

「国立国語研究所共同利用型共同研究案内」
- ・開会挨拶: 前田忠彦 (情報・システム研究機構 データサイエンス共同利用基盤施設 社会データ構造化センター長)

Evidence-based Linguistics Workshop 2023 [2023.9.14–15, 国立国語研究所]

2023 年 9 月 14 日

- ・セッション 1: 口頭発表 (2F 講堂)
 - ・オープニング

- ・落合いずみ (帯広畜産大学)
 - 「アタル語群の「星」に見られる様々な派生形」
- ・西内沙恵 (北海道教育大学・筑波大学: 学生)
 - 「想起テストに見る多義語「甘い」の習得: 小学5年生・中学2年生・大学生を対象に」
- ・鴨井修平 (日本学術振興会特別研究員)
 - 「西日本諸方言におけるアスペクト形式の文法化—2つの動機に基づく待遇化プロセス—」
- ・セッション2: ポスター発表 (2F 廊下)
 - ・橋本大樹 (上越教育大学)
 - 「借用語知識による第二言語発音への干渉: 帯気性の度合いに注目して」
 - ・YIN Yuqi (総合研究大学院大学: 学生)
 - 「着く」と「着いてくる」の多義性についての一考察—BCCWJ コーパスを用いて—」
 - ・山本晃子 (立命館大学: 学生)
 - 「<つ>を用いて数えられる「コト」(行為) についての分析」
 - ・菊地礼 (国立国語研究所)
 - 「『方丈記』の比喩表現の抽出と分析」
- ・セッション3: 国立国語研究所プロジェクト紹介 (2F 講堂)
 - ・窪田悠介 (国立国語研究所)
 - サブプロジェクト「計算言語学的手法による理論言語学の実証的な方法論の開拓」
 - ・五十嵐陽介 (国立国語研究所)
 - サブプロジェクト「日本・琉球語諸方言におけるイントネーションの多様性解明のための実証的研究」

2023年9月15日

- ・セッション4: 口頭発表 (2F 講堂)
 - ・伊藤薫 (九州大学)
 - 「構成の反復」の並行性についての構文文法的記述の試み」
 - ・安岡孝一 (京都大学), 安岡素子 (京都大学・京都外国語大学)
 - 「ローマ字・カタカナ・キリル文字によるアイヌ語 Universal Dependencies の可能性」
- ・セッション5: ポスター発表 (2F 廊下)
 - ・胡春霞 (関西学院大学: 学生), 中野陽子 (関西学院大学)
 - 「日本語の謙譲表現を含む文の処理における類似性の効果」
 - ・Osamu Sawada (神戸大学)
 - “Projective properties of sense-based low-degree modifiers: A comparison with predicates of personal taste”
 - ・金英周 (帝京大学), 五十嵐陽介 (国立国語研究所), 宇都木昭 (名古屋大学), 酒井弘 (早稲田大学)
 - 「統語構造の証拠として韻律パターンを使用することの有効性—現代韓国語の属格主語構造を一例として—」
- ・セッション6: クロージング (2F 講堂)
 - ・クロージング・優秀発表賞表彰

**プロジェクト合同研究会「体言化の実証的な言語類型論—理論・フィールドワーク・歴史・方言の観点から—」
及び「類別詞と文法的性を中心にした文法的体言化に関する類型的研究」**

[2023.10.21, オンライン]

- ・古本真 (東京外国語大学)
 - 「スワヒリ語マクンドウチ方言の準体言」
- ・仲尾周一郎 (大阪大学)
 - 「アラビア語における性・数標示と体言化」

プロジェクト合同研究会「体言化の実証的な言語類型論—理論・フィールドワーク・歴史・方言の観点から—」

及び「類別詞と文法的性を中心にした文法的体言化に関する類型的研究」

[2023.10.28, オンライン]

- ・高橋洋成 (東京外国語大学)
「ハマル語における名詞句の構造とパターン」
- ・Tatjana Ilic and Kazuhiro Kawachi (Keio University)
“Gender Marking on Definite and Indefinite Noun Phrases in Swedish”

「ハワイにおける日系社会資料に関する資料調査と社会調査の融合的研究」 共同研究発表会

[2023.12.2, オンライン]

- ・福山樹里 (国立国会図書館)
「国立国会図書館 憲政資料室所蔵 日系移民関係資料の収集と整理」

人工知能学会 言語・音声理解と対話処理研究会 (SLUD) 第 99 回研究会「第 14 回対話システムシンポジウム」

[2023.12.13–14, 国立国語研究所・オンライン (ハイブリッド)]

2023 年 12 月 13 日

- ・開会挨拶
- ・一般口頭発表 1
 - ・井上昂治, Lala Divesh, 越智景子, 河原達也 (京都大学), Skantze Gabriel (スウェーデン王立工科大学)
「音声対話システムの客観評価のためのユーザのマルチモーダルなふるまいの分析」
 - ・小尾賢生, 船越孝太郎 (東京工業大学)
「親和的な対話システムの実現にむけた非接触呼吸推定技術の開発」
 - ・渡邊寛大 (奈良先端科学技術大学院大学, 理化学研究所ガーディアンロボットプロジェクト), 河野誠也 (理化学研究所ガーディアンロボットプロジェクト, 奈良先端科学技術大学院大学), 湯口彰重 (理化学研究所ガーディアンロボットプロジェクト, 東京理科大学), 吉野幸一郎 (理化学研究所ガーディアンロボットプロジェクト, 奈良先端科学技術大学院大学)
「経験に基づく知識の想起と深化を伴う対話システム」
- ・ポスターセッション 1
 - ・薛強, 滝口哲也, 有木康雄 (神戸大学)
「対話データに基づく重複文負例の作成と重複を抑制する言語モデルの提案」
 - ・千葉祐弥 (NTT), 光田航 (rinna 株式会社), 李 晃伸 (名古屋工業大学), 東中竜一郎 (名古屋大学)
「Remdis: リアルタイムマルチモーダル対話システム構築ツールキット」
 - ・上田弦輝, 吉原一成, 小林一樹 (信州大学)
「ユーザへの共感対話に基づく作業記録促進システムの開発」
 - ・川西翔貴 (東北大学大学院工学研究科), 千葉祐弥, 杉山弘晃 (NTT コミュニケーション科学基礎研究所), 伊藤彰則 (東北大学大学院工学研究科)
「声質変換を用いたデータ拡張による対話音声生成の検討」
 - ・上原隆一, 稲葉通将 (電気通信大学)
「キャラクタ対話システムのための文脈を用いた応答評価」
 - ・樋口智哉, 稲葉通将 (電気通信大学)
「ユーザの理解度を考慮したニュース解説対話インターフェース」
 - ・舩井裕貴, 滝口哲也, 有木康雄 (神戸大学)
「知識グラフを活用したルールベースによる Fact Verification」
 - ・橋本慧海 (名古屋工業大学), 柳楽浩平, 水本武志 (ハイラブル株式会社), 白松俊 (名古屋工業大学)
「GPT-4 を用いた就活生の自己分析支援コーチングエージェントの開発」
 - ・佐藤明智, 南泰浩 (電気通信大学)
「タスク指向対話の対話状態追跡における言語モデルの Hallucination の抑制」

- 招待講演
 - 今井倫太 (慶應義塾大学)
 - 「大規模言語モデルの対話処理から始まるインタラクション研究元年」
- 一般口頭発表 2
 - 川井悠生, 山本賢太, 越智景子, Lala Divesh, 井上昂治, 河原達也 (京都大学大学院情報学研究科)
 - 「半自律対話による同時並列傾聴システム」
 - 山本雄樹, 西田昌史 (静岡大学), 村田雄一, 安田晴彦 (株式会社シルバコンパス)
 - 「話したい人と話せる音声対話システムの実現を目指して」
 - 越智景子, 井上昂治, ララ ディベッシュ, 河原達也 (京都大学), 熊崎博一 (長崎大学)
 - 「精神科デイケアのための傾聴対話システム: きくロボ」
- 対話システムライブコンペティション 6
 - 東中竜一郎 (名古屋大学), 高橋哲朗 (富士通 (株)), 稲葉通将, 齊志揚 (電気通信大学), 佐々木裕多, 船越孝太郎 (東京工業大学), 守屋彰二, 佐藤志貴 (東北大学), 港隆史 (ATR/理化学研究所), 境くりま, 船山智 (ATR), 小室允人 (株式会社アイアール・アルト), 西川寛之 (明海大学), 牧野遼作, 菊池浩史 (早稲田大学), 宇佐美まゆみ (東京外国語大学)
 - 「対話システムライブコンペティション 6」
 - 朝原隆太郎, 小野関宏己, 齊志揚, 金子拓正, 秋山一馬, 上原隆一, 樋口智哉, 稲葉通将 (電気通信大学)
 - 「第三者のペルソナを考慮したマルチモーダル対話システム」
 - 松浦直樹, 大沼飛宇多, 中山朝陽, 佐藤明智, 南泰浩 (電気通信大学)
 - 「GPT-4 を活用した感情・対話行為分析を組み込んだシチュエーショントラック対話システム」
 - 中野雄斗, 野末慎之介, 穀田一真, 有山知希, 佐藤魁, 曾根周作, 亀井遼平, 謝素春, 成田風香, 守屋彰二 (東北大学), 赤間怜奈, 松林優一郎, 坂口慶祐 (東北大学・理化学研究所)
 - 「Hagi bot: LLM を用いた対話状態追跡と人間らしい振る舞いで自然な議論を行うマルチモーダル対話システム」

2023 年 12 月 14 日

- 一般口頭発表 3
 - 岩橋直人 (岡山県立大学), 相良陸成 (静岡県立大学), 田口亮 (名古屋工業大学), 船越孝太郎 (東京工業大学)
 - 「動的計画共有と共同運動主体感モデルに基づく身体的共同行為における調整のための会話の分析」
 - 稲積駿 (NAIST/RIKEN GRP), 河野誠也 (RIKEN GRP/NAIST), 湯口彰重 (TUS/RIKEN GRP), 川西康友, 吉野幸一郎 (RIKEN GRP/NAIST)
 - 「視覚的質問応答における視線情報を用いた質問の明確化」
 - 彭子豪, 傅雅慧, Lala Divesh, 越智景子, 井上昂治, 河原達也 (京都大学情報学研究科)
 - 「感情語りコーパスを用いたバリデーション応答の生成」
 - 武川直樹 (東京電機大学システムデザイン工学部), 徳永弘子 (東京電機大学・理化学研究所), 山田晴奈 (東京電機大学システムデザイン工学部), 高柳直人, 楊井一彦, 平石牧子 (花王株式会社パーソナルヘルスケア研究所)
 - 「高齢女性二者間初対面会話テキストコーパス (TDU-Kao) の提供—リアルと遠隔会話の収録とアノテーションの紹介—」
- ポスターセッション 2
 - 金子拓正, 稲葉通将 (電気通信大学)
 - 「LLM に基づく音声対話システムのための非言語情報を活用したユーザ心情の考慮とリアルタイム性の向上」
 - 江連夏美, 稲葉通将 (電気通信大学)
 - 「個人の特性に基づくブレインストーミング対話の分析」

- ・岡永佳子, 藤江真也 (千葉工業大学)
 - 「対話システムの円滑な話者交替の実現に向けた日常会話における対話テンポの推定」
- ・倉田楓真, 佐伯真於, 江口政貴, 鈴木駿吾, 高津弘明, 松山洋一 (早稲田大学)
 - 「話体験品質評価手法の検討: ロールプレイと議論対話におけるエンゲージメントとラポールの分析」
- ・倉澤瑞 (千葉工業大学), 福田樹人 (千葉工業大学大学院), 有本泰子 (千葉工業大学)
 - 「笑い声に応答するゲームシステムの開発に向けたイベント呈示の生理学的評価」
- ・邊土名朝飛, 馬場惇 (サイバーエージェント), 赤間怜奈 (東北大学)
 - 「セールストークを対象としたエンゲージメント駆動タスク指向対話の検討」
- ・稲葉通将 (電気通信大学), 浮世満理子 (株式会社アイディアヒューマンサポートサービス), 高溝恵子 (一般社団法人全国心理業連合会)
 - 「大規模言語モデルは心理カウンセリングを行うことができるか?: ロールプレイ対話データを用いた分析とカウンセラーによる評価」
- ・中野幹生, 東中竜一郎 (名古屋大学)
 - 「D4AC: 異分野連携のためのマルチモーダル対話システム構築ツール」
- ・吉開一輝, 内田昂, 本田為彬, 本田裕 (本田技研工業株式会社)
 - 「LLM のハイブリッド利用による間を制御するマルチモーダル対話システム」
- ・インダストリーセッション
 - ・安田喬一 (カサナレ株式会社)
 - 「ChatGPT 等生成 AI を活用した顧客対応の最前線! AI Copilot 「Kasanare (カサナレ)」 の事例紹介」
 - ・頼展韜 (株式会社バンダイナムコ研究所)
 - 「Retrieval Augmented Generation を用いたキャラクター対話システムにおける IP 固有情報検索の取り組み」
 - ・永江尚義, 吉田尚水, 小林優佳, 久島務嗣, 岩田憲治 (株式会社東芝)
 - 「マニュアルの章構造にロバストなマニュアル検索技術」
 - ・二宮大空 (株式会社 AI Shift)
 - 「カスタマーサポートにおける LLM を用いた RAG ベース対話システムの評価と事業活用に向けた取り組み」
 - ・芝原隆善, 清律康, 安富泰輝, 鷺坂文野 (株式会社レトリバ)
 - 「RAG による対話システム開発で見えてきた課題と現状」
 - ・宮澤幸希, 佐藤可直 (フェアリーデバイズ株式会社)
 - 「フェアリーデバイズにおける研究開発一人と機械の円滑な音声対話を実現するための音声処理技術」
 - ・馬場惇, 岡藤勇来, 大平義輝, 兵頭克哉, 猪狩大輔 (サイバーエージェント)
 - 「マルチモーダル入力からリアクティブな行動と応答発話の制御を両立する音声対話基盤の開発」
 - ・佐伯真於, 高津弘明, 倉田楓真, 鈴木駿吾, 江口政貴, 松山 洋一 (株式会社エキュメノポリス)
 - 「LANGX Speaking 会話エージェントによる英会話能力判定システム」
 - ・大須賀晋, 田中五大, 渡邊凌太, 浅見浩司, 光森卓, 道下裕也, 川崎拳人 (株式会社アイシン), 藤井駿伍 (アイシン・ソフトウェア株式会社), 石川友香, 石川晃之 (GarateaCircus 株式会社), 中村晃一, 藤井裕也 (Idein 株式会社), 東中竜一郎 (名古屋大学), 杉山雅和, 西村良太 (徳島大学), 太田健吾 (阿南工業高等専門学校), 北岡教英 (豊橋技術科学大学)
 - 「Artificial Emotional Intelligence “Saya”」
- ・国際会議報告
 - ・SIGDIAL/INLG: 山崎天 (LINE ヤフー)
 - ・ICMI: 田中宏季 (NAIST)
 - ・INTERSPEECH: 北条伸克 (NTT)
 - ・EMNLP: 大橋厚元 (名古屋大学)
- ・表彰・閉会

言語学フェス 2024 [2024.1.20, オンライン]

・挨拶

・コアタイム A

- ・長峯貴幸 (ランカスター大学), 守本真帆 (上智大学/学振)
「U-DNR プロジェクト: 超音波を用いたダ行・ナ行・ラ行の発音研究」【プロジェクト・研究室紹介】
- ・地野みれい (筑波大学)
「中期アッシリア時代初期王碑文におけるアッシリア方言・バビロニア方言出現の特徴について」【プロジェクト・研究室紹介】
- ・松浦年男 (北星学園大学)
「取得済音声データを用いた長崎方言の音声実現の研究」【研究発表】
- ・中野陽子, 川畑舞華, 胡春霞, 山本菜々子 (関西学院大学)
「関西学院大学大学院言語コミュニケーション文化研究科 心理言語学研究室紹介」【プロジェクト・研究室紹介】
- ・佐近優太 (東京大学)
「言語研究者に求められている統計知識についてみんなで考えたい」【プロジェクト・研究室紹介】
- ・ちょこ先生 (ネーミングけんきゅうラジオ)
「アンパンマン」赤ちゃん総選挙—全キャラクターの簡易音素分析—【プロジェクト・研究室紹介】
- ・今西一太 (株式会社エス・アイ)
「言語学における在野研究のすすめ」【プロジェクト・研究室紹介】
- ・松岡葵 (九州大学人文科学府)
「福岡県柳川市方言における形式名詞 tu/to の世代差に関するお悩み相談」【研究発表】
- ・近藤悠介 (早稲田大学), 石井雄隆 (千葉大学)
「第二言語習得における統語的複雑性に関する指標をグラフ理論から考える」【研究発表】
- ・山崎俊 (上智大学)
「生成文法から観る懸垂分詞構文の主語」【研究発表】
- ・笠作記史
「タイ語の /pay/「行く」及び /maa/「来る」の文法化」【研究発表】
- ・中山璃子 (津田塾大学大学院)
「「だけ」と「られる」を伴う否定文における作用域について」【研究発表】
- ・井上彩里 (埼玉大学大学院)
「話し言葉コーパスから見られる「テイル」の音変化に関する研究—CSJ と CEJC を用いて—」【研究発表】
- ・武石琉花, 西帆外, 波田明香里, 鷺田皓平, 丸島歩 (北海学園大学)
「アイス類の商品名の音象徴的分析」【研究発表】
- ・谷口ジョイ (静岡理工科大学), 伊藤明倫 (静岡理工科大学), 岡川卓詩 (名古屋芸術大学)
「方言×アートプロジェクト「かわりゆくカタツムリ展」」【プロジェクト・研究室紹介】
- ・赤嶺奨 (Max Planck Institute for Psycholinguistics)
「どうして人は対話の中でお互いの語彙やジェスチャーを「真似」し合うのか?」【研究発表】
- ・宮崎哲雄 (国立障害者リハビリテーションセンター学院)
「言語障害の文脈でレーベンシュタイン距離が使えないか考えてみた」【研究発表】
- ・河本健汰 (東京大学大学院)
「ムード・モダリティの概念規定を整理する」【研究発表】
- ・松崎孝介 (東北大学)
「新しい動詞活用辞書 日本語 UniMorph の紹介」【研究発表】
- ・中川奈津子 (国立国語研究所)
「人文情報学における言語学からの広がり」【研究発表】

- ・成田智也 (大阪大学)
 - 「対応分析を用いた待遇レベルの推定：分割表の色々な眺め方」【研究発表】
- ・角谷昌範 (愛知教育大学附属岡崎小学校), 加藤恵梨 (愛知教育大学)
 - 「児童作文における学齢別の話の展開の仕方―「学校生活・学校行事」についての作文を資料として―」【研究発表】
- ・樫本拳斗 (京都大学大学院), 藤波恒輔 (京都外国語大学)
 - 「動詞 hit と break の語彙的意味再考―身体所有者上昇構文から―」【研究発表】
- ・上出大河 (國學院大学大学院)
 - 「植民地期台湾の作文資料に見える当為表現について」【研究発表】
- ・黒木邦彦 (神戸松蔭女子學院大學)
 - 「薩摩語資料：普段使いに堪える方言資料を目指して」【研究発表】
- ・リ カイキ (名古屋大学特別研究学生)
 - 「上昇下降調の使用率と年齢層の関連性」【研究発表】
- ・王知言, 宇都木昭 (名古屋大学)
 - 「外国語訛りに対する英語学習者の弁別能力調査：日本語を母語とする学習者を対象として」【研究発表】
- ・戸次大介 (お茶の水女子大学)
 - 「自然言語の文は可算無限個存在するか」【研究発表】
- ・小野瞳・井原駿 (津田塾大学)
 - 「トートロジーにおける評価的意味と譲歩性」【研究発表】
- ・コアタイム B
 - ・中谷健太郎 (甲南大学)
 - 「パソコンがあればできる！ことばの実験研究～よもやま雑談・質問・相談＋Konan PsychLing ラボ紹介！（& 院生募集）」【プロジェクト・研究室紹介】
 - ・中俣尚己 (大阪大学)
 - 「みんなで作る『文法コロケーションハンドブック E』」【プロジェクト・研究室紹介】
 - ・下地理則, 下地研究室メンバー (九州大学)
 - 「方言記述をはじめるには？九大下地ゼミの方言記述ガイド」【プロジェクト・研究室紹介】
 - ・湯浅千映子 (大阪観光大学) 菊地礼 (国立国語研究所) 松浦光 (横浜国立大学)
 - 「表現学のすすめ―『表現研究』掲載論文のタイトルの傾向について―」【プロジェクト・研究室紹介】
 - ・奥泉優真, 山下里香 (関東学院大学)
 - 「中国語でポケモン言えるかな？―ポケットモンスターの名前の日中翻訳―」【プロジェクト・研究室紹介】
 - ・江原遙 (東京学芸大学)
 - 「ヴィゴツキーと大規模言語モデル ～LLM の内言は何語か？～」【プロジェクト・研究室紹介】
 - ・林渚紗 (津田塾大学)
 - 「日中 2 言語間の word recognition の facilitation について」【研究発表】
 - ・五ノ井蘭 (津田塾大学)
 - 「日本語母語話者を対象とした「通じる」英語の発音教育」【研究発表】
 - ・田島弥生 (山陽小野田市立山口東京理科大学)
 - 「関係節文の処理に観察される CLI―眼球運動測定による探索的研究―」【研究発表】
 - ・谷口悠 (同志社大学)
 - 「話の肝はきもちわるい？蘇りの新語の例として」【研究発表】
 - ・福田夏美 (津田塾大学)
 - 「省略現象における不一致の限界について」【研究発表】
 - ・島涼友, 田端楽, 中岫未来, 松永莉奈 (神奈川県立厚木高等学校)
 - 「『よっこいしょ！』よりも力を発揮しやすい掛け声の検討」【研究発表】

- ・ 易星悦 (I Syouetu) (吉林大学)
 - 「コーパスに基づく形容詞「すごい」の副詞化研究」【研究発表】
- ・ 松浦大都 (江戸川学園取手高等学校)
 - 「日本語と英語における Curse Word の使い方の違い」【研究発表】
- ・ アレー サーレム (九州大学)
 - “Influence of syntactic/semantic violation on Japanese language processing utilizing tDCS and tACS”
【研究発表】
- ・ 中野亜莉沙 (フェリス女学院大学大学院生)
 - 「アイドルが発信するツイートに対するファンのリプライパターンの計量的言語行動学的考察—コロナ禍の影響を考慮して—」【研究発表】
- ・ 高橋ささら, 大平愛悠佳, 犬塚しおり, 小濱ひかる, 松本侑里 (フェリス女学院大学学生), 斎藤孝滋 (フェリス女学院大学)
 - 「濃い・良い・遠い・すごい・黒い・エモい」をめぐる形容詞活用体系のスタイル・シフティング—使用頻度による計量的言語行動学的考察—」【研究発表】
- ・ 浅原正幸 (国立国語研究所・総合研究大学院大学・東京外国語大学)
 - 「分布意味論について」【研究発表】
- ・ 堀合愛梨沙 (京都大学)
 - 「差別語の意味論」【研究発表】
- ・ 落合いずみ (帯広畜産大学)
 - 「アタヤル語群の「右」」【研究発表】
- ・ 安芝恩 (長崎外国語大学 (非常勤講師))
 - 「日本語学習者の振り返りに見られる異文化理解」【研究発表】
- ・ 尹熙洙 (総合研究大学院大学先端学術院 博士後期課程)
 - 「宮古語諸方言の音韻論的分析と学習者・非話者向け表記法の開発」【研究発表】
- ・ Ryan Tran
 - “From Proto-Japonic to Western Old Japanese”【研究発表】
- ・ 平川裕己 (神戸市外国語大学 [非])
 - 「戦術としてのレトリック」【研究発表】
- ・ 志村瑠莉 (東京都立大学)
 - 「日本語 NPI を用いた文の文法性の錯覚現象はどのような環境でどのようにして起こるのか？」【研究発表】
- ・ 磯野真之介 (東京大学)
 - 「文理解のモデルに埋め込める文法に向けて：統語上の型繰り上げの必要性」【研究発表】
- ・ 高橋翼 (東京外国語大学言語文化学部)
 - 「なぜインドネシア語は英語の動詞を -ing 付きで借用しているのか？」【研究発表】
- ・ 七条乙衣 (津田塾大学)
 - 「北海道方言ラサル構文は本当に動作主をもたないの？」【研究発表】
- ・ コアタイム C
 - ・ 伊藤美保 (藤田医科大学)
 - 「EPA 看護師が習得する日本語の特徴—国家試験合格後の記述データから—」【プロジェクト・研究室紹介】
 - ・ 太田真理 (九州大学)
 - 「言語学×脳科学で言語の謎に迫る！ 九大太田研究室の紹介」【プロジェクト・研究室紹介】
 - ・ 本田祐吾 (お茶の水女子大学附属小学校)
 - 「話しことばと書きことばをつなぐ —サークル対話と協同推敲でつくる小学校低学年のことばの学び—」【プロジェクト・研究室紹介】
 - ・ 仲原高矢
 - 「「学問」に関する動詞の記述～「科学する」と「哲学する」を例に～」【プロジェクト・研究室紹介】

- ・小林剛士 (東京外国語大学), 熊谷勇輝 (千葉大学), 佐藤和音 (なし)
「パズルで教える言語学—教育・普及活動における言語分析問題活用のすすめ」【プロジェクト・研究室紹介】
- ・阪上健夫, 岩崎凜太郎, 河本健汰, 陳港, 西川由佳, 朴校演, 平井偉在耶, 福田建, 小西いずみ (東京大学)
「日琉方言の準体形式調査票」【プロジェクト・研究室紹介】
- ・坂井美日 (鹿児島大学)
「鹿児島における方言コンテンツの取り組み」【プロジェクト・研究室紹介】
- ・日高晋介, ジャクシルクアクマタリエワ, 菱山湧人 (日本学術振興会/新潟大学)
「レシピのチュルク諸語—つまみ食い編—」【プロジェクト・研究室紹介】
- ・丸小野壮太 (常磐大学高等学校), 佐藤育子 (日本女子大学), 岩田和樹 (常磐大学高等学校)
「古代文字から考える「歴史総合」—高校生・高校教員・大学教員の共同研究—」【研究発表】
- ・久留須健一郎 (フィリピン大学ディリマン校)
「タガログ語子音連続の社会言語学」【研究発表】
- ・前澤大樹 (藤田医科大学), 横越梓 (名古屋工業大学)
「ナリはどこにあるナリか?: キャラ語尾と CP 構造」【研究発表】
- ・川畑舞華, 中野陽子 (関西学院大学大学院言語コミュニケーション文化研究科)
「英語の母音と子音における共感覚的な音と意味の繋がりに関する研究」【研究発表】
- ・飯田潤一
「現代韓国語ソウル方言の 11 子音モデル」【研究発表】
- ・森田大輝 (東京外国語大学言語文化学部中川研究室)
“The Neutralization of /ɔ:/ and /u:/ before the dark l in British English: A Case Study of Ed Sheeran’s Speech”【研究発表】
- ・東野ゆり子
「おばさんの表現に関する一考察 (トルコ語、ペルシア語より)」【研究発表】
- ・濱西祐之介 (東京大学)
「日本人英語学習者の英語フィラーギャップ文の処理方略」【研究発表】
- ・濱田七海 (九州大学)
「喜界島方言の上嘉鉄と中里の違い、どう説明したらいいんでしょう」【研究発表】
- ・田村早苗 (北星学園大学)
「限定・排他と逆接」【研究発表】
- ・林曉雯 (北京外国語大学日本語学院, 日本学研究センター)
「学習者コーパスから見る中国人日本語学習者の待遇表現の習得」【研究発表】
- ・吉井雄樹 (関西学院大学大学院)
「日本語教材における「何歳ですか」の練習問題を批判的に読む」【研究発表】
- ・宮川創 (国立国語研究所)
「『雷、全き叡智』、および、『この世の起源について』—コプト語に翻訳された古代末期グノーシス主義文献を言語学的に読む—」【研究発表】
- ・谷口雅弥 (理化学研究所)
「範疇文法の計算論的性質の解明」【研究発表】
- ・清水泰行 (大手前大学 (非常勤))
「「～を」の出現の理由: 「お返事をありがとうございます」という言い方」【研究発表】
- ・岩崎加奈絵 (日本学術振興会, 東京外国語大学 AA 研)
「ハワイ語における「上」向きの動きとはどんなものか?」【研究発表】
- ・林渚紗, 中山璃子, 七条乙衣, 小野創 (津田塾大学)
「日本語の主語は島ではない…と思う: 実験結果の報告」【研究発表】

- ・ 福田純也 (中央大学), 木村崇是 (宇都宮大学)
 - 「第二言語習得研究のすゝめ：あなたも今日から L2 研究者！」【プロジェクト・研究室紹介】
- ・ 中村明裕
 - 「語源豆知識をつぶしてずんだ餅にするのだ！」【研究発表】
- ・ 梶川康平 (東京大学), 窪田悠介 (国立国語研究所), 大関洋平 (東京大学)
 - 「統語変換は文化進化から生じるのか？：等位接続構造での検討」【研究発表】
- ・ 村瀬瑠々, 堀内葉月, 藤田愛, 住森乙香, 松本侑里, 野村伊路, 犬塚しおり (フェリス女学院大学学生), 斎藤孝滋 (フェリス女学院大学)
 - 「「無声 C + 狭 V + 無声 C + 非狭 V」構造の 2 拍発話における母音無声化類型—無声 C の種類・形態素の切れ目の有無・アクセント・発話速度の視点による計量的類型化—」【研究発表】
- ・ 川月現大 (有限会社風工舎)
 - 「語義の構造——ブランチ分けをめぐる諸問題について」【研究発表】
- ・ ブース
 - ・ くろしお出版
 - ・ 三省堂
 - ・ 大阪大学出版会
 - ・ ひつじ書房
 - ・ 中谷裕子 (イラスト作成)

第 8 回学習者コーパス・ワークショップ & シンポジウム「学習者コーパスに観る複雑さの発達」

[2024.2.3, オンライン]

- ・ ワークショップ (2 コース同時開催)
 - ・ 初心者コース
 - 担当：細井陽子, 須賀和香子 (定員 30 名)
 - 対象者：
 - ・ I-JAS というコーパスについてよく知らない方
 - ・ I-JAS 中納言 (検索システム) の基本的な使い方を学びたい方
 - 概要：

多言語母語の日本語学習者横断コーパス (I-JAS) について、基礎から学び、I-JAS 中納言 (検索システム) を使って、簡単な検索をおこなってみます。
 - ・ 既習者コース
 - 担当：佐々木藍子 (定員 15 名)
 - 対象者 (下記二つの条件を満たす方)：
 - ・ 国語研主催の I-JAS の初心者向けワークショップや講習を受講され、形態素解析について基本的な知識をお持ちの方
 - ・ すでに I-JAS 中納言を使用したことがあり、使い方についてさらに深く学びたい方
 - 概要：
 - ・ 多言語母語の日本語学習者横断コーパス (I-JAS) の仕様を踏まえ、中納言を使ってより高度で実践的な検索をおこないます。
 - ・ ご自身の研究に関する検索方法について、グループや講師とのディスカッションを通し、適切な使い方について考えます。
 - 既習者コースは少人数制で、グループでのディスカッションをおこないますので、カメラをオンにして参加していただきます。
- ・ シンポジウム
 - ・ 開会挨拶

・問題提起

- 倉品さやか (国際大学), 細井陽子 (山野日本語学校), リード真澄 (上智大学), 迫田久美子 (国立国語研究所/広島大学)

「学習者の日本語習得における複雑さの捉え方」

・招待講演 1

- 稲葉みどり (愛知教育大学名誉教授)

「第一言語の物語文の分析：ことばと談話の複雑さの発達に着目して」

・招待講演 2

- 齋藤ひろみ (東京学芸大学) 工藤聖子 (東京学芸大学/文教大学)

「第二言語として日本語を学ぶ子どもたちの作文力の発達：文の複雑さ・論述の多様性に着目して」

・招待発表 1

- 韓曉 (中国・東南大学), 費曉東 (中国・北京外国語大学), 馬悦 (中国・東南大学大学院学生)

「中国人日本語学習者の作文の統語的複雑さに関する考察：日本語学習者縦断コーパス (B-JAS) の分析に基づいて」

・招待発表 2

- 李文平 (中国・上海財経大学)

「日本語学習者言語の統語的複雑度に関する研究：日本語学習者コーパス (I-JAS) 作文資料の場合」

・全体討議

ファシリテーター：迫田久美子 (国立国語研究所/広島大学)

・閉会挨拶

「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」シンポジウム「日本社会におけるダイバーシティ研究の最前線：インクルーシブな社会の実現を目指して」 [2024.2.10, 国立国語研究所講堂]

・開会の辞

- ・平本美恵 (国立シンガポール大学准教授)

“Intersecting perspectives: Reflections on language, gender and sexuality studies from Japan”

- ・栗田季佳 (三重大学准教授)

「偏見・差別を研究する心理学からそれと向き合う心理学へ～心理学のパラダイム転換～」

・ポスター発表

- 阿部春香 (筑波大学大学院学生), スペイン・ドリュウ (筑波大学大学院学生)

「親子間会話における一人称としての「お母さん」「ママ」の使用—不満を示す場面に着目して—」

- 深石葉子 (立命館大学)

「JSL 環境下における日本語作文力・英語作文力の伸びに関する兄弟比較」

- 澁谷こはる (東京女子大学大学院学生)

「複言語・複文化環境で育つ子どものアイデンティティ—ムスリム家庭のきょうだいへの調査から—」

- 木田千裕 (名古屋大学), 石井敬子 (名古屋大学)

「「障害」観に基づくメンタルモデルが障害者支援策に及ぼす影響」

- 謝昀叡 (北海道大学)

「中国語接触場面における学習者の聞き返しに関する一考察—対面場面と遠隔場面を比較して—」

- 宮本敬太 (立命館大学), 中井好男 (大阪大学), 瀬井陽子 (大阪大学)

「「多文化共生」はいかに消費されているのか—その登場と歴史的経緯から考える」

- ・木山幸子 (東北大学准教授)

「感情言語の発達と個人差：神経科学実験からの示唆」

- ・坂井田溜衣 (公立はこだて未来大学准教授)

「身体の非対称性を乗り越える資源としてのマルチモダリティ：視覚障害者/盲ろう者と晴眼者の相互行為から」

- ・山本登志哉（(一財) 発達支援研究所所長）
「ディスコミュニケーションの心理学：ズレながら生きる私たちを考える」
- ・全体討論
- ・閉会の辞

第30回多文化交流フォーラム [2024.2.15, オンライン]

- ・石黒圭（国立国語研究所教授/一橋大学大学院言語社会研究科連携教授）
「学習者コーパスの構築と活用」

ヴァーバル・ノンヴァーバル・コミュニケーション研究会/音声研究会

[2024.2.16, 国立国語研究所多目的室・オンライン（ハイブリッド）]

- ・口頭発表1
 - ・大木仁史
「双子幼児の会話の沈黙である間（ま）はワイブル分布に適合し、手首、足首の動作（移動距離、速度、加速度）も間（ま）に関係する」
 - ・彦山華（九州大学）、横森大輔（京都大学）
「オンラインビデオ会話における話者性の交渉に視線配布が果たす役割」
 - ・菊池浩史、楊潔、菊池英明（早稲田大学）
「音声対話システムの応答音声に対するユーザの許容評価モデル」
- ・口頭発表2
 - ・松田匠翔、有本泰子（千葉工業大学）
「wav2vec 2.0 を用いた笑い声・叫び声検出が可能な音声認識」
 - ・飯田真広、有本泰子（千葉工業大学）
「共起笑いの音響分析と生理反応への影響」
- ・招待講演
 - ・井上昂治（京都大学）
「音声対話の魅力：相槌・笑い・ターンテイキング」
- ・総合討論

「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」共同研究発表会 [2024.2.17, オンライン]

- ・開会の辞
- ・研究発表
 - ・前田忠彦（情報・システム研究機構 データサイエンス共同利用基盤施設/統計数理研究所）
「新型コロナウイルス感染症関連用語の社会的受容度に関する繰り返し調査の分析」
 - ・久屋愛実（立命館大学）
「大規模実時間データと外来語」
 - ・鎌水兼貴（国立国語研究所）
「新型コロナ関連用語の使用意識—全国 WEB 調査結果分析—」
- ・閉会の辞

空間接続プロジェクト公開研究発表会 [2024.2.22, 国立国語研究所多目的室・オンライン（ハイブリッド）]

- ・鴨井修平（学振 PD）
「日本語における持続体系の変種と地理的分布」
- ・張盛開（静岡大学）
「中国における外来植物南瓜の分布について」
- ・鎌水兼貴（国立国語研究所）
「WEB 調査を利用した東京都の言語地図」

- ・沈力（同志社大学）
「交流度を用いて入声消失の行方が追いかけられるのか—中国の汾河流域の方言データを中心に—」
- ・総合討論

「学習者辞書用語彙資源の構築」共同研究発表会 [2024.2.27, オンライン]

- ・柏野和佳子（国立国語研究所）
はじめに
- ・三好優花，武中清香（一橋大学大学院学生）
研究成果報告
- ・柏野和佳子，平本智弥（国立国語研究所）
「IPAL PowerBI レポートの公開と活用」
- ・松下達彦（国立国語研究所），浅野萌花（明治大学大学院学生），ABUELLIL Nora（早稲田大学大学院学生），新井智大（明治大学大学院学生），岩下智彦（電気通信大学大学院学生）
「『現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）』の『分類語彙表（WLSP）』用法別頻度リストの可能性」
- ・招待講演
青山文啓（桜美林大学）
「結合価から見た句のさまざま」
- ・質疑応答・全体討論

ことば・認知・インタラクション 12 [2024.2.28, 国立国語研究所講堂]

- ・開会挨拶
- ・講演 1
・居關友里子（国立国語研究所）
「子どものごっこ遊びにおける設定共有の試み」
- ・招待講演
・伊藤崇（北海道大学）
「子どもと家族による会話エージェントへの接近方法：ビデオ映像の観察データから」
- ・講演 2
・遠藤智子（東京大学）
「家庭内相互行為における親と年長の子どもの協働」
- ・講演 3
・安井永子（名古屋大学）
「身体的活動の教示における文法と身体：身体を使った実演にともなう発話の分析から」
- ・総合討論

「国内の観光エフェメラ資料の包括的アーカイブに向けた基盤構築および実証研究」研究発表会

[2024.2.28, 東京工業大学大岡山キャンパス]

- ・エフェメラ資料のアーカイブに関する海外視察報告
- ・観光エフェメラ資料のデータベース作成に関する報告
- ・次年度の研究計画について

人工知能学会言語・音声理解と対話処理研究会（SLUD）第 100 回研究会 [2024.2.29–3.1, 国立国語研究所講堂]

2024 年 2 月 29 日

- ・開会挨拶

- 口頭発表 1
 - 吉田司 (NTT), 新堀和紀 (NTT/明治大学), 深山篤 (NTT)
「モンテカルロ木探索を用いた個人性のある画像キャプション生成」
 - 山本賢太, 駒谷和範 (大阪大学)
「大規模言語モデルにより性格特性を反映させた発話生成の評価」
 - 袁培傑, 大野正樹, 橋本泰一 (RevComm Research)
“ChatGPT Summarization: A Deep Dive into In-Context Learning Efficacy”
 - 岩橋直人, 寺尾光一郎 (岡山県立大学)
「コレクティブ LLM ダイナミクスの数理分析」
- 招待講演
 - 飯田仁 (東京工科大学名誉教授・SLUD 初代主査)
「これからもまだ続く“対話の道”～SLUD 発足の周辺と SLUD 今後への期待～」
- ポスターセッション
 - 熊野史朗 (NTT)
「個人の主観評価の不確実性や反応バイアスへの対処法」
 - 岩立直也, 有本泰子 (千葉工業大学)
「次話者指定の有無を区別する TRP を利用した 3 人会話場面の話者交替予測モデル」
 - 川端良子 (国立国語研究所), 中野幹生 (C4A 研究所)
「日常会話の中のシーンの移行に関する調査」
 - 木守翔子, 岡本雅史 (立命館大学)
「ラジオパーソナリティのエピソードトークに出現する非流暢性要素の特徴—パーソナリティ歴との関連性に着目して—」
 - 保土沢朋和, 村井源 (公立はこだて未来大学)
「キャラクター性に基づく発話をするチャットボットのためのキャラクターらしさを醸し出す文体的特徴と意図の抽出」
 - 森下空, 堀内靖雄 (千葉大学), 原大介 (豊田工業大学), 黒岩眞吾 (千葉大学)
「日本手話における手の直線運動の音素の斜め方向に関する分析」
 - 田中弥生, 小磯花絵 (国立国語研究所)
「親子の食事場面での話題内容と脱文脈度」
 - 加藤恵梨 (愛知教育大学)
「感動詞「あのね」の分析—『日本語日常会話コーパス』を用いて—」
 - 寺尾光一郎, 岩橋直人 (岡山県立大学)
「コレクティブ LLMs のマイクロマクロリンクの多様性」
 - 藤田華奈, 坂井田瑠衣 (公立はこだて未来大学)
「Twitter における印象管理の分析: アカウントを使い分ける絵描きを対象として」
 - 澤田菜乃, 坂井田瑠衣 (公立はこだて未来大学)
「気まずい沈黙に対処する方法の相互行為分析」
 - 牧野遼作 (早稲田大学), 菊地浩平 (筑波技術大学), 堀内隆仁 (慶應義塾大学)
「tracrin2.0: 会話データの視覚表現の整形支援手法の検討」
 - 山本敦, 牧野遼作 (早稲田大学)
「“コミュニケーション障害”は相互行為の分析によって理解できるか? —非典型者をとらえる視点の整理」
 - 白田泰如 (静岡理工科大学)
「日常会話における「嫌なこと」の語りにおける笑い話の導入手続き」
 - 畠山陽喜, 森脇恵太, 酒造正樹, 前田英作 (東京電機大学)
「Prompt-tuning による Hallucination の事後修正」

- ・永沼翔翼, 石垣龍馬, 酒造正樹, 前田英作 (東京電機大学)
 - 「推薦システムにおける大規模言語モデルを用いたユーザプロフィール拡張」
- ・高山春花 (東京大学/国立国語研究所)
 - 「家庭内会話における幼児のスピーチスタイルのアップシフト」
- ・口頭発表 2
 - ・秦大地 (拓殖大学)
 - 「アイロニーの意図モデル: 誰にどのように思わせようとしているのか」
 - ・梁勝奎 (名古屋大学), 岸本健太 (関西学院大学)
 - 「感謝表現と謝罪表現の併用事例の会話分析—「すみません」と「ごめんなさい」の使い分け—」
 - ・余佳琳 (千葉大学)
 - 「電子メディアの介在での対面コミュニケーション: 視線による相互行為から」
- ・口頭発表 3
 - ・細馬宏通 (早稲田大学)
 - 「相互行為におけるダイナミックタッチによる重さの表出」
 - ・酒井晴香 (東京国際大学)
 - 「対面のアパレル接客場面における「お見送り」を通じた別れの先延ばし」
 - ・鈴木佳奈, 西村太志 (広島国際大学)
 - 「夫婦は自分たちの対話様態をどう相互評価しているか—夫婦ペアデータの探索的分析の試み—」
 - ・高梨克也 (滋賀県立大学)
 - 「スーパーバイザーによる仮説形成的聞き取りの構造: 古典的 AI の遺産を踏まえつつ」

2024 年 3 月 1 日

- ・口頭発表 4
 - ・前田雄之介, 岡田将吾 (北陸先端科学技術大学院大学), 井之上直也 (北陸先端科学技術大学院大学/理化学研究所)
 - 「就職面接訓練において PREP 話法が面接評価に与える影響の分析」
 - ・丁福建, 中谷桃子 (東京工業大学)
 - 「高齢者向けサービスデザインのためのインタラクティブなユーザ情報収集法」
 - ・水上悦雄 (情報通信研究機構)
 - 「多言語音声認識評価データセット SPREDS シリーズ」
 - ・劉礫岩 (情報通信研究機構)
 - 「会話における話題派生的な行為連鎖に関する研究」
- ・口頭発表 5
 - ・又村拓也, 榎本美香 (東京工科大学)
 - 「連鎖終端位置における同時開始発話について」
 - ・森大河 (産業技術総合研究所/千葉大学), 伝康晴 (千葉大学), Jokinen Kristiina (産業技術総合研究所)
 - 「相槌生成の認知的モデル」
 - ・池田恵悟, 伝康晴 (千葉大学)
 - 「自動車運転時に運転手と助手席乗員間で生じる視線同調の事例分析」
- ・パネルディスカッション
 - ・SLUD100 パネルディスカッション「SLUD のこれから」
 - パネリスト:
 - 伝康晴 (千葉大学), 徳久良子 (豊田中央研究所/東北大学), 東中竜一郎 (名古屋大学), 田頭未希 (東海大学), 井上昂治 (京都大学), 坂井田瑠衣 (公立はこだて未来大学)

• 口頭発表 6

- 佐藤友紀 (名古屋大学), 千葉祐弥 (NTT), 東中竜一郎 (名古屋大学)
「複数の日本語データセットによる音声活動予測モデルの学習とその評価」
- 橋本慧海, 中野幹生, 櫻井崇貴, 白松俊 (名古屋工業大学), 駒崎俊剛 (東京医療保健大学), 土屋志保 (北里大学病院)
「看護師のキャリア面談のための LLM を用いたスロット生成型対話システム」
- 長澤史記, 岡田将吾 (北陸先端科学技術大学院大学)
「発話意欲推定に基づく適応的対話戦略を備えたインタビューロボット対話システム」
- 武田海人, 松吉俊, 兼松祥央, 三上浩司 (東京工科大学)
「ニューラル応答生成を併用した TRPG ゲームマスター AI」

• 口頭発表 7

- 大木仁史 (フリー)
「双子男児の会話を区間グラフを用いて固有値の変化と関係を探る」
- 神原一帆 (立命館大学), 野澤元, 高橋武志 (京都外国語大学)
「意味フレームの同定に利用可能な参加者の意味特徴の比較: 動詞 replace をもちいた予備調査」

• 閉会挨拶

「述語の意味と文法」および「状態変化の言語表現」合同研究会 I [2024.3.8, オンライン]

- 趣旨説明
- 松本曜, 氏家啓吾 (国立国語研究所)
「日本語の状態変化表現」
- 山本恭裕 (東京外国語大学)
「イロカノ語の状態変化表現」

「述語の意味と文法」および「状態変化の言語表現」合同研究会 II [2024.3.9, オンライン]

- 趣旨説明
- 石塚政行 (東京農工大学)
「バスク語の状態変化表現」

「通時コーパス」シンポジウム 2024 [2024.3.10, 国立国語研究所多目的室・オンライン (ハイブリッド)]

• 口頭発表セッション 1

- 小木曾智信 (国立国語研究所)
「『日本語歴史コーパス』 ver.2024.3: 通時コーパス拡張進捗報告」
- 鴻野知暁 (大阪大学)
「『昭和・平成書き言葉コーパス』から見る「へ」から「ニ」への推移」
- 鴻野知暁 (立命館大学)
「明治期から平成期にかけての外来語における [ei] の表記」
- インタラクティブセッション: 全体向け小発表 6 件 + ブレイクアウトルーム討論
 - 伊藤孝行, 山下倫央 (北海道大学)
「日本語学×情報学による文理協働型研究体制の試みーテキストマイニングによる『帝国議会衆議院秘密会議事速記録集』を対象とした近代日本語史の分析」
 - ヤロシュ島田むつみ, 竹内綾乃 (国立国語研究所)
「ハワイ日本語教科書第 1 期コーパスの構築と公開」
 - 近藤明日子 (東京大学)
「明治前期口語体実用文データセットの構築 (中間報告)」
 - 高橋雄太 (明治大学)
「『キング』コーパスの構築と拡張」

- ・小野春菜 (国立国語研究所)
『『日本語歴史コーパス』を使用した大正時代の日本語の考証』
- ・片山久留美 (国立国語研究所)
「近世読本における複線表記のバリエーション」
- ・口頭発表セッション 2
 - ・北崎勇帆 (大阪大学)
「副詞的に機能するコピュラ文—「～はさらなり」「～はおろか(なり)」—」
 - ・近藤泰弘 (青山学院大学名誉教授)
『『百人一首』の歌風は何か？—ベクトル分析による研究—』

「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」共同研究発表会 [2024.3.17, オンライン]

- ・開会の辞
- ・研究発表
 - ・那須昭夫 (筑波大学)
「首都圏外地域の共通語におけるアクセントの逸脱に関する調査報告 (仮)」
 - ・邊姫京 (国際教養大学)
「共通語と地元語の判定に母音の無声化は有効か—東北・関東・近畿の比較—」
- ・閉会の辞

シンポジウム「日常会話コーパス」IX [2024.3.18, オンライン]

- ・開会挨拶
- ・口頭発表 1
 - ・小磯花絵 (国立国語研究所)
『『子ども版日本語日常会話コーパス』モニター版の公開に向けて』
- ・口頭発表 2
 - ・藤江真也 (千葉工業大学)
「非流暢性現象を含む音声認識手法の日常会話コーパスにおける評価」
- ・ポスターセッション A
 - ・杉浦秀行 (同志社大学)
「共有可能な対象に受け手の注意を向ける相互行為マーカーとしての「ほら」」
 - ・関口卓也 (理化学研究所), 杉本光 (日本学術振興会, 理化学研究所), 徳永清輝 (理化学研究所), 大武美保子 (理化学研究所)
「高齢者のグループ会話における時間的志向と記憶機能との関連」
 - ・王煜妍, 伝康晴 (同志社大学)
「OPI におけるフィラーの分布—日本語学習者の属性に注目して—」
 - ・井上雅史 (東北工業大学)
「日常会話コーパスを種としたプロンプトエンジニアリングによる発話例作成」
 - ・入江さやか (岐阜女子大学)
「一人称と音変化の関係」
 - ・中馬隼人 (中部大学)
「相互行為における潜在的なトラブルへの対処:「って言っても」を用いた発話要素の意味調整」
 - ・柏野和佳子 (国立国語研究所)
「「要するに」は何を要しているか—CEJC を用いて—」
- ・ポスターセッション B
 - ・黒嶋智美 (玉川大学)
「ことばを介さないニーズの提示に対する援助の提供」

- ・白楊, 伝康晴 (千葉大学)
 - 「応答の発話順番で使われる同意系副詞表現」
- ・岸本健太 (株式会社 ICHINOYA)
 - 「贈り物に対する応答とその合理性: 受領タイミングと「ありがとう」「うれしい」の比較」
- ・宮澤幸希, 佐藤可直 (フェアリーデバイセス株式会社)
 - 「円滑で自然な音声対話システムを開発するための日本語日常会話コーパスの活用」
- ・岡田祥平 (新潟大学)
 - 「〈ぎあます言葉〉小考—使用実態と表象をめぐって—」
- ・宮城信 (富山大学)
 - 「子どもの話し合い過程の分析—発話の受け継ぎと変更—」
- ・川端良子 (国立国語研究所), 中野幹生 (株式会社 C4A 研究所)
 - 「日常会話の中のシーンの移行について」
- ・ポスターセッション C
 - ・丸山直子 (東京女子大学)
 - 「話し言葉の副助詞・係助詞—CSJ, CEJC, CEJC-child を用いて—」
 - ・大野剛 (アルバータ大学), 鈴木亮子 (慶應義塾大学)
 - 「日常会話コーパスに見られる「ちょちょっと」」
 - ・千田真緒, 伝康晴 (千葉大学)
 - 「話題管理としてのスマホいじり」
 - ・陳力 (神田外語大学), 横森大輔 (京都大学)
 - 「日常会話における「と文末」による理解提示」
 - ・石本祐一 (ものづくり大学)
 - 「会話場面による日常会話音声の韻律の違い」
 - ・居關友里子, 田中真理子 (国立国語研究所)
 - 「幼児とのやり取りに対する談話行為タグ付与の試み」
 - ・秦かおり (大阪大学)
 - 「会話場面における相互行為マーカーとしての非言語行動の機能について」
- ・ポスターセッション D
 - ・高木智世 (筑波大学)
 - 「ターン移行空間において継ぎ足される「なんか」」
 - ・有本泰子, 神津宏尚 (千葉工業大学)
 - 「日常会話コーパスを利用した speech-laugh の冒頭音素の対話ドメイン比較」
 - ・大野剛 (アルバータ大学), 鈴木亮子 (慶應義塾大学), 白田泰如 (静岡理科大学)
 - 「会話で節はどのようにつながっているか？」
 - ・徐煉 (国立国語研究所)
 - 「発話意図の把握が議論の深まりに与える影響—留学生の発表後のディスカッションを対象として—」
 - ・森大河, 伝康晴 (千葉大学)
 - 「日常会話における聞き手の驚きの表出—「えっ」と「えー」の違いに注目して—」
 - ・田中弥生, 居關友里子, 田中真理子, 小磯花絵 (国立国語研究所)
 - 「幼稚園における教諭主導の相談会話: 脱文脈度の観点からの分析」
 - ・天谷晴香 (神奈川工科大学)
 - 「日常会話におけるレシピ・テリング」
- ・口頭発表 3
 - ・南部智史 (モナッシュ大学)
 - 「日常会話コーパスを利用した言葉の変異と変化研究」

- ・口頭発表 4
 - ・石川創 (駒沢女子大学)
 - 『子ども版日本語日常会話コーパス』にみる「そう」系あいづちの獲得について
- ・閉会挨拶

百科事典の意味論研究発表会 [2024.3.25, 国立国語研究所多目的室・オンライン (ハイブリッド)]

- ・松本曜 (国立国語研究所, 総合研究大学院大学)
 - 「日本語語彙の複合動詞で表現される複合事象と、表現されない複合事象」
- ・舩山洋介 (南山大学)
 - 「百科事典の意味観の系譜：日本における研究を中心に」

「学術知デジタルライブラリの構築 (国語研拠点)」研究集会 [2024.3.26, オンライン]

- ・寺沢憲吾 (公立はこだて未来大学)
 - 「波照間方言語彙に対する機械学習を用いた文字認識に関する予備的実験結果の報告 (仮)」
- ・小川潤 (ROIS-DS 人文学オープンデータ共同利用センター)
 - 「IIIF のキュレーションと接続：画像のアノテーションと RDF データの構築 (仮)」
- ・研究打合せ

(4) NINJAL コロキウム

日本語学・言語学・日本語教育の様々な分野における最先端の研究をテーマとした国内外の優れた研究者による講演会を NINJAL コロキウムとしておこなっている。原則として月 1 回、国立国語研究所にて開催し、研究者・大学院学生のみならず、一般にも公開している。2023 年度は、総合研究大学院大学日本語言語科学特別講義として開催したものも含め、オンラインまたはオンライン併用 (ハイブリッド) 形式で 10 回開催した。

- ・第 133 回 (2023 年 6 月 6 日)
 - ・Spencer D. Kelly (米国・コルゲート大学 教授)
 - “Iconicity: When Form Carries Meaning in Language”
 - (オンライン開催, 使用言語: 英語)
- ・第 134 回 (2023 年 9 月 5 日)
 - ・Daniil M. Ozernyi (米国・ノースウェスタン大学)
 - “Remarks on Several Fundamental Issues in Second and Third Language Acquisition Research”
 - (ハイブリッド開催, 使用言語: 英語)
- ・第 135 回 (2022 年 9 月 12 日)
 - ・笹原宏之 (早稲田大学 教授)
 - 「漢字で表記される日本の人名の読み方に関する諸問題」
 - (ハイブリッド開催)
- ・第 136 回 (2023 年 9 月 19 日)
 - ・松本裕治 (理化学研究所革新知能統合研究センター)
 - 「文書からの情報抽出：科学技術論文を対象に」
 - (総合研究大学院大学日本語言語科学特別講義, ハイブリッド開催)
- ・第 137 回 (2023 年 10 月 3 日)
 - ・Maria Koptjevskaja-Tamm (Professor, Stockholm University (Sweden))
 - “Lexical Typology and Cognitive Semantics: Extended Uses of Temperature Terms”
 - (ハイブリッド開催, 使用言語: 英語)

- 第 138 回 (2023 年 10 月 24 日)
 - 平本美恵 (シンガポール国立大学 准教授)
 - 「言語と人種の観点からみた「やさしい日本語」の事例研究」
 - (オンライン開催, 使用言語: 英語)
- 第 139 回 (2023 年 11 月 28 日)
 - 金水敏 (放送大学大阪学習センター所長, 大阪大学名誉教授)
 - 「共感 (empathy) と “キャラクター”、そして文法」
 - (総合研究大学院大学日本語言語科学特別講義, ハイブリッド開催)
- 第 140 回 (2024 年 2 月 6 日)
 - 塩田雄大 (NHK 放送文化研究所 主任研究員)
 - 「複数の言語調査の結果を組み合わせることで、〔何か/何が〕わかるのか?」
 - (ハイブリッド開催)
- 第 141 回 (2024 年 2 月 20 日)
 - 小柳かおる (上智大学言語教育研究センター 教授)
 - 「言語学習のメカニズム—第二言語習得における記憶の役割—」
 - (総合研究大学院大学日本語言語科学特別講義, ハイブリッド開催)
- 第 142 回 (2024 年 3 月 5 日)
 - 木村護郎クリストフ (上智大学 教授)
 - 「「やさしいことば」の日独比較—言語管理過程の観点から」
 - (ハイブリッド開催)

(5) NINJAL サロン

国立国語研究所の研究者（共同研究員を含む）を中心として、おのおのの研究内容を紹介することによって情報交換をおこなう場である。原則として、火曜日の 15 時 10 分から 16 時 10 分に開催する。一部を除き、外部からの聴講も歓迎している。2023 年度は、第 247 回から第 268 回まで、22 回（うち、所内限定としたものは 8 回）開催した。

- 第 247 回 (2023 年 4 月 4 日)
 - 横山詔一 (国立国語研究所 教授), 相澤正夫 (国立国語研究所 名誉教授), 田中牧郎 (明治大学 教授), 久野雅樹 (電気通信大学 教授), 田中祐輔 (青山学院大学 准教授)
 - 「新型コロナ関連用語の受容度に関するシンプルな統計モデリング」
 - (オンライン開催, 申込者限定の録画配信あり)
- 第 248 回 (2023 年 4 月 25 日)
 - 浅原正幸 (国立国語研究所 教授), 加藤祥 (目白大学 専任講師), 高松純子 (日本経済新聞社)
 - 「『日本経済新聞記事オープンコーパス』に対する言語受容情報収集」
 - (対面とオンラインのハイブリッド開催, 申込者限定の録画配信あり)
- 第 249 回 (2023 年 5 月 23 日)
 - 井戸美里 (国立国語研究所 特任助教)
 - 「いわゆる慣習的含意の整理と再構築に向けて」
 - (対面とオンラインのハイブリッド開催, 申込者限定の録画配信あり)
- 第 250 回 (2023 年 6 月 20 日)
 - 諸隈夕子 (国立国語研究所 プロジェクト非常勤研究員)
 - 「アヤクーチョ・ケチュア語の体言化をめぐる課題」
 - (対面とオンラインのハイブリッド開催, 申込者限定の録画配信あり)

- 第 251 回 (2023 年 6 月 27 日)
 - ・ Le Thi Thu Ha (国立国語研究所 技術補佐員)

「認知的な側面から見たベトナム語を母語とする日本語学習者による条件表現の習得過程に関する一考察—CoLeJa コーパスのデータの分析から—」

(対面とオンラインのハイブリッド開催, 申込者限定の録画配信あり)
- 第 252 回 (2023 年 7 月 4 日)
 - ・ 今井てるみ (国立国語研究所 プロジェクト非常勤研究員)

「東京方言の母音の無声化—20 年後の経年調査の結果報告」

(対面とオンラインのハイブリッド開催, 申込者限定の録画配信あり)
- 第 253 回 (2023 年 7 月 11 日)
 - ・ 本多由美子 (国立国語研究所 特任助教)

「「二字漢語の意味的透明性」の日本語教育への応用—二字漢語の意味の理解と推測に向けたアプローチ」

(対面とオンラインのハイブリッド開催, 申込者限定の録画配信あり)
- 第 254 回 (2023 年 7 月 25 日)
 - ・ 鴨井修平 (日本学術振興会特別研究員 (PD, 国立国語研究所))

「日本語諸方言の持続形式における文法化の分岐点」

(対面とオンラインのハイブリッド開催, 申込者限定の録画配信あり)
- 第 255 回 (2023 年 7 月 25 日)
 - ・ ヴァシニェフスキ・グジェゴシ (国立国語研究所 外来研究員)

「日本語に於ける「漢字と単語の語彙場」—あたらしい概念の定義試み」

(対面とオンラインのハイブリッド開催, 申込者限定の録画配信あり, 16:20–17:20)
- 第 256 回 (2023 年 9 月 26 日)
 - ・ 朝日祥之 (国立国語研究所 教授), 鎌水兼貴 (国立国語研究所 プロジェクト非常勤研究員)

「言語問題プロジェクトによる社会調査型言語研究の実践」

(所内限定公開)
- 第 257 回 (2023 年 10 月 17 日)
 - ・ 松本曜 (国立国語研究所 教授), 氏家啓吾 (国立国語研究所 プロジェクト非常勤研究員)

「比較の基準を表すカラ格の性質と起源: 「昨日から 2 人少ない 1009 人」という言い方は、2020 年から増えたのか。」

(対面とオンラインのハイブリッド開催, 申込者限定の録画配信あり)
- 第 258 回 (2023 年 11 月 7 日)
 - ・ セリック・ケナン (国立国語研究所 特任助教)

「鳩間方言の韻律体系の見直し: アクセント型の対立数などを巡って」

(対面とオンラインのハイブリッド開催, 申込者限定の録画配信あり)
- 第 259 回 (2023 年 11 月 14 日)
 - ・ 梶川康平 (東京大学 修士課程)

“Analyzing Japanese Cleft Construction in Combinatory Categorical Grammar”
 - ・ 林則序 (東京大学 博士後期課程)

“Additivity in Attention Semantics”

(所内限定公開, 学会形式による英語での発表)
- 第 260 回 (2023 年 11 月 21 日)
 - ・ 川端良子 (国立国語研究所 特任助教)

“Spatial Information Annotation Based on the Double Cross Model”
 - ・ 陳柏丞 (総合研究大学院大学 博士後期課程)

“Word Familiarity Rate Estimation for Japanese Functional Words Using a Bayesian Linear Mixed Model”

(所内限定公開, 学会形式による英語での発表)

- 第 261 回 (2023 年 12 月 12 日)
 - 坂本薫 (国立国語研究所 プロジェクト非常勤研究員)

「高年層における「伝統的」アクセントの実態：中輪東京式アクセント地域における調査結果から」
(所内限定公開)
- 第 262 回 (2023 年 12 月 19 日)
 - 窪田悠介 (国立国語研究所 准教授)

「シロウトでもできる web インターフェース開発：GrammarXiv プロジェクトにおける Streamlit 活用例」
(所内限定公開)
- 第 263 回 (2023 年 12 月 26 日)
 - 柳原恵津子 (国立国語研究所 プロジェクト非常勤研究員)

「『金光明最勝王経』平安初期点における助辞の訓法の再検討 (続)」
(所内限定公開)
- 第 264 回 (2024 年 1 月 9 日)
 - 浅原正幸 (国立国語研究所 教授)

「容認性判断について」
(所内限定公開)
- 第 265 回 (2024 年 1 月 16 日)
 - 梶川康平 (東京大学 大学院総合文化研究科), 窪田悠介 (国立国語研究所 准教授), 大関洋平 (東京大学 講師, 理化学研究所 客員研究員)

「統語変換はコミュニケーションから創発するのか？」
(対面とオンラインのハイブリッド開催, 申込者限定の録画配信あり)
- 第 266 回 (2024 年 1 月 23 日)
 - セリック・ケナン (国立国語研究所 特任助教)

「調査速報：八重山語竹富方言の三型アクセント体系」
(対面とオンラインのハイブリッド開催, 申込者限定の録画配信あり)
- 第 267 回 (2024 年 2 月 27 日)
 - 松本美香子 (国立国語研究所 プロジェクト非常勤研究員)

「『日本語教育』掲載論文における識字研究の動向分析」
(所内限定公開)
- 第 268 回 (2024 年 3 月 26 日)
 - 宮川創 (国立国語研究所 助教)

「国立国語研究所デジタルアーカイブ NINDA：デジタルヒューマニティーズとオープンサイエンスの国際標準に準じた言語資源プラットフォームの構築」
(対面とオンラインのハイブリッド開催, 申込者限定の録画配信あり)

(6) 講習会・チュートリアル・セミナー

みんなで談話整備プロジェクト文化庁「各地方言収集緊急調査」資料の整備と活用説明会&講習会
[2023.8.26, オンライン]

- 開会のあいさつ：木部暢子 (人間文化研究機構)
- 井上文子 (国立国語研究所)

「「みんなで談話整備プロジェクト」の概要」
- 加藤和夫 (金沢大学名誉教授)

「文化庁「各地方言収集緊急調査」について思い出すこと、思うこと」
司会：竹田晃子 (岩手大学)

- ・山田真寛 (国立国語研究所)
「データ整備を研究業績として評価するしくみ・データの共有」
- ・日高水穂 (関西大学), 三井はるみ (國學院大學)
「プロジェクトの連携・参加者のコミュニティづくり」
- ・データ整備講習会
講師：黄海萍 (国立国語研究所)
アシスタント：松岡葵 (九州大学大学院), 宮岡大 (九州大学大学院)
- ・閉会のあいさつ・参加者募集：井上文子 (国立国語研究所)

第2回音声生成に関する計測技術に関するハンズオンセミナー [2023.8.31-9.1, 国立国語研究所多目的室]

2023年8月31日

- ・概要説明
- ・EGGによる声帯振動計測とデータ分析
講師：北村達也 (甲南大学)
- ・超音波検査装置による調音運動の計測とソフトを用いた解析
講師：孫静 (神戸大学), 北村達也 (甲南大学)

2023年9月1日

- ・超音波検査装置計測の言語学的応用
講師：溝口愛 (前橋工科大学)
- ・rtMRI データベースの特徴とその活用法
講師：前川喜久雄 (国立国語研究所), 浅井拓也 (早稲田大学), 竹本浩典 (千葉工業大学)
- ・EMAによる調音運動の計測
講師：北村達也 (甲南大学), 能田由紀子 (国立国語研究所)
- ・EMA データの見方
講師：北村達也 (甲南大学), 能田由紀子 (国立国語研究所)
- ・EPGによる舌-口蓋接触計測
講師：前川喜久雄 (国立国語研究所)
- ・質疑応答

『日本語歴史コーパス』『昭和・平成書き言葉コーパス』『中納言』講習会【初級編】

[2023.9.6, 国立国語研究所多目的室]

- ・挨拶
- ・CHJについて
- ・SHCについて
- ・言語単位・見出し語の階層構造について
- ・CHJ/SHCを使用した検索方法について
- ・検索結果の集計方法について
- ・CHJ・SHCの利用に関する Q&A
- ・講師：
小木曾智信 (国立国語研究所研究系 教授),
高橋雄太 (国立国語研究所研究系 プロジェクト非常勤研究員/明治大学),
竹内綾乃 (国立国語研究所言語資源開発センター プロジェクト非常勤研究員),
ヤロシュ島田むつみ (国立国語研究所言語資源開発センター プロジェクト非常勤研究員)

『日本語歴史コーパス』『昭和・平成書き言葉コーパス』『中納言』講習会【初級編】 [2023.9.12, オンライン]

- ・挨拶
- ・CHJについて

- ・ SHC について
- ・ 言語単位・見出し語の階層構造について
- ・ CHJ/SHC を使用した検索方法について
- ・ 検索結果の集計方法について
- ・ CHJ・SHC の利用に関する Q&A
- ・ 講師：
 - 小木曾智信 (国立国語研究所研究系 教授),
 - 高橋雄太 (国立国語研究所研究系 プロジェクト非常勤研究員/明治大学),
 - 竹内綾乃 (国立国語研究所言語資源開発センター プロジェクト非常勤研究員),
 - ヤロシュ島田むつみ (国立国語研究所言語資源開発センター プロジェクト非常勤研究員)

オンライン検索システム『中納言』講習会【初級編】 [2023.11.5, オンライン]

- ・ 挨拶
- ・ 『中納言』 について
- ・ BCCWJ/CEJC を使用した検索方法について
- ・ 講師：
 - 柏野和佳子 (国立国語研究所 教授),
 - 小磯花絵 (国立国語研究所 教授)

東洋学へのコンピュータ利用第 37 回研究セミナー [2024.1.19, 国立国語研究所多目的室]

- ・ 開会挨拶
- ・ 安岡孝一 (京都大学)
 - 『『学文化字典』の異体字』
- ・ 横山詔一, 高田智和 (国立国語研究所), 前田忠彦 (統計数理研究所), 久野雅樹 (電気通信大学), 相澤正夫 (国立国語研究所)
 - 「日本人の読み書き能力 1948 年調査のナゾ: IBM システムの役割など」
- ・ 高田智和, 寺島宏貴, 中島彩花 (国立国語研究所)
 - 「国立国語研究所の漢字研究関係資料」
- ・ 守岡知彦 (国文学研究資料館)
 - 「CHISE の IPFS 化における諸課題について」
- ・ 李媛 (京都大学)
 - 「TEI Lex-0 を利用した日本古辞書の構造化記述」
- ・ 加藤大鶴 (跡見学園女子大学)
 - 「資料横断的な漢字音・漢語音データベースの課題と進捗—よりよい運用・連携を目指して—」
- ・ 閉会挨拶

7 センター・研究図書室の活動

(1) 共同利用推進センター

日本語をはじめとする諸言語, 日本語教育等を専門とする研究者が共同研究を推進する環境を提供する。研究文献 (研究図書室) および研究資料 (研究資料室) の収集・整理・保存をおこなうと同時に, 来館閲覧利用やウェブページを通して, また, 構築済み言語資源の受入・提供等により, 共同利用環境の整備を推進している。

・ 共同利用・共同研究については, 以下の活動をおこなった。

- ① オープンアクセス方針に沿って「国立国語研究所学術情報リポジトリ」での研究成果の登録・公開を推進した (追加 183 件, 総数 3,203 件, ダウンロード回数 45.3 万)。
- ② 日本語研究・日本語教育研究分野の図書・雑誌論文等の書誌情報を整備し, 「日本語研究・日本語教育文献

- データベース」を増補拡充した(追加 26,409 件, 総データ件数 286,835 件, セッション数 9.2 万)。
- ③研究図書室収蔵図書資料の利活用のため, 図書資料の整備を進め, 「国立国語研究所蔵書目録データベース」を増補拡充した(図書の受入数は冊子のみで 2,318 件, 電子ブックを含めると 2,477 件)。
 - ④貴重図書等のデジタル化を進め, 「日本語史研究資料 [国立国語研究所蔵]」に 18 件追加公開した。
 - ⑤研究資料室収蔵資料目録の整備を進め, 「国立国語研究所研究資料室収蔵資料」データベースを増補拡充した(資料群の新規公開 13 件, 収蔵資料目録試行版の追加登録 5,469 件)。
 - ⑥研究資料室収蔵資料の保全と再利用のため, 「『日本言語地図』調査票」等の紙媒体資料のデジタル撮影(37,955 枚)と音声・映像資料の媒体変換(129 点)をおこなった。また, 所内専用試視聴システム「所蔵音声・映像データベース」を増補拡充し(音声 505 点, 映像 7 点), 共同利用環境を整備した。
 - ⑦媒体変換したデジタルデータについて長期保存用 LTO(6 点)を作成した。
 - ⑧人間文化研究機構の「令和 5 年度 社会との共創によるデジタル・ヒューマニティーズ(DH)の推進」公募事業(データ構築補助)に申請し, 研究資料室収蔵資料の目録データ「収蔵資料群概要」「収蔵資料目録」「言語地図草稿目録」の 3 種について, nihuBridge の統合検索用メタデータを構築し, nihuBridge に登録した。
 - ⑨国文学研究資料館の「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」に協力し, 国立国語研究所が所蔵する歴史的典籍 204 冊を貸出している。画像データ化は 2024 年度におこなわれる予定。
 - ⑩併任教員 4 名を配置し, 言語資源開発センターとの連携のもと, 有償版コーパスの管理・公開体制の整備を進め, 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』『日本語話し言葉コーパス』の増刷(複製), およびウェブページの更新をおこなった。
 - ⑪人間文化研究機構共創先導プロジェクト共創促進研究「学術知デジタルライブラリの構築」と連携し, 国立国語研究所デジタルアーカイブサイト(NINDA)の構築を進めた。
 - ⑫「BTSJ 1000 人日本語自然会話コーパス」「教育基本語彙データベース・日本語教育基本語彙データベース」を公開した。
 - ⑬「鳩間方言辞典データセット整備」など, 第 3 期中期目標期間中に実施した研究課題を中心に研究資料(新規 5 件, 補遺 6 件, 追加 11 件)を受け入れ, 研究資料室に来室利用ができるよう資料整備を進めた。
 - ⑭情報・システム研究機構データサイエンス共同利用基盤施設社会データ構造化センターとの共催で, 2023 年 9 月 8 日に 2023 年度共同利用セミナーを Web 開催でおこない, 「幼児の言語資料」「諸鈍方言辞典」「国立国語研究所研究資料室所蔵音声・映像データベース」の紹介をおこなった(参加者 77 名, うち海外 10 名, 学生 15 名)。
 - ⑮所外で研究資料室の資料の紹介を 4 件おこなった(インドネシア共和国・ジャカルタ国立大学言語芸術学部日本語教育科主催研修会, 2023 年度 NINJAL 日本語教師セミナー(海外), 図書館総合展, 「東洋学へのコンピュータ利用」研究セミナー)。
 - ⑯言語資源開発センターとの共催で, 2023 年 8 月 31 日・9 月 1 日に「第 2 回音声生成に関する計測技術に関するハンズオンセミナー」を開催し, 音声生成に関する計測技術の体験機会を提供した。
- ・地域・社会連携については, 『国立国語研究所論集』(オンラインジャーナル)を 2 回発行し, 論文および関連データに, クリエイティブ・コモンズのライセンスを付けて公開をおこなった。
 - ・グローバル化に関しては, 以下を実施した。
 - ①韓国日語教育学会, 韓国日本語學會と連携し, 韓国国内で刊行されている日本語学関連文献の情報の収集を継続した。
 - ②コーパスを活用した国際的な日本語研究促進のために, ELDA による「日本語話し言葉コーパス(CSJ)」(有償版コーパス)の配付を開始した。
 - ・その他, 研究資料(研究データを含む)および研究情報の共同利用体制を整備し, 2023 年度共同利用型共同研究の採択課題(共同利用型共同研究(A) 8 件, 同(B) 2 件)に対して, 研究資料および研究情報を提供した。また, 言語系学会連合との覚書に基づき, 同連合加盟の日本語学会機関誌『日本語の研究』に対して研究文献データの先行提供をおこなった。

(2) 言語資源開発センター

言語資源開発センターは、研究系や研究者コミュニティと連携してコーパス、アーカイブ等の言語資源の整備・開発およびその研究・教育への活用を通して言語資源学の創成に寄与することを目的とする。令和5年度は以下の活動を実施した。

・1. 共同利用・共同研究に関する計画

- ①複数の共同研究プロジェクトと共同で形態素解析用辞書 UniDic を整備した。
- ②コーパス検索ツール「中納言」を安定的に運用し、データの新規公開(B-JAS 北京日本語学習者縦断コーパス), データの追加(CHJ 日本語歴史コーパス, COJADS 日本語諸方言コーパス), データの修正(C-JAS 中国語・韓国語母語の日本語学習者横断発話コーパス, I-JAS 多言語母語の日本語学習者横断コーパス), および機能拡張をおこなった。利用者数は年間で 69,454 名増加した。
- ③外部公募の共同利用型共同研究(C)を9件実施し、所外研究者との交流を図った。
- ④言語資源に関する知識・技術の普及を図るため、「第2回音声生成に関する計測技術に関するハンズオンセミナー」を開催した(日本音声学会協賛)。また、「中納言」講習会を複数の共同研究プロジェクトと連携して4回開催した。
- ⑤言語資源開発センター専任職員・研究員による研究発表11件、論文刊行2件をおこなった。

・2. 大学院教育・若手育成に関する計画

総研大および連携大学院で言語資源に関する知見・技術の普及を図った。また若手研究者への発表の機会の確保や研究交流の場として「言語資源ワークショップ2023」(国立情報学研究所後援)を開催した。発表の実績を記録するため『言語資源ワークショップ2023 発表論文集』にまとめ、国立国語研究所学術情報リポジトリに登録・公開した。

・3. 地域・社会との連携に関する計画

コーパス検索ツール「中納言」の大学等での活用を促進するために、授業用アカウントを発行した(131件、対象者(受講者)は4,015名)。

・4. グローバル化に関する計画

英文ページ未設置の各コーパス特設サイトについて英文ページ作成に着手した。公開は「名大会話コーパス」にとどまり、次年度以降に順次公開する。

(3) 研究図書室

全国で唯一の日本語に関する専門図書館で、日本語研究および日本語に関する研究文献・言語資料を中心に、日本語教育、言語学など、関連分野の文献・資料を収集・所蔵している。

閲覧室には、新着コーナーを設け、新着雑誌・図書を利用しやすい環境を整えている。

カードキーによる入退室の管理および照明の人感センサーを整備し、所内教職員は夜間・休日にも利用可能である。

電子ジャーナルの契約や電子ブックの拡充も進めており、所内教職員はこれら電子資料の大半を所外からも利用可能である。

・開室日時：月曜日～金曜日 9時30分～17時(土曜日・日曜日・祝日・夏季休業・年末年始・毎月最終金曜日は休室)

・主なコレクション：

- ・東条操文庫(方言)
- ・大田栄太郎文庫(方言)
- ・保科孝一文庫(言語問題)
- ・見坊豪紀文庫(辞書)
- ・カナモジカイ文庫(文字・表記)
- ・藤村靖文庫(音声科学)
- ・林大文庫(国語学)
- ・興水実文庫(国語教育)
- ・中村通夫文庫(国語学)

- 「国立国語研究所蔵書目録データベース」をウェブ検索できる。
- 図書館間相互協力サービス (NACSIS-ILL) により，所属機関の図書館を通して複写物の取り寄せや図書の貸出を受けることができる。
- 所蔵資料数（2024 年 4 月 1 日現在）

	図 書	雑 誌	電 子 ブ ッ ク	電子ジャーナル
日 本 語	130,292 冊	5,438 種	3 件	2 種
外 国 語	33,661 冊	534 種	1,574 件	82 種
計	163,953 冊	5,972 種	1,577 件	84 種

※ 視聴覚資料など 7,814 点を含む。



國際的研究協力

国立国語研究所全体の研究テーマである「開かれた言語資源による日本語の実証的・応用的研究」をグローバルな観点から推進するため、国際的な研究連携体制の多様化を図っている。

1 世界の大学・研究機関との提携

世界各地の大学や研究機関等と、共同研究の促進や研究者の交流等を目的とした学術交流協定を締結している。協定先は、海外で日本語や日本語教育を研究している機関に加え、言語学や情報科学の研究機関にも及び、これらの協定により、日本語研究から世界の言語研究へ、世界の言語研究から日本語研究へ、という両方向の交流を強化し、世界規模で研究を促進することをめざしている。

協定締結先 (2024年3月31日時点)

- ・中央研究院 (台湾)：2014.3-
- ・北京外国語大学北京日本学研究中心 (中国)：2014.6-
- ・オックスフォード大学人文科学部 (イギリス)：2015.7-
- ・東呉大学日本語文学系 (台湾)：2018.1-
- ・ハワイ大学マノア校 (アメリカ)：2018.2-
- ・ティラク・マハラシュトラ大学日本語学科 (インド)：2018.5-
- ・インド工科大学マドラス校人文社会科学部 (インド)：2018.6-
- ・韓国日語教育学会 (韓国)：2018.7-
- ・韓国日本語学会 (韓国)：2018.7-
- ・オーストリア科学アカデミー・デジタル人文学センター (オーストリア)：2020.3-
- ・天津外国語大学 (中国)：2021.4-
- ・韓国外国語大学校 (韓国)：2021.11-
- ・デカン・カレッジ (インド)：2022.7-
- ・福建師範大学外国語学院 (中国)：2023.12-
- ・西安外国語大学 (中国)：2024.1-
- ・ハノイ国家大学外国語大学 (ベトナム)：2024.1-
- ・フエ大学外国語大学 (ベトナム)：2024.1-
- ・ドンア大学 (ベトナム)：2024.1-

2 国際シンポジウム・国際会議の開催

世界における日本語・日本語教育研究の発展のため、国際シンポジウムを毎年数回開催すると同時に、海外に拠点を持つ国際学会を国語研に招致している (2023年度開催のものは59ページに掲載)。

3 日本語研究英文ハンドブック

言語学関係の出版社として傑出した出版活動で世界をリードする De Gruyter Mouton (ドゥ・グロイター・ムートン社：ベルリン/ボストン) からの申し出により、国立国語研究所 (国語研) の優れた研究成果を英文で出版する包括的な協定を2012年7月に締結した。この協定に基づき、2014年から、日本語および日本語言語学に関する包括的な日本語研究英文ハンドブック、Handbooks of Japanese Language and Linguistics シリーズ (全12巻) を刊行している。

このシリーズは、それぞれの領域におけるこれまでの重要な研究成果を俯瞰し、現在における最先端の研究状況をまとめるとともに、今後の研究方向にも示唆を与えるもので、国語研関係者 (専任教員および客員

教員、諸大学の共同研究員)だけでなく、各領域における国内外の第一線の研究者が執筆を担当し、国語研が中心となって編集をおこなう大規模な国際的プロジェクトである。これにより大学共同利用機関としての国語研の知名度を世界的に高めるだけでなく、日本語研究の成果ならびに動向を世界に広く問うことによって言語学の発展に資するとともに、日本語研究自体の進展にも寄与することとなる。

編集主幹

柴谷方良 (ライス大学名誉教授) Masayoshi Shibatani (Professor Emeritus, Rice University)

影山太郎 (国立国語研究所元所長・名誉教授) Taro Kageyama (Former Director-General and Professor Emeritus, NINJAL)

シリーズの構成 (全巻英文, 各巻 600–700 ページ)

Vol. 1: *Handbook of Japanese Historical Linguistics*

Edited by Bjarke Frellesvig, Satoshi Kinsui, and John Whitman

(既刊, Print ISBN: 9781614514015, eISBN: 9781614512851)

Vol. 2: *Handbook of Japanese Phonetics and Phonology*

Edited by Haruo Kubozono

(既刊, Print ISBN: 9781614512523, eISBN: 9781614511984)

Vol. 3: *Handbook of Japanese Lexicon and Word Formation*

Edited by Taro Kageyama and Hideki Kishimoto

(既刊, Print ISBN: 9781614512752, eISBN: 9781614512097)

Vol. 4: *Handbook of Japanese Syntax*

Edited by Masayoshi Shibatani, Shigeru Miyagawa, and Hisashi Noda

(既刊, Print ISBN: 9781614517672, eISBN: 9781614516613)

Vol. 5: *Handbook of Japanese Semantics and Pragmatics*

Edited by Wesley Jacobsen and Yukinori Takubo

(既刊, Print ISBN: 9781614512882, eISBN: 9781614512073)

Vol. 6: *Handbook of Japanese Contrastive Linguistics*

Edited by Prashant Pardeshi and Taro Kageyama

(既刊, Print ISBN: 9781614515692, eISBN: 9781614514077)

Vol. 7: *Handbook of Japanese Dialects*

Edited by Nobuko Kibe and Tetsuo Nitta

Vol. 8: *Handbook of Japanese Sociolinguistics*

Edited by Fumio Inoue, Mayumi Usami, and Yoshiyuki Asahi

(既刊, Print ISBN: 9781501507472, eISBN: 9781501501470)

Vol. 9: *Handbook of Japanese Psycholinguistics*

Edited by Mineharu Nakayama

(既刊, Print ISBN: 9781614511656, eISBN: 9781614511212)

Vol. 10: *Handbook of Japanese Applied Linguistics*

Edited by Masahiko Minami

(既刊, Print ISBN: 9781614512455, eISBN: 9781614511830)

Vol. 11: *Handbook of the Ryukyuan Languages*

Edited by Patrick Heinrich, Shinsho Miyara, and Michinori Shimoji

(既刊, Print ISBN: 9781614511618, eISBN: 9781614511151)

Vol. 12: *Handbook of the Ainu Languages*

Edited by Anna Bugaeva

(既刊, Print ISBN: 9781501510885, eISBN: 9781501502859)

Mouton-NINJAL 言語学ライブラリー (The Mouton-NINJAL Library of Linguistics: MNLL) シリーズは、ドイツの De Gruyter Mouton 社と国立国語研究所 (国語研) による新たな共同出版事業である。12 巻からなる Mouton Handbooks of Japanese Language and Linguistics シリーズの成功に続く共同企画として、国語研が推進している共同研究プロジェクトの成果を単著・共著の研究書あるいは論文集として出版する。日本語および琉球語の言語学とその関連分野について英語で出版される初の学術的叢書シリーズであり、この分野の中心的な問題について最先端の視点を紹介している。

このシリーズの著者・編集者は、国語研の常勤研究者だけでなく、国語研の客員教授や共同研究プロジェクトに参加する研究者も含まれている。研究成果を世界中の研究者に広く紹介することを共通の目標とするシリーズである。

編集主幹

田窪行則 (国立国語研究所前所長・名誉教授) Yukinori Takubo (Former Director-General and Professor Emeritus, NINJAL)
窪園晴夫 (国立国語研究所客員教授・名誉教授) Kubozono Haruo (Invited Professor and Professor Emeritus, NINJAL)
刊行リスト (全巻英文, 各巻 300–530 ページ)

Vol. 3: *The Theory and Practice of Language Faculty Science*

Edited by HOJI Hajime, Daniel Plesniak, and TAKUBO Yukinori

(既刊, Print ISBN: 9783110724677, eISBN: 9783110724790)

Vol. 4: *Irregular Phonological Marking of Japanese Compounds: Benjamin Smith Lyman's Pioneering Research on Rendaku*

By Timothy J. Vance

(既刊, Print ISBN: 9783110755015, eISBN: 9783110755107)

Vol. 5: *Cross-Linguistic Studies (Issues in Japanese Psycholinguistics from Comparative Perspectives Volume 1)*

Edited by KOIZUMI Masatoshi

(既刊, Print ISBN: 9783110778809, eISBN: 9783110778946)

Vol. 6: *Interaction Between Linguistic and Nonlinguistic Factors (Issues in Japanese Psycholinguistics from Comparative Perspectives Volume 2)*

Edited by KOIZUMI Masatoshi

(既刊, Print ISBN: 9783110778816, eISBN: 9783110778939)

Vol. 7: *Polarity-Sensitive Expressions: Comparisons Between Japanese and Other Languages*

Edited by KISHIMOTO Hideki, SAWADA Osamu, and IMANI Ikumi

(既刊, Print ISBN: 9783110754995, eISBN: 9783110755121)

Vol. 8: *Formal Perspectives on Secondary Predication*

Edited by Marcel den Dikken and KISHIMOTO Hideki

(既刊, Print ISBN: 9783110995619, eISBN: 9783110981742)

本シリーズは Brill 社と国立国語研究所との協定に基づき、ハワイ大学マノア校言語学科の協力を得て、世界の消滅危機言語および記述・記録・分析が進んでいない諸言語 (およびその変種) の出版をおこなうことを目的としている。

刊行リスト (全巻英文, 各巻 270–330 ページ)

Vol. 1: *An Introduction to the Japonic Languages: Grammatical Sketches of Japanese Dialects and Ryukyuan Languages*

Edited by SHIMOJI Michinori

(既刊, Print ISBN: 978-90-04-51888-9, eISBN: 978-90-04-51910-7)

Vol. 2: *The Theory and Practice of Language Faculty Science*

By Andrew Angeles

(既刊, Print ISBN: 978-90-04-64464-9, eISBN: 978-90-04-67764-7)

6 海外の研究者の招聘・受入

海外の研究者を専任や客員教員として招聘すると同時に、研究プロジェクトに共同研究員として多数の参画を得ている。また、海外の研究者や大学院生が国語研に滞在して研究をおこなう、外来研究員(2023年度海外機関からの受入6名)や特別共同利用研究員(2023年度海外機関からの受入1名)として受け入れている。

IV

社会連携と広報

1 地方自治体との連携

- ・地方自治体と締結している交流協定
 - ▶ 鹿児島県大島郡和泊町：2019.1–
 - ▶ 鹿児島県大島郡知名町：2019.1–
 - ▶ 鹿児島県薩摩川内市：2019.5–
 - ▶ 長野県茅野市教育委員会：2023.3–
 - ▶ 沖縄県宮古島市：2023.10–
- ・地方自治体と共催・連携した催し物
 - ▶ 知名町中央公民館講座「しまむにサロン」
 - 2023.6.3–2024.3.9, 毎月1回全10回(知名町中央公民館)
 - 講師：横山晶子(研究系特任助教), 山田真寛(研究系准教授)
 - ▶ 展示「観測者たちを夢中にさせる星々の魅力」
 - 2023.6.30–2023.10.9(茅野市八ヶ岳総合博物館)
 - 会期中の7月30日および8月20日に、ギャラリートークを実施した。
 - 講師：大西拓一郎(国立国語研究所, 7月30日), 野澤聡(獨協大学, 8月20日)
 - 2023.6.30–2023.10.9(長野市立博物館)
 - ▶ 信州天文文化100年・プラネタリウム「トモエゴゼンは眠らない」上映
 - 2023.8.5–2023.8.27(長野県伊那文化会館)
 - ▶ ミニ展示「知らなかった! 諏訪ことば」
 - 2023.12.26–2024.1.31(茅野市八ヶ岳総合博物館)
 - ウェブブック：<https://www.city.chino.lg.jp/book/list/book321.html>
 - ▶ ヘリテージ・キャンプ(沖永良部島の継承文化・言語イベント)
 - 2024.1.27–2024.1.28(沖永良部島(鹿児島県大島郡和泊町・知名町))

2 見学・研修・視察等

視察対応：6件(井出庸生衆議院議員, 文部科学省研究振興局大学研究基盤整備課長, 同振興企画課長, 文化庁国語課長, 韓国国立国語院言語情報課長ほか)

研修対応：1件(文部科学省関係機関職員研修生実地研修)

3 学会等の後援・共催

- ・中高生日本語研究コンテスト(2023.9.1–30)

主催者：日本語学会

後援者：人間文化研究機構, 言語系学会連合

開催地：オンライン
- ・令和5年度危機的な状況にある言語・方言サミット(与那国島大会)(2023.10.14, 15)

主催者：文化庁, 沖縄県, 与那国町, 与那国町教育委員会, 国立国語研究所, 琉球大学

開催地：与那国町立久部良小学校体育館
- ・日本語教育能力検定試験(2023.10.22)

主催者：日本国際教育支援協会

後援者：文化庁, 日本語教育学会, 国立国語研究所, 国際交流基金, 日本語教育振興協会, 国際日本語普及協会

開催地：各試験会場

・第 21 回全養協公開講座 (2024.1.27)

主催者：全国日本語教師養成協議会

後援者：国際協力機構、国際交流基金、国立国語研究所、大学日本語教員養成課程研究協議会、日本語教育学会

協賛者：アルク、スリーエーネットワーク、凡人社

開催地：帝京平成大学池袋キャンパス 714 教室

・第 15 回産業日本語研究会・シンポジウム (2024.2.20)

主催者：高度言語情報融合フォーラム (ALAGIN)、一般財団法人日本特許情報機構 (Japio)

後援者：総務省、文部科学省、経済産業省、特許庁、国立国語研究所、情報通信研究機構、工業所有権情報・研修館、情報処理学会、人工知能学会、言語処理学会、日本知的財産協会、アジア太平洋機械翻訳協会、大学技術移転協議会、株式会社産業経済新聞社

開催地：オンライン

4 広報

(1) 刊行物

『ことばの波止場』

ことばを研究することの面白さ・大切さや、国立国語研究所の活動に関する情報を、専門家でない方も読んで楽しめる広報誌。ウェブ上で年 2 回公開、その内容をまとめた冊子版を年 1 回発行している。

・Vol. 13 (冊子版発行：2024.3, ウェブ版公開：Vol. 13-1：2023.11, Vol. 13-2：2024.4)

・特集：日本で話されていることば その危機とルーツ

①消滅の危機にあることばを保存・継承していくために

②日本語と琉球諸語のルーツをひもとく (トマ・ペラルル、五十嵐陽介)

・特集：コンピュータと人間の言語

①自然言語処理の基礎技術「形態素解析」とは？ (小木曾智信)

②ChatGPT を活用してコーパスを構築する (宮川創)

・特集：BCCWJ (現代日本語書き言葉均衡コーパス) 開発秘話

・エッセイ：現在進行形のアイヌ語 (中川裕)

・エッセイ：自然言語処理「言葉の意味を表す技術」のブレークスルー (古宮嘉那子)

・インタビュー：新しいことを！ (前川喜久雄)

・インタビュー：今も昔も「集めて、比べる」 (松本曜)

・書籍紹介

・研究室訪問：本の匂いの中で (高田智和)

『国立国語研究所要覧 2023/2024』

発行：2023 年 6 月

『日本語の大疑問 2』 (国立国語研究所 (編), 幻冬舎新書, 2024 年 1 月)

Web サイト『ことば研究館』の「ことばの疑問」記事を再編集し、新書として出版したもの。全 32 記事。
『日本語の大疑問—眠れなくなるほど面白いことばの世界』 (幻冬舎新書, 2021 年 11 月) の続編にあたる。

(2) Web 発信等

国立国語研究所ウェブサイト (<https://www.ninjal.ac.jp/>)

各種催し物、データベース等、国立国語研究所の最新情報からこれまでに蓄積された研究成果まで、幅広いコンテンツを紹介。

国語研ポータルサイト『ことば研究館』(<https://kotobaken.jp/>)

ことばに関する一問一答式の記事『ことばの疑問』や、各種催し物、メディア掲載情報など、一般の方を対象に、ことば・日本語に関する様々なコンテンツをわかりやすく紹介。

国語研からの御案内(メールマガジン)

シンポジウム、コロキウム等のイベント、データベース紹介、公募情報など国語研からお知らせしたい事項について登録者に発信。月1〜2回発行。

国語研公式 X (旧 Twitter) (<https://twitter.com/kokugoken>)

各種催し物、コーパス、データベースの最新情報や、研究所の日常風景などを紹介。

国語研公式 YouTube チャンネル (<https://www.youtube.com/c/NINJAL-kokugoken>)

国語研の活動紹介や催し物、教材などの動画を配信。2023年度は以下の動画を新規公開した。

- ・言語学レクチャーシリーズ
 - ・ Vol.22 「日琉諸語の情報構造」(中川奈津子)
 - ・ Vol.23 「コーパスの検索とデータ構造」(山口昌也)
 - ・ Vol.24 「現代の新語について」(新野直哉)
 - ・ Vol.25 「どうすれば語彙学習負担を減らせるか—コーパスとテストから考える語彙の学習と教育—」(松下達彦)
 - ・ Vol.26 「質的研究へのいざない—日本語教育学を中心に—」(福永由佳)
 - ・ Vol.27 「話の進め方の地域差」(井上文子)
 - ・ Vol.28 「シンタクスの論理 I—チョムスキー革命: その知的背景と主な主張—」(福井直樹)
- ・総研大日本語言語科学特別講義・NINJAL コロキウム
 - ・「文書からの情報抽出: 科学技術論文を対象に」(松本裕治)
 - ・「共感(empathy)と“キャラクター”、そして文法」(金水敏)
- ・2023年度 NINJAL シンポジウム「コーパス利用のべし・べからず」発表: 全6本
- ・第18回 NINJAL フォーラム「国語研の言語生活研究の75年: 生きたことばをつかまえる・追跡する調査研究」講演・ディスカッション: 全6本
- ・第2回音声生成に関する計測技術に関するハンズオンセミナー 講義: 全7本
- ・ぶらっと国語研
 - ・第2回「デジタル」と「人文知」を跨ぐ: 宮川創先生の部屋をご紹介
 - ・第3回 師弟漫才! 石黒圭先生の研究室を訪問しました
 - ・第4回 辞書編纂者の日常を覗く: 柏野和佳子先生の研究室を訪問
- ・野田尚史教授 最終講義「日本語とスペイン語の対照研究—語順・主語・主題を中心に—」
- ・窪蘭晴夫教授 最終講義「日本語におけるプロミネンスの衝突について」
- ・『現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)』の紹介(山崎誠)

(3) 一般向けイベント

NINJAL フォーラム

国語研が主体となって実施する研究や、他機関との連携研究による優れた成果を学術界だけでなく、広く一般の方々に知っていただくとともに、社会との連携を積極的に推進して社会貢献に資するという観点から開催。

第18回「国語研の言語生活研究の75年: 生きたことばをつかまえる・追跡する調査研究」

[2023.12.16, 一橋大学一橋講堂およびオンライン開催]

- ・講演
 - ・前田忠彦(情報・システム研究機構データサイエンス共同利用基盤施設社会データ構造化センター)
「社会の変化を知るための継続調査—意識や言葉の変化をどう捉えるか?」
 - ・横山詔一(国立国語研究所)
「日本人の読み書き能力1948年調査のナゾ」

- ・田中祐輔（青山学院大学）
「多様化する生活者のための医学系用語のわかりやすさの検討—新聞コーパスとTVニュースアーカイブを用いた分析から—」
- ・バックハウス・ペート（早稲田大学）
「高齢者介護施設における入所者・職員間のコミュニケーション」
- ・福永由佳（国立国語研究所）
「外を歩き・見て・聞きて・動いて・考えて・記録する：生活者としての外国人のフィールドワークを事例に」
- ・全体討論

大学共同利用機関シンポジウム 2023 (出展) [2023.10.22, 日本科学未来館およびオンライン開催]

- ・2023年度は幹事機関としてシンポジウム全体の企画運営を担当した。

(4) 児童・生徒向けイベント

NINJAL 職業発見プログラム

中学生や高校生向けに、言語学や日本語あるいは日本語教育を研究することを通じて、学問のたのしさや素晴らしさを知ってもらうためのプログラム。

- ・研究所訪問
 - ・お茶の水女子大学附属高等学校 (2023.5.16)
 - ・群馬県立太田高等学校 (2023.8.10)
 - ・立川市立立川第五中学校 (2023.9.22)
 - ・京都市立日吉ヶ丘高等学校 (2023.12.26)
- ・出前授業
 - ・捜真女学校中学部・高等学部 (2023.6.21)
- ・オンライン開催
 - ・福島県立福島高等学校 (2023.5.31)
 - ・群馬県立高崎北高等学校 (2023.8.7)
 - ・関西創価高等学校 (2023.8.31)

NINJAL ジュニアプログラム

主に小学生を対象に、子どもたちの身近にある題材を取り上げ、楽しみながら普段使っている日本語について考えられるような、ワークショップや出前授業などを実施している。

- ・出前授業
 - ・青梅市立第五小学校 (2024.1.12)

ニホンゴ探検 2023 [2023.7.21, オンライン公開]

児童・生徒・一般を対象に研究所を公開し、「日本語」「ことば」の魅力と不思議に触れられるイベント。2023年度は既存コンテンツを選抜した紹介ページをオンライン公開する方式で実施した。



大学院教育と若手研究者育成

1

総合研究大学院大学

総合研究大学院大学「日本語言語科学コース」を2023年4月に開設し、第1期生として4名(募集人員3名)を受け入れた。第2期生の受け入れに向けて、2023年9月18日および19日に大学院説明会をハイブリッド開催したほか、言語処理学会などでブース出展し、広報をおこなった。

2

連携大学院

一橋大学大学院言語社会研究科・東京外国語大学大学院総合国際学研究科

2005年度から、一橋大学との連携大学院プログラムを実施している。この連携大学院(日本語教育学位取得プログラム)は、日本語教育学、日本語学、日本文化に関する専門的な知識を備えた研究者や日本語教育者を育成することを目指している。また、2016年度から東京外国語大学大学院総合国際学研究科との連携大学院を開始した。これらの連携大学院において、国立国語研究所は日本語学やコーパス言語学等の分野を担当している。

3

特別共同利用研究員制度

国立国語研究所では、国内外の大学の要請に応じて、日本語研究・日本語教育研究などの分野を専攻する大学院生を特別共同利用研究員として受け入れている。国立国語研究所の設備、文献等の利用や、国立国語研究所の研究者から研究指導を受けることができる制度である。

- ・2023年度受入: 1名
- ・北京外国語大学(1名)

4

NINJAL チュートリアル

日本語学・言語学・日本語教育研究の諸分野における最新の研究成果や研究方法を、第一線の教授陣によって、大学院生を中心とした若手研究者等に教授する講習会で、若手研究者の育成・サポートを目的としている。大学共同利用機関である国立国語研究所の特色を活かしたテーマを積極的に取り上げ、国際連携協定に基づき実施している。2023年度は、台湾で開催した。

受講対象: 原則として、大学院学生レベル

- ・大学院学生(修士課程または博士課程に在籍する者)
- ・修士課程または博士課程を修了後、原則として6年未満の者
- ・当該諸分野を専門とした職務に従事している者
- ・大学院進学を目指す学部学生等
- ・[2024.3.9(共催:台湾:東呉大学), 東呉大学(台湾)]
「台湾の日本語学習者の作文研究法—日本語学習者縦断作文コーパス(W-CoLeJa)を用いて—」
講師: 石黒圭(研究系教授), 井伊葉穂子(研究系プロジェクト非常勤研究員), 陳相州(東呉大学日本語文
学系 副教授), 陳冠霖(東呉大学日本語文学系 助理教授)

また、国際連携協定に関わらず、共同研究プロジェクト等が主体となって開催したものは以下のとおりである。

- ・[2023.8.7, オンライン]
“Teaching and Learning Japanese verbs and particles: From a contrastive perspective with some Indian languages”
講師: プラシャント・パルデシ(研究系教授)

- [2023.8.8 (共催: Tilak Maharashtra Vidyapeeth), Tilak Maharashtra Vidyapeeth (Pune・インド)]
“Teaching and Learning Japanese verbs and particles: From a contrastive perspective with some Indian languages”
講師: プラシャント・パルデシ (研究系 教授)
- [2023.8.12 (共催: Deccan College), Deccan College (Pune・インド)]
“Development of Japanese treebank: NPCMJ (NINJAL Parsed Corpus of Modern Japanese)”
講師: プラシャント・パルデシ (研究系 教授)
- [2023.12.2, オンライン]
「『日本語日常会話コーパス』の活用—『中納言』の使い方—」
講師: 小磯花絵 (研究系 教授), 柏野和佳子 (研究系 准教授)
- [2024.2.22 (共催: Savitribai Phule Pune University), Savitribai Phule Pune University (Pune・インド)]
“Steps in and Tips for Conducting Research on Japan Studies and Japanese Language”
講師: プラシャント・パルデシ (研究系 教授)
- [2024.2.23 (共催: Tilak Maharashtra Vidyapeeth), Tilak Maharashtra Vidyapeeth (Pune・インド)]
“Steps in and Tips for Conducting Research on Japan Studies and Japanese Language”
講師: プラシャント・パルデシ (研究系 教授)
- [2024.3.16, 国立国語研究所]
「基礎語彙調査チュートリアル」
講師: 山田真寛 (研究系 准教授), 横山晶子 (研究系 特任助教)
- [2024.3.18 (共催: Deccan College), Deccan College (Pune・インド)]
“Classifier and Gender marking in Konkani: A nominalization perspective”
講師: プラシャント・パルデシ (研究系 教授)

5 優れたポストドクターの登用

若手のポストドクターが、各種共同研究プロジェクトの運営を補助するとともにプロジェクトに関連する研究を自らおこなうことで、研究者としての自立性を向上させ、若手研究者のキャリアパスになる制度としてプロジェクト研究員 (プロジェクト PD フェロー) 制度を設け、公募により積極的に採用している。

VI

教員の研究活動と成果

前川 喜久雄 (まえかわ きくお) 所長

【学位】 博士 (学術) (東京工業大学, 2011)

【学歴】 上智大学外国語学部フランス語学科卒業 (1980), 上智大学大学院外国語学研究科言語学専攻博士前期課程修了 (1982), 上智大学大学院外国語学研究科言語学専攻博士後期課程中退 (1984)

【職歴】 鳥取大学教育学部 助手 (1984), 同 講師 (1987), 国立国語研究所言語行動研究部第二研究室 研究員 (1989), 同 主任研究官 (1992), 同 室長 (1994), 独立行政法人国立国語研究所研究開発部門第二領域 領域長 (2001), 同 言語資源グループ長 (2006), 人間文化研究機構国立国語研究所言語資源研究系教授 コーパス開発センター長 (2009), 同 研究系長 (2009–2016), 同 副所長 (2013–2016), 同 研究系 (音声言語研究領域) 教授 (2016), 一橋大学 連携教授 (2005–2014), 国立国語研究所名誉教授 (2022), 同 客員教授 (2022–2023), 同 所長 (2023–)

【専門領域】 音声学, 言語資源

【所属学会】 ISCA, IPA, 日本音声学会, 日本言語学会, 日本音響学会, 日本語学会

【学会等の役員・委員】 日本音声学会 会長 (2019–2021), International Phonetic Association (IPA): council member

【受賞歴】

2023: ISCA Fellow

2021: 国立国語研究所第 23 回所長賞

2012: 日本音声学会優秀論文賞 (「PNLP の音声的形状と言語的機能」, 『音声研究』, 15 (1))

2012: 国立国語研究所第 4 回所長賞

2011: 日本音声学会優秀論文賞 (「日本語有声破裂音における閉鎖調音の弱化」, 『音声研究』, 14 (2))

2010: 国立国語研究所第 1 回所長賞

【2023 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究 (B) 「リアルタイムMRI 動画による日本語調音運動データベースの構築と公開」, 20H01265: 研究代表者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

Tsukasa Yoshinaga, Kikuo Maekawa, and Akiyoshi Iida

“On the sound source locations of ‘glottal fricative’ [h]”, *Proceedings ICPhS 2023*, pp. 609–613, 2023.8.7.

Yoshio Saito, Kikuo Maekawa, and Yurong

“The Phonetic basis for modern Mongolian vowel harmony: An analysis by means of real-time MRI”, *Proceedings ICPhS 2023*, pp. 3291–3295, 2023.8.7.

Kikuo Maekawa

“Articulatory characteristics of the Japanese /r/: A real-time MRI study”, *Proceedings ICPhS 2023*, pp. 992–996, 2023.8.10.

Tianfang Yan, Kikuo Maekawa, Yukiko Nota, and Masayuki Hirata

“Combining language corpora in a Japanese electromagnetic articulography database for acoustic-to-articulatory inversion”, *Proceedings INTERSPEECH 2023*, pp. 1464–1467, 2023.8.22, DOI: 10.21437/Interspeech.2023-36.

Tsukasa Yoshinaga, Kikuo Maekawa, and Akiyoshi Iida

“Roles of the glottal constriction on production of [h] in high frequency energy”, *Proceedings Forum Acusticum 2023*, 2023.9.

Yukiko Nota, Tatsuya Kitamura, Hironori Takemoto, and Kikuo Maekawa

“Mapping palatal shape to electromagnetic articulography data: An approach using 3D scanning and sensor matching”, *JASA Express Letters*, 4 (1), 2023.8.22, DOI: 10.1121/10.0024215.

《コーパス・データベース類》

前川喜久雄

「リアルタイム MRI 調音運動データベース第 2 版」, <https://rtmridb.ninjal.ac.jp>, 2024.3.31.

【講演・口頭発表】

脇田真子, 高畑諒汰, 竹本浩典, 平井啓之, 前川喜久雄

「言語特微量から調音運動の予測」, 日本音響学会第 150 回 (2023 年秋季) 研究発表会, 名古屋工業大学, 2023.9.26–28.

藤澤流以, 竹本浩典, 前川喜久雄

「日本語標準語話者の正中面における直音と拗音の声道形状の比較分析」, 日本音響学会第 150 回 (2023 年秋季) 研究発表会, 名古屋工業大学, 2023.9.26–28.

常盤朔也, 竹本浩典, 前川喜久雄

「多話者におけるリアルタイム MRI 動画への歯列補填の精度分析」, 日本音響学会第 150 回 (2023 年秋季) 研究発表会, 名古屋工業大学, 2023.9.26–28.

関純香, 下条未来, 武井俊輔, 竹本浩典, 能田由紀子, 前川喜久雄

「WAVE による話速を変化させた時の舌運動の観測」, 日本音響学会第 150 回 (2023 年秋季) 研究発表会, 名古屋工業大学, 2023.9.26–28.

北村達也, 孫静, 林良子, 能田由紀子, 前川喜久雄

「超音波画像診断法による口蓋形状の造影について」, 日本音響学会第 150 回 (2023 年秋季) 研究発表会, 名古屋工業大学, 2023.9.26–28.

前川喜久雄

「試験に出ない音声学」, 特別講演 (招待), 日本音声学会音声学セミナー, 名古屋学院大学, 2024.1.20.

梶浦一真, 関根諒, 脇田真子, 竹本浩典, 平井啓之, 前川喜久雄

「音声信号から発話器官の輪郭形状の逆推定」, 日本音響学会第 151 回 (2024 年春季) 研究発表会, 拓殖大学, 2024.3.6–8.

脇田真子, 竹本浩典, 平井啓之, 前川喜久雄

「リアルタイム MRI 動画から抽出した声道の輪郭に基づく音声合成」, 日本音響学会第 151 回 (2024 年春季) 研究発表会, 拓殖大学, 2024.3.6–8.

前川喜久雄

「これからの日本語研究と国立国語研究所: E3P-Linguistics をめざして」, 特別講演 (招待), 言語処理学会第 30 回年次大会, 神戸国際会議場, 2024.3.14.

【その他の学術的・社会的活動】

- Editorial board member: *Speech Communication* (Springer), *Journal of International Phonetic Association* (C. U. P.), *Language & Linguistics* (Sage), *Journal of Japanese Linguistics* (de Gruyter)

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

前川喜久雄, 浅井卓也, 竹本浩典

「rtMRI データベースの特徴とその活用法」, 第 2 回 音声生成に関する計測技術に関するハンズオンセミナー, 国立国語研究所, 2023.8.31–9.1.

前川喜久雄

「EGG による舌・口蓋接触計測」, 第 2 回 音声生成に関する計測技術に関するハンズオンセミナー, 国立国語研究所, 2023.8.31–9.1.

松本 曜 (まつもと よう) 副所長, 研究系教授

【学位】 Ph D (言語学) (米国スタンフォード大学, 1992)

【学歴】 上智大学外国語学部英語学科卒業 (1983), 上智大学外国語学研究科博士課程前期課程修了 (1985), スタンフォード大学言語学科博士課程修了 (1992)

【職歴】 東京基督教大学神学部 専任講師 (1992–1994), 明治学院大学文学部 専任講師 (1995), 明治学院大学文学部 助教授 (1996–2001), 明治学院大学文学部 教授 (2002–2003), 神戸大学文学部 教授 (2004–2006), 神戸大学人文学研究科 教授 (2007–2017), 人間文化研究機構国立国語研究所理論・対照研究領域 教授 (2017–2021), 同 副所長・研究系教授 (2022–)

【専門領域】 意味論, 認知言語学

【所属学会】 日本言語学会, 日本英語学会, 日本認知言語学会, 関西言語学会, アメリカ言語学会, 国際認知言語学会

【学会等の役員・委員】 日本言語学会 評議員, 日本英語学会 評議員

【受賞歴】

2021: 令和3年度前期所長特別賞 (Yo Matsumoto “The semantic differentiation of verb-te verb complexes and verb-verb compounds in Japanese.” Taro Kageyama, Peter E. Hook, and Prashant Pardeshi (eds.) *Verb-Verb Complexes in Asian Languages*. pp. 139–164, Oxford University Press)

2020: 令和2年度後期所長特別賞 (Yo Matsumoto and Kazuhiro Kawachi (eds.) *Broader Perspectives on Motion Event Descriptions*, John Benjamins)

【2023年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「実証的な理論・対照言語学の推進」: サブプロジェクトリーダー (「述語の意味と文法に関する実証的類型論」)

【2023年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究 (B) 「空間移動と状態変化の表現の並行性に関する統一的通言語的研究」, 19H01264: 研究代表者
- ・基盤研究 (B) 「百科事典的意味論に基づくレキシコンの研究: 大規模コーパスを用いた実証的研究」, 23H00629: 研究代表者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

Yo Matsumoto

“LFG and Cognitive and Constructional Theories,” Mary Dalrymple (ed.) *Handbook of Lexical Functional Grammar*, pp. 1807–1828, Language Science Press, 2023.12, DOI: 10.5281/zenodo.10186034.

《その他の出版物・記事》

松本曜

「英語では使われない「Go To トラベル」という表現が日本で使われるのはなぜですか」, 国立国語研究所 (編) 『日本語の大疑問 2』, 幻冬舎, 2024.1.31, ISBN: 9784344987180.

【講演・口頭発表】

Yo Matsumoto and Keigo Ujiie

“A corpus-based study of the linguistic representation of change-of-state events in Japanese: An examination of the parallelism between motion and change,” 16th International Cognitive Linguistics Conference (ICLC16), HHU Düsseldorf (ドイツ), 2023.8.9.

Yuko Yoshinari, Kiyoko Eguchi, Miho Mano, and Yo Matsumoto

“The Asymmetry Hypothesis in Motion Event Descriptions: Evidence from the Learners of English, Hungarian and Japanese,” EuroSLA, バーミンガム (英国), 2023.9.2.

松本曜

「日本語の語彙的複合動詞の組み合わせ再考：フレームとコンストラクションのアプローチから」, 特別講演 (招待), Morphology and Lexicon Forum, 滋賀大学, 2023.9.9.

Yo Matsumoto

“The Cooccurrence of Motion Ideophones and Motion Verbs in Japanese,” ポスター発表, Ideophones in motion descriptions, オンライン (国際会議), 2023.10.8.

松本曜, 氏家啓吾

「比較基準を表すカラ格についての一考察」, 日本言語学会第 167 回大会, 京田辺市, 2023.11.11.

Yo Matsumoto and Keigo Ujiie

“Intralinguistic variation in the descriptions of changes of state: Typology and animacy in Japanese,” ポスター発表, Linguistic Society of America Annual Meeting, New York (米国), 2024.1.5.

松本曜

「日本語の状態変化表現」, 「述語の意味文法」および「状態変化の言語表現」合同研究会 I, 国立国語研究所・オンライン (ハイブリッド), 2024.3.8.

松本曜

「日本語語彙的複合動詞で表現される複合事象と、表現されない複合事象」, 百科事典の意味論研究発表会, 国立国語研究所・オンライン (ハイブリッド), 2024.3.24.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・「述語の意味文法」および「状態変化の言語表現」合同研究会 I (主催: 国立国語研究所共同研究プロジェクト「述語の意味と文法に関する実証的類型論」, 共催: 科研費基盤研究 (B)「空間移動と状態変化の表現の並行性に関する統一的通言語的研究」: 19H01264), 国立国語研究所, 2024.3.8.
- ・「述語の意味文法」および「状態変化の言語表現」合同研究会 II (主催: 国立国語研究所共同研究プロジェクト「述語の意味と文法に関する実証的類型論」, 共催: 科研費基盤研究 (B)「空間移動と状態変化の表現の並行性に関する統一的通言語的研究」: 19H01264), 国立国語研究所, 2024.3.9.
- ・百科事典の意味論研究発表会 (主催: 国立国語研究所共同研究プロジェクト「述語の意味と文法に関する実証的類型論」, 共催: 科研費基盤研究 (B)「百科事典の意味論に基づくレキシコンの研究: 大規模コーパスを用いた実証的研究」: 23H00629), 国立国語研究所, 2024.3.24.

【一般向けの講演・セミナーなど】

松本曜

「日本語の語彙的複合動詞の分析: 構造の制約と意味の制約」, 神田外語大学講演会, オンライン, 2023.12.9.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・日本英語学会学会賞外部審査員
- ・関西言語学会誌外部査読員
- ・東京言語研究所 理論言語学講座講師
- ・新日本聖書刊行会 日本語主任

【大学院教育・若手研究者育成】

《総合研究大学院大学「日本語言語科学コース」》

- ・授業科目『言語研究基礎論 IIIA』, 『理論・対照言語学』, 『先端学術院特別研究 IIIA』, 『先端学術院特別研究 IIIB』
- ・指導学生 1 名 (主担当 1 名)

《若手研究者の受入》

- ・日本学術振興会特別研究員: 1 名

小磯 花絵 (こいそ はなえ) 副所長, 研究系教授

【学位】 博士 (理学) (奈良先端科学技術大学院大学, 1998)

【学歴】 千葉大学文学部卒業 (1994), 千葉大学大学院文学研究科修士課程修了 (1996), 奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科博士後期課程修了 (1998)

【職歴】 ATR 知能映像通信研究所 研修研究員 (1996), 国立国語研究所言語行動研究部 研究員 (1998), 同主任研究員 (2009), 人間文化研究機構国立国語研究所理論・構造研究系 准教授 (2009), 一橋大学言語社会研究科連携教授 (2015), 国立国語研究所研究系 (音声言語研究領域) 准教授, 領域代表 (2016), 同研究系 教授 (2018), 同 副所長 (2021) 理化学研究所客員研究員 (2022), 総合研究大学院大学日本語言語科学コース 教授 (2023)

【専門領域】 コーパス言語学, 談話分析, 認知科学

【所属学会】 社会言語科学会, 日本認知科学会, 人工知能学会, 言語処理学会, 日本言語学会, 日本音声学会, 日本語学会, 日本語教育学会

【学会等の役員・委員】 人工知能学会言語・音声理解と対話処理研究会 主査, 音声学会 評議員, 国立情報学研究所 音声資源コンソーシアム委員

【受賞歴】

2022: 言語処理学会・言語資源協会 言語資源賞 (小磯花絵, 天谷晴香, 石本祐一, 居關友里子, 白田泰如, 柏野和佳子, 川端良子, 田中弥生, 伝康晴, 西川賢哉, 渡邊友香 『『日本語日常会話コーパス』の設計と特徴』)

2002: 情報処理学会山下記念研究賞

1996: 人工知能学会大会論文賞

1996: 人工知能学会研究奨励賞

【2023 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究」: リーダー
- ・共創先導プロジェクト共創促進研究「コミュニケーション共生科学の創成」: 分担者
- ・共同利用型共同研究 (C) 「指標性に着目した日本語記述」: コーディネーター
- ・共同利用型共同研究 (C) 「介護施設で働くベトナム人実習生の「書く」「話す」能力の縦断的研究」: コーディネーター
- ・共同利用型共同研究 (C) 「『日本語日常会話コーパス』に対する代名詞代用・呼びかけ表現アノテーション」: コーディネーター

【2023 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究 (B) 「子ども会話コーパスの開発とコミュニケーション能力の発達に関する実証的研究」, 23H00630: 研究代表者
- ・基盤研究 (B) 「多様な場面の日常会話データに基づく子どものコミュニケーション行動の解明」, 20H01264: 研究代表者
- ・特別推進研究「アジアと欧米: コミュニケーションの文化差から言語の獲得過程を探る」, 20H05617: 研究分担者
- ・基盤研究 (A) 「高齢者のマルチモーダル日常会話コーパスの開発」, 22H00544: 研究分担者
- ・挑戦的研究 (萌芽) 「精神障害患者の会話コーパス構築と発話特徴に基づいた診断支援 AI の開発」, 22K18480: 研究分担者
- ・挑戦的研究 (萌芽) 「小学校における児童の合意形成の包括的研究」, 23K17586: 研究分担者
- ・挑戦的研究 (萌芽) 「幼児の話合い活動の過程と交渉技術の発達についての包括的研究」, 20K20695: 研究分担者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

小磯花絵

『日本語日常会話コーパス』を活用した研究の可能性, 『語用論研究』, 25 巻, 1-18 頁, 2024.3, DOI: 10.60414/pragmatics.25.0_1.

《コーパス・データベース類》

小磯花絵, 伝康晴, 川端良子

「『日本語日常会話コーパス』リレーショナルデータベース」, <https://www2.ninjal.ac.jp/conversation/cejc/rdb.html>.

小磯花絵

「日本語日常会話コーパス 関係性・年齢の上下関係のアノテーション」, https://www2.ninjal.ac.jp/conversation/cejc/data_relation.html, 2024.3.26.

【講演・口頭発表】

小磯花絵, 居關友里子, 柏野和佳子, 川端良子, 田中弥生, 西川賢哉

「『子ども版日本語日常会話コーパス』の構築に関する中間報告」, ポスター発表, 言語資源ワークショップ 2023, オンライン, 2023.8.29.

居關友里子, 小磯花絵

「親子の共同行為場面における振る舞いの調整—お菓子作りの事例から—」, ポスター発表, 言語資源ワークショップ 2023, オンライン, 2023.8.29, DOI: 10.15084/0002000134.

田中弥生, 江口典子, 小磯花絵

「家庭での食事場面における親子会話の脱文脈度の観点からの分析」, ポスター発表, 言語資源ワークショップ 2023, オンライン, 2023.8.29, DOI: 10.15084/0002000122.

田中弥生, 小磯花絵, 江口典子, 大武美保子

「共想法による高齢者談話における修辞機能と設定テーマとの関係」, 人工知能学会 言語・音声理解と対話処理研究会 (SLUD) 第 98 回研究会, 公立はこだて未来大学, 2023.9.3-4, DOI: 10.11517/jsaislud.98.0_25.

小磯花絵

「『日本語話し言葉コーパス』『日本語日常会話コーパス』利用のべし・べからず」, 2023 年度 NINJAL シンポジウム, オンライン, 2023.11.5.

田中弥生, 小磯花絵

「親子の食事場面での話題内容と脱文脈度」, ポスター発表, 人工知能学会 言語・音声理解と対話処理研究会 (SLUD) 第 100 回研究会, 国立国語研究所, 2024.2.29-3.1, DOI: 10.11517/jsaislud.100.0_59.

小磯花絵

「コーパスの構築・利用と個人情報保護: 『日本語日常会話コーパス』構築・公開の経験から」, 招待講演, 手話言語学ろう文化関連アーカイブ構想に関する公開研究会, オンライン, 2024.3.4.

鈴木あすみ, 幕内充, 小磯花絵, 中村仁洋

「『日本語日常会話コーパス』に基づく終助詞産出率の個人差と自閉傾向の相関分析」, 第 48 回社会言語科学会研究大会, 福岡女子大学, 2024.3.10.

小磯花絵

「『子ども版日本語日常会話コーパス』モニター版の公開に向けて」, 「日常会話コーパス」シンポジウム IX, オンライン, 2024.3.18.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・人工知能学会 言語・音声理解と対話処理研究会 (SLUD) 第 99 回研究会「第 14 回対話システムシンポジウム」(主催: 人工知能学会, 共催: 多世代会話コーパスプロジェクト), 国立国語研究所, 2023.12.13.
- ・ことば・認知・インタラクション 12 (主催: 多世代会話コーパスプロジェクト, 科研費基盤研究 (B)「会話における発話のアドレスの多様性: コーパスアノテーションに基づく実証的研究」: 22H00654,

科研費基盤研究 (C)「身体性を伴う「理解」の相互行為分析: 共在する人々の非対称性に着目して」:
22K01879), 国立国語研究所, 2024.2.28.

- ・人工知能学会 言語・音声理解と対話処理研究会 (SLUD) 第 100 回研究会 (主催: 人工知能学会, 共催:
多世代会話コーパスプロジェクト), 国立国語研究所, 2024.2.29.
- ・日常会話コーパスシンポジウム IX (主催: 多世代会話コーパスプロジェクト), オンライン, 2024.3.18.

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

小磯花絵

「幼児の言語資料」, 共同利用セミナー, オンライン, 2023.9.8.

小磯花絵, 柏野和佳子

「オンライン検索システム『中納言』講習会【初級編】」, オンライン, 2023.11.5.

小磯花絵, 柏野和佳子

「『日本語日常会話コーパス』の活用—『中納言』の使い方—」, NINJAL チュートリアル, オンライン, 2023.12.2.

《総合研究大学院大学「日本語言語科学コース」》

- ・授業科目『言語資源学』, 『言語資源学演習 2』

《連携大学院》

- ・一橋大学大学院言語社会研究科 連携教授

《博士論文審査委員》

- ・一橋大学大学院: 副査・2 名

小木曾 智信 (おぎそ としのぶ) 研究主幹, 研究系教授

【学位】 博士 (工学) (奈良先端科学技術大学院大学, 2014)

【学歴】 東京大学文学部第3類 (語学文学) 卒業 (1995), 東京大学大学院人文社会系研究科修士課程日本文化研究専攻修了 (1997), 東京大学大学院人文社会系研究科博士課程単位取得退学 (2001), 奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科博士後期課程修了 (2014)

【職歴】 明海大学外国語学部 講師 (2001), 独立行政法人国立国語研究所研究開発部門 研究員 (2006), 人間文化研究機構国立国語研究所言語資源研究系 准教授 (2009), 同 研究系 (言語変化研究領域) 准教授, 領域代表 (2016), 同 教授, 領域代表 (2017), 東京外国語大学大学院国際日本学研究院 准教授 (クロスアポイントメント) (2016), 同 教授 (2017)

【専門領域】 日本語学, 自然言語処理

【所属学会】 日本語学会, 言語処理学会, 情報処理学会, 日本語文法学会, 近代語学会, 東京大学国語国文学会

【学会等の役員・委員】 日本語学会 評議員・大会企画運営委員 (副委員長), 言語処理学会 代議員

【受賞歴】

2011: 国立国語研究所第2回所長賞

2011: 情報処理学会山下記念研究賞

【2023 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」: リーダー
- ・基幹型共同研究プロジェクト「開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張」: リーダー
- ・共同利用型共同研究 (B) 「歴史的日本語資料のためのジオパージング」: コーディネーター
- ・共同利用型共同研究 (B) 「昭和期大衆雑誌『キング』のコーパスの構築」: コーディネーター

【2023 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究 (A) 「日本語諸方言の形態素解析用辞書の構築と活用」, 23H00007: 研究代表者
- ・基盤研究 (A) 「抄物コーパス」の構築とコーパスを応用した日本語史研究, 21H04349: 研究分担者
- ・基盤研究 (B) 「帝国議会議事速記録のコーパス化とテキストマイニングによる近代日本語史の解明」, 23H00632: 研究分担者
- ・挑戦的研究 (開拓) 「古辞書・古典籍データへの地理情報付与による人文学の横断的展開」, 20K20501: 研究分担者
- ・Oxford NINJAL Corpus of Old Japanese Project: Committee Member

【研究業績】

《著書・編書》

岡部嘉幸, 村上謙, 矢島正浩, 村山実和子, 橋本行洋, 銭谷真人, 高谷由貴, 北崎勇帆, 市村太郎, 片山久留美, 宮内佐夜香, 上阪彩香, 常盤智子, 小木曾智信, 松崎安子

『コーパスによる日本語史研究 近世編』, 岡部嘉幸, 橋本行洋, 小木曾智信 (編), ひつじ書房, 2023.12.11, ISBN: 9784823411342.

小木曾智信 (監修・編・著)

『マインクラフトでおぼえる ちょっととむずかしい言葉 1205』, 西東社, 2024.3.11, ISBN: 9784791633296.

《論文・ブックチャプター》

堤智昭, 中村壮範, 小木曾智信

「形態素解析ツール Web 茶まめによるコーパス作成支援」, 『じんもんこん 2023 論文集』, 2023 巻, 273-278 頁, 2023.12.2.

久保征子, 市村太郎, 小木曾智信

「『古今集遠鏡』コーパスの設計と構築」, 『じんもんこん 2023 論文集』, 2023 巻, 279-284 頁, 2023.12.2.

小木曾智信

「『日本語歴史コーパス 江戸時代編』の設計と構築」, 岡部嘉幸, 橋本行洋, 小木曾智信 (編) 『コーパス

による日本語史研究 近世編』, ひつじ書房, 297–309 頁, 2023.12.11.

小木曾智信, 近藤明日子, 高橋雄太, 間淵洋子

『『昭和・平成書き言葉コーパス』の設計・構築・公開』, 『情報処理学会論文誌』, 65 巻 2 号, 278–291 頁, 2024.2.

小木曾智信, 尹熙洙, 王竣磊, 岡田純子

『関西方言を対象とした形態素解析用辞書の開発』, 『言語処理学会第 30 回年次大会 発表論文集』, 155–159 頁, 2024.3.

片山久留美, 高橋雄太, 菊池そのみ, 小木曾智信

『複数短単位版「分類語彙表番号-UniDic」対応表の整備と公開』, 『言語処理学会第 30 回年次大会 発表論文集』, 165–170 頁, 2024.3.

相田太一, 近藤明日子, 小木曾智信

『「昭和・平成書き言葉コーパス」の語彙統計情報の公開』, 『言語処理学会第 30 回年次大会 発表論文集』, 177–181 頁, 2024.3.

尾崎太亮, 白井久生, 古宮嘉那子, 浅原正幸, 小木曾智信

『日本語 Universal Dependencies の通時的転移可能性について』, 『言語処理学会第 30 回年次大会 発表論文集』, 1650–1655 頁, 2024.3.

木山朔, 相田太一, 小町守, 小木曾智信, 高村大也, 松井秀俊, 持橋大地

『意味変化分析に向けた単語埋め込みの時系列パターン分析』, 『言語処理学会第 30 回年次大会 発表論文集』, 2510–2515 頁, 2024.3.

《コーパス・データベース類》

小木曾智信, 近藤明日子, 高橋雄太, 田中牧郎, 間淵洋子

『昭和・平成書き言葉コーパス』, <https://clrd.ninjal.ac.jp/shc/>, 2023.6.1.

小木曾智信

『近代口語小説 UniDic ver.2023.08』(更新), https://clrd.ninjal.ac.jp/unidic/download_all.html#unidic_novel, 2023.9.16.

小木曾智信

『旧仮名口語 UniDic ver.2023.08』(更新), https://clrd.ninjal.ac.jp/unidic/download_all.html#unidic_qkana, 2023.9.16.

小木曾智信

『近代文語 UniDic ver.2023.08』(更新), https://clrd.ninjal.ac.jp/unidic/download_all.html#unidic_kindai, 2023.9.16.

小木曾智信

『近世江戸口語 UniDic ver.2023.08』(更新), https://clrd.ninjal.ac.jp/unidic/download_all.html#unidic_kinsei-edo, 2023.9.16.

小木曾智信

『近世上方口語 UniDic ver.2023.08』(更新), https://clrd.ninjal.ac.jp/unidic/download_all.html#unidic_kinsei-kamigata, 2023.9.16.

小木曾智信

『近世文語 UniDic ver.2023.08』(更新), https://clrd.ninjal.ac.jp/unidic/download_all.html#unidic_kinsei-bungo, 2023.9.16.

小木曾智信

『中世口語 UniDic ver.2023.08』(更新), https://clrd.ninjal.ac.jp/unidic/download_all.html#unidic_chusei-kougo, 2023.9.16.

小木曾智信

『中世文語 UniDic ver.2023.08』(更新), https://clrd.ninjal.ac.jp/unidic/download_all.html

#unidic_chusei-bungo, 2023.9.16.

小木曾智信

「和歌 UniDic ver.2023.08」(更新), https://clrd.ninjal.ac.jp/unidic/download_all.html#unidic_waka, 2023.9.16.

小木曾智信

「中古和文 UniDic ver.2023.08」(更新), https://clrd.ninjal.ac.jp/unidic/download_all.html#unidic_wabun, 2023.9.16.

小木曾智信

「上代語 UniDic ver.2023.08」(更新), https://clrd.ninjal.ac.jp/unidic/download_all.html#unidic_jodai, 2023.9.16.

小木曾智信, 堤智昭

「Web 茶まめ」(更新), <https://chamame.ninjal.ac.jp/>, 2024.3.29.

片山久留美, 高橋雄太, 菊池そのみ, 小木曾智信

「複数短単位対応版「分類語彙表番号-UniDic」対応表」, <https://doi.org/10.15084/0002000248>, 2024.3.29, DOI: 10.15084/0002000248.

片山久留美, 渡辺由貴, 黒川茉莉ほか(開発協力者・プロジェクトリーダーとしての業績)

「室町時代編 II キリシタン資料 Ver.1.1」, <https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/muromachi.html#Christian>, 2024.3.29.

服部紀子, 間淵洋子, 近藤明日子, ヤロシュ島田むつみ, 竹内綾乃(開発協力者・プロジェクトリーダーとしての業績)

「明治・大正編 II 教科書 Ver.1.2」, https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/meiji_taisho.html#kyokasho, 2024.3.29.

《その他の出版物・記事》

小木曾智信

「「通時コーパス」シンポジウム 2023」, 『自然言語処理』, 30 巻 3 号, 1116–1121 頁, 2023.9, DOI: 10.5715/jnlp.30.1116.

【講演・口頭発表】

大川孔明, 青池亨, 古宮嘉那子, 小木曾智信, 北崎勇帆

「シンポジウム: 情報技術と大規模テキスト資源がひらく日本語史研究」, シンポジウムパネル, 日本語学会 2023 年度春季大会, 青山学院大学, 2023.5.21.

小木曾智信, 近藤明日子, 高橋雄太, 間淵洋子

「ワークショップ: 『昭和・平成書き言葉コーパス』の構築と公開」, ワークショップパネル, 日本語学会 2023 年度春季大会, 青山学院大学, 2023.5.21.

小木曾智信

「『昭和・平成書き言葉コーパス』の構築・公開と権利処理」, 日本語学会 2023 年度春季大会, 青山学院大学, 2023.5.21.

Takeuchi Ayano and Ogiso Toshinobu

“Words Shape Characters: A Case Study of Correspondence Analysis on Characters’ Words in The Tale of Genji”, Digital Humanities Conference 2023 (DH2023), Graz (オーストリア), 2023.7.12, DOI: 10.5281/zenodo.8107823.

Ogiso Toshinobu and Tsutsumi Tomoaki

“WebChamame: An Online Tool for Morphological Analysis of Various Historical Japanese Texts using UniDic Dictionaries”, ポスター発表, Digital Humanities Conference 2023 (DH2023), Graz (オーストリア), 2023.7.13, DOI: 10.5281/zenodo.8107899.

小木曾智信

「現代語の書き言葉コーパスが果たす役割—『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の意義と今後の課題」, 招待講演, 文化審議会国語分科会国語課題小委員会, オンライン, 2023.7.21.

小木曾智信

「データにもとづく日本語の歴史研究—『昭和・平成書き言葉コーパス』の可能性—」, 招待講演, 日本語データサイエンス研究の最先端, オンライン (上海外国語大学・中国), 2023.9.26.

小木曾智信, 近藤明日子, 高橋雄太, 片山久留美, 浅原正幸

「ワークショップ: コーパスと語彙資源の連携」, ワorkshopパネル, 日本語学会 2023 年度秋季大会, オンライン, 2023.10.29.

小木曾智信

「『日本語歴史コーパス』『昭和・平成書き言葉コーパス』利用のべし・べからず」, 2023 年度 NINJAL シンポジウム「コーパス利用のべし・べからず」, オンライン, 2023.11.5.

小木曾智信, 竹内綾乃

「国立国語研究所「通時コーパス」プロジェクトの展開」, ポスター発表, DHSympo2023: 国際シンポジウム「デジタル・ヒューマニティーズと研究基盤 欧州と日本の最新トレンド」, 東京ビッグサイト, 2023.11.18.

田中牧郎, 近藤明日子, 小木曾智信, 永澤済

「コーパスによって近現代 140 年の日本語文法の変化を探る—『日本語歴史コーパス』と『昭和・平成書き言葉コーパス』を用いて—」, シンポジウムパネル, 第 24 回日本語文法学会, 関西大学, 2023.12.2.

小木曾智信

「『日本語歴史コーパス』と『昭和・平成書き言葉コーパス』に見る可能表現形式の変遷」, 第 24 回日本語文法学会, 関西大学, 2023.12.2.

堤智昭, 中村壮範, 小木曾 智信

「形態素解析ツール Web 茶まめによるコーパス作成支援」, インタラクティブ発表, じんもんこん 2023, オンライン, 2023.12.2.

久保証子, 市村太郎, 小木曾 智信

「『古今集遠鏡』コーパスの設計と構築」, インタラクティブ発表, じんもんこん 2023, オンライン, 2023.12.2.

小木曾智信

「『日本語歴史コーパス』ver.2024.3: 通時コーパス拡張進捗報告」, 「通時コーパス」シンポジウム 2024, オンライン, 2024.3.10.

片山久留美, 高橋雄太, 菊池そのみ, 小木曾智信

「複数短単位版「分類語彙表番号-UniDic」対応表の整備と公開」, ポスター発表, 言語処理学会第 30 回年次大会, 神戸国際会議場, 2024.3.12.

尾崎太亮, 白井久生, 古宮嘉那子, 浅原正幸, 小木曾智信

「日本語 Universal Dependencies の通時的転移可能性について」, ポスター発表, 言語処理学会第 30 回年次大会, 神戸国際会議場, 2024.3.12.

小木曾智信, 尹熙洙, 王竣磊, 岡田純子

「関西方言を対象とした形態素解析用辞書の開発」, ポスター発表, 言語処理学会第 30 回年次大会, 神戸国際会議場, 2024.3.12.

相田太一, 近藤明日子, 小木曾智信

「『昭和・平成書き言葉コーパス』の語彙統計情報の公開」, ポスター発表, 言語処理学会第 30 回年次大会, 神戸国際会議場, 2024.3.12.

木山朔, 相田太一, 小町守, 小木曾智信, 高村大也, 松井秀俊, 持橋大地

「意味変化分析に向けた単語埋め込みの時系列パターン分析」, 言語処理学会第 30 回年次大会, 神戸国

際会議場, 2024.3.14.

高橋雄太, 相田太一, 近藤明日子, 間淵洋子, 小木曾智信

『『昭和・平成書き言葉コーパス』の公開と研究利用—著作権処理をしないコーパスの可能性—』, 言語処理学会第30回年次大会併設ワークショップ JLR2024, オンライン, 2024.3.15.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・シンポジウム「情報技術と大規模テキスト資源がひらく日本語史研究」(主催: 日本語学会), 青山学院大学, 2023.5.21.
- ・NINJAL シンポジウム「コーパス利用のべし・べからず」(主催: 国立国語研究所), オンライン, 2023.11.5.
- ・「通時コーパス」シンポジウム 2024 (主催: 「通時コーパス」プロジェクト, 共催: SHC 科研, 抄物コーパス科研), オンライン, 2024.3.10.
- ・第1回 OpenCHJ ワークショップ(みんなでつくる歴史コーパス)(主催: 「通時コーパス」プロジェクト), オンライン, 2024.3.10.
- ・テーマセッション5: ことばと地理空間の情報処理(主催: 言語処理学会), 神戸国際会議場, 2024.3.12.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・国立歴史民俗博物館: 機関拠点型基幹研究プロジェクトアドバイザリーボード委員
- ・言語処理学会誌『自然言語処理』: 査読
- ・Venice University Press “Annali di Ca’ Foscari. Serie orientale”: 査読
- ・取材を受けた記事・番組:
 - ・『チョコちゃんのもっと素朴なギモン—答えられないと叱られる!?!』, 宝島社, 2023.12.22.
 - ・チョコちゃんに叱られる#236「なぜ『冷たい』という?」, NHK, 2024.1.19.
 - ・「自然言語処理の基礎技術「形態素解析」とは?」, ことばの波止場 13-2, 2024.3.29.

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

小木曾智信, 高橋雄太, 竹内綾乃, ヤロシュ島田むつみ

「CHJ の紹介」, 『日本語歴史コーパス』『昭和・平成書き言葉コーパス』『中納言』講習会【初級編】, 国立国語研究所, 2023.9.6.

小木曾智信, 高橋雄太, 堤智昭

「OpenCHJ ワークショップ(みんなでつくる歴史コーパス)について(付「みんなごん」と今後の展開)」, 第1回 OpenCHJ ワークショップ(みんなでつくる歴史コーパス), 国立国語研究所, 2024.3.10.

《総合研究大学院大学「日本語言語科学コース」》

- ・授業科目『言語研究基礎論 IIIA』, 『言語資源学』, 『言語資源学演習 1』
- ・指導学生 1 名(主担当 1 名)

《大学院非常勤講師(集中講義)》

- ・九州大学大学院人文科学府『国語学演習 III/日本語史資料演習 I』

《若手研究者の受入》

- ・日本学術振興会特別研究員: 1 名

浅原 正幸 (あさはら まさゆき) 研究系教授

【学位】 博士 (工学) (奈良先端科学技術大学院大学, 2003)

【学歴】 京都大学総合人間学部基礎科学科卒業 (1998), 奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科博士前期課程修了 (2001), 奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科博士後期課程短期修了 (2003)

【職歴】 奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科 助手・助教 (2004), 国立国語研究所コーパス開発センター 特任准教授 (2012), 同 言語資源研究系 准教授 (2014), 同 コーパス開発センター 准教授 (2016), 同 コーパス開発センター 教授 (2019)

【専門領域】 自然言語処理

【所属学会】 言語処理学会, 日本言語学会, 日本語学会, 日本認知科学会

【学会等の役員・委員】 言語処理学会 論文誌副編集長, 日本言語学会 大会運営委員

【受賞歴】

- 2024: 言語処理学会第 30 回年次大会優秀発表賞 (大村舞, 川端良子, 小西光, 浅原正幸, 竹内誉羽「地図を刺激に用いた位置情報参照表現の収集」, 言語処理学会)
- 2024: 言語処理学会第 30 回年次大会委員特別賞 (船曳日佳里, 持橋大地, 浅原正幸, 小林一郎「潜在的正規分布によるイベントの時間関係の推定」, 言語処理学会)
- 2021: 言語処理学会第 27 回年次大会委員特別賞 (栗林樹生, 大関洋平, 伊藤拓海, 吉田遼, 浅原正幸, 乾健太郎「予測の正確な言語モデルがヒトらしいとは限らない」, 言語処理学会)
- 2021: 電気情報通信学会言語理解とコミュニケーション研究会 2020 年優秀発表賞 (久本空海, 山村崇, 勝田哲弘, 竹林佑斗, 高岡一馬, 内田佳孝, 岡照晃, 浅原正幸「chiVe: 製品利用可能な日本語単語ベクトル資源の実現へ向けて～形態素解析器 Sudachi と超大規模ウェブコーパス NWJC による分散表現の獲得と改良～」, 電気情報通信学会)
- 2020: 言語処理学会第 26 回年次大会言語資源賞 (浅原正幸, 加藤祥「BERTed-BCCWJ: 多層文脈化単語埋め込み情報を付与した『現代日本語書き言葉均衡コーパス』データ」, 言語資源協会・言語処理学会)
- 2019: 言語処理学会論文誌『自然言語処理』2018 年度論文賞 (浅原正幸「名詞句の情報の状態と読み時間について」)
- 2019: 言語処理学会第 25 回年次大会言語資源賞 (浅原正幸「クラウドソーシングによる単語親密度の推定」, 言語資源協会・言語処理学会)
- 2014: 言語処理学会論文誌『自然言語処理』2013 年度論文賞 (吉川克正, 浅原正幸, 松本裕治「Markov Logic による日本語述語項構造解析」)
- 2011: Best paper award of the 7th International Conference on Natural Language Processing and Knowledge Engineering (Yanyan Luo, Masayuki Asahara, and Yuji Matsumoto “Dual Decomposition for Predicate-Argument Structure Analysis”)
- 2010: The Best Paper Award of the SMBM2010 (the Fourth International Symposium on Semantic Mining in Biomedicine) (Katsumasa Yoshikawa, Tsutomu Hirao, Sebastian Riedel, Masayuki Asahara, Yuji Matsumoto “Coreference Based Event-Argument Relation Extraction on Biomedical Text”)
- 2008: 言語処理学会第 14 回年次大会優秀発表賞 (岩立将和, 浅原正幸, 松本裕治「トーナメントモデルを用いた日本語係り受け解析」)
- 2003: 平成 15 年度情報処理学会山下記念研究賞 (浅原正幸「日本語固有表現抽出における冗長的な形態素解析の利用」)

【2023 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「実証的な理論・対照言語学の推進」: プロジェクトリーダー (サブプロジェクト「アノテーションデータを用いた実証的計算心理言語学」: プロジェクトリーダー, サブプロジェクト「述語の意味と文法に関する実証的類型論」: メンバー)

- ・基幹型共同研究プロジェクト「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究」：メンバー
- ・基幹型共同研究プロジェクト「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」：メンバー（サブプロジェクト「学習者用辞書資源の構築」：メンバー）
- ・共同利用型共同研究（A）「単語分散表現と文脈依存単語埋め込み表現を利用した語義の埋め込み表現の構築」：コーディネーター
- ・共同利用型共同研究（A）「話速の変化にともなう調音運動と音響特性の変化の観測」：コーディネーター
- ・共同利用型共同研究（C）「BCCWJ/CSJ への生理指標アノテーション付加」：コーディネーター
- ・共同利用型共同研究（C）「LF-based Collocation Translation 語彙関数を用いたコロケーションの機械翻訳」：コーディネーター
- ・共同利用型共同研究（C）「統計的指標を用いた日本語テキストの数理解明」：メンバー
- ・共同利用型共同研究（C）「Corpus Research on Clausal Center-embedding」：コーディネーター

【2023 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究（B）「日本語コーパスに対する単語心象性情報付与とその利用」, 22H00663: 研究代表者
- ・挑戦的研究（萌芽）「文脈化単語埋め込みによる 1 億語規模の比喩表現実態調査」, 22K18483: 研究代表者
- ・基盤研究（C）「文体分析を目的としたコーパスの文書情報拡張及びその利用」, 18K00634: 研究分担者
- ・基盤研究（C）「素粒子実験のデータ解析技術を応用した日本語テキストの数理解明」, 23K17512: 研究分担者
- ・共同研究（株式会社ワークスアプリケーションズ）「日本語事前学習モデル chiTra の研究開発」
- ・共同研究（株式会社 LegalOn Technologies）「日本語形態素解析器の研究開発」
- ・共同研究（株式会社リクルート）「日本語版 Universal Dependencies 解析器に関する共同研究」
- ・共同研究（LINE 株式会社/SB Intuitions 株式会社）「汎用大規模言語モデルを用いた知的データの構築・活用に関連する研究」
- ・共同研究（ホンダリサーチインスティテュートジャパン）「わかりやすい場所参照表現の事例」
- ・共同研究（シェルパ・アンド・カンパニー）「日本語形態素解析器の研究開発」

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

Mai Omura, Aya Wakasa, Hiroshi Matsuda, and Masayuki Asahara

“UD_Japanese-CEJC: Dependency Relation Annotation on Corpus of Everyday Japanese Conversation”, *24th Meeting of the Special Interest Group on Discourse and Dialogue (SIGDIAL)*, pp. 324–335, 2023.9.15, <https://aclanthology.org/2023.sigdial-1.29/>.

Anna Sato, Daichi Mochihashi, Ichiro Kobayashi, Junichi Chikazoe, Masayuki Asahara, Satoshi Iso, Shotaro Funai, and Yutaka Shikano

“Investigation of Information Processing Mechanisms in the Human Brain during Reading Tanka Poetry”, *32nd International Conference on Artificial Neural Networks*, pp. 407–418, 2023.9.22, DOI: 10.1007/978-3-031-44198-1_34.

Bocheng Chen and Masayuki Asahara

“Word Familiarity Rate Estimation for Japanese Functional Words Using a Bayesian Linear Mixed Model”, *The 37th Pacific Asia Conference on Language, Information and Computation (PACLIC 37)*, pp. 107–112, 2023.12.1, <https://aclanthology.org/2023.paclic-1.11/>.

Yoshiko Kawabata, Mai Omura, Masayuki Asahara, and Johane Takeuchi

“Spatial Information Annotation Based on the Double Cross Model”, *The 37th Pacific Asia Conference on Language, Information and Computation (PACLIC 37)*, pp. 137–144, 2023.12.1, <https://aclanthology.org/2023.paclic-1.14/>.

Soma Asada, Kanako Komiya, and Masayuki Asahara

“All-Words Word Sense Disambiguation for Historical Japanese”, *The 37th Pacific Asia Conference on Language, Information and Computation (PACLIC 37)*, pp. 201–209, 2023.12.1, <https://aclan>

thology.org/2023.paclic-1.20/.

浅原正幸, 川崎采香, 上原泉, 酒井裕, 谷口巴, 小林一郎, 越智綾子, 鈴木彩香

「『過去』『未来』を主題とする作文の分析」, 『計量国語学』, 34 巻 1 号, 17–30 頁, 2023.6.

加藤祥, 浅原正幸

「『比喩表現の理論と分類』データの電子化および情報付与」, 『国立国語研究所論集』, 25 号, 1–19 頁, 2023.7, DOI: 10.15084/0002000009.

加藤祥, 浅原正幸

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の小説サンプルに対する分類情報付与」, 『国立国語研究所論集』, 25 号, 59–74 頁, 2023.7, DOI: 10.15084/0002000013.

加藤祥, 浅原正幸

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』新聞サブコーパスの記事情報付与」, 『日本語の研究』, 19 巻 2 号, 206–214 頁, 2023.8, DOI: 10.20666/nihongonokenkyu.19.2_206.

浅原正幸, 池上尚, 鈴木泰, 市村太郎, 近藤明日子, 加藤祥, 山崎誠

「『日本語歴史コーパス』に対する分類語彙表番号アノテーションとその利用」, 『日本語の研究』, 19 巻 3 号, 88–96 頁, 2023.12.

加藤祥, 浅原正幸

「比喩指標の収集と喩辞と被喩辞の同一性否定の観点による分類」, 『認知科学』, 31 巻 1 号, 58–72 頁, 2024.3, DOI: 10.11225/cs.2023.062.

《総説・解説・プレプリントなど》

浅原正幸, 河原大輔, 久保隆宏, 坂口慶祐, 柴田知秀, 松田寛

「日本語における評価用データセットの構築と利用性の向上—JLR2023 ワークショップ」, 『自然言語処理』, 30 巻 2 号, 857–869 頁, 2023.6, DOI: 10.5715/jnlp.30.857.

浅原正幸

「テキストの読み時間と過去・現在・未来」, 『CLINICAL NEUROSCIENCE』, 41 巻 8 号, 1014–1017 頁, 2023.8.

《コーパス・データベース類》

加藤祥, 森山奈々美, 浅原正幸, 国立国語研究所

「BCCWJ-PNmeta Version 2.0」, <https://github.com/masayu-a/BCCWJ-PNmeta/>, 2023.8.24.

Sachi Kato and Masayuki Asahara

「BCCWJ-PB9X3meta Version 1.0」, <https://github.com/masayu-a/BCCWJ-PB9X3meta/>, 2023.9.3.

国立国語研究所, Sachi Kato, Masayuki Asahara, Yuki Oyamada, Wakako Kashino, and Kikuo Maekawa

「BCCWJ-WLSP-AUX-OT」(関係者限定公開), <https://github.com/masayu-a/BCCWJ-WLSP-AUX-OT>, 2023.10.5.

Masayuki Asahara, Nao Ikegami, Tai Suzuki, Taro Ichimura, Asuko Kondo, Sachi Kato, and Makoto Yamazaki

「CHJ-WLSP」(関係者限定公開), <https://github.com/masayu-a/CHJ-WLSP>, 2023.10.29.

National Institute for Japanese Language and Linguistics

「BCCWJ-TimeBank (Version 3.0.0)」(関係者限定公開), 2023.10.29.

浅田宗磨, 古宮嘉那子, 国立国語研究所

「BCCWJ-WSD-frequency」, <https://github.com/masayu-a/BCCWJ-WSD-frequency>, 2024.1.12.

浅田宗磨, 古宮嘉那子, 国立国語研究所

「CEJC-WSD-frequency」, <https://github.com/masayu-a/CEJC-WSD-frequency>, 2024.2.8.

松吉俊, 佐藤理史, 国立国語研究所

「TSUTSUJI-familiarity Version 2.0」, <https://github.com/masayu-a/TSUTSUJI-familiarity>, 2024.2.11.

浅原正幸

「KANJI-familiarity」, <https://github.com/masayu-a/KANJI-familiarity>, 2024.2.11.

浅原正幸, 川端良子, 大村舞, 小西光, 竹内誉羽

「HRI-JP-LIRE-DB」, <https://github.com/masayu-a/HRI-JP-LIRE-DB>, 2024.3.4.

浅原正幸, 川端良子, 大村舞, 小西光, 竹内誉羽

「HRI-JP-RIRE-DB」, <https://github.com/masayu-a/HRI-JP-RIRE-DB>, 2024.3.4.

浅田宗磨, 古宮嘉那子, 国立国語研究所

「BCCWJ-WSD」(関係者限定公開), 2024.3.5.

浅田宗磨, 古宮嘉那子, 国立国語研究所

「CEJC-WSD」(関係者限定公開), 2024.3.5.

浅田宗磨, 古宮嘉那子, 国立国語研究所

「BCCWJ-WSD-PNmeta-frequency」(関係者限定公開), 2024.3.7.

【講演・口頭発表】

船曳日佳里, Kanashiro Pereira Lis, 木村麻友子, 浅原正幸, 越智綾子, Cheng Fei, 小林一郎

「マルチタスク学習を用いた時間を認識する汎用言語モデルの構築」, 2023 年度人工知能学会全国大会 (第 37 回), 熊本, 2023.6.6–9.

佐藤杏奈, 近添淳一, 船井正太郎, 持橋大地, 鹿野豊, 浅原正幸, 磯暁, 小林一郎

「短歌を読む際の情動に関するヒト脳内の情報処理機構の解析」, 2023 年度人工知能学会全国大会 (第 37 回), 熊本, 2023.6.6–9.

Yosuke Takubo, Masayuki Asahara, and Makoto Yamazaki

“Analyzing Japanese texts with evaluation of randomness in binary expression”, ポスター発表, Quantitative Linguistics Conference 2023, ローザンヌ (スイス), 2023.6.28–30.

船井正太郎, 近添淳一, 持橋大地, 浅原正幸, 松井鉄平, 鹿野豊, 川島寛乃, 磯暁

「ヒト脳と人工知能における短歌の鑑賞に関する神経活動の比較」, 第 46 回日本神経科学大会, 仙台, 2023.8.1–4.

佐藤杏奈, 近添淳一, 船井正太, 持橋大地, 鹿野豊, 浅原正幸, 磯暁, 小林一郎

「短歌を読んだ時の感情に関する脳活動解析」, ポスター発表, 第 46 回日本神経科学大会, 仙台, 2023.8.1–4.

Ryoko Uno, Kanako Komiya, and Masayuki Aashara

“How do we categorize known and unknown ideophones? A case study of Japanese reduplicated ideophones”, the Sixteenth International Cognitive Linguistics Conference (ICLC-16), デュッセルドルフ (ドイツ), 2023.8.7–11.

浅原正幸, 加藤祥, 高松純子

『日本経済新聞記事オープンコーパス』に対する言語受容情報付与」, ポスター発表, 日本認知科学会第 40 回大会, 函館, 2023.9.7–9.

加藤祥, 浅原正幸

「語の表記の違いによって想起される語の傾向が異なる」, ポスター発表, 日本認知科学会第 40 回大会, 函館, 2023.9.7–9.

宇野良子, 古宮嘉那子, 浅原正幸

「オノマトペ由来の新動詞分析のための大規模アンケート調査」, ポスター発表, 日本認知科学会第 40 回大会, 函館, 2023.9.7–9.

浅原正幸

「分布意味論に基づく語彙研究」, シンポジウムパネル, 日本語学会 2023 年度秋季大会, オンライン, 2023.10.28–29.

小林滉河, 水本智也, 佐藤敏紀, 浅原正幸

「Japanese Real Toxicity Prompts: 日本語大規模言語モデルの有害性調査」, 第 258 回自然言語処理・

第 149 回音声言語情報処理合同研究発表会, 東京, 2023.12.2-4.

浅田宗磨, 古宮嘉那子, 浅原正幸

『『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に対する分類語彙表番号悉皆付与』, 言語処理学会第 30 回年次大会, 神戸, 2024.3.11-15.

赤間怜奈, 浅原正幸, 若狭絢, 大村舞, 鈴木潤

「日本語日常対話コーパスへの基礎解析アノテーション」言語処理学会第 30 回年次大会, 神戸, 2024.3.11-15.

船曳日佳里, 持橋大地, 浅原正幸, 小林一郎

「潜在的正規分布によるイベントの時間関係の推定」言語処理学会第 30 回年次大会, 神戸, 2024.3.11-15.

尾崎太亮, 白井久生, 古宮嘉那子, 浅原正幸, 小木曾智信

「日本語 Universal Dependencies の通時的転移可能性について」, ポスター発表, 言語処理学会第 30 回年次大会, 神戸, 2024.3.11-15.

大村舞, 川端良子, 小西光, 浅原正幸, 竹内誉羽

「地図を刺激に用いた位置情報参照表現の収集」, ポスター発表, 言語処理学会第 30 回年次大会, 神戸, 2024.3.11-15.

川端良子, 大村舞, 小西光, 浅原正幸, 竹内誉羽

「地図を刺激に用いた経路情報参照表現の収集」, ポスター発表, 言語処理学会第 30 回年次大会, 神戸, 2024.3.11-15.

加藤祥, 浅原正幸

『『日本経済新聞記事オープンコーパス』に対するメタデータと語義情報付与』, ポスター発表, 言語処理学会第 30 回年次大会, 神戸, 2024.3.11-15.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・(国際会議) 1st Workshop on Ancient Language Processing : Program Committee
- ・言語学フェス 2024 : 実行委員
- ・言語処理学会 : 年次大会 NLP2024 ワークショップ日本語言語資源の構築と利用性の向上, 提案者
- ・The 2024 Joint International Conference on Computational Linguistics, Language Resources and Evaluation (LREC-COLING 2024) : Program Committee member
- ・2024 Annual Conference of the North American Chapter of the Association for Computational Linguistics (NAACL 2024), Senior Area Chair (SAC) : Resources and Evaluation
- ・言語処理学会 : 30 周年記念事業委員会 委員

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

浅原正幸

『『日本語歴史コーパス』に対する分類語彙表番号アノテーション』, 東京外国語大学国際日本学研究院 NINJAL ユニット講演会, オンライン (東京外国語大学), 2023.7.12.

浅原正幸

『『現代日本語書き言葉均衡コーパス』のメタデータ』, 2023 年度 NINJAL シンポジウム, オンライン (国立国語研究所), 2023.11.5.

浅原正幸

「日本語歴史コーパスに対する分類語彙表番号情報アノテーション」, 中山大学 學術フォーラム「Digital Humanities×Classical Studies」, オンライン (中山大学・中国), 2023.11.19.

浅原正幸

「分布意味論に基づく言語研究」, 東京外国語大学国際日本学研究院 NINJAL ユニット講演会, オンライン (東京外国語大学), 2023.12.13.

浅原正幸

「分布意味論入門」，分布意味論入門セミナー，オンライン（立命館大学国際言語文化研究所），2024.2.1.

《連携大学院》

・東京外国語大学 国際日本学研究院：クロスアポイントメント教授

《大学院非常勤講師（集中講義）》

・神戸大学 人文学研究科

《博士論文審査委員》

・筑波大学 人文社会科学研究科：1 名（2024.2）

《若手研究者の受入》

・日本学術振興会特別研究員：RPD 1 名

朝日 祥之 (あさひ よしゆき) 研究系教授

【学位】 博士 (文学) (大阪大学, 2004)

【学歴】 関西外国語大学外国語学部英米語学科卒業 (1997), エセックス大学大学院言語・言語学研究科社会言語学専攻修士課程修了 (1998), 大阪大学大学院文学研究科文化表現論専攻博士課程後期課程修了 (2004)

【職歴】 独立行政法人国立国語研究所情報資料部門第二領域 研究員 (2004), 同 研究開発部門言語生活グループ 研究員 (2006), 人間文化研究機構国立国語研究所時空間変異研究系 准教授 (2009), 同 研究系 (言語変異研究領域) 准教授 (2016), 同 研究系 教授 (2023)

【専門領域】 社会言語学, 言語学, 日本語学

【所属学会】 International Congress for Dialectologists and Geolinguists, METHODS, 日本言語政策学会, 日本方言研究会, 日本語学会, 社会言語科学会, 日本移民学会, 日本言語学会, マイグレーション研究会

【学会等の役員・委員】 変異理論研究会 世話人, NWAV-AP Steering committee member, International Association of Urban Studies Scientific committee member, 北海道方言研究会 副会長, 社会言語科学会 理事・編集委員会委員長・徳川宗賢賞選考委員会委員

【受賞歴】

2022: 国立国語研究所第 25 回特別所長賞

2013: 国立国語研究所第 6 回所長賞

2010: 第 9 回徳川宗賢優秀賞 (社会言語科学会)

2010: 国立国語研究所第 1 回所長賞

【2023 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」: プロジェクトリーダー
- ・共創先導プロジェクト共創促進研究「コミュニケーション共生科学の創成」: メンバー
- ・共創先導プロジェクト共創促進研究「日本関連在外資料調査研究「ハワイにおける日系社会資料に関する資料調査と社会調査の融合的研究」」: 代表者

【2023 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究 (C) 「北海道北見市常呂町岐阜方言の尊敬語に見られる言語変容の研究」, 19K00639: 研究代表者
- ・基盤研究 (C) 「地方議会会議録の発展的研究」, 22K00582: 研究分担者

【研究業績】

《著書・編書》

朝日祥之 (編), 福永由佳, 朝日祥之, 鎌水兼貴 (著)

『日本の多言語多文化状況における言語問題に関するウェブ調査 (2021 年度調査) 報告書』, 言語問題プロジェクト (調査報告書), 2024.3.29, DOI: 10.15084/0002000253.

朝日祥之 (編著)

『現代日本語における外来語使用実態調査 (2023 年 2 月調査) 報告書』, 言語問題プロジェクト (調査報告書), 2024.3.29, DOI: 10.15084/0002000252.

朝日祥之 (編), 宮崎早季 (著)

『移民資料館アワー (国立国会図書館憲政資料館所蔵) 資料集』, 在外資料プロジェクト (調査報告書), 2024.3.29, DOI: 10.15084/0002000255.

朝日祥之 (編), 松平けあき, 宮崎早季 (著)

『フーバー・タテシコレクション (ハワイ日本文化センター所蔵) 資料集』, 在外資料プロジェクト (調査報告書), 2024.3.29, DOI: 10.15084/0002000254.

《論文・ブックチャプター》

Kenjiro Matsuda, Ichiro Ota, Yoshiyuki Asahi, and Shoji Takano

“Sociophonetics and Japanese”, Christopher Strelluf (ed.) *Routledge Handbook of Sociophonetics*, pp. 512–539, Routledge, 2023.10.31.

朝日祥之

「北見市常呂町岐阜方言に見られる世代差」, 『北海道方言研究会』, 100 号, 14–21 頁, 2024.2.20.

【講演・口頭発表】

Yoshiyuki Asahi

“The role of dialect to construct register in politics: a case of a major in Nagoya City”, EAJIS2023, Ghent University (Ghent・ベルギー), 2023.8.19.

朝日祥之

「北海道の地方自治体職員による住民とのコミュニケーション意識の変容」, 第 239 回北海道方言研究会例会, 札幌, 2024.1.21.

朝日祥之, 黄叢叢, 星川陸, Patricio Varela Alminon

「日本に居住する外国人の生活場面における言語選択と言語問題意識—中国・韓国・ネパール・フィリピン出身者に対する web 調査結果から—」, 第 48 回社会言語科学会研究大会, 福岡, 2024.3.9.

【研究調査】

- ・神奈川県愛川町
- ・静岡県静岡市
- ・静岡県磐田市
- ・群馬県前橋市
- ・群馬県高崎市
- ・アメリカ合衆国ハワイ州 (オアフ島・ハワイ島)

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・シンポジウム「日本のことばを知る・学ぶ：手話と日本語が飛び交う日常空間」（主催：言語問題プロジェクト, 共催：コミュニケーション共生科学の創成）, オンライン, 2023.10.1.
- ・在外資料プロジェクト研究発表会（主催：在外資料プロジェクト）, オンライン, 2023.12.2.
- ・「ハワイに生きる」と比嘉太郎～ふるさと上映会 & 想いを語る～（主催：平和を守る北中城村民の会, 共催：在外資料プロジェクト）, 北中城村中央公民館, 2024.2.4.
- ・日本社会におけるダイバーシティ研究の最前線：インクルーシブな社会の実現を目指して（主催：言語問題プロジェクト, 後援：社会言語科学会）, 国立国語研究所, 2024.2.10.
- ・言語問題プロジェクト研究発表会（主催：言語問題プロジェクト）, オンライン, 2024.2.17.
- ・言語問題プロジェクト研究発表会（主催：言語問題プロジェクト）, オンライン, 2024.3.17.

【一般向けの講演・セミナーなど】

朝日祥之

「「ハワイに生きる」と比嘉太郎～ふるさと上映会 & 想いを語る～」, 「「ハワイに生きる」と比嘉太郎～ふるさと上映会 & 想いを語る～（「平和を守る北中城村民の会」招待講演）, 北中城村中央公民館, 2024.2.4.

朝日祥之

「自分のまちのことばを知り、味わおう！ ～和歌山の方言の世界とその魅力～」, トークイベント（招待）, 和歌山市民図書館, 2024.2.23.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・テレビ取材：「福永探偵社～サケ？シャケ？呼び名の違いを大調査」, 札幌テレビ, 2023.11.10, https://www.stv.jp/tv/dosanko_eve/tokushu/sh87dd0000009py9.html.
- ・ラジオ取材：「和歌山の方言は宝物」専門家が和歌山市で講演」, 和歌山放送, 2024.2.27, <https://news.>

wbs.co.jp/194154.

【大学院教育・若手研究者育成】

《総合研究大学院大学「日本語言語科学コース」》

・教授

五十嵐 陽介 (いがらし ようすけ) 研究系教授

【学位】 博士 (言語学) (東京外国語大学, 2005)

【学歴】 東京外国語大学外国語学部ロシア東欧課程ロシア科卒業 (2001), 東京外国語大学大学院地域文化研究科博士前期課程修了 (2002), 東京外国語大学大学院地域文化研究科博士後期課程修了 (2005)

【職歴】 国立国語研究所研究開発部門言語資源グループ 非常勤研究員 (2005–2006), 理化学研究所脳科学総合研究センター テクニカルスタッフ (2005–2006), 日本学術振興会特別研究員 PD (2006–2009), 広島大学大学院文学研究科 准教授 (2009–2015), 一橋大学大学院社会学研究科 准教授 (2015–2019), 一橋大学大学院社会学研究科 教授 (2019–2020), 一橋大学大学院社会学研究科 特任教授 (2020–2021), 国立国語研究所研究系 (言語変異研究領域) 教授 (2020–2023), 国立国語研究所研究系教授 (2023–), 総合研究大学院大学先端学術院先端学術選考日本語言語科学コース教授 (2023–)

【専門領域】 言語学, 音声学

【所属学会】 日本言語学会, 日本音声学学会, 西日本言語学会

【学会等の役員・委員】 日本言語学会 評議員・学会賞選考委員, 日本音声学学会 編集委員会, 西日本言語学会 運営委員

【受賞歴】

- 2017: 日本音声学学会優秀発表賞 (日本音声学学会第 30 回全国大会, 受賞発表: 「肩・種・汗・雨」と「息・舟・桶・鍋」がアクセント型で区別される日本語本地方言—佐賀県杵島方言と琉球語の比較—)
- 2017: 日本音声学学会優秀論文賞 (日本音声学学会, 受賞論文: 「名詞の意味が関わるアクセントの合流—南琉球宮古語池間方言の事例—」)
- 2013: 日本音声学学会優秀論文賞 (日本音声学学会, 受賞論文: 「琉球宮古語池間方言のアクセント体系は三型であって二型ではない」)
- 2005: 日本ロシア文学会賞 (日本ロシア文学会: Фонетика и фонология интонации в волпросительных предложениях в русском языке)
- 2001: 日本ロシア文学会学会報告奨励賞 (日本ロシア文学会第 51 回研究発表会, 受賞発表: 「ロシア語イントネーションの中和」)

【2023 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「実証的な理論・対照言語学の推進」: サブプロジェクトリーダー (「日本・琉球語諸方言におけるイントネーションの多様性解明のための実証的研究」)
- ・基幹型共同研究プロジェクト「消滅危機言語の保存研究」: メンバー
- ・異分野融合型共同利用型共同研究プロジェクト「歴史的音源アーカイブに向けたオープンコーパスの整備と AI 音声復元技術の開発」: コーディネーター
- ・共同利用型共同研究 (B) 「東北・東京方言における有声性の対立への音響指標の影響」: コーディネーター

【2023 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究 (A) 「日本語諸方言の形態素解析用辞書の構築と活用」, 23H00007: 研究分担者
- ・基盤研究 (A) 「文法記述と比較研究による琉球諸語と九州方言の歴史言語学的研究」, 22H00007: 研究分担者
- ・特別研究員奨励費 (外国人特別研究員: Celik Kenan) 「日琉祖語で再建される語の語形成の解明」, 22KF0370: 研究代表者
- ・基盤研究 (A) 「日本語諸方言コーパスによる方言音調の比較類型論的研究」, 21H04351: 研究分担者
- ・基盤研究 (C) 「日琉祖語の再建を目的とした同源性タグ・意味タグ付き語彙データベースの構築」, 21H04351: 研究代表者
- ・基盤研究 (A) 「消滅危機方言のプロソディーに関する実証的・理論的研究と音声データベースの構築」, 19H00530: 研究分担者

【研究業績】

《著書・編書》

平子達也, 五十嵐陽介, トマペラル

『日本語・琉球諸語による 歴史比較言語学』, 岩波書店, 2024.3.19, ISBN: 9784000256773.

《論文・ブックチャプター》

五十嵐陽介

「諸方言アクセント研究における定量分析—「聞こえる・聞こえない」の水掛け論からの脱却—」, 『方言の研究』, 9巻, 5–26頁, 2023.7.

五十嵐陽介

「南琉球宮古語池間方言の疑問文イントネーション」, 『日琉諸語の記述・保存研究』, 1巻, 24–42頁, 2023.8.9, DOI: 10.15084/0002000046.

【講演・口頭発表】

五十嵐陽介

「日琉諸語の韻律体系における culminativity と obligatoriness」, 令和5年度第1回「危機言語の保存と日琉諸語のプロソディー」合同研究発表会, 国立国語研究所, 2023.6.10.

鈴木成典, 鎌野慈人, 坂本誓, 鎌倉欧亮, Seunghun Lee, Yu Yan, Jeremy Perkins, 五十嵐陽介

「アーカイブデータを利用した言語研究とその応用可能性」, ポスター発表, 言語資源ワークショップ 2023, 国立国語研究所, 2023.8.28.

五十嵐陽介

「日本語・琉球語諸方言におけるアクセント型を数える:N型アクセントと多型アクセントとを区別することはできるか? (「日本・琉球語諸方言におけるイントネーションの多様性解明のための実証的研究」プロジェクト紹介)」, Evidence-based Linguistics Workshop 2023, 国立国語研究所, 2023.9.14.

金英周, 五十嵐陽介, 宇都木昭, 酒井弘

「統語構造の証拠として韻律パターンを使用することの有効性—現代韓国語の属格主語構造を一例として—」, ポスター発表, Evidence-based Linguistics Workshop 2023, 国立国語研究所, 2023.9.14.

五十嵐陽介

「南琉球宮古語池間方言における韻律的単位「韻律語」の特性」, ワークショップパネル(指名), 第167回日本言語学会大会, 同志社大学京田辺キャンパス, 2023.11.12.

【研究調査】

- ・井川方言の基礎語彙に関する方言調査(静岡県静岡市葵区井川), 2024.3.18–20.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・令和5年度第1回「危機言語の保存と日琉諸語のプロソディー」合同研究発表会(主催:「消滅危機言語の保存研究(山田真寛)」, 「日本語・琉球語諸方言におけるイントネーションの多様性解明のための実証的研究(五十嵐陽介)」), 国立国語研究所, オンライン(ハイブリッド), 2023.6.10.
- ・令和5年度第2回「危機言語の保存と日琉諸語のプロソディー」合同研究発表会(主催:「消滅危機言語の保存研究(山田真寛)」, 「日本語・琉球語諸方言におけるイントネーションの多様性解明のための実証的研究(五十嵐陽介)」), 国立国語研究所, オンライン(ハイブリッド), 2024.3.17.

【地方自治体等との連携協定締結】

- ・沖縄県宮古島市と大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所との連携・協力に関する協定」締結, 2023.11.20.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・取材記事:「宮古方言デジタルアーカイブ化を国立国語研究所保存継承で市教委に提案」, 宮古毎日新聞, 2023.7.26.
- ・取材記事:「デジタル化で保存 宮古方言継承向け 市教委 国立国語研究所が提案」, 宮古新報, 2023.7.26.
- ・取材記事:「島言葉をアーカイブ化 市と国立国語研究所 言語保全向け協定締結 地域文化を保全振興

へ」, 宮古毎日新聞, 2023.10.25.

- ・取材記事:「宮古方言デジタル保存 国語研と連携協力協定 市 城辺の民話から着手」, 宮古新報, 2023.10.25.
- ・取材記事:「宮古言葉をアーカイブ化 音源・映像デジタル保存 市長「世界中に発信を」 市と国語研究所が協定」, 沖縄タイムス, 2023.11.5.
- ・取材記事:「国立国語研究所 池間方言辞典西原版を寄贈 市教委に小中高校分 35 部」, 宮古毎日新聞, 2024.3.11.
- ・取材記事:「次世代への方言継承に 市教委 国立国語研 逆引き索引などを実装 改訂版方言辞典 オンラインで確認可能」, 宮古新報, 2024.3.11.
- ・テレビ取材:「消滅の危機…静岡の文化を守る 方言を残そう! 学生が現地調査」, SBS 静岡放送 ライブ静岡, 2024.3.20.
- ・取材記事:「「極めて深刻、祖父母世代までしか話せない」 消滅の危機…独特な方言が残る静岡市の山間部 学者の卵が「井川の言葉」を調査」, SBS NEWS/Yahoo!ニュース, 2024.3.21.
- ・取材記事:「「井川方言」継承の追い風に、国立国語研が現地調査」, 日本経済新聞, 2024.3.22.
- ・取材記事:「静岡の無アクセント地域「井川方言」、国立国語研が調査」, 日本経済新聞, 2024.3.22, <https://www.nikkei.com/article/DGXZQ0CC195SU0Z10C24A3000000/>.
- ・取材記事:「静岡・井川の言葉を後世に「地域の宝」録音、保存 国立国語研究所聞き取り調査」, 静岡新聞, 2024.3.31.
- ・取材記事:「あなたの静岡新聞「静岡市中山間地域・井川の言葉を後世に「地域の宝」録音、保存 国立国語研究所が調査」」, 静岡新聞社/Yahoo!ニュース, 2024.3.31, <https://www.at-s.com/news/article/shizuoka/1441973.html>.

【大学院教育・若手研究者育成】

《総合研究大学院大学「日本語言語科学コース」》

- ・授業科目『フィールド言語学』, 『フィールド言語学演習』, 『言語研究基礎論 IIIA』
- ・指導学生 1 名 (主担当 1 名)

《連携大学院》

- ・東京外国語大学大学院国際日本学研究院 教授 (クロスアポイントメント): 授業科目『Japan Studies 1』

《若手研究者の受入》

- ・日本学術振興会外国人特別研究員 (欧米短期): 2 名 (2023.1–2023.8, 2024.1–2024.2)
- ・外来研究員: 1 名 (ルートヴィヒ・マクシミリアン大学ミュンヘン, 2023.10–2023.11)

《大学学部非常勤講師》

- ・上智大学外国語学部 (授業科目:『一般音声学』, 『言語と人間』)

石黒 圭 (いしぐろ けい) 研究系教授, 共同利用推進センター長

【学位】 博士 (文学) (早稲田大学, 2008)

【学歴】 一橋大学社会学部卒業 (1993), 早稲田大学大学院文学研究科修士課程修了 (1995), 早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程研究指導修了 (1999)

【職歴】 一橋大学留学生センター 講師 (1999), 同 助教授 (2004), 一橋大学国際教育センター 准教授 (2010), 同 教授 (2013), 人間文化研究機構国立国語研究所日本語教育研究・情報センター 准教授 (2015), 同 教授 (2015), 同 研究系 (日本語教育研究領域) 教授, 領域代表 (2016), 同 研究情報発信センター長 (2018), 同 共同利用推進センター長 (2022), 総合研究大学院大学 教授 (2023)

【専門領域】 日本語学, 日本語教育学

【所属学会】 社会言語科学会, 専門日本語教育学会, 日本語学会, 日本語教育学会, 日本語文法学会, 表現学会, 早稲田日本語学会

【学会等の役員・委員】 専門日本語教育学会 学会誌編集委員長, 日本語学会 評議員・大会企画運営委員会委員長, 日本語文法学会 評議員, 表現学会 理事

【受賞歴】

2020: 第 20 回国立国語研究所所長賞

2019: 2018 年度秋学期早稲田大学ティーチングアワード

2018: 第 15 回日本語教育学会学会活動貢献賞

2018: 第 16 回国立国語研究所所長賞

2009: 第 7 回日本語教育学会奨励賞

【2023 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」: サブプロジェクトリーダー (「学習者の辞書資源使用の実態調査」)
- ・基幹型共同研究プロジェクト「多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究」: リーダー・サブプロジェクトリーダー (「日本語学習者の作文の縦断コーパス研究」・「日本語学習者の談話の縦断コーパス研究」)

【2023 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究 (A) 「海外縦断作文コーパスの構築に基づく文章産出能力の発達過程の実証的研究」, 21H04417: 研究代表者
- ・基盤研究 (A) 「文章の語彙レベルの学習者適合度の判定方法の開発 ―日本語教育・国語教育への応用―」, 23H00072: 研究分担者
- ・基盤研究 (B) 「人と物語が会う次元の開拓 ―短編物語データベース構築を通じた分野横断的研究―」, 20H01764: 研究分担者
- ・基盤研究 (C) 「文章の執筆過程の分析に基づく大学初年次生の文章産出能力の実証的研究」, 23K02509: 研究分担者
- ・基盤研究 (C) 「アカデミック・スキル育成を目指したオンライン縦断ゼミ談話の多角的分析」, 22K00655: 研究分担者

【研究業績】

《著書・編書》

石黒圭

『コミュ力は「副詞」で決まる』, 光文社, 2023.4.30, ISBN: 9784334046606.

石黒圭, 楊秀娥, 費晓东, 董芸, 田佳月 (著), 楊秀娥, 費晓东 (編)

『日语学术写作与研究方法』, 外语教学与研究出版社, 2023.9.1, ISBN: 9787521347968.

石黒圭

『ていねいな文章大全―日本語の「伝わらない」を解決する 108 のヒント―』, ダイアモンド社, 2023.9.20,

ISBN: 9784478069516.

石黒圭

『この1冊できちんと書ける!【新版】論文・レポートの基本』, 日本実業出版社, 2024.2.16, ISBN: 9784534060808.

《論文・ブックチャプター》

石黒圭

「第5章「伝言の伝達」課題のポイント」, 俵山雄司(編)『現場に役立つ日本語教育研究4自由に話せる会話シラバス』, くろしお出版, 93-105頁, 2023.4.10.

石黒圭

「日語篇章法的形成与发展」, 『日語学習与研究』, 226号, 1-16頁, 2023.6.25.

王慧雋, 石黒圭

「中国の大学日本語専攻におけるアカデミック・ライティング教育の現状と課題: 現地教師へのインタビューから」, 『一橋大学国際教育交流センター紀要』, 5巻, 59-70頁, 2023.7.31, DOI: 10.15057/79973.

石黒圭, 佐野彩子, 吉甜

「世界の日本語学習者の辞書ツール使用事情—スマホによる語彙検索行動の適切な支援のために—」, 『社会言語科学』, 26巻1号, 5-20頁, 2023.9.30, DOI: 10.19024/jajls.26.1_5.

《総説・解説・プレプリントなど》

石黒圭

「日本語の文章研究と文章指導」, 『日本語学』, 42巻4号, 4-11頁, 2023.12.10.

《コーパス・データベース類》

石黒圭, 野山広, 布施悠子, 鈴木靖代, 須賀和香子, 呉楚琦, 橋本宜子

「北京日本語学習者縦断コーパス」, コーパス検索アプリケーション『中納言』を通じて公開, 2024.3.8.

【講演・口頭発表】

石黒圭

「オープンサイエンス時代における日本研究のデータ収集法」, 招待講演, 大連外国語大学中国北東アジア言語研究センター主催 学術講演会, 大連外国語大学 (大連・中国), 2023.9.5.

石黒圭

「現代日本の中等教育における作文教育・作文指導の諸問題」, 招待講演, 大連外国語大学中国北東アジア言語研究センター主催 学術講演会, 大連外国語大学 (大連・中国), 2023.9.6.

石黒圭

「学習者コーパスを構築する—ポストコロナ時代における日本語運用データの収集法—」, 招待講演, 大連外国語大学中国北東アジア言語研究センター主催 学術講演会, 大連外国語大学 (大連・中国), 2023.9.7.

石黒圭

「アカデミック・ライティングと日本語研究」, 招待講演, 東北財経大学講演会, 東北財経大学 (大連・中国), 2023.9.7.

石黒圭

「オープンサイエンス時代における日本研究のデータ収集法」, 招待講演, 中山大学講演会, 中山大学 (広州・中国), 2023.9.12.

石黒圭

「文章論の成立と展開」, 招待講演, 中山大学講演会, 中山大学 (広州・中国), 2023.9.12.

石黒圭

「中国語話者のメール依頼文に見る待遇表現の諸相と指導の可能性」, 招待講演, 待遇コミュニケーション学会, オンライン, 2023.10.14.

石黒圭, 迫田久美子

「『I-JAS』『B-JAS』利用のべし・べからず」, 2023年度 NINJAL シンポジウム「コーパス利用のべし・

べからず」, オンライン, 2023.11.5.

石黒圭

「日本語学習者によるオンライン辞書活用の可能性」, 招待講演, 語彙・辞書研究会第 64 回研究発表会, 新宿 NS ビル会議室, オンライン (ハイブリッド), 2023.11.18.

李羽喆, 石黒圭

「スマホ「辞書」による語彙検索行動の実態と問題点—マカオの初級日本語学習者を事例に—」, 第 13 回国際日本語教育・日本研究シンポジウム—つながる多様性、広がる可能性—, 香港大学專業進修学院保良局何鴻燊社區書院 (香港・中国), 2023.11.19.

石黒圭

「作文教育における生成 AI の可能性と限界」, 招待講演, ハノイ国家大学外国語大学講演会, ハノイ国家大学外国語大学 (ハノイ・ベトナム), 2024.1.11.

石黒圭

「作文教育における学習者コーパスと生成 AI」, 招待講演, フェ大学外国語大学講演会, フェ大学外国語大学 (フェ・ベトナム), 2024.1.14.

石黒圭

「学習者コーパスの構築と活用」, 招待講演, 京都大学国際高等教育院附属日本語・日本文化教育センター主催第 30 回多文化交流フォーラム講演会, オンライン, 2024.2.15.

石黒圭

「紙の辞書は不要か—デジタルデバイスによる語彙検索—」, 招待講演, 2023 年度上智大学言語教育研究センター FD 講演会, 上智大学, 2024.2.24.

李羽喆, 石黒圭

「日本語学習者の論理的な思考をいかに促進させるか—成果発表のポスターに見る学術日本語授業の問題点と改善策—」, ポスター発表, 第 26 回専門日本語教育学会研究討論会, 立命館大学大阪いばらきキャンパス, 2024.3.2.

佐野彩子, 甜甜, 石黒圭

「日本語学習者はどのような語を検索しているのか—語彙検索行動データの語種に着目して—」, 第 26 回専門日本語教育学会研究討論会, 立命館大学大阪いばらきキャンパス, 2024.3.2.

石黒圭

「学習者縦断コーパスの分析から見える学習者の成長」, 招待講演, イタリア日本語教育協会 2024 年度研修会, ローマ大学 (ローマ・イタリア), 2024.3.15.

石黒圭

「学習者縦断コーパスを構築する—パンデミック下の苦闘—」, 招待講演, イタリア日本語教育協会 2024 年度研修会, ローマ大学 (ローマ・イタリア), 2024.3.15.

【研究調査】

・海外作文調査:

国立国語研究所プロジェクト「日本語学習者の作文の縦断コーパス研究」および科研費プロジェクト「海外縦断作文コーパスの構築に基づく文章産出能力の発達過程の実証的研究」におけるデータ収集。中国 7 大学, 台湾 2 大学, 韓国 2 大学, ベトナム 3 大学, タイ 2 大学, フランス 1 大学, スロヴェニア 1 大学, イギリス 1 大学の計 19 大学との共同調査体制を構築し, 学習者 936 名 (開始時) を対象に, 本年度に 3 回 (今年度に調査を開始した 3 大学は 1 回のみ), 計 1,691 本の作文データを収集した。

・海外談話調査:

中国の 1 大学, ベトナムの 1 大学, タイの 1 大学の学生を対象に, I-JAS に準拠した内容の談話・作文のオンライン縦断調査を 2 回実施し, 合計 97 時間分の談話データ, および 252 本分の作文データを収集した。

【一般向けの講演・セミナーなど】

石黒圭

「コミュ力は「副詞」で決まる」, 大連外国語大学講演会, 大連外国語大学 (大連・中国), 2023.9.4.

石黒圭

「副詞から見る日本語の魅力」, 深圳大学講演会, 深圳大学 (深圳・中国), 2023.9.9.

石黒圭

「日本語オノマトペの魅力ードキドキ・ワクワクの世界へようこそ！ー」, 華南農業大学講演会, 華南農業大学 (広州・中国), 2023.9.11.

石黒圭

「学習者コーパスで教師を育てる」, 2023 年度東京国際交流館国際シンポジウム「世界各地の社会的要請に対応可能な日本語教育シンポジウム」, 東京国際交流館プラザ平成, 2023.9.25.

石黒圭

「日本の大学院の研究生生活」, ドンア大学講演会, ドンア大学 (ダナン・ベトナム), 2024.1.12.

石黒圭

「意見文の書き方」, ハノイ工業大学講演会, ハノイ工業大学 (ハノイ・ベトナム), 2024.1.16.

石黒圭

「わかりやすく書ける作文シラバス」, シンポジウム「現場に役立つ日本語教育研究ー経験からデータへー」, 聖心女子大学, 2024.3.23.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・文化庁文化審議会国語分科会日本語教育小委員会委員
- ・東京都教育庁「学びの基盤」プロジェクトチーム委員
- ・光村図書出版『小学校国語』教科書編集委員
- ・明治書院『精選 現代の国語』・『精選 論理国語』教科書編集委員
- ・特定非営利活動法人 日本語検定 審議委員
- ・取材記事: 「「くれぐれもお礼をお伝えください」と書いてこそ社会人…ビジネスシーンで使いたい 20 の「大人の副詞」」, PRESIDENT Online, 2023.6.4.
- ・取材記事: 「「優先順位をやや上げてください」と言っではいけない…仕事ができない人ほど多用する 10 の「副詞」」, PRESIDENT Online, 2023.6.5.
- ・取材記事: 「「コミュ力は『副詞』で決まる」石黒圭氏」, 日刊ゲンダイ DIGITAL, 2023.6.8.
- ・取材記事: 「語彙力を鍛える方法 7 選。会話力や文章力も上がる!」, タウンワークマガジン, 2023.10.25.

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

石黒圭

「W-CoLeJa 台湾版の概要」2023 年度 NINJAL チュートリアル「台湾の日本語学習者の作文研究法ー日本語学習者縦断作文コーパス (W-CoLeJa) を用いてー」, 東呉大学 (台北・台湾), 2024.3.9.

《総合研究大学院大学「日本語言語科学コース」》

- ・教授

《連携大学院》

- ・一橋大学大学院言語社会研究科連携教授:

博士課程指導学生 9 名 (主指導 9 名), 修士課程指導学生 5 名 (主指導 5 名)

《博士論文審査委員》

- ・一橋大学大学院: 主査 3 件 (2023.7 (1 件), 2024.3 (2 件))

大西 拓一郎 (おおにし たくいちろう) 研究系教授

【学位】 修士 (文学) (東北大学, 1987)

【学歴】 東北大学文学部卒業 (1985), 東北大学大学院文学研究科博士課程前期 2 年の課程国文学国語学日本思想史学専攻修了 (1987), 東北大学大学院文学研究科博士課程後期 3 年の課程国文学国語学日本思想史学専攻単位取得退学 (1989)

【職歴】 東北大学文学部 助手 (1991), 国立国語研究所言語変化研究部第一研究室 研究員 (1993), 同 主任研究官 (1996), 同 室長 (1999), 人間文化研究機構国立国語研究所時空間変異研究系 教授 (2009), 同研究系 (言語変化研究領域) 教授 (2016)

【専門領域】 方言学, 言語地理学, 日本語学

【所属学会】 日本方言研究会, 日本語学会, International Society for Dialectology and Geolinguistics (SIDG), 日本地理言語学会, 変異理論研究会, 日本言語学会, 日本音声学会, 日本語文法学会, 中日理論言語学研究会, 九州方言研究会, 日本文芸研究会

【学会等の役員・委員】 日本語学会 評議員, SIDG committee of accountants

【受賞歴】

2016: 国立国語研究所第 13 回所長賞

【2023 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」: サブプロジェクトリーダー (「言語資源の空間接続」)
- ・人間文化研究機構創発センター基幹研究プロジェクト「横断的・融合的地域文化研究の領域展開: 新たな社会の創発を目指して」国語研ユニット「地域における市民科学文化の再発見と現在」: ユニット代表
- ・人間文化研究機構共創先導プロジェクト「開かれた人間文化研究を目指した社会共創コミュニケーションの構築」: 研究分担者

【2023 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・挑戦的研究 (開拓)「古辞書・古典籍データへの地理情報付与による人文学の横断的展開」, 20K20501: 研究代表者
- ・基盤研究 (A)「『方言文法辞典』データベース拡充による日本語時空間変異対照研究の多角的展開」, 20H00015: 研究分担者
- ・基盤研究 (B)「日本語敬語形成モデルの構築—生成・運用・伝播に注目して—」, 19H01266: 研究分担者
- ・基盤研究 (B)「『瀬戸内海言語図巻』の追跡調査による音声言語地図の作成と言語変容の研究」, 21H00530a: 研究分担者
- ・基盤研究 (C)「市民科学で読み解く「長野県は宇宙県」」, 22K02956: 研究分担者

【研究業績】

《著書・編書》

小林隆, 大西拓一郎, 篠崎晃一 (編)

『方言地理学の視界』, 勉誠出版, 2023.5.25, ISBN: 9784585380030.

渡辺真由子: 茅野市八ヶ岳総合博物館, 陶山徹: 長野市立博物館 (編著) (市民科学プロジェクトとしての業績)

『星と太陽: 企画展「観測者たちを夢中にさせる星々の魅力」ガイドブック』, 2023.6.30, <https://shiminkagaku-pj.org/wp-content/uploads/2023/07/booklet202307-1.pdf>.

渡辺真由子: 茅野市八ヶ岳総合博物館 (著) (市民科学プロジェクトとしての業績)

『展示: 観測者たちを夢中にさせる星々の魅力 Webbook』, 2023.6.30, <https://shiminkagaku-pj.org/exhibition/exhibition-423/>.

大西拓一郎 (編著)

『方言はなぜ存在するのか—ことばの変化と地理空間』, 大修館書店, 2023.11.1, ISBN: 9784469213959.

渡辺真由子：茅野市八ヶ岳総合博物館（著）（市民科学プロジェクトとしての業績）

『ミニ展示：知らなかった！諏訪ことば Webbook』, 2023.12.26, <https://www.city.chino.lg.jp/book/list/book321.html>.

大西拓一郎（編著）

『「市民科学」プロジェクト 2023 年度講演会・シンポジウム集録 諏訪の市民科学と天文・諏訪の地理、信州の地理と市民科学』, 2024.3.29, https://shiminkagaku-pj.org/wp-content/uploads/2024/03/20230722_20240120_All.pdf.

《論文・ブックチャプター》

大西拓一郎

「方言安定期と方言地理学」, 小林隆, 大西拓一郎, 篠崎晃一（編）『方言地理学の視界』, 勉誠出版, 21–34 頁, 2023.5.25.

大西拓一郎

「佐藤亮一氏著作一覧」, 小林隆, 大西拓一郎, 篠崎晃一（編）『方言地理学の視界』, 勉誠出版, 381–394 頁, 2023.5.25.

大西拓一郎

「概要説明」, 『諏訪の市民科学と天文・諏訪の地理、信州の地理と市民科学』, 39–44 頁, 2024.3.29.

大西拓一郎

「言語地理学からみた諏訪」, 『諏訪の市民科学と天文・諏訪の地理、信州の地理と市民科学』, 69–77 頁, 2024.3.29.

《総説・解説・プレプリントなど》

陶山徹, 早川尚志, 大西拓一郎, 渡辺真由子

「諏訪の市民科学と天文」, 『天文教育』, 35 巻 6 号, 12–17 頁, 2023.11.25.

大西拓一郎

「言語地理学からみた諏訪と市民科学」, 『市民科学ニューズレター』, 4 号, 1–4 頁, 2024.3.25.

《コーパス・データベース類》

大西拓一郎, 外山善朗

「言語地図データベース」, https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/ladp/ladb_index.html, 2024.3.31.

《展示など》

- ・「観測者たちを夢中にさせる星々の魅力」, 茅野市八ヶ岳総合博物館, 2023.6.30–10.9.
- ・「観測者たちを夢中にさせる星々の魅力」, 長野市立博物館, 2023.6.30–10.9.
- ・「信州天文文化 100 年・プラネタリウム上映「トモゴゼンは眠らない」」, 長野県伊那文化会館, 2023.8.5–27.
- ・「ミニ展示「知らなかった！諏訪ことば」」, 茅野市八ヶ岳総合博物館, 2023.12.26–2024.1.31.

【講演・口頭発表】

大西拓一郎

「言語地図データベースについて」, 日本方言研究会第 116 回研究発表会, 青山学院大学, 2023.5.19.

大西拓一郎

「GIS を通して方言の分布データと言語外のデータの照合を行う」, 招待講演, MINPAKU GIS Symposium, 国立民族学博物館, オンライン（ハイブリッド）, 2023.9.23.

大西拓一郎

「概要説明」, シンポジウム 諏訪の地理、信州の地理と市民科学, 諏訪市駅前交流テラスすわっチャオ, 2024.1.20.

大西拓一郎

「言語地理学からみた諏訪」, シンポジウム 諏訪の地理、信州の地理と市民科学, 諏訪市駅前交流テラスすわっチャオ, 2024.1.20.

【研究調査】

- ・長野県諏訪地方を中心とした地域における市民科学文化資料の調査・研究（長野県諏訪地方）

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・展示：観測者たちを夢中にさせる星々の魅力（主催：「市民科学」プロジェクト、共催：茅野市八ヶ岳総合博物館、後援：「長野県は宇宙県」連絡協議会）、茅野市八ヶ岳総合博物館、2023.6.30–10.9.
- ・展示：観測者たちを夢中にさせる星々の魅力（主催：「市民科学」プロジェクト、共催：長野市立博物館、後援：「長野県は宇宙県」連絡協議会）、長野市立博物館、2023.6.30–10.9.
- ・講演会：諏訪の市民文化と天文、変光星観測者会議 2023（主催：「市民科学」プロジェクト、共催：日本変光星観測者連盟、後援：「長野県は宇宙県」連絡協議会、長野県天文愛好者連絡会、日本天文教育普及研究会）、諏訪市駅前交流テラスすわっチャオ、2023.7.22–23.
- ・展示：信州天文文化 100 年（主催：「市民科学」プロジェクト、共催：長野県伊那文化会館）、長野県伊那文化会館、2023.8.5–27.
- ・プラネタリウム上映：トモエゴゼンは眠らない（主催：「市民科学」プロジェクト、共催：長野県伊那文化会館）、長野県伊那文化会館、2023.8.5–27.
- ・ミニ展示：知らなかった！諏訪ことば（主催：「市民科学」プロジェクト、共催：茅野市八ヶ岳総合博物館）、茅野市八ヶ岳総合博物館、2023.12.26–2024.1.31.
- ・シンポジウム：諏訪の地理、信州の地理と市民科学（主催：「市民科学」プロジェクト、共催：日本地理学会、後援：「長野県は宇宙県」連絡協議会）、諏訪市駅前交流テラスすわっチャオ、2024.1.20.
- ・空間接続プロジェクト公開研究発表会（主催：空間接続プロジェクト）、国立国語研究所、2024.2.22.
- ・プラネタリウム番組：あの夏の太陽が教えてくれたこと（主催：「市民科学」プロジェクト、共催：茅野市八ヶ岳総合博物館）、茅野市八ヶ岳総合博物館、2024.2.25–5.25.

【一般向けの講演・セミナーなど】

大西拓一郎

ギャラリートーク「諏訪の変光星観測者」、展示：観測者たちを夢中にさせる星々の魅力、茅野市八ヶ岳総合博物館、2023.7.30.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・日本語文法学会 学会誌委員
- ・取材を受けた記事・放送番組：
 - ▶「アマチュア天文家の足跡一堂に 黒点や変光星の観測データ 茅野で企画展」、信濃毎日新聞、2023.7.6.
 - ▶「太陽の黒点 茅野観測会 子どもら 天体の魅力に触れる」、信濃毎日新聞、2023.7.18.
 - ▶「「市民科学」功績ひも解く 諏訪 アマチュア天文研究史の講演会」、長野日報、2023.7.23.
 - ▶「星にまつわる企画展」、信毎ふれあいネット 茅野だより、2023.7.23.
 - ▶「信州のアマチュア天文家 継続観測資料を展示」、長野日報、2023.7.26.
 - ▶「県内アマチュア天文家が長年継続 太陽と変光星記録」、長野日報、2023.7.27.
 - ▶「変光星観測の歴史説明 八ヶ岳総合博物館企画展トークショー」、長野日報、2023.8.1.
 - ▶「信州天文文化の歩み きょうから県文で記念巡回展」、長野日報、2023.8.5.
 - ▶「信州天文文化 100 年 伊那文化会館 8 月 27 日まで」、長野日報、2023.8.6.
 - ▶「太陽観測続け 70 年 世界的にも功績 アマ天文家藤森さん（諏訪）次代につなぐ取り組みも」、長野日報、2023.8.13.
 - ▶「星空と歴史に関心を 伊那文で巡回展」、みのわ新聞、2023.8.17.
 - ▶「解説聞き太陽表面の「黒点」観測 八ヶ岳総合博物館で講座」、長野日報、2023.8.18.
 - ▶「清陵高の太陽黒点観測 アマチュア天文の出発点 獨協大の野澤准教授語る」、長野日報、2023.8.21.
 - ▶「楽しく「諏訪ことば」紹介 八ヶ岳総合博物館でミニ展示」、長野日報、2024.1.22.
 - ▶「諏訪地域に関わる科学多彩に 地理・民俗学者らシンポ」、信濃毎日新聞、2024.1.23.
 - ▶「ふるさとライブ まちの話題：諏訪の方言、わかるかな？！」、NBS 長野放送、2024.1.24.
 - ▶「「すく」「ごしたい」「水くれ」等 知らなかった諏訪ことばミニ展示」、信毎ふれあいネット 茅野だより、2024.1.28.
 - ▶「博物館と方言」、長野県民新聞、2024.2.5.

- ▶「諏訪地方の「市民科学」に光 100 年続く時や研究「全国でも先進的」研究者らのグループシンポ
や講演会予定」, 信濃毎日新聞, 2024.3.12.
- 著書に対する書評・紹介動画：
 - ▶『方言はなぜ存在するのか—ことばの変化と地理空間』（2023 年 11 月出版）に対するもの
 - 北日本新聞, 2023.11.27 (掲載).
 - フレグランスジャーナル (2023 年 12 月号), 2023.12.15 (掲載).
 - 週刊読書人, 2024.1.12 (掲載).
 - 日本経済新聞夕刊 BOOK ガイド, 2024.2.10 (掲載).
 - 月刊地理 (2024 年 2 月号), 2024.2 (掲載).
 - ゆる言語学ラジオ (1 回目), <https://www.youtube.com/watch?v=ceYj1Fa1t5A>.
 - ゆる言語学ラジオ (2 回目), <https://www.youtube.com/watch?v=LxfVadD7WxU>.
 - ▶『ことばの地理学—方言はなぜそこにあるのか』（2016 年 9 月出版）に対するもの
 - ゆる言語学ラジオ (1 回目), <https://www.youtube.com/watch?v=gktttdIRIJbM>.

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

大西拓一郎

「QGIS で作る言語地図」, 方言文法研究会, オンライン, 2023.9.2.

《総合研究大学院大学「日本語言語科学コース」》

- 授業科目『方言と空間情報』, 『方言と言語変化』
- 指導学生 1 名 (主担当 1 名)

高田 智和 (たかだ ともかず) 研究系教授, 言語資源開発センター長

【学位】 博士 (文学) (北海道大学, 2004)

【学歴】 北海道大学文学部卒業 (1999), 北海道大学大学院文学研究科国文学専攻修士課程修了 (2001), 北海道大学大学院文学研究科言語文学専攻博士後期課程修了 (2004)

【職歴】 独立行政法人国立国語研究所研究開発部門第一領域 研究員 (2005), 同 言語資源グループ 研究員 (2006), 同 言語生活グループ 研究員 (2007), 人間文化研究機構国立国語研究所理論・構造研究系 准教授 (2009), 同 研究系 (言語変化研究領域) 准教授 (2016), 同 研究系 (言語変化研究領域) 教授 (2021) 同 研究系教授 (2022)

【専門領域】 日本語学, 国語学, 文献学, 文字・表記, 漢字情報処理

【所属学会】 日本語学会, 訓点語学会, 計量国語学会, 情報処理学会, 日本漢字学会

【学会等の役員・委員】 計量国語学会 理事, 訓点語学会 運営委員, 日本語学会 評議員, 日本漢字学会 評議員, 情報処理学会情報規格調査会 SC2 専門委員会 委員

【受賞歴】

- 2022: 情報処理学会論文誌ジャーナル特選論文
- 2019: 2019 年度山下記念研究賞
- 2016: 2016 年度日本語学会春季大会発表賞
- 2013: 北海道大学文学部同窓会楡文賞
- 2010: 情報処理学会情報規格調査会標準化貢献賞
- 2010: 国立国語研究所第 1 回所長賞
- 2007: 日本規格協会標準化貢献賞

【2023 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」: サブプロジェクトリーダー (「語彙資源ポータル拡張」)
- ・基幹型共同研究プロジェクト「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」: メンバー
- ・基幹型共同研究プロジェクト「開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張」: メンバー
- ・異分野融合型共同利用型共同研究プロジェクト「国内の観光エフェメラ資料の包括的アーカイブに向けた基盤構築および実証研究」: メンバー
- ・広領域連携型基幹研究「横断的・融合的地域文化研究の領域展開: 新たな社会の創発を目指して」国語研ユニット「地域における市民科学文化の再発見と現在」: メンバー
- ・広領域連携型基幹研究「異分野融合による総合書物学の拡張的研究」国語研ユニット「古辞書類に基づく語彙資源の拡張と語彙・表記の史的変遷」: ユニット代表者
- ・共創先導プロジェクト共創促進研究「学術知デジタルライブラリの構築 (国語研拠点)」: 代表者
- ・共創先導プロジェクト共創促進研究「ハワイにおける日系社会資料に関する資料調査と社会調査の融合的研究」: 共同研究員

【2023 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・挑戦的研究 (萌芽)「時代差・地域差・分野差を集積した漢字字形情報通覧基盤の開発研究」, 20K20711: 研究代表者
- ・基盤研究 (A)「断片的史料情報の集積と歴史知識情報の相互参照体制の確立による新たな史料学構築研究」, 21H04356: 研究分担者
- ・基盤研究 (B)「資料横断的な漢字音・漢語音データベースの拡充と運用に向けた基礎的研究」, 22H00665: 研究分担者
- ・基盤研究 (C)「訓点資料の解読過程の可視化と解読文の自動生成による可用性の向上」, 23K00567: 研究分担者
- ・基盤研究 (C)「情報工学的手法によるヲコト点図の計量的分類方式と研究・教育向け検索システムの開発」, 23K11762: 研究分担者

- ・挑戦的研究(萌芽)「学術的漢字データセットの長期維持のための技術開発」, 23K17500: 研究分担者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

Tomoaki Tsutsumi, Koji Tajima, Teiji Kosukegawa, and Tomokazu Takada

“Measuring linguistics of the *wokototen* chart made inductively by deciphering *kunten* materials”,
F1000Research, 12 (506), 2023.5.16, DOI: 10.12688/f1000research.131244.1.

【講演・口頭発表】

高田智和, 鎗水兼貴

「略字・俗字」の使用意識に関する経年調査, ポスター発表, 日本語学会 2023 年度春季大会, 青山学院大学, 2023.5.20.

高田智和

「国立国語研究所が所蔵する 1948 年読み書き能力調査の資料について」, 招待講演, 東洋学へのコンピュータ利用第 36 回研究セミナー, 京都大学, 2023.7.28.

高田智和

「国立国語研究所研究資料室所蔵音声・映像データベース」, 共同利用セミナー, 国立国語研究所, 2023.9.8.

横山詔一, 高田智和, 前田忠彦, 久野雅樹, 相澤正夫

「日本人の読み書き能力 1948 年調査のナゾ—IBM システムの役割など—」, 招待講演, 東洋学へのコンピュータ利用第 37 回研究セミナー, 国立国語研究所, 2024.1.19.

高田智和, 寺島宏貴, 中島彩花

「国立国語研究所の漢字研究関係資料」, 招待講演, 東洋学へのコンピュータ利用第 37 回研究セミナー, 国立国語研究所, 2024.1.19.

高田智和

「書き言葉接触率調査」, 招待講演, 古辞書・表記史とデジタル人文学研究会, あいあい会議室(札幌市), 2024.3.8.

【研究調査】

- ・写本調査(大阪公立大杉本図書館), 2023.7.21.
- ・写本調査(松本市立博物館), 2023.11.30.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・言語資源ワークショップ 2024 (主催: 国立国語研究所言語資源開発センター, 共催: 国立情報学研究所), オンライン, 2023.8.28–29.
- ・2023 年度共同利用セミナー (主催: 国立国語研究所共同利用推進センター, 共催: 情報・システム機構 データサイエンス共同利用基盤施設社会データ構造化センター), オンライン, 2023.9.8.
- ・東洋学へのコンピュータ利用第 37 回研究セミナー (主催: 京都大学人文科学研究所, 共催: 国立国語研究所共同利用推進センター), 国立国語研究所, 2024.1.19.
- ・「学術知デジタルライブラリの構築(国語研拠点)」研究集会 (主催: 国立国語研究所), オンライン, 2024.3.26.

Prashant Vijay Pardeshi (プラシャント ウィジャイ パルデシ)

研究系教授

【学位】 博士（学術）（神戸大学，2000）

【学歴】 ジャワハルラル・ネル大学文学日本語専攻修士課程修了（1993），神戸大学大学院文化学研究科修了（2000）

【職歴】 神戸大学文学部 講師（2005），同 人文学研究科 講師（2007），人間文化研究機構国立国語研究所言語対照研究系 准教授（2009），同 教授（2011），同 研究系長（2014–2016），同 研究系（理論・対照研究領域）教授，研究情報発信センター長（2016.4–2018.3）

【専門領域】 言語学，言語類型論，対照言語学

【所属学会】 日本言語学会，日本語文法学会，関西言語学会

【受賞歴】

2023：国立国語研究所第29回所長賞

2021：国立国語研究所第22回所長賞

2020：国立国語研究所第21回所長賞

2020：国立国語研究所第20回所長賞

2019：国立国語研究所第19回所長賞

2018：国立国語研究所第16回特別所長賞

2016：国立国語研究所第12回特別所長賞

2010：国立国語研究所第1回所長賞

2007：第1回『博報「ことばと文化・教育」研究助成』優秀賞（パルデシ・プラシャント，桐生和幸，石田英明，小磯千尋（編）『日本語—マラーティー語基本動詞用法事典』，2007. 財団法人博報児童教育振興会 2005年度第1回『博報「ことばと文化・教育」研究助成』の研究助成支援による「日・マラーティー語の対照研究・日本語教育用基本動詞用法事典の作成」プロジェクト報告書）

2000：The Chatterjee-Ramanujan Prize for outstanding student contribution to “*The Yearbook of South Asian Languages and Linguistics 2000*”，Sage Publications, New Delhi, Thousand Oaks, and London. (Paper title: “The Passive and Related Constructions in Marathi.”)

【2023年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「実証的な理論・対照言語学の推進」：サブプロジェクトリーダー（「体言化の実証的な言語類型論—理論・フィールドワーク・歴史・方言の観点から—」）
- ・基幹型共同研究プロジェクト「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」：サブプロジェクトリーダー（「学習者用「日本語機能語バンク」の構築」）

【2023年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究（C）「マルチメディアを利用したイメージ・スキーマ形成の活性化と外国語教育への応用」，21K02776：研究分担者
- ・基盤研究（B）「学習者のニーズを反映した大規模な動詞用法データベースとオンライン教材の開発と公開」，22H00672：研究代表者
- ・基盤研究（B）「類別詞と文法的性を中心にした文法的体言化に関する類型的研究」，22H00659：研究分担者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

Prashant Pardeshi and Masayoshi Shibatani

“Marathi relative and complement clauses in nominalization perspective”, Rajesh Kumar and Om Prakash (eds.) *Language Studies in India*, pp. 321–352, Springer, 2023.5, DOI: 10.1007/978-981-19-5276-0_19.

【講演・口頭発表】

プラシャント・パルデンシ

「マハーラーシュトラにおける日本語教育の：過去、現在、未来」, 招待講演, マハーラーシュトラ研究会 2023 年度定例研究会, 東京大学 (東洋文化研究所), 2023.5.13.

Masayoshi Shibatani, Prashant Pardeshi, and Haowen Jiang

“Nominalization-classifier continua and overlaps in languages of China”, ポスター発表, the International workshop: Classifiers in Asian Languages, Zhejiang University (Hangzhou・中国), 2023.5.20.

プラシャント・パルデンシ

「有対動詞の類型論：使役交替言語地図 (WATP) から見えてくるもの」, 招待講演, 東北大学大学院情報科学研究科「言語変化・変異研究ユニット」主催講演会, オンライン, 2023.6.3.

プラシャント・パルデンシ

「多義動詞の学習と教育：日本語基本動詞ハンドブック」, 招待講演, 西安外国語大学日本文化経済学院講演会, オンライン, 2023.6.8.

Masayoshi Shibatani and Prashant Pardeshi

“Genders and classifiers in the perspective of dynamic functional typology”, 招待講演, the Linguistics Colloquium, Department of Linguistics, University of New Mexico, University of New Mexico (Albuquerque, ニューメキシコ州・米国), 2023.9.8.

Prashant Pardeshi, Gitanjali Bez, Niranjana Upoor, and Masayoshi Shibatani

“Gender and classifier marking in South Asian languages: A nominalization perspective”, ポスター発表, the 37th South Asian Languages Analysis Roundtable (SALA-37), オンライン, Ca’Foscari University of Venice (イタリア), 2023.10.6.

プラシャント・パルデンシ, 砂川有里子

「基本動詞ハンドブック：多義動詞の教育・学習用オンラインツール」, デモンストレーション, 2023 年度日本語教育学会秋季大会「交流ひろば」, 山形テルサ, 2023.11.25.

Masayoshi Shibatani and Prashant Pardeshi

“Genders and classifiers in the perspective of dynamic functional typology”, 招待講演, the Linguistics Workshop, Pontifical Catholic University of Peru, Pontifical Catholic University of Peru (Lima・ペルー), 2023.12.31.

【研究調査】

- ・インド (ブネー市, マンガロール市), 2023.7.22–8.18.
- ・アメリカ合衆国 (ヒューストン, アルバカーキ), 2023.8.28–9.19.
- ・ペルー (リマ市, イキトス市, クスコ市), 2023.12.23–2024.1.7.
- ・インド (ブネー市, ハルマル市, カナコナ市, マンガロール市, カリカット市), 2024.2.20–3.20.

【一般向けの講演・セミナーなど】

Prashant Pardeshi

“marathi bhasheche antarnag: bhashavidyanyachya chashmyatun shodh wa bodh (Aspects of Marathi language as viewed through the lens of linguistics: lesson from latest research)”, Tokyo Marathi Mandal Talks (マラティー語による一般向け招待講演), Funabori Community Hall (船堀コミュニティ会館), 2023.5.24.

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

Prashant Pardeshi

“Teaching and Learning Japanese Verbs and Particles: From a Contrastive Perspective with Some Indian Languages.”, NINJAL Tutorial, Online: Savitribai Phule Pune University (SPPU) (Pune・インド), 2023.8.7.

Prashant Pardeshi

“Teaching and Learning Japanese Verbs and Particles: From a Contrastive Perspective with Some Indian Languages.”, NINJAL Tutorial, Tilak Maharashtra Vidyapeeth (Pune・インド), 2023.8.8.

Prashant Pardeshi

“Development of Japanese treebank: NPCMJ (NINJAL Parsed Corpus of Modern Japanese).”, NINJAL Tutorial, Deccan College (Pune・インド), 2023.8.12.

Prashant Pardeshi

“When, why and how Japanese language studies (JLS) started in Western India: Tracing the history through documentary evidence”, NINJAL Tutorial: Steps in and tips for conducting research on Japan studies and Japanese language, Savitribai Phule Pune University (SPPU) (Pune・インド), 2024.2.22.

Prashant Pardeshi

“How to tell the difference between “tsumetai” and “samui”? The types and systems of temperature vocabulary”, NINJAL Tutorial: Steps in and tips for conducting research on Japan studies and Japanese language, Savitribai Phule Pune University (SPPU) (Pune・インド), 2024.2.22.

Prashant Pardeshi

“When, why and how Japanese language studies (JLS) started in Western India: Tracing the history through documentary evidence”, NINJAL Tutorial: Steps in and tips for conducting research on Japan studies and Japanese language, Tilak Maharashtra Vidyapeeth (Pune・インド), 2024.2.23.

Prashant Pardeshi

“How to tell the difference between “tsumetai” and “samui”? The types and systems of temperature vocabulary”, NINJAL Tutorial: Steps in and tips for conducting research on Japan studies and Japanese language, Tilak Maharashtra Vidyapeeth (Pune・インド), 2024.2.23.

Prashant PARDESHI, Govind MOPKAR, and Niranjana Upoor

“Classifier and Gender marking in Konkani: A nominalization perspective”, NINJAL tutorial: Nominalizations in Indian languages, Deccan College Post Graduate and Research Institute (Pune・インド), 2024.3.18.

松下 達彦 (まつした たつひこ) 研究系教授

【学位】 博士 (言語学, 応用言語学) (ウェリントン・ビクトリア大学, 2013)

【学歴】 早稲田大学教育学国語国文学科卒業 (1990), 名古屋大学大学院文学研究科日本言語文化専攻博士前期課程修了 (1992), 名古屋大学大学院文学研究科日本言語文化専攻博士後期課程中退 (1993), ウェリントン・ビクトリア大学人文社会学部言語学・応用言語研究科博士課程修了 (2012)

【職歴】 桜美林大学国際学部 専任講師 (1993–2000), 桜美林大学国際教育センター 助教授 (2000–2007), 桜美林大学人文学系 (基盤教育院担当) 准教授 (2007), 東京大学教養学部 特任准教授 (2012–2013), 東京大学大学院総合文化研究科・教養学部グローバルコミュニケーション研究センター 特任准教授 (2013–2015), 同 准教授 (2015–2019), 同 教授 (2019–2022), 国立国語研究所研究系 教授 (2022–)

【専門領域】 応用言語学, 日本語教育, 特に語彙の学習と教育

【所属学会】 日本語教育学会, 計量国語学会, 日本言語テスト学会, 専門日本語教育学会, 日本リメディアル教育学会, 母語・継承語・バイリンガル教育学会, 小出記念日本語教育学会, 日本語学会, 大学国語教育学会

【学会等の役員・委員】 日本語教育学会 学会誌委員会副委員長, 大学日本語教育研究協議会 副代表

【受賞歴】

- 2022: 2021 年度論文賞 (日本語教育学会: 松下達彦, 佐藤尚子, 笹尾洋介, 田島ますみ, 橋本美香「日本語の語彙量と漢字力ー第一言語と学習期間の影響ー」, 『日本語教育』, 178, 139–153 頁)
- 2019: 第 13 回奨励賞 (日本語教育方法研究会: ボイクマン総子, 根本愛子, 松下達彦「プレースメントのための日本語スピーキングテスト STAR の開発」, 第 52 回日本語教育方法研究会, 2019.3.23)
- 2017: 大会発表優秀賞 (日本リメディアル教育学会: 「日本語学術共通語彙知識の発達 (義務教育課程と高等教育課程での習得状況の比較)」, 日本リメディアル教育学会第 13 回全国大会, 2017.8.23)

【2023 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」: メンバー (サブプロジェクト「学習者辞書用語彙資源の構築」)
- ・基幹型共同研究プロジェクト「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究」: メンバー

【2023 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究 (A) 「文章の語彙レベルの学習者適合度の判定方法の開発 —日本語教育・国語教育への応用—」, 23H00072: 研究代表者
- ・国際共同研究加速基金 (国際共同研究強化 (B)) 「高等教育機関における外国語プレースメントのためのスピーキングテスト」, 20KK0005: 研究分担者
- ・基盤研究 (B) 「やさしい日本語を鍵概念とする言語教育、言語研究、言語政策に関する総合的研究」, 21H00536: 研究分担者
- ・基盤研究 (C) 「複モード・テキストの学習を教科横断的に支援する学習者用ガイドブックの開発」, 20K02776: 研究分担者
- ・基盤研究 (C) 「大学生の日本語論説文読解における学術共通語彙知識の影響と読解困難点の解明」, 21K00630: 研究分担者
- ・基盤研究 (C) 「中学生を対象とした複モード・テキストの学習支援ガイドブックの開発」, 23K02465: 研究分担者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

田島ますみ, 松下達彦, 佐藤尚子, 橋本美香, 笹尾洋介

「大学生における日本語論説文読解力と学術共通語彙理解度の関係」, 『中央学院大学人間・自然論叢』, 55 巻, 147–160 頁, 2023.9.30.

三枝令子, 稲田朋晃, 品川なぎさ, 丸山岳彦, 松下達彦, 遠藤織枝, 山元一晃, 庵功雄, 吉田素文, 鈴木知

子, 赤津晴子, 桜井亮太, 矢野晴美

「Web教材「外国人のためのわかりやすい医学用語」の開発」, 『専門日本語教育研究』, 25巻, 83–90頁, 2023.12.

《その他の出版物・記事》

松下達彦

「私の視点「文学の教育とは」」, 『朝日新聞東京本社版』, 15頁, 2024.3.8.

【講演・口頭発表】

Tatsuhiko Matsushita

“Text Covering Efficiency and Word Tier Analysis for the Proposal of Vocabulary Learning Order and the Analysis of Text Genres”, ポスター発表, Quantitative Linguistics Conference (QUALICO) 2023, ローザンヌ大学 (ローザンヌ・スイス), 2023.6.28–30.

Tatsuhiko Matsushita

“Part-of-speech proportion as an index of formality and informality: The case of Japanese”, ポスター発表, Quantitative Linguistics Conference (QUALICO) 2023, ローザンヌ大学 (ローザンヌ・スイス), 2023.6.28–30.

松下達彦, 札野寛子

「日本語教育プログラム」像を描いてみよう!」, ワークショップパネル (招待), 日本語教育学会 2023 年度支部活動【中部支部】、愛知淑徳大学, 2023.10.7.

篠崎祐介, 奥泉香, 松下達彦, 新井智大

「高校国語教科書にみる「論理」のあらわれ方—学習指導要領の改訂を受けて—」, 第145回全国大学国語教育学会, 信州大学, 2023.11.4.

田島ますみ, 松下達彦, 佐藤尚子

「日本の大学で学ぶ中国語母語話者と日本語母語話者の日本語力の比較—Can-do statements による自己評価、語彙力、読解力に着目して—」, 第13回国際日本語教育・日本研究シンポジウム, 香港大学專業進修学院 (香港・中国), 2023.11.18.

松下達彦

「どうすれば語彙学習負担を減らせるか: 漢字学習と語彙学習の関連を中心に」, 特別講演 (招待), 第3回 2023 年度「外国語習得論」講演会, オンライン (宮崎大学), 2024.1.15.

松下達彦, 浅野萌花, ABUELLIL Nora, 新井智大, 岩下智彦

『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』の『分類語彙表 (WLSP)』用法別頻度リストの可能性」, 「学習者辞書用語彙資源の構築」共同研究発表会, 国立国語研究所・オンライン (ハイブリッド), 2024.2.27.

田島ますみ, 松下達彦, 佐藤尚子, 近藤裕子

「日本語の自己評価における日本語科目再履修者と1年生正規クラス履修者の違い」, The 1st International Joint Conference for Student Success, ハワイ大学マノア校 (ハワイ・米国), 2024.3.4.

Kaori Okuizumi and Tatsuhiko Matsushita

“Intermodal Complementarity between Text and Image in Japanese, focusing on Expository Text: Differences by Grade in Elementary School”, AAAL (American Association for Applied Linguistics) 2024, ヒューストン (米国), 2024.3.16.

Tatsuhiko Matsushita

“Optimizing Vocabulary Learning Through Text Covering Efficiency and Word Tier Analysis” 特別講演 (招待), Open Lecture, Department of Modern Languages, Carnegie Mellon University, ピッツバーグ (米国), 2024.3.22.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・日本語教育学会: 学会誌運営委員会副委員長, 審査・運営協力員

- ・小出記念日本語教育学会編集担当役員
- ・第二言語習得研究会ジャーナル編集委員
- ・The RELC Journal (Regional Language Centre, Singapore)：査読委員
- ・翻訳：「多読による語彙学習に関する研究」, Nation, I.S.P. and Waring, R.(著), 田畑サンドーム光恵 (監訳), 『言語教育における多読』(くろしお出版), 第9章

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

MATSUSHITA Tatsuhiko

“The Importance of “Tamari-ba” as a Buffer Zone for Communication: Transformation of Communication Space during the COVID-19 Pandemic”, Guest lecturer for “Pragmatics of Japanese”, University of Pittsburgh (ピッツバーグ・米国), 2024.3.21.

《総合研究大学院大学「日本語言語科学コース」》

- ・指導学生1名(副担当1名)

横山 詔一 (よこやま しょういち) 研究系教授

【学位】 博士 (心理学) (筑波大学, 1991)

【学歴】 横浜国立大学教育学部卒業 (1981), 筑波大学大学院博士課程心理学研究科修士号取得 (1983), 筑波大学大学院博士課程心理学研究科退学 (1985)

【職歴】 上越教育大学学校教育学部 助手 (1985), 国立国語研究所情報資料研究部・電子計算機システム開発研究室 研究員 (1991), 同 情報資料研究部 主任研究官 (1995), 独立行政法人国立国語研究所情報資料部門 領域長 (2001), 同 研究開発部門 グループ長 (2006), 人間文化研究機構国立国語研究所理論・構造研究系 教授 (2009), 同 研究情報資料センター長 (2009–2013), 同 研究系 (言語変化研究領域) 教授 (2016)

【専門領域】 認知科学, 心理統計, 日本語学

【所属学会】 日本心理学会, 社会言語科学会, 計量国語学会, 日本語学会, 日本教育工学会, 行動計量学会

【学会等の役員・委員】 計量国語学会 理事, 日本語学会 編集委員

【受賞歴】

2019: 国立国語研究所第 18 回所長賞

2010: 社会言語科学会第 9 回徳川宗賢賞 (優秀賞)

2010: 国立国語研究所第 1 回所長賞

1997: 日本教育工学会第 11 回日本教育工学会論文賞

【2023 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」: メンバー
- ・共同利用型研究 (公募型) プロジェクト「方言音声と共通語音声の使い分けの変化に関する研究」: コーディネーター
- ・共同利用型研究 (公募型) プロジェクト「言語をめぐる社会調査史料の活用法に関する研究」: メンバー

【2023 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究 (C) 「難解な感染症関連用語の言い換えや説明の案出と理解促進効果の検証」, 21K00551: 研究代表者
- ・基盤研究 (B) 「AI 翻訳を用いた多言語運用能力の習得と言語学習環境の構築・言語教育の在り方の解明」, 21H00903: 研究分担者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

横山詔一, 相澤正夫, 田中牧郎, 久野雅樹, 田中祐輔

「新型コロナウイルス感染症の関連用語に対する社会的許容度」, 『計量国語学』, 34 巻 4 号, 330–339 頁, 2024.3.20.

《総説・解説・プレプリントなど》

横山詔一, 相澤正夫, 田中牧郎, 久野雅樹, 田中祐輔

【プレプリント】「新型コロナウイルス感染症の関連用語に対する社会的許容度」, 2023.6.19, DOI: 10.51094/jxiv.418.

《その他の出版物・記事》

横山詔一

「「識字率高い日本人」根拠曖昧」, 『読売新聞』, 2023.9.19.

【一般向けの講演・セミナーなど】

横山詔一

「日本人の読み書き能力 1948 年調査のナゾ」, 第 18 回 NINJAL フォーラム「国語研の言語生活研究の 75 年: 生きたことばをつかまえる・追跡する調査研究」, 一橋講堂, 2023.12.16.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・大学共同利用機関法人情報・システム研究機構データサイエンス共同利用基盤施設：運営会議委員
- ・筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター日本語・日本事情遠隔教育拠点事業：運営委員
- ・博報堂教育財団「児童教育実践についての研究助成」：審査委員

【大学院教育・若手研究者育成】

《大学院客員教授》

- ・東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻

井上 文子 (いのうえ ふみこ) 研究系准教授

【学位】 修士（文学）（大阪大学，1992）

【学歴】 高知女子大学文学部国文学科卒業（1984），大阪大学大学院文学研究科博士前期課程日本学専攻修了（1992），大阪大学大学院文学研究科博士後期課程日本学専攻中退（1994）

【職歴】 大阪大学文学部 助手（1994），国立国語研究所情報資料研究部第二研究室 研究員（1995），同 主任研究官（1997），独立行政法人国立国語研究所情報資料部門第一領域 主任研究員（2001），同 情報資料部門資料整備グループ グループ長（2006），人間文化研究機構国立国語研究所時空間変異研究系 准教授（2009），同 研究系（言語変異研究領域）准教授（2016）

【専門領域】 方言学，社会言語学

【所属学会】 日本方言研究会，日本語学会，社会言語科学会，日本語文法学会

【受賞歴】

1993：第11回新村出記念財団 研究助成

【2023 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「消滅危機言語の保存研究」：メンバー

【2023 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究（A）『『全国方言文法辞典』データベースの拡充による日本語時空間変異対照研究の多角的展開』，20H00015：研究分担者
- ・基盤研究（B）「方言昔話資料のデータベース化と言語研究への活用」，23H00635：研究分担者

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

井上文子

「みんなで談話整備プロジェクト」の概要・「閉会のあいさつ・参加者募集」，みんなで談話整備プロジェクトー文化庁「各地方言収集緊急調査」資料の整備と活用一説明会 & 講習会，オンライン，2023.8.26.

柏野 和佳子 (かしの わかこ) 研究系准教授

【学位】 博士 (学術) (東京工業大学, 2016)

【学歴】 東京女子大学文理学部日本文学科卒業 (1991), 東京工業大学大学院総合理工学研究科博士後期課程単位取得満期退学 (2015)

【職歴】 富士通株式会社システムエンジニア (1991-1998), 情報処理振興事業協会 (IPA) 技術センター 研究員 (1991-1997), 国立国語研究所言語体系研究部第二研究室 研究員 (1998), 独立行政法人国立国語研究所研究開発部門第一領域 研究員 (2001), 同 言語資源グループ 主任研究員 (2009), 人間文化研究機構国立国語研究所言語資源研究系 准教授 (2009), 同 研究系 (音声言語研究領域) 准教授 (2017)

【専門領域】 日本語学

【所属学会】 計量国語学会, 言語処理学会, 情報処理学会, 人工知能学会, 日本語学会, 日本言語学会

【学会等の役員・委員】 情報処理学会情報規格調査会 学会試行標準 WG3 小委員会主査・学会試行標準専門委員会委員長・学会試行標準 WG9 小委員会委員, 日本特許情報機構 産業日本語研究世話人, 語彙・辞書研究会 運営委員, 言語処理学会 編集委員, 計量国語学会 理事, 公益社団法人日本看護協会 看護に関わる用語の検討委員会委員

【受賞歴】

2022: Best Paper Award and Best Student Award Runner-up For ICADL 2022 (共著)

2022: NLP2022 言語資源賞 (共著) (言語処理学会・言語資源協会 (GSK))

2007: 2006 年度研究会優秀賞 (人工知能学会)

2006: 第 12 回年次大会優秀発表賞 (共著) (言語処理学会)

1996: 第 51 回全国大会奨励賞 (情報処理学会)

【2023 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」：サブプロジェクトリーダー (「学習者辞書用語資源の構築」), メンバー (サブプロジェクト「学習者の辞書資源使用の実態調査」)
- ・基幹型共同研究プロジェクト「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究」：メンバー
- ・異分野融合型共同利用型研究プロジェクト「テキスト読み上げのための読みの曖昧性の分類と読み推定タスクのデータセットの構築」：コーディネーター

【2023 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究 (A)「文章の語彙レベルの学習者適合度の判定方法の開発 ―日本語教育・国語教育への応用―」, 23H00072: 研究分担者
- ・基盤研究 (B)「都市のツイートデータを活用した市民間のつながりの自動推定と社会応用」, 23H03686: 研究分担者
- ・基盤研究 (C)「修辞機能分析を用いた相関調査による文体的特徴の研究」, 23K00569: 研究分担者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

柏野和佳子

「JANSpedia 看護学における学術用語の重要性とその魅力〈1〉看護学学術用語の収集・共有活動の大切さを日本語研究の立場から考える」, 『看護研究』, 56 巻 3 号, 247-252 頁, 2023.6.15, DOI: 10.11477/mf.1681202101.

柏野和佳子

「現代語の辞書と用例の問題」, 甲斐睦朗, 荻野綱男, 近藤泰弘 (監修) 『『日本語学』2023 年 6 月号夏号』, 明治書院, 22-29 頁, 2023.6.

石田哲也, 関洋平, 櫻惇志, 柏野和佳子, 神門典子

「都市を横断した市民意見抽出の評価」, 『自然言語処理』, 30 巻 2 号, 586-631 頁, 2023.6, DOI:

10.5715/jnlp.30.586.

Senoo Ko, Seki Yohei, Kashino Wakako, Keyaki Atsushi, and Kando Noriko

“Stance Prediction with a Relevance Attribute to Political Issues in Comparing the Opinions of Citizens and City Councilors”, *International Journal on Digital Libraries*, 25, pp. 75–91, 2024.2, DOI: 10.1007/s00799-024-00396-3.

《コーパス・データベース類》

柏野和佳子

「IPAL PowerBI レポート」(検索・表示の大幅改良), <https://www2.ninjal.ac.jp/dictionaries/publication.html>, 2023.9.6.

【講演・口頭発表】

柏野和佳子, 大阿久志緒理

『『分類語彙表』への多義語の意味増補のための『計算機用日本語基本辞書 IPAL』との対照』, ポスター発表, 言語資源ワークショップ 2023, オンライン, 2023.8.29.

小磯花絵, 居關友里子, 柏野和佳子, 川端良子, 田中弥生, 西川賢哉

『『子ども版日本語日常会話コーパス』の構築に関する中間報告』, ポスター発表, 言語資源ワークショップ 2023, オンライン, 2023.8.29.

田中弥生, 柏野和佳子, 加藤祥

「書籍の文体と修辞機能の分析のパイロットスタディ」, ポスター発表, 言語資源ワークショップ 2023, オンライン, 2023.8.29.

柏野和佳子

『『現代日本語書き言葉均衡コーパス』利用のべし・べからず』, 2023 年度 NINJAL シンポジウム, オンライン, 2023.11.5.

光畑陽登, 関洋平, 柏野和佳子

「意味的類似性と単語親密度に基づく意外性と納得感を考慮したなぞかけの生成」, ARG Web インテリジェンスとインタラクション研究会第 19 回研究会, オンライン, 2023.12.16.

大井恵奈, 古宮嘉那子, 柏野和佳子, 浅原正幸

『『日本経済新聞記事オープンコーパス』の漢字読みの調査』, 国立国語研究所異分野融合型共同研究 2023 年度ワークショップ, 国立国語研究所, 2024.2.8.

柏野和佳子, 平本智弥

「IPAL PowerBI レポートの公開と活用」, 「学習者辞書用語彙資源の構築」共同研究発表会, オンライン, 2024.2.27.

岩崎大晟, 関洋平, 柏野和佳子, 樗惇志, 神門典子

「都市別のソーシャルメディア投稿を利用した市民の性格特性分析」, 第 16 回データ工学と情報マネジメントに関するフォーラム (DEIM2024), オンライン, 2024.2.28.

田中弥生, 柏野和佳子, 加藤祥

「書籍の文体情報と脱文脈度の関連—客観度との対応のパイロットスタディ—」, ポスター発表, 第 48 回社会言語科学会研究大会, 福岡女子大学, 2024.3.9.

柏野和佳子, 大阿久志緒理

『『分類語彙表』の多義語の意味増補のための『IPAL』用言例文への番号付与』, 言語処理学会第 30 回年次大会併設ワークショップ JLR2024, オンライン, 2024.3.15.

柏野和佳子

「「要するに」は何を要しているか—CEJC を用いて—」, ポスター発表, シンポジウム「日常会話コーパス」IX, オンライン, 2024.3.18.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・言語資源ワークショップ 2023 (主催: 言語資源開発センター, 共催: 国立情報学研究所), オンライン,

2023.9.28-29.

- ・「学習者辞書用語集資源の構築」共同研究発表会（主催：学習者辞書プロジェクト），オンライン，2024.2.27.
- ・日常会話コーパスシンポジウム IX（主催：多世代会話コーパスプロジェクト），オンライン，2024.3.18.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・国立国語研究所研究情報誌『ことばの波止場』vol.13：編集部会長
- ・国立国語研究所【ぶらっと国語研】（You Tube）：
 - ・第4回（前編）「辞書編纂者の日常を覗く：柏野和佳子先生の研究室を訪問」，2023.9.
 - ・第5回（後編）「辞書編纂者の日常を覗く：柏野和佳子先生の研究室を訪問」，2023.11.
- ・NINJAL ジュニアプログラム・NINJAL 職業発見プログラム：
 - ・出前授業「めざせ！辞書引きの達人！」，捜真女学校中学1年生3クラス，2023.6.21.
 - ・探求学習の質問対応，関西創価高等学校2年生，2023.8.31.
 - ・出前授業「めざせ！辞書引きの達人！」，青梅市立第五小学校5年生，2024.1.12.
- ・取材を受けた記事・放送番組：
 - ・「疑問氷解 階段の「踊り場」は、どうして「踊り」というのですか？」，毎日小学生新聞，2023.5.29.
 - ・「情報 7days ニュースキャスター」，TBS，2024.2.3.

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

柏野和佳子，小磯花絵

「オンライン検索システム『中納言』講習会【初級編】」，オンライン，2023.11.5.

小磯花絵，柏野和佳子

「『日本語日常会話コーパス』の活用—『中納言』の使い方—」，NINJAL チュートリアル，オンライン，2023.12.2.

窪田 悠介 (くぼた ゆうすけ) 研究系准教授

【学位】 Ph.D. (Linguistics) (オハイオ州立大学, 2010)

【学歴】 東京大学教養学部超域文化科学科言語情報科学分科卒業 (2002), 東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻修士課程修了 (2004)

【職歴】 日本学術振興会特別研究員 (PD) (2010–13), 日本学術振興会特別研究員 (海外特別研究員) (2013–15), 筑波大学人文社会系 助教 (2014–19), 人間文化研究機構国立国語研究所 (理論・対照領域) 准教授 (2019)

【専門領域】 理論言語学 (統語論, 意味論), 計算言語学

【所属学会】 日本言語学会, 日本英語学会, 日本語文法学会, 言語処理学会, Linguistic Society of America

【学会等の役員・委員】 日本言語学会 評議員, 『自然言語処理』編集委員, 言語処理学会 代議員, Associate Editor (*Journal of Logic, Language and Information*), 日本語文法学会 大会委員

【受賞歴】

2016: 日本言語学会第 151 回大会発表賞

【2023 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「実証的な理論・対照言語学の推進」: サブプロジェクトリーダー (「計算言語学的手法による理論言語学の実証的な方法論の開拓」)

【2023 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究 (C) 「ハイブリッド CG パーザの開発」, 21K00541: 研究代表者
- ・基盤研究 (B) 「日英語の省略構造の統合的解明に基づく理論横断的オープンアクセスデータベースの創生」, 21H00532: 研究分担者
- ・挑戦的研究 (萌芽) 「再現性を担保した容認性判断のアーカイブの開発」, 21K18367: 研究分担者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

Misato Ido, Ai Kubota, and Yusuke Kubota

“Two types of attenuation strategies for polarity-sensitive items: The semantics of degree adverbs *amari* and *sonnani* in Japanese”, Hideki Kishimoto, Osamu Sawada, and Ikumi Imani (eds.) *Polarity-sensitive expressions*, pp. 377–412, De Gruyter Mouton, 2023.12.18, DOI: 10.1515/9783110755121-012.

Koyo Akuzawa and Yusuke Kubota

“The lexical semantics of finite control: A view from Japanese”, *Natural Language and Linguistic Theory*, 2024.2, DOI: 10.1007/s11049-024-09613-9.

梶川康平, 大関洋平, 窪田悠介

「統語変形はコミュニケーションから創発するのか?」, 『言語処理学会第 30 回年次大会予稿集』, 2233–2237 頁, 2024.2.

《その他の出版物・記事》

窪田悠介

「AI 研究と対峙する言語学」, 『kotoba』, 2023 年秋号, 78–83 頁, 2023.9.6.

【講演・口頭発表】

井戸美里, 窪田悠介

「限定のダケと対比のハに基づく、ダケハの意味の構成的分析」, 日本言語学会第 166 回大会, 東京, 2023.6.17.

峯島宏次, 窪田悠介, 宮尾祐介, 窪田愛, 船蔵颯

「多言語に対応した汎用的な構成的意味論の計算フレームワークの構築」, ポスター発表, 日本言語学会第 166 回大会, 東京, 2023.6.17.

窪田悠介

「successive cyclicity について」, 招待講演, 九州大学言語学研究会, 福岡, 2024.2.16.

梶川康平, 大関洋平, 窪田悠介

「統語変形はコミュニケーションから創発するのか?」, 言語処理学会第 30 回年次大会, 神戸, 2024.3.13.

【大学院教育・若手研究者育成】

《大学院集中講義》

- ・九州大学「言語学・応用言語学講義 XVIII, XVIII A, XVIII B」・「言語学特論 VIII, VIII A, VIII B」

新野 直哉 (にいの なおや) 研究系准教授

【学位】 博士 (文学) (東北大学, 2010)

【学歴】 東北大学文学部文学科卒業 (1984), 東北大学大学院文学研究科博士課程前期 2 年の課程国文学国語学日本思想史学専攻修了 (1986), 東北大学大学院文学研究科博士課程後期 3 年の課程国文学国語学日本思想史学専攻中退 (1988)

【職歴】 宮崎大学教育学部 助手 (1988), 同 講師 (1989), 同 助教授 (1992), 国立国語研究所情報資料研究部 主任研究官 (1996), 独立行政法人国立国語研究所情報資料部門第一領域 主任研究員 (2001), 同 文献情報グループ 主任研究員 (2006), 人間文化研究機構国立国語研究所時空間変異研究系 助教 (2009), 同 准教授 (2011), 同 研究系 (言語変化研究領域) 准教授 (2016), 同 研究系准教授 (2022)

【専門領域】 言語学, 日本語学

【所属学会】 日本近代語研究会, 表現学会, 日本語学会

【学会等の役員・委員】 日本近代語研究会 運営委員

【受賞歴】

2020: 国立国語研究所第 20 回所長賞

2011: 国立国語研究所第 2 回所長賞

【2023 年度に参画した共同研究】

- ・ 基幹型共同研究プロジェクト「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」: メンバー

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

新野直哉

「「ムショ帰り」の「ムショ」は「刑務所」の略ではないというのは本当ですか」, 国立国語研究所 (編) 『日本語の大疑問 2』, 幻冬舎, 146–151 頁, 2024.1.30.

新野直哉

『国語に関する世論調査』の「慣用句等の意味や言い方」項目をめぐる言語規範意識—調査者側の意識の変化を中心に—, 『人文』, 22 号, 95–114 頁, 2024.3.10.

新野直哉

「新語の分類について」, 『近代語研究』, 24 号, 251–269 頁, 2024.3.11.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・ 取材協力: 「グッド! モーニング」, テレビ朝日, 2018.4–.
- ・ ウェブ記事: 「大正時代の「煙草は御遠慮下さい」」, 毎日ことば plus, 2024.3.22.

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

新野直哉

「現代の新語について」, 言語学レクチャーシリーズ Vol.24 (講義), 動画教材, 2023.11.7.

《総合研究大学院大学「日本語言語科学コース」》

- ・ 授業科目 『日本語史』, 『言語研究基礎論 IIIB』

《大学院非常勤講師》

- ・ 目白大学大学院

野山 広 (のやま ひろし) 研究系准教授

【学位】 修士（文学）（早稲田大学，1988），修士（日本語応用言語学）（モナシュ大学，1995），修士（教育学）（早稲田大学，1996）

【学歴】 早稲田大学卒業（1985），早稲田大学大学院文学研究科教育学専攻修士課程修了（1988），豪州モナシュ大学大学院日本研究科日本語応用言語学専攻修了（1995），早稲田大学大学院教育学研究科国語教育専攻修士課程修了（1996），早稲田大学大学院文学研究科日本語・日本文化専攻博士後期課程単位取得退学（2001）

【職歴】 文化庁文化語課 専門職員（日本語教育調査官）（1997），独立行政法人国立国語研究所日本語教育部門第二領域 主任研究員（2004），同 領域長（2005），同 整備普及グループ長（2006），人間文化研究機構国立国語研究所日本語教育研究・情報センター 上級研究員（2009），同 准教授（2010），同 研究系（日本語教育研究領域）准教授（2016）

【専門領域】 応用言語学，日本語教育学，基礎教育保障学，社会言語学，多文化・異文化間教育，言語政策・計画研究

【所属学会】 日本語教育学会，基礎教育保障学会，異文化間教育学会，移民政策学会，社会言語科学会，ヨーロッパ日本語教師会

【学会等の役員・委員】 基礎教育保障学会 理事（研究委員会副委員長），異文化間教育学会 理事，移民政策学会 理事（社会連携委員会委員長），多文化社会専門職機構 理事（ジャーナル委員会委員長），港区国際化推進アドバイザー会議 委員長（座長）

【受賞歴】

2023：国立国語研究所所長賞（野山広他編著『地域での日本語活動を考える：多文化社会 葛飾からの発信』，ココ出版）

【2023 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究」：サブプロジェクトリーダー（「定住外国人の談話の縦断研究（生活者談話）」）
- ・基幹型共同研究プロジェクト「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」：メンバー

【講演・口頭発表】

野山広

「現代の時代状況に応じたりテラシー調査の方法開発に向けた試行錯誤—A 県 B 市の自主夜間中学での試行調査結果を踏まえつつ—」，異文化間教育学会第 44 回大会，東京都立大学，2023.6.10.

野山広

「共生社会の基盤となる日本語リテラシー調査の再構築に向けた一考察」，AJE26 回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム & 17th EAJIS International Conference，アントワープ大学（ベルギー），2023.8.19.

野山広

「リテラシーに関する調査方法の開発に向けた学際的研究—A 県 B 市の自主夜間中学と C 県 D 市の公立夜間中学での試行（パイロット）調査果を踏まえつつ—」，基礎教育保障学会第 8 回研究大会，福岡大学，2023.9.2.

【研究調査】

- ・OPI (Oral Proficiency Interview) の枠組みを活用した，日本語学習者の会話力，言語生活等に関する縦断調査のフォローアップ調査等，2023.4.
- ・日本語リテラシーに関するパイロット（試行）調査（自主夜間中学），2023.7.
- ・日本語リテラシーに関する縦断調査（公立夜間中学），2024.3.

【一般向けの講演・セミナーなど】

野山広

「多文化共生社会と地域日本語教育」，西東京市日本語ボランティア研修，西東京市，2023.5.24.

野山広

「定住外国人の日本語会話習得に関する縦断的研究から見えてきたこと～日本語使用者（難民の方々も含む）の高齢化、言語摩滅の過程に注目しながら～」，サポート 21 主催オンライン講座：文化庁委託研修，オンライン，2023.8.21.

野山広

「多文化共生社会の実現に向けた学びの保障と学校の在り方について～改めて、学びの重要性を確認しつつ～」，江戸川区教育委員会主催副校長研修，江戸川区，2023.11.13.

野山広

「定住外国人の日本語会話習得に関する縦断的研究から見えてきたこと～日本語使用者（難民の方々も含む）の高齢化や言語摩滅の過程に注目しながら」，サポート 21 主催オンライン講座：文化庁委託研修，オンライン，2023.12.10.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・取材を受けた記事・配信など：
 - ▶ 「「読み書きはみんなできる、は幻想だ」日本の識字 実態把握へ試行」，朝日新聞デジタル&夕刊，2023.4.29.
 - ▶ 「【識字率】読み書きできない生活とは？」，ABEMA Prime，2023.5.4.
 - ▶ 「「漢字が読めない」日本の識字率ほぼ 100% は幻想か 見過ごされてきた「形式卒業者」の存在、注目集める夜間中学」，共同通信配信，2023.6.15.

福永 由佳 (ふくなが ゆか) 研究系准教授

【学位】 博士 (日本語教育) (早稲田大学, 2019)

【学歴】 金沢女子大学文学部英米文学学科卒業 (1991), ウィスコンシン大学東アジア語学文学学科修士課程修了 (1993), 早稲田大学大学院日本語教育研究科博士後期課程研究指導終了により退学 (2018)

【職歴】 国立国語研究所日本語教育指導普及部日本語教育教材開発室 研究員 (1998), 独立行政法人国立国語研究所日本語教育部門第一領域 研究員 (2001), 同 日本語教育基盤情報センター学習項目グループ 研究員 (2006), 人間文化研究機構国立国語研究所日本語教育研究・情報センター 研究員 (2009), 研究系 (日本語教育研究領域) 研究員 (2016), 研究系 (日本語教育研究領域) 准教授 (2021)

【専門領域】 日本語教育学, 社会言語学, 多言語使用, 識字, 移民に対する言語教育政策

【所属学会】 日本語教育学会, 社会言語科学会, 日本言語政策学会, 言語管理研究会

【学会等の役員・委員】 日本語教育学会 学会誌委員・第6回代議員選挙関東ブロック運営委員, 日本言語政策学会 理事

【受賞歴】

2021: 第22回国立国語研究所所長賞

【2022 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究」: サブプロジェクトリーダー (「定住外国人のよみかき研究 (生活者識字)」)
- ・基幹型共同研究プロジェクト「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」: サブリーダー
- ・共創先導プロジェクト共創促進研究「コミュニケーション共生科学の創成」: メンバー

【2023 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究 (C) 「言語レパトリーの構造と形成に関する研究」, 20K00623: 研究代表者

【研究業績】

《著書・編書》

朝日祥之 (編), 福永由佳, 朝日祥之, 鎗水兼貴 (著)

『日本の多言語多文化状況における言語問題に関するウェブ調査 (2021 年度調査) 報告書』, 言語問題プロジェクト (調査報告書), 2024.3.29, DOI: 10.15084/0002000253.

《論文・ブックチャプター》

福永由佳

「日本語学習者を対象とした新しいよみかき研究の構想」, 『キルギス日本語教育研究』, 7 号, 16-25 頁, 2024.3.

《その他の出版物・記事》

福永由佳

「第7回日本学・日本語教育国際研究大会に参加して」, 『キルギス共和国日本語教師会会報』, 69 号, 4 頁, 2023.12.11.

【講演・口頭発表】

福永由佳, 福村真紀子

「生活者のための日本語支援を考える: 日本語運用から生活者のためのホリスティックな日本語支援へ」, 日本言語政策学会第15回研究大会, 麗澤大学, 2023.6.17.

福永由佳

「日本語教育と異文化理解」, 招待講演, 会話授業研修会, オンライン (ジャカルタ国立大学言語芸術学部日本語教育学科, ジャカルタ・インドネシア), 2023.7.22.

福永由佳

「庄司博史先生の業績をふりかえる『顕在化する多言語社会日本—多言語状況の的確な把握と理解のために』」, 招待講演, 多言語化現象研究会第83回研究会, 大阪大学, 2023.7.22.

福永由佳

「日本語学習者対象の新しいよみかき研究—識字から字をよみかきする社会的実践へ—」, 招待講演, 第7回キルギス日本学・日本語教育国際研究大会, オンライン (キルギス共和国日本語教師会・キルギス共和国), 2023.8.19–20.

福永由佳

「日本語教育と異文化理解: 理論編」, 基調講演, 2023 年度国立国語研究所日本語教師セミナー (海外)
「日本語教育と異文化理解」, ジャカルタ国立大学 (ジャカルタ・インドネシア), 2023.9.25.

福永由佳

「日本語教育と異文化理解: 実践編」, 基調講演, 2023 年度国立国語研究所日本語教師セミナー (海外)
「日本語教育と異文化理解」, ジャカルタ国立大学 (ジャカルタ・インドネシア), 2023.9.25.

【研究調査】

- ・シリーラームヒンドゥーテンプル等の訪問, 外国人動向・日本語学習支援についての情報収集 (茨城県下妻市), 2023.6.
- ・長野国際化協会長野県多文化共生相談センター等の訪問, 外国人動向・日本語学習支援についての情報収集および調査協力依頼 (長野県長野市), 2023.12.
- ・外国人支援団体の訪問, 外国人動向・日本語学習支援についての情報収集および調査協力依頼 (埼玉県川口市), 2023.12, 2024.1, 2024.2.
- ・地域の日本語教室についての情報収集および調査打ち合わせ (長野県長野市), 2024.2.
- ・言語生活調査の実施 (茨城県水戸市), 2024.2.
- ・北海道日本語センター等の訪問, 外国人動向・日本語学習支援についての情報収集 (北海道札幌市), 2024.2.
- ・言語生活調査の実施 (茨城県土浦市), 2024.3.
- ・言語生活調査の実施 (富山県射水市), 2024.3.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・生活者識字 2023 年度研究集会「私たちの知らない外国人生活者のたくましく豊かな言語生活—よみかき実践を中心に—」 (主催: 国立国語研究所共同研究「定住外国人のよみかき研究」サブプロジェクト, 共催: 北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院), 北海道大学, 2023.8.26.
- ・2023 年度国立国語研究所日本語教師セミナー (海外)「日本語教育と異文化理解」 (主催: 国立国語研究所, 共催: ジャカルタ国立大学), ジャカルタ国立大学 (ジャカルタ・インドネシア), 2023.9.25.

【一般向けの講演・セミナーなど】

福永由佳

「外を歩き・見て・聞きて・動いて・考えて・記録する: 生活者としての外国人のフィールドワークを事例に」, 第18回 NINJAL フォーラム「国語研の言語生活研究の75年: 生きたことばをつかまえる・追跡する調査研究」, 一橋大学一橋講堂, 2023.12.16.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・学術誌『日本語教育』査読
- ・2020 年 10 月出版の著書『成人教育 (adult education) としたの日本語教育: 在日パキスタン人の言語使用・言語学習のリアリティから考える』に対する書評: 松田真希子 (著), 『社会言語科学』, 24 巻 2 号, 107–111 頁, 2022.3.31, DOI: 10.19024/jajls.24.2_107.
- ・2020 年 12 月出版の著書『顕在化する多言語社会日本—多言語状況の的確な把握と理解のために』に対する書評: 山口博史 (著), 『移民研究年報』, 28 号, 133 頁, 2022.6.

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

福永由佳

「質的研究へのいざない—日本語教育学を中心に—」, 言語学レクチャーシリーズ Vol.26, オンライン.

《総合研究大学院大学「日本語言語科学コース」》

- ・授業科目『応用言語学』,『言語研究基礎論 IIIA』

《連携大学院》

- ・一橋大学大学院言語社会研究科：授業科目『日本語学講義 A』

《若手研究者の受入》

- ・生活者識字班のプロジェクト非常勤研究員として雇用：1 名（博士後期課程在籍者）
- ・生活者識字班に参画：2 名（修士課程修了者）

山口 昌也 (やまぐち まさや) 研究系准教授

【学位】 博士 (工学) (東京農工大学, 1998)

【学歴】 東京農工大学工学部数理情報工学科卒業 (1992), 東京農工大学大学院工学研究科博士前期課程電子情報工学専攻修了 (1994), 東京農工大学大学院工学研究科博士後期課程電子情報工学専攻修了 (1998)

【職歴】 東京農工大学工学部 助手 (1998), 独立行政法人国立国語研究所研究開発部門第一領域 研究員 (2001), 同 言語資源グループ 研究員 (2006), 同 主任研究員 (2008), 人間文化研究機構国立国語研究所言語資源研究系 助教 (2009), 同 准教授 (2011), 同 研究系 (音声言語研究領域) 准教授 (2016)

【専門領域】 教育工学, 言語学

【所属学会】 日本教育工学会, 日本語学会, 言語処理学会, 情報処理学会

【受賞歴】

2007: 財団法人博報児童教育振興会第1回博報「ことばと教育」研究助成「優秀賞」

【2023 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究」: サブプロジェクトリーダー (「日本語学習者の作文教育支援研究」), メンバー (サブプロジェクト「日本語学習者の作文の縦断コーパス研究」)
- ・基幹型共同研究プロジェクト「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究」: メンバー

【2023 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究 (C) 「学習者ごとの評価指針を考慮したピア相互評価の支援手法に関する研究」, 23K02701: 研究代表者
- ・基盤研究 (C) 「多段階の振り返りに対応した協同型教育活動支援システムに関する研究」, 20K03116: 研究代表者
- ・基盤研究 (A) 「海外縦断作文コーパスの構築に基づく文章産出能力の発達過程の実証的研究」, 21H04417: 研究分担者

【研究業績】

《コーパス・データベース類》

山口昌也

「全文検索システム『ひまわり』用『青空文庫』パッケージ」(2回更新), <https://csd.ninjal.ac.jp/lrc/index.php?aozora>, 2023.10.2 (最終更新).

山口昌也

「全文検索システム『ひまわり』ver.1.7.4」, <https://csd.ninjal.ac.jp/lrc/index.php?himawari>, 2023.10.25.

山口昌也 (パッケージ作成担当)

「全文検索システム『ひまわり』用 CSJ パッケージ」(更新・機能追加), 関係者限定公開, 2023.10.28.

山口昌也

「観察支援ツール FishWatchr (ver.1.0 rev02)」, <https://csd.ninjal.ac.jp/lrc/index.php?fw>, 2024.3.15.

【講演・口頭発表】

山口昌也, 胡芸群

「協同型作文教育支援システム TEachOtherS における活動管理機構の実現」, ポスター発表, 日本教育工学会 2023 年秋季全国大会, 京都テルサ, 2023.9.17.

胡芸群, 山口昌也

「オンラインツールを用いたピア・レスポンスに関する授業実践の動向」, ポスター発表, 日本教育工学会 2023 年秋季全国大会, 京都テルサ, 2023.9.17.

山口昌也, 徐煉, 張曦冉

「協同型作文教育支援システム TEachOtherS における作文の改訂支援機構の設計」, 日本教育工学会 2024 年春季全国大会, 熊本大学, 2024.3.2.

李迅, 井元麻美, 山口昌也

「初年次アカデミックライティング授業における TEachOtherS を活用した「書き換え」活動の実践報告」, 日本教育工学会 2024 年春季全国大会, 熊本大学, 2024.3.2.

北村雅則, 山口昌也

「TEachOtherS を用いたゼミでの輪読における議論支援の試み」, 日本教育工学会 2024 年春季全国大会, 熊本大学, 2024.3.3.

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

山口昌也

「コーパスの検索とデータ構造」, 言語学レクチャーシリーズ Vol.23, オンライン, 2023.10 (公開).

《総合研究大学院大学「日本語言語科学コース」》

・授業科目『言語研究基礎論 III』

山田 真寛 (やまだ まさひろ) 研究系准教授

【学位】 Ph.D. (言語学) (デラウェア大学, 2010)

【学歴】 国際基督教大学教養学部語学科卒業 (2005), 米国デラウェア大学大学院言語学・認知科学研究科博士課程修了 (2010)

【職歴】 日本学術振興会特別研究員 (PD)/ 京都大学 (2010), 広島大学教育学研究科言語と認知の脳科学プロジェクトセンター ポスドク研究員 (2013), 京都大学学際融合教育研究推進センターアジア研究教育ユニット 特定助教 (2014), 立命館大学衣笠総合研究機構 専門研究員 (2016), 人間文化研究機構国立国語研究所 IR 推進室 特任助教 (2016), 同 研究系 (言語変異研究領域) 准教授 (2018)

【専門領域】 言語学, 形式意味論, 言語復興

【受賞歴】

2023: ダイキンオーキッドバウンティ (言語復興の港)

2019: 日本音声学会学術研究奨励賞 (小川晋史, 山田真寛, 林由華)

2014: 京都大学学際研究着想コンテスト奨励賞

【2023 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「消滅危機言語の保存研究」: リーダー

【2023 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究 (B) 「琉球沖永良部語を中心とした地域言語コミュニティ参加型の消滅危機言語復興研究」, 20H01266: 研究代表者
- ・基盤研究 (B) 「琉球諸語の活性化に向けた言語教育の実践研究: 消滅危機言語から言語継承への転換」, 23H00637: 研究分担者
- ・基盤研究 (B) 「日琉諸語における数カテゴリーとその表現方法に関する基礎的研究」, 23H00634: 研究分担者

【研究業績】

《その他の出版物・記事》

山田真寛

「守れ方言～現場からの提言④: 方言のステータス向上へ 身近な価値観で継承」, 『東奥日報』, 2023.12.7.

山田真寛

「島ことばの散歩道 66: どうなんむぬい辞典」, 『南海日日新聞』, 2024.2.9.

山田真寛

「島ことばの散歩道 67: 沖永良部の「継承保存」」, 『南海日日新聞』, 2024.3.6.

【講演・口頭発表】

山田真寛

「危機方言の現況報告: どうなんむぬい辞典がお手本」, 基調講演, 令和 5 年度危機的な状況にある言語・方言サミット (与那国島大会), 与那国町, 2023.10.15.

山田真寛

「沖永良部島の継承保存プロジェクト報告」, 第 15 回琉球継承言語研究会, 琉球大学, 2024.3.24.

【研究調査】

- ・沖永良部語フィールドワーク (鹿児島県大島郡和泊町・知名町), 2023.6.4-7, 8.14-25, 11.17-28, 2024.2.24-3.14.
- ・新島方言フィールドワーク (東京都新島村), 2023.8.8-9.
- ・与那国語フィールドワーク (沖縄県八重山郡与那国町), 2023.10.12-17.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・令和 5 年度第 1 回「危機言語の保存と日琉諸語のプロソディー」合同研究発表会 (主催: 危機言語プロジェクト, イントネーションプロジェクト), 国立国語研究所, 2023.6.10.

- ・令和5年度危機的な状況にある言語・方言サミット(与那国島大会)(主催:文化庁,沖縄県,与那国町,与那国町教育委員会,国立国語研究所,琉球大学),与那国町,2023.10.14-15.
- ・令和5年度第2回「危機言語の保存と日琉諸語のプロソディー」合同研究発表会(主催:危機言語プロジェクト,イントネーションプロジェクト),国立国語研究所,2024.3.17.

【一般向けの講演・セミナーなど】

山田真寛

「家事と育児としまむに研究をしている男の話」,島ムニむんちゃぬ島ムニ保存会の講演会,和泊町役場,2023.11.24.

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

山田真寛

「琉球語、消滅危機言語、言語の多様性」,ゲストレクチャー,津田塾大学,2023.6.22.

山田真寛

「琉球語、消滅危機言語、言語の多様性」,ゲストレクチャー,関東学院大学,2023.7.5.

山田真寛

「フィールドワークの倫理と作法、IPAでタイプする方法」,フィールド支援プロジェクトチュートリアル,国立国語研究所,2024.3.16.

《総合研究大学院大学「日本語言語科学コース」》

- ・授業科目『フィールド言語学』
- ・指導学生1名(主担当1名)

宮川 創 (みやがわ そう) 研究系助教 (テニュアトラック)

【学位】 Dr.phil. (Koptologie) (Georg-August-Universität Göttingen, 2022)

【学歴】 北海道大学文学部言語・文学コース卒業 (2013), 京都大学大学院文学研究科行動文化学専攻言語学専修博士前期課程修了 (2015), ゲッティンゲン大学 (Georg-August-Universität Göttingen) 大学院文学研究科 (Philosophische Fakultät/Faculty of Humanities) エジプト学・コプト学専攻 (Seminar für Ägyptologie und Koptologie/Seminar for Egyptology and Coptic Studies) 博士後期課程修了 (2022)

【職歴】 日本学術振興会 特別研究員 (DC1) (2015–2015), 全米人文科学基金・ドイツ研究振興協会「KELLIA: 電子技術を駆使したコプト語学・文学の国際的共同研究」研究員 (Research Fellow) (2015–2017), ドイツ研究振興協会 特別研究領域/共同研究センター 1136「古代から中世及び古典イスラム期にかけての地中海圏とその周辺の文化における教育と宗教」研究員 (Research Fellow) (2015–2020), 関西大学アジア・オープン・リサーチセンター「KU-ORCAS」(東西学術研究所内) ポスト・ドクトラル・フェロー, 京都大学大学院文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター 助教 (2021–2022), 人間文化研究機構 国立国語研究所研究系 助教 (2022–)

【専門領域】 古代エジプト語・コプト語, エジプト学, コーパス歴史言語学, 自然言語処理, デジタル・ヒューマニティーズ

【所属学会】 Association for Computational Linguistics, 人工知能学会, The Association for Linguistic Typology, 日本方言研究会, 日本近代語研究会, アート・ドキュメンテーション学会, 研究データ利活用協議会 (RDUF), 日本語学会, 沖縄言語研究センター, 日本アフリカ学会, 言語処理学会, デジタルアーカイブ学会, TEI (Text Encoding Initiative) Consortium, 情報処理学会, Humanistica, Australian Association for Digital Humanities, Canadian Society for Digital Humanities, Japanese Association for Digital Humanities, 日本オリエント学会, European Association for Digital Humanities, Society of Biblical Literature, International Association of Manichaeic Studies, International Association for Coptic Studies, International Association of Egyptologists, 日本歴史言語学会, 日本認知言語学会, 日本言語学会, ReMeDHe (working group for Religion, Medicine, Disability, Health, and Healing in Late Antiquity)

【学会等の役員・委員】 情報処理学会 人文科学とコンピュータ研究会運営委員会 委員, アート・ドキュメンテーション学会 国際交流員会 委員長, 英文学術誌 *Digital Life* 編集委員, 英文ウェブマガジン *The Digital Orientalist* 編集委員, デジタルアーカイブ学会 DA フォーラム運営委員会 委員, 言語処理学会 プログラム委員会 委員, 日本歴史言語学会 監事 (–2023.12), 日本語学会 学会国際化推進小委員会 委員 (–2023.10)

【受賞歴】

2023: 国立国語研究所第 27 回所長賞 (宮川創, 田口智大)

2023: 情報処理学会 2022 年度 (令和 4 年度) 会山下記念研究賞 (宮川創「デジタルコーパスを用いたデータ駆動型の間テキスト性研究: 古代末期エジプトの二人の修道院長のコプト語書簡におけるコプト語訳聖書からの引用の探知と分析」, 『情報処理学会研究報告』, 2021–CH–126 (9), 1–8, 2021)

2023: 言語処理学会委員特別賞 (受賞論文: 田口智大, 宮川創「形態論情報付き日本語 Universal Dependencies」)

2022: デジタルアーカイブ学会第 4 回学術賞 (著書) (受賞著書: 一般財団法人人文情報学研究所 (監修), 石田友梨, 大向一輝, 小風綾乃, 永崎研宣, 宮川創, 渡邊要一郎 (編)『人文学のためのテキストデータ構築入門: TEI ガイドラインに準拠した取り組みにむけて』)

2022: 国立国語研究所第 25 回所長賞 (宮川創)

2013: 北海道大学クラーク賞 (宮川創)

2010: 北海道大学新渡戸賞 (宮川創)

【2023 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」: メンバー (統括班)
- ・基幹型共同研究プロジェクト「開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張」: メンバー

- ・基幹型共同研究プロジェクト「消滅危機言語の保存研究」：メンバー
- ・基幹型共同研究プロジェクト「実証的な理論・対照言語学の推進」：メンバー（サブプロジェクト「体言化の実証的な言語類型論—理論・フィールドワーク・歴史・方言の観点から—」）
- ・広領域連携型基幹研究「異分野融合による総合書物学の拡張的研究」国語研ユニット「古辞書類に基づく語彙資源の拡張と語彙・表記の史的変遷」：メンバー
- ・共創先導プロジェクト共創促進研究「学術知デジタルライブラリの構築（国語研拠点）」：メンバー

【2023 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究 (A) 「日本語諸方言の形態素解析用辞書の構築と活用」, 23H00007: 研究分担者
- ・国際共同研究加速基金 (国際共同研究強化 (B)) 「ヴェーダ文献における言語層の考察とそれを利用した文献年代推定プログラムの開発」, 21KK0004: 研究分担者
- ・基盤研究 (B) 「メイドゥム遺跡を軸とするエジプトの古王国時代における王墓地変遷問題の研究」, 22H00721: 研究分担者
- ・基盤研究 (B) 「多言語による日本語学用語辞典および日琉諸語の用例に対するグロス規範の作成」, 19H01265: 研究代表者
- ・基盤研究 (C) 「エジプト語歴史音韻論におけるコプト語の母音組織の研究」, 21K00537: 研究代表者
- ・挑戦的研究 (萌芽) 「フィールドデータのアーカイブに向けた問題点の整理と解決策」, 21K18376: 研究分担者
- ・研究活動スタート支援 「古ヌビア語の母音組織と母音字重複の音価の研究」, 20K21975: 研究代表者
- ・大学共同利用機関情報・システム研究機構データサイエンス共同利用基盤施設 2023 年度公募型共同研究 (ROIS-DS-JOINT) 「日琉諸語の言語類型アトラス LAJaR の開発と分析」: 研究代表者
- ・東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用・共同研究課題 「理論言語学と言語類型論と計量言語学の対話にもとづく言語変化・変異メカニズムの探求」: 研究分担者
- ・人間文化研究機構 2023 年度若手研究者海外派遣プログラム (短期): 研究代表者

【研究業績】

《著書・編書》

Mika Härmäläinen, Emily Öhman, Flammie Pirinen, Khalid Alnajjar, So Miyagawa, Yuri Bizzoni, Niko Partanen, and Jack Rueter (eds.)

Proceedings of the Joint 3rd International Conference on Natural Language Processing for Digital Humanities and 8th International Workshop on Computational Linguistics for Uralic Languages, Association for Computational Linguistics, 2023.12.

《論文・ブックチャプター》

宮川創

「Omeka S を用いた言語資源デジタルアーカイブの構築」, 『日琉諸語の記述・保存研究』, 1 巻, 43–59 頁, 2023.4, DOI: 10.15084/0002000045.

宮川創

「言語資源デジタルアーカイブにおけるキュレーション: 「国立国語研究所デジタルアーカイブ NINDA」の事例から」, 『情報知識学会誌』, 33 巻 2 号, 156–161 頁, 2023.5.20, DOI: 10.2964/jsik_2023_011.

So Miyagawa, Kanji Kato, Miho Zlazli, Salvatore Carlino, and Seira Machida

“Building Okinawan Lexicon Resource for Language Reclamation/Revitalization and Natural Language Processing Tasks such as Universal Dependencies Treebanking”, *Proceedings of the Second Workshop on Resources and Representations for Under-Resourced Languages and Domains*, pp. 86–91, 2023.5.22.

宮川創

「デジタル化された人文資料をどのように活用するか—人文学におけるオープンサイエンス—」, 長谷川岳男 (監修), 遠藤直子, 丸亀裕司 (編) 『西洋古代史研究における史資料の安定的利用をめざして』, 東洋大学人間科学総合研究所, 35–42 頁, 2023.5.

So Miyagawa

“Noun Incorporation in Coptic”, Diliانا Atanassova, Frank Feder, and Heike Sternberg-el Hotabi (eds.) *Pharaonen, Mönche und Gelehrte: Auf dem Pilgerweg durch 5000 Jahre ägyptische Geschichte Über drei Kontinente. Heike Behlmer zum 65. Geburtstag* (Texte und Studien zur Koptischen Bibel 4), pp. 556–574, Harrassowitz Verlag, 2023.7.

宮川創

「江戸時代後期の聖書和訳・ギュツラフ訳『約翰福音之傳』は新約聖書ギリシア語本文から訳したか」(招待論文), 『日本語の研究』, 19 卷 2 号, 37–52 頁, 2023.7, DOI: 10.20666/nihongonokenkyu.19.2_37.

中川奈津子, 宮川創, 小川潤

「方言研究資料のためのデータベース構築」(招待論文), 『方言の研究』, 9 卷, 173–193 頁, 2023.8.

So Miyagawa and Salvatore Carlino

“Database of Writing Systems and Orthographies for Okinawan Language: Toward Preservation of Okinawan Linguistic Cultural Heritage”, *Proceedings of JADH conference*, 2023, pp. 33–35, 2023.9.

宮川創

「近世・近代の日本語及び沖縄語訳聖書のパラレル・コーパスの構築」, 『言語資源ワークショップ発表論文集』, 1 卷, 235–244 頁, 2023.10, DOI: 10.15084/0002000131.

中川奈津子, 岡田一祐, 永崎研宣, 北崎勇帆, 王一凡, 曹芳慧, 藤原静香, 塚越柚季, 小川潤, 片倉峻平, 左藤仁宏, 王雯璐, 石田友梨, 宮川創, 佐久間祐惟, 塩井祥子, 井上慶淳, 村瀬友洋, 関慎太郎, 嵩井里恵子, 渡邊眞儀, 中町信孝, 幾浦裕之

「日本語方言談話資料の TEI による構造化の試み」, 『じんもんこん 2023 論文集』, 2023 卷, 83–90 頁, 2023.12.

So Miyagawa

“Machine Translation for Highly Low-Resource Language: A Case Study of Ainu, a Critically Endangered Indigenous Language in Northern Japan”, *Proceedings of the Joint 3rd International Conference on Natural Language Processing for Digital Humanities and 8th International Workshop on Computational Linguistics for Uralic Languages. Association for Computational Linguistics.*, pp. 120–124, 2023.12.

So Miyagawa

“Digitizing Old Nubian Dictionary: Optical Character Recognition for Multi-Lingual and Multi-Script Text From Medieval Africa”, *Proceedings of 7th IEEE Congress on Information Science and Technology (CiSt)*, Agadir-Essaouira, Morocco, 2023, pp. 587–592, 2024.1, DOI: 10.1109/CiSt56084.2023.10409998.

宮川創

「問テキスト性のコーパスデータ駆動型研究: テクストリユース探知プログラム TRACER の古代末期キリスト教コプト語書簡への応用」, 『情報処理学会論文誌』, 65 卷 2 号, 305–231 頁, 2024.2.

宮川創

「自然言語処理を活用したコプト語修道書簡とコプト語訳聖書のコーパス分析」(招待論文), 『音韻研究』, 27 卷, 89–102 頁, 2024.3.

宮川創

「ドイツにおけるデジタル・ヒューマニティーズの一側面—研究基盤形成と大学教育の事例から」(招待論文), 『ドイツ研究』, 58 卷, 4–15 頁, 2024.3.

Kanji Kato, So Miyagawa, and Natsuko Nakagawa

“Language Atlas of Japanese and Ryukyuan (LAJaR): A Linguistic Typology Database for Endangered Japonic Languages”, *The 6th Workshop on Research in Computational Linguistic Typology and Multilingual NLP: Proceedings of the Workshop*, pp. 55–57, 2024.3.

宮川創

「江戸～明治時代の日本語・沖縄語訳「ヨハネによる福音書」のパラレル・コーパス構築とスタイロメトリー」(招待論文),『計量国語学』,34巻4号,273–288頁,2024.3.

《展示など》

・「体感型古代エジプト展 ツタンカーメンの青春」(ヒエログリフ解説監修,取材協力,助言・指導,情報提供,運営参加・支援),角川武蔵野ミュージアム,2023.7.1–11.20.

《その他の出版物・記事》

宮川創

「対話型 AI を用いた言語データの構造化のためのプロンプトエンジニアリング」(招待論文),『人文情報学月報』,141巻(前編),2023.4.30.

宮川創

「エドワード・ドルニック著『ヒエログリフを解け』」(招待書評),『週刊読書人』,5月5日号,6頁,2023.5.5.

宮川創

「ジャパンサーチ API ハッカソン<報告>」(招待論文),『カレントアウェアネス-E』,456巻 E2597号,2023.5.18.

宮川創

「世界の諸言語の文法類型地図データベース・Grambank の誕生: WALS との違いについて」(招待論文),『人文情報学月報』,142巻(前編),2023.5.31.

宮川創

「ドイツにおけるデジタルインフラストラクチャと DH ツールの開発への助成」(招待論文),『人文情報学月報』,143巻(前編),2023.6.30.

宮川創

「IIIF 年次会議とショーケース—イタリア・ナポリ—2023 年 6 月 5–8 日の参加報告」(招待論文),『人文情報学月報』,144巻(後編),2023.7.31.

宮川創

「英語学習から言語学研究までの新たな地平第 2 特集: 生成 AI がひらく言語・教育研究の地平」(招待論文),『英語教育』,2023 年 9 月号,38–39 頁,2023.8.

宮川創

「古代エジプト神官文字(ヒエラティック)の字形画像データベース AKU-PAL」(招待論文),『人文情報学月報』,145巻(前編),2023.8.31.

宮川創

「古代エジプト民衆文字(デモティック)の字形画像データベースとテキストコーパス: Demotic Palaeographical Database Project」(招待論文),『人文情報学月報』,146巻(前編),2023.9.30.

宮川創

「エジプト・エレファンティネ島出土資料の多言語コーパスとデータベース: TEI/XML による文字資料の構造化の一例」(招待論文),『人文情報学月報』,147巻(前編),2023.10.31.

宮川創

「TEI Lex-0 による辞書資料の構造化と機械可読化: GPT Builder の援用も含めた一試行」(招待論文),『人文情報学月報』,148巻,2023.11.30.

宮川創

「生成 AI サービスの新展開: 動画・スライド／ホームページ・歌曲の自動生成」(招待論文),『人文情報学月報』,149巻(前編),2023.12.31.

宮川創

「Coptic Translator: コプト語多層タグ付きコーパス Coptic SCRIPTORIUM を学習させた英語-コプ

ト語・コプト語-英語のニューラル機械翻訳」(招待論文),『人文情報学月報』,150巻(前編),2024.1.31.

宮川創

「AIが拓くパピルス文献学の新たな地平:ウェスウィウス・チャレンジ」(招待論文),『人文情報学月報』,152巻(前編),2024.3.30.

【講演・口頭発表】

宮川創

「人工知能時代における多様性の保全」,招待講演, Grammar Writing 2023, オンライン, 2023.4.2.

宮川創

「ChatGPTを活用したコーパス構築」,特別講演(招待), ChatGPTって何?—その可能性を探る:言語教育研究の立場から—, 関西大学, 2023.4.28.

宮川創

「言語資源デジタルアーカイブにおけるキュレーション:「国立国語研究所デジタルアーカイブ NINDA」の事例から」,第31回(2023年度)情報知識学会年次大会(研究報告会・総会),石川県立図書館,2023.5.20-21.

So Miyagawa, Kanji Kato, Miho Zlazli, Salvatore Carlino, and Seira Machida

“Building Okinawan Lexicon Resource for Language Reclamation/Revitalization and Natural Language Processing Tasks such as Universal Dependencies Treebanking”,ポスター発表, The 24th Nordic Conference on Computational Linguistics (NoDaLiDa 2023), Second Workshop on Resources and Representations for Under-Resourced Languages and Domains (RESOURCEFUL-2023), フェロー諸島大学(フェロー諸島), 2023.5.22-24.

宮川創

「コプト語の言語学的・文献学的研究とデジタルヒューマニティーズ」,招待講演,筑波大学西アジア文明研究センター「西アジア言語学・デジタルヒューマニティーズ講演会」,筑波大学,2023.5.30.

So Miyagawa

“INTRODUCTION TO THE DIGITAL HUMANITIES: Digital Humanities and Textual Cultural Heritage”,招待講演, Spring Semester (HIPS) Academic Writing I “Materials, Memories, Monuments: Public History in the Age of Reproduction”, オンライン, 2023.5.31.

So Miyagawa

“Adaptation of IIF for Audio-Visual Resources of Endangered Languages in Japan for Language Preservation”, IIF Annual Conference and Showcase, ナポリ・フェデリコ二世大学(イタリア), 2023.6.5-8.

So Miyagawa

“Linguistic Methodology to Building Digital Text Corpora for Ancient Egyptian, Coptic, Old Nubian, and Meroitic”, Tenth European Conference of Egyptologists, ポーランド科学アカデミー(ポーランド), 2023.6.12-16.

宮川創

「ドイツにおけるデジタルヒューマニティーズ」,シンポジウムパネル,2023年度日本ドイツ学会大会・シンポジウム「デジタル×ドイツ研究」,早稲田大学,2023.6.18.

宮川創

「人工知能との向き合い方:人とAIによる学びとキャリアの共創」,招待講演,神戸学院大学グローバル・コミュニケーション学部講演会,神戸学院大学,2023.6.28.

So Miyagawa, Yuzuki Tsukagoshi, Yuki Kyogoku, and Kyoko Amano

“Analyzing Text Similarity in Vedic Sanskrit Texts: A Bipartite Approach Using Stylometry and Text Reuse Detection”, DH2023 Workshop—SIG-DLS Seven Years on, グラーツ大学(オーストリア), 2023.7.10.

Yuki Kyogoku, Yuzuki Tsukagshi, So Miyagawa, and Kyoko Amano

“Comparative Analysis of Vedic Sanskrit Documents Using Doc2Vec and Transformer Models”, DH2023 Workshop—SIG-DLS Seven Years on, グラーツ大学 (オーストリア), 2023.7.10.

So Miyagawa

“Training LLMs for Ancient Egyptian and Coptic”, 招待講演, The 13th International Congress of Egyptologists, AI Workshop: ChatGPT and LLM in Egyptology, ライデン大学 (オランダ), 2023.8.6–10.

So Miyagawa, Mona Sawy

“Evidence of Coptic Vowel Phonology from Medical Manuscripts”, The 13th International Congress of Egyptologists, ライデン大学 (オランダ), 2023.8.6–11.

So Miyagawa

“Digital Preservation and Revitalization of Endangered Indigenous Languages in Japan”, 招待講演, EAJIS (European Association for Japanese Studies) International Conference 2023, ヘント大学 (ベルギー), 2023.8.15–21.

宮川創

「方言 × AI」, 招待講演, 令和 5 年度鹿児島大学地域活性化研究支援事業「生成系 AI を活用した鹿児島方言コンテンツの開発」講演会「方言 × デジタル技術の可能性を考える」, 鹿児島大学, 2023.8.16.

So Miyagawa

“A corpus and computational linguistics approach to analyzing intertextuality in Late Antique Coptic literature”, 特別講演 (招待), Phonology Forum 2023, 東京, 2023.8.21–22.

宮川創

「江戸期・明治期の日本語・琉球語訳『ヨハネによる福音書』パラレル・コーパスの構築と翻訳間の影響関係の分析」, 言語資源ワークショップ 2023, 国立国語研究所, 2023.8.28–29.

So Miyagawa and Shintaro Seki

“Digitization of Ryukyuan Music: MEI of Kunkunshi Notation for Classical and Modern Songs with Sanshin”, Encoding Cultures—joint MEC and TEI Conference 2023, パーダーボルン大学 (ドイツ), 2023.9.4–9.

Natsuko Nakagawa and So Miyagawa

“A multi-media dictionary of endangered languages with TEI Lex-0: a case study of Hatoma, Yaeyama Ryukyuan”, ポスター発表, Encoding Cultures—joint MEC and TEI Conference 2023, パーダーボルン大学 (ドイツ), 2023.9.4–9.

So Miyagawa

“How to search words related to vice and virtue in Coptic SCRIPTORIUM and Coptic Dictionary Online”, 招待講演, The Annual Interdisciplinary School of Ancient Greek, Egyptology and Oriental Studies 2023, オンライン, 2023.9.4–9.

宮川創

「2023 年度前半のデジタルヒューマニティーズ関連の 7 つの国際会議の参加報告」, 第 145 回 (通算 173 回) デジタルアーカイブサロン, 高田馬場, 2023.9.15.

So Miyagawa

“Digital Humanities and Coptic Studies: Digital Gateway to Roman and Byzantine Egypt”, 招待講演, The Annual School of Byzantine Studies: Sixth Edition “Peace and War in Byzantium”, オンライン, 2023.9.14–20.

So Miyagawa and Salvatore Carlino

“Database of Writing Systems and Orthographies for Okinawan Language: Toward Preservation of Okinawan Linguistic Cultural Heritage”, The 12th Conference of Japanese Association for Digital Humanities (JADH2023) “Possibilities for Data-Driven Humanities”, オンライン, 2023.9.20–22.

宮川創

「古ヌビア語コーパスと現代ヌビア諸語からみた古ヌビア語の母音字重複の音価」, 東北大学大学院情報科学研究科「言語変化・変異研究ユニット」主催第 11 回ワークショップ (共催: AA 研共同利用・共同研究課題理論言語学と言語類型論と計量言語学の対話にもとづく言語変化・変異メカニズムの探求」2023 年度第 3 回研究会), 東京外国語大学, 2023.9.23–24.

So Miyagawa and Mona Sawy

“Coptic Glossing Tradition”, ワークショップパネル (招待), Handbook of Glossing Workshop (University of Galway), ゴールウェイ大学 (アイルランド), 2023.9.28–29.

宮川創

「コプト語から古代エジプト語の姿を考える—エジプト語歴史音韻論による母音の内的再建」, シンポジウムパネル (招待), シンポジウム「地中海古代語へのまなざし—移動する人、移動する言葉—」, 京都大学, 2023.10.7.

宮川創

「生成 AI を活用した言語教育」, シンポジウムパネル (招待), 神戸学院大学グローバル・コミュニケーション学部学術シンポジウム「デジタルトランスフォーメーション (DX) と言語教育の行方」, 神戸学院大学, 2023.10.14.

宮川創

「古代末期キリスト教文学における間テキスト性へのデジタル・ヒューマニティーズ的アプローチ」, シンポジウムパネル (招待), 日本英文学会関東支部第 23 回 (2023 年度秋季大会), 専修女子大学, 2023.10.29.

So Miyagawa

“Making Digital Corpus of Bettelheim’s Nineteenth-Century Okinawan Bible Translation”, Pacific Neighborhood Consortium (PNC) 2023, 琉球大学, 2023.11.3–5.

宮川創

「AI による XML 生成実践と次の展開」招待講演, 学術情報 XML 推進協議会—XSPA, JST, 2023.11.16.

So Miyagawa

“Digital Lexicography for Coptic and Okinawan”, 招待講演, Workshop on “Digitization of Historical Lexicography and TEI-Lex0”, 東京ビッグサイト, 2023.11.17.

宮川創

「エジプトの言語資料を如何にしてデジタル化するか?」, シンポジウムパネル (招待), 名古屋大学: 文学部創立 75 周年記念講演会・シンポジウム, 名古屋大学, 2023.11.25.

宮川創

「歴史言語学におけるコーパスデータの整備・分析に AI を活用する—エジプト語史の視点から—」, シンポジウムパネル (招待), 一般財団法人東方學會シンポジウム「東洋学・アジア研究の最前線—AI の活用と課題—」, 東京大学, 2023.12.2.

中川奈津子, 岡田一祐, 永崎研宣, 北崎勇帆, 王一凡, 曹芳慧, 藤原静香, 塚越柚季, 小川潤, 片倉峻平, 左藤仁宏, 王雯璐, 石田友梨, 宮川創, 佐久間祐惟, 塩井祥子, 井上慶淳, 村瀬友洋, 関慎太郎, 嵩井里恵子, 渡邊眞儀, 中町信孝, 幾浦裕之

「日本語方言談話資料の TEI による構造化の試み」, じんもんこん 2023 人文科学とコンピュータシンポジウム「人文学のためのデータインフラストラクチャー構築に向けて」, オンライン, 2023.12.9–10.

So Miyagawa

“Digitizing Old Nubian Dictionary: Optical Character Recognition for Multi-Lingual and Multi-Script Text From Medieval Africa”, IEEE Congress on Information Science & Technology CiSt’23, アガディール (モロッコ), 2023.12.16–22.

宮川創

『『雷、全き叡智』、および、『この世の起源について』—コプト語に翻訳された古代末期グノーシス主

義文献を言語学的に読む」, ポスター発表, 言語学フェス 2024, オンライン, 2024.1.20.

So Miyagawa

“Die Bedeutung des Koptischen und Akkadischen für die Rekonstruktion der Vokale des Altägyptischen”, 第2回ドイツ語リサーチ・ショウケース: Forschung im Schaufenster, 東京大学, 2024.1.24.

So Miyagawa, Mona Sawy

“Reconstruction of Coptic Phonology based on Medical Manuscripts”, 特別講演(招待), Round Table: Religion, Economy, and Imperial Power in Premodern Egypt and Beyond, 慶應義塾大学, 2024.1.28.

So Miyagawa

“Theological and Social Othering in Shenoute the Archimandrite’s Writings: An In-depth Investigation into His Views on Pagans, Manichaeans, and Gnostics”, 特別講演(招待), Articulating Oneness: Monotheism and the History of Religion International Congress Humanitas Futura: Traditions of Thought and New Vistas for Understanding Man, 島根大学, 2024.2.12–14.

So Miyagawa

“Annotating Coptic in the Digital Age: Integrating Traditional Scholarship with AI and Digital Tools”, 招待講演, Séminaire HTL 2022–2024: L’annotation entre Moyen Âge et Modernité, オンライン, 2024.3.2.

宮川創

「生成 AI の言語研究・言語教育での活用」, 招待講演, 漢字文献情報処理研究会第25回大会, 関西大学, 2024.3.2.

So Miyagawa

“Linguistic Linked Open Data”, 招待講演, Linked Pasts Japan Kick-off Meeting, 国立情報学研究所 国際高等セミナーハウス, 2024.3.7–9.

So Miyagawa

“A Corpus Linguistic Analysis of Intertextuality in Vedic Literature using TRACER and Stylo”, 特別講演(招待), Exploring the Potential of Utilizing Data from Sanskrit Literature, 京都大学, 2024.3.19–20.

Kanji Kato, So Miyagawa, and Natsuko Nakagawa

“Language Atlas of Japanese and Ryukyuan (LAJaR): A Linguistic Typology Database for Endangered Japonic Languages”, SIGTYP 2024 Workshop, EACL 2024, St. Julian’s (マルタ共和国), 2024.3.22.

宮川創

「国立国語研究所デジタルアーカイブ NINDA: デジタルヒューマニティーズとオープンサイエンスの国際標準に準じた言語資源プラットフォームの構築」, 第268回 NINJAL サロン, 国立国語研究所, 2024.3.26.

宮川創, ヴィンセント・W・J・ヴァン・ヘルヴェン・ウーイ

「ナイル・ヌビア諸語の関係節における属格主語」, 言語変化・変異研究ユニット第12回ワークショップ (共催: AA 研共同研究課題 2023 年度第5回研究会), 東京外国語大学, 2024.3.29–30.

【研究調査】

- ・フェロー語に関する調査 (フェロー諸島), 2023.5.
- ・コプト語に関する資料 (文献) 収集 (ナポリ・イタリア), 2023.6.
- ・宮古語に関する調査 (沖縄県宮古島市), 2023.6.
- ・コプト語および古ヌビア語に関する資料 (文献) 収集 (ワルシャワ・ポーランド), 2023.6.
- ・古代エジプト語に関する資料 (文献) 収集 (コペンハーゲン・デンマーク), 2023.8.
- ・コプト語および古代エジプト語に関する資料 (文献) 収集 (ライデン・オランダ), 2023.8.
- ・古代エジプト語に関する資料 (文献) 収集 (ブリュッセル・ベルギー), 2023.8.
- ・アイルランド・ゲール語に関する調査 (ゴールウェイ周辺・アイルランド), 2023.9.
- ・コプト語に関する資料 (文献) 収集 (ダブリン・アイルランド), 2023.9.

- ・コプト語に関する資料(文献)収集(ロンドン・英国), 2023.9.
- ・琉球諸語の言語復興に関する調査(沖縄県与那国町), 2023.10.
- ・古代エジプト語およびコプト語に関する資料(文献)収集(シドニー・オーストラリア), 2023.12.
- ・コプト語および古代エジプト語に関する資料(文献)収集(カイロおよびメイドウムおよびアシュート周辺(エル・ムハッラク修道院など)・エジプト), 2023.12.
- ・宮古語に関する調査(沖縄県宮古島市), 2024.1.
- ・与論方言に関する方言調査(鹿児島県与論町), 2024.1.
- ・琉球諸語に関する方言調査(沖縄県南風原町), 2024.3.

【一般向けの講演・セミナーなど】

宮川創

「文字と文明：古代エジプト文字の歴史と周辺文明への影響―古代エジプト文字のうちのヒエログリフの概説とその歴史」, 【第76回】伝塾オンラインセミナー2023, オンライン, 2023.9.23.

宮川創

「文字と文明：古代エジプト文字の歴史と周辺文明への影響―古代エジプト文字の解読の歴史」, 【第77回】伝塾オンラインセミナー2023, オンライン, 2023.10.21.

宮川創

「文字と文明：古代エジプト文字の歴史と周辺文明への影響―古代オリエントの諸文明と文字」, 【第78回】伝塾オンラインセミナー2023, オンライン, 2023.11.18.

宮川創

「文字と文明：古代エジプト文字の歴史と周辺文明への影響―セム系諸文字とアルファベット」, 【第79回】伝塾オンラインセミナー2024, オンライン, 2024.1.13.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・学会チュートリアル司会：言語処理学会第30回年次大会(NLP2024), 北本朝展「デジタル・ヒューマニティーズ入門」, 2024.3.11.
- ・学会特別招待講演司会：言語処理学会第30回年次大会(NLP2024), 前川喜久雄「これからの日本語研究と国立国語研究所：E3P-Linguisticsをめぐって」, 2024.3.14.
- ・学会セッション司会：‘Exploring the Potential of Utilizing Data from Sanskrit Literature “Creating and Utilizing Data of Sanskrit Texts and Non-Textual Data”’, 2024.3.19.
- ・学会誌査読： *Digital Scholarship in the Humanities*, Oxford University Press.

井戸 美里 (いど みさと) 研究系特任助教

【学位】 博士 (言語学) (筑波大学, 2017)

【学歴】 筑波大学人文科学研究科文芸・言語専攻一貫制博士課程修了 (2017)

【職歴】 日本学術振興会特別研究員 (DC) (2014–2017), 国立国語研究所理論・対照研究領域 非常勤研究員 (2017), 同 理論・対照研究領域 プロジェクト PD フェロー (2017–2022), 同 研究系 非常勤研究員 (2022–2023), 同 研究系 特任助教 (2023–)

【専門領域】 言語学, 日本語学, 統語論, 意味論

【所属学会】 日本言語学会, 日本語学会, 日本語文法学会, 関西言語学会

【学会等の役員・委員】 日本語文法学会 大会実行委員 (2022)・総務委員 (2017–2019)

【受賞歴】

2023: 国立国語研究所所長賞 (令和 5 年度前期)

2022: 2022 年度日本言語学会論文賞 (受賞論文: Misato IDO and Yusuke KUBOTA (2021), “The Hidden Side of Exclusive Focus Particles: An Analysis of dake and sika in Japanese”, *Gengo Kenkyu*, 160, pp. 183–213.)

2022: 国立国語研究所若手研究者奨励賞 (令和 4 年度前期)

【2023 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」: メンバー
- ・基幹型共同研究プロジェクト「実証的な理論・対照言語学の推進」: メンバー

【2023 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・若手研究「日本語とりたて詞の複合における否定呼応現象の統語と意味」, 18K12393: 研究代表者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

Misato Ido, Ai Kubota, and Yusuke Kubota

“Two types of attenuation strategies for polarity-sensitive items: The semantics of degree adverbs amari and sonnani in Japanese”, Hideki Kishimoto, Osamu Sawada, and Ikumi Imani (eds.) *Polarity-sensitive expressions*, pp. 377–412, De Gruyter Mouton, 2023.12.18, DOI: 10.1515/9783110755121-012.

【講演・口頭発表】

井戸美里, 窪田悠介

「限定のダケと対比のハに基づく、ダケハの意味の構成的分析」, 日本言語学会第 166 回大会, 専修大学, 2023.6.17.

【大学院教育・若手研究者育成】

《大学非常勤講師》

- ・武蔵野大学

川端 良子 (かわばた よしこ) 言語資源開発センター特任助教

【学位】 博士 (学術) (千葉大学, 2019)

【学歴】 千葉大学文学部行動科学学科認知情報科学専攻 卒業 (2000), 千葉大学大学院文学研究科人文科学専攻 修士課程修了 (2002), 千葉大学大学院自然科学研究科情報科学専攻 単位取得満期退学 (2013), 千葉大学大学院融合科学研究科情報科学専攻 博士後期課程修了 (2019)

【職歴】 東芝ソリューション株式会社 (2002–2007), 株式会社リバネス (2007–2009), 人間文化研究機構国立国語研究所 (音声言語研究領域) プロジェクト非常勤研究員 (2016–2021), 同 言語資源開発センター 特任助教 (2022–)

【専門領域】 コーパス言語学, 談話分析, 認知科学

【所属学会】 日本認知科学会, 人工知能学会

【学会等の役員・委員】 人工知能学会言語・音声理解と対話処理研究会 SIG-SLUD 対話システムシンポジウム運営委員

【受賞歴】

2024: NLP2024 優秀賞 (受賞論文: 大村舞, 川端良子, 小西光, 浅原正幸, 竹内誉羽「地図を刺激に用いた位置情報参照表現の収集」)

2023: NLP2022 言語資源賞 (言語処理学会・言語資源協会, 受賞論文: 『日本語日常会話コーパス』の設計と特徴)

2017: 第 15 回国立国語研究所所長賞若手研究者奨励賞

【2023 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究」: メンバー

【2023 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・若手研究「多様な談話状況における照応規則の解明」, 22K13108: 研究代表者
- ・共同研究 (ホンダリサーチインスティテュートジャパン)「行き先目標物の参照表現に関する日本語話し言葉の分析」: メンバー

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

川端良子, 松香敏彦

「日本語地図課題対話におけるソ系指示詞の使用傾向」, 『日本認知科学会第 40 回大会発表論文集』, 260–261 頁, 2023.9.7.

Kawabata Yoshiko, Omura Mai, Asahara Masayuki, and Takeuchi Johane

“Spatial Information Annotation Based on the Double Cross Model”, *Proceedings of the 37th Pacific Asia Conference on Language, Information and Computation*, pp. 137–144, 2023.12.4, <https://aclanthology.org/2023.paclic-1.14>.

川端良子, 中野幹生

「日常会話の中のシーンの移行に関する調査」, 『人工知能学会研究会資料 言語・音声理解と対話処理研究会』, 100 巻, 33–38 頁, 2024.2.20, DOI: 10.11517/jsaislud.100.0_33.

川端良子, 大村舞, 小西光, 浅原正幸, 竹内誉羽

「地図を刺激に用いた経路情報参照表現の収集」, 『言語処理学会第 30 回年次大会発表論文集』, 1345–1350 頁, 2024.3.12.

大村舞, 川端良子, 小西光, 浅原正幸, 竹内誉羽

「地図を刺激に用いた位置情報参照表現の収集」, 『言語処理学会第 30 回年次大会発表論文集』, 1469–1474 頁, 2024.3.12.

《その他の出版物・記事》

川端良子

「言語資源ワークショップ 2023 開催報告」, 『自然言語処理』, 30 巻 4 号, 1285–1290 頁, 2023.12.15,
DOI: 10.5715/jnlp.30.1285.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・ 言語資源ワークショップ実行委員会, 2023.8.28–29.
- ・ 人工知能学会言語・音声理解と対話処理研究会 (SLUD) 第 99 回研究会, 対話システムシンポジウム:
シンポジウム委員, 2023.12.13–14.
- ・ 電子情報通信学会ヴァーバル・ノンヴァーバル・コミュニケーション研究会 (IEICE VNV, 日本音響学
会音声研究会共催): 世話役, 2024.2.16.

【大学院教育・若手研究者育成】

《大学非常勤講師》

- ・ 千葉大学国際教養学部 (2020–)

Celik Kenan Thibault (セリック ケナン チボ) 研究系特任助教

【学位】 博士（京都大学，2020）

【学歴】 パリ経営大学院国際ビジネス専攻修士課程修了（2011），京都大学大学院文学研究科行動文化言語学専攻修士課程修了（2014），京都大学大学院文学研究科行動文化言語学専攻博士後期課程修了（2017）

【職歴】 国立国語研究所言語変異研究領域 非常勤研究員（2018–2021），国立国語研究所 研究系（言語変異研究領域）特任助教（2021–2022），同 研究系プロジェクト非常勤研究員（2022），独立行政法人日本学術振興会（JSPS）外国人特別研究員（2022–2023），国立国語研究所 研究系特任助教（2023–）

【専門領域】 記述言語学，歴史言語学，アクセント，宮古語

【所属学会】 日本語学会，日本言語学会，日本音声学会

【受賞歴】

2019：日本語学会大会発表賞（「琉球八重山白保方言のアクセント体系は三型であって，二型ではない」，日本語学会）

【2023 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「実証的な理論・対照言語学の推進」：メンバー（サブプロジェクト「日本・琉球語諸方言におけるイントネーションの多様性解明のための実証的研究」）
- ・基幹型共同研究プロジェクト「消滅危機言語の保存研究」：メンバー

【2023 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・挑戦的研究（萌芽）「遺伝系統樹と言語系統樹の矛盾を検討する」，23K17503：研究分担者
- ・基盤研究（B）「南琉球宮古諸方言のアクセントに関する調査研究」，20H01259：研究分担者
- ・特別研究員奨励費「日琉祖語で再建される語の語形成の解明」，22F22305：研究代表者

【研究業績】

《著書・編書》

川平老人クラブ寿会，セリック ケナン，麻生玲子

『川平方言会話集』，国立国語研究所，2024.2.7.

《論文・ブックチャプター》

セリック ケナン，麻生玲子

「南琉球八重山語大浜方言のアクセント資料」，『言語記述論集』，15 号，171–192 頁，2023.4.11.

セリック ケナン，麻生玲子，中澤光平

「南琉球八重山語波照間方言辞典に関する中間報告」，『言語記述論集』，15 号，193–358 頁，2023.4.11.

セリック ケナン，麻生玲子，中澤光平

「八重山祖語の系列再建に向けた小浜方言の AB/C の所属資料」，『アジア・アフリカ言語文化研究』，2023 巻 106 号，111–131 頁，2023.9.29，DOI：10.57275/ilcaajaas.2023.106_111.

セリック ケナン，中澤光平，麻生玲子

“UniCog：A Framework Proposal for the Dynamic Compilation of Comparative Data for the Reconstruction of proto-Ryukyuan”，『国立国語研究所論集』，26 巻，69–97 頁，2024.2.4，DOI：10.15084/0002000156.

大島一，セリック ケナン

「宮古語諸方言での名詞句階層でみる複数性表現に関する予備的調査報告」，『日琉諸語の記述・保存研究』，2 巻，6–18 頁，2024.3.7，DOI：10.15084/0002000175.

セリック ケナン

「基本例文 50 要地方言訳 沖縄県宮古郡多良間村水納島方言」，方言文法研究会（編）『全国方言文法辞典資料集（8）活用体系（6）』，調査報告書，107–113 頁，2024.3.10.

【講演・口頭発表】

セリック ケナン・麻生玲子

「八重山語小浜方言の3型のアクセント体系について」, 令和5年度第1回「危機言語の保存と日琉諸語のプロソディー」合同研究発表会, 国立国語研究所, 2023.6.10.

大島一, セリック ケナン

「宮古語諸方言での名詞句階層でみる複数性表現に関する予備的調査報告」, 令和5年度第1回「危機言語の保存と日琉諸語のプロソディー」合同研究発表会, 国立国語研究所, 2023.6.10.

セリック ケナン

「鳩間方言の韻律体系の見直し: アクセント型の対立数などを巡って」, 第258回 NINJAL サロン, 国立国語研究所, 2023.10.7.

セリック ケナン・麻生玲子

「南琉球八重山語における三型アクセント体系のさらなる報告」, 日本言語学会第167回大会, 同志社大学, 2023.11.12.

セリック ケナン

「調査速報: 八重山語竹富方言の三型アクセント体系」, 第266回 NINJAL サロン, 国立国語研究所, 2024.1.23.

セリック ケナン

「八重山語の韻律体系」, 令和5年度第2回「危機言語の保存と日琉諸語のプロソディー」合同研究発表会, 国立国語研究所, 2024.3.17.

【研究調査】

- ・波照間方言調査 (沖縄県那覇市), 2023.4.7-8.
- ・八重山語の古見, 宮良諸方言, 宮古語の水納島, 砂川, 来間諸方言調査 (沖縄県那石垣市・宮古島市), 2023.4.27-5.9.
- ・八重山語の新城, 大浜, 宮良, 小浜諸方言, 宮古語の多良間, 与那覇, 国仲, 砂川, 来間諸方言調査 (沖縄県石垣市・宮古島市), 2023.5.17-25.
- ・八重山語の波照間, 大浜, 宮良諸方言, 宮古語の多良間, 国仲, 水納島, 与那覇, 砂川諸方言調査 (沖縄県那覇市・石垣市・宮古島市), 2023.6.11-20.
- ・宮古語砂川方言調査 (沖縄県宮古島市), 2023.7.14-18.
- ・八重山語の大浜, 新城, 小浜, 古見諸方言調査 (沖縄県石垣市), 2023.7.21-25.
- ・宮古語の皆愛, 与那覇, 洲鎌, 多良間, カニツア, 水納島, ヤマリ, 砂川諸方言調査 (沖縄県那覇市・宮古島市), 2023.8.13-23.
- ・宮古語の皆愛, 与那覇, 砂川諸方言調査 (沖縄県那覇市・宮古島市), 2023.10.11-15.
- ・八重山語の川平, 小浜, 大浜, 鳩間諸方言調査, 宮古語の皆愛, 狩俣, 佐良浜, 上地, 水納島, 多良間諸方言調査 (沖縄県石垣市・宮古島市), 2023.10.18-31.
- ・宮古語の皆愛, 城辺下里添, 多良間, 砂川諸方言調査 (沖縄県那覇市・宮古島市), 2023.11.14-19.
- ・八重山語の大浜, 船浮諸方言調査 (沖縄県石垣市), 2023.11.24-28.
- ・及位方言調査 (山形県真室川町), 2023.12.3-6.
- ・八重山語の竹富, 古見, 祖納, 干立, 大浜, 小浜, 真栄里諸方言調査 (沖縄県石垣市), 2023.12.17-25.
- ・宮古語の多良間, 皆愛, 水納島諸方言調査 (沖縄県宮古島市), 2023.12.27-30.
- ・及位方言調査 (山形県真室川町), 2024.1.26-29.
- ・八重山語の網取, 船浮, 古見, 干立, 竹富, 大浜諸方言, 宮古語の皆愛, 多良間諸方言調査 (沖縄県那覇市・石垣市・宮古島市), 2024.2.8-28.
- ・八重山語の網取, 竹富, 川平, 干立, 真栄里, 船浮, 小浜, 大浜諸方言調査 (沖縄県石垣市), 2024.3.5-11.
- ・宮古語の池間, 砂川, 水納島, 川満, 上地, 長浜, 新城, 多良間諸方言調査 (沖縄県宮古島市), 2024.3.19-30.

本多 由美子 (ほんだ ゆみこ) 研究系特任助教

【学位】 博士 (学術) (一橋大学, 2020)

【学歴】 一橋大学社会学部 (1993), 一橋大学大学院言語社会研究科修士課程修了 (2016), 一橋大学大学院言語社会研究科博士後期課程修了 (2020)

【職歴】 千駄ヶ谷日本語教育研究所 (2000–2010), 千駄ヶ谷日本語学校 (2010–2014), 国際交流基金日本語試験センターアシスタント (2014–2017), 宝塚大学東京新宿キャンパス非常勤講師 (2017–2021), 相模女子大学非常勤講師 (2018–2022), 一橋大学森有礼高等教育国際流動化機構国際教育交流センター／経営管理研究科非常勤講師 (2020–2023), 人間文化研究機構国立国語研究所プロジェクト非常勤研究員 (2020–2023), 東洋大学文学部非常勤講師 (2021–), 人間文化研究機構国立国語研究所研究系特任助教 (2023–)

【専門領域】 日本語学, 日本語教育学, 漢字教育, 語彙教育

【所属学会】 計量国語学会, 語彙研究会, 社会言語科学会, 小出記念日本語教育学会, 日本漢字学会, 日本語学会, 日本語教育学会

【受賞歴】

2022: 国立国語研究所第二十五回所長賞 (対象業績: 「2022 年度「公益信託田島毓堂語彙研究基金」学術賞」)

2022: 2022 年度「公益信託田島毓堂語彙研究基金」学術賞 (対象業績: 『二字漢語の透明性と日本語教育への応用』)

2016: 平成 28 年度「公益信託田島毓堂語彙研究基金」研究助成 (助成対象研究: 「二字漢語と構成漢字の意味の結びつきに関する研究—日本語学習者と日本語母語話者を対象とした意味の結びつきの調査—」)

【2023 年度に参画した共同研究】

- ・機関拠点型基幹研究プロジェクト「多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究」: メンバー (サブプロジェクト「日本語学習者の作文の縦断コーパス研究」, 「定住外国人の談話の縦断研究」)
- ・機関拠点型基幹研究プロジェクト「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」: メンバー (サブプロジェクト「学習者辞書用語彙資源の構築」)

【2023 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究 (A) 「文章の語彙レベルの学習者適合度の判定方法の開発—日本語教育・国語教育への応用—」, 23H00072: 研究分担者
- ・基盤研究 (B) 「やさしい日本語を鍵概念とする言語教育、言語研究、言語政策に関する総合的研究」, 21H00536: 研究分担者

【講演・口頭発表】

本多由美子

「「二字漢語の意味的透明性」の日本語教育への応用: 二字漢語の意味の理解と推測に向けたアプローチ」, 第 253 回 NINJAL サロン, 国立国語研究所, オンライン (ハイブリッド), 2023.7.11.

本多由美子

「二字漢語の意味的透明性における仲介語の検討: 同一サンプル内での出現位置に着目した調査」, ポスター発表, 言語資源ワークショップ 2023, オンライン, 2023.8.28.

本多由美子, 陳燕青, ライ・タイン・ホア, レー・ティ・トゥー・ハー, 呉丹

「縦断作文コーパスに見る学習者の日本語習得過程」, シンポジウムパネル, 日本語学会 2023 年度秋季大会, オンライン, 2023.10.29.

早川杏子, 本多由美子

「漢字字形学習のための教育漢字 1,026 字の字形分解: JSL 児童生徒のための効率的な漢字学習を目指

して」, 2023 年度日本語教育学会秋季大会, 山形テルサ, 2023.11.26.

【その他の学術的・社会的活動】

- NINJAL 職業発見プログラム (お茶の水女子大学附属高等学校): 講師, 国立国語研究所, 2023.5.16.
- 研究会誌査読: 『一橋日本語教育研究』

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

本多由美子

「漢字学習と語彙学習のつながりを考える—二字漢語の意味の透明性に着目して—」, 小出記念日本語教育学会第 12 回ワークショップ (ワークショップ講師), オンライン, 2023.8.24.

《大学院非常勤講師》

- 東洋大学大学院文学研究科

横山 晶子 (よこやま あきこ) 研究系特任助教 (2023.7.1-)

【学位】 博士 (社会学) (一橋大学, 2017)

【学歴】 一橋大学社会学部卒業 (2010), 一橋大学社会学研究科修士課程修了 (2012), ハーバード大学 The Graduate School of Arts and Sciences 留学 (2014-2015), 一橋大学社会学研究科博士課程単位取得退学 (2017)

【職歴】 国立国語研究所時空間変異系 プロジェクト奨励研究員 (2012-2013), 日本学術振興会 特別研究員 (DC) (2013-2014), ハーバードイェンチン研究所 客員研究員 (2014-2015), 立正大学心理学部 非常勤講師 (2017-2018), ロンドン大学東洋アフリカ研究学院 客員研究員 (2019), 日本学術振興会/国立国語研究所 特別研究員 (PD) (2017-2020), 成城大学文学部 非常勤講師 (2023), 日本学術振興会/東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 特別研究員 (RPD) (2020-2023), 人間文化研究機構 人文知コミュニケーター/国立国語研究所研究系 特任助教 (2023-), 大東文化大学日本語学科 非常勤講師 (2023-)

【専門領域】 言語学, 方言学, 社会学 (社会調査)

【所属学会】 日本言語学会, 日本語学会, 方言研究会, 日本島嶼学会

【受賞歴】

2022: 日本島嶼学会研究奨励賞 (日本島嶼学会)

2020: 仲宗根政善記念研究奨励金 (沖縄言語研究センター)

2017: 第10回スミセイ女性研究者奨励賞「危機言語の継承に向けた教材開発研究」(住友生命保険相互会社)

【2023 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「消滅危機言語の保存研究」: メンバー
- ・共創先導プロジェクト共創促進研究「開かれた人間文化研究を目指した社会共創コミュニケーションの構築」: メンバー

【2023 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・特別研究員奨励費「危機言語の復興に向けたアクションリサーチ」, 20J40023: 研究代表者
- ・若手研究「危機言語コミュニティにおける言語生態系と言語移行の関係—琉球沖永良部語を事例に—」, 18K12392: 研究代表者
- ・基盤研究 (B)「琉球沖永良部語を中心とした地域言語コミュニティ参加型の消滅危機言語復興研究」, 20H01266: 研究分担者
- ・基盤研究 (B)「言語喪失の動態の研究: 沖永良部語若年層話者における言語消滅メカニズムの解明」, 20H01257: 研究分担者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

横山晶子

「沖永良部島民の言語意識資料—アンケート調査を元に—」, 『方言の研究』, 9 巻, 161-172 頁, 2023.7.

横山晶子, 富岡裕, 中山俊秀

「危機言語コミュニティにおける、家庭内での言語選択の変遷—北琉球沖永良部島を事例に—」, 『琉球の方言』, 47 巻, 71-84 頁, 2024.3.

《コーパス・データベース類》

横山晶子, カルリノ・サルバトーレ, 下地理則

「日琉諸語オンライン辞書」, <http://odjl.net>, 2024.3.

【講演・口頭発表】

横山晶子, Suraratdecha Sumittra, 富岡裕

「ヘリテージキャンプ: 沖永良部島での実践報告」, 琉球継承言語研究会, 沖縄, 2024.3.23.

【研究調査】

- ・「危機言語 New Speaker 育成」に関する調査（鹿児島県大島郡知名町・和泊町），2023.8.31–9.4.
- ・「ヘリテージキャンプ」の実施（鹿児島県大島郡知名町・和泊町），2024.1.25–30.
- ・「少数民族コミュニティにおける言語文化の継承の方法」に関する調査（タイ），2024.2.13–18.
- ・「基礎語彙」に関する調査（静岡県葵区井川），2024.3.18–20.

【一般向けの講演・セミナーなど】

横山晶子

「社会共創の挑戦とリアル：言語継承の現場で」，コモンズカフェ，東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所，2024.2.8.

横山晶子

「自分たちで言葉を記録する」，シンポジウム「井川方言を残すために」，静岡県葵区井川支所，2024.3.19.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・鹿児島県大島郡知名町公民館講座「しまむにサロン」講師：2023.6.3, 7.1, 8.5, 9.2, 10.7, 11.18, 12.2, 2024.1.6, 2.3, 3.9.
- ・南海日日新聞「島ことばの散歩道」連載：2018 年から月 1 回，2023 年度はリレー連載
- ・中高生向けの 2 日間の言語文化継承イベント「沖永良部島ヘリテージキャンプ」実施：2024.1.27–28.
- ・しまむに（北琉球沖永良部語）解説動画：
 - ・「しまむにとってどんなことば？」，<https://youtu.be/18BMm4ztkEU>
 - ・「日本語としまむにの音の対応」，<https://youtu.be/KhJR7XdjQN8>
 - ・「日本語にない音」，<https://youtu.be/nZpmiQR3v8o>
- ・取材を受けた記事・番組：
 - ・「知っているようで知らない沖縄」，FM 沖縄「オリオンビブレイク」，2023.9.7, 14, 21, 28.
 - ・「沖永良部島で「女性の会」方言研究者の横山さんと女性の生き方語り合う」，奄美群島南三島経済新聞，2023.9.11.
 - ・「鹿児島県 タイの若者と島の中高生交流 アイデンティティー守る意識を 島内巡り沖永良部の文化知る」，奄美新聞/Yahoo!ニュース，2024.1.31.
 - ・「島の文化の価値再認識 タイ少数民族と史跡や体験施設巡る 沖永良部島の中高生」，南海日日新聞/Yahoo!ニュース，2024.1.31.
 - ・「沖永良部島の文化や自然巡るツアー 地元中高生らがタイ人と巡る」，奄美群島南三島経済新聞，2024.2.5.
 - ・「ライブしずおか」，SBS 静岡放送，2024.3.21（18:15–19:00 放送）.
 - ・「「極めて深刻、祖父母世代までしか話せない」消滅の危機・・・独特な方言が残る静岡市の山間部 学者の卵が「井川の言葉」を調査」，Yahoo!ニュース，2024.3.21.
 - ・「静岡の無アクセント地域「井川方言」、国立国語研が調査」，日本経済新聞，2024.3.22.
 - ・「静岡市中山間地域・井川の言葉を後世に「地域の宝」録音、保存 国立国語研究所が調査」，静岡新聞社「あなたの静岡新聞」/Yahoo!ニュース，2024.3.31.

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

横山晶子

「基礎語彙調査の方法」，NINJAL チュートリアル，国立国語研究所，2024.3.16.

《フィールドワーク・フィールド調査などの実習》

横山晶子

国立国語研究所危機言語プロジェクト「フィールドワーク支援@井川」，静岡県静岡市葵区井川，2024.3.18–20.



資 料

1 運営会議

運営会議規程

- ・委員は 20 名以内、内過半数は所外の学識経験者。
- ・所内委員は、副所長、研究主幹、センター長、他所長の指名する教授又は客員教授若干名。
- ・会議は所長の求めに応じ、議長がこれを招集する。
- ・委員の過半数の出席がなければ議事を開き、議決することができない。
- ・会議の議事は出席した委員の過半数で決し、可否同数のときは議長の決するところによる。
- ・専門的事項について審議を行うための専門委員会（所長候補者選考委員会、人事委員会、審査委員会）を置くことができる。
- ・議長は、必要に応じて委員以外の者に出席を求め、意見を聴取することができる。

2023 年度の開催状況

- ・第 1 回 [2023 年 6 月 13 日 15:30-17:10 (Web 会議)]
 - ・審議事項
 1. 研究教育職員の評価基準の改訂について
 2. 人事委員会委員の選出について
 3. その他
 - ・報告事項
 1. 第 3 期中期目標期間に係る業務の実績に関する評価の結果について
 2. 第 4 期中期目標・中期計画における意欲的な評価指標について
 3. 国立国語研究所宮地裕日本語研究基金について
 4. 共同利用型共同研究の採択報告について
 5. 令和 6 年度概算要求等について
 6. 国立国語研究所の活動について
 7. その他
- ・第 2 回 [2023 年 10 月 20 日 15:00-17:15 (Web 会議)]
 - ・前回議事概要確認
 1. 前回議事概要 (案) について
 - ・審議事項
 1. テニユアトラック助教の審査について
 2. 特任助教 (言語資源開発センター) の公募について
 3. 教員 (研究系) の選考について
 4. 研究教育職員候補者の業績評価の数量化 (案) について
 5. 国立国語研究所特定客員教員規程 (案) について
 6. その他
 - ・報告事項
 1. 第 4 期中期計画自己点検報告書について
 2. 令和 6 年度概算要求について
 3. 国立国語研究所宮地裕日本語研究基金について
 4. 共同利用型共同研究の採択報告について
 5. 国立国語研究所の活動について
 6. その他
- ・第 3 回 [2024 年 2 月 2 日 13:00-15:30 (TKP ガーデンシティ PREMIUM 東京駅丸の内中央)]
 - ・前回議事概要確認

1. 前回議事概要（案）について
- ・ 審議事項
 1. 言語資源開発センター特任助教の選考について
 2. E3P 言語学研究センター（仮称）研究教育職員の選考について
 3. 名誉教授称号授与者の選考について
 4. 令和6年度客員教員について
 5. 国立国語研究所における研究教育職員候補者の業績評価の数量化について
 6. 国立国語研究所における特任研究員選考候補者選考内規（案）について
 7. 令和6年度運営会議議長及び開催日について
 8. 令和6年度人事委員会の設置について
 9. その他
- ・ 報告事項
 1. テニユアトラック助教の審査について
 2. 令和4年度外部評価報告書について
 3. 国立国語研究所における令和5年度基幹研究の活動状況について
 4. 第4期中期計画に係る自己点検・評価について
 5. 令和6年度国立国語研究所関係予算について
 6. 共同利用型共同研究の採択報告について
 7. 国立国語研究所の活動について
 8. その他
- ・ 第4回〔2024年3月8日（書面審議）〕
 - ・ 審議事項
 1. 令和6年度客員教員の追加について

運営会議の下に置かれる専門委員会

(1) 所長候補者選考委員会

- ・ 所長候補者選考委員会規程
 - ・ 委員会の任務は、被推薦者名簿の作成、適任者名簿の作成、その他所長選考に必要な予備的事項に関するを行う。
 - ・ 委員会は運営会議委員のうち運営会議議長が指名する研究所内の者及び研究所外の者若干名で組織する（研究所内の委員を過半数とする）。
 - ・ 委員の任期は1年とし再任を妨げない。欠員の後任者の任期は前任者の残任期間とする。
 - ・ 委員の過半数の出席がなければ議事を開き、議決することができない。
 - ・ 委員会の議事は、出席した委員の過半数で決し、可否同数のときは議長の決するところによる。
 - ・ 委員長は必要に応じて委員以外の者に出席を求め、意見を聴取することができる。

(2) 人事委員会

- ・ 人事委員会規程
 - ・ 委員会は研究所の研究教育職員の採用及び昇任人事に係る候補者の選考に関する事項の審議を行う。
 - ・ 委員会は運営会議委員のうち運営会議議長が指名する、研究所外の者及び研究所内の者若干名で組織する。
 - ・ 委員の任期は1年とし、再任を妨げない。欠員の後任者の任期は前任者の残任期間とする。
 - ・ 委員会は委員の過半数の出席で議事を開催する。
 - ・ 委員会の議事は出席した委員の過半数で決し、可否同数のときは委員長の決するところによる。
 - ・ 委員長は必要に応じて委員以外の者に出席を求め、意見を聴取することができる。
- ・ 人事委員会審議状況
 - ・ 2023年6月13日（第1回）：
 - 人事委員会委員長として石黒圭委員を選任

- ・ 2023 年 10 月 4 日 (第 2 回) :
 - 研究系准教授として田中雄氏, 研究系助教 (テニュアトラック) として落合哉人氏を運営会議に推薦 (2023 年 10 月 20 日 運営会議 (第 2 回) で採用決定)
 - 「研究教育職員候補者の業績評価の数量化 (案)」について, 運営会議に提出
- ・ 2023 年 12 月 25 日 (第 3 回) :
 - 言語資源開発センター特任助教として高橋雄太氏を運営会議に推薦 (2024 年 2 月 2 日 運営会議 (第 3 回) で採用決定)
 - 「研究教育職員候補者の業績評価の数量化 (運営会議委員の意見を受けて検討した修正案)」について, 運営会議に提出

2 評価体制

国立国語研究所では, 効率的かつ効果的な自己点検・評価を実施し, その評価結果を適切に業務運営に反映させるため, 自己点検・評価委員会を設置している。この自己点検・評価を第三者評価に適切に関連づけるため, 外部評価委員会を設置している。外部評価委員会では, 令和 4 年度の「機関拠点型基幹研究プロジェクト・センターの研究活動」, 令和 4 年度の「管理業務」について研究所がまとめた自己点検・評価に対し, 外部評価委員がその専門的立場から検証をおこなった。

(1) 自己点検・評価委員会

この委員会では, 自己点検・評価の基本的な考え方の作成, 自己点検・評価の実施, 評価結果の公表及び活用に関すること, 外部評価委員会の評価結果に関することを担当する。2023 年度は 4 回開催した。

(2) 外部評価委員会

外部評価委員会規程

- ・ 委員会は, 自己点検・評価の結果に基づく評価に関すること, 研究所の中期計画及び年度計画の評価に関すること, 共同研究プロジェクト等の評価に関すること, その他評価に関することについて審議する。
- ・ 委員会は 10 名以内の委員をもって組織する。委員は研究所の設置目的について理解のある学外の学識経験者等の中から所長が委嘱する。
- ・ 委員の任期は 2 年とし, 再任を妨げない。ただし委員に欠員が生じた場合の後任者の任期は前任者の任期とする。
- ・ 委員会は, 委員の過半数が出席しなければ, 議事を開き, 議決をすることができない。委員会の議事は, 出席した委員の過半数で決し, 可否同数のときは, 議長の決するところによる。
- ・ 委員会は, 必要に応じて委員以外の者に出席を求め, 意見を聴取することができる。
- ・ 外部評価の実施は, 研究所の中期計画及び年度計画の実施に関する評価の時に行うものとする。委員会は, 評価の結果を所長に報告するものとする。

令和 4 年度業務の実績に関する評価の実施について

1. 評価の実施の趣旨

文部科学省に提出した「大学共同利用機関法人人間文化研究機構令和 3 年度計画」および「大学共同利用機関法人人間文化研究機構中期計画 (令和 4 年 4 月 1 日～令和 10 年 3 月 31 日)」に記載した計画の実施状況について自己点検評価をおこない, その妥当性を検証するため外部評価委員会による評価を実施。

2. 評価の実施方法

評価は書面審査でおこなう。研究所が作成した, 令和 3 年度の活動概要が記入された「令和 4 年度業務の実績に関する外部評価報告書」の内容を検証。

外部評価委員会【令和 4 年度実績評価】

- ・ 2023 年 10 月 26 日 14:30-17:00 (オンライン)
 - ・ 議事
 1. 前回議事概要 (案) 確認

2. 令和4年度機関拠点型基幹研究プロジェクト評価について
3. 令和4年度共同研究プロジェクト評価について
4. 令和4年度「言語資源開発センター」及び「共同利用推進センター」の評価について
5. 令和4年度「管理業務」の評価について
6. その他
 - 人間文化研究機構 第4期中期目標期間にかかる評価について

(3) 基幹研究プロジェクトの評価

各プロジェクトリーダーが作成した「自己点検報告書」に基づいて、外部評価委員会委員による書面審査をおこなった。

3 所長賞

功績顕著な職員に対し、所長からその功績をたたえ表彰をおこない、研究所の活性化に資することを目的とするもので、学術上の功績および研究支援業務等で優れた功績があったと認められる者を対象とし、原則として年2回おこなう。

第26回所長賞：2023年度前期（2022年10月1日–2023年3月31日）

・特別所長賞

- ▶ 山田真寛（研究系准教授）・中川奈津子（研究系准教授）
 - 業績：山田真寛准教授，中川奈津子准教授が参画するプロジェクト「言語復興の港」が「第29回オーキッドバウンティ」を受賞（令和5年2月28日）
 - 理由：その他，上記と同等と所長が判断する顕著な学術的・社会的業績

・所長賞

- ▶ 野山広（研究系准教授）
 - 業績：野山広・福島育子・帆足哲哉・山田泉・横山文夫（編著）『地域での日本語活動を考える—多文化社会葛飾からの発信—』，ココ出版，2022.10.25.
 - 理由：全国的に定評のある学術出版社による著書・編書の国内出版（単独・共同を問わないが，所員を筆頭とする著作に限る。）
- ▶ 井戸美里（研究系特任助教）
 - 業績：(1)
2022年度日本言語学会論文賞（Misato IDO “The Hidden Side of Exclusive Focus Particles: An Analysis of *dake* and *sika* in Japanese” (co-work with Yusuke KUBOTA), *Gengo Kenkyu*, 160号, 183–213頁, 2021.）
(2)
井戸美里（2023）『現代日本語における否定的評価を表すとりたて詞の研究』，くろしお出版
 - 理由：(1)
学会レベルでの受賞（口頭発表やポスター発表に係わる賞や奨励賞は除く。単独・共同を問わないが，原則として，所員を筆頭者とするものに限る。）
(2)
全国的に定評のある学術出版社による著書・編書の国内出版（単独・共同を問わないが，所員を筆頭とする著作に限る。）
- ▶ 岩崎拓也（筑波大学人文社会系助教（元研究系特任助教（人文知コミュニケーター）））
 - 業績：岩崎拓也『現代日本語における句読点の研究研究概観と使用傾向の定量的分析』，ココ出版，2023.2.
 - 理由：全国的に定評のある学術出版社による著書・編書の国内出版（単独・共同を問わないが，所員を

筆頭とする著作に限る。)

・若手研究者奨励賞

▶ 大村舞 (言語資源開発センタープロジェクト非常勤研究員)

◦業績: 大村舞, 若狭絢, 浅原正幸 (2023) 「国語研長単位に基づく日本語 Universal Dependencies」, 『自然言語処理』, 30 巻 1 号, 4–29 頁.

◦理由: 日本を代表するピアレビュー誌に掲載された学術論文 (学界展望や書評, 研究ノートなどを除く。共著の場合, 筆頭者に限る。)

▶ 諸隈夕子 (研究系プロジェクト非常勤研究員)

◦業績: 諸隈夕子 (2023) 「ケチュア語アヤクーチョ方言の示差的目的語標示と情報構造」, 『言語研究』, 163 号, 111–138 頁.

◦理由: 日本を代表するピアレビュー誌に掲載された学術論文 (学界展望や書評, 研究ノートなどを除く。共著の場合, 筆頭者に限る。)

第 27 回所長賞:

2023 年度後期 (2023 年 4 月 1 日–2023 年 9 月 30 日) および前期 (2022 年 10 月 1 日–2023 年 3 月 31 日)

・所長賞 (2023 年度後期)

▶ プラシャント・パルデシ (研究系教授)

◦業績: Prashant Pardeshi and Masayoshi Shibatani (2023) “Marathi relative and complement clauses in nominalization perspective” in Rajesh Kumar and Om Prakash (eds.) *Language Studies in India: Cognition, Structure, Variation*, Singapore: Springer Nature, pp.321–352, 2023.5.

◦理由: その他, 上記と同等と所長が判断する学術的又は社会的な業績 (①世界を代表すると認められる専門誌に掲載された学術論文 (単独・共同を問わないが, 所員を筆頭者あるいは筆頭者に準じる貢献をした者))

・所長賞 (2023 年度前期遡及)

▶ 宮川創 (研究系助教)

◦業績: 言語処理学会第 29 回年次大会 (NLP2023) 委員特別賞 (田口智大, 宮川創 「形態論情報付き日本語 Universal Dependencies」 言語処理学会事務局 (編) 『言語処理学会第 29 回年次大会発表論文集』, 言語処理学会, 732–737 頁, 2023.

◦理由: 学会レベルでの受賞

4

研究教育職員の異動 (2023 年度の異動者)

2023. 4. 1	所長	前川喜久雄	就任	
2023. 4. 1	特任助教	井戸美里	採用	研究系
2023. 4. 1	特任助教	Celik Kenan Thibault	採用	研究系
2023. 4. 1	特任助教	本多由美子	採用	研究系
2022. 7. 1	特任助教 (人文知コミュニケーター)	横山晶子	採用	研究系
2024. 1.31	准教授	中川奈津子	辞職	研究系
2024. 3.31	教授	横山詔一	定年退職	研究系
2024. 3.31	助教 (テニュアトラック)	宮川創	辞職	研究系



外部評価報告書

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国立国語研究所

令和5年度業務の実績に関する外部評価報告書

国立国語研究所 外部評価委員会

令和6年9月19日

はじめに

令和5年度（2023年度）の国立国語研究所の業務実績に関する外部評価報告書をお届けします。

令和5年度は、第4期中期目標期間（2022-2027年度）の2年目にあたります。第3期中期目標期間の最後の2年間で新型コロナウイルス感染症に大きく影響されたことは昨年度の本欄でも触れたとおりですが、幸い、第4期に入ってからはその問題も解消に向かいました。令和5年度には、国内外でのフィールドワークが再開され、種々の研究会も対面ないしハイブリッド形式で開催されるようになってきました。研究所内の会議も、主要なものは原則対面形式に戻して実施するように変更しました。幸い、本稿の執筆時点まで、おおきな揺り戻しを経験せずに済んでいます。

いまふりかえれば、コロナ禍の2年間で研究所に（そして日本の社会全体に）与えた影響には正負両面で大きなものがあったように思います。プラス面として、コロナ禍は、われわれの業務のどこまでがリモート化が可能かを見極める貴重な社会実験の機会となり、いわゆるワーク・ライフバランスの改善を真剣に検討する機会となりました。国語研究所の場合、管理部においても、従来想定されていたよりも広い範囲でのリモート化が可能であったというのが私の感想です。職員の勤務形態を改めるには人間文化研究機構本部での規定改定が必要であり、国語研究所だけの判断でことを進めることができませんので、今後、人間文化研究機構と協議を進めていきたいと考えています。

他方、マイナス面として指摘できるのは、連続的な在宅勤務によって研究所員どうしの日常コミュニケーションの機会が極端に減り、それが研究部、管理部を問わず、コミュニケーションの問題を引き起こしていると感じられることがあります。特に初めて社会に出る若者の場合、必要な研修の機会が奪われることのないよう、研究所の運営にあたって配慮を要する問題だと考えています。

令和5年度は、総合研究大学院大学日本語科学コースが第1期学生を迎え入れた年でもありました。博士後期課程だけという特殊な大学院でありながら、多くの志願者を得ることができ、4名を受け入れることができました。優れた大学院生の存在が研究所の活性化に大きく寄与することは言うまでもありません。その一方で、今後、教職員が大学院に割くエフォートの増加が研究所本来の業務である研究開発にどのように影響してくるかにも目配りが欠かせません。

以上、今回は研究以外の活動に焦点をあてて所感を述べました。私ども所員一同、今後とも、国立国語研究所のより一層の発展のために努力を重ねていく所存ですので、ますますのご指導ご鞭撻をお願いいたします。

末筆となりましたが、本報告書の作成に貴重なお時間を割いていただきました外部評価委員会の先生方に心より御礼申し上げます。

令和6年9月

国立国語研究所長 前川 喜久雄

目 次

評価結果報告書	1
令和5年度機関拠点型基幹研究プロジェクト実績報告	3
令和5年度機関拠点型基幹研究プロジェクト評価結果	13
令和5年度基幹型プロジェクトの評価	15
機関拠点型基幹研究プロジェクトを構成する基幹型プロジェクトの一覧	15
「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」自己点検評価報告	16
「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」評価報告	44
「実証的な理論・対照言語学の推進」自己点検評価報告	46
「実証的な理論・対照言語学の推進」評価報告	69
「消滅危機言語の保存研究」自己点検評価報告	71
「消滅危機言語の保存研究」評価報告	77
「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」自己点検評価報告	79
「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」評価報告	84
「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究」自己点検評価報告	86
「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究」評価報告	94
「多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究」自己点検評価報告	96
「多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究」評価報告	127
「開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張」自己点検評価報告	129
「開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張」評価報告	133
令和5年度 センターに関する評価	135
「言語資源開発センター」自己点検評価報告	136
「言語資源開発センター」評価結果	140
「共同利用推進センター」自己点検評価報告	142
「共同利用推進センター」評価結果	147
「令和5年度管理業務」に関する評価	149

資料	154
1. 国立国語研究所外部評価委員名簿	155
2. 国立国語研究所令和5年度業務の実績に関する評価の実施について	156
3. 国立国語研究所外部評価委員会規程	158
4. 国立国語研究所外部評価委員会【令和5年度実績評価】（第1回）議事次第 ...	160

評価結果報告書

令和5年度の国立国語研究所の外部評価を次のように実施しました。

令和6年9月19日 国立国語研究所外部評価委員会【令和5年度実績評価】（第1回）

その結果を以下の通り報告します。

外部評価委員会
委員長 片桐 恭弘

国立国語研究所令和5年度外部評価にあたって

本報告書は、機関拠点型基幹研究プロジェクト「開かれた言語資源による日本語の実証的・応用的研究」の令和5年度分実績についての外部評価委員会の評価のまとめである。評価対象は、(1) プロジェクト全体、(2) 7つの共同研究プロジェクト（「語彙資源」、「理論対照」、「危機言語」、「言語問題」、「多世代会話コーパス」、「言語運用」、「通時コーパス」）、(3) 2つのセンター（言語資源開発センター、共同利用推進センター）、(4) 「管理業務」である。

令和5年度のプロジェクト全体に対する評価は「計画を上回って達成した」であり、(1) 研究体制、(2) 共同利用・共同研究、(3) 教育・人材育成、(4) 社会連携・社会貢献、(5) 国際連携・国際発信のいずれにおいても高い評価に値する。7つの共同研究プロジェクトの総合評価は、A（計画を上回って実施した）が5、B（計画どおりに実施した）が2であり、全体的に充実した研究が行われている。2つのセンターの評価はいずれもB（計画どおりに実施した）で、センターの多方面の活動とデータベース構築の成果が見られた。管理業務については、全体的にきわめて良好な業務運営が行われている。

以上のように、外部評価委員会は、令和5年度の本プロジェクトの進捗状況は全体的に計画をやや上回り、順調に伸展していると評価した。令和5年度も、前年度に続き工夫を凝らして研究活動を進め、学術書籍出版に加えて、コーパス・ソフトウェアの普及・若手研究者育成を積極的に進めて、言語資源による日本語研究の基盤強化に貢献するなど、高い水準の研究活動を行ったことは賞賛に値する。

本プロジェクトは、オープンデータ・オープンサイエンスに根差し、先進的なケース・スタディ、多様なコーパス開発、人材育成、国内外の研究共同体制構築を含む、日本語研究を大きく発展させる力を有する、国際的にも最重要な日本語研究プロジェクトと位置づけられる。外部評価委員会としては、プロジェクトに携わる各人がそのことを意識し、高い研究水準を維持し、プロジェクトの完遂に励むことを強く希望する。

令和6年9月

外部評価委員会
委員長 片桐 恭弘

令和5年度機関拠点型基幹研究プロジェクト実績報告

機関拠点型基幹研究プロジェクト「開かれた言語資源による日本語の実証的・応用的研究」

代表者：前川 喜久雄

1. 第4期中期計画

国立国語研究所は、機関拠点型基幹研究プロジェクトに関する第4期中期計画及び評価指標として以下を掲げている。

日本語・日本語教育分野における基幹研究の推進：学術的・社会的要請に対応した大規模な言語資源開発や言語調査を実施し、その実証的データに基づく理論的・応用的日本語研究を国内外の研究者や大学等研究機関と連携して推進するとともに、研究所が有する研究資料・言語資源等を活用した公募型共同研究及び異分野融合による公募型共同研究を実施する。これにより、新たな研究領域を創出し、日本語研究及び日本語教育研究を先導する国際的学術研究拠点としての機能を強化する。

- 評価指標
- ・国語研究所が提供する言語のデータベース（言語資源）の利用登録者数、検索クエリ数、言語資源を活用した論文数を、第4期中に、5万人以上、1,200万件以上、3,000本以上とする。
 - ・新領域「言語資源学」の創出に関わる研究シリーズを立ち上げ第4期中に4冊以上刊行する。

2. 機関拠点型プロジェクトの構成

上記の計画を達成するために、「語彙・辞書」「理論・実験」「フィールド・社会調査」「教育・発達」という4つの研究領域を設定し、領域ごとに次に示す6つの研究班を構成して機関拠点型プロジェクト「開かれた言語資源による日本語の実証的・応用的研究」を実施するとともに、言語資源開発センターのプロジェクトとの連携によりコーパス・アーカイブ化を推進することで、オープンサイエンス・オープンデータの体制を強化する。

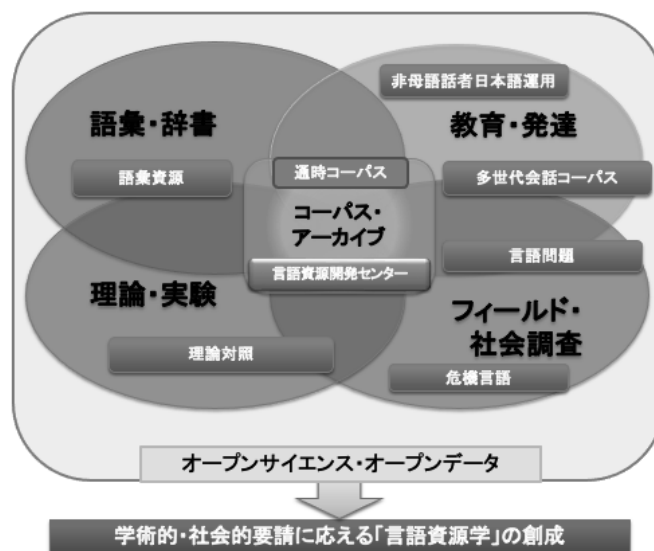


図1 機関拠点型プロジェクトと領域

機関拠点型プロジェクト「開かれた言語資源による日本語の実証的・応用的研究」

- ・「語彙資源班」多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創（小木曾智信）
- ・「理論対照班」実証的な理論・対照言語学の推進（浅原正幸）
- ・「危機言語班」消滅危機言語の保存研究（山田真寛）
- ・「言語問題班」多言語・多文化社会における言語問題に関する研究（朝日祥之）
- ・「多世代会話コーパス班」多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究（小磯花絵）
- ・「非母語話者日本語運用班」多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究（石黒圭）

言語資源開発センター 基幹研究プロジェクト

- ・「通時コーパス班」開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張（小木曾智信）

3. 令和5年度の研究体制

（1）研究班の体制

令和5年度は6年計画の2年目にあたる。上記計画を達成するために、7つの研究班では次の計画で令和5年度の研究を進めた。

- ・語彙資源班：サブグループ「辞書使用調査」「空間接続」「学習者辞書」「語彙資源ポータル」「基本語機能語バンク」を組織し、各種語彙資源のデータ整備を継続するとともに、形態素解析用辞書 UniDic や関連ツールを更新する。
- ・理論対照班：サブグループ「アノテーション」「イントネーション」「計算言語学」「体言化」「述語の意味文法」を組織し、各種アノテーションの整備、諸言語の動詞や日本語・琉球諸語のイントネーションに関する調査、民間企業との共同研究などを継続して進める。
- ・危機言語班：危機言語のフィールド調査を進めるとともに、危機言語データベース・談話資料データベースを拡充する。また危機言語サミットや市民科学者育成のための研修会など地域と連携したイベントを開催する。
- ・言語問題班：社会調査データの実施とデータの整備などを継続するとともに、研究発表会・シンポジウムを開催する。
- ・多世代会話コーパス班：子どもの日常会話や小学校での話し合い活動を対象とするコーパスなどの整備を進めるとともに、30時間のデータを共同研究員に限定公開する。またコーパス活用のための講習会を開催する。
- ・非母語話者日本語運用班：サブグループ「学習者作文」「学習者談話」「作文教育支援」「生活者談話」「生活者識字」を組織し、海外作文・談話データの収集、作文教育支援システムプロトタイプ構築、定住外国人の談話縦断調査、よみかき実践調査を継続して行う。
- ・通時コーパス班：『日本語歴史コーパス』増補データを整備して公開するとともに、『昭和・平成書き言葉コーパス』完成版を公開する。またコーパスを活用した日本語史研究に関する書籍を刊行する。

これらの研究班は、(1)異分野融合研究を推進するために第4期に新たに開始した外部研究者をリーダーとする公募型の異分野融合型共同研究3件や、(2)研究所の共同利用性を高めるために令和2年度から開始した、研究所が保有する研究資料や蔵書、実験機器等を活用する3種の共同利用型共同研究計28件（令和5年度新規採択15件）、(3)人間文化研究機構・共創先導プロジェクト4件、(4)人間文化研究機構・広領域連携型2件と連携して調査・研究を推進した（「機関拠点型 R5_別添資料.xlsx」シート「プロジェクト一覧」参照）。各班は、研究者ネットワークを構築するため

に、689 名だった共同研究員を 771 名に増やし共同研究体制を強化した上で研究を推進した（表 1）。

表 1 共同研究員数

(人)

研究班	共同研究員数	所外共同研究員 (内数)	PD, 大学院生数 (内数)	海外 (内数)
語彙資源班	150	131	6	22
理論対照班	174	154	20	17
危機言語班	75	62	7	4
言語問題班	59	47	7	8
会話コーパス班	130	118	12	4
日本語運用班	133	118	12	52
通時コーパス班	52	46	5	3
計(延べ数)	773	676	69	110

(2) 進捗状況の管理や評価の体制

各班の進捗状況を管理するために「共同研究プロジェクト推進会議」を毎月開催し、各班の活動報告、データベース構築計画・公開状況、合同シンポジウムの企画などを行い、相互に連携して研究活動を進めるとともに、自己点検・評価委員会を設置し、プロジェクト全体の自己点検・評価を行った。また言語資源開発センターを中核とする体制のもと、コーパス構築を担当する各班のメンバーが参加する「プロジェクト横断コーパス会議」を毎月開催し、コーパス構築法の共有化や問題の検討、コーパス講習会の企画など、計画的・体系的に言語資源開発を進めた。

(3) 共同利用・共同研究拠点の強化の取り組み

研究所が保有する研究資料や蔵書、実験機器等を活用する公募型プロジェクト「共同利用型」について、今年度は新規に 15 件（継続を含めて計 28 件）を採択し、共同利用・共同研究拠点の強化につとめた。また共同利用型プロジェクトや利用可能な研究資料等の周知を目的に「2023 年度共同利用セミナー」を 9 月 8 日にオンラインで開催し、共同利用型プロジェクトの成果発表と研究所の収蔵資料群の紹介を行った。

また言語科学と統計科学の融合を主眼においた新しいセンター「次世代言語科学研究センター」の設置に向けて準備を進めた。

(4) プロジェクト間の連携体制

コーパス構築に関わる 5 つの班が連携して NINJAL シンポジウム「コーパス利用のべし・べからず」を 11 月 5 日に開催し、国語研を代表する 8 つのコーパスを正しく使う方法を具体的に紹介するなど、コーパスの適切な利用法の普及につとめた。シンポジウムの発表動画を国語研公式 YouTube チャンネルにて公開するとともに、成果を書籍としてとりまとめ、今期新たに立ち上げた言語資源学シリーズの 1 冊として刊行する予定である。

(5) 大学・研究機関との連携体制

既存の協定 32 件（国外 16 件，国内 16 件）に加え，消滅危機にある宮古島の言語の整備及び地域文化の保全・振興に関わる活動を推進するために沖縄県宮古島市と学術交流協定を，日本語学習者の談話・作文調査を進めるために福建師範大学外国語学院（中国）・ハノイ国家大学外国語大学（ベトナム）・フエ大学外国語大学（ベトナム）・ドンア大学（ベトナム）と学術交流協定を新たに締結し，連携体制を強化した。

4. 令和5年度の活動内容

4. 1. 調査研究活動・研究成果の公開

(1) 各班の活動の概要

各班は，3(1)に示した令和5年度計画に従い次の通り活動した（詳細は各班の自己点検評価報告書参照）。

- ・語彙資源班：各種語彙資源については，複数短単位対応の分類語彙表対応表や古典用 UniDic 11 種類の整備・公開，国内言語地図 12 冊のスキャン画像データ・ジオタグ付き画像データの整備・公開，『日本語基本語辞典（試行版）』の電子テキスト化，学習者用「日本語機能語バンク」の構築など，概ね計画通り進めた。また中国・台湾・韓国・ベトナム・英国・ドイツ・日本の学生計 110 名を対象に実施した辞書検索行動調査のデータ整備を各大学と共同で進めた。
- ・理論対照班：「日本経済新聞記事オープンコーパス」に対する各種アノテーション，『広島大学日本語電話会話コーパス』の形態素情報の再解析，方言形態素解析用辞書の構築作業などを概ね計画通り進めた。また日本語，英語，中国語を中心とした状態変化に関する表現のデータ収集や八重山諸島・宮古諸島のイントネーション調査を行った。更に民間企業 5 社との共同研究を継続して進めるとともに，シェルパ・アンド・カンパニーとの共同研究を新たに開始した。
- ・危機言語班：計画通り共同研究員が各自の担当地点でフィールドワークを行い，語彙・文法・談話データを収集した。語彙データベースを改良し，プロジェクトのウェブサイトで公開しているオンライン辞書の機能を拡充するとともに，田皆方言のデータを音声付きオンライン辞書として整備し語彙データベースで公開した。また危機言語サミット（与那国島大会）や地域言語の記録と継承を行うことのできる市民科学者の育成を目的とする研修会・講座を開催した。
- ・言語問題班：調査会社に委託することによる調査として「コロナ関連用語の意識調査(全国)」 「プロソディ変異調査（札幌，東京，鹿児島）」 「アクセント実態調査（広島）」を実施するなど概ね計画通りに調査を進めた。また令和3年度，令和4年度に実施した大規模社会調査（3件）のデータ整備を継続して実施し，「日本の多言語多文化状況における言語問題に関するウェブ調査」「現代日本語における外来語使用実態調査」については報告書を刊行した。
- ・多世代会話コーパス班：子どもの日常会話や小学校での話し合い活動の収録・コーパス整備を計画通り進め，令和6年度に一般公開予定の50時間の日常会話データを共同研究員に限定して先行公開するとともに，『日本語日常会話コーパス』リレーショナルデータベースや，同コーパスに対するアノテーション等4種を新規に構築・公開することにより，共同利用基盤を強化した。また若手研究者や大学院生を主対象とする講習会・チュートリアルを2回開催した。
- ・非母語話者日本語運用班：海外の19大学及び3大学と連携した学習者の作文縦断データ・談話縦断データの収集，作文支援システムプロトタイプの予備実践，定住外国人の談話縦断調査，よみかき実践調査などを計画通り進めた。また北京日本語学習者縦断コーパス（B-JAS）を整備して一般公開した。作文・談話の縦断調査に際しては，すでに学術交流協定を締結している海外3大学に加え，今年度は新たに5大学と協定を結び，連携した調査体制を築いた。

- ・通時コーパス班：『昭和平成書き言葉コーパス』完成版の公開，『日本語歴史コーパス』増補版の公開，「上方絵入狂言台本」「古今集遠鏡」の整備，OpenCHJ 構築支援ツールとしての「Web 茶まめ」の改修，能楽研究所との協定に基づく「謡曲百番」コーパス整備の準備など，概ね計画通りにコーパス整備・公開を進めた。また成果をまとめた『コーパスによる日本語史研究 中古・中世編』を刊行するとともに，若手を対象とするコーパス講習会を2回開催した。

(2) 研究成果の発信

- ・令和5年度は25件の共同研究発表会（参加者延べ1310人）を開催してプロジェクトの活動を推進するとともに，14件の国内シンポジウム・ワークショップ等（同2012人），2件の国際シンポジウム・ワークショップ等（同53人）を開催して研究成果を広く発信した（「機関拠点型R5_別添資料.xlsx」シート「シンポジウム等」参照）。このうちEvidence-based Linguistics Workshop（9月14・15日）は神戸大学人文科学研究科との学術交流協定に基づき共同開催されたものであり，発表の公募も行うなど大学と連携して運営した。
- ・研究成果をとりまとめ，4冊の書籍（うち1冊は国際会議プロシーディングス集）を国際出版，3冊の書籍（研究書）を国内出版，1冊の教科書を国際出版，1冊の教科書を国内出版，2冊の報告書を国語研究所のリポジトリで公開した（「機関拠点型R5_別添資料.xlsx」シート「書籍」参照）。国際出版4冊のうち3冊は，De Gruyter Mouton社との出版協定に基づくシリーズで刊行されたものである（詳細は4.4「国際連携・国際発信」参照）。
- ・共同研究員を含む国語研の研究者を中心として，研究活動・成果を報告し情報交換を行う場であるNINJALサロンを22回（参加者延べ725人），国内外の優れた研究者による講演会であるNINJALコロキウムを10回（同928人）開催した。
- ・プロジェクトを中心とする研究所の研究活動の活性化と成果の発表及び所内若手研究者の育成を目的として『国立国語研究所論集』第25号（7月）・26号（1月）を刊行した。

(3) 言語資源・ツール等

- ・外部機関と連携して言語資源・検索ツール等の整備を行い，①コーパス2件，データベース2件，アノテーション9件，辞書・語彙表5件，画像データ29件の新規公開，②コーパス3件，データベース2件，アノテーション1件，画像データ1件の追加公開，③コーパス2件，データベース1件，ツール等1件の更新，④コーパス1件の再公開，データベース1件の機能拡張を行った（「機関拠点型R5_別添資料.xlsx」シート「言語資源・ツール等」参照）。
- ・コーパスの一部は言語資源開発センターが管理するオンライン検索システム「中納言」で公開されており，ユーザ総数50,952人，うち令和5年度の新規登録ユーザ数は9,066人，年間検索数は272万件（前年度比124%）と，広く研究に活用された（図2）。

なお，機関拠点型基幹研究プロジェクトに関する第4期中期計画の評価指標を「言語資源の利用登録者数・検索クエリ数を第4期中

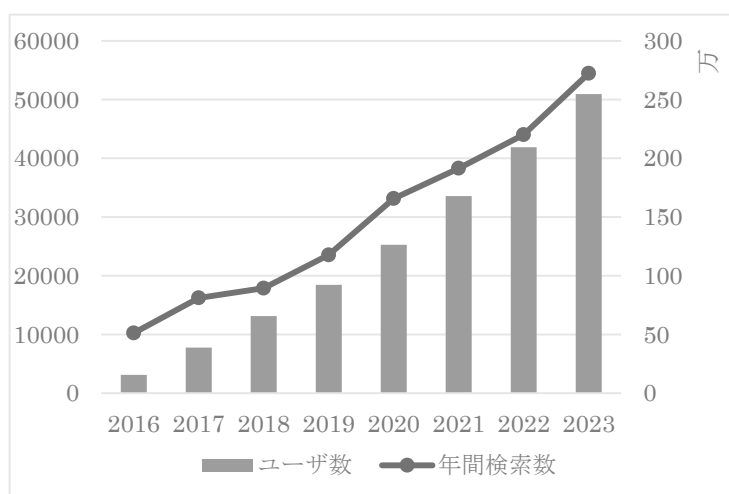


図2 「中納言」登録ユーザ数(左軸)・年間検索数(右軸)

に5万人以上、1,200万件以上」としている。この数値は、第3期令和2年度までの5年間の実績を踏まえ、第4期の6年間で2倍以上にすることを目標に設定したものであるが、令和4年度と令和5年度の2年間で、利用登録者数5万人は達成、また検索クエリ数1,200万件のうち4割以上を達成した。今後も同様にコーパス関連の講習会や授業、コーパス関連書籍等を通じてユーザ層の拡大を続けることで、検索クエリ数の目標も余裕をもって達成することができる見通しである。また言語資源を活用した論文数について、第3期の1.4倍に相当する3,000本（年500本）を指標に掲げている。論文数については現在集計中だが、令和5～6年の2年間で1,124本となっており、達成が見込まれる。

（4）共同利用性向上の取り組み

共同利用推進センターが中心となり各班と連携しながら以下の取り組みを実施した。

- ・国語研の研究成果のオープンアクセスを加速するため、オープンアクセス方針に沿って研究成果の公開を推奨し、「国立国語研究所学術情報リポジトリ」での登録・公開を推進した。今年度追加183件、総数3,203件となった（ダウンロード回数45.3万）。
- ・日本語研究・日本語教育研究の共同利用に供するため、当該分野の図書・雑誌論文等の書誌情報を整備し、オンラインで一般公開している「日本語研究・日本語教育文献データベース」に6,409件を追加登録し、総データ件数は286,835件となった（セッション数9.2万）。
- ・国語研が所蔵する貴重図書等のデジタル化を進め、オンラインで一般公開している「日本語史研究資料〔国立国語研究所蔵〕」に18件を追加した（セッション数2.4万）。
- ・研究資料室収蔵資料の利活用のため、収蔵資料目録の整備を進め、オンラインで一般公開している「国立国語研究所研究資料室収蔵資料」データベースを増補拡充した。資料群の新規公開は13件、収蔵資料目録試行版の追加登録は5,469件となった（セッション数6,700）。
- ・研究資料室収蔵資料の目録データ「収蔵資料群概要」「収蔵資料目録」「言語地図草稿目録」の3種について、人間文化研究機構が運営する機関横断検索 nihuBridge の統合検索用メタデータを構築して nihuBridge に登録した。

（5）異分野融合研究

- ・IU-REAL 異分野融合・新分野創出プログラム 2023年度スタートアップ「素粒子実験のデータ解析技術を応用した日本語テキストの数理的解明」において、高エネ研の研究者らと共同で、素粒子実験でデータと物理モデルの一致度合いを評価するために用いられている統計的手法を日本語テキストの数理的分析に応用するための研究を進め、国際会議発表を行った。同内容は科研費挑戦的研究（萌芽）23K17512にも採択された。
- ・国立障害者リハビリテーションセンター研究所と連携し、『日本語日常会話コーパス』に付与した自閉症スペクトラム指数調査に基づき自閉傾向と終助詞使用との関係に関する研究を実施し、その成果発表にて第48回社会言語科学会研究大会大会発表賞を受賞した。また同センター及び昭和大学発達障害医療研究所と協力し、自閉症者の会話データの収録を開始した。

4. 2. 教育・人材育成

（1）大学との連携による教育

- ・一橋大学大学院言語社会研究科との協定に基づき教員3人が授業を行い、博士学位論文審査の主査3件、副査3件を担当した。また東京外国語大学大学院国際日本学研究院とのクロスアポイン

トメント制度により教員2人が授業を担当したほか、国際日本学研究院 NINJAL ユニット講演会2件を開催した。

- ・総合研究大学院大学「日本語言語科学コース」を今年度新たに開設し、4名の学生を受け入れた（定員：3名程度）。また、新入学生を確保するためにコース案内冊子を作成し、国内の関連分野の修士課程を設置している国公立の184大学に送付するとともに、9月18・19日に開催した所内での大学院説明会や言語処理学会などの学会で配布を行った。

（2）若手人材の育成

- ・若手研究者のキャリアパスとして特任助教4人とプロジェクト非常勤研究員68人を雇用したほか、日本学術振興会の特別研究員PDを4名受け入れ、プロジェクトへの参画などを通して実践的に日本語研究を推進できる人材の育成につとめた。
- ・日本語研究の振興及び優秀な若手研究者の奨励・育成のために、令和4年6月に創設した宮地裕日本語研究基金の事業として「宮地裕日本語研究基金学術賞」「宮地裕日本語研究基金学術奨励賞」を公募し、令和5年7月に第1回学術奨励賞2名の授賞を行った。続いて10月に第2回の募集を開始し選考を行っている。また「総研大日本語言語科学コース特別奨学金」を7月に1名、「総研大日本語言語科学コース学生学会発表支援金」を3月に3名支給した。
- ・若手人材育成を目的に、大学院生延べ72名を共同研究員としてプロジェクトに参画させ、共同研究を推進したところ、言語処理学会第30回年次大会において大学院生筆頭著者の発表が委員特別賞を受賞した。また学振特別研究員1名が2023年度日本言語学会論文賞を受賞した。
- ・若手研究者を育成するために、各班の研究テーマに即した若手研究者向けのチュートリアル・講習会を16回開催し、合計で741人が参加した（「機関拠点型R5_別添資料.xlsx」シート「講習会」参照）。このうち5回は、東呉大学、インド工科大学、デカン・カレッジとの学術交流協定に基づいて開催されたものである。また5回はコーパス利用のための講習会とした。こうした取り組みにより、大学の授業でコーパスを利用できるオンライン検索アプリケーション「中納言」の講義用アカウントを131件、計4,019人の学生等に発行するなど、コーパスが授業で広く活用された（「機関拠点型R5_別添資料.xlsx」シート「中納言授業用アカウント」参照）。
- ・学生や若手研究者を対象にした音声生成に関する計測技術に関するハンズオンセミナー「第2回音声生成に関する計測技術に関するハンズオンセミナー」を言語資源開発センター主催（共同利用推進センターほか共催、日本音声学会協賛）で開催し、33名が参加した。また同セミナーの講義動画を国語研公式YouTubeチャンネルにて公開した。
- ・新領域「言語資源学」に関する研究シリーズを研究社から無償配布のデジタル版（オープンアクセス版）と有償頒布の印刷版（商用版）で出版することが確定し、7巻の企画がまとまった。令和5年度は先行して刊行する予定の4冊について執筆を進めた。
- ・大学生・大学院生向けに動画教材「言語学レクチャーシリーズ」を新たに8本作成して国語研公式YouTubeチャンネルにて公開し、既公開分とあわせ年間60,292回再生された。
- ・若手研究者のモチベーションを高めるために、「言語資源ワークショップ2023」において若手研究者向けの賞を設置し、優秀発表賞を1人に授与した。

（3）社会人の学び直しへの貢献

- ・日本語教師等を対象とするNINJAL日本語教師セミナーとして、「日本語教育と異文化理解：理論と実践」を9月25日にジャカルタ国立大学・オンラインのハイブリッドで、「考える市民を育て

る言語教育：問い生成先行型の読解/聴解と、複数テキストの認知的統合」を2月26日にオンラインで開催し、延べ263人のスキルアップに貢献した。

4. 3. 社会連携・社会貢献

(1) 研究成果の社会への普及

- 研究成果を分かりやすく一般に向けて発信するため、第18回 NINJAL フォーラム「国語研の言語生活研究の75年：生きたことばをつかまえる・追跡する調査研究」を12月16日にハイブリッド開催し、対面・オンライン併せて190名の参加があった。また大学共同利用機関協議会主催の大学共同利用機関シンポジウム2023「現代の社会問題に挑む日本の科学」（10月22日、日本科学未来館）の主担当機関として、シンポジウムの企画・運営を実施した。各大学共同利用機関に所属する10名のパネリストが登壇したシンポジウムであり、対面で68名、ニコニコ動画によるオンライン視聴者数延べ31,352名（コメント数3,218件）の参加があった。
- 令和6年1月に書籍『日本語の大疑問2』（幻冬舎新書、初版発行部数10,000部）を刊行した。これは令和3年11月に刊行した『日本語の大疑問-眠れなくなるほど面白いことばの世界』（累計発行部数74,000部）の続編にあたるもので、ポータルサイト「ことば研究館」に掲載した「ことばの疑問」の記事を改訂の上、書籍化したものである。
- 国語研ポータルサイト「ことば研究館」において、ことばに関する一問一答式の記事「ことばの疑問」25本及び各種催し物、メディア掲載情報など、ことばに関する一般向けコンテンツを発信した。また研究所の研究活動や研究者などを紹介する一般向け広報誌『ことばの波止場』Vol.13を3月に刊行した。
- ことばの研究を通じて学問の楽しさを知ってもらう中学生・高校生対象のNINJAL 職業発見プログラムを、捜真女学校中学部の生徒150名（6月21日）、京都市立日吉ヶ丘高校の生徒11人（12月26日）など、合計8件185名を対象として、出前授業や研究所訪問受入の形で実施した。また、小学生向けのNINJAL ジュニアプログラムとして、青梅市立第五小学校5年生48名を対象に、語彙をテーマとした出前授業（1月12日）を実施した。

(2) 地方自治体との連携

- 言語・方言の保存・継承活動のネットワーク的機能をもつ「危機的な状況にある言語・方言サミット（与那国島大会）」を文化庁や地方自治体等と共催で10月14、15日に開催した。昨年度に引き続き、来場者と情報交換を行う機会として「ブース発表」を設け、日本各地で継承保存を行っている11組（デモンストレーション含む）が普及に係る取り組み事例を紹介した。国語研からは、危機方言の現況報告に関する講演やパネル協議に参加したほか、昨年度オーキッドバウンティ賞を受賞した「言語復興の港」の活動についてブース発表を行った。
- 鹿児島県大島郡和泊町・知名町（沖永良部島）との協定に基づき、知名町中央公民館講座町職員研修会「しまむにサロン」を毎月1回、計11回開催したほか、沖永良部島の継承文化・言語イベントである中高生対象のヘリテージ・キャンプや、島ことばと絵本制作トーク「星の話をみんな語り継ごう」などを通して、延べ380名を対象に、地域言語コミュニティ内で地域言語の記



録と継承を行うことのできる市民科学者の育成を行った。このうち知名町中央公民館講座は、国内では先例のない消滅危機言語活動の先進的な取り組みにつながった。研修会で言語の記録訓練を学んだ受講生が中心となり自主的に調査チームを組織した上で、国語研作成の基礎語彙リストを活用して自ら約 1000 語の音声データを収集し、国語研のサイトからオープンデータとして公開するなど、住民の自発的・主体的な活動と研究所との実質的連携を産み出した。

(3) 産学連携

- ・コーパスを活用した産学連携研究として、SB Intuitions 株式会社、株式会社リクルート、ホンダリサーチインスティテュート社 (HRI) など、6 社と共同研究を行った。HRI と共同で構築した位置情報参照表現データベースについて言語処理学会第 30 回年次大会で発表し、優秀発表賞を受賞した。また SB Intuitions 社と共同で行った研究について情報処理学会 NL 研究会で発表し、第 1 著者 (SB Intuitions) が若手奨励賞を受賞した。
- ・小学館出版局との連携協定のもとで『日本国語大辞典』から形態素解析用辞書 UniDic のデータベースに見出し語 (15, 575 語彙素, 18, 406 書字形) を追加・整備した。
- ・作文の自動評価システム開発のため、富士通研究所を中心とした AI の専門家と連携して研究を進めた。

4. 4. 国際連携・国際発信

(1) 国際的協業

- ・海外機関に所属する研究者延べ 110 人を共同研究員に加え、海外の研究と連携を図りながら共同研究を推進した。また、海外の研究者 4 人を外来研究員として受け入れ、共同研究を推進した。
- ・次の通り海外の機関・研究者と連携して調査を進めた。
 - ・作文データ調査：中国 7 大学、台湾 2 大学、韓国 2 大学、ベトナム 3 大学、タイ 2 大学、フランス 1 大学、スロヴェニア 1 大学、英国 1 大学の計 19 大学との共同調査体制を構築して日本語学習者の作文データの調査を行い、令和 5 年度は計 1, 691 本の作文データを収集した。国際的な研究拠点を形成して調査の連携を高めるために、既に学術交流協定を締結している天津外国語大学 (中国)、東呉大学 (台湾)、韓国外語大学 (韓国) に加え、福建師範大学 (中国)、フエ大学外国語大学 (ベトナム)、ドンア大学 (ベトナム) と新たに学術交流協定を結んだ。
 - ・談話・作文のオンライン縦断調査：西安外国語大学 (中国)、ハノイ国家大学外国語大学 (ベトナム)、チュラーロンコーン大学 (タイ) と連携し、大学の学生を対象に談話・作文のオンライン縦断調査を実施した。令和 5 年度は 97 時間の談話データと 252 本の作文データを収集した。更に連携を強化するために、西安外国語大学及びハノイ国家大学外国語大学と学術交流協定を新たに締結した。
 - ・辞書ツール使用実態調査：学術交流協定を締結した大学等と連携して実施した中国、台湾、韓国、ベトナム、英国、ドイツ、日本の計 10 大学、110 名の学生を対象とする 1 週間の辞書検索行動調査のデータ整備を共同で進めた。
 - ・学術交流協定を締結したデカン・カレッジ・ポスト・グラデュエイト・アンド・リサーチ・インスティテュート及びインド工科大学マドラス校と連携してインドにおける体言化・類別詞・性標示に関するフィールドワークを 2 回実施した。その際、若手人材育成のために、協定先の大学の若手研究者 2 名 (修士課程、修士課程修了者) を調査に参加させ、フィールドワークの手法やデータの整理・分析などを実践的に学ぶ機会を提供した。

(2) 研究成果の国際的発信

- ・研究成果を国際発信するために、De Gruyter Mouton 社から3冊の書籍をオープンアクセスで出版した(表2)。これらはいずれもDe Gruyter Mouton 社との協定に基づくシリーズ Mouton-NINJAL Library of Linguistics (MNLL)によるものである。また同社との協定に基づく Handbooks of Japanese Language and Linguistics シリーズ (HJLL)のうち、残る1巻と7巻も来年度出版予定である。

表2 国際出版の書籍一覧

著者・編者	書名	出版社
Masatoshi Koizumi (Ed.)	Issues in Japanese Psycholinguistics from Comparative Perspectives, Vol 1, Cross-Linguistic Studies	De Gruyter Mouton
Masatoshi Koizumi (Ed.)	Issues in Japanese Psycholinguistics from Comparative Perspectives, Vol 2, Interaction Between Linguistic and Nonlinguistic Factors	De Gruyter Mouton
Hideki Kishimoto, Osamu Sawada and Ikumi Imani (Eds.)	Polarity-Sensitive Expressions Comparisons Between Japanese and Other Languages	De Gruyter Mouton

- ・コーパスを活用した国際的な日本語研究促進のために、言語資源の欧州を中心とする頒布に実績のある ELDA (Evaluations and Language resources Distribution Agency)と協定を結び、「日本語話し言葉コーパス (CSJ) 」(有償版コーパス)の配付を開始した。

<https://catalog.elra.info/en-us/repository/browse/ELRA-S0488/>

4. 5. その他

- ・令和5年度外部評価委員会にて指摘を受けた研究所ホームページについての意見を踏まえ、共同利用推進センターのページを新設したほか、言語資源開発センターのページに同センターのミッションなどの記載を行った。

共同利用推進センター：

<https://www.ninjal.ac.jp/info/aboutus/organization-chart/cpcr/>

言語資源開発センター：

<https://www.ninjal.ac.jp/info/aboutus/organization-chart/clrd/>

令和5年度機関拠点型基幹研究プロジェクト評価結果

プロジェクト名：「開かれた言語資源による日本語の実証的・応用的研究」

令和5年度の評価

《達成状況の評価結果》

計画を上回って達成した

(判断理由等)

国立国語研究所は、機関拠点型基幹研究プロジェクトに関する第4期中期計画に、日本語・日本語教育分野における大規模言語資源開発や言語調査の実施、国内外研究者・大学等研究機関との連携による理論的・応用的日本語研究の推進、異分野融合による公募型共同研究の実施、新たな研究領域の創出、日本語・日本語教育研究の先導的国際的学術研究拠点機能強化を掲げ、言語資源の利用、言語資源を活用した論文成果に関する定量指標および新領域「言語資源学」の創出に関わる研究書籍刊行を評価指標として設定している。

上記計画の下に「語彙・辞書」「理論・実験」「フィールド・社会調査」「教育・発達」の4研究領域を設定し、7つの研究班を構成してプロジェクトを実施し、言語資源開発センターとの連携によりコーパス・アーカイブ化を推進するとともに所内外の連携を積極的に推進した。

その結果として、言語資源利用、論文成果、「言語資源学」に関わる研究書籍刊行に関して設定した目標を上回るレベルの成果を達成している。共同利用型共同研究プロジェクト、人間文化機構との連携プロジェクトの実施、共同研究員の増員を通じた所内外の共同研究の拡大、シンポジウム開催、動画コンテンツ公開などを通じた言語資源利用者の拡大、国内外の大学・研究機関との連携による調査・研究の拡大を通じて、言語資源構築、言語資源の利用促進、言語資源を活用した研究成果創出のサイクルが回る優れた体制を構築している点を高く評価する。

【プロジェクト全体の連携活動に関する評価】

(1) 研究体制について

機関拠点型プロジェクトおよび言語資源開発センター基幹研究プロジェクト実施のために、語彙資源班、理論対照班、危機言語班、言語問題班、多世代会話コーパス班、非母語話者日本語運用班、通時コーパス班の7班を構成し、共同研究プロジェクト推進会議、プロジェクト横断コーパス会議を定期的に開催して研究進捗管理を行うとともに、研究班間の連携と言語資源の計画的・体系的開発を図り、自己点検・評価委員会を設置してプロジェクト全体の自己点検・評価を行うなど、優れた研究推進の仕組みが整備されている。

既存の32件の国内外の大学連携に加えて、新たに中国・ベトナムの4大学と学術交流協定を結び、日本語学習者の調査研究を通じて大学の日本語教育活動に貢献している。一橋大学をはじめとする三大学との連携により、大学院生研究指導及び授業を実施、国語研言語資料アクセスアカウントを発行して大学授業の支援を行うなど大学の機能強化に貢献している。

(2) 共同利用・共同研究について

書籍については英語4冊、中国語1冊を含む20冊を発行しており、今後も調査・研究の成果を元に着実な書籍発行が見込まれる。言語資源・検索ツールについても47件の新規公開を含む60件の新

規公開・追加公開・更新を行っており、言語資源・検索ツールの整備を通じて今後も着実なアウトプットが期待できる。

日本語学の諸側面に関する研究報告書出版による着実な学術的貢献に加えて、教科書・一般書の出版、地域展示や市民科学活動への積極的参画、一般人を対象としたNINJALフォーラムのハイブリッド実施などは日本語に対する人々の意識を高める活動として社会的意義が高い。

国内外の大学などとの学術交流協定は国内17件、国外20件に上る。新たに沖縄県宮古島と学術交流協定を結び消滅危機言語の整備・文化保全活動を共同実施、中国・ベトナムの大学と学術交流協定を結び日本語学習者調査研究を共同実施、神戸大学人文科学研究科との学術交流協定に基づきEvidence-based Linguistics Workshopを共同開催するなど、組織的な連携の下に着実に活動が進められている。

高エネルギー加速器研究機構の研究者と共同の新分野創出プログラム2023年度スタートアップ研究、国立障害者リハビリテーションセンター研究所との連携による自閉傾向と終助詞使用に関する研究など、異分野研究者との共同研究が積極的に進められている。前者は科研費採択に、後者は学会発表賞受賞および会話データ収録の拡大につながっており、異分野協業の拡大は高く評価される。

（３）教育・人材育成について

一橋大学、東京外国語大学、総合研究大学院大学の大学院において、授業担当あるいは大学院生指導を行う体制が構築されており、国語研における日本語研究の教育的普及が進められている。また国内外の延べ131の大学等で中納言授業用アカウントを発行し、言語資源普及を通じて大学・大学院教育に貢献すると同時に日本語学研究者の裾野拡大を図っていることは高く評価できる。

特任助教4人、非常勤研究員68人の雇用、日本学術振興会PD4名の受け入れなどによって若手研究者のキャリアパス提供を図っている他に、延べ72名の大学院生を共同研究員としてプロジェクトに参画させている。若手研究者対象の講習会・セミナー開催、動画教材の提供、日本語教師等を対象としたNINJAL日本語教師セミナーのオンライン開催などを合わせて行った結果として、学会賞の受賞や言語資源を活用した多数の論文成果に結びついていることは評価される。

（４）社会連携・社会貢献について

コーパスを活用した企業との産学連携共同研究を6社と実施、出版社との連携による辞書の拡充など、言語資源整備と自然言語処理応用の連携が進んでいることは高く評価できる。AI技術の浸透に伴い両者の連携の重要性はさらに高まるため、今後も一層の発展を期待する。

一般人を対象としたNINJALフォーラムの開催、一般向け書籍出版、国語研ポータルサイト「ことば研究館」の運営、中高生を対象としたNINJAL職業発見プログラムの開催などは研究成果の社会普及活動として高く評価される。

（５）国際連携・国際発信について

海外からの研究者の共同研究員・外来研究員としての受け入れに加えて、20件の海外大学・研究機関との国際交流協定を基盤として、作文データ調査、談話・作文データ調査、辞書ツール使用実態調査などを体系的に実施し、データ収集を進めたことは高く評価される。研究成果の国際発信ではDe Gruyter Mouton社からのオープンアクセス書籍出版が評価される。

（６）その他特記事項

特になし。

令和5年度 基幹型プロジェクトの評価

機関拠点型基幹研究プロジェクトを構成する基幹型プロジェクトの一覧

プロジェクト名（略称）	サブプロジェクト名	代表者（プロジェクトリーダー）	サブプロジェクトリーダー
多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創	学習者の辞書資源使用の実態調査	小木曽智信	石黒圭
	言語資源の空間接続		大西拓一郎
	学習者用辞書資源の構築		柏野和佳子
	語彙資源ポータル拡張		高田智和
	学習者用「日本語機能語バンク」の構築		ブラシャント・パルデン
実証的な理論・対照言語学の推進	アノテーションデータを用いた実証的計算心理言語学	浅原正幸	浅原正幸
	日本・琉球語諸方言におけるイントネーションの多様性解明のための実証的研究		五十嵐陽介
	計算言語学的手法による理論言語学の実証的な方法論の開拓		窪田悠介
	体言化の実証的な言語類型論—理論・フィールドワーク・歴史・方言の観点から—		ブラシャント・パルデン
	述語の意味と文法に関する実証的類型論		松本曜
消滅危機言語の保存研究		山田真寛	
多言語・多文化社会における言語問題に関する研究		朝日祥之	
多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究		小磯花絵	
多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究	日本語学習者の作文の縦断コーパス研究	石黒圭	石黒圭
	日本語学習者の談話の縦断コーパス研究		石黒圭
	日本語学習者の作文教育支援研究		山口昌也
	定住外国人の談話の縦断研究		野山広
	定住外国人のよみかき研究		福永由佳
開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張		小木曽智信	

「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」自己点検評価報告

プロジェクト名：多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創

プロジェクトリーダー：小木曾 智信

令和5年度プロジェクト全体自己評価

全項目の総合		A
	1. 共同利用・共同研究に関する計画	A
	2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	B
	3. 地域・社会との連携に関する計画	B
	4. グローバル化に関する計画	A

I. 計画期間内の概要

1. プロジェクト全体の6年間の計画

日本語の語彙データを扱う下記のサブプロジェクト群を統括し、その全体を結びつけるキーとなる語彙資源の整備を行うとともに、合同でシンポジウムやチュートリアルを開催し、共同研究を行う。

- ・学習者の辞書資源使用の実態調査
- ・言語資源の空間接続
- ・学習者用辞書資源の構築
- ・語彙資源ポータル拡張
- ・学習者用「日本語機能語バンク」の構築

各サブプロジェクトではさまざまな日本語語彙に関わるデータを構築する予定であるが、これらがばらばらで互換性のないものにならないように、相互接続性を持つ統一的な枠組みの中で扱えるようにするため、これまで国語研のコーパス構築に利用されてきた UniDic の見出し語データベースを軸に、分類語彙表などの国語研作成のリソースや、日本語最大の国語辞典である『日本国語大辞典』の見出し語を統合し、語彙資源統合キーとなるデータを開発する。その上で、共同研究を通して、各サブプロジェクトが整備する語彙資源統合 ID を共通に用いて相互に連携・統合できるようにする。このキーを介して既存のコーパスの用例・統計情報とリンクすることで、全体の利用価値と相互運用性を高める。

プロジェクト全体で、年1回以上、語彙資源の活用に関するシンポジウムを開催（サブプロジェクト持ち回り）、また年1回以上、サブプロジェクトとともに語彙資源活用チュートリアルを開催する。最終年度までに「言語資源学シリーズ」の1冊として語彙資源を活用した研究論文集をサブプロジェクトと合同で1冊以上刊行する。

II. 令和5年度の活動

令和5年度予算総額 40,658 千円

語彙資源プロジェクト全体で行う語彙資源に関するシンポジウム・講習会は、今年度は日本語学会秋季大会のワークショップ「コーパスと語彙資源の連携」（2023年10月）として実施し、プロジェク

トで構築する語彙資源について利用法とともに発信した。

https://www.jpling.gr.jp/taikai/2023b/2023b_program/

サブプロジェクトでは、計画にそって語彙資源の整備を順調に進めたほか、特に重要なものとして次のような成果があった（※詳細は各サブプロジェクトの報告書を参照）。

●語彙資源統括

- ・『日本国語大辞典』とUniDicの対応付けを行いUniDicデータベースに見出し語を追加・整備を行った（15575語彙素、18406書字形を追加）
- ・複数短単位対応版の分類語彙表を構築して公開した（2024年3月）
- ・古文用のUniDic 11種類を整備・公開した（2023年9月）
- ・「Web茶まめ」を更新し、新しいUniDicに対応したバージョンを公開した（2024年3月）。またDH2023（2023年7月、グラーツ）でこれに関する研究発表を行った。

●学習者の辞書資源使用の実態調査

- ・予定を前倒して、2022年度末に、中国48名、台湾11名、韓国22名、ベトナム10名、英国3名、ドイツ3名、日本13名の合計110名の学生を対象に1週間の辞書検索行動調査を完了し、データを収集した。
- ・海外の共同研究員を中心とする分科会を本年度7回行い、論文集出版に向け、執筆内容にかんする検討等を行った。
- ・韓国、中国、台湾、ベトナム、英国、ドイツの大学や機関に属する研究者とも連携をとりながら調査を実施し、データ整備を進めた。とくに、ハノイ国家大学外国語大学と2024年1月に学術交流に関する協定書を締結し、すでに締結済みの天津外国語大学と合わせて2校となった。

●言語資源の空間接続

- ・国内言語地図12冊のスキャン画像データを作成した。
- ・国内言語地図12冊のジオタグ付き画像データを作成した。
- ・語彙資源ポータルへ言語地図データベースのデータを提供した。
- ・物類称呼データ作成作業として全5巻の粗入力を行った。

●学習者用辞書資源の構築

- ・科研費「文章の語彙レベルの学習者適合度の判定方法の開発 ―日本語教育・国語教育への応用―」と共催で「学習者辞書用語彙資源の構築」共同研究発表会（2024年2月27日）を開催し、報告2件、発表2件、招待講演1件を行った。
- ・島村直己（編）（2009）『日本語基本語辞典―初級 500 語―（試行版）』国立国語研究所日本語教育基盤情報センターを電子化し、DB化した。
- ・『分類語彙表』に欠けている多義語のブランチを増補するため、『IPAL』の意味に『分類語彙表』番号の付与を進めた。

●語彙資源ポータル拡張

- ・「ことばに関する新聞記事見出しデータベース」中の単語を取り上げた記事データの整備を行った。
- ・近代以前の辞書類の見出し情報データ作成として、十卷本和名類聚抄、和英語林集成の整備を行った。

- ・大正期～昭和期の総合雑誌の言語関連記事のデータ作成を継続して実施した。

●学習者用「日本語機能語バンク」の構築

- ・「日本語格助詞データベース」はR4年度で執筆・校閲が完成した176見出し(1056語義)の用例に含まれる格助詞に意味役割のアノテーション作業を進めた。また、新たに和語動詞210語を選定し、見出し執筆作業が年度末に完成した(496語義)。
- ・「日本語文型バンク」は、R4年度で執筆した文型342見出し(初中級284見出し、中上級の文型58見出し)の校閲作業を進め、完成させた。また、新たに250文型を選定し、見出し執筆作業を進め、完成させた。

本年度は各サブプロジェクトが連携した研究が十分にできなかった点が反省点であるが、この点は来年度にNINJALシンポジウムを開催し、「言語資源学シリーズ」の書籍の準備を進めることでカバーしたい。

各サブプロジェクトの語彙資源の構築は概ね計画通り順調に進んでいる。特に「学習者の辞書資源使用の実態調査」サブプロジェクトが海外での調査、グローバル化に関する計画で予定を上回っているほか、共同利用・共同研究では前倒しで研究を進め、予定を大きく上回る成果を上げている。「語彙資源統括」や「空間接続」でも共同利用・共同研究については、予定を上回る成果を上げていることから、プロジェクト全体の総合評価としてはAと自己評価した。

プロジェクト名：多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創

サブプロジェクト名：語彙資源統括

サブプロジェクトリーダー：小木曾 智信

令和5年度サブプロジェクト自己評価

全項目の総合		B
	1. 共同利用・共同研究に関する計画	A
	2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	B
	3. 地域・社会との連携に関する計画	B
	4. グローバル化に関する計画	B

I. 計画期間内の概要

1. 目的及び特色

国語研のコーパス構築に利用されてきた UniDic の見出し語データベースを軸に、分類語彙表などの国語研作成のリソースや、日本語最大の国語辞典である『日本国語大辞典』の見出し語を統合し、語彙資源統合キーとなるデータを開発する。その上で、共同研究を通して、各サブプロジェクトが整備する語彙資源統合 ID を共通に用いて相互に連携・統合できるようにする。このキーを介して既存のコーパスの用例・統計情報とリンクすることで、全体の利用価値と相互運用性を高める。

2. 年次計画（6年間のロードマップ）

年次計画（6年間のロードマップ）

	目標	実施計画
2022 (R4) 年度	UniDic-日国見出し語対応表の整備 分類語彙表を中心とした成果発表	● 語彙資源統合 ID の設計 ● 辞書見出し語データの入手 ● UniDic-日国見出し語対応表の整備 ● UniDic 見出し語の追加 ● 合同シンポジウム（分類語彙表関連）開催 ● 分類語彙表番号データの整備・公開 ● 語彙資源活用チュートリアルの実施（分類語彙表番号） ● 形態素解析用辞書 UniDic 更新版の公開 ● UniDicExplorer の開発
2023 (R5) 年度	サブプロジェクトの語彙資源との連携	● UniDic 見出し語の追加（方言語彙の整備） ● UniDic 付加情報の整備 ● 以前の国語研語彙資源の整備 ● サブプロジェクトでの語彙資源統合 ID の活用 ● 合同シンポジウム開催 ● 語彙資源活用チュートリアルの実施 ● UniDicExplorer の公開

2024 (R6) 年度	サブプロジェクトの語彙資源との連携強化	● UniDic 見出し語の追加 ● UniDic 付加情報の整備 ● 以前の国語研語彙資源の整備 ● サブプロジェクトでの語彙資源統合 ID 活用 ● 合同シンポジウム開催 ● 語彙資源活用チュートリアルの実施 ● 形態素解析用辞書 UniDic 更新版の公開 ● 書籍刊行の準備
2025 (R7) 年度	語彙資源統合 ID の運用	● UniDic 見出し語の追加 ● UniDic 付加情報の整備 ● サブプロジェクトでの語彙資源統合 ID 活用 ● 合同シンポジウム開催 ● UniDicExplorer の改修 ● 語彙資源活用チュートリアルの実施 ● 語彙資源活用に関する書籍の刊行
	● 暫定評価	
2026 (R8) 年度	語彙資源統合 ID の利用促進	● UniDic 見出し語の追加 ● UniDic 付加情報の整備 ● サブプロジェクト語彙資源での語彙資源統合 ID 活用 ● 合同シンポジウム開催 ● 語彙資源活用チュートリアルの実施 ● 形態素解析用辞書 UniDic 更新版の公開
2027 (R9) 年度	とりまとめ	● UniDic 見出し語の追加 ● UniDic 付加情報の整備 ● 残る成果物の公開

II. 令和5年度の活動

令和5年度予算額 11,382 千円

1. 共同利用・共同研究に関する計画

データベース等の構築（アクティビティ）

- (1) 『日本国語大辞典』から UniDic データベースに見出し語を追加・整備した（15575 語彙素，18406 書字形を追加（2024/03/31 まで））。
- (2) 語彙資源統合 ID の仕様原案を策定し（日国見出し語 ID と UniDic 語彙素 ID 連鎖），複数短単位から成る分類語彙表に応用した
- (3) 複数短単位対応版の分類語彙表を構築して公開した（2024 年 3 月）

国内外の大学や研究機関との組織的な連携等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 国立国会図書館との連携による UniDic 見出し語データ等の整備を行う予定であったが，先方の都合（大規模言語モデルを前提としたデータ提供条件の整備が必要となったこと）により連携はペンディングとなった。

他のプロジェクトとの合同の活動等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 「通時コーパス」から UniDic データベースに見出し語を追加・整備した（布哇日本語教科書から 75 語彙素・648 書字形，天草版金句集から 74 語彙素，273 書字形ほか）。
- (2) 「方言 UniDic 科研」で整備中の「関西弁コーパス」から方言の見出し語を追加・整備した（55 語彙素，135 書字形）。
- (3) 言語資源開発センター・「通時コーパス」プロジェクトと合同で，古文用の UniDic 11 種類を整備・公開した（2023 年 9 月）。<https://clrd.ninjal.ac.jp/unidic/>
- (4) 言語資源開発センター・「方言 UniDic 科研」と合同で，関西方言用の UniDic を整備し「Web 茶まめ」で公開した（2024 年 3 月）。

異分野の研究者との共同研究・協業等（アクティビティ）

- (1) 自然言語処理分野の研究者と学際的な研究を実施し，共著の査読付き論文を刊行し（自然言語処理 20(2)，2023 年 6 月），言語処理学会で発表を行った（2024 年 3 月）。

調査データ・データベース等公開（アウトプット）

- (1) ウェブ版 UniDicExplorer については，来年度から始まる現代語コーパス整備事業の一環としてより高度なウェブアプリケーション整備を行うこととして，プロジェクトでの整備を中止した。
- (2) 「Web 茶まめ」を更新し，新しい UniDic に対応し，大納言インポート形式に対応したバージョンを公開した（2024 年 3 月）。
- (3) 古文用の UniDic 11 種類，関西方言用の UniDic を公開した。【重出】【オープンデータ】

書籍・論文等による研究成果の公表（アウトプット）

- (1) 共同研究員による語彙資源を活用した研究成果を学会発表 24 件，論文 19 件発表した。

データベース等に関する講習会・講演会（アウトプット）

- (1) 日本語学会秋季大会のワークショップ「コーパスと語彙資源の連携」で語彙資源の利用法を解説した。（2023 年 10 月）https://www.jpling.gr.jp/taikai/2023b/2023b_program/

データベース等を使った研究成果・利用実績（アウトカム）

- (1) 「Web 茶まめ」のアクセス履歴は，7 万表示，3.5 万セッション，1.5 万ユーザー（10 月～3 月（google analytics のエラーのため半年間））

2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

特別共同利用研究員の受け入れ

- (1) 特別共同利用研究員については今年度は受け入れなし（学振 PD を 1 名外来研究員として受け入れた）。

総研大や連携大学院等の協定に基づく授業担当等

- (1) 総研大「言語資源学」「言語資源学演習」の授業で語彙資源に関する講義・演習を行った。

プロジェクト非常勤研究員の雇用

- (1) プロジェクト非常勤研究員 4 名を雇用して語彙資源の構築と研究を実施した。

大学院生，学振 PD 等のプロジェクトへの参加

- (1) 大学院生 1 名をプロジェクト非常勤研究員として雇用しプロジェクトに参加させた。

若手研究者への研究費・発表旅費の支援

- (1) ・若手研究者（共同研究員）の研究発表の費用の支援を行った（日本語学会，言語処理学会）。

若手研究者向けのチュートリアル等

- (1) 日本語学会秋季大会のワークショップ「コーパスと語彙資源の連携」で語彙資源の利用法を解説した。（2023 年 10 月）【重出】

3. 地域・社会との連携に関する計画

産業界との連携

- (1) 小学館出版局との連携協定のもとで『日本国語大辞典』から UniDic データベースに見出し語を追加・整備した。(15575 語彙素, 18406 書字形を追加〈2024/03/31 まで〉)【重出】

地域・社会との連携

- (1) 語彙資源の辞書編纂への活用に向け出版社との意見交換を行った。

社会人を対象とするスキルアップの計画等

- (1) 日本語学会でのワークショップとして語彙資源の利用法に関する講習会を行った。

研究成果の社会への還元

- (1) 「Web 茶まめ」を更新し, 新しい UniDic に対応し, 大納言インポート形式に対応したバージョンを公開した (2024 年 3 月)【重出】

4. グローバル化に関する計画

英語による研究成果の発信等

- (1) DH2023 (2023 年 7 月, グラーツ) で Web 茶まめに関する研究発表を行った。

プロジェクト名：多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創

サブプロジェクト名：学習者の辞書資源使用の実態調査

サブプロジェクトリーダー：石黒 圭

令和5年度サブプロジェクト自己評価

全項目の総合	A
1. 共同利用・共同研究に関する計画	S
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	B
3. 地域・社会との連携に関する計画	—
4. グローバル化に関する計画	A

I. 計画期間内の概要

1. 目的及び特色

【目的】

近年、国内外ともに日本語学習者の数は増え続け、母語や学習環境などの点で多様性を増している。とくに辞書ツールの使用において、学習者の間で紙の辞書や電子辞書の使用は減り、辞書アプリやWEB上の辞書の使用が広がっている。

しかし、辞書ツールのコンテンツには課題が多く残されているのも事実である。たとえば、自分の調べたい意味や、適切な例文にたどり着けなかったり、コロケーションや文体情報など、学習者が必要としている情報が説明されていなかったりする。このため、学習者による辞書ツールの使用実態を把握し、それに沿って辞書ツールのコンテンツを充実させる必要がある。

そこで、本プロジェクトでは、次の二つの調査・研究を実施する。

- ・第一段階：学習者による辞書ツール使用の調査を行い、使用実態とその困難点を明らかにする
- ・第二段階：困難点解決につながる学習者用辞書ツールに必要な基礎語オープンソースを試作し公開する

基礎語オープンソースに収録する語は、日本語初級および中級前半レベルの基礎語を想定している。また、サブプロジェクト「学習者用辞書資源の構築」と連携しながら、学習者用の辞書ツール開発につながる基礎語オープンソースの構築を試みたい。

【特色】

本プロジェクトの特色は、以下の3点である。

■特色1：学習者によるオンラインでの辞書ツールの使用実態の解明

学習者の辞書ツール使用に関する従来の研究は、学習者にたいするアンケートによる意識調査や、調査者から示された課題をこなす辞書ツール使用の実験調査が主であり、そもそも学習者がどのような場面・目的で辞書ツールを使用しているのかという実態は明らかにされてこなかった。本プロジェクトは、スマートフォンの画面収録機能を用いてオンラインでの語彙検索行動を観察することで、場面・目的と紐づけた辞書ツールの使用実態と困難点を明らかにできる点に特色がある。

■特色2：学習者用辞書ツールに必要な情報の解明

現行の学習者用辞書ツールは、学習者目線で見ると、例文や文体情報などの記載が不足している場合や、記載されていても当該の情報にたどり着けない場合があるなど、多くの課題を抱えている。本プロジェクトは、辞書ツール使用の実態調査の結果から、学習者がどのような場面でどのような情報を必要としているのか、また、情報をどのように掲載すれば必要な情報に確実にたどり着けるのかを明らかにする点に特色がある。

■特色3：学習者用辞書ツールに必要な基礎語オープンソースの試作・公開

本プロジェクトは、辞書ツール使用の実態調査から明らかにした学習者用辞書ツールに必要な情報項目や掲載方法をもとに基礎語オープンソースを試作し、それをCCBYで公開する点に特色がある。意味記述や記述項目において質の高いコンテンツが開発され、それが制限なく利用できるようなになれば、世界各地の学習者の細かいニーズに合わせてカスタマイズされた辞書ツールが開発され、多様な学習者に使用されることが期待される。なお、辞書ツールに掲載が必要な語数についても、本プロジェクトの実態調査の結果から分析し導き出すことを目指したい。

2. 年次計画（6年間のロードマップ）

	2022	2023	2024	2025	2026	2027
実態調査	韓国語話者	中国語話者 越語話者	DB 公開			
オープンソース				検討	試作	公開
論文集		準備	刊行			
シンポジウム			開催			開催
ワークショップ						開催

【2022(R4)年度】

- ・韓国語話者の辞書ツール使用の実態調査を行う。韓国国内の大学の JFL 環境で学ぶ初中級学習者 6 名、中上級学習者 6 名、計 12 名を対象に 1 週間の辞書検索行動を記録する。

【2023(R5)年度】

- ・中国語・ベトナム語話者の辞書ツール使用の実態調査を行う。中国・ベトナム国内の大学の JFL 環境で学ぶ初中級学習者各 6 名、中上級学習者各 6 名、計 24 名を対象に 1 週間の辞書検索行動を記録する。
- ・韓国語・中国語・ベトナム語話者の実態調査をもとに、研究成果を論文集として刊行する準備に着手する。

【2024(R6)年度】

- ・韓国語・中国語・ベトナム語話者の実態調査のデータベースをインターネット上に公開する。
- ・国際シンポジウムを開催し、韓国語・中国語・ベトナム語話者の実態調査に基づく研究成果を発表する。
- ・韓国語・中国語・ベトナム語話者の実態調査に基づく研究成果をまとめ、論文集として刊行する。

【2025(R7)年度】

- ・第四期前半における辞書ツール使用の実態調査から明らかにした、学習者用辞書ツールに必要な情報項目や掲載方法を検討する。

【2026(R8)年度】

- ・2025 年度に検討した、学習者用辞書ツールに必要な情報項目や掲載方法をもとに、基礎語オープンソースを試作する。

【2027(R9)年度】

- ・2026 年度に試作した基礎語オープンソースを改良し、インターネット上に公開する。
- ・基礎語オープンソースの内容を紹介する国際シンポジウムを開催し、研究成果を社会へ発信する。
- ・基礎語オープンソース活用のためのワークショップを開催し、学習者用辞書ツールの開発に役立てる。

II. 令和5年度の活動

令和5年度予算額 6,336 千円

1. 共同利用・共同研究に関する計画

フィールド調査・実験等（アクティビティ）

- (1) 予定を前倒して、2022 年度末に、中国（天津外国語大学、澳門大学）48 名、台湾（政治大学）11 名、韓国（ソウル大学、高麗大学）22 名、ベトナム（ハノイ国家大学外国語大学）10 名、英国（2 大学…国際交流基金経由）3 名、ドイツ3 名（トリア大学）、日本（岡山大学）13 名の合計 110 名の学生を対象に1 週間の辞書検索行動調査を完了し、データを収集した。

データベース等の構築（アクティビティ）

- (1) 実態調査で収集したデータを整理し、外国語で記入された箇所については適宜、翻訳した。
- (2) 必要なタグ付け（学習者の日本語レベル、検索で入力した言語など）を行い、データベースを整備した。

国内外の大学や研究機関との組織的な連携等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 韓国、中国、台湾、ベトナム、英国、ドイツ、および国内の大学と連携してデータの収集、精査を行った。
- (2) 海外の共同研究員を中心とする分科会を本年度7 回（6 月（1 回）、7 月（2 回）、8 月（2 回）、9 月（1 回）、10 月（1 回））に行い、論文集出版に向け、執筆内容にかんする検討等を行った。
- (3) 国内の共同研究員を中心とする全体会を本年度1 回（8 月）に行い、論文集出版に向け、スケジュール調整、執筆テーマ確認等を行った。

他のプロジェクトとの合同の活動等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) サブプロジェクト「学習者用辞書資源の構築」（リーダー：柏野和佳子）と会議（8 月）を設け、調査および研究の進捗について情報を共有しながら、活動した。

公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム（アウトプット）

- (1) 第13 回国際日本語教育・日本研究シンポジウム（2023 年11 月19 日）にて、「スマホ「辞書」による語彙検索行動の実態と問題点—マカオの初級日本語学習者を事例に—」を口頭発表。
https://www.japanese-edu.org.hk/PDF/Abstract_final.pdf
- (2) 第64 回語彙・辞書研究会（2023 年11 月18 日）にて、「日本語学習者によるオンライン辞書活用の可能性」を講演。
- (3) 専門日本語教育学会大第26 回研究討論会（2024 年3 月2 日）での口頭発表に採択され、「日本語学習者はどのような語を検索しているのか—語彙検索行動データの語種に着目して—」を発表。

書籍・論文等による研究成果の公表（アウトプット）

- (1) 『社会言語科学』（2023 年9 月 Vol.26 No.1）に論文「世界の日本語学習者の辞書ツール使用事情—スマホによる語彙検索行動の適切な支援のために—」を発表
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jajls/26/1/26_5/_article/-char/ja
- (2) 次年度の刊行に向けて研究成果を論文集として刊行する準備を進めた。

2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

総研大や連携大学院等の協定に基づく授業担当等

- (1) 連携大学院（一橋大学：石黒担当）の演習において、本サブプロジェクトで収集中のデータを活用した研究発表を行った。

プロジェクト非常勤研究員の雇用

- (1) 本プロジェクトの研究推進のために、2名のプロジェクト非常勤研究員を雇用した。

大学院生、学振PD等のプロジェクトへの参加

- (1) 連携大学院（一橋大学：石黒担当）の演習等の機会を利用して、本プロジェクトに参画する大学院生を募り、1名の大学院生が論文の執筆準備を進めた。

3. 地域・社会との連携に関する計画

特になし

4. グローバル化に関する計画

海外の研究者の受入

- (1) 韓国、中国、台湾、ベトナム、英国、ドイツの大学や機関に所属する研究者を共同研究員とし、連携をはかった。

海外の大学との連携等

- (1) 韓国、中国、台湾、ベトナム、英国、ドイツの大学や機関に属する研究者とも連携をとりながら調査を実施し、データ整備を進めた。また、学会発表や論文集の刊行のための準備を進めた。とくに、ハノイ国家大学外国語大学と2024年1月に学術交流に関する協定書を締結し、すでに締結済みの天津外国語大学と合わせて2校となった。

プロジェクト名：多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創

サブプロジェクト名：言語資源の空間接続

サブプロジェクトリーダー：大西 拓一郎

令和5年度サブプロジェクト自己評価

全項目の総合	B
1. 共同利用・共同研究に関する計画	A
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	B
3. 地域・社会との連携に関する計画	—
4. グローバル化に関する計画	—

I. 計画期間内の概要

1. 目的及び特色

言語地図・古典籍・方言古辞書に対し空間情報を付与することで、言語情報と地理空間の接続を目的とする。

言語地図は言語情報の空間上の位置を視覚的に表示するが、それ自体は画像であり、空間データを持つものではない。古典籍には多くの地名が含まれるが、コーパス化されてもそこに空間データは含まれない。江戸時代の全国方言辞典『物類称呼』が提示する個々の方言形が使われる地名も同様である。本研究課題は、これらに空間情報を付与して、広く提供し、特に言語地理学の発展に寄与することをねらうものである。

1. 言語地図データベース

国立国語研究所研究図書室は、国内で作成された言語地図のほとんどすべてを所収している。そこには劣化の進む資料も少なからず含まれ、電子化が急務である。加えて、国外の言語地図集も多く収蔵している。これらを言語地図データベースとして整理し、公開する。

a. 国内言語地図

以下をデータベース化し、公開する。

- (1) 書誌目録・地図項目・語形目録のデータベース化・公開
- (2) スキャン地図画像：全画像データ化・許諾データの公開
- (3) ジオタグ付き地図画像：許諾データの公開
- (4) ポイント情報（地点-語形対応）：公開許諾データのうち対応可能なデータに付与し公開

b. 国外言語地図

- ・書誌目録・地図項目等をデータベース化・公開

2. 古典籍地名データベース

- ・空間情報付き地名語彙素データ・万葉集東歌出身地データの作成

NIHU（人間文化研究機構）による歴史地名データ（吉田東伍『大日本地名辞書』を中心にして、地名に経度緯度を付与）と古典籍 CHJ（通時コーパス）の地名語彙素・万葉集東歌防人歌出身地を結びつけることができるようにする。

3. 方言古辞書（物類称呼）データベース

- ・物類称呼が提示する語形使用地域（地名）への空間情報付与

江戸時代の方言集『物類称呼』に提示された各地方言の語形と場所の対応表を作成し、場所を表す地名は歴史地名データと接続できるようにする。

2. 年次計画（6年間のロードマップ）

	目標	実施計画
2022 (R4) 年度 2022. 4 ～2023. 3	データベース設計 データ作成開始	データベースの設計を行う。 データ作成に着手する。 研究会を開催し、意見交換を行う。
2023 (R5) 年度 2023. 4 ～2024. 3	国内言語地図 DB の公開開始	データ構築を継続し、国内言語地図データ公開を開始する。 データベースについて学会で発表する。 研究会を開催し、活用方法を発表する。
2024 (R6) 年度 2024. 4 ～2025. 3	国内言語地図 DB の公開継続	データ構築・国内言語地図データ公開を継続する。 データベースについて、国際学会で発表する。 研究会を開催し、活用成果を発表する。
2025 (R7) 年度 (前半) 2025. 4 ～2026. 3	国内言語地図 DB の公開継続 国外言語地図 DB β 版公開 古典籍地名 DB β 版公開 古辞書方言 DB β 版公開	データ構築を継続し、国内言語地図データの公開継続、国外言語地図 DB・古典籍地名 DB・古辞書方言 DB の β 版公開を行う。 データベースについてのワークショップを開催する。 研究会を開催し、研究成果を発表する。
	暫定評価	
2026 (R8) 年度 2026. 4 ～2027. 3	国内言語地図 DB の公開継続 国外言語地図 DB 修正公開 古典籍地名 DB 修正公開 古辞書方言 DB 修正公開	データ構築を継続し、国内言語地図データの公開継続、国外言語地図 DB・古典籍地名 DB・古辞書方言 DB の修正を行う。 研究会を開催し、研究成果を発表する。
2027 (R9) 年度 (前半) 2027. 4 ～2027. 9	国内言語地図 DB 完成・公開 国外言語地図 DB 完成・公開 古典籍地名 DB 完成・公開 古辞書方言 DB 完成・公開	データ修正を継続し、国内言語地図 DB・国外言語地図 DB・古典籍地名 DB・古辞書方言 DB を完成させ、公開する。 研究会を開催し、研究成果をとりまとめる。

II. 令和5年度の活動

令和5年度予算額 2,782 千円

1. 共同利用・共同研究に関する計画

データベース等の構築（アクティビティ）

- (1) 国内言語地図 12 冊のスキヤン画像データを作成した。
- (2) 国内言語地図 12 冊のジオタグ付き画像データを作成した。
- (3) 画像公開地図の見出しデータを作成・更新した。
- (4) 古典籍地名データを 100 件追加作成した。
- (5) 物類称呼データ作成：全 5 巻の粗入力を行った。

他のプロジェクトとの合同の活動等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 語彙資源ポータルへ言語地図データベースのデータを提供した。

<https://goshidb.ninjal.ac.jp/goshidb/>

調査データ・データベース等公開（アウトプット）

- (1) 国内言語地図 12 冊のスキヤン画像データを公開した。

福島秩子『出雲飯石郡中央部言語地図』

https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/ladp/210/210_index.html

福島秩子『三刀屋町の方言』

https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/ladp/212/212_index.html

福島秩子『吉田村の方言』

https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/ladp/213/213_index.html

福島秩子『佐田町の方言』

https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/ladp/214/214_index.html

大橋勝男『関東地方域方言事象分布地図 第1巻／音声篇』

https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/ladp/132/132_index.html

大橋勝男『関東地方域方言事象分布地図 第2巻／表現法篇』

https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/ladp/148/148_index.html

大橋勝男『関東地方域方言事象分布地図 第3巻／語彙篇』

https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/ladp/162/162_index.html

加藤和夫『南川・北川流域言語地図集』

https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/ladp/169/169_index.html

外山正恭『東頸言語地図集』

https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/ladp/231/231_index.html

柴田武『人口急増地帯としての埼玉県における言語接触とその問題点に関する総合的研究』

https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/ladp/240/240_index.html

熊取町教育委員会『熊取町の方言』

https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/ladp/246/246_index.html

大阪府南河内郡千早赤阪村教育委員会『大阪府南河内郡千早赤阪村言語地図』

https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/ladp/400/400_index.html

- (2) 国内言語地図 12 冊のジオタグ付き画像データを公開した。

対象地図集と URL は (1) に同じ。

- (3) 画像公開地図の見出しデータを更新して、公開した。

言語地図データベース

https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/ladp/ladb_index.html

2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

総研大や連携大学院等の協定に基づく授業担当等

- (1) 後期に言語地理学に関する2時限分の授業を担当した。

大学院生、学振PD等のプロジェクトへの参加

- (1) 学振PDがプロジェクトに参加した。

若手研究者への発表の機会の提供

- (1) 月例研究会で1名、公開研究発表会で1名、若手研究者が発表した。

https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20240222a/

若手研究者への研究費・発表旅費の支援

- (1) 公開研究発表会の参加旅費を支援した。

若手研究者向けのチュートリアル等

- (1) 月例研究会，非常勤集中講義，科研費研究会で，若手研究者向けにGISの活用方法を教授した。

3. 地域・社会との連携に関する計画

特になし

4. グローバル化に関する計画

特になし

プロジェクト名：多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創

サブプロジェクト名：学習者辞書用語彙資源の構築

サブプロジェクトリーダー：柏野 和佳子

令和5年度サブプロジェクト自己評価

全項目の総合	B
1. 共同利用・共同研究に関する計画	B
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	A
3. 地域・社会との連携に関する計画	—
4. グローバル化に関する計画	B

I. 計画期間内の概要

1. 目的及び特色

本プロジェクトは、統括プロジェクト「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」（小木曾）のもと、サブプロジェクト「学習者の辞書資源使用の実態調査」（石黒）と緊密に連携し、活動する。また、基幹型プロジェクト「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究」（小磯）とは、話し言葉のレジスター分析において連携する。さらに、基幹型プロジェクト「実証的な理論・対照言語学の推進」（浅原）とは、分類語彙表データの活用において連携する。

【目的】

学習者用辞書構築に必要な語彙データベースを構築し公開することを目的とする。国語教育、日本語教育において、日本国内はもちろん、海外の学習者にも利用してもらえるものを旨とする。

国立国語研究所には『分類語彙表』というデータベースがあるが、これを学習者用の辞書資源として活用するためには情報を付加し再構築する必要がある。①学習目的に応じた学習レベル別の情報の付与、②話し言葉的な語であるか、書き言葉的な語であるかといった位相情報の付与に順次取り組む計画である。

さらに、語釈や用例の付与も必要である。ただちに利用できる語釈や用例の資源として、オープンソースである『計算機用日本語基本辞書 IPAL』（和語動詞 861 語、和語形容詞 136 語、名詞 1,081 語）がある。その情報を活用するために『IPAL』を整備したのち、初級レベルの語の語釈・用例付与に取り組む。

本プロジェクトでは、主に次の3つの作成・公開を目標にする。

- (1) 学習目的に応じた学習レベル別の語彙リスト
- (2) 『分類語彙表』の語に、学習レベル別・目的別の情報や位相情報・語釈・用例を付与したデータベース
- (3) 『計算機用日本語基本辞書 IPAL』をもとにした辞書情報のデータベース

具体的には、次のとおり計画する。

- (1) 学習目的に応じた学習レベル別の語彙リストの設計と作成
 - 必要な学習のレベル別・目的別の語彙リストを設計する。
 - ✧ 学習レベルと語数は、初級(1,000～2,000 語)・中級(5,000～10,000 語)・中上級(10,000～30,000 語)・上級(50,000～100,000 語)の4段階を想定するが、必要があれば変更する。
 - ✧ 目的別として、国語教育、日本語教育、それぞれにおける、読解、作文を目的にする場合や、学校生活、日常生活、国内、国外、といった状況別などを検討する。
 - ✧ 「国語教育・日本語教育における読解・作文のための初級語彙リスト」優先的に作成する予定。
 - ✧ そのほか、優先度の高い目的のものからレベル別の語彙リストを作成する。
 - 『日本語教育のための基本語彙調査』[国立国語研究所 1984]の「基本六千語」「基本二千語」などの

語彙調査結果や、コーパスの頻度表を参考に、学習レベル別・目的別の語彙を選定する。

(2)『分類語彙表』に、学習に必要な語の増補および、学習レベルや位相情報・語釈・用例の付与

➤ 『分類語彙表』にない、学習に必要な語（多義語の場合はブランチ）を増補する。

➤ (1)で優先して作成した語彙リストに基づく学習レベル別情報は、今期中に全語（多義語の場合は全ブランチ）に付与予定。

➤ 今期中に初級(1,000～2,000語)への位相情報・語釈・用例の付与を目指す。

(3)『計算機用日本語基本辞書 IPAL』の情報のデータベース化

➤ 2022年度の1年間に実施する。

【特色】

■特色1：学習目的に応じた学習レベル別語彙リストへの高いニーズにこたえる

国語教育、日本語教育において、多義語の意味（ブランチ）レベルまで考慮した、学習レベル別・目的別の語彙リストが所望されている。これらを本研究の背景と考え、順次こたえていくよう、研究を進めていく。

■特色2：研究利用・公開に支障がないDBを語彙資源として再構築し公開する

・国語研所有の『分類語彙表』及び、オープンソースの『IPAL』をベースに作成することにより、研究利用・公開に支障がない。再構築したDBはCCBY-NC（表示-非営利）にて公開を予定。

2. 年次計画（6年間のロードマップ）

2022 年度

・語彙リスト設計 ・語彙リスト作成 ・『分類語彙表』アノテーション ・データ公開 ・若手育成・海外	・必要な学習のレベル別・目的別語彙リストを設計開始 ・学習レベル：初級語選定開始 ・学習レベル：初級情報付与開始 ・位相：付与すべき情報の検討開始 ・『計算機用日本語基本辞書 IPAL』DB 公開 ・講習会：1 回開催

2023 年度

・語彙リスト設計 ・語彙リスト作成 ・『分類語彙表』アノテーション ・データ公開 ・若手育成・海外	・必要な学習のレベル別・目的別語彙リストを設計継続 ・学習レベル：初級語選定継続，中級語選定開始 ・学習レベル：初級語に情報付与継続，中級語に情報付与開始 ・位相：付与すべき情報の検討継続 ・初級語彙リスト公開 ・講習会：1 回開催

2024 年度

・語彙リスト作成 ・『分類語彙表』アノテーション ・データ公開 ・報告書刊行 ・成果発表 ・若手育成・海外	・学習レベル：中級語選定継続 ・学習レベル：中級語に情報付与継続 ・位相：付与すべき情報の検討継続 ・語釈・用例：初級語に付与開始 ・中級語彙リスト公開 ・語彙リスト設計の報告書：1冊 ・国際シンポジウム：1回開催 ・講習会：1回開催

2025 年度

・語彙リスト作成 ・『分類語彙表』アノテーション ・データ公開 ・若手育成・海外	・学習レベル：中上級以上語選定開始 ・学習レベル：中上級以上語に情報付与開始 ・位相：初級語に付与開始 ・語釈・用例：初級語に付与開始 ・別分類の中級語彙リスト公開 ・初級語位相情報公開 ・講習会：1回開催

2026 年度

・語彙リスト作成 ・『分類語彙表』アノテーション ・データ公開 ・若手育成・海外	・学習レベル：中上級以上語選定継続 ・学習レベル：中上級以上語に情報付与継続 ・位相：中級語に付与開始 ・語釈・用例：初級語に付与継続 ・中上級以上語彙リスト公開 ・講習会：1回開催

2027 年度

・『分類語彙表』アノテーション ・データ公開 ・論文集刊行 ・成果発表 ・若手育成・海外	・位相：中級語に付与継続 ・語釈・用例：初級語に付与継続 ・中級語の位相情報公開 ・初級語の語釈・用例公開 ・研究論文集：1冊 ・国際シンポジウム：1回開催 ・講習会：1回開催

II. 令和5年度の活動

令和5年度予算額 5,883 千円

1. 共同利用・共同研究に関する計画

データベース等の構築（アクティビティ）

(1) 必要な学習のレベル別・目的別語彙リストを設計するために、[科研費基盤研究 (A)23H00072] 文章の語彙レベルの学習者適合度の判定方法の開発 ―日本語教育・国語教育への応用―（リーダー：松下達彦）と連携し、「初級から日常生活，就労・ビジネス，学術などの目的に応じた語彙モジュールにすべきである」という議論を進め，共著論文（筆頭：松下達彦）を日本語教育学会誌に投稿した。

- (2) 学習レベル初級語の選定を継続し中級語の選定を進めるために、参考資料となる島村直己（編）（2009）『日本語基本語辞典—初級 500 語—（試行版）』国立国語研究所日本語教育基盤情報センターを電子化し、DB化した。また、従来の教育用の語彙表に十分に立項されていないカタカナ語を選定するために、小学生の作文を収集し、使用されているカタカナ語のリストの作成を開始し、進めている。
- (3) 『分類語彙表』に欠けている多義語のブランチを増補するため、『IPAL』の意味に『分類語彙表』番号の付与を進めている。
- (4) 日本語教育、国語教育での利用を想定し、付与すべき位相情報の検討を継続した。

他のプロジェクトとの合同の活動等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 統括プロジェクト「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」（小木曽）やサブプロジェクト「日本語学習者の辞書資源使用の実態調査」（石黒）の会議に参加し、連携を図った。
- (2) 基幹型プロジェクト「多世代の話し言葉会話コーパスに基づく話し言葉の実証的・応用総合的研究」（小磯）と、言語資源開発センターとの共催で講習会を1回、チュートリアルを1回、開催した（詳細は「データベース等に関する講習会・講演会」参照）。
- (3) 基幹型プロジェクト「実証的な理論・対照言語学の推進」（浅原）と作成された『『現代日本語書き言葉均衡コーパス』短単位語彙表（分類語彙表番号つき）（BCCWJ-WSD-frequency version 2024.01）』の提供を公開前より受け、データ確認に協力した。
- (4) 科研費 基盤研究（A）23H00072「文章の語彙レベルの学習者適合度の判定方法の開発 —日本語教育・国語教育への応用—」と共催で、「学習者辞書用語彙資源の構築」共同研究発表会（2024年2月27日）を開催した。

異分野の研究者との共同研究・協業等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 日本語教育・国語教育の研究者へ成果データを提供した。

調査データ・データベース等公開（アウトプット）

- (1) 島村直己（編）（2009）『日本語基本語辞典—初級 500 語—（試行版）』国立国語研究所日本語教育基盤情報センターをDB化まで終えた。公開は次年度の予定。

書籍・論文等による研究成果の公表（アウトプット）

- (1) 国語研のWSでのポスター発表2件、国語研の共同研究発表会での報告2件、発表2件、言語処理学会のWSでの口頭発表1件を行った。また、『国立国語研究所論集』に論文2本を掲載した。

データベース等に関する講習会・講演会（アウトプット）

- (1) 基幹型プロジェクト「多世代の話し言葉会話コーパスに基づく話し言葉の実証的・応用総合的研究」（小磯）と、言語資源開発センターとの共催で講習会を11月5日に、チュートリアルを12月2日に開催した。

オンライン検索システム『中納言』講習会【初級編】 | 国立国語研究所 (ninjal.ac.jp)

登録109名（うち、国外20、学生42）。

NINJAL チュートリアル 『日本語日常会話コーパス』の活用 —『中納言』の使い方— | 国立国語研究所

登録139名（うち、国外31、学生55）。

2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

総研大や連携大学院等の協定に基づく授業担当等

- (1) 総研大において「言語研究基礎論」と「言語資源学」を担当した。【若手支援】
- (2) 一橋大学においても国語研で構築した言語資源を活用する演習を行った。また2023年度は修士論文2本の主査を担当した。【若手支援】

大学院生、学振PD等のプロジェクトへの参加

- (1) 大学院生3名をプロジェクト非常勤研究員として雇用し、プロジェクトに迎え、学習者に必要な語の収集、検討に参加する機会を与えた。【若手支援】

若手研究者への発表の機会の提供

- (1) 『国立国語研究所論集』に若手研究者2名の論文、2本を掲載した。【若手支援】
- (2) 科研費 基盤研究 (A) 23H00072「文章の語彙レベルの学習者適合度の判定方法の開発 ―日本語教育・国語教育への応用―」と共催の「学習者辞書用語彙資源の構築」共同研究発表会（2024年2月27日）において、学生2名による研究報告2件と、学生4名を含む研究発表1件の機会を提供した。【若手支援】

若手研究者向けのチュートリアル等

- (1) 基幹型プロジェクト「多世代の話し言葉会話コーパスに基づく話し言葉の実証的・応用総合的研究（小磯）と、言語資源開発センターとの共催で講習会を11月5日に、チュートリアルを12月2日に開催した。【若手支援】
オンライン検索システム『中納言』講習会【初級編】 | 国立国語研究所 (ninjal.ac.jp)
登録109名（うち、国外20、学生42）。
NINJAL チュートリアル 『日本語日常会話コーパス』の活用 ―『中納言』の使い方― | 国立国語研究所
登録139名（うち、国外31、学生55）。

3. 地域・社会との連携に関する計画

特になし

4. グローバル化に関する計画

海外の研究者の受入

- (1) 海外の研究者を共同研究員として加え、海外の動向も踏まえながら研究を実施したとともに、講習会、チュートリアル、共同研究発表会をオンラインで開催し、海外からも延べ62名の参加があった。

プロジェクト名：多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創

サブプロジェクト名：語彙資源ポータル拡張

サブプロジェクトリーダー：高田 智和

令和5年度サブプロジェクト自己評価

全項目の総合	B
1. 共同利用・共同研究に関する計画	B
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	B
3. 地域・社会との連携に関する計画	—
4. グローバル化に関する計画	—

I. 計画期間内の概要

1. 目的及び特色

コーパス、辞書類（主に古辞書）、言語地図、言語記事は、それぞれ個別の目的で研究利用され、データベース等の言語資源がそれぞれ構築されている。単語や語彙の歴史を解明する上で、これらは有益な資料であるが、横断的に扱う環境は未だ整っていない。そこで、本プロジェクトでは、「日本語歴史コーパス」等から得られる語彙素統計情報、辞書類のデータベース、言語地図データベース、言語記事データベース、語彙研究文献情報を集積し、日本語語彙の歴史を一望できるような「語彙資源ポータル」を整備拡張する。これによって、単語使用の変遷、語形バリエーションの消長、意味拡張を記述し、その変容の原理を探究する語彙研究基盤が整う。また、研究の入口となる情報が整備され、言葉に関心を持つ多くの人々を日本語史研究に引き込み、研究の活性化につなげることも期待できる。

本プロジェクトでは、計画期間内において、以下の4点についてデータ整備を行い、「語彙資源ポータル」を拡張する。

- (1) コーパス統計情報： 第3期中期計画期間中に増補された「日本語歴史コーパス」の室町時代編Ⅱキリシタン資料、江戸時代編Ⅲ近松浄瑠璃などの語彙素（短単位）統計情報を「語彙資源ポータル」に収録する。
- (2) 辞書類見出し情報： 近代以前の辞書類から代表的なものを10点程度選定し、見出し情報（見出し語、所在、UniDic 語彙素 ID など）をデータベース化する。見出しデータは「語誌情報ポータル」に収録するだけでなく、オープンデータ（テキスト形式）としての公開も検討する。なお、辞書類見出し情報の整備は、国文学研究資料館が主導する人間文化研究機構広領域連携機関型研究プロジェクト「異分野融合による総合書物学の拡張的研究」との連携により実施する。
- (3) 言語地図目録情報： 「言語地図データベース」（「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」のサブプロジェクト「言語資源の空間接続」において作成）の収録地図名に対して UniDic 語彙素 ID 付与を行い、「語誌情報ポータル」に収録する。
- (4) 言語関連記事情報： 1949～2009 年を対象とする「ことばに関する新聞記事見出しデータベース」の記事名のうち、単語を取り上げた記事に対して UniDic 語彙素 ID 付与を行い、「語誌情報ポータル」に収録する。また、大正期～昭和期の総合雑誌の言語関連記事のデータ整備を行う。

2. 年次計画（6年間のロードマップ）

2022 年度

- ・第3期中期計画期間中に増補された「日本語歴史コーパス」語彙素統計情報を「語誌情報ポータル」に収録する。
- ・「ことばに関する新聞記事見出しデータベース」から単語を取り上げた記事の抽出を行う。
- ・見出し情報を整備する近代以前の辞書類の選定を行い、データ作成に着手する。
- ・大正期～昭和期の総合雑誌の言語関連記事のデータ作成に着手する。

2023 年度

- ・「ことばに関する新聞記事見出しデータベース」中の単語を取り上げた記事についての情報を「語誌情報ポータル」に収録する。
- ・「言語地図データベース」による言語地図目録情報の整備を行う。
- ・近代以前の辞書類の見出し情報データ作成を継続する。
- ・大正期～昭和期の総合雑誌の言語関連記事のデータ作成を継続する。

2024 年度

- ・言語地図目録情報を「語誌情報ポータル」に収録する。
- ・近代以前の辞書類の見出し情報データ作成を継続する。
- ・大正期～昭和期の総合雑誌の言語関連記事のデータ作成を継続する。

2025 年度

- ・近代以前の辞書類の見出し情報データ作成を継続するとともに、2024年度までに整備したデータを「語誌情報ポータル」に収録する。
- ・大正期～昭和期の総合雑誌の言語関連記事のデータ作成を継続する。

2026 年度

- ・大正期～昭和期の総合雑誌の言語関連記事情報を「語誌情報ポータル」に収録する。
- ・近代以前の辞書類の見出し情報データ作成を継続する。

2027 年度

- ・近代以前の辞書類の見出し情報データ作成を継続するとともに、2027年度までに整備したデータを「語誌情報ポータル」に収録する。
- ・シンポジウムを開催し、研究成果を取りまとめる。

II. 令和5年度の活動

令和5年度予算額 4,320 千円

1. 共同利用・共同研究に関する計画

データベース等の構築（アクティビティ）

- (1) 「ことばに関する新聞記事見出しデータベース」中の単語を取り上げた記事データの整備を行った。
- (2) 「言語地図データベース」による言語地図目録情報の整備を行った。
- (3) 近代以前の辞書類の見出し情報データ作成として、十卷本和名類聚抄、和英語林集成の整備を行った。
- (4) 大正期～昭和期の総合雑誌の言語関連記事のデータ作成を継続して実施した。

他のプロジェクトとの合同の活動等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 人間文化研究機構広領域連携機関型研究プロジェクト「異分野融合による総合書物学の拡張的研究」との連携により、古辞書類の見出し語データ等の作成を行った。

公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム（アウトプット）

- (1) 京都大学人文科学研究所附属人文情報学創新センター等との共催により「東洋学へのコンピュータ利用第 37 回研究セミナー」を開催した。

https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20240119b/

2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

総研大や連携大学院等の協定に基づく授業担当等

- (1) 総研大において「日本語史」を担当した。

大学院生、学振 PD 等のプロジェクトへの参加

- (1) 大学院生 1 名をプロジェクト非常勤研究員として新たに雇用した。

若手研究者への発表の機会の提供

- (1) 京都大学人文科学研究所附属人文情報学創新センター等との共催により「東洋学へのコンピュータ利用第 37 回研究セミナー」を開催し、若手研究者の発表の機会を提供した（筆頭発表 1 件、共同発表 1 件）。

3. 地域・社会との連携に関する計画

特になし

4. グローバル化に関する計画

特になし

プロジェクト名：多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創

サブプロジェクト名：学習者用「日本語機能語バンク」の構築

サブプロジェクトリーダー：プラシャント・パルデシ

令和5年度サブプロジェクト自己評価

全項目の総合	B
1. 共同利用・共同研究に関する計画	B
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	B
3. 地域・社会との連携に関する計画	—
4. グローバル化に関する計画	—

I. 計画期間内の概要

1. 目的及び特色

日本語は、英語や中国語などとは異なった語彙の特徴をもつ言語である。例えば、日本語には豊富な自動詞と他動詞の対があり、また、他動詞（二項述語）において、多様な格の枠組み（「が～を」「が～が」「が～に」「に～が」など）が存在する。また、時間、場所、道具などを表す付加詞は格助詞を伴い、その多くは多義的であることも日本語の語彙項目の大きな特徴となっている。このような日本語の語彙的な特徴を海外で自由に利用できる辞書が存在せず、日本語教育や日本語の学習における大きな課題となっている。

語彙の学習と並ぶ日本語学習における重要項目として、いわゆる文型（機能表現）の学習が挙げられる（例：「～なければならない」「～なくてはならない」「～する時・～した時」「～する前に」「～した後」「～だけあって～」「～だけに～」など）。文型（機能表現）は実質的な意味の希薄な語からなる表現がほとんどで、それぞれの表現を構成する個々の単語の意味を辞書で調べ、組み合わせてみても、その表現全体がどのような意味や機能を持ち、どのような文脈で使用されるかを理解することはできない。日本国内で日本語を学ぶ者であれば、文型の意味や使い方を調べるための辞書や参考書が手に入りやすいが、残念ながら、これらの参考資料は海外で入手しにくく、世界の多くの日本語学習者の手に届いていないのが現状である。また、多くが紙媒体であるため、様々な文型を含む豊富な用例を耳で聞いて、アクセントやイントネーションを学習するのには使えない。国外のみならず国内の学習者にとってもウェブ上で手軽に使い、音声を確認できる辞書の開発は待たれるところである。

日本語学習教材が手に入りにくく、日本語母語話者の教師が少ない海外の教育現場では、以上のような事情から日本語の自他動詞、格助詞や文型の教育・学習は大きな困難を抱えている。この課題を解決すべく、本研究は、日本語の自他動詞、格助詞や文型の教育・学習に役立つオンライン辞書「日本語機能語バンク」を開発し、研究所のホームページを通じて無償公開し、国内外の日本語教育と日本語教育に資する日本語研究に貢献することを目指す。

上記の最終目標を達成するために、本プロジェクトでは、「日本語機能語バンク」の傘下で、以下の二つのオンライン版リソースを開発・拡充し、研究所のホームページを通じて無償で公開する。

(1) 「日本語格助詞データベース」：和語動詞約 1200 語の必須項および付加詞を含む用例（音声付作例のみ）、用例に含む格成分に意味役割を格納したデータを構築し、静的コンテンツとして公開する。

(2) 「日本語文型バンク」(<https://bunkeibank.ninjal.ac.jp/>)：第3期において文型バンクのプロトタイプとして約 200 件の文型を意味、接続情報、音声付用例とともに公開している。この 200 件を再検討・改良を行い、第4期で新たに約 1000 件を追加し、最終的には計約 1200 件規模の文型バンクを公開する。

本研究で提案されているような大規模の電子版のリソースを開発するためには、多くの日本語教師・研究者の力を結集する必要がある。また、基礎データを作成するためには、大量コーパスを使用できる高度なスキルが必要となる。日本語学、コーパス言語学、日本語教育の知識や電子データの構築に必要な多様なスキルを持つ多くの国内外の研究者の協力を得て初めてこの規模のリソースの開発・公開が可能となる。このようなリソースの開発・公開はオープンサイエンスの方針に沿うものであり、また、大学共同利用機関でしかできないものである。

2. 年次計画（6年間のロードマップ）

6年間のロードマップは以下の通りである。

1年目（2022年度）：見出しの執筆・校閲方法、用例のアノテーション方式の決定

- 1 「日本語格助詞データベース」および「日本語文型バンク」の構築・公開に向けて、見出しの執筆・校閲方法、用例のアノテーション方式などを検討し、決定する。
- 2 和語動詞（約200語）の見出し作成・校閲
- 3 文型（約200件）の見出し作成・校閲
- 4 プロジェクト主催の研究集会、学会などで研究成果の発表
- 5 構築されたデータを静的コンテンツとしてレポジトリで公開

2年目（2023年度）：見出しの執筆・校閲方法、用例のアノテーション方式再検討、必要に応じて修正、それに伴うデータの修正

- 6 「日本語格助詞データベース」および「日本語文型バンク」の構築・公開に向けて、見出しの執筆・校閲方法、用例のアノテーション方式などを検討し、決定する。
- 7 和語動詞（約200語）の見出し作成・校閲
- 8 文型（約200件）の見出し作成・校閲
- 9 プロジェクト主催の研究集会、学会などで研究成果の発表
- 10 構築されたデータを静的コンテンツとしてレポジトリで公開

3年目（2024年度）：見出しの執筆・校閲方法、用例のアノテーション方式再検討、必要に応じて修正、それに伴うデータの修正

- 11 「日本語格助詞データベース」および「日本語文型バンク」の構築・公開に向けて、見出しの執筆・校閲方法、用例のアノテーション方式などを検討し、決定する。
- 12 和語動詞（約200語）の見出し作成・校閲
- 13 文型（約200件）の見出し作成・校閲
- 14 プロジェクト主催の研究集会、学会などで研究成果の発表、学術誌への論文の投稿を行う。
- 15 構築されたデータを静的コンテンツとしてレポジトリで公開
- 16 「日本語格助詞データベース」および「日本語文型バンク」の使い方を紹介する講習会の開催。

4年目（2025年度）：見出しの執筆・校閲方法、用例のアノテーション方式再検討、必要に応じて修正、それに伴うデータの修正

- 17 「日本語格助詞データベース」および「日本語文型バンク」の構築・公開に向けて、見出しの執筆・校閲方法、用例のアノテーション方式などを検討し、決定する。
- 18 和語動詞（約200語）の見出し作成・校閲
- 19 文型（約200件）の見出し作成・校閲
- 20 プロジェクト主催の研究集会、学会などで研究成果の発表、学術誌への論文の投稿を行う。
- 21 構築されたデータを静的コンテンツとしてレポジトリで公開
- 22 「日本語格助詞データベース」および「日本語文型バンク」の使い方を紹介する講習会の開催。

5年目（2026年度）：見出しの執筆・校閲方法、用例のアノテーション方式再検討、必要に応じて修正、それに伴うデータの修正

23 「日本語格助詞データベース」および「日本語文型バンク」の構築・公開に向けて、見出しの執筆・校閲方法、用例のアノテーション方式などを検討し、決定する。

24 和語動詞（約200語）の見出し作成・校閲

25 文型（約200件）の見出し作成・校閲

26 プロジェクト主催の研究集会、学会などで研究成果の発表、学術誌への論文の投稿を行う。

27 構築されたデータを静的コンテンツとしてレポジトリで公開

28 「日本語格助詞データベース」および「日本語文型バンク」の使い方を紹介する講習会の開催。

6年目（2027年度）：

29 見出しの執筆・校閲方法、用例のアノテーション方式再検討、必要に応じて修正、それに伴うデータの修正

30 「日本語格助詞データベース」および「日本語文型バンク」の構築・公開に向けて、見出しの執筆・校閲方法、用例のアノテーション方式などを検討し、決定する。

31 和語動詞（約200語）の見出し作成・校閲

32 文型（約200件）の見出し作成・校閲

33 プロジェクト主催の研究集会、学会などで研究成果の発表、学術誌への論文の投稿を行う。

34 構築されたデータを静的コンテンツとしてレポジトリで公開

35 「日本語格助詞データベース」および「日本語文型バンク」の使い方を紹介する講習会の開催。

II. 令和5年度の活動

令和5年度予算額 9,955千円

1. 共同利用・共同研究に関する計画

データベース等の構築（アクティビティ）

(1) 「日本語格助詞データベース」

① R4年度で執筆・校閲が完成した176見出し(1056語義)の用例に含まれる格助詞に意味役割のアノテーションの進め方について打ち合わせを行い（2023年5月22日@神戸大学）、アノテーション作業を進めた。その過程で見出しの執筆上の課題や意味役割アノテーション作業上の課題が見えてきた。これらの課題の解決に向けて見出し執筆班と意味役割アノテーション班の合同打ち合わせを行い

（2023年10月8日@神戸大学）、見出し執筆方針およびアノテーション方式を改良した。この改良に伴い、前年度完成した176見出しおよびそのアノテーションを見直すことになった。この見直し作業を、2024年9月末までに完成させる予定。

②新たに和語動詞210語を選定し、見出し執筆作業が年度末に完成した(496語義)。R4年度で執筆・校閲が完成した176見出し(1056語義)およびR5年度で執筆・校閲が完成した210見出し(496語義)、合計386見出し（1552語義）の意味役割アノテーション作業をR6年度中に完成させる予定。

③上記①の改良を受けて、完成したデータの公開作業を次年度に持ち越すことになった。

(2) 「日本語文型バンク」

①R4年度で執筆した文型342見出し（初中級284見出し、中上級の文型58見出し）の校閲作業を進め、完成させた。校閲作業を受けての修正・データの確定・公開作業をR6年度に持ち越す。

②新たに250文型を選定し、見出し執筆作業を進め、完成させた。校閲作業、また、校閲を受けてのデータ修正・確定・公開作業を次年度に持ち越す。また、第2の執筆班を新たに立ち上げ、100文型を選定し、見出し執筆作業を進め、96件を完成させた。今年度は合計346見出しの執筆を完成させることができた。

③上記①および②の校閲作業・修正作業を R6 年度に持ち越す。

公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム（アウトプット）

(1) 研究成果を以下の研究発表会で発表した。

マダドナーめぐみ, 関かおる, 尾沼玄也, 砂川有里子 (2023) 「てにをはプロジェクト – 語義の立て方並びに例文作成についての考察 –」 @第 36 回日本語教育連絡会議ヴィータウタス・マグヌス大学（リトアニア）（2023 年 8 月 24 日）

(2) 本プロジェクト関連の他の研究を 4 件（国内 2 件, 海外 2 件）発表した。

2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

総研大や連携大学院等の協定に基づく授業担当等

(1) 総研大の授業を担当し, 言語類型論の事例研究を紹介した。

プロジェクト非常勤研究員の雇用

(1) プロジェクト非常勤研究員として若手の研究者を 1 名雇用し, 意味役割アノテーション方式の決定, 改良作業およびアノテーション作業に参画させた。

大学院生, 学振 PD 等のプロジェクトへの参加

(1) 大学院生をプロジェクトへ参加させ, アノテーション作業の機会を与えた。

3. 地域・社会との連携に関する計画

特になし

4. グローバル化に関する計画

特になし

5. その他

(1) インドでのフィールドワークの際以下の通り NINJAL チュートリアル（6 件）を企画・実施した。

・NINJAL チュートリアル(2023 年 8 月 7 日): 日本語教師・日本語学習者向け (Japanese section, Department of Foreign Languages, Savitribai Phule Pune University (SPPU), Pune, India と共催)

“Teaching and Learning Japanese Verbs and Particles: From a Contrastive Perspective with Some Indian Languages”

・NINJAL チュートリアル(2023 年 8 月 8 日): 日本語教師・日本語学習者向け (Department of Japanese language, Tilak Maharashtra Vidyapeeth, Pune, India と共催)

“Teaching and Learning Japanese Verbs and Particles: From a Contrastive Perspective with Some Indian Languages”

・NINJAL チュートリアル(2023 年 8 月 12 日): 言語学関係者向け (Dept. of Linguistics, Deccan College (Deemed to be University), Pune, India と共催)

“Development of Japanese treebank: NPCMJ (NINJAL Parsed Corpus of Modern Japanese).”

・NINJAL チュートリアル (2024 年 2 月 22 日): 日本語教師・日本語学習者向け (Department of Foreign Languages, Savitribai Phule Pune University (SPPU), Pune, Maharashtra State, India.)

“Steps in and tips for conducting research on Japan studies and Japanese language.”

“When, why and how Japanese language studies (JLS) started in Western India: Tracing the history through documentary evidence. ”

- “How to tell the difference between “tsumetai” and “samui”?: The types and systems of temperature vocabulary.”
- NINJAL チュートリアル (2024 年 2 月 23 日): 日本語教師・日本語学習者向け (Department of Japanese at Tilak Maharashtra Vidyapeeth (TMV), Pune, Maharashtra State, India.)
 - “Steps in and tips for conducting research on Japan studies and Japanese language.”
 - “When, why and how Japanese language studies (JLS) started in Western India: Tracing the history through documentary evidence. ”
 - “How to tell the difference between “tsumetai” and “samui”?: The types and systems of temperature vocabulary.”
 - NINJAL チュートリアル(2024 年 3 月 18 日): 言語学関係者向け (Dept. of Linguistics, Deccan College (Deemed to be University), Pune, India と共催)
 - “Classifier and Gender marking in Konkani: A nominalization perspective.”
- (2) 国際交流基金ニューデリー事務所と連携して、インドにおける日本語教育史に関する論文の編集作業を進めた。

「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」 評価報告

令和5年度の評価

《評価結果》

計画を上回って実施している

本プロジェクトは、下記のサブプロジェクトと、これらをまとめあげる統括サブプロジェクトから構成される。

- ・学習者の辞書資源使用の実態調査
- ・言語資源の空間接続
- ・学習者用辞書資源の構築
- ・語彙資源ポータル拡張
- ・学習者用「日本語機能語バンク」の構築

各サブプロジェクトの語彙資源の構築は概ね計画通り順調に進んでいる。また統括サブプロジェクトに関して日本語学会秋季大会のワークショップ「コーパスと語彙資源の連携」にてシンポジウム・講習会を実施し、プロジェクトで構築する語彙資源について利用法とともに発信したことも評価できる。

《評価項目》

1. 共同利用・共同研究について

「語彙資源統括」として、『日本国語大辞典』とUniDicの対応付けを行い、UniDicデータベースに見出し語として15575語彙素、18406書字形に及ぶ追加登録を行ったことは評価できる。また、言語資源の空間接続として進められた言語地図のデータ作成や、複数短単位対応版の分類語彙表の構築・公開、また「Web茶まめ」を更新し新しいUniDicに対応したバージョンを公開するなど、共同利用・共同研究をより一層充実させており、予定を上回る成果を上げた。

2. 教育・人材育成について

サブプロジェクトの「学習者用辞書資源の構築」と「学習者用「日本語機能語バンク」の構築」では、日本語教育に寄与できるようなデータベースの構築を着実に進めており、公開により学習者が利用可能となることが期待される。また既存のデータベースの利用法について、セミナーなどを定期的に行い、大学院生レベルの学生に集中的にスキルを身につけさせる機会を提供していることも評価できる。より多くの利用者に活用してもらえよう、データベースを利用した具体的な研究例・分析例についてサンプルを添えて説明する機会などがあると良い。

3. 社会連携・社会貢献について

専門性の高い各サブプロジェクトは、いかに社会連携・社会貢献できるのかが課題である。話題のChatGPTが既存の情報を集める能力を備えるように、日本の民間の研究およびデータ、他の言語資源情報（たとえば国会図書館デジタルコレクション）を吸収可能な装置（プラットフォーム）の構築も、統合という意味で検討する必要がある。

4. 国際連携・国際発信について

国際連携・国際発信については、「学習者の辞書資源使用の実態調査」サブプロジェクトにおいて、

海外調査の予定を前倒してデータを収集したことに加え、海外の共同研究員を中心とする分科会を7回開催したり、韓国、中国、台湾、ベトナム、英国、ドイツの大学や機関に属する研究者とも連携をとりながら調査を実施したりするなど、国際連携の枠組みの中でデータ整備を進めたことが評価でき、グローバル化に関する計画で予定を上回って実施したと認められる。

5. その他特記事項

本研究プロジェクトの目的に達するために、今後も引き続き各サブプロジェクトが連携し研究を確実に推し進めてほしい。

「実証的な理論・対照言語学の推進」自己点検評価報告

プロジェクト名：実証的な理論・対照言語学の推進

プロジェクトリーダー：浅原 正幸

令和5年度プロジェクト全体自己評価

全項目の総合	B
1. 共同利用・共同研究に関する計画	B
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	B
3. 地域・社会との連携に関する計画	B
4. グローバル化に関する計画	B

I. 計画期間内の概要

1. プロジェクト全体の6年間の計画

認知言語学や生成文法などの理論的研究や類型論的研究においては、伝統的に話者の内省や直観に基づく個別研究が方法論的に主流だったが、近年その方法論の見直しが各理論、各分野で急速に進んでいる。具体的には、理論的考察にコーパス資料、実験データ、フィールド調査などを多角的に組み合わせて言語研究の中心的課題に取り組む、新たな実証的方法論を模索する動きが世界的に加速化している。本プロジェクトでは、音韻、意味、形態・統語という言語研究の中心的三分野における理論的・類型論的な研究の核心的課題に取り組む、このような世界的潮流における最先端の研究を参照しつつ、それを先導する研究を進める。具体的には、言語学と隣接分野、あるいは言語学の複数の下位分野の知見を融合する形で研究を進めるサブプロジェクト4件と、自然言語処理の知見を活かしてそのような研究に資する言語資源を開発するプロジェクト1件を、それぞれの独自性を保ちつつも相互に連携させて展開することで、国内外の言語研究の最前線に貢献することを目指す。

個別の課題に取り組む4つのプロジェクトは、イントネーションの構造の言語間・方言間変異（イントネーションP）、体言化・名詞修飾構造の形態・統語・意味的類型（体言化P）、状態変化述語の意味構造（述語の意味論P）、統語変換操作の理論言語学における位置づけ（計算言語学P）という、音韻、意味、形態・統語のそれぞれの分野における鍵となる概念の定義そのものを再考察することを目的としている。この目的のために、個々のプロジェクトは、解明の対象である概念に迫るために最適な分野横断的手法を複数組み合わせた多角的なアプローチを採用することで研究を進める。具体的には、イントネーションPでは、コーパス構築とフィールド調査、体言化Pではフィールド調査と文献資料調査、述語の意味文法Pではビデオ実験とコーパス調査、計算言語学Pではコーパス構築と計算論的モデリングを中心的な手法として採用する。これらの具体的な課題に取り組むサブプロジェクトと連動し、それを後方支援するアノテーションPでは、既存のコーパスで手薄だが、言語資源に基づく言語の科学的研究をより一層進めるために必要となるタイプの言語資源の構築に注力する。プロジェクト全体で開催する合同の研究会やサブプロジェクト間での共同研究や言語資源活用のノウハウの共有を通して、サブプロジェクト間の連携を強めて研究推進の相乗効果を得ることを模索する。

II. 令和5年度の活動

令和5年度予算総額 31,699 千円

【理論対照統括】

- ・継続して Evidence-based Linguistics Workshop を開催するとともに、言語学フェス 2024 を共催した。2024 年 8 月に開催予定の Oxford 大学・神戸大学国際シンポジウムの共催の準備を進めた。

【アノテーション】

- ・『現代日本語書き言葉均衡コーパス』『日本経済新聞記事オープンコーパス』のアノテーションデータを整備した。ジャーナル論文 4 件・紀要論文 2 件・招待論文 1 件・学会記事 1 件・査読付き国際会議発表 5 件。

【イントネーション】

- ・フィールドワークを通じて南琉球八重山語の韻律調査を複数回行った。
- ・音声学系国際学会で 1 件の口頭発表を行った。
- ・日本言語学会で琉球語諸方言に関する公開ワークショップを行った。

【計算言語学】

- ・日本語比較構文アノテーションデータの公開に向けて作業を進めた。査読付き英語論文 1 本。

【体言化】

- ・体言化プロジェクトは、前年度に引き続き、諸言語の体言化・類別詞・性標示に関するデータを収集するために、インド (23 名)、インドネシア (8 名)、アメリカ (文法書や他の文献に基づく調査)、ペルー (10 名) でフィールドワーク・文献調査を実施した。また、今まで国内外で収集したデータの分析を進め、研究成果を英語版の論文 (2 件) の形でとりまとめ、著名な研究雑誌およびハンドブックに投稿した (現在印刷中)。

【述語の意味と文法に関する実証的類型論】

- ・状態変化動詞に関するデータ収集と研究発表、移動動詞に関する成果出版、および格標識に関するデータ収集と発表を行った。具体的には、英文論文集 i) A cross-linguistic perspectives on motion event descriptions, Vol. 1 (Mouton) の原稿提出に向けた最終作業と、ii) Revisiting Deixis in Motion-Event Descriptions (John Benjamins) の編集を行った。英文ブックチャプター 1 件、査読付き国際会議発表 3 件、国内学会発表 2 件。

プロジェクト名：実証的な理論・対照言語学の推進

サブプロジェクト名：理論対照統括

サブプロジェクトリーダー：浅原 正幸

令和5年度サブプロジェクト自己評価

全項目の総合		B
	1. 共同利用・共同研究に関する計画	B
	2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	B
	3. 地域・社会との連携に関する計画	B
	4. グローバル化に関する計画	B

I. 計画期間内の概要

1. 目的及び特色

科学的根拠に基づく実証的な理論的研究を進め、言語学のオープンサイエンス化を目標として、データの整備・公開を進める。データの整備・公開にあたってはサブプロジェクトメンバーで相互に協力して進め、言語学の多様な理論の多角的な検証体制を確立する。さらには理論・対照言語学におけるデータの共用手法について検討を進める。

また、理論言語学・対照言語学のオープンサイエンス化を推進する取組として、研究資料のオープンアクセス化に必要な施策を講じ、全所的な共同研究発表会の中で言語学分野におけるオープンサイエンスの普及に努める。共同研究発表会の開催に際しては、他のプロジェクトや広報室と連携して、他分野の研究者が参加可能な学際的・分野横断的な企画を進める。

2. 年次計画（6年間のロードマップ）

年次計画（6年間のロードマップ）

- 2022年 共同研究発表会 開催（神戸大学と共同）
- 2023年 共同研究発表会 開催（神戸大学と共同）
- 2024年 共同研究発表会 開催（神戸大学と共同）
- 2025年 共同研究発表会 開催（神戸大学と共同）
- 2026年 共同研究発表会 開催（神戸大学と共同）
- 2027年 共同研究発表会 開催（神戸大学と共同）

- ほかに国際シンポジウムを神戸大学と Oxford と共同で開催予定（6年間で2-3回程度）。

II. 令和5年度の活動

令和5年度予算額 2,840 千円

1. 共同利用・共同研究に関する計画

国内外の大学や研究機関との組織的な連携等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 神戸大学大学院人文学研究科との学術交流に関する協定書に基づき、神戸大学と連携して9/14-9/15にELW2023を開催した。
- (2) 神戸大学と連携して、2024年夏に神戸大学にて開催予定のOxford大との国際シンポジウムについて準備を進めた。

他のプロジェクトとの合同の活動等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 理論対照の各サブプロジェクトの後方支援を実施。

公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム（アウトプット）

- (1) 神戸大学大学院人文学研究科との学術交流に関する協定書に基づき、神戸大学と連携して 9/14-9/15 に ELW2023 を開催した（再掲）。

書籍・論文等による研究成果の公表（アウトプット）

- (1) Evidence-based Linguistics Workshop 2023 発表論文集を編纂。
<https://doi.org/10.15084/0002000055>

2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

若手研究者への発表の機会の提供

- (1) 神戸大学と連携して、2024 年 8 月に神戸大学にて開催予定の Oxford 大との国際シンポジウムについて準備を進めた（再掲）。

若手研究者への研究費・発表旅費の支援

- (1) Evidence-based Linguistics Workshop 2023 に参加する若手研究者の旅費を支援。

若手研究者向けのチュートリアル等

- (1) 言語処理学会第 30 回年次大会にてランチタイム企画として「論文誌『自然言語処理』投稿の手引き」を企画（2024/03/14）。

3. 地域・社会との連携に関する計画

地域・社会との連携

- (1) 2024/01/20 開催，言語学フェスを共催。
- (2) 2024/03 開催，言語処理学会第 30 回年次大会プラチナスポンサー。

研究成果の社会への還元

- (1) Evidence-based Linguistics Workshop 2023 発表論文集を編纂
<https://doi.org/10.15084/0002000055>（再掲）

4. グローバル化に関する計画

海外の大学との連携等

- (1) 神戸大学と連携して、2025 年 3 月に神戸大学にて開催予定の Oxford 大との国際シンポジウムについて準備を進めた（再掲）。

国際シンポジウムの開催

- (1) 神戸大学と連携して、2025 年 3 月に神戸大学にて開催予定の Oxford 大との国際シンポジウムについて準備を進めた（再掲）。

プロジェクト名：実証的な理論・対照言語学の推進

サブプロジェクト名：アノテーションデータを用いた実証的計算心理言語学

サブプロジェクトリーダー：浅原 正幸

令和5年度サブプロジェクト自己評価

全項目の総合	B
1. 共同利用・共同研究に関する計画	B
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	B
3. 地域・社会との連携に関する計画	B
4. グローバル化に関する計画	B

I. 計画期間内の概要

1. 目的及び特色

第2期：国立国語研究所基幹型共同研究プロジェクト「コーパスアノテーションの基礎研究」（H21(2009)年10月～H27(2015)年9月）と第3期：国立国語研究所コーパス基礎研究プロジェクト「コーパスアノテーションの拡張・包括・自動化に関する基礎研究」（H28(2016)年4月～R4(2022年3月）（1500千円/年）を継承し、アノテーションデータの共有化・共同開発およびアノテーションデータに基づく、理論・対照研究を進める。具体的には統語班・意味班・認知班の3つに分かれて以下のことを進める。

国語研で過去に構築した形容詞・動詞「記述的研究」データに基づく、実証的な統語・意味研究の展開
統語研究において、体系的な語彙意味論に基づく大規模言語資源が求められている。他言語においては WordNet に基づき、FrameNet と呼ばれる体系的な語彙フレームが構築されている。日本語でも日本語フレームネットの研究が進められているが、英語の翻訳に基づく日本語ワードネットの利用は、日本語の語彙フレームを構成するにあたって語義の粒度が適切でないという問題点があった。一方、国立国語研究所においては、1964年に「分類語彙表」（国立国語研究所 1964）を刊行して以来、形容詞の結合価（西尾 1972）・動詞の結合価（宮島 1972）・比喻表現の結合の分析（中村 1977）などの大規模な日本語記述的研究が進められてきた。これらの研究は紙のカードに基づくものであり、現在は出版物として残されているのみである。これらを電子化し、現在のコーパスなどと対照させることで、日本語の統語研究の発展が見込まれる。

Universal Dependencies による多言語言語処理・言語類型論研究と Enhanced Dependencies

世界規模のオープンプロジェクトとして Universal Dependencies が進められている。延べ300人以上の研究者が参画し、90言語以上150のツリーバンクが整備され、多言語言語処理・言語類型論研究における基礎的な言語資源として世界的に評価されている (<https://universaldependencies.org/>)。この研究プロジェクトの特色として、言語横断的な形態・統語論的アノテーション基準を策定するための議論が、オープンソースソフトウェア開発のプラットフォームである GitHub 上 (<https://github.com/universaldependencies/docs/issues>) でやり取りされ、issues にあげられている1つ1つの議論が言語類型論的に重要な公開研究資源となっている。

国立国語研究所は2014年から同プロジェクトに参画し、日本語の Universal Dependencies 関連言語資源の整備を統括するとともに、国内の研究者の取りまとめを進めてきた（浅原ほか 2019）。

同プロジェクトにおいて、Enhanced Dependencies として、意味的な結合価のアノテーションの議論が行われ、近年言語横断的な proposition bank の整備が求められており、議論が活発化している。

言語認識過程の言語資源化

言語資源整備において、電子化した言語資源に対してアノテーションを行うことで言語の生成過程の研究が進めてきた。一方、近年、言語を刺激として呈示した際の言語解釈のアンケート・読み時間・事象関連電位・脳活動データなど、被験者の反応をデータ化する言語認識過程を言語資源化する試みが進められている。一方、日本語において、言語認識過程を言語資源化した事例は依然として少ない。

2. 年次計画（6年間のロードマップ）

- 2022 年 意味班によるアノテーションデータの公開
- 2023 年 統語班によるアノテーションデータの公開
- 2024 年 意味班によるアノテーションデータの公開
- 2025 年 統語班によるアノテーションデータの公開
- 2026 年 認知班による実験環境の整備
- 2027 年 認知班による実験環境の整備

II. 令和5年度の活動

令和5年度予算額 4,500 千円

1. 共同利用・共同研究に関する計画

フィールド調査・実験等（アクティビティ）

- (1) COVID-19 の状況を見て、実験環境の整備を進める計画であったが、予算の制約上、計画を進めることができなかった。

データベース等の構築（アクティビティ）

- (1) 「日本経済新聞記事オープンコーパス」に対するアノテーションを進めた。
(メタデータ・語義情報・読み時間・印象評定情報)

国内外の大学や研究機関との組織的な連携等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 要望がなかったためにインターンシップの受入はなかったが、東京農工大学の修士課程学生とともに国際会議発表を1件行った。

調査データ・データベース等公開（アウトプット）

- (1) 「日本経済新聞記事オープンコーパス」は2023年3月に公開した。追加情報を継続して整備している。

公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム（アウトプット）

- (1) 「各班のテーマに即した研究発表会を企画」という計画については、研究発表会を企画できなかった。

書籍・論文等による研究成果の公表（アウトプット）

- (1) ジャーナル論文4件・紀要論文2件・招待論文1件・学会記事1件・査読付き国際会議発表5件。

データベース等に関する講習会・講演会（アウトプット）

- (1) 2023/07/12 東京外国語大学国際日本学研究院 NINJAL ユニット講演会
『日本語歴史コーパス』に対する分類語彙表番号アノテーション
- (2) 2023/11/05 NINJAL シンポジウム
『現代日本語書き言葉均衡コーパス』のメタデータ
- (3) 2023/11/19 中山大學學術フォーラム「Digital Humanities × Classical Studies」
日本語歴史コーパスに対する分類語彙表番号情報アノテーション
- (4) 2023/12/13 東京外国語大学国際日本学研究院 NINJAL ユニット講演会
分布意味論に基づく言語研究

(5) 2024/02/01 立命館大学講演会

分布意味論入門

データベース等を使った研究成果・利用実績（アウトカム）

(1) <https://masayu-a.github.io/anno/> にて以下を公開。

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』分類語彙表番号アノテーション

<https://bccwj-data.ninjal.ac.jp/mod/folder/view.php?id=24>

『日本語歴史コーパス』分類語彙表番号アノテーション

<https://github.com/masayu-a/CHJ-WLSP>

『日本語日常会話コーパス』分類語彙表番号アノテーション

<https://cejc-data.ninjal.ac.jp/mod/folder/view.php?id=506>

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』分類語彙表番号アノテーション(助動詞用法つき)

<https://github.com/masayu-a/BCCWJ-WLSP-AUX-OT>

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』短単位語彙表（分類語彙表番号つき）

<https://github.com/masayu-a/BCCWJ-WSD-frequency/>

『日本語日常会話コーパス』短単位語彙表（分類語彙表番号つき）

<https://github.com/masayu-a/CEJC-WSD-frequency>

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』時間情報アノテーション BCCWJ-TimeBank

<https://bccwj-data.ninjal.ac.jp/mod/folder/view.php?id=23>

機能表現辞書「つつじ」に対する単語親密度情報

<https://github.com/masayu-a/TSUTSUJI-familiarity>

常用漢字親密度情報

<https://github.com/masayu-a/KANJI-familiarity>

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』小説下位分類情報 BCCWJ-PB9X3meta

<https://github.com/masayu-a/BCCWJ-PB9X3meta/>

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』新聞記事データ記事境界情報 BCCWJ-PNmeta

<https://github.com/masayu-a/BCCWJ-PNmeta/>

2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

特別共同利用研究員の受け入れ

(1) 要望がなかったためにインターンシップの受入はなかったが、東京農工大学の修士課程学生とともに国際会議発表を1件行った（再掲）

総研大や連携大学院等の協定に基づく授業担当等

(1) 東京外国語大学 授業担当「コーパス言語学入門」「心理言語学入門」

プロジェクト非常勤研究員の雇用

(1) プロジェクト費・科研費でプロジェクト非常勤研究員を2人雇用していたが、1人は2023年7月に国立大学に研究員として就職、もう1人は2024年4月に国立工業高等専門学校に就職予定である。

大学院生、学振PD等のプロジェクトへの参加

(1) 学振RPD1人を受け入れたが、2024年1月より国立大学に准教授として就職した。

3. 地域・社会との連携に関する計画

産業界との連携

(1) 企業との共同研究6件を実施した。

地域・社会との連携

- (1) 言語処理学会論文誌副編集長
- (2) 日本言語学会大会運営委員
- (3) 言語処理学会 30 周年記念事業委員会委員

研究成果の社会への還元

- (1) 企業との共同研究プロジェクトによる成果物を以下のとおり発信した。
 - SB Intuitions 社
共同で行った研究について、第一著者が 情報処理学会 NL 研第 258 回研究会にて、若手奨励賞を受賞(2023 年 12 月)
 - 株式会社リクルート共同研究プロジェクト
SIGDIAL にて 1 件発表
 - ホンダリサーチインスティテュート社 共同研究プロジェクト
PACLIC にて 1 件発表
共同で行った研究について、言語処理学会第 30 回年次大会にて、優秀発表賞を受賞(2024 年 3 月)

4. グローバル化に関する計画

海外の大学との連携等

- (1) Universal Dependencies の枠組で、情報交換を継続して実施した。

国際シンポジウムの開催

- (1) 1st International Workshop on Ancient Language Processing (ALP) at RANLP, Program Committee member
- (2) The 2024 Joint International Conference on Computational Linguistics, Language Resources and Evaluation (LREC-COLING 2024), Program Committee member
- (3) 2024 Annual Conference of the North American Chapter of the Association for Computational Linguistics (NAACL 2024), Senior Area Chair (SAC) : Resources and Evaluation

英語による研究成果の発信等

- (1) 査読付き国際会議発表 5 件

プロジェクト名：実証的な理論・対照言語学の推進

サブプロジェクト名：日本語・琉球語諸方言におけるイントネーションの多様性解明のための実証的研究

サブプロジェクトリーダー：五十嵐 陽介

令和5年度サブプロジェクト自己評価

全項目の総合	B
1. 共同利用・共同研究に関する計画	B
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	B
3. 地域・社会との連携に関する計画	B
4. グローバル化に関する計画	B

I. 計画期間内の概要

1. 目的及び特色

日本語共通語のイントネーション研究は世界的に見ても高い水準にある。それに対して日本語・琉球語諸方言のイントネーション研究はまだ始まったばかりであり、ほぼ未開拓の分野と言える。諸方言のアクセントを扱う研究は数多く、それによって日本語・琉球語のアクセントは多様性に富むものであることが明らかにされている。語レベルの韻律現象の多様性を勘案すれば、諸方言における文レベルの韻律現象すなわちイントネーションにも多様性が観察されることが期待される。それを解明し、一般言語学・言語類型論の視点から検討することは、韻律現象の理論的研究に大きく貢献することが予想される。

共時的研究の最終目標として、日本語・琉球語諸方言のイントネーション体系の多様性を明らかにし、それを一般言語学・言語類型論の視点から検討し、日本語・琉球語諸方言の研究から、世界諸言語を対象とした理論的研究に貢献することを設定する。通時的研究の最終目標として、祖語の韻律体系を再建し、祖語の体系が現代諸方言の韻律体系へと多様化する過程を明らかにすることを設定する。

第4期の目標は、イントネーション体系、特に句末音調と韻律句形成の多様性を、フィールドワークを通じて収集したデータおよび方言コーパスの分析に基づいて実証的に解明し、その結果を一般言語学・言語類型論の視点から検討することで、世界の諸言語を対象とした理論的研究に貢献することにある。

2. 年次計画（6年間のロードマップ）

	目標	実施計画
2022(R4) 年度	・ 共通の調査票を作成する。 ・ 調査票に基づいた方言データ収集を開始する。	4月～9月 共通の調査票の作成 4月～3月 方言データ収集 9月 シンポジウム「プロソディを通して見る社会とコミュニケーション」共催
2022.4 ～2023.3	・ 調査結果の初期報告を国内学会で行う。 ・ コーパス講習会を開催する ・ 『広島大学日本語電話会話コーパス』(COTCO-H) 構築作業を2時間分完了する。	3月 『広島大学日本語電話会話コーパス』(COTCO-H) 構築作業2時間分完了 時期未定 コーパス講習会 時期未定 フィールドワークチュートリアル 時期未定 共同研究員発表会（×2回）

2023 (R5) 年度 2023. 4 ～2024. 3	・共通の調査票を改良する。 ・調査票に基づいた方言データ収集を継続する。 ・韻律に関する発表を国際学会で行う。 ・文レベルの韻律現象に関するワークショップを日本音声学会で開催する。 ・COTCO-H 構築作業を 4 時間分完了する。	4 月～3 月 調査票改良 4 月～3 月 方言データ収集 5 月 日琉諸語韻律体系の書籍 (Brill 社) プロポーザル提出 7 月 日本音声学会ワークショップ企画書提出 8 月 国際学会 (ICPhS) で成果発表 9 月 日本音声学会ワークショップ開催 3 月 COTCO-H 構築作業計 4 時間分完了 時期未定 共同研究員発表会 (× 2 回)
2024 (R6) 年度 2024. 4 ～2025. 3	・調査票に基づいた方言データ収集を継続する。 ・調査結果の初期報告を国内・国際学会で行う。 ・COTCO-H 構築作業を 6 時間分完了する。	4 月～3 月 方言データ収集 5 月 (予定) 国際学会 (Speech Prosody) で成果発表 9 月 国内学会で成果発表 3 月 COTCO-H 構築作業計 6 時間分完了 時期未定 フィールドワークチュートリアル 時期未定 共同研究員発表会 (× 2 回)
2025 (R7) 年度 (前半) 2025. 4 ～2026. 3	・調査票に基づいた方言データ収集を継続する。 ・国内学会でワークショップを開催する。 ・音声データ公開する。 ・COTCO-H 構築作業を 8 時間分完了し公開する。 ・コーパスに関する書籍を出版する	4 月～3 月 方言データ収集 9 月 国内学会でワークショップ開催 3 月 共通の調査票を用いて収集された発話の音声データ公開 3 月 COTCO-H 構築作業計 8 時間分完了 同コーパス 8 時間分公開 時期未定 コーパスに関するシリーズ書籍のうち 1 冊 (「設計・構築編」) 出版 時期未定 フィールドワークチュートリアル 時期未定 共同研究員発表会 (× 2 回)
2026 (R8) 年度 2026. 4 ～2027. 3	・国内・国際学会で成果発表する。 ・COTCO-H 構築作業を 10 時間分完了し公開する。	5 月 (予定) 国際学会 (Speech Prosody) で成果発表 9 月 国内学会研究発表 3 月 『広大電話会話コーパス』構築作業計 10 時間分完了 時期未定 フィールドワークチュートリアル 時期未定 共同研究員発表会 (× 2 回)
2027 (R9) 年度 (前半) 2027. 4 ～2027. 9	- 論文集 (書籍) を出版する。 ・COTCO-H 構築作業を 11 時間分完了し、公開する。	9 月 国内学会研究発表 3 月 『広大電話会話コーパス』構築作業計 11 時間分完了 同コーパス 11 時間分公開 時期未定 フィールドワークチュートリアル 時期未定 共同研究員発表会 (× 2 回)

II. 令和5年度の活動

令和5年度予算額 2,199 千円

1. 共同利用・共同研究に関する計画

フィールド調査・実験等（アクティビティ）

- (1) 八重山諸島（石垣島・西表島）および宮古諸島で現地調査を行った。

データベース等の構築（アクティビティ）

- (1) 科研費基盤研究(A) (23H00007)「日本語諸方言の形態素解析用辞書の構築と活用」(代表：小木曾智信)との協働で、『広島大学日本語電話会話コーパス』の形態素情報の再解析と、方言形態素解析用辞書の構築作業を開始した。

<https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-23H00007/>

他のプロジェクトとの合同の活動等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 6月10日と3月17日に、「消滅危機言語の保存研究」（リーダー：山田）と共同で、「危機言語の保存と琉球諸語のプロソディー」合同研究発表会を計2回開催した。

https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20230610a/（第1回）

https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20240317a/（第2回）

公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム（アウトプット）

- (1) 国際学会 ICPhS（プラハ，2023年8月7日-11日）で中国語方言の韻律体系に関する発表を行った。

<https://guarant.cz/icphs2023/488.pdf>（予稿集）

- (2) 日本言語学会第167回大会（11月12日）にて、科研費基盤研究(B) (20H01259)「南琉球宮古諸方言のアクセントに関する調査研究」（代表：新田哲夫）との共催で、公開ワークショップ「宮古・八重山諸島のアクセント研究の新展開：その韻律単位と類型」を開催した。

https://www.ls-japan.org/modules/news/news_doc/program-lsj167ja-231020.pdf（大会プログラム：C 会場のワークショップ）

書籍・論文等による研究成果の公表（アウトプット）

- (1) 琉球諸語アクセントの定量分析の必要性に関する論文を公表した。

<https://www.hituzi.co.jp/hituzibooks/ISBN978-4-8234-1198-4.htm>（目次）。

2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

総研大や連携大学院等の協定に基づく授業担当等

- (1) 総研大で授業を担当し、さらに指導学生1名を主指導教員として指導した。後者については、指導学生が日本言語学会第167回大会（2023年11月11日）にて研究成果の発表を行った。

https://www.ls-japan.org/modules/news/news_doc/program-lsj167ja-231020.pdf

（大会プログラム：[B-1] の口頭発表）

- (2) クロスアポイントメントに基づく東京外国語大学学部授業 Japan Studies（前期・後期）を担当した。

プロジェクト非常勤研究員の雇用

- (1) 必要な作業を行う作業者は、科研費基盤研究(A) (23H00007)「日本語諸方言の形態素解析用辞書の構築と活用」（代表：小木曾智信）の科研費を用いて雇用したため、プロジェクト経費では雇用は行わなかった。

大学院生、学振PD等のプロジェクトへの参加

- (1) 40歳未満31名、35歳以下24名がプロジェクト共同研究員としてプロジェクトに参加した。

若手研究者への発表の機会の提供

- (1) 「他のプロジェクトとの合同の活動等」に記載の通り開催した

若手研究者への研究費・発表旅費の支援

- (1) 共同研究者かつ大学院生 1 名に対して国際学会参加旅費の支援を行った。
- (2) 共同研究員かつ大学院生 1 名に対して、九州大学で行われたフィールドワーク講習参加のための旅費支援を行った。

若手研究者向けのチュートリアル等

- (1) 3 月 16 日に「消滅危機言語の保存研究」（リーダー：山田）と共同で、「初心者向け：基礎語彙調査チュートリアル」を行った。

3. 地域・社会との連携に関する計画

地域・社会との連携

- (1) 2023 年 10 月 24 日に国立国語研究所と沖縄県宮古島市の間に、宮古島の地域文化の保全と振興を目的として、消滅危機にある宮古島の言語に関する学術交流、その他の諸活動の発展に向けた連携・協力協定を締結した。

<https://kotobaken.jp/release/news-231120-02/>（国語研プレスリリース）

<https://www.miyakomainichi.com/news/news-177953/>（2023 年 10 月 25 日付宮古毎日新聞）

<https://www.okinawatimes.co.jp/articles/-/1251106>（2023 年 11 月 5 日付沖縄タイムス）

4. グローバル化に関する計画

海外の研究者の受入

- (1) 日本学術振興会外国人研究者招へい事業外国人特別研究員（欧米短期・推薦）の受け入れ（令和 4 年度から継続で 1 名、令和 5 年度に新たに 1 名、計 2 名）を行った。
- (2) ミュンヘン大学（Ludwig-Maximilians-Universität München）から外来研究員を 1 名受け入れた

英語による研究成果の発信等

- (1) 「公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム」に記載の通りに実施した。

プロジェクト名：実証的な理論・対照言語学の推進

サブプロジェクト名：計算言語学的手法による理論言語学の実証的な方法論の開拓

サブプロジェクトリーダー：窪田 悠介

令和5年度サブプロジェクト自己評価

全項目の総合	B
1. 共同利用・共同研究に関する計画	C
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	A
3. 地域・社会との連携に関する計画	—
4. グローバル化に関する計画	B

I. 計画期間内の概要

1. 目的及び特色

自然言語処理のリソースや計算言語学的手法を援用した理論言語学研究の学際化が進展しているが、人間の言語能力の解明という、理論言語学における核心的問題に直接取り組む研究はまだ生まれていない。言語習得や（計算機でなく人間による）意味解釈や統語構造の解釈のプロセスの解明に計算言語学的手法を援用する研究も出始めてはいるが、これらはまだ端緒についたばかりであり、本格的な研究となっていない。本研究では、理論言語学研究に対して新たな経験科学としての基盤を与えるために、計算言語学的手法を援用した方法論を模索し提案することを目的とする。

計算言語学的手法を援用した理論言語学研究が国内外の研究でここ 10 年ほどで急速に進展した。特に、本研究の研究代表者によるカテゴリ文法を用いた統語論・意味論の理論構築の研究によって、計算言語学的手法を用いて理論言語学研究に形式的基盤を与える研究が進み、生成文法理論の統語論・意味論の数学的基礎づけに関する見通しがほぼ立った。また、別の研究の流れとして、自然言語処理の手法を応用的な技術として用いて、計算論的モデリングの手法で人間による言語処理や言語獲得の性質などの解明を試みる研究が国内外で進んでいる。国語研においても、コーパス開発センターでの日本語 web コーパスや、web コーパスを用いた大規模な単語分散表現の開発、また、理論・対照研究領域における第3期の2件の基幹プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」と「統語・意味解析コーパスの開発と言語研究」との関連で、いくつかの学際的な言語研究の試みが進められた。

このように、一見したところ理論言語学研究の学際化が進展したが、分野融合的な研究の真の発展のためには、乗り越えるべきいくつかの課題がある。本研究では、その中の一つに焦点を絞って突破口を探る。上述のように、理論言語学と計算言語学の接点には、大きく分けて、分野融合的な研究としての理論的基盤に関する「基礎研究」と、この「基礎研究」の成果を応用して、より直接的に言語学の側の理論研究の問題に取り組む「応用研究」の二つの流れがある。現状では、言語学と自然言語処理という二つの分野における、前者の自然科学的指向性と後者の工学的指向性との間の齟齬により、この二つのタイプの研究がうまく連携していない。（いまだ存在しないが、現在の自然言語処理技術に基づけば十分に実現可能な）生成文法理論の成果をより直接的に反映する言語資源を開発できれば、両者を統合し、理論言語学研究の中心的課題の解明に正面から迫る研究が遂行可能になると考えられる。また、理論言語学の中核的問題に自然言語処理技術を活用する方法を示すことで、自然言語処理研究の分野に対しても、現在十分に注目されていないが取り組むべき重要な課題を示すことが可能になる。

具体的な課題として、主に以下の研究に取り組む。

1. 「変換文法のパーザ」の開発と、その理論研究への応用
2. 意味解釈をアノテーションしたコーパスの構築とその理論研究への応用

人間の言語能力の解明ということを目指したとき、現在までの理論研究、計算言語学研究の双方で見落とされがちであった観点として、自然言語の言語表現は単に統語的な分布の特徴を持つ体系であるだけでなく、意味を表す記号システムであるという点がある。理論装置としての「統語変換」の概念の核心には、表面的に観察される単語列と、その単語列が表す意味との対応関係を簡潔に捉える、というところに眼目がある。

このため、構成的に意味表示を構築できる変換文法のパーザを開発すれば、それを用いて言語の意味解釈の側面にまで踏み込んだ言語能力の計算論的モデリングが可能となる。本研究では、変換文法のパーザを開発し、それを用いて言語資源を援用した言語習得や言語処理の計算機でのシミュレーションを行うことで、統語変換という理論装置の性質の解明を構成論的に行うことを目標にする。

2. 年次計画（6年間のロードマップ）

研究期間を前半3年と後半3年に分け、それぞれの期間でリソースの構築とリソースを利用した研究に重点的に取り組む。後者は前者に依存するので、リソース構築の段階から、応用研究のための先行研究の調査やパイロット的な実験を開始し、段階を踏んで本格的なモデリング研究に取り組んでいく。後半3年に行うモデリングの研究においては、前半3年で開発する変換文法のパーザを用いた研究に中心的に取り組む。

2022

- 英文啓蒙書執筆（最終段階）
- 和文啓蒙書編集
- 言語資源構築（開始）
- モデリング研究（予備調査）

2023

- 言語資源構築（2022 から継続）
- 英文啓蒙書出版
- 和文啓蒙書出版
- 国際学会発表（言語資源）

2024

- 言語資源の構築を完了する
- モデリング研究のパイロットを行う
- 前年度に出版した教科書を用いて ESSLI で講義

2025

- モデリング研究を進める
- 国内学会で関連研究に関するワークショップを開催する（言語学会または言語処理学会）

2026

- モデリング研究の予備的成果を、国内学会、国際学会で発表する
- 最終的な成果をまとめた論文を執筆、学術誌に投稿

2027

- 論文出版

II. 令和5年度の活動

令和5年度予算額 3,200 千円

1. 共同利用・共同研究に関する計画

データベース等の構築（アクティビティ）

- (1) 日本語比較文の意味情報をアノテーションしたコーパス（4000 文）を公開する準備を進めた。（令和6年度前半には公開予定。）

書籍・論文等による研究成果の公表（アウトプット）

- (1) 論文集（和書）の原稿を揃え，出版社に入稿した。（令和6年度前半には刊行予定。）

2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

プロジェクト非常勤研究員の雇用

- (1) 非常勤技術補佐員 1 名（週 2 日 12 時間）【若手支援】

大学院生，学振 PD 等のプロジェクトへの参加

- (1) 大学院生 1 名を共同研究に参加させ，言語処理学会で共著論文を発表した。当該論文が委員特別賞を受賞した。【若手支援】
- (2) 特任助教と共著の査読付き英語論文が 1 本出版された（グローバル 4. 2）。【若手支援】
- (3) 九州大学集中講義（2024 年 2 月に実施）において執筆中の英文啓蒙書（カテゴリ文法の教科書）のドラフトを教科書に用いた。

3. 地域・社会との連携に関する計画

特になし

4. グローバル化に関する計画

英語による研究成果の発信等

- (1-1) 共同研究員 1 名と共著の論文が 1 本国際ジャーナルに掲載された。
- (1-2) 特任助教と共著の査読付き英語論文が 1 本出版された。
- (2) 国際学会での研究発表は行わなかった（研究の進捗がやや遅れているためタイミングを逃したのと，研究代表者が個人的理由のため海外出張が困難である時期だったため）。

プロジェクト名：実証的な理論・対照言語学の推進

サブプロジェクト名：体言化の実証的な言語類型論—理論・フィールドワーク・歴史・方言の観点から—

サブプロジェクトリーダー：プラシャント・パルデシ

令和5年度サブプロジェクト自己評価

全項目の総合	A
1. 共同利用・共同研究に関する計画	A
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	B
3. 地域・社会との連携に関する計画	—
4. グローバル化に関する計画	A

I. 計画期間内の概要

1. 目的及び特色

現行の類型論的な研究では、性標示は主名詞による一致現象とし（Corbett）、類別詞も同様に主名詞の分類が本務と考えられていて（Aikhenvald）、これら二つの現象と体言化現象との共通性がすくい取られていない。これに対して、Shibatani の研究によって、多くの言語における類別詞の体言化機能が指摘され、また性標示による名詞派生などを考慮に入れると、数詞、指示詞、属格、形容詞、動詞連体・分詞形にみられる類別詞・性標示も体言化の観点から見直し得る可能性が浮かび上がってくる。

このプロジェクトでは、従来個別に取り扱われてきた、体言化(nominalization)、類別詞(classifier)、性標示(gender)の現象を体言化の類型という全く新しい視点から追究し、この三領域を統一的に取り扱える理論的枠組みを開発する。アジアに広く拡散する類別詞ならびに印欧語その他に見られる性標示という旧来の研究課題に体言化現象の類型という立場から新しい息吹を吹き込むと同時に、高次元の統一的理論化を目指す。

研究体制としてはコアメンバー数名と国外研究員が中心となってチームを結成し、フィールドワークを通しての一次的なデータ収集に当たり、また、理論と言語資料の研究・分析に従事する。体言化、類別詞、性標示現象が顕著な言語を専攻する若手研究者、大学院生を特定し、定期的に研究発表者（準メンバー）として招き、コアメンバー専門以外の言語の資料を収集するとともに、若手研究者の育成に尽力する。研究成果を国際シンポジウムならびに英文刊行物（論文、論文集）をとおして広く発信し、日本語研究・言語類型論研究両方面における国際的な貢献を目指す。

日本語研究の国際化とならんで、本プロジェクトは国語研の目標の一つである若手研究者の育成にも尽力する。具体的には、次の4つの事業により若手研究者の育成を図る。

(a) 大学院生や若手研究者を共同研究員または非常勤研究員として迎え、研究指導を行う。特に、類別詞や性標示が重要な文法機能を果たす言語を専攻する大学院生や若手研究者を随時研究会に招き、理論や分析方法の討議を通して、それぞれの研究の進展に資するようにする。

(b) 国内外から学振の特別研究員や国語研の特別共同利用研究員を積極的に受け入れる。

(c) 大学院生向けのチュートリアルを企画する。

(d) 国際シンポジウム等において若手研究者に研究発表の場を提供する（あわせて旅費支援などの経済的支援も行う）。

本プロジェクトでは文献によるデータ収集に加えて、必要なデータを国内外でフィールドワークを通じて収集する。オープンサイエンスの方針に沿って、収集したデータを共同研究者間で共有する。また、データに

基づく体言化の実証的な言語類型論的な研究を行い、研究成果を国内外に発信する。

2. 年次計画（6年間のロードマップ）

6年間のロードマップは以下の通りである。

1年目（2022年度）：諸言語の体言化・類別詞・性標示に関するデータを収集し、類型論的な研究をすすめる。具体的には

- ①文献によるデータ収集と整理
- ②フィールドワークの準備：取集されるべきデータタイプの整理
- ③フィールドワークの実施（海外2回，国内1回）
- ④研究集会の開催（2回）（フィールドワークの成果報告，問題のあるデータの討議・検討）
- ⑤類別詞と性標示を取り込んだ体言化理論の展開，研究成果の発表

2年目（2023年度）：前年度に引き続き，諸言語の体言化・類別詞・性標示に関するデータを収集し，類型論的な研究をすすめる。具体的には

- ①前年度のフィールドワークによるデータの分析
- ②フィールドワークの実施（海外2回，国内1回）
- ③研究集会の開催（2回）（フィールドワークの成果報告，問題のあるデータの討議・検討）
- ④類別詞と性標示を取り込んだ体言化理論の展開，研究成果の発表

3年目（2024年度）：前年度に引き続き，諸言語の体言化・類別詞・性標示に関するデータを収集し，類型論的な研究をすすめる。具体的には

- ①前年度のフィールドワークによるデータの分析
- ②フィールドワークの実施（海外2回，国内1回）
- ③研究集会の開催（2回）（フィールドワークの成果報告，問題のあるデータの討議・検討）
- ④類別詞と性標示を取り込んだ体言化理論の展開，研究成果の発表
- ⑤コアメンバーによる担当言語（群）における研究成果のまとめと論文の作成
- ⑥研究成果を踏まえた，国際シンポジウムの準備

4年目（2025年度）：

- ①国内外から発表者を招聘し，国際シンポジウムの開催
- ②国際シンポジウムでの報告に基づいて論文の作成
- ③論文の内部・外部査読および改訂作業
- ④主要出版社からの論文集の出版の準備（出版社との交渉，出版契約の締結，編集作業の開始など）。

5年目（2026年度）：

- ①フィールドワークの実施（海外2回，国内1回）
- ②体言化類型論の枠組みの構築完了
- ③新理論の実質データによる最終検証
- ④研究成果の発表
- ⑤主要出版社からの論文集の出版

6年目（2027年度）：

- ①内外の個別言語専門誌への投稿論文の作成
- ②内外の類型論関係専門誌への理論的研究論文の作成
- ③国内外で公開シンポジウム・ワークショップの実施
- ④研究成果の発表

II. 令和5年度の活動

令和5年度予算額 12,480 千円

1. 共同利用・共同研究に関する計画

フィールド調査・実験等（アクティビティ）

(1) 前年度に引き続き、諸言語の体言化・類別詞・性標示に関するデータを収集するために、インド（2023/7/24-2023/8/4, データ提供者：23名）、インドネシア（2023/8/7-2023/8/15, データ提供者：8名）、アメリカ（2023/9/1-2023/9/14, 文法書や他の文献に基づく調査）、ペルー（2023/12/19-2024/1/6, データ提供者：10名）、インド（2024/2/20-2024/3/20, データ提供者：17名）でフィールドワーク・文献調査を実施した。国内調査について今年度は調査を実施せず、前年度収集したデータを分析し、論文執筆を行った。

国内外の大学や研究機関との組織的な連携等（アクティビティ・アウトプット）

(1) 交流協定を締結してデカン・カレッジ・ポスト・グラデュエイト・アンド・リサーチ・インスティテュート（Deccan College Post Graduate and Research Institute）およびインド工科大学マドラス校（Indian Institute of Technology Madras）と連携してインドにおけるフィールドワークの企画・準備を進め、2回実施した。

第1回目：2023/7/24-2023/8/4, データ提供者：23名, 実施地点：Udupi/Manipal, Mangalore, Pune, 言語名：Kannada 語, Tulu 語, Konkani 語, Koraga 語, Arebhashe 語。このフィールドワークにデカン・カレッジ・ポスト・グラデュエイト・アンド・リサーチ・インスティテュートの若手研究者（修士課程）Husendra Sethia 氏を参加させ、フィールドワークの手法、データの整理・分析などのノウハウを伝えた。【若手支援】

第2回目：2024/2/20-2024/3/20, データ提供者：17名, 実施地点：Pernem, Canacona (Goa), Mangalore (Karnataka), Kozhikode (Kerala), Pune (Maharashtra), 言語名：Konkani 語 (Goa 州, Karnataka 州, Kerala 州で話される諸方言), Tulu 語, Koraga 語, Arebhashe 語。このフィールドワークにデカン・カレッジ・ポスト・グラデュエイト・アンド・リサーチ・インスティテュートの若手研究者（修士課程終了者）Govind Mopkar 氏を Goa 州における調査に参加させ、フィールドワークの手法、データの整理・分析などのノウハウを伝えた。【若手支援】

公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム（アウトプット）

(1) 国内で公開の研究発表会を4回（2023. 5. 27@神戸大学, 2023. 7. 15@東京大学本郷キャンパス, 2023. 10. 21 および 2023. 10. 28 オンラインで）開催し、フィールドワークで収集したデータに基づいて研究発表（7件）を行った。また、海外で学会での基調講演（Masayoshi Shibatani@ “International workshop: Classifiers in Asian Languages”, Zhejiang University, Hangzhou, China May 20, 2023.）, 招待講演（Masayoshi Shibatani@ASIAN PERSPECTIVES ON FUNCTIONAL LINGUISTICS, UCLA, USA, October 21, 2023; Masayoshi Shibatani and Prashant Pardeshi@ University of New Mexico, September 9, 2023; Pontifical Catholic University of Peru, Lima, 31 Dec. 2023）, 国際学会での口頭発表（Masayoshi Shibatani, Prashant Pardeshi, and Haowen Jiang@ “International workshop: Classifiers in Asian Languages”, Zhejiang University, Hangzhou, China May 20, 2023, Prashant Pardeshi, Gitanjali Bez, Niranjana Uppoor, Masayoshi Shibatani@The 37th South Asian Languages Analysis Roundtable (SALA-37), 6th Oct. 2023, online）の形で研究成果を発表した。

書籍・論文等による研究成果の公表（アウトプット）

(1) 類別詞と性標示を取り込んだ体言化理論の展開し、研究成果を論文（2件）の形でまとめて投稿した。2件のうち、1件が刊行済みで、もう1件は印刷中である。詳細は「英語による研究成果の発信等」参照。

2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

総研大や連携大学院等の協定に基づく授業担当等

- (1) 総研大学の言語類型論の授業を担当した。

プロジェクト非常勤研究員の雇用

- (1) 若手研究者（1名）をプロジェクト非常勤研究員として雇用し、ベンガル語、コルタ語における類別詞に関する研究について指導した。

大学院生、学振PD等のプロジェクトへの参加

- (1) 本プロジェクトでは大学院生、学振PD等のプロジェクトへ参画させ、プロジェクト研究会への参加・発表などの機会を与えている。ペルーでのフィールドワークに学振PDを参画させた。

若手研究者への発表の機会の提供

- (1) 今年度は若手研究者の発表が実現できなかった。

若手研究者への研究費・発表旅費の支援

- (1) 若手研究者への研究費・発表旅費を支援する機会はなかった。

3. 地域・社会との連携に関する計画

特になし

4. グローバル化に関する計画

海外の研究者の受入

- (1) 令和5年度は学振の特別研究員や国語研の特別共同利用研究員の希望はなかった。

海外の大学との連携等

- (1) 交流協定を締結してデカン・カレッジ・ポスト・グラデュエイト・アンド・リサーチ・インスティテュート (Deccan College Post Graduate and Research Institute) およびインド工科大学マドラス校 (Indian Institute of Technology Madras) と連携してインドにおけるフィールドワークの企画・準備を進め、2回実施した。詳細は「国内外の大学や研究機関との組織的な連携等」を参照。

英語による研究成果の発信等

- (1) 以下の研究成果を英語で論文を執筆し、投稿した。
 - ①Masayoshi Shibatani (2023). Towards dynamic functional typology—Classifiers, genders, and nominalization—. In Historical Linguistics in Japan No.12, 1-52. Japan Society for Historical Linguistics. https://doi.org/10.57565/hlj.12.0_1_3
 - ②Masayoshi Shibatani and Tetsuo Nitta (In press) Japonic nominalizations in dialectal perspective. Kibe, Nobuko, Tetsuo Nitta, and Kan Sasaki (eds.), In Handbook of Japanese Dialects. Mouton de Gruyter.

5. その他

- (1) インドでのフィールドワークの際以下のNINJAL チュートリアル（6件）を企画・実施した。
 - ①NINJAL チュートリアル(2023年8月7日): 日本語教師・日本語学習者向け (Japanese section, Department of Foreign Languages, Savitribai Phule Pune University (SPPU), Pune, India と共催)
"Teaching and Learning Japanese Verbs and Particles: From a Contrastive Perspective with Some Indian Languages"
 - ②NINJAL チュートリアル(2023年8月8日): 日本語教師・日本語学習者向け (Department of Japanese language, Tilak Maharashtra Vidyapeeth, Pune, India と共催)

“Teaching and Learning Japanese Verbs and Particles: From a Contrastive Perspective with Some Indian Languages”

③NINJAL チュートリアル(2023 年 8 月 12 日): 言語学関係者向け(Dept. of Linguistics, Deccan College (Deemed to be University), Pune, India と共催)

“Development of Japanese treebank: NPCMJ (NINJAL Parsed Corpus of Modern Japanese).”

④NINJAL チュートリアル (2024 年 2 月 22 日): 日本語教師・日本語学習者向け (Department of Foreign Languages, Savitribai Phule Pune University (SPPU), Pune, Maharashtra State, India.)

“Steps in and tips for conducting research on Japan studies and Japanese language.”

“When, why and how Japanese language studies (JLS) started in Western India: Tracing the history through documentary evidence. ”

“How to tell the difference between “tsumetai” and “samui”?: The types and systems of temperature vocabulary.”

⑤NINJAL チュートリアル (2024 年 2 月 23 日): 日本語教師・日本語学習者向け (Department of Japanese at Tilak Maharashtra Vidyapeeth (TMV), Pune, Maharashtra State, India.)

“Steps in and tips for conducting research on Japan studies and Japanese language.”

“When, why and how Japanese language studies (JLS) started in Western India: Tracing the history through documentary evidence. ”

“How to tell the difference between “tsumetai” and “samui”?: The types and systems of temperature vocabulary.”

⑥NINJAL チュートリアル(2024 年 3 月 18 日): 言語学関係者向け(Dept. of Linguistics, Deccan College (Deemed to be University), Pune, India と共催)

“Classifier and Gender marking in Konkani: A nominalization perspective.”

(2) 国際交流基金ニューデリー事務所と連携して、インドにおける日本語教育史に関する論文の編集作業を進めた。

プロジェクト名：実証的な理論・対照言語学の推進
 サブプロジェクト名：述語の意味と文法に関する実証的類型論
 サブプロジェクトリーダー：松本 曜

令和5年度サブプロジェクト自己評価

全項目の総合	B
1. 共同利用・共同研究に関する計画	B
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	A
3. 地域・社会との連携に関する計画	B
4. グローバル化に関する計画	B

I. 計画期間内の概要

1. 目的及び特色

このプロジェクトでは、認知言語学的な立場から述語の意味と文法に関する類型的研究を行う。特に注目するのは、移動、状態変化、人間行為に関する動詞などの述語表現の意味と文法である。それを考察することにより、1) 言語においてどのような現象を動詞で表現し、どのような現象をそれ以外で表現するのか、2) 動詞で表現する際、どのような要素をその意味に組み込むのか、3) 動詞と関わる文法現象はどのような性質を持っているのか、の3つの課題に取り組む。

1) と 2) は、国際的に注目されている研究課題であり、今まで主に移動事象を表す動詞に関して研究が行われ、言語間で組織的な変異が見られることが指摘されてきた (Talmy, Levin など)。このプロジェクトでは、移動事象のみならず、他の事象を表す動詞にも広げて、幅広い言語で意味の研究を行う。語彙調査、実験調査、コーパス調査などを用いて、〈入る〉〈走る〉などの移動動詞、及び〈壊す〉〈叩く〉などの使役状態変化や人間行為の表現に関して統一的で実証的な調査を行い、諸言語がどのようにそれらを言語化するのかについて比較研究を進める。特に日本語については、第3期の研究成果をベースにして、詳細な研究を行う。それにより、諸言語に見られる変異について今までに提案されてきた仮説の検証を行い、包括的に諸事象をカバーできる新たな提案を目指す。

3) については、動詞にマークされる文法的現象の1つとして動詞の敬語化を取り上げる。動詞における敬語マーキングは一部の言語にしか見られない現象であり、それがどのような形でその言語の性質と関わるかは興味深い課題である。このプロジェクトでは、連携プロジェクトの中で明らかにされてきた韓国語における動詞の敬語化に関する神経言語学的研究の成果を出発点として、研究を行う。

本プロジェクトはコーパスと実験を用いる実証的な手法で類型論研究を行う点に特色がある。動詞の意味に関する研究は、多くの言語を統一的に比較する点に特徴がある。またオープンサイエンスの方針に沿って、データの公開を進めながら研究成果を公表する点も大きな特徴である。具体的には主張の根拠となる諸言語の動詞のリストなどを公表する。

最終的な目的は、実証性の高い研究手法を用いて、動詞という品詞の性質を明らかにすることである。さらに、言語間の組織的な変異のパターンを見出し、その中で日本語の特色を明らかにする。

3年目での終了は、代表者の退職予定日のためである。

2. 年次計画（3年間のロードマップ）

2022 年度

諸言語の動詞に関するデータを収集し、類型論的研究をすすめる。

A cross-linguistic perspectives on motion event descriptions（仮題），Vol. 1 の編集を終え，原稿を提出する。また，Vol. 2 の編集を行う。

移動動詞に関する国際学会(NAMED 2022)を京都大学で開催し，海外のプロジェクトとの交流を図る。

2023 年度

移動動詞と状態変化動詞についての類型論的研究をすすめる。

日本語における動詞と共起する格助詞の変化に関わる研究を行う。

A cross-linguistic perspectives on motion event descriptions, Vol. 1 の出版に向けた最終作業（2022年度のやり残しと提出後の作業）を行う。また，Vol. 2 の編集を行う。

状態変化動詞に関わる国際学会発表を行う。

2024 年

研究成果を論文などにまとめる。

A cross-linguistic perspectives on motion event descriptions, Vol. 1 を出版する。また，Vol. 2 の原稿を提出する。

移動動詞と状態変化動詞についての日本語論文集を刊行する。

日本語の動詞に関するデータベースを完成させる。また，諸言語の動詞に関するデータベースを完成させる。

II. 令和5年度の活動

令和5年度予算額 6,480 千円

1. 共同利用・共同研究に関する計画

フィールド調査・実験等（アクティビティ）

- (1) 日本語，英語，中国語について，調査対象の状態変化に関する言語表現のデータ収集を行った。また，イロカノ語，バスク語，ネワール語，タイ語についても行った。
- (2) 比較基準を表すカラ格に関する調査を行った。

データベース等の構築（アクティビティ）

- (1) 状態変化を表す日本語動詞類のリストを作成した。

国内外の大学や研究機関との組織的な連携等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 英語論文集の論文3点についてコメントをもらう形で，フランスの研究プロジェクトとの交流を行った。

公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム（アウトプット）

- (1) 公開の研究発表会を3回行った。

書籍・論文等による研究成果の公表（アウトプット）

- (1) A cross-linguistic perspectives on motion event descriptions vol 1 の原稿を提出した。また，Revisiting Deixis in Motion-Event Descriptions の編集を行った。
- (2) 英文のブックチャプター論文を1点，オープンアクセスで出版した。【オープンアクセス】
- (3) 国内学会において日本語で2回（日本言語学会，MLF 2024），国際学会において英語で4回（ICLC 16, LSA 2024, IMD 2024, EuroSLA 2023）の研究発表を行った。

2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

プロジェクト非常勤研究員の雇用

- (1) 若手研究者を2名プロジェクト非常勤研究員として雇用した。またRAとして1名を雇用した。【若手支援】

大学院生、学振PD等のプロジェクトへの参加

- (1) 大学院生7名、及び学振PD1名をプロジェクトメンバーとした。【若手支援】

若手研究者への発表の機会の提供

- (1) 若手研究者に、LSA 2024と日本言語学会大会での発表に旅費支援を行った。【若手支援】

3. 地域・社会との連携に関する計画

特になし

4. グローバル化に関する計画

海外の大学との連携等

- (1) 英語論文集の論文3点についてコメントをもらう形で、フランスの研究プロジェクトとの交流を行った。

英語による研究成果の発信等

- (1) 国際会議 ICLC 16, LSA 2024, IMD 2024, EuroSLA にて英語での研究発表を行った。
- (2) NINJAL シンポジウムとして開催した NAMED 2022 の発表論文集である, Revisiting Deixis in Motion-Event Descriptions の編集を行った。
- (3) 英文のブックチャプター論文を1点出版した。

「実証的な理論・対照言語学の推進」評価報告

令和5年度の評価

《評価結果》

計画どおりに実施している

令和4年度用の評価シートでも述べたように、本プロジェクトには5つの実証的なサブプロジェクトがある。それぞれ大きく異なったアプローチを用いて、言語学の分野全般に渡る記述対象が取り上げられており、評価委員としては、そのバランスが大変すぐれている点を高く評価している。その結果、令和4年度の自己評価は「B」であったが、評価委員としては、全体の評価を「A」とした。

令和5年度も引き続き、どのサブプロジェクトも着実かつ精力的に活動を行っており、令和4年度と比べて特に見劣りする点があるわけではないが、令和5年度の自己評価も「B」であったことも鑑み、令和5年度の全体的な評価としては「B」としておく。今後も堅実な活動を期待している。

《評価項目》

1. 共同利用・共同研究について

それぞれのサブプロジェクトで精力的に活動が展開されている。

サブプロジェクトによって規模は異なるが、それぞれ様々な研究集会を開催している。発表論文集も刊行される学会から、講演会・合同研究発表会など、それぞれのテーマにふさわしい形態での研究交流が図られている。

また、コーパスやアノテーションなどのデータ公開も着実に進められている。当然、サブプロジェクトの性質によってその量には違いがあるが、今後も各サブプロジェクトにはデータ公開を中心軸にすえて進めていっていただきたいと考えている。もちろんデータ分析も重要であるが、その材料となるデータが公開されていて初めて、他の観点からの分析への道も開かれるものであり、個人で公開することが簡単ではない大規模データこそ、国立国語研究所がになうべき重要な課題だと思う。

研究成果の公表についても、おおむね順調だという印象を持った。

2. 教育・人材育成について

サブプロジェクトにより記載の仕方が異なるため、全体の人数は明らかではなかったが、それぞれのサブプロジェクトにおいて、若手研究者を積極的に雇用し、経済的にも支援をしていることが読み取れる。非常勤研究員の身分は不安定ではあるだろうが、さまざまなバックグラウンドの研究者と交流を持つことができる貴重な機会だと思われるので、多くの若手研究者が国立国語研究所の活動に加わることが可能な態勢を目指してもらいたいと思う。可能ならば、各サブプロジェクトで共通の表形式で、若手研究者の関わり方が量的に示されるような表があってもいいと思った。

3. 社会連携・社会貢献について

地域・社会との連携のみならず、産業界との連携も持続的に行われていることが大変素晴らしいことであると考えます。各大学でも産業界との連携は求められているが、なかなかノウハウが無く取り掛かれない場合も多いだろうと推測される。相手先との守秘義務もあるだろうので、簡単に情報公開できないかもしれないが、ぜひ、産業界との連携の始め方・持続するためのコツなど、何らかの形で大学教員にその経験を広めていただければと願っている。

4. 国際連携・国際発信について

それぞれのサブプロジェクトにふさわしい形で、海外の大学との連携や国際シンポジウム等が実施されている。海外の研究者も受け入れており、英語による研究成果の発信も積極的に行われている。国際的な発信の意識は、すでに十分根付いているという印象を得た。

5. その他特記事項

一般読者向きの記事の執筆やコーパスユーザーに対する講習会など、アカデミック界以外に対する発信についても意識されており、望ましいことだと考える。

「消滅危機言語の保存研究」自己点検評価報告

プロジェクト名：消滅危機言語の保存研究

プロジェクトリーダー：山田 真寛

令和5年度プロジェクト全体自己評価

全項目の総合	A
1. 共同利用・共同研究に関する計画	B
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	A
3. 地域・社会との連携に関する計画	A
4. グローバル化に関する計画	B

I. 計画期間内の概要

1. 目的及び特色

以下4つのサブプロジェクト・主担当者で研究を実施する。

(1) いま話されている日琉語諸方言データの収集

山田, 五十嵐, 共同研究員それぞれ | 担当地域でフィールド調査

国内40地点で調査を行っている3期から継続して、共同研究員が各担当地点で〔語彙、文法記述、談話資料の蓄積〕を進める。第3期プロジェクトを以下3つの観点で発展させる。

- 増やす** 3点セットを拡充し、「日本・琉球語諸方言におけるイントネーションの多様性の解明」プロジェクト（代表 | 五十嵐）や日琉祖語再建・系統関係解明、対照言語学的研究に資するデータなど、特定トピックに関するデータを増やす。
- 深める** 3期までに個別文法現象の記述がある地点は文法スケッチを、文法スケッチがある地点は参照文法を執筆する。
- 広げる** 琉球諸語に比べて不足している本土諸方言に調査対象を広げる。また消滅危機言語の再活性化など、言語の継承保存に資する基礎資料としてのデータ収集も行う。

(2) 過去の諸方言データの電子化

井上, 山田 | 諸方言談話資料の文字化・電子化と公開準備

1977年度から1985年度にかけて行われた「各地方言収集緊急調査」（文化庁）のうち「全国方言談話データベース 日本ふるさとことば集成」（2001～2008、全20巻）で未公開部分の文字化・電子化し公開準備を進める。

(3) オープンサイエンスの促進

セリック, 山田 | アーカイブ

上記1, 2で蓄積されるデータをプロジェクトウェブサイト(<https://kikigengo.ninjal.ac.jp/>)および国立国語研究所リポジトリなどで随時公開する。それぞれのデータ保持者自身がフィールドデータを平易かつ適切にアーカイブするしくみをつくるため、プロジェクトウェブサイトを利用した語彙・文法・談話データベースを改修・増強する。

(4) 消滅危機言語・方言の認知向上や記録保存・継承保存の推進

山田，五十嵐，井上 | イベント

- ・危機言語サミットを文化庁と沖縄県八重山郡与那国町と10月に共催（危機言語コミュニティや社会一般向け）
- ・談話資料電子化チュートリアル（大学院生含む研究者向け）
- ・共同研究員のフィールド調査成果発表会（国内発表会）
- ・その他，言語コミュニティや社会一般に向けて，危機言語の認知向上や公開データへのアクセス・利用促進を目的としたイベントや発信を行う。

2. プロジェクト全体の6年間の計画

上述の4つを以下の方法で毎年度継続して行う。

(1) いま話されている日琉語諸方言データの収集

各共同研究員が担当地域で主に対面調査によるフィールド調査を行い〔文法記述，語彙，談話資料〕データの収集および，特定トピックに関する調査を行う。

(2) 過去の諸方言データの電子化

第4期3年目までに，選定した地点約90時間分の方言談話資料を電子化して共通語訳を付したテキスト入力を行う。さらに文字化方言と対応する共通語訳・対応部分の音声データ切り出しを行い，談話情報と話者情報のデータベースを作成して「日本語諸方言コーパス（COJADS）」に提供可能なデータとして成型する。作業は『ふるさとことば集成』から継続して行っている外部協力者に依頼する。

(3) オープンサイエンスの促進

共同研究員の調査データを，プロジェクトウェブサイトと国立国語研究所リポジトリで公開する。プロジェクトウェブサイトでは語彙・文法・談話データベースを音声資料とともに公開する。

(4) 消滅危機言語・方言の認知向上や記録保存・継承保存の推進

各共同研究員の調査に応じて毎年度2回研究発表会を行う。また3と関連して，データデポジットに関するワークショップを開催するほか，危機言語・方言サミットを文化庁および開催地の地方自治体と共同で開催する。消滅危機言語研究の裾野を広げるため，若手研究者向けのフィールドワークチュートリアルも行う。

II. 令和5年度の活動

令和5年度予算総額 24,853 千円

1. 共同利用・共同研究に関する計画

フィールド調査・実験等（アクティビティ）

(1) 共同研究員が各自の担当地点でフィールドワークを行い，語彙・文法・談話データを収集した。

11名がフィールドワークの成果をプロジェクト研究会（6/10，3/17）で報告した

（<https://kikigengo.ninjal.ac.jp/event/>）。研究会発表者が寄稿したプロシーディングス『日琉諸語の記述・保存研究 I』（<https://doi.org/10.15084/0002000045>），『日琉諸語の記述・保存研究 II』（<https://doi.org/10.15084/0002000174>）を出版し機関リポジトリで公開した。

データベース等の構築（アクティビティ）

- (1) 語彙データベースを改良し、プロジェクトウェブサイト上で公開しているオンライン辞書の機能を拡充した（3月、<https://kikigengo.ninjal.ac.jp/data/tango/search>）。
- (2) 文法資料データベースは担当する予定だった非常勤研究員2名が常勤職に就き離職したため作成せず、次年度以降に作成する計画に変更した。
- (3) リポジトリで公開されている文化庁談話資料をまとめたウェブページを作成し、音声ファイルを公開した（<https://kikigengo.ninjal.ac.jp/kinkyu/index.html>）。
- (4) 文化庁データ「各地方言収集緊急調査」は以下10地点16 itemsの電子化したテキストと音声区切りファイルをリポジトリ登録・PJ ウェブサイトで公開した。
神奈川県方言談話資料 2 items, 愛知県方言談話資料 1 item, 大阪府方言談話資料 2 items, 岡山県方言談話資料 3 items, 愛媛県方言談話資料 2 items, 福岡県方言談話資料 2 items, 大分県方言談話資料 1 item, 鹿児島県方言談話資料 1 item, 栃木県方言談話資料 1 item, 岐阜県方言談話資料 1 item

国内外の大学や研究機関との組織的な連携等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 米国ハワイ大学マノア校との協定にもとづく研究会・研究打ち合わせ・学生指導として次の4つを実施した。
 - ①米国ハワイ大学マノア校との協定を、ヒロ校を含むハワイ大学全体との協定として更新した。
 - ②米国ハワイ大学マノア校の教員2名（Kamil Deen 教授, Shin Fukuda 准教授）が国立国語研究所を訪問し、所長および教員5名と総研大との連携、Brill 社シリーズ、その他今後の連携事業について議論した（3/26）
 - ③琉球語のフィールドワークを希望する米国ハワイ大学マノア校の学生1名を沖永良部島に招聘し、フィールドワークのサポートを行った（6月）。
 - ④米国ハワイ大学ヒロ校に所属する共同研究員（大原由美子教授）を1か月間（5/26-6/26）外来研究員として招聘し、危機言語の継承保存について議論を重ねた。また彼女をコメンテーターとして非公開の研究会を3名の共同研究員とともに実施し、各自のフィールドでの継承保存研究を進めた。

他のプロジェクトとの合同の活動等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) イントネーションプロジェクト（リーダー | 五十嵐陽介）と共同で、研究発表会を2回開催し（6/10, 3/17）、発表者が投稿したプロシーディングス『日琉諸語の記述・保存研究 I』（<https://doi.org/10.15084/0002000045>）、『日琉諸語の記述・保存研究 II』（<https://doi.org/10.15084/0002000174>）を出版し機関リポジトリで公開した。

異分野の研究者との共同研究・協業等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 社会言語学、言語習得を専門とする共同研究員がそれぞれ1名ずつ加わり、危機言語の継承保存研究を進めた。
- (2) 危機言語サミットで「ブース発表」を設け、日本各地で継承保存を行っている11組（デモンストラーション含む）が取り組みを発表し、来場者と合わせて情報交換を行う機会をつくった。

調査データ・データベース等公開（アウトプット）

- (1) 随時更新している日琉諸語語彙データベースを、プロジェクトウェブサイト（kikigengo.ninjal.ac.jp）で音声付きオンライン辞書として公開した。【重出】
- (2) 研究資料シリーズとして『水納島方言辞典』のアクセント資料の整備を進めた。

公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム（アウトプット）

- (1) イントネーションプロジェクト（リーダー | 五十嵐陽介）と共同で、研究発表会を2回開催した（6/10, 3/17）。【重出】

書籍・論文等による研究成果の公表（アウトプット）

- (1) 研究会発表者が投稿したプロシーディングス『日琉諸語の記述・保存研究 I』
(<https://doi.org/10.15084/0002000045>), 『日琉諸語の記述・保存研究 II』
(<https://doi.org/10.15084/0002000174>) を出版し機関リポジトリで公開した。

データベース等に関する講習会・講演会（アウトプット）

- (1) 「みんなで談話整備プロジェクト文化庁「各地方言収集緊急調査」資料の整備と活用説明会&講習会」(8/26) を開催し、談話資料電子化のチュートリアルを行った。

データベース等を使った研究成果・利用実績（アウトカム）

- (1) 沖永良部語諸方言など、地域言語コミュニティによる語彙収集プロジェクトが収集したデータは、プロジェクトウェブサイト上のオンライン辞書を、データの公開・利用プラットフォームとして活用している。

2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

総研大や連携大学院等の協定に基づく授業担当等

- (1) 山田真寛と五十嵐陽介がフィールド言語学（総研大）を担当した。

プロジェクト非常勤研究員の雇用

- (1) プロジェクト非常勤研究員として3名を雇用し、若手研究者の育成を行った。

大学院生、学振PD等のプロジェクトへの参加

- (1) 4名の大学院生が共同研究員としてプロジェクトに参加している。

若手研究者への発表の機会の提供

- (1) イントネーションプロジェクト（リーダー | 五十嵐陽介）と共同で研究発表会を2回開催し（6/10, 3/17）、若手研究者へ発表機会を提供した。

若手研究者への研究費・発表旅費の支援

- (1) 調査旅費、研究発表会参加旅費、危機言語サミット参加旅費、フィールドワークチュートリアル参加旅費を支援した。

若手研究者向けのチュートリアル等

- (1) 「みんなで談話整備プロジェクト文化庁「各地方言収集緊急調査」資料の整備と活用説明会&講習会」(8/26) を開催し、談話資料電子化のチュートリアルを行った。
- (2) フィールド支援プロジェクトの一部として、学部生と大学院生を対象にフィールドワークチュートリアルを行った。3/16に座学、3/19-21に静岡県葵区井川集落で実習を行った。

3. 地域・社会との連携に関する計画

地域・社会との連携

- (1) 与那国町（沖縄県八重山郡）、文化庁などと共催で「消滅の危機にある言語・方言サミット」を開催した（10/15, 16）。
- (2) 和泊町（鹿児島県大島郡）との連携協力協定にもとづき、玉城集落住民と協働して玉城方言辞典編集チームを立ち上げ、辞典制作を開始した。玉城公民館は辞典制作を含む事業予算を和泊町に申請し、採択された。和泊町文化協会と協働して「宝をつなぐチャレンジ応援事業」（奄美群島広域事務組合）の事業助成金に申請し、採択事業を実施した。和泊町で講演を行った（11/24）。
- (3) 知名町中央公民館講座「しまむにサロン」を開講した（毎月1回時間、通年）。・田皆集落住民と協働して田皆方言辞典編集チームを立ち上げ、辞典制作を開始した。
- (4) フィールド支援プロジェクトの一部として、静岡県葵区井川支所と協働してフィールド調査（3/19-21）とシンポジウム（3/20）を行った。

- (5) 沖縄県宮古島氏と談話資料のデジタル化・アーカイビングを目的とした連携協力協定を締結した。

一般向け講義・講演会・フォーラム等

- (1) 危機言語サミットを文化庁などと共催した (10/15, 16)。
(2) 知名町中央公民館講座を開講した (毎月 1 回 2 時間, 通年)。
(3) 和泊町で講演を行った (11/24)。
(4) 静岡県葵区井川支所でシンポジウム (3/20) を行った。

社会人を対象とするスキルアップの計画等

- (1) 知名町中央公民館講座を開講した (毎月 1 回 2 時間, 通年)。
(2) 和泊町で講演を行った (11/24)。

研究成果の社会への還元

- (1) 危機言語サミットを文化庁などと共催した (10/15, 16)。
(2) 知名町中央公民館講座を開講した (毎月 1 回 2 時間, 通年)。
(3) 和泊町で講演を行った (11/24)。

4. グローバル化に関する計画

海外の研究者の受入

- (1) 海外機関に所属する研究者 1 名を外来研究員として受け入れた (5/26-6/26)。

海外の大学との連携等

- (1) 米国ハワイ大学マノア校との協定にもとづく研究会・研究打ち合わせ・学生指導として上述の 4 つを実施した。詳細は「国内外の大学や研究機関との組織的な連携等」参照。

国際シンポジウムの開催

- (1) NINJAL-UHM Linguistics Workshop を 2022 年 2 月と 2024 年 5 月に開催したため 2023 年度は開催はなし。

5. その他

- (1) 沖永良部島の辞書制作について補足説明する。
- ・沖永良部島の田皆 (知名町) と玉城 (和泊町) の辞書制作は、国内では先例のない消滅危機言語研究の先進的なアウトカムである (知名町公民館講座が主なアウトカムのソース)。先に始まったため比較的進んでいる田皆のケースを説明する。
 - ① 知名町中央公民館講座で言語の記録訓練を学んだ受講生 1 名が、3 名の新話者を誘って調査チームをつくり、チームメンバーに語彙収集の方法を教えた。
 - ② 危機言語 PJ が日琉語諸方言を対象に制作した基礎語彙リストを使って、調査チームがじぶんたちで流暢な母語話者を手配し、基礎語彙約 1000 語を音声付きで収集した。
 - ③ 収集したデータは定期的に危機言語 PJ の語彙データベースチームと電子的に共有し、データベースとして整備ができしだい音声付きオンライン辞書として PJ ウェブサイトで公開した。
 - ④ 基礎語彙収集完了後、PJ リーダーが調査チームに次のステップをいくつか提案した。調査チームと調査に協力してきた流暢な母語話者が編集委員会を立ち上げて議論し、各項目に追加する用例収集を行うことにした。
 - ⑤ 現在は、流暢な母語話者を数名追加した編集委員会が定期的 (月 2 回) に集まり、既収集語彙の確認、用例の作成と検討を行っている。調査チームメンバーがファシリテーターとなり、定例会中に収集するデータの記録と進行管理を行い、メンバーにあったやり方をいろいろ試しながら進めている。

知名町公民館講座で語彙データ収集をテーマに設定し1年実施しただけで、これだけのことが地域言語コミュニティ内で進んだという事実は、言語学者と協働した地域言語コミュニティによる主体的かつ持続可能な言語の保存が不可能ではないことを示唆する。「これだけのこと」とは、自主的にスタート、チーム形成、ピアトレーニング；短期間で基礎語彙収集、音声付き、研究者とデータ共有してDB化、オンライン辞書で公開、逐次更新などを指す。

「消滅危機言語の保存研究」評価報告

令和5年度の評価

《評価結果》

計画を上回って実施している

現在話されている日琉語諸方言データの収集に関して、「増やす」「深める」「広げる」という観点から第3期のプロジェクトの成果を発展させる、という本プロジェクトの目的は、計画を上回って順調に進んでいるように見受けられる。また、共同利用・共同研究、大学院教育・若手研究者育成、地域・社会との連携、グローバル化、いずれも計画どおり、あるいはそれ以上に実施されている。特にアウトプットの面では、極めて積極的に実施されているようである。成果の公開についても、若手育成のためのチュートリアルや地域・社会連携のシンポジウム等イベントの開催についても、計画を上回って実施されているようであり、このことは高く評価できる。なかでも、地域・社会との連携では、単発のイベントだけでなく、一般向けの講座を継続的に行ったり、成果を社会に還元するイベントを開催するなど、これまで作り上げてきた地域との関係をさらに深めているものと思われる。本プロジェクトがこのような活動を今後も引き続き実施していくことが期待される。

以上のことからプロジェクトの活動は、総合的に「計画を上回って実施された」と評価できる。

《評価項目》

1. 共同利用・共同研究について

共同研究員が各自の担当地域でフィールドワークを実施し、その成果を研究会で報告し、さらにプロシーディングスを出版・機関リポジトリで公開している。報告書を見ると、計画されていたアクティビティ「語彙データベースの拡充」、「文法資料データベースの構築」、「文化庁談話資料データベースの構築」のいずれも計画を上回って実施されているようである。国内外の大学と連携した研究会等の開催や研究打合せも複数回にわたって実施されているほか、他のプロジェクトや他機関との研究交流の幅も広がっていることが認められる。その成果についても、積極的に発信・還元していることは高く評価できる。

2. 教育・人材育成について

2023年度は、プロジェクト・メンバーのふたりが、総研大でフィールド言語学の授業を開講している。また、チュートリアルを開催したり、プロジェクトの非常勤研究員として若手研究者3名を雇用したり、共同研究員として大学院生4名をプロジェクトに参加させているなど、直接的に大学院生や若手研究者の教育・育成に携わっている。さらに、研究発表会を開催することで若手研究者に発表の機会を提供したり、調査旅費、研究会やチュートリアル等の参加旅費を支援したりすることで、背後のサポートも手厚く行っている。

チュートリアルについては、計画されていた談話資料の電子化チュートリアルのみならず、フィールドワークチュートリアルも開催している。このチュートリアルは、1日の座学の後に3日間の実習を行うなど、具体的かつ実践的な内容にする工夫がなされている。本プロジェクトが計画を上回って積極的に若手研究者の育成に努めてきたことが見受けられる。

3. 社会連携・社会貢献について

本プロジェクトの最も高く評価できる点が社会連携・社会貢献である。

与那国町や文化庁との危機言語サミットの共催は計画どおりに実施されている。和泊町や知名町との連携協力協定に基づく取り組みの計画についても、辞典製作を開始したり講演会や講座を開催するなど、具体的な活動として実施されている。これらは、研究成果の社会への還元という観点からも意義のある活動だと思われる。さらに、総括にも書いたとおり、単発のイベントだけでなく、毎月一般向けの講座を行うなどの継続的な活動が行われている。このような継続性のある活動は地域連携のあるべき形のように思う。地域にも理解されやすい社会連携・社会貢献が継続的に行われていることは高く評価できる。これらの活動は、いずれも計画を上回って実施されている。さらに、静岡県でのフィールド調査とシンポジウムの開催は、計画にはなかったことであり、計画以上の活動が行われていると考えられる。

4. 国際連携・国際発信について

計画していた海外の研究員の受け入れが実施され、継承保存についての議論が行われたほか、研究会も数度にわたって開催されるなど、受け入れ後にしっかりと共同研究につながっている。米国ハワイ大学との協定についても、先方の教員2名の訪問を受けて連携事業についての具体的な議論を行ったり、先方の学生をフィールド調査に同行させ、フィールド調査のサポートをしたりと、名ばかりの協定ではなく、具体的な活動が行われている。いずれも計画どおりに実施されていると評価できる。また、国際シンポジウムについても次年度の開催に向けて準備が進められている。

5. その他特記事項

- ・辞書作成についての補足説明がなされているが、試行錯誤しながら、進められている様子が見受けられる。完成が期待される。
- ・講演やシンポジウムが多数開催されているが、その具体的な内容について少し説明が欲しかった。

「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」自己点検評価報告

プロジェクト名：多言語・多文化社会における言語問題に関する研究

プロジェクトリーダー：朝日 祥之

令和5年度プロジェクト全体自己評価

全項目の総合	A
1. 共同利用・共同研究に関する計画	A
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	B
3. 地域・社会との連携に関する計画	A
4. グローバル化に関する計画	B

I. 計画期間内の概要

1. 目的及び特色

本プロジェクトは、多言語化が進んだ日本社会で発生している言語問題の中でも、日々の言語生活に欠かせない分野である行政、医療福祉分野における言語問題の所在を明らかにするための社会調査を実施する。その上で言語問題の解決を目指すことを目的とする。

多言語化・多文化による社会変容により、特に行政・医療福祉分野における言語問題が生じている。国立国語研究所においても、「外来語言い換え提案」「病院の言葉」に関するプロジェクト、大規模自然災害をきっかけとして提唱された「やさしい日本語」など、その成果は少なくない。ただし、これらはそれぞれ「国語問題・国語施策」、「日本語問題・日本語施策」のための研究であり、多言語化・多文化した日本社会の言語問題を包括的に捉えることにはならない。本プロジェクトでは、国立国語研究所で実施された「国語・国字・日本人の視点」による言語生活研究の再定義を行い、行政・医療福祉分野における言語問題を把握する。本研究の最終的な目的は、行政、医療福祉分野における言語問題をリアルタイムに捉え、その解決に向けた提言を行うことにある。

本プロジェクトでは、多言語化・多文化による社会変容によって生じた日本社会において、行政と医療福祉の専門家・非専門家のそれぞれに生じている言語問題について、専門家、非専門家双方を対象にした社会調査を実施する。社会調査のデータを公開するとともに、言語問題を把握するための調査の実施、そこで得られたデータを活用した分析を実施する。

なお、実施にあたっては、人間文化研究機構共創先導プロジェクト「コミュニケーション共生科学の創成」、並びに同機構共創先導プロジェクト「ハワイにおける日系社会資料に関する資料調査と社会調査の融合的研究」と連携する。

【研究組織】

本プロジェクトは次のような研究班を組織する。

- ・自治体調査研究班：自治体における言語使用・使用意識に関する社会調査を企画・実施する。
- ・外来語研究班：行政・医療福祉分野における外来語をめぐる今日的な課題を捉えるための実態調査・意識調査を企画・実施する。
- ・言語変異研究班：言語生活の実態から言語問題の所在を的確に捉えるための基礎研究としての言語変異を捉える調査研究を企画・実施する。

- ・言語景観研究班：公共景観を構成する景観（言語景観・音景観）に関する調査研究を企画・実施する。
- ・手話研究班：日本手話・日本語対应手話の使用実態を捉える，そこに内在する言語問題を明らかにするための調査研究を企画・実施する。
- ・言語使用研究班：多言語使用，リテラシーなどの課題についての調査研究を企画・実施する。

【研究成果】

- ・各研究班で実施する社会調査，言語調査，フィールドワークによりデータ収集を行う。社会調査についてはデータ集を刊行し，調査結果をリアルタイムに発信していくと共に調査データの公開を行う。その他の調査で得られた成果は，国内外の会議等での口頭発表，シンポジウムの開催，研究論文の刊行などを通じて発信する。

2. 年次計画（6年間のロードマップ）

	目標	実施計画
2022 (R4) 年度 2022. 4 ～2023. 3	社会調査の企画と実施 資料調査の実施 調査データ・調査報告書 の納品と公開	専門家調査（自治体調査）の設計・実査 文献調査・資料調査（言語問題・リテラシー・多言語使用等） 調査データの公開に向けた準備と公開 年2回，研究発表会の開催
2023 (R5) 年度 2023. 4 ～2024. 3	社会調査の企画と実施 資料調査の実施 調査データ・調査報告書 の納品と公開	専門家調査（医療福祉調査）の設計・実査 文献調査・資料調査（言語問題・リテラシー・多言語使用等） 調査データの公開に向けた準備と公開 年2回，研究発表会の開催 若手育成のためのチュートリアル開催 シンポジウムの開催 調査報告書の刊行
2024 (R6) 年度 2024. 4 ～2025. 3	社会調査の企画と実施 資料調査の実施 調査データ・調査報告書 の納品と公開	言語生活調査（外来語調査・言語使用調査）の設計・実査 文献調査・資料調査（言語問題・リテラシー・多言語使用等） 調査データの公開に向けた準備と公開 年2回，研究発表会の開催 シンポジウムの開催 調査報告書の刊行 社会調査データを活用した研究書の刊行
2025 (R7) 年度 （前半） 2025. 4 ～2026. 3	社会調査の企画と実施 社会調査に基づく研究成 果の公開 研究成果の公表	言語生活調査（言語使用調査）の設計・実査 シンポジウムの開催 年2回，研究発表会の開催 一般講演会（NINJAL フォーラム）の開催 調査報告書の刊行
	暫定評価	

2026 (R8) 年度 2026. 4 ～2027. 3	研究成果のまとめ	研究成果をまとめた研究書の刊行 年 2 回、研究発表会の開催 若手育成のためのチュートリアル開催
2027 (R9) 年度 (前半) 2027. 4 ～2027. 9	最終まとめ	啓蒙書・普及書の刊行 年 1 回、研究発表会の開催

II. 令和 5 年度の活動

令和 5 年度予算額 27,000 千円

1. 共同利用・共同研究に関する計画

フィールド調査・実験等（アクティビティ）

- (1) 日本に居住する外国人とその子弟における日本語・（外国人の場合）彼らの第一言語に見られる言語変異を的確に捉えるためのフィールドワークを 2023 年 7 月より神奈川県愛川町で実施し、日本語による自然発話（17 人分 25.5 時間）、ならびに彼らの第一言語（ブラジルポルトガル語・スペイン語）による自然発話（17 人分、25.5 時間分）データを得た。
- (2) 日本語の現時点での言語変異を的確に捉えるためのフィールドワークを 2023 年 7 月より神奈川県愛川町、静岡県静岡市、群馬県前橋市・高崎市、静岡県磐田市で実施し、自然発話（56 名分、82.5 時間）データを得た。また、日本語に見られるアクセントの体系記述を行うためのフィールドワークを 2023 年 7 月より神奈川県愛川町、群馬県前橋市、静岡県静岡市の生え抜き話者を対象に実施し、12 名から調査データを得た。

国内外の大学や研究機関との組織的な連携等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) オーストリア科学アカデミー・消滅言語文化継承委員会との協定にもとづいた研究打ち合わせを 4 月に行い、今後の計画について協議した。

他のプロジェクトとの合同の活動等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 人間文化研究機構「コミュニケーション共生科学の創成」とは 2023 年 10 月に開催したオンラインシンポジウム「日本のことばを知る・学ぶ」を共同開催した。
- (2) 人間文化研究機構「ハワイにおける日系社会資料に関する資料調査と社会調査の融合的研究」とは言語使用研究班における外国人調査グループでの調査設計をする上での連携を図った。
- (3) 国立国語研究所「定住外国人のよみかき研究」とは本プロジェクトで実施している日本居住の外国人対象の調査研究の企画・設計において助言を得た。
- (4) 科学研究費補助金（基盤研究（C））「難解な感染症関連用語の言い換えや説明の案出と理解促進効果の検証」（課題番号：21K00551）とは「コロナ関連用語に関する意識調査」の企画・設計において連携を図った。

異分野の研究者との共同研究・協業等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) データサイエンスを専門とする研究者と調査データ（自治体調査、コロナ関連用語の意識調査）の分析をともにを行い、その成果を研究発表会（2 月 17 日）で発表してもらった。

調査データ・データベース等公開（アウトプット）

- (1) 令和3年度に実施した日本人・外国人を対象とした社会調査（「日本の多言語多文化状況における言語問題に関するウェブ調査」）のデータ整備を進め、報告書を3月に刊行した（<https://doi.org/10.15084/0002000253>）。
- (2) 令和4年度に全国の住民を対象に実施した「現代日本語における外来語使用実態調査」のデータ整備を進め、3月に報告書の刊行を行った（<https://doi.org/10.15084/0002000252>）。
- (3) 令和4年度に全国の自治体を対象に実施した「行政情報をわかりやすく伝える工夫に関する意識調査（自治体調査）」のデータ整備を行い、報告書の準備を進めた。
- (4-1) 令和5年度に「コロナ関連用語に関する意識調査」を3回（6月、10月、2月）に調査会社に委託することにより実施し調査データの整備を行った。
- (4-2) 「新型コロナ関連用語に対する意識調査（追加調査）」を2023年10月に実施し、調査データの整備を進めた。
- (4-3) 「日本語におけるプロソディ変異に関する実態調査」を札幌市、東京都区、鹿児島市で2024年1月、2月に各地点で20名、計60名を対象に調査会社に委託することにより実施し、調査データの整備を進めた。
- (4-4) 「日本語アクセントにおける実態調査」の継続調査を広島県広島市を対象に調査会社に委託することにより2023年4月に実施し、分析を進めた。その結果を2024年3月に開催された研究発表会で報告してもらった（https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20240317b/）。

公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム（アウトプット）

- (1-1) 手話研究班によるオンラインシンポジウム「日本のことばを知る・学ぶ：手話と日本語とが飛び交う飲食店の日常空間」を2023年10月1日に開催し、シンポジウムには飲食店を経営するろう者3名に登壇してもらった。当日はYouTubeによる配信を行った。イベントには454名の申し込みがあり、当日は最大で222名の視聴者を得た。
- (1-2) 「日本社会におけるダイバーシティ研究の最前線：インクルーシブな社会の実現のために」を2024年2月10日に対面形式により開催し、60名の参加を得た。
- (1-3) プロジェクトの成果を発信するための研究発表会を2024年2月17日と3月17日にオンラインで開催し、それぞれ54名、41名の参加を得た。
- (2) 第18回NINJALフォーラム「国語研の言語生活研究の75年：生きたことばをつかまえる・追跡する調査研究」をハイブリッド形式で2023年12月16日開催し、190名の参加を得た。当時の講演・ディスカッションの録画映像を国語研YouTubeチャンネルより配信している（https://youtu.be/J1E_G42l1BE?si=bKeE9rk21Bh5bZKC）。

書籍・論文等による研究成果の公表（アウトプット）

- (1) 2022年度、2023年度に実施した調査（自治体調査、外来語調査、音韻調査等）で得た調査データを活用した分析結果をまとめた論文を計量国語学、CLSに投稿し、掲載が決まった。

2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

プロジェクト非常勤研究員の雇用

- (1) プロジェクト非常勤研究員を新たに3名雇用し、プロジェクトで実施されている調査（アクセント調査、外国人居住者調査、新型コロナ関連用語意識調査）の企画・実施を担当した。

総研大や連携大学院等の協定に基づく授業担当等

- (1) 総研大での講義（「言語科学概論」「フィールド言語学」）で本プロジェクトで進めている調査手法（言語変異研究法）を紹介した。

大学院生、学振PD等のプロジェクトへの参加

- (1) 大学院生（7名）をプロジェクトに参画させた。プロジェクトでは（1）外国人調査のインタビュー（ブラジルポルトガル語による調査）としてインタビューを担当させた。まこの他にも（2）調査会社による調査データの整備を担当させ、報告書データの整備を行った。その一部を口頭発表させる機会（社会言語科学会）を与えた。

若手研究者への発表の機会の提供

- (1) 国内学会（社会言語科学会）で研究成果の一部について、若手研究者（3名、プロジェクト非常勤研究員）らに共同で口頭発表をする機会を提供した。

3. 地域・社会との連携に関する計画

地域・社会との連携

- (1) フィールドワークで調査対象とした地域（神奈川県愛川町、群馬県前橋市、静岡県静岡市・磐田市）とは、調査対象者の選定を行う上で、教育委員会との連携を図った。
- (2) 定住外国人調査を実施している自治体（群馬県地域創生部ぐんま暮らし・外国人活躍推進課）と連携し、当該自治体により実施された調査データの提供をしてもらった。

4. グローバル化に関する計画

海外の研究者の受入

- (1) 海外の研究者と共同での調査を神奈川県愛川町に居住するブラジル人・ペルー人を対象に2023年7月より実施した。また、静岡県浜松市・磐田市・東京都江戸川区等での実査に向けた調整を現地のコーディネータとともに行った。
- (2) 海外の研究者との月に1回、定例オンラインミーティングを実施した。

英語による研究成果の発信等

- (1) 研究成果（新型コロナウイルス関連用語調査、アクセント習得）を取りまとめたものを英文論文としてCLSに投稿し、掲載が決定した。

「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」 評価報告

令和5年度の評価

《評価結果》

計画どおりに実施している

本共同研究プロジェクトは、多言語化が進む日本社会が直面する言語問題の中から、行政、医療福祉分野における問題の所在を解明するための社会調査を実施し、その解決を目指すことを目的に、6つの研究班を組織して遂行されている。6年計画の2年目に入り、調査の実施、収集したデータの公開、分析とその結果の発表というサイクルは、ひと通り整備された。

4つのサブプロジェクトのうち「共同利用・共同研究に関する計画」の進捗状況は、ほぼ計画どおりであり、自己評価は「A」ではなく「B」が妥当と判断する。これを踏まえ、外部委員評価は「B」とする。以下に個別の項目について問題点を記載するので、今後のプロジェクト運営の参考にしてほしい。

全体的なコメントとして、自己点検報告書には、より具体的な記述を希望する。

《評価項目》

1. 共同利用・共同研究について

神奈川県愛川町に居住する外国人を対象としたフィールドワーク、ならびにそのベースラインとして活用する日本語データ収集を目的として、同町を含む5地点でフィールドワークが行われた。令和3～5年度に実施した調査については、報告書の刊行と準備、およびデータ整備が進んでいる。他プロジェクトと合同の活動、異分野の研究者との協業等も、積極的に実施されている。合計4回開催された公開の研究発表会等のうち、手話研究班によるオンラインシンポジウムに、当事者であるろう者が3名参加したことは、高く評価したい。

一方、オーストリア科学アカデミー・消滅言語文化継承委員会との協定にもとづく研究打ち合わせに関しては、「今後の計画について協議した」との記述があるのみである。順調に推移しているかどうかを評価するには、協議内容の具体的な記載が求められる。

2. 教育・人材育成について

非常勤研究員は計画どおり3名雇用され、プロジェクトの調査を企画・実施した。また、予定の3名を大きく上回る7名の大学院生が参画し、インタビューを担当したほか、報告書データ整備にも従事した。国内学会での口頭発表の機会も与えられている。

昨年も指摘したが、総研大での講義の内容については、内容をさらに詳しく記述することが強く望まれる。

3. 社会連携・社会貢献について

「成果の概要」と「令和5年度の活動（項目ごとの状況）」の記載内容がほぼ同一になっているが、後者にはより詳細、かつ具体的な記載が求められるのではないかと。

「3. 地域・社会との連携に関する計画」には、フィールドワーク対象地域の自治体として、神奈川県愛川町、群馬県前橋市、静岡県静岡市、磐田市が列挙されている。一方、「1. 共同利用・共同研究に関する計画」には、神奈川県愛川町、静岡県静岡市・磐田市、群馬県前橋市・高崎市で教育委員会との連携を図り、調査対象者の選定を行ったと記されている。群馬県高崎市では、このような連携

はなかったとの理解でよいのか。この理解が正しい場合、特段の理由があって連携しなかったのか。

定住外国人調査を行っている自治体から調査データの提供を受け分析を進めた点は、評価できる。今後、他の自治体との連携の可能性も模索してほしい。

4. 国際連携・国際発信について

神奈川県愛川町に居住するブラジル人・ペルー人を対象として、海外研究者との共同調査が始まった。3年目以降の進展に期待したい。研究所の共同研究プロジェクトの中には、他にも地域社会に定住する外国人を対象とするものがある。今後は、このようなプロジェクト間の積極的な連携、横断的な研究活動の推進にも期待したい。

国際誌には、論文が2本投稿されている。引き続き、共同研究の成果を広く世界に発信する努力が重要である。

令和5年度は、国内での研究活動を軌道に乗せることに注力し、それなりの成果を上げていると判断するが、国際連携・国際発信は今後の大きな課題である。多言語化がもたらす言語問題を解決するには、日本以外の国や社会がこのテーマにどのように取り組んできたかという視点が欠かせない。来年度以降、重点的に取り組むことが望まれる

5. その他特記事項

特になし。

「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究」自己点検評価報告

プロジェクト名：多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究

プロジェクトリーダー：小磯 花絵

令和5年度プロジェクト全体自己評価

全項目の総合	A
1. 共同利用・共同研究に関する計画	A
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	A
3. 地域・社会との連携に関する計画	B
4. グローバル化に関する計画	B

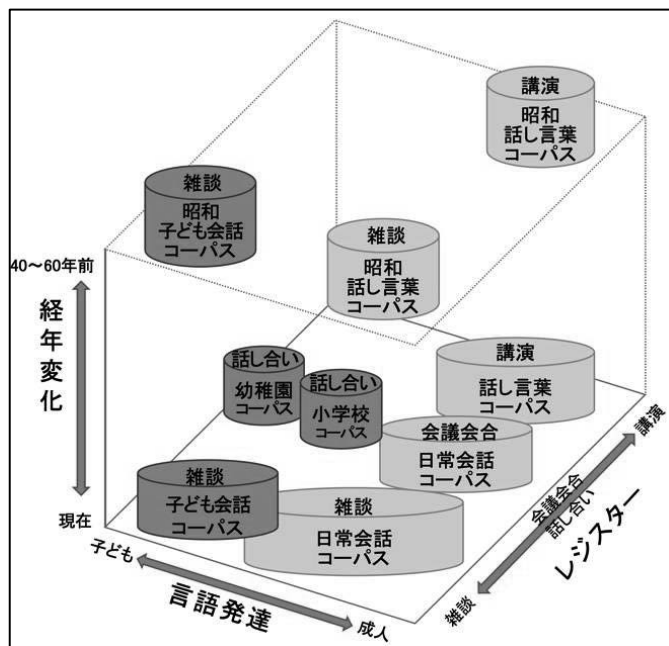
I. 計画期間内の概要

1. 目的及び特色

本プロジェクトは、子どもを中心とする多様な場面・相手との会話を含む映像付きコーパスを新たに開発し、成人中心の既存のコーパスと接続させることで、コミュニケーションを含む言語の発達・変化の過程を、子どもから高齢者まで多世代に渡り実証的に研究できる基盤を構築することにより、日本における言語発達研究を幅広い分野の研究者との連携体制のもとで展開させることを目的とする。また、各種会話コーパスを活用した技術開発を見据えた基礎研究を推進する。

これまで乳幼児を含む子どもの言語発達に関する研究が数多く行われてきたが、発達研究は乳幼児に限られるものではなく、学童期、青年期、成人初期、壮年期、老年期など、多世代に渡り見ていく視点も不可欠である。特に、高齢者や子育て世代の孤立など家族の問題が複数世代化し、多世代交流が国の重要施策の一つとして掲げられるなか、乳幼児から高齢者までの多世代を対象に、日常生活の中で交わされるリアルな会話を映像まで含めて記録したコーパスを構築・公開し、各世代の言語使用・コミュニケーション行動の実態やその発達・変化を実証的・多角的に研究することは、学術のみならず社会的にも重要な課題である。

そこで本プロジェクトでは、『子ども日常会話コーパス』『幼稚園話し合いコーパス』『小学校話し合いコーパス』『昭和子ども会話コーパス』（いずれも仮称）を整備した上で、第3期までに構築してきたコーパスと合わせて活用することにより、話し言葉の特性を、①言語発達、②言語教育、③時代による言語の変化、④話し言葉のレジス

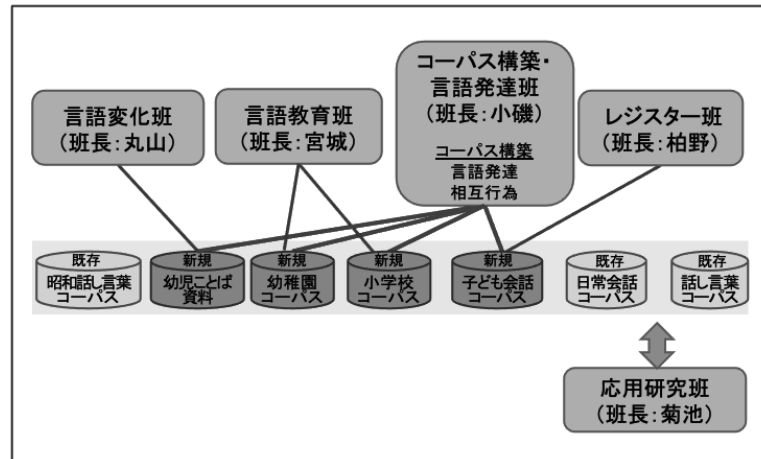


ターの多様性の観点から明らかにすると同時に、⑤各種話し言葉コーパスを活用した情報工学的応用可能性について探る。

2. 年次計画（6年間のロードマップ）

◆ 全体計画・研究組織 ◆

本プロジェクトの実施にあたって、図に示す5つの班を組織して研究を推進する。



言語発達班：子どもを中心とする会話を収録した映像付きコーパスを新たに構築した上で、成人中心の『日本語日常会話コーパス』（CEJC）も活用することにより、コミュニケーションを含むことばの発達の過程を子どもから成人まで多世代に渡り実証的に研究する。言語発達研究において層の薄い学童期の児童やバイリンガル環境の子どものデータも拡充することで、日本語教育も含めて発達研究を幅広く推進する。

教育・発達 G：言語発達班と共同で幼稚園および小学校での話し合い活動を中心としたデータを収録し映像付きコーパスを構築した上で、幼児期から学童期にかけての言語使用やコミュニケーション行動の実態とその発達を言語教育の観点から研究する。

言語変化班：成人を中心とする 50 年前の話し言葉と、現代の話し言葉を納めたコーパスを活用し、成人の話し言葉の経年的な変化を実証的に研究する。また 50 年前の子ども（1 名）の会話を対象とする小規模コーパスを新たに構築し、子どもや子どもと接する母親の話し言葉の経年的な変化も研究する。

レジスター班：雑談や話し合いなど多様な場面の会話を含む成人中心の CEJC と、子どもの雑談中心の『子ども日常会話コーパス』や話し合いを中心とする『幼稚園話し合いコーパス』『小学校話し合いコーパス』を主対象に、国語研所有の多様なレジスターのコーパスも合わせて活用することにより、子どもから成人までの年齢層ごとに言葉のレジスター的多様性を実証的に研究する。

応用研究班：第 3 期で拡充した話し言葉コーパスを活用した情報工学的応用可能性について、基本周波数推定、音源分離、音声認識などの音響処理技術や、会話音声から盛り上がりや話者の感情・態度推定やターン認識などのコミュニケーション評価技術などの観点から検討する。高齢者や子育て世代の孤立という問題は技術的な支援も重要となる。こうした技術開発を見据えた基礎研究をコーパス開発と同時に進め、コーパスを評価する。

◆ 年次計画 ◆

2022 年度

・データ収集・整備 ・データ公開 ・成果発表 ・書籍刊行 ・若手育成	・子ども会話コーパス：収録・転記・情報付与開始 ・幼稚園会話コーパス：収録・転記開始 ・小学校会話コーパス：収録・転記開始 ・昭和子どもコーパス：データ整備・転記開始 ・日本語日常会話コーパス：RDB 一般公開 ・シンポジウム：2 回 ・日常会話コーパス関連の論文集：1 冊 ・コーパス講習会：2 回 ・チュートリアル：1 回

2023 年度

・データ収集・整備 ・成果発表 ・若手育成	・子ども会話コーパス：データ収録・転記・情報付与継続 ・幼稚園会話コーパス：収録・転記・情報付与継続 ・小学校会話コーパス：収録・転記・情報付与継続 ・昭和子どもコーパス：転記継続 ・子ども会話コーパス：30 時間プロジェクト内部公開 ・シンポジウム：1 回 ・コーパス講習会：2 回

2024 年度

・データ収集・整備 ・データ公開 ・報告書刊行 ・成果発表 ・若手育成	・子ども会話コーパス：転記・情報付与継続 ・幼稚園会話コーパス：転記・情報付与継続 ・小学校会話コーパス：収録・転記・情報付与継続 ・昭和子どもコーパス：転記継続 ・子ども会話コーパス：50 時間モニター公開 ・昭和子どもコーパス：本公開 ・子ども会話コーパスモニター版の設計の報告書：1 冊 ・シンポジウム：1 回 ・コーパス講習会：1 回

2025 年度

・データ収集・整備 ・データ公開 ・成果発表 ・書籍刊行 ・若手育成	・子ども会話コーパス：転記・情報付与継続 ・幼稚園会話コーパス：転記・情報付与継続 ・小学校会話コーパス：転記・情報付与継続 ・子ども会話コーパス：100 時間プロジェクト内部公開 ・幼稚園会話コーパス：プロジェクト内部公開 ・シンポジウム：1 回 ・研究シリーズ「言語資源学」 話し言葉コーパスの設計・構築関連の書籍：1 冊 ・コーパス講習会：1 回

2026 年度

・データ収集・整備	・子ども会話コーパス：転記・情報付与継続 ・幼稚園会話コーパス：転記・情報付与継続 ・小学校会話コーパス：転記・情報付与継続
・データ公開	・子ども会話コーパス：100 時間モニター公開 ・小学校コーパス：プロジェクト内部公開
・成果発表	・シンポジウム：1 回開催
・書籍刊行	・研究シリーズ「言語資源学」 話し言葉コーパスの活用法関連の書籍：1 冊
・若手育成	・コーパス講習会 1 回

2027 年度

・データ収集・整備	・子ども会話コーパス：情報付与継続 ・幼稚園会話コーパス：情報付与継続 ・小学校会話コーパス：情報付与継続
・データ公開	・子ども会話コーパス：本公開 ・幼稚園コーパス：本公開 ・小学校コーパス：本公開
・成果発表	・シンポジウム：1 回開催
・書籍刊行	・子ども会話コーパス関連の論文集：1 冊
・若手育成	・コーパス講習会 1 回開催

II. 令和 5 年度の活動

令和 5 年度予算額 27,300 千円

1. 共同利用・共同研究に関する計画

データベース等の構築（アクティビティ）

- 『子ども版日常会話コーパス』構築作業として、経年調査収録を終了し公開予定の 100 時間（8 世帯 14 児）のデータ収集を終え、既収録データの整備を進めた。100 時間のうち 50 時間を 2024 年度に一般公開するために、協力世帯を対象にヒアリングを実施し公開内容等に問題がないかを確認するとともに、映像や音声のマスク処理を進めた。
- 『昭和子ども会話コーパス(仮)』構築作業として、昭和 40～50 年代に国語研で収録した子ども中心の会話データ 100 時間のうち 98 時間について文字化二次作業を終了した。
- 『幼稚園会話コーパス(仮)』については、幼稚園側の都合で、新たな収録はできなかったが、かわりに既収録分の文字化作業を進めた。
- 『小学校会話コーパス(仮)』構築作業として、小学校での話し合い活動の収録を本格的に開始し、1～5 年生の国語・算数・理科・総合・道徳・音楽・家庭の話し合いを収録した。
- 『日本語日常会話コーパス』に基づく音声合成の有効性検証のため、クラウドソーシングで募集した 54 名の作業による合成音声の自然性および感情の評価を実施した。

国内外の大学や研究機関との組織的な連携等（アクティビティ・アウトプット）

- 富山大学教育学部と連携し、今年度は特に『小学校話し合いコーパス(仮)』構築作業として小学校の授業での話し合い活動の収録を進めた（「データベース等の構築」4 参照）。

他のプロジェクトとの合同の活動等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 「言語運用」プロジェクトと連携し、海外大学等と連携して進める学習者談話縦断研究のうち縦断調査データの転記作業を支援した。具体的には、作業の効率化のために、自動音声認識モデル Whisper (openAI)を導入することとし、技術支援を行うとともに、自動認識後の人手整形作業を分担して実施した。
- (2) 「学習者辞書」プロジェクト及び言語資源開発センターと共催で、初級者編と中級者編の2回の講習会を実施した（詳細は「データベース等に関する講習会・講演会」参照）。

異分野の研究者との共同研究・協業等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 国立障害者リハビリテーションセンター研究所と連携し、『日本語日常会話コーパス』に付与した自閉症スペクトラム指数調査に基づき自閉傾向と終助詞使用との関係に関する研究を行い、その成果を第48回社会言語科学会研究大会で発表したところ、大会発表賞を受賞した
(<https://www.jass.ne.jp/about/prize-conf/winner/>, 2024年3月)。また同センター及び昭和大学発達障害医療研究所と協力し、自閉症者の会話データの収録を開始した。日本語の自閉症者を対象とする公開コーパスは存在しておらず、今期中にコーパスとして公開する計画である。

調査データ・データベース等公開（アウトプット）

- (1) 『子ども会話コーパス』のうち、2024年度に一般公開予定の50時間について、プロジェクト共同研究員に限定して先行公開した。

- (2) 本プロジェクトでは、第3期の研究成果である『日本語日常会話コーパス』の研究可能性を高めるために、追加アノテーションなどを新に施し公開する活動を進めている。今年度は次のデータベース1件、アノテーション4件、計5件を公開した。

『日常会話コーパス』リレーショナルデータベース（各種アノテーションを統合したDB）

根拠資料：<https://www2.ninjal.ac.jp/conversation/cejc/rdb.html>

話者間関係性・年齢の上限関係アノテーション

根拠資料：https://www2.ninjal.ac.jp/conversation/cejc/data_relation.html

分類語彙表番号アノテーション CEJC-WSD Version 202403（契約者のみアクセス可）

『日常会話コーパス』短単位語彙表（分類語彙表番号つき）

根拠資料：<https://repository.ninjal.ac.jp/records/2000167>

会話分析式トランスクリプト Ver. 202304

根拠資料：<https://www2.ninjal.ac.jp/conversation/cejc/data202304.html>。

公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム（アウトプット）

- (1) 計画していたシンポジウム2件に加え、プロジェクトの活動と関連する諸学会と連携したシンポジウム・研究会3件を共催し、共同研究員が計46件の発表を行った。
 - ・人工知能学会言語・音声理解と対話処理研究会第14回対話システムシンポジウム、2023年12月13-14日、国立国語研究所、参加者309名
<https://jsai-slud.github.io/sig-slud/99th-sig.html>
 - ・音響学会音声研究会・電子情報通信学会バーバル・ノンバーバル研究会、2024年2月16日、国立国語研究所
<https://asj-spcom.acoustics.jp/>
 - ・ことば・認知・インタラクティブシンポジウム12、2024年2月28日、国立国語研究所、参加者46名
<https://www.jdri.org/archives/1296>
 - ・人工知能学会第100回言語・音声理解と対話処理研究会、2024年2月29日-3月1日、国立国語研究所、参加者111名
<https://jsai-slud.github.io/sig-slud/100th-sig.html>

- ・ 日常会話コーパスシンポジウム IX, 2024 年 3 月 18 日, オンライン, 参加者 259 名
<https://www2.ninjal.ac.jp/conversation/event/sympo9.html>
- ・ 2023 年 11 月 5 日 NINJAL シンポジウム「コーパス利用のべし・べからず」において、『日本語話し言葉コーパス』『日本語日常会話コーパス』利用のべし・べからずについて」というタイトルでオンライン発表を行い、講演動画を YouTube で公開した。
https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20231105a/
<https://www.youtube.com/watch?v=a93bDt7MB7Q>

書籍・論文等による研究成果の公表（アウトプット）

- (1) 『日本語日常会話コーパス』を活用した研究をまとめた論文集の編集を進め、1 本を除き入稿を終えた。
- (2) 第 4 期に研究所として新たに設けた入門書である「言語資源学」シリーズとして、「日常会話コーパス」の知見をまとめた『会話コーパスの設計・構築法・利活用法』を企画し、執筆を進めた。2025 年度に刊行する計画である。
- (3) 今年度は、『日本語日常会話コーパス』など既存のコーパスを中心としつつ、構築中の「子ども会話コーパス」も合わせて研究を進めた。こうした研究の成果を、論文 10 本、ブックチャプター 6 本、発表・講演 82 件、コーパス・データベース 5 件として公表した。

データベース等に関する講習会・講演会（アウトプット）

- (1) 「学習者辞書」プロジェクト及び言語資源開発センターと共催で、次の通り初級者編と中級者編の 2 回のコーパス講習会を実施した（再掲）。
 - ・ オンライン検索システム『中納言』講習会【初級編】 2023 年 11 月 5 日(参加者 109 名)
https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20231105b/
 - ・ NINJAL チュートリアル『日本語日常会話コーパス』の活用－『中納言』の使い方－
 2023 年 12 月 2 日(参加者 139 名)
https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20231202a/

データベース等を使った研究成果・利用実績（アウトカム）

- (1) 『日本語日常会話コーパス』活用のための講習会を 2 回開催するなどしたことにより、オンライン検索システム「中納言」の登録ユーザ数・年間検索数は、2022 年度が 6435 人、15 万件だったのに対し、2023 年度は 13530 人（7095 人増）、20 万件（前年度比 130%）となるなど、広く活用された。コーパスについては言語資源の代表的な国際会議 LREC2022 で報告しているが、当該論文は SciVal の調べで Top5%の被引用数であり（令和 6 年 5 月調査）、このことから本コーパスが広く活用されていることが分かる。

2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

総研大や連携大学院等の協定に基づく授業担当等

- (1) 総研大において『日本語日常会話コーパス』など国語研で構築した話し言葉コーパスを活用した「言語資源学」と「言語資源学演習 2」を担当した。
- (2) 一橋大学においても国語研で構築した話し言葉コーパスを用いた実践的演習を行った。また 2023 年度は博士論文 2 本の副査を担当した。

プロジェクト非常勤研究員の雇用

- (1) プロジェクト非常勤研究員を 4 人雇用し、コーパス構築とそれに基づく研究を行うとともに、R による統計手法や Unix での処理などを実践的に学ぶ機会を設けることにより、コーパスを活用した高度な言語学的研究を推進できる人材を育成した。うち 1 名は国立大学に就職した（助教・常勤）。

大学院生、学振PD等のプロジェクトへの参加

- (1) 大学院生 10 名を含む若手研究者 37 名をプロジェクトに迎え、『日本語日常会話コーパス』などの有償版コーパスを無償提供するとともに、講習会などの機会を通して利用方法を具体的に学ぶ機会を提供した。また共同研究員が指導する学生にも同様の機会を提供した。その結果、『日本語日常会話コーパス』を活用したものとして、卒論 23 本（東工大・千葉大・宇都宮大・早大・同志社・中京大・東京女子大）、修論 1 本（千葉大）、博論 3 本（一橋大・筑波大・千葉大）の成果にむすびついた。

若手研究者への発表の機会の提供

- (1) プロジェクトの各班合同のシンポジウム「日常会話コーパス」IX（2024 年 3 月 18 日）において、学生 4 名を含む若手研究者 9 名に発表の機会を提供した。また若手研究者を含むプロジェクトメンバーの情報交換と議論を深めるために、非公開のショートトークの会を 2 回開催した。

若手研究者向けのチュートリアル等

- (1) 「学習者辞書」プロジェクト及び言語資源開発センターと共催で、次の通り初級者編と中級者編の 2 回のコーパス講習会を実施し、合計で 97 名の学生を含む 248 名が参加した（詳細は「データベース等に関する講習会・講演会」参照）。
- (2) 『日本語日常会話コーパス』を活用した会話分析初級者セミナー（2023 年 9 月 4－6 日）、Advanced CA Seminar（2024 年 3 月 1－6 日）が開催された。
- (3) 『日本語日常会話コーパス』について、大学の授業でコーパスを利用できるオンライン検索アプリケーション「中納言」の講義用アカウントを 164 の授業・講義（受講者計 5871 名）に対して発行し、大学の授業に貢献した。

3. 地域・社会との連携に関する計画

産業界との連携

- (1) 「日本語日常会話コーパス」の情報工学的応用可能性について検討する「応用研究班」を設け、民間企業の研究者 5 名も共同研究員等に加えて研究を推進した。また人工知能学会言語・音声理解と対話処理研究会と共催で「対話システムシンポジウム」「第 100 回言語・音声理解と対話処理研究会」を国立国語研究所で開催して連携を深めた（詳細は「公開の研究発表会」参照）。

研究成果の社会への発信・還元

- (1) プロジェクトで継続して整備・公開を続ける『日本語日常会話コーパス』『名大会話コーパス』『職場談話コーパス』『昭和話し言葉コーパス』を、インターネットを通して一般に発信した。今年度合計で無償版 7887 件、有償版 71 件の新規利用申請があった。有償版のうち 8 件は産業界での利用であり、言語学・日本語学だけでなく音声認識・AI モデル開発なども含む幅広い分野で活用されている。

4. グローバル化に関する計画

海外の研究者の受入

- (1) 海外の研究者 5 名を共同研究員として加え、海外での映像付きコーパスの公開・利用状況や、個人情報扱いなどについての情報交換も行いながら、研究を推進した。

海外の大学との連携等

- (1) 「言語運用」プロジェクトが海外大学等と連携して進める学習者談話縦断研究のうち縦断調査データの収集・整備を支援した（他のプロジェクトとの合同の活動等）参照）。
- (2) 『日本語日常会話コーパス』を活用した Advanced CA Seminar（講師：Paul Drew and Monica Simone, 2023 年 3 月 1－6 日）が開催された。

英語による研究成果の発信等

- (1) 『日本語日常会話コーパス』『名大会話コーパス』『職場談話コーパス』『昭和話し言葉コーパス』を、インターネットを通し海外も含めて発信した。このうち『日本語日常会話コーパス』について、今年度の新規登録ユーザ 7095 名のうち 1100 名が海外機関所属者である（所属先から判断がつく場合に限定）。

「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究」 評価報告

令和5年度の評価

《評価結果》

計画を上回って実施している

本プロジェクトの研究目的は、子供の言語活動に焦点を当てた映像付き会話コーパスを新たに開発し、既存の成人中心のコーパスと接続させることで、子どもから高齢者までの多世代に渡る言語発達・変化過程の実証的研究を推進するということである。この研究目的に沿って、コーパスの構築、研究活動は順調に進んでおり、またコーパス言語学の人材育成にも積極的に取り組み、国語研が作ったコーパスの利用が広がり、社会言語学会の大会発表賞を受賞するなど、高い評価に価する研究活動が行われている。

《評価項目》

1. 共同利用・共同研究について

共同利用・共同研究については、充実した活動が行われていると評価できる。コーパス構築に関しては、『幼稚園会話コーパス(仮)』を除き、他の3つのコーパス（『子ども版日常会話コーパス』、『昭和子ども会話コーパス(仮)』、『幼稚園会話コーパス(仮)』）は、データ収集も順調に進み、コーパス構築は進展した。また、計画になかった「日常会話コーパス」に基づく音声合成の有効性の検証を実施したことも高く評価してよい。国内外の大学や研究機関との連携、他のプロジェクトとの協力、異分野の研究者との共同研究も活発に進め、特に国立障害者リハビリテーションセンター研究所との自閉症に関する共同研究は社会言語学会の大会発表賞を受賞するなど高い評価を得た。研究の発信については、さまざまなデータベースを公開し、研究発表会・講演会・国際シンポジウムを計画を上回って開催し、多数の研究発表をし、多くの参加者があった。書籍・論文などによる研究成果の公表も着実に進んでおり、未刊のものも着々と準備が進んでいる。コーパス利用も確実に増えているのが認められる。

2. 教育・人材育成について

教育・人材育成については、積極的に取り組み、成果を上げている。総研大や一橋大学において国語研が作った言葉コーパスを使った演習を担当し、2つの博士論文審査に加わった。プロジェクト非常勤研究員を4名雇用し、コーパス利用の高度な言語学的研究を推進できる人材の育成に努め、そのうち1名は国立大学の常勤職を得た。若手研究者37名をプロジェクトに迎え、コーパス利用を学ぶ機会を提供し、その結果としてコーパスを利用した卒論32本の成果にむすびついた。プロジェクトの各班合同のシンポジウムやショートトークの会を設け若手研究者に発表の機会を与えた。また若手研究者向けに初級者編と中級者編の2回のコーパス講習会を開き、97名の学生を含む右248名が参加した。

3. 社会連携・社会貢献について

社会連携・社会貢献についても、計画通りの成果が見られた。民間企業の研究者5名を加えた「応用研究班」を設け、「日本語日常会話コーパス」の情報工学的応用可能性について検討した。人工知能学会 言語・音声理解と対話処理研究会と共催でシンポジウム、研究会を国語研で開催し連携を深めた。また、『日本語日常会話コーパス』『名大会話コーパス』『職場談話コーパス』を、インターネット

トを通して一般に発信し、多くの新規利用申請があった。

4. 国際連携・国際発信について

国際連携・国際発信についても、計画通りに進んでいる。海外の研究者5名を共同研究員として加え、コーパスに関するさまざまな情報交換を行った。『日本語日常会話コーパス』『名大会話コーパス』『職場談話コーパス』を、インターネットを通し海外も含めて発信し、『日本語日常会話コーパス』には今年度は1100名の海外機関所属者の新規登録があった。

5. その他特記事項

特になし。

「多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究」自己点検評価報告

プロジェクト名：多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究

プロジェクトリーダー：石黒 圭

令和5年度プロジェクト全体自己評価

全項目の総合	A
1. 共同利用・共同研究に関する計画	A
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	B
3. 地域・社会との連携に関する計画	B
4. グローバル化に関する計画	A

I. 計画期間内の概要

1. プロジェクト全体の6年間の計画

【計画概要】

本プロジェクト「多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究」は、日本語非母語話者（日本語学習者および定住外国人）の言語運用の縦断的調査によって多様な言語資源を構築して研究し、その研究成果を教育支援に生かすことを目的とする。その目的を達成するため、以下の六つのサブプロジェクトを設置する。

(1) 多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究統括（担当：石黒）

下記の(2)～(6)の五つのサブプロジェクトの研究成果を収集・整理し、インターネット上においてその公開・発信を支援する。

(2) 日本語学習者の作文の縦断コーパス研究（担当：石黒）

中国、台湾、韓国、ベトナムの複数の大学と日本語学習者の作文の縦断コーパス調査のネットワークを形成し、学習者600名（開始時）を対象に、1年間に3回、4年間にわたる計12回の作文調査を行うプロジェクトです。収集したデータに基づき、学習者の作文執筆能力の縦断的な発達過程を明らかにすることを目指す。

(3) 日本語学習者の談話の縦断コーパス研究（担当：石黒）

中国の2大学の日本語学習者を対象に、大学入学から卒業までの4年、1年間に2回、計8回のI-JAS準拠のインタビュー調査と、それに関連する作文調査を行い、縦断談話データベースを構築する。収集したデータを用いて、談話能力の縦断的な発達過程を作文能力との関係で総合的に明らかにすることを目指す。

(4) 日本語学習者の作文教育支援研究（担当：山口）

協同型の作文教育向けの作文・添削支援システムを開発し、授業への導入手法を検討する。また、システムを用いた授業実践の結果から作文・添削データベースを構築し、作文技能の習得過程とシステムの教授効果を明らかにすることを目指す。

(5) 定住外国人の談話の縦断研究（担当：野山）

2007年から継続してきた東北地方における外国人定住者の縦断インタビュー調査について、第4期も調査を継続する。それとともに、過去の収集データの整備を行い、それらのデータを公開、分析することで、長期間にわたる生活者の言語習得の実態を明らかにすることを目指す。

(6) 定住外国人のよみかき研究（担当：福永）

生活者としての日本語学習者を対象に、日常生活における文字を介したコミュニケーション（よみかき実践）の種類、方略の使用、新しいメディアの活用等についてデータ収集を行い、よみかき実践研究の発展とよみかきに関わる外国人支援の充実を目指す。

【年次計画】

年次計画は下記の通りである。(1)～(6)、上記の(1)～(6)と対応する。

[2022(R4)年度]

- (1) 本プロジェクトのサイト (<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/>) の作成・公開開始
- (1) 五つのサブプロジェクトの研究成果の公開、イベント情報等の発信
- (1) 第三期のプロジェクトの研究成果の公開・更新の継続
- (2) 作文データの収集開始（1年目、年3回、600名分×3回＝1,800本）
- (2) 作文データのデータベース設計の検討
- (3) 談話データの収集開始（1年目、年2回、西安外国語大学18名分）
- (3) 談話先行データのデータベース公開準備（北京師範大学17名分、データ収集済）
- (4) 作文・添削支援システムの設計、プロトタイプの実現
- (4) 作文・添削実践プログラムの設計
- (5) 生活者縦断調査（14年目）のデータ収集の継続
- (5) 第一次（当初5年）生活者談話データの文字化・整備作業の継続
- (6) よみかき研究に関連する先行研究の動向把握と資料整備
- (6) よみかきの社会的実践の予備調査の試行と本調査の設計
- (6) よみかきの社会的実践（本調査）実施先との交渉
- (6) よみかきの社会的実践をめぐるシンポジウムの開催

[2023(R5)年度]

- (1) 本プロジェクトのサイト (<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/>) のサイトの公開継続
- (1) 五つのサブプロジェクトの研究成果の公開、イベント情報等の発信
- (1) 第三期のプロジェクトの研究成果の公開・更新の継続
- (2) 作文データの収集継続（2年目、年3回、480名分×3回＝1,440本）
- (2) 作文データのデータベース構築開始
- (2) 作文の自動評価システム設計の検討
- (3) 談話データの収集継続（2年目、年2回、西安外国語大学18名分）
- (3) 談話先行データのデータベース公開（北京師範大学17名分、データ収集済）
- (3) 談話研究の成果論文集の準備
- (4) 作文・添削支援システム（プロトタイプ）を使用した予備実践開始
- (4) 作文・添削支援システム（プロトタイプ）の機能の追加

- (4) 作文教育支援実践プログラムの一般向け解説書（実践マニュアル）の作成開始
- (5) 生活者縦断調査（15年目）のデータ収集の継続
- (5) 第一次（当初5年）生活者談話データの文字化・整備作業の完成・公開
- (5) 公開した生活者談話データ活用のための講演会または研修（ワークショップ）の開催
- (6) よみかきの社会的実践調査（本調査）・データ収集の実施
- (6) 収集した本調査よみかきデータの文字化作業

[2024 (R6) 年度]

- (1) 本プロジェクトのサイト (<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/>) のサイトの公開継続
- (1) 五つのサブプロジェクトの研究成果の公開，イベント情報等の発信
- (1) 第三期のプロジェクトの研究成果の公開・更新の継続
- (2) 作文データの収集継続（3年目，年3回，360名分×3回=1,080本）
- (2) 作文データのデータベース構築継続
- (2) 作文の自動評価システム開発開始
- (2) 作文研究の国際シンポジウムの開催
- (2) 作文研究の国際シンポジウムの報告書刊行
- (3) 談話データの収集継続（3年目，年2回，西安外国語大学18名分）
- (3) 談話後続データのデータベース構築開始（西安外国語大学18名分）
- (3) 談話研究の国際シンポジウムの開催
- (3) 談話研究の研究成果論文集の刊行
- (4) 作文・添削支援システム（プロトタイプ）を使用した予備実践継続
- (4) 作文・添削データベース構築準備開始
- (4) 作文教育支援実践マニュアルの作成開始
- (5) 生活者縦断調査（16年目）のデータ収集の継続
- (5) 第二次（次期8年）生活者談話データの文字化・整備作業開始
- (5) 生活者縦断調査・研究の成果を踏まえた論文集の刊行
- (6) 補完的よみかきデータの収集の実施
- (6) 文字化した本調査よみかきデータの分析開始

[2025 (R7) 年度]

- (1) 本プロジェクトのサイト (<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/>) のサイトの公開継続
- (1) 五つのサブプロジェクトの研究成果の公開，イベント情報等の発信
- (1) 第三期のプロジェクトの研究成果の公開・更新の継続
- (2) 作文データの収集継続（4年目，年3回，240名分×3回=720本）
- (2) 作文データのデータベース構築継続
- (2) 作文の自動評価システム開発継続
- (3) 談話データの収集継続（4年目，年2回，西安外国語大学18名分）
- (3) 談話後続データのデータベース構築継続（西安外国語大学18名分）
- (4) 作文・添削支援システムを用いた本実践開始，効果の検証
- (4) 作文・添削支援システムの試験公開，実践マニュアルの公開
- (4) 作文・添削データベースの構築開始
- (5) 生活者縦断調査（17年目）のデータ収集の継続

- (5) 第二次（次期 8 年）生活者談話データの文字化・整備作業の継続
- (6) 文字化した本調査よみかきデータの分析継続
- (6) 個人情報の保護を含めたよみかきデータの公開方式検討

[2026 (R8) 年度]

- (1) 本プロジェクトのサイト (<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/>) のサイトの公開継続
- (1) 五つのサブプロジェクトの研究成果の公開，イベント情報等の発信
- (1) 第三期のプロジェクトの研究成果の公開・更新の継続
- (2) 作文データのデータベース公開準備
- (2) 作文の自動評価システム開発公開
- (2) 作文研究の国際シンポジウムの開催
- (2) 作文研究の研究成果論文集の準備
- (3) 学習者縦断談話データベースの公開準備
- (3) 談話研究支援のワークショップの開催
- (4) 作文・添削支援システムの本公開，一般向けの講習の実施
- (4) 作文・添削データベース（合計 3 回分の実践結果）の構築継続
- (4) 作文・添削データベースを用いた分析実施
- (5) 生活者縦断調査（18 年目）のデータ収集の継続
- (5) 第二次（次期 8 年）生活者談話データの文字化・整備作業の完成・公開
- (5) 生活者談話データベース公開記念のシンポジウムの開催
- (6) 限定された範囲でよみかきデータの公開実施
- (6) 限定公開から得たフィードバックに基づく公開よみかきデータの改善

[2027 (R9) 年度]

- (1) 本プロジェクトのサイト (<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/>) のサイトの公開終了
- (1) 五つのサブプロジェクトの研究成果の公開，イベント情報等の発信
- (1) 第三期のプロジェクトの研究成果の公開・更新の継続
- (1) 本プロジェクトの 6 ヶ年の研究成果の共同利用推進センターへの移管
- (2) 作文データのデータベース公開
- (2) 作文の自動評価システム運用開始
- (2) 作文研究支援のためのワークショップ開催
- (2) 作文研究の研究成果論文集の刊行
- (3) 学習者縦断談話データベースの公開準備
- (3) 談話研究の国際シンポジウムの開催
- (4) 作文・添削支援システムの本公開後のメンテナンス，システムの改善
- (4) 2026 年度に構築した作文・添削データベースの公開
- (4) 作文・添削データを活用するための講習会の開催
- (5) 第二次（次期 8 年）生活者談話データベースのメンテナンス
- (5) 生活者談話データベースを活用した研修（ワークショップ）の開催
- (6) よみかきデータの本格公開とメンテナンス
- (6) よみかきの社会的実践をめぐるデータ公開記念シンポジウムの開催

II. 令和5年度の活動

令和5年度予算総額 31,421 千円

(1) 非母語話者日本語運用統括

- ①五つのサブプロジェクトの研究情報を収集・整理し、インターネット上においてその公開・発信を支援した【共同利用・共同研究】
 - ・本プロジェクトのWebサイト <https://www2.ninjal.ac.jp/jl1//>の管理を行い、公開を継続した。
 - ・上記Webサイトより、サブプロジェクトの2023年度の研究成果の公開を行った。
 - ・上記Webサイト、およびX (https://twitter.com/jsl_ninjal) を用いて、サブプロジェクトの2023年度のイベント情報の発信を行った。

(2) 日本語学習者の作文の縦断コーパス研究

- ①海外の19大学と共同調査を実施した【共同利用・共同研究】
 - ・作文縦断調査は各大学の日本語学科に入学した学習者を対象に1年に3回ずつ実施し、4年間で計12回行う予定である。2023年度は計1,691本分の作文データを収集した。調査対象となった大学は、中国7大学（北京語言大学、天津外国語大学、東華大学、重慶山峡学院、福建師範大学、華中科技大学、長春師範大学）、台湾2大学（国立政治大学、東呉大学）、ベトナム3大学（フエ大学外国語大学、ドンア大学、ハノイ工業大学）、韓国2大学（韓国外国語大学校、仁川大学校）、タイ2大学（タマサート大学、カセサート大学）、フランス1大学（フランス東洋言語文化学院）、スロベニア1大学（リュブリャナ大学）、イギリス1大学（オックスフォード大学）の計19大学である。
- ②収集した作文データのデータベース構築に着手した【共同利用・共同研究】
 - ・2023年度までに収集した作文データについて、データベースの構築に向けて、作文が所定の形式に則って書かれているか、各種の情報のファイルがそろっているかの確認を行った。
- ③国際的な研究拠点形成のための準備を進めた【共同利用・共同研究】
 - ・すでに学術交流協定を締結している天津外国語大学（中国）、東呉大学（台湾）、韓国外国語大学校（韓国）に加え、連携して調査に当たる福建師範大学（中国）と2023年12月に、フエ大学外国語大学、ドンア大学（ベトナム）と2024年1月に、それぞれ学術交流協定を締結した。その結果、学術交流協定を締結して共同研究を行っている大学は計6大学となった。
- ④サブプロジェクトとの連携を強化した【共同利用・共同研究】
 - ・サブプロジェクト「日本語学習者の作文教育支援研究」と連携し、収集した作文データの活用方法を検討した。
- ⑤工学系研究者との共同研究を継続した【共同利用・共同研究】
 - ・（株）富士通の富士通研究所の研究者2名、および明星大学情報学部の研究者1名と5回ミーティングを行い、計算機によるテキスト処理の効率化の方法を検討した。
- ⑥研究成果として、次のような発信を行った【共同利用・共同研究】
 - ・国内外の学会や研究発表会、講演等で計9件の研究発表・講演を行った。（口頭発表1件、ポスター発表1件、ワークショップ1件、講演6件）。
 - ・学術誌に論文を1本公表した。
- ⑦若手支援として、次のような活動を行った【大学院教育・若手支援】
 - ・総合研究大学院大学での講義および一橋大学との連携大学院での演習において、本サブプロジェクトで収集中のデータを活用した授業を行った。

- ・4名のプロジェクト非常勤研究員を雇用した。
- ・12名（一橋大学7名、明治大学1名、早稲田大学2名、筑波大学1名、金沢大学1名）の大学院生がプロジェクトのミーティングに参加し、それぞれの研究観点に基づき、収集中の作文データの分析法の発表を行った。
- ・大学院生1名の研究討論会での発表旅費を支援した。
- ・東呉大学（台湾）と共同してNINJALチュートリアルを開催し、構築中の『日本語学習者縦断作文コーパス（W-CoLeJa）』の概要と分析事例の紹介を行った。

⑧産業界との連携として、次のような活動を行った【地域・社会との連携】

- ・作文の自動評価システム開発のため、(株)富士通を中心としたAIの専門家との共同研究を継続し、会議を6回（4月に1回、5月に1回、6月に1回、7月に1回、8月に1回、1月に1回）開催し、検討を行った。

⑨グローバル化のため、次のような活動を行った【グローバル化】

- ・共同研究を行っている海外の大学に所属する研究者、中国16名、台湾4名、韓国6名、ベトナム4名、タイ3名、スロベニア3名、フランス1名、ブラジル1名、計38名を共同研究員に加え、現地調査を推進した。
- ・すでに学術交流協定を締結している天津外国語大学（中国）、東呉大学（台湾）、韓国外語大学（韓国）に加え、連携して調査に当たる福建師範大学（中国）と2023年12月に、フエ大学外国語大学、ドンア大学（ベトナム）と2024年1月に、それぞれ学術交流協定を締結した。その結果、学術交流協定を締結して共同研究を行っている大学は計6大学となった（③と重複有）。

(3) 日本語学習者の談話の縦断コーパス研究

①海外の3大学と談話・作文の共同調査を実施した【共同利用・共同研究】

- ・西安外国語大学（中国）、ハノイ国家大学外国語大学（ベトナム）、チュラーロンコーン大学（タイ）の学生を対象に、『I-JAS』に準拠した内容の談話・作文のオンライン縦断調査を実施した。2023年度は2回分のデータを収集し、合計97時間分の談話データ、および258本分の作文データを収集した。

②収集した作文データのデータベース構築に着手した【共同利用・共同研究】

- ・2022年度に収集した談話データのうち、西安外国語大学（中国）第2回調査分25名分、約21.3時間（平均45分）について、データベース構築に向けた文字化およびアノテーション付与を行った。作文データについてはデータベース構築に向け、2023年度までに収集したデータ（第1回～第5回の3か国合計704本分）すべてに目を通し、所定の形式に則って書かれた作文であるかの確認を行った。

③先行データのデータベースを構築し、公開した【共同利用・共同研究】

- ・先行データである中国の北京師範大学の学習者17名分、約136時間（17名×平均1時間×8回）のデータベース（『B-JAS』）の構築を行い、2024年3月に中納言上で公開した。

④国際的な研究拠点形成のための準備を進めた【共同利用・共同研究】

- ・連携して調査に当たる西安外国語大学（中国）およびハノイ国家大学外国語大学と2024年1月にそれぞれ学術交流に関する協定書を締結した。

⑤他のサブプロジェクトとの連携を強化した【共同利用・共同研究】

- ・サブプロジェクト「日本語学習者の作文の縦断コーパス研究」と連携し、共同で開発した文字入力ツールおよびシステムを用いて作文のデータ収集を進めた。

⑥研究成果として、次のような発信を行った【共同利用・共同研究】

- ・NINJAL シンポジウムにおいて、「『I-JAS』『B-JAS』利用のべし・べからずについて」というタイトルで発表を行い、YouTube 上に公開した。
- ・先行データである中国の北京師範大学の学習者 17 名分、約 136 時間（17 名×平均 1 時間×8 回）のデータベース（『B-JAS』）の研究成果をまとめた論文集の刊行に向けて最終準備を行った。
- ・『B-JAS』の広報および研究者によるデータの利活用を推進するため、9 月_I-JAS 研究会において、『B-JAS』の概要や使い方を紹介する講習会を行った。
- ・データベース構築に向けた文字化、アノテーション付与を進めるために、作業従事者のためのオンライン講習会を行った。
- ・『B-JAS』を使った研究成果として、9 月_I-JAS 研究会において、口頭発表を行った。
- ・『B-JAS』を使った研究成果として、第 26 回専門日本語教育学会研究討論会においてポスター発表を行った。

⑦若手支援として、次のような活動を行った【大学院教育・若手研究者育成】

- ・連携大学院の演習において、2 名の博士後期課程の大学院生が『B-JAS』を活用した研究発表を行った。
- ・3 名のプロジェクト非常勤研究員を雇用した。
- ・3 名（一橋大学 2 名、東京外国語大学 1 名）の大学院生が本プロジェクトに参画した。
- ・大学院生 1 名の研究討論会での発表旅費を支援した。
- ・NINJAL シンポジウムにおいて、「『I-JAS』『B-JAS』利用のべし・べからずについて」というタイトルで若手研究者等を対象としたオンライン発表を行った（⑥と重複有）。

⑧グローバル化のため、次のような活動を行った【グローバル化】

- ・現地調査を行う西安外国語大学（中国）2 名、ハノイ国家大学外国語大学（ベトナム）4 名、チュラーロンコーン大学（タイ）2 名、および現地調査を共同で行った北京師範大学 2 名（中国）、北京外国語大学 4 名（中国）、計 14 名の教員を引き続き共同研究員とし、共同研究を推進した。
- ・連携して調査に当たる西安外国語大学（中国）と 2024 年 1 月に、ハノイ国家大学外国語大学と 2024 年 1 月にそれぞれ学術交流に関する協定書を締結した（④と重複有）

(4) 日本語学習者の作文教育支援研究

①プロトタイプシステムにかんする情報収集と予備実践を行った【共同利用・共同研究】

- ・共同研究員全員（13 名）に対してプロトタイプを用いたデモを行い、共同研究員自身の行っている教育実践に即して、個別にプロトタイプに対するフィードバックを受けた。
- ・プロトタイプシステムを用いた予備実践を 4 大学（京都外国語大、南山大学、一橋大学、日本国内の大学）で実施した。その際、4 種類の実践プログラムを作成した。

②システムの設計・構築を行った【共同利用・共同研究】

- ・①に基づき、作文・添削支援システムの振り返り支援機能として、少グループでの振り返り、付与されたアノテーションのビューワー、外部ファイルへの作文データのエクスポート、振り返り後の作文の改訂管理機能などの設計を行った。
- ・前年構築分のプロトタイプシステムに対して、予備実践に即した拡張（匿名での添削、作文全体へのコメントなど）を行った。また、上記の設計に基づいて、振り返り支援部分の実装を行った。ただし、作文の改訂管理機能など、一部の機能は設計段階である。

- ・課題の文章に対してコメント付けして、グループで振り返りを行うタイプの実践プログラム3種（読解，輪読，間違い探し課題），相互添削タイプの実践プログラム1種を設計した。
 - ③他のサブプロジェクトとの連携を強化した【共同利用・共同研究】
 - ・教育現場における日本語学習者の作文執筆支援のために、「日本語学習者の作文の縦断コーパス研究」との会議を2回（8月，9月）開催し，収集した作文データの検索・結果の集計方法（教師用）を検討した。
 - ・「多世代会話コーパス」（プロジェクトリーダー：小磯花絵教授）のシンポジウム「日常会話コーパス」IXで，支援システムを用いたグループ学習における談話に関する予備的な研究発表を1件行った（2024年3月18日）。
 - ④研究成果として，次のような発信を行った【共同利用・共同研究】
 - ・共同研究員が予備実践を行うために，機能拡張・改善した（「②システムの設計・構築」参照）プロトタイプシステムを限定公開した。
 - ・②で作成したプロトタイプ，および，予備実践について，日本教育工学会2023年秋季全国大会，日本教育工学会2024年春季全国大会，日本語教育学会2023年度秋季大会，韓国日本語教育学会で計7件の口頭発表を行った。
 - ⑤若手支援として，次のような活動を行った【大学院教育・若手研究者育成】
 - ・2名の非常勤研究員を雇用した。
 - ・共同研究員（大学院生）2名が実践プログラム1種を設計し，担当している大学の授業でプロトタイプシステムを用いた実践を行った。
 - ・上記の非常勤研究員2名と共同研究員2名が学会で実践結果など4件を口頭発表する際の費用を支援した。
 - ⑥地域・社会との連携として，次のような活動を行った【地域・社会との連携】
 - ・今年度実施した実践プログラムを参考に，2種類のタイプの活動（単一の文章をグループで評価する活動，相互添削タイプの活動）に対して，教師用・学習者用の計4種の作成を開始した。
 - ⑦グローバル化のため，次のような活動を行った【グローバル化】
 - ・プロトタイプシステムのユーザインターフェイスを，多言語表示できるよう実装した。現在は，日本語・英語について表示用テキストを用意している。
- (5) 定住外国人の談話の縦断研究
- ①縦断調査を実施した【共同利用・共同研究】
 - ・縦断調査及びフォローアップ調査を4月25日～26日にかけてフィールドで実施した。
 - ・地域の学習者に対して，リテラシーに関するパイロット調査を7月23日（S市）及び3月19日（M市）に実施した。
 - ②公開に向けたデータの更新，整備を行った【共同利用・共同研究】
 - ・公開に向けたデータの更新，整備を予定通り行った。
 - ・個人情報の取り扱いについては，改めて配慮を行いながらデータの整備を行った。
 - ③国内外の共同研究体制を整備した【共同利用・共同研究】
 - ・「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」のミーティングや開催された行事に等に参加しつつ，プロジェクトや調査研究の充実に向けて参考とした。
 - ・社会言語学，会話分析，教育人類学を含む学際的な観点から共同研究を進めた。
 - ④研究成果として，次のような発信を行った【共同利用・共同研究】
 - ・本プロジェクトの内容に関するサイトを維持しながら，拡充を図った。

- ・講習（研修）に関する情報の概要については、本プロジェクトのサイトに報告、発信した。
 - ・オンライン講座（研修）を2回行った（サポート21主催、文化庁委託研修、2023年8月、12月）。
- ⑤若手支援として、次のような活動を行った【大学院教育・若手研究者育成】
- ・1名のプロジェクト非常勤研究員を雇用した。
 - ・研修を2回行った（(1)西東京市日本語ボランティア研修、2023年5月、(2)江戸川区教育委員会主催副校長研修、2023年11月）

(6) 定住外国人のよみかき研究

①本調査を実施した【共同利用・共同研究】

- ・生活者としての定住外国人による字をよみかきする社会的実践についての調査を研究会議で検討を行い（オンライン6回、対面1回）、調査1（言語生活調査）と調査2（インターアクションインタビュー）として設計を行い、データ収集に着手した（のべ6名分、約300分）。なお、インフルエンザの蔓延により、調査実施予定が大幅に変更（延期、中止を含む）することになった。さらに2024年1月に発生した能登半島地震により、北陸地方の調査は当面の間延期することにした。これらの事情により令和5年度に実施予定の調査は大幅な変更を余儀なくされた。
- ・収集したデータについては、分析・公開に向けた準備作業を順次行った。

②国内外の共同研究体制を整備した【共同利用・共同研究】

- ・北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院との共催で、研究集会を開催した（2023年8月26日）。
- ・言語（言語教育）以外の社会学や移民研究等を専門とする研究者との連携・協業を積極的に進め、引き続き研究者2名の参加を継続した。

③研究成果として、次のような発信を行った【共同利用・共同研究】

- ・調査データ等の研究成果を公開するために、総括班主導のもと他のサブプロジェクトと連携して、本プロジェクトのサイトを開設し、データと情報公開の充実に努めた。
- ・研究集会を北海道大学で開催した（2023年8月26日）。
- ・論文3件が学術誌に掲載された。
- ・口頭発表を3件行った（日本言語政策研究会第25回研究大会、第7回キルギス2023日本学・日本語教育国際研究大会、NINJALサロン）。

④若手支援として、次のような活動を行った【大学院教育・若手研究者育成】

- ・一橋連携大学院および総合研究大学院の講義で本プロジェクトの問題意識や方法論等について話題にした。
- ・非常勤研究員1名の（博士課程在籍者）の雇用を継続した。
- ・共同研究員として2名（博士課程後期在籍者1名、博士課程後期進学予定者）がプロジェクトに参加し、調査を担当した。さらに、1名が文献レビューの執筆に携わった。
- ・共同研究員1名がNINJALサロンにおいて口頭発表を行った。
- ・英語文献のレビュー3本を本プロジェクトのサイトおよび学術情報リポジトリのサイトにおいて公開した。
- ・共同研究者1名に研究費・調査旅費を支援した。
- ・共同研究者1名の研究費・旅費（研究集会および研究会議への参加）を支援した。
- ・調査シミュレーション動画を作成し、若手研究員を中心とした共同研究員が調査方法の理解を深めるための支援を行った。

⑤地域・社会との連携として、次のような活動を行った【地域・社会との連携】

- ・国際交流協会等を訪問し、連携（調査協力、共同研究者）の強化を図った（長野県（長野国際化協会長野県多文化共生相談センターほか1団体）、北海道札幌市、埼玉県川口市）。その結果として、調査協力3地域と共同研究者1名の参加が実現した。
- ・北海道大学で研究集会を開催した（2023年8月26日）。
- ・先行研究文献のレビュー論文8本（外国語文献3本、日本語文献5本）を国立国語研究所学術情報リポジトリに登録、さらに本プロジェクトのサイトには学術情報リポジトリへのリンクを掲載し、研究成果のより広い範囲への発信に努めた。

⑥グローバル化のため、次のような活動を行った【グローバル化】

- ・日本語教師セミナー（ジャカルタ国立大学、2023年9月25日）においてプロジェクトの紹介を行う活動を行い、海外の研究者を共同研究員として受け入れるための働きかけを積極的に行った。
- ・共同研究員2名の参画を継続した（ロシア出身1名、韓国出身1名）。
- ・海外に向けた研究成果発信を行った（「第7回キルギス2023日本学・日本語教育国際研究大会」2023年8月）。

プロジェクト名：多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究

サブプロジェクト名：非母語話者日本語運用統括

サブプロジェクトリーダー：石黒 圭

令和5年度サブプロジェクト自己評価

全項目の総合		B
	1. 共同利用・共同研究に関する計画	B
	2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	—
	3. 地域・社会との連携に関する計画	—
	4. グローバル化に関する計画	—

I. 計画期間内の概要

1. 目的及び特色

【目的】

本サブプロジェクトは、独自の研究プロジェクトは行わず、メインプロジェクト「多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究」のなかにある他の五つのサブプロジェクトの研究成果を収集・整理し、インターネット上においてその公開・発信を支援するプロジェクトである。

- ・日本語学習者の作文の縦断コーパス研究（学習者作文）
- ・日本語学習者の談話の縦断コーパス研究（学習者談話）
- ・日本語学習者の作文教育支援研究（作文教育支援）
- ・定住外国人の談話の縦断研究（生活者談話）
- ・定住外国人のよみかき研究（生活者識字）

【特色】

本研究の特色は次の2点にまとめられる。

- ①本プロジェクトのサイト（<https://www2.ninjal.ac.jp/jll/>）において、第4期に行われる上記五つのサブプロジェクトの研究成果やイベント情報等を公開・発信する。
- ②本プロジェクトのサイト（<https://www2.ninjal.ac.jp/jll/>）において、第4期のメインプロジェクトのもととなった第3期のプロジェクトの研究成果の公開・更新を継続する

2. 年次計画（6年間のロードマップ）

年次計画（6年間のロードマップ）

【2022(R4)年度】

- ・本プロジェクトのサイト（<https://www2.ninjal.ac.jp/jll/>）の作成・公開開始
- ・五つのサブプロジェクトの研究成果の公開、イベント情報等の発信
- ・第3期のプロジェクトの研究成果の公開・更新の継続

【2023(R5)年度】

- ・本プロジェクトのサイト（<https://www2.ninjal.ac.jp/jll/>）のサイトの公開継続
- ・五つのサブプロジェクトの研究成果の公開、イベント情報等の発信
- ・第3期のプロジェクトの研究成果の公開・更新の継続

【2024(R6)年度】

- ・本プロジェクトのサイト (<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/>) のサイトの公開継続
- ・五つのサブプロジェクトの研究成果の公開、イベント情報等の発信
- ・第3期のプロジェクトの研究成果の公開・更新の継続

【2025(R7)年度】

- ・本プロジェクトのサイト (<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/>) のサイトの公開継続
- ・五つのサブプロジェクトの研究成果の公開、イベント情報等の発信
- ・第3期のプロジェクトの研究成果の公開・更新の継続

【2026(R8)年度】

- ・本プロジェクトのサイト (<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/>) のサイトの公開継続
- ・五つのサブプロジェクトの研究成果の公開、イベント情報等の発信
- ・第3期のプロジェクトの研究成果の公開・更新の継続

【2027(R9)年度】

- ・本プロジェクトのサイト (<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/>) のサイトの公開終了
- ・五つのサブプロジェクトの研究成果の公開、イベント情報等の発信
- ・第3期のプロジェクトの研究成果の公開・更新の継続
 - ・本プロジェクトの6ヶ年の研究成果の共同利用推進センターへの移管。

II. 令和5年度の活動

令和5年度予算額 550 千円

1. 共同利用・共同研究に関する計画

他のプロジェクトとの合同の活動等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 本プロジェクト内の五つのサブプロジェクトと連携し、各サブプロジェクトの今年度の研究成果を <https://www2.ninjal.ac.jp/j11/> で公開した。

調査データ・データベース等公開（アウトプット）

- (1) 昨年度公開した本プロジェクトのサイト (<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/>) の公開・管理を継続して行った。

公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム（アウトプット）

- (1) イベントの開催にさいし、本プロジェクトのサイト (<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/>) および X (https://twitter.com/js1_ninjal) にてその情報を発信した。

データベース等を使った研究成果・利用実績（アウトカム）

- (1) 本年度における本プロジェクトのサイト (<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/>) へのページビュー数は 5,591、ダウンロード数は 2,100 であった。

2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

特になし

3. 地域・社会との連携に関する計画

特になし

4. グローバル化に関する計画

特になし

プロジェクト名：多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究

サブプロジェクト名：日本語学習者の作文の縦断コーパス研究

サブプロジェクトリーダー：石黒 圭

令和5年度サブプロジェクト自己評価

全項目の総合	A
1. 共同利用・共同研究に関する計画	A
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	A
3. 地域・社会との連携に関する計画	B
4. グローバル化に関する計画	A

I. 計画期間内の概要

1. 目的及び特色

【目的】

本サブプロジェクトでは、中国6、台湾2、韓国2、ベトナム2の計12大学との共同研究体制を構築し、学習者600名（開始時）を対象に、1年間に3回、4年間にわたる縦断調査を行い、計5,000本の作文データベースを構築する。そのデータを用い、学習者の作文執筆能力の縦断的な発達過程を明らかにする。

【特色】

■特色1：日本語をゼロから学ぶ学習者の「多様な習得過程」が見える

従来の作文研究の多くが横断的なものであり、同一の学習者の習得過程を追跡する縦断コーパスがきわめて少ない。横断研究では習得過程の予測にすぎず、厳密な意味での学習者一人ひとりの習得過程を知ることはできない。そこで、本研究では、日本に関連する進学や就職が多く、書き言葉のニーズが高い「中国・台湾・韓国・ベトナム」の日本語教育先進地域を対象に4年間にわたるデータ収集を行い、横断コーパスとの比較も視野に入れ、習得上の困難点や習得過程の違いを明らかにする。

調査開始時の対象となる学習者は当初600名（2年目は480名、3年目は360名、4年目は240名を想定）であり、内訳は、中国330名（天津外国語大学180名、北京語言大学20名、重慶三峡学院20名、福建師範大学50名、東華大学20名、長春師範大学40名）、台湾120名（東呉大学100名、政治大学20名）、韓国70名（韓国外国語大学50名、仁川大学20名）、ベトナム80名（フエ外国語大学30名、ドンア大学50名）を予定している。

■特色2：執筆プロセスの可視化により、「文章執筆上の困難点」が見える

作文研究の分析対象はこれまで「執筆のプロダクト（書かれた作文）」であった。しかし、作文を修正する箇所こそが学習者のメタ意識が働く困難点であり、「執筆のプロセス（作文を書く過程）」を分析しなければ学習者の困難点はわからないことが多い。そこで、本研究では、所長裁量経費を用いて開発した作文の執筆プロセス記録システム「EssayLoggerTS」を用いて、学習者の執筆プロセスにおける困難点を明らかにする。

■特色3：執筆者による作文の母語訳との対照により、「学習者の誤用」が見える

従来の誤用分析の多くは日本語作文のみを対象に、研究者の判断で分析されてきたが、誤用は本来、何をなぜ間違えたのか、執筆者本人でないと判断することは難しい。そこで作文執筆の際、同じ内容の作文を日本語と母語の両方で入力してもらう方法を採用し、学習者の執筆意図を適切に把握する。

■特色4：AIの活用により、「人間の評価に近い自動評価」が見える

本研究では、5,000本の作文データを、六つの印象観点から日本語教師と一般の母語話者に評価してもらい、そうした評価を(株)富士通の判断過程を可視化できるAIに組み込むことで、従来の機械的な評価では叶わなかった、人間の評価に近い、安定した自動評価を可能にするシステムの構築を目指す。

2. 年次計画（6年間のロードマップ）

縦断研究	2022	2023	2024	2025	2026	2027
学習者作文データ収集	収集1年目 1,800本 (600名分)	収集2年目 1,440本 (480名分)	収集3年目 1,080本 (360名分)	収集4年目 720本 (240名分)		
学習者作文データベース	構築準備	構築開始	構築継続	構築継続	公開準備	公開
AI自動評価システム		開発準備	開発開始	開発継続	試験公開	運用開始
シンポジウム・講習会			シンポ1回		シンポ1回	WS1回
刊行・出版			報告書刊行		論文集準備	論文集刊行

【2022(R4)年度】

- ・作文データの収集開始（1年目、年3回、600名分×3回＝1,800本）
- ・作文データのデータベース設計の検討

【2023(R5)年度】

- ・作文データの収集継続（2年目、年3回、480名分×3回＝1,440本）
- ・作文データのデータベース構築開始
- ・作文の自動評価システム設計の検討

【2024(R6)年度】

- ・作文データの収集継続（3年目、年3回、360名分×3回＝1,080本）
- ・作文データのデータベース構築継続
- ・作文の自動評価システム開発開始
- ・国際シンポジウムの開催
- ・国際シンポジウムの報告書刊行

【2025(R7)年度】

- ・作文データの収集継続（4年目、年3回、240名分×3回＝720本）
- ・作文データのデータベース構築継続
- ・作文の自動評価システム開発継続

【2026(R8)年度】

- ・作文データのデータベース公開準備
- ・作文の自動評価システム開発公開
- ・国際シンポジウムの開催
- ・研究成果論文集の準備

【2027 (R9) 年度】

- ・ 作文データのデータベース公開
- ・ 作文の自動評価システム運用開始
- ・ 作文研究支援のためのワークショップ開催
- ・ 研究成果論文集の刊行

II. 令和5年度の活動

令和5年度予算額 15,512 千円

1. 共同利用・共同研究に関する計画

フィールド調査・実験等（アクティビティ）

(1) 中国7大学（北京語言大学，天津外国語大学，東華大学，重慶山峡学院，福建師範大学，華中科技大学，長春師範大学），台湾2大学（国立政治大学，東呉大学），ベトナム3大学（フエ大学外国語大学，ドンア大学，ハノイ工業大学外国語観光大学），韓国2大学（韓国外語大学校，仁川大学校），タイ2大学（タマサート大学，カセサート大学），フランス1大学（フランス東洋言語文化学院），スロヴェニア1大学（リュブリャナ大学），イギリス1大学（オックスフォード大学）の計19大学の学生を対象に，作文の縦断調査を行った。作文調査は1年に3回ずつ実施し，4年間で計12回行う予定である。2023年度は計1,691本分の作文データを収集した。内訳は次の通りである。なお，第1回調査～第3回調査は調査時期が近いいため，調査開始したばかりの【2023年度開始】の大学は1年に4回調査を実施している。

【2020年度開始】

〔北京語言大学〕作文16本（第12回調査16名）—データ収集完了

〔国立政治大学〕作文13本（第12回調査13名）—データ収集完了

【2021年度開始】

〔天津外国語大学〕作文187本（第9回調査63本，第10回調査62本，第11回調査62本）

〔東華大学〕作文47本（第9回調査17本，第10回調査16本，第11回調査14本）

〔重慶山峡学院〕作文48本（第9回調査19本，第10回調査16本，第11回調査13本）

〔華中科技大学〕作文22本（第9回調査10本，第10回調査8本，第11回調査4本）

〔福建師範大学〕作文136本（第9回調査50本，第10回調査49本，第11回調査37本）

〔長春師範大学〕作文99本（第9回調査41本，第10回調査41本，第11回調査17本）

〔東呉大学〕作文175本（第9回調査59本，第10回調査59本，第11回調査57本）

〔フエ大学外国語大学〕作文73本（第9回調査25本，第10回調査24本，第11回調査24本）

〔ドンア大学〕作文208本（第9回調査70本，第10回調査70本，第11回調査68本）

〔韓国外語大学〕作文79本（第9回調査33本，第10回調査27本，第11回調査19本）

〔仁川大学校〕作文15本（第9回調査8本，第10回調査4本，第11回調査3本）

【2022年度開始】

〔ハノイ工業大学〕作文180本（第6回調査60本，第7回調査60本，第8回調査60本）

〔タマサート大学①〕作文22本（第6回調査8本，第7回調査8本，第8回調査6本）

【2023年度開始】

〔タマサート大学②〕作文74本（第2回調査20本，第3回調査19本，第4回調査18本，第5回調査17本）

〔カセサート大学〕作文56本（第1回調査19本，第2回調査19本，第3回調査18本）

※カセサート大学のみ他の2023年度開始大学とは調査時期が異なる

[フランス東洋言語文化学院①] 作文 148 本 (第 2 回調査 40 本, 第 3 回調査 37 本, 第 4 回調査 36 本, 第 5 回調査 35 本)

[リュブリャナ大学①] 作文 24 本 (第 2 回調査 9 本, 第 3 回調査 7 本, 第 4 回調査 5 本, 第 5 回調査 3 本)

[オックスフォード大学] 作文 7 本 (第 2 回調査 2 本, 第 3 回調査 2 本, 第 4 回調査 2 本, 第 5 回調査 1 本)

【2024 年度 (ただし第 1 回調査は 2024. 3) 開始】

[フランス東洋言語文化学院②] 作文 40 本 (第 1 回調査 40 本)

[リュブリャナ大学②] 作文 22 本 (第 1 回調査 13 本, 第 2 回調査 9 本)

データベース等の構築 (アクティビティ)

(1) 2023 年度までに収集した作文データについて, データベースの構築に向けて, 作文が所定の形式に則って書かれているか, 各種の情報のファイルがそろっているかの確認を行った。

国内外の大学や研究機関との組織的な連携等 (アクティビティ・アウトプット)

(1) 上記のドンア大学 (ベトナム) と 2024 年 1 月に, また, 連携して調査に当たっている福建師範大学 (中国) と 2023 年 12 月に, フェ大学外国語大学 (ベトナム) と 2024 年 1 月に, それぞれ学術交流協定を締結した。

他のプロジェクトとの合同の活動等 (アクティビティ・アウトプット)

(1) サブプロジェクト「日本語学習者の作文教育支援研究」(リーダー: 山口昌也) と連携し, 全文検索システム「ひまわり」の導入など, 収集した作文データの活用方法を検討した。

異分野の研究者との共同研究・協業等 (アクティビティ・アウトプット)

(1) (株)富士通の富士通研究所の研究者 2 名, および明星大学情報学部の研究者 1 名と 5 回ミーティングを行い, 計算機によるテキスト処理の効率化の方法を検討した。

公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム (アウトプット)

- (1) 口頭発表を 1 件, ポスター発表を 1 件実施した (2024 年 3 月「第 26 回専門日本語教育学会研究討論会」@立命館大学)。
- (2) ワークショップを 1 件実施した (2023 年 10 月「日本語学会 2023 年度秋季大会」@オンライン)。
- (3) 講演を 6 件実施した (2023 年 9 月「大連外国語大学中国北東アジア言語研究センター主催 学術講演会」@中国・大連外国語大学で 1 件, 2023 年 10 月「待遇コミュニケーション学会 2023 年秋季大会」@オンラインで 1 件, 2024 年 1 月「フェ大学外国語大学・国立国語研究所学術交流協定締結記念講演」@ベトナム・フェ大学外国語大学で 1 件, 2024 年 2 月「京都大学国際高等教育院附属日本語・日本文化教育センター主催 第 30 回多文化交流フォーラム講演会」@オンラインで 1 件, 2024 年 3 月「イタリア日本語教育協会 2024 年度研修会」@イタリア・サピエンツァローマ大学で 2 件)。

書籍・論文等による研究成果の公表 (アウトプット)

(1) 論文を 1 本公表した (2024 年 1 月『国立国語研究所論集』26 号)。

2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

総研大や連携大学院等の協定に基づく授業担当等

(1) 総合研究大学院大学の講義「応用言語学講義」および連携大学院 (一橋大学: 石黒担当) の演習において, 本サブプロジェクトで収集中のデータを活用した授業を行った。【若手支援】

プロジェクト非常勤研究員の雇用

(1) 本プロジェクトの研究推進のために, 4 名のプロジェクト非常勤研究員を雇用し, データの収集・整理に携わったほか, プロジェクトのミーティングに参加し, データの分析やアノテーションの付与などの検討を共同で行った。【若手支援】

大学院生、学振PD等のプロジェクトへの参加

- (1) 連携大学院（一橋大学：石黒担当）の演習等の機会を利用して、本プロジェクトに参画する大学院生を募り、12名（一橋大学7名、明治大学1名、早稲田大学2名、筑波大学1名、金沢大学1名）がプロジェクトのミーティングに参加し、それぞれの研究観点に基づき、収集中の作文データの分析法の発表を行った。【若手支援】

若手研究者への研究費・発表旅費の支援

- (1) 大学院生1名の専門日本語教育学会での発表旅費を支援した。

3. 地域・社会との連携に関する計画

産業界との連携

- (1) 作文の自動評価システム開発のため、(株)富士通研究所を中心としたAIの専門家との会議の場を6回設け（4月に1回、5月に1回、6月に1回、7月に1回、8月に1回、1月に1回）、検討を行った。

4. グローバル化に関する計画

海外の研究者の受入

- (1) 共同研究を行っている海外の大学に所属する研究者、中国16名、台湾4名、韓国6名、ベトナム4名、タイ3名、スロヴェニア3名、フランス1名、ブラジル1名、計38名を共同研究員に加え、現地調査を推進した。

海外の大学との連携等

- (1) 上記のドンア大学（ベトナム）と2024年1月に、また、連携して調査に当たる福建師範大学（中国）と2023年12月に、フエ大学外国語大学と2024年1月に、それぞれ学術交流協定を締結した。
（注：「共同利用・共同研究に関する計画」との重複有）

プロジェクト名：多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究

サブプロジェクト名：日本語学習者の談話の縦断コーパス研究

サブプロジェクトリーダー：石黒 圭

令和5年度サブプロジェクト自己評価

全項目の総合	A
1. 共同利用・共同研究に関する計画	A
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	B
3. 地域・社会との連携に関する計画	—
4. グローバル化に関する計画	A

I. 計画期間内の概要

1. 目的及び特色

【目的】

本サブプロジェクトでは、中国国内の2大学の学習者35名（北京師範大学17名、西安外国語大学18名）を対象に、大学入学から卒業までの4年、年に2回、計8回のI-JAS準拠のインタビュー調査を行い、420時間分の縦断談話データベースを構築する。同時に、収集する談話の内容に関連する作文データを収集し、縦断作文データベースをあわせて構築する。その二つのデータに第3期で構築したI-JASの横断的データも関連付けながら、談話・作文能力の発達過程を総合的に明らかにすることを目指す。

【特色】

学習者コーパスを構築するさいの調査は継続的でないものが多く、第二言語習得研究における習得の過程を分析するのに不十分である。とくに、話し言葉と書き言葉の発達の連関や総合的な技能の発達の研究は立ち後れている現状がある。本サブプロジェクトでは、学習者談話の研究と学習者作文の研究とを連動しながら行ことによって、発話産出と文章産出との関係について明らかにする。

本サブプロジェクトの特色は以下の4点にまとめられる。

■特色1：縦系と横系を組み合わせた習得過程の分析

「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」であるI-JASに準拠する形で学習者の日本語運用の縦断データを経年的に収集し、縦横双方の観点を比較しながら第二言語習得研究が可能な学習者産出データを整備する。

■特色2：話し言葉と書き言葉の連動による習得過程の分析

談話データと作文データを並行して収集することにより、その両データを有機的に関連付け、話し言葉と書き言葉の連動も含めた学習者の総合的な習得過程を明らかにできるデータを整備する。

■特色3：各種アノテーションによる習得過程の分析

談話データには話し言葉特有の分析に必要なフィラーを識別するタグを付与したり、作文データには母語による対訳作文から得た誤用タグを付与したりするなど、それぞれのデータの分析に有効な各種アノテーションを付与し、習得過程の多角的分析を容易にするデータを整備する。

■特色４：背景情報による習得過程の分析

学習者・担当教師へのアンケート調査やインタビュー調査、使用教材や授業のシラバスなど、日本語の学習を背後で支える背景情報を収集し、分析に役立てる。

2. 年次計画（6年間のロードマップ）

縦断研究	2022	2023	2024	2025	2026	2027
学習者談話データ収集	収集1年目 (18名分)	収集2年目 (18名分)	収集3年目 (18名分)	収集4年目 (18名分)		
学習者談話データベース	先行データ 公開準備	先行データ 公開	後続データ 構築開始	後続データ 構築継続	後続データ 公開準備	後続データ 公開
シンポジウム・講習会			シンポ1回		WS 1回	シンポ1回
刊行・出版		論文集準備	論文集刊行			

【2022(R4)年度】

- ・談話データの収集開始（1年目，年2回，西安外国語大学18名分）
- ・先行データのデータベース公開準備（北京師範大学17名分，データ収集済）

【2023(R5)年度】

- ・談話データの収集継続（2年目，年2回，西安外国語大学18名分）
- ・先行データのデータベース公開（北京師範大学17名分，データ収集済）
- ・研究成果論文集の準備

【2024(R6)年度】

- ・談話データの収集継続（3年目，年2回，西安外国語大学18名分）
- ・後続データのデータベース構築開始（西安外国語大学18名分）
- ・国際シンポジウムの開催
- ・研究成果論文集の刊行

【2025(R7)年度】

- ・談話データの収集継続（4年目，年2回，西安外国語大学18名分）
- ・後続データのデータベース構築継続（西安外国語大学18名分）

【2026(R8)年度】

- ・学習者縦断談話データベースの公開準備
- ・談話研究支援のワークショップの開催

【2027(R9)年度】

- ・学習者縦断談話データベースの公開準備
- ・国際シンポジウムの開催

II. 令和5年度の活動

令和5年度予算額 5,963千円

1. 共同利用・共同研究に関する計画

フィールド調査・実験等（アクティビティ）

- (1) 西安外国語大学（中国），ハノイ国家大学外国語大学（ベトナム），チュラーロンコーン大学（タイ）の学生を対象に，I-JASに準拠した内容の談話・作文のオンライン縦断調査を実施した。2023年度は2回分のデータを収集し，合計97時間分の談話データ，および252本分の作文データを収集した。内訳は次のとおりである。

〔西安外国語大学〕

談話約39時間分：平均45分×52名（第4回26名，第5回26名）

作文 104 本：第 4 回 52 本（2 課題×26 名），第 5 回 52 本（2 課題×26 名）

[ハノイ国家大学外国語大学]

談話約 30 時間分：平均 45 分×40 名（第 4 回 20 名，第 5 回 17 名）

作文 78 本：第 4 回 40 本（2 課題×20 名），第 5 回 38 本（2 課題×19 名）

[チュラーロンコーン大学]

談話約 28 時間分：平均 45 分×37 名（第 4 回 19 名，第 5 回 18 名）

作文 70 本：第 4 回 36 本（2 課題×18 名），第 5 回 34 本（2 課題×17 名）

データベース等の構築（アクティビティ）

- (1) 2022 年度に収集した談話データのうち，西安外国語大学（中国）第 2 回調査分 25 名分，約 21.3 時間（平均 45 分）について，データベース構築に向けた文字化およびアノテーション付与を行った。作文データについてはデータベース構築に向け，2023 年度までに収集したデータ（第 1 回～第 5 回の 3 か国合計 704 本分）すべてに目を通し，所定の形式に則って書かれた作文であるかの確認を行った。
- (2) 先行データである中国の北京師範大学の学習者 17 名分，約 136 時間（17 名×平均 1 時間×8 回）のデータベースの構築を行い，『北京日本語学習者縦断コーパス（B-JAS）』として 2024 年 3 月に中納言上で公開した。

<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>

国内外の大学や研究機関との組織的な連携等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 連携して調査に当たる西安外国語大学（中国）と 2024 年 1 月，同じくハノイ国家大学外国語大学（ベトナム）と 2024 年 1 月，それぞれ学術交流に関する協定書を締結した。

他のプロジェクトとの合同の活動等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) サブプロジェクト「日本語学習者の作文の縦断コーパス研究」と連携し，共同で開発した文字入力ツール（EssayLoggerTS）およびシステム（Moodle）を用いて作文のデータ収集を進めた。

調査データ・データベース等公開（アウトプット）

- (1) 先行データである中国の北京師範大学の学習者 17 名分，約 136 時間（17 名×平均 1 時間×8 回）のデータベースの構築を行い，『北京日本語学習者縦断コーパス（B-JAS）』として 2024 年 3 月に中納言上で公開した。

（注：「データベース等の構築」との重複有）

<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>

公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム（アウトプット）

- (1) 2023 年 11 月 5 日 NINJAL シンポジウム「コーパス利用のべし・べからず」において，『I-JAS』『B-JAS』利用のべし・べからずについて」というタイトルで発表を行い（オンライン），YouTube 上に公開した。

https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20231105a/

<https://www.youtube.com/watch?v=rNSqz1liYCs>

書籍・論文等による研究成果の公表（アウトプット）

- (1) 先行データである中国の北京師範大学の学習者 17 名分，約 136 時間（17 名×平均 1 時間×8 回）のデータベースの研究成果をまとめた論文集『北京日语学习者历时语料库与日语教学』中国国际广播出版社の刊行に向けて最終準備を行った。

データベース等に関する講習会・講演会（アウトプット）

- (1) B-JAS の広報として，研究者にデータを使っていただけるよう，2023 年 9 月 3 日開催の 9 月_I-JAS 研究会において，B-JAS の概要や使い方を紹介する講習会を行った。
- (2) データベース構築に向けた文字化，アノテーション付与を進めるために，2023 年 12 月 10 日「文字化研修会」と題し，作業従事者のためのオンライン講習会を行った。

データベース等を使った研究成果・利用実績（アウトカム）

- (1) 先行データのデータベースを使った研究成果として、2023年9月3日に9月_I-JAS研究会において、「B-JASを使った研究事例—中国人日本語学習者の依頼時の前置き表現の使用—」という題名で口頭発表を行った。
- (2) 先行データのデータベースを使った研究成果として、2024年3月2日、立命館大学いばらきキャンパス開催の第26回専門日本語教育学会研究討論会において「縦断学習者コーパスからみた日本語学習者のフィラーの使用傾向—ストーリーテリングを中心に—」という題名でポスター発表を行った。

2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

総研大や連携大学院等の協定に基づく授業担当等

- (1) 連携大学院（一橋大学：石黒担当）の演習において、2名の博士後期課程の大学院生が北京師範大学で収集したデータ（B-JAS）を活用した研究発表を行った。

プロジェクト非常勤研究員の雇用

- (1) 本プロジェクトの研究推進のために、3名のプロジェクト非常勤研究員を雇用し、データの収集・整理に携わったほか、プロジェクトのミーティングに参加し、文字起こしの効率的な方法などの検討を共同で行った。

大学院生、学振PD等のプロジェクトへの参加

- (1) 連携大学院（一橋大学：石黒担当）の演習等の機会を利用して募り、昨年度に引き続き本プロジェクトに参画した3名（一橋大学2名、東京外国語大学1名）の大学院生と本年度も談話分析の方法をめぐる情報交換を行った。

若手研究者への研究費・発表旅費の支援

- (1) 2024年3月2日、大阪府立命館大学いばらきキャンパスで開催された第26回専門日本語教育学会研究討論会に参加する大学院生1名に発表旅費の支援を行った。

若手研究者向けのチュートリアル等

- (1) 2023年11月5日(日)、2023年度NINJALシンポジウム「コーパス利用のべし・べからず」において『I-JAS』『B-JAS』利用のべし・べからずについて」というタイトルで若手研究者等を対象としたオンライン発表を行った。

https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20231105a/

（注：「共同利用・共同研究に関する計画」との重複有）

3. 地域・社会との連携に関する計画

特になし

4. グローバル化に関する計画

海外の研究者の受入

- (1) 現地調査を行う西安外国語大学（中国）2名、ハノイ国家大学外国語大学（ベトナム）4名、チュラーロンコーン大学（タイ）2名、および現地調査を共同で行った北京師範大学2名（中国）、北京外国語大学4名（中国）、計14名の教員を引き続き共同研究員とし、共同研究を推進した。

海外の大学との連携等

- (1) 連携して調査に当たる西安外国語大学（中国）と2024年1月、同じくハノイ国家大学外国語大学と2024年1月、それぞれ学術交流に関する協定書を締結した。

（注：「共同利用・共同研究に関する計画」との重複有）

プロジェクト名：多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究

サブプロジェクト名：日本語学習者の作文教育支援研究

サブプロジェクトリーダー：山口 昌也

令和5年度サブプロジェクト自己評価

全項目の総合	B
1. 共同利用・共同研究に関する計画	B
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	A
3. 地域・社会との連携に関する計画	B
4. グローバル化に関する計画	B

I. 計画期間内の概要

1. 目的及び特色

■プロジェクトの目的

本プロジェクトの目的は、協同型の作文教育向けの作文・添削支援システムを開発し、授業への導入手法を検討することである。さらに、システムを用いた授業実践の結果から作文・添削データベースを構築し、作文技能の習得過程とシステムの教授効果を明らかにする。

■プロジェクトの特徴

作文教育では、教師の指導のみに依拠しない、協同型の授業活動が広く行われている。そこには作文・添削活動自体を評価するプロセスが含まれているが、評価に欠かせない、作文・添削活動の記録や、記録データ活用のための環境が十分整っていないのが現状である。また、現状の作文支援システムは、グループ利用ではなく個別利用向けであるとともに、システムが作文を評価する点に焦点が置かれており、協同型の作文教育には適していない。そこで、次の二つの機能を併せ持つ、作文・添削支援システムを構築する。

①教師・学習者がインターネット上で作文・添削活動を行うための機能

教室や家庭での利用、海外居住者との協同を考慮するとともに、インストール不要で利用できるよう、Webブラウザ上で動作するWebアプリケーションとして実現する。

②実施された作文、添削をデータベース化し、ふりかえり活動や教師の分析を支援する機能

例えば、(1)作文や添削結果の検索、作文・添削過程の閲覧など、教師の分析や学習者のふりかえりを支援する機能、(2)学習者の気づきをグループで共有しやすくするなど、グループでのふりかえり活動を支援する機能を実現する。

この二つの機能を踏まえて、作文・添削支援システムを授業に導入する方法を確立する。アカデミクライディング（日本人大学生、日本語学習者）、作文（日本語学習者）の3種類の実践プログラムを作成し、授業で実践する。そして、実践結果から得られたデータを用いて作成する作文・添削データベースを用いて、効果的な作文添削の方法、作文技能の習得過程などを明らかにする。

2. 年次計画（6年間のロードマップ）

◆年次計画

【2022 年度】

既存の実践手法、支援システムを調査し、作文・添削支援システムの設計を行う。システムのうち、まず、作文・添削部分について、プロトタイプシステムを実現する。また、本システムの利用を想定した実践プログラムを設計する。

【2023 年度】

2022 年度に実現したプロトタイプシステムを使用して、予備実践を実施する。また、支援システムのふりかえり部分の設計し、プロトタイプシステムへ機能を追加する。さらに、実践プログラムの一般向け解説書（実践マニュアル）の作成に着手する。

【2024 年度】

作文・添削支援のプロトタイプシステムを使用して、（作文・添削・ふりかえりを含む）予備実践を実施する。作文・添削データベース構築の準備を開始する。実践マニュアルの作成を進める。

【2025 年度】

作文・添削支援システムを用いた本実践を行い、効果を検証する。また、作文・添削支援システムをインターネット上に試験公開し、合わせて実践マニュアルも公開する。さらに、これまでに実施した実践結果から共有可能なデータを選別し、作文・添削データベースを構築する。

【2026 年度】

作文・添削支援システムの本公開を行い、一般向けの講習会を実施する。また、作文・添削データベースの構築を進める（合計 3 回分の実践結果）。さらに、データベースを用いた分析を行う。

【2027 年度】

作文・添削支援システムの公開後のメンテナンスを行い、システムを改善する。2026 年度に構築した作文・添削データベースをインターネット上に公開する。実践の結果得られた作文・添削データを活用するための講習会を開催する。

II. 令和 5 年度の活動

令和 5 年度予算額 3,383 千円

1. 共同利用・共同研究に関する計画

フィールド調査・実験等（アクティビティ）

- (1) 共同研究員全員（13 名）に対してプロトタイプを用いたデモを行い、共同研究員自身の行っている教育実践に即して、個別にプロトタイプに対するフィードバックを受けた。
- (2) プロトタイプシステムを用いた予備実践を 4 大学（京都外国語大、南山大学、一橋大学、日本国内の大学）で実施した。その際、4 種類の実践プログラムを作成した（後述）。

データベース等の構築（アクティビティ）

- (1) 「フィールド調査・実験等」に基づき、作文・添削支援システムの振り返り支援機能として、小グループでの振り返り、付与されたアノテーションのビューワー、外部ファイルへの作文データのエキスポート、振り返り後の作文の改訂管理機能などの設計を行った。
- (2) 前年構築分のプロトタイプシステムに対して、予備実践に即した拡張（匿名での添削、作文全体へのコメントなど）を行った。また、1 の設計に基づいて、振り返り支援部分の実装を行った。ただし、作文の改訂管理機能など、一部の機能は設計段階である。
- (3) 課題の文章に対してコメント付けして、グループで振り返りを行うタイプの実践プログラム 3 種（読解、輪読、間違い探し課題）、相互添削タイプの実践プログラム 1 種を設計した。

他のプロジェクトとの合同の活動等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 教育現場における日本語学習者の作文執筆支援のために、「日本語学習者の作文縦断研究」（プロジェクトリーダー：石黒圭教授）との会議を2回（8月、9月）開催し、収集した作文データの検索・結果の活用方法として、全文検索システム『ひまわり』で作文データ・メタデータを利用するためのパッケージを試作した。
- (2) 「多世代会話コーパス」（プロジェクトリーダー：小磯花絵教授）のシンポジウム「日常会話コーパス」IX（2024-03-18）で、支援システムを用いたグループ学習における談話に関する予備的な研究発表を1件行った。

調査データ・データベース等公開（アウトプット）

- (1) 共同研究員が予備実践を行うために、機能拡張・改善した（「データベース等の構築」参照）プロトタイプの記事・添削支援システムを限定公開した。

書籍・論文等による研究成果の公表（アウトプット）

- (1) 「データベース等の構築」で作成したプロトタイプ、および、予備実践などについて、日本教育工学会 2023 年秋季全国大会（2023-09-17・2件）、日本教育工学会 2024 年春季全国大会（2024-03-02～03-03・3件）、日本語教育学会 2023 年度秋季大会（2023-11-26・1件）、韓国日語教育学会（2023-12-02・1件）で合計7件の口頭発表を行った。

2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

プロジェクト非常勤研究員の雇用

- (1) 2名の非常勤研究員を雇用した。2名がそれぞれ実践プログラムを1種ずつ設計し、担当している大学の授業でプロトタイプシステムを用いた実践を行った。

大学院生、学振PD等のプロジェクトへの参加

- (1) 共同研究員（大学院生）2名が実践プログラム1種を設計し、担当している大学の授業でプロトタイプシステムを用いた実践を行った。

若手研究者への研究費・発表旅費の支援

- (1) 上記の非常勤研究員2名と共同研究員2名が実践結果などを学会で4件口頭発表した（日本教育工学会2件、日本語教育学会1件、韓国日語教育学会1件）。

3. 地域・社会との連携に関する計画

研究成果の社会への還元

- (1) 今年度実施した実践プログラムを参考に、2種類のタイプの活動（単一の文章をグループで評価する活動、相互添削タイプの活動）に対して、教師用・学習者用の計4種の作成を開始した。

4. グローバル化に関する計画

英語による研究成果の発信等

- (1) プロトタイプシステムのユーザインターフェイスは、多言語表示できるよう実装した。現在は、日本語・英語について表示用テキストを用意している。

プロジェクト名：多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究

サブプロジェクト名：定住外国人の談話の縦断研究

サブプロジェクトリーダー：野山 広

令和5年度サブプロジェクト自己評価

全項目の総合	B
1. 共同利用・共同研究に関する計画	B
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	B
3. 地域・社会との連携に関する計画	B
4. グローバル化に関する計画	—

I. 計画期間内の概要

1. 目的及び特色

本研究の目的と特色（研究課題）は以下の通りである。

【本研究の目的】

2007年から継続してきた東北地方における外国人定住者に対するOPIの枠組みを活用した日本語会話の縦断的インタビュー調査について、第四期も継続するとともに、過去の収集データ（約13年分：一次データ＝当初の5年分、二次データ＝次期の8年分）の更新、整備を行い、それらのデータを公開、分析する。そのことを通して、長期間にわたる生活者の言語習得の実態を明らかにする。最終的に、こうした調査・研究の成果を踏まえて、定住外国人の日本語習得過程の実証的研究に資することを目指す。

【本研究の特色】

本プロジェクトでは、生活者の中で特に日本語学習を必要とする人々のニーズに応えるため、主に外国人の散在地域（秋田県A市）に定住する外国人住民（国際結婚の配偶者）に対して縦断調査を行い、生活者談話の縦断的なデータベースを構築する。本研究の特色＝課題は次の四つにまとめられる。

①生活者の日本語会話力の長期的習得過程の解明把握：OPIの枠組みを活用したインタビューを毎年1度ずつ行い、日本語会話力と言語生活・環境の実態を縦断的に探る。

②生活者支援に結びつく形成的フィードバック：学習者や現場の関係者に対する形成的なフィードバックを行うこと等を通して、現場のニーズに応じた、変革・改善に貢献できるような支援活動を行う。

③会話の傾向や特徴の分析：構築してきたデータベース及びOPIの調査結果を踏まえつつ、音声・文字化データやレーティング結果等からみえてくる会話の傾向や特徴を明確化する。

④生活者の日本語会話力の摩滅・喪失過程の解明：地域日本語教育の効果や課題、日本語会話力の習得過程及び高齢の定住外国人の日本語会話力の摩滅・喪失過程に関して明らかにするとともに、国内外の関連領域・分野の人々とネットワークを構築、拡充する。

2. 年次計画（6年間のロードマップ）

縦断研究	2022	2023	2024	2025	2026	2027 前半
生活者談話データ収集	収集1年目 (3～5名)	収集2年目 (3～5名)	収集3年目 (3～5名)	収集4年目 (3～5名)	収集5年目 (3～5名)	
生活者談話データベース	一次データ 公開準備	一次データ 公開	二次データ 構築開始	二次データ 構築継続	二次データ 公開	二次データ メンテナンス
シンポジウム・講習会		講演会が研修			シンポ1回	研修・講習会
刊行・出版			論文集刊行			

2022(R4)年度：縦断調査（14年目）のデータ収集を継続する。すでに収集した生活者の第一次（当初5年）談話データの文字化更新、整備作業を継続する。

2023(R5)年度：縦断調査（15年目）のデータ収集を継続する。生活者の第一次（当初5年）談話データの文字化更新、整備作業を終え、公開する。公開したデータ活用のための講演会あるいは研修（ワークショップ）を開催する。

2024(R6)年度：縦断調査（16年目）のデータ収集を継続する。すでに収集した生活者の第二次（次期8年）談話データの文字化、整備作業に着手する。縦断調査・研究の成果を踏まえた論文集を刊行する。

2025(R7)年度：縦断調査（17年目）のデータ収集を継続する。すでに収集した生活者の第二次（次期8年）談話データの文字化、整備作業を継続する。

2026(R8)年度：縦断調査（18年目）のデータ収集を継続する。すでに収集した生活者の第二次（次期8年）談話データの文字化データベースを公開し、公開記念のシンポジウムを開催する。

2027(R9)年度：公開した第二次（次期8年）談話データベースのメンテナンスを行い、成果を活用した研修・講習会を開催する。

II. 令和5年度の活動

令和5年度予算額 3,550千円

1. 共同利用・共同研究に関する計画

フィールド調査・実験等（アクティビティ）

- (1) 生活者として地域に定住した外国人（主に国際結婚の配偶者）の日本語会話（談話）に関して、OPIの枠組を活用した縦断調査及びフォローアップ調査を4月25日～26日にかけてフィールドで実施した。
- (2) 地域の学習者に対して、リテラシーに関するパイロット調査を1948年の識字調査を活用して7月23日（S市）及び3月19日（M市）に実施した。

データベース等の構築（アクティビティ）

- (1) 公開に向けたデータの更新、整備を予定通り行った。
- (2) 個人情報の取り扱いについては、改めて配慮を行いながらデータの整備を行った。

他のプロジェクトとの合同の活動等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 共同研究プロジェクト「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」のミーティングや開催された行事に等に参加しつつ、プロジェクトや調査研究の充実に向けて参考とした。

異分野の研究者との共同研究・協業等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 社会言語学、会話分析、教育人類学等の分野を含む学際的な観点から共同研究を進めた。

調査データ・データベース等公開（アウトプット）

- (1) 本プロジェクトの内容に関するサイトを維持しながら、拡充を図った。

<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/>

公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム（アウトプット）

- (1) 講習（研修）に関する情報の概要については、本プロジェクトのサイトに報告、発信した。

書籍・論文等による研究成果の公表（アウトプット）

- (1) B-JAS（北京縦断コーパス）のコーパスデータに関連した成果の一つとして、「学習者の内面から考える指導法—学習者のビリーフの変容から—」という論文を『北京日语学习者历时语料库与 日语教学』pp. 78—91 の中で公表した。

データベース等に関する講習会・講演会（アウトプット）

- (1) 縦断調査のデータベース等の内容を踏まえたアウトプットとして、以下のような講習会（研修）を行った。1) 「定住外国人の日本語会話習得に関する縦断的研究から見えてきたこと～日本語使用者（難民の方々も含む）の高齢化、言語摩滅の過程に注目しながら～」(8月21日, サポート21 主催オンライン講座: 文化庁委託研修), 2) 「定住外国人の日本語会話習得に関する縦断的研究から見えてきたこと～日本語使用者（難民の方々も含む）の高齢化や言語摩滅の過程に注目しながら～」(12月10日, サポート21 主催オンライン講座: 文化庁委託研修)

2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

プロジェクト非常勤研究員の雇用

- (1) 予定通り、プロジェクト非常勤研究員1名を雇用した。

3. 地域・社会との連携に関する計画

地域・社会との連携

- (1) 縦断調査のフィールドにおいて、関連行事に参加するなど、地域・社会や関係者との連携強化を拡充した。また、地域との連携強化、ネットワーク拡充の一環として、地域の実践現場や関係者に対して、以下のような研修を行った。1) 「多文化共生社会と地域日本語教育」(西東京市日本語ボランティア研修, 5月24日), 2) 「多文化共生社会の実現に向けた学びの保障と学校の在り方について～改めて、学びの重要性を確認しつつ～」(江戸川区教育委員会主催副校長研修, 11月13日)

4. グローバル化に関する計画

特になし。

5. その他

- (1) 共同研究プロジェクト「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」との連携・協力及び本プロジェクトの補完的研究の一環として、以下のような学会（研究大会）において、試行調査に関する報告、口頭発表を行った。1) 「現代の時代状況に応じたリテラシー調査の方法開発に向けた試行錯誤—A県B市の自主夜間中学での試行調査結果を踏まえつつ—」(異文化間教育学会第44回大会, 6月10日, 都立大学), 2) 「共生社会の基盤となる日本語リテラシー調査の再構築に向けた一考察」(AJE26回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム&17th EAJIS International Conference) (8月19日, ベルギー・ゲント大学), 3) 「リテラシーに関する調査方法の開発に向けた学際的研究—A県B市の自主夜間中学とC県D市の公立夜間中学での試行（パイロット）調査結果を踏まえつつ—」(基礎教育保障学会第8回研究大会, 9月2日, 福岡大学)

プロジェクト名：多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究

サブプロジェクト名：定住外国人のよみかき研究

サブプロジェクトリーダー：福永 由佳

令和5年度サブプロジェクト自己評価

全項目の総合	B
1. 共同利用・共同研究に関する計画	B
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	A
3. 地域・社会との連携に関する計画	A
4. グローバル化に関する計画	B

I. 計画期間内の概要

1. 目的及び特色

生活者としての定住外国人は、留学生と異なり、教育機関における日本語学習を経験していない人が多いにもかかわらず、日常生活のさまざまな場面で日本語のよみかきが求められる。彼らの「字をよみかきする社会的実践」(=Literacy)は、これまで日本語教育の研究対象としては注目されることは少なく、支援の取り組みも諸外国に比べ立ち遅れていることが指摘されている。

本サブプロジェクトでは、生活者としての定住外国人の日常生活におけるよみかき社会的実践について調査を実施し、よみかき社会実践の類型化とともに、その特徴（新しいメディアや社会的ネットワークの活用等）を明らかにすることを試みる。

それらの基礎的なデータを収集し分析することにより、自治体等が提供する翻訳サービスや「やさしい日本語」をはじめとする既存の言語サービス等の有効性等を検討することやこれまで議論が及んでいなかった言語権やよみかきをめぐるイデオロギーや政治性の問題を考察することが可能となる。

本研究の最終的な目的は、生活者のよみかきを文字の学習ではなく、文字を介したコミュニケーション（字をよみかきする社会的実践）と捉えなおし、その実態を明らかにすることを通して、よみかきに関する諸課題を議論し外国人支援の充実に資することを目指す。

2. 年次計画（6年間のロードマップ）

2022(R4)年度：よみかきやリテラシー等、本研究に関連する先行研究の動向を把握し、資料として整備する（500件程度）。生活者が行う字をよみかきする社会的実践を探索する予備的な調査を限定的な範囲で試行し、その結果にもとづき本調査の設計を行う。また、共同研究者を窓口として、字をよみかきする社会的実践調査（本調査）を実施予定のフィールドや研究協力者と交渉を行う。生活者としての定住外国人による字をよみかきする社会的実践をめぐるシンポジウムを開催する。

2023(R5)年度：字をよみかきする社会的実践調査（本調査）を開始し、データ収集を行う。収集したデータは順次公開に向けた文字化等の作業を行う。

2024(R6)年度：補完的データの収集と、データの分析（よみかき社会的実践の類型化とよみかき社会的実践の特徴）に着手する。

2025(R7)年度：昨年度に引き続き、データ分析を継続し、個人情報保護を含めたデータ公開の方式等を検討する。

2026(R8)年度：限定された範囲でデータの公開を行い、フィードバックを得て、公開に関する問題点の改善を行う。

2027(R9)年度：公開データのメンテナンスを行い、本格的にデータ公開を行う。データ公開にともない、生活者としての定住外国人による字をよみかきする社会的実践をめぐるシンポジウムを開催する。

II. 令和5年度の活動

令和5年度予算額 2,463 千円

1. 共同利用・共同研究に関する計画

フィールド調査・実験等（アクティビティ）

(1) 生活者としての定住外国人による字をよみかきする社会的実践についての調査を研究会議で検討を行い（オンライン6回、対面1回）、調査1（言語生活調査）と調査2（インターアクションインタビュー）として設計を行い、データ収集に着手した（のべ6名分、約300分）。なお、インフルエンザの蔓延により、調査実施予定が大幅に変更（延期、中止を含む）することになった。さらに2024年1月に発生した能登半島地震により、北陸地方の調査は当面の間延期することにした。これらの事情により令和5年度に実施予定の調査は大幅な変更を余儀なくされた。

(2) 収集したデータについては、分析・公開に向けた準備作業を順次行った。

データベース等の構築（アクティビティ）

(1) 公開するデータの様式と規模等についての検討を継続した。

国内外の大学や研究機関との組織的な連携等（アクティビティ・アウトプット）

(1) 北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院との共催で、研究集会「私たちの知らない外国人生活者のたくましく豊かな言語生活—よみかき実践を中心に—」を開催した（2023年8月26日、参加人数20名）。<https://www2.ninjal.ac.jp/jll/ali/result.html> *参照

異分野の研究者との共同研究・協業等（アクティビティ・アウトプット）

(1) 言語（言語教育）以外の社会学や移民研究等を専門とする研究者との連携・協業を積極的に進め、引き続き研究者2名の参加を継続した。

調査データ・データベース等公開（アウトプット）

(1) 調査データ等の研究成果を公開するために、総括班主導のもと他のサブプロジェクトと連携して、本プロジェクトのサイト <https://www2.ninjal.ac.jp/jll/> を開設し、データと情報公開の充実を昨年に引き続き務めた。

公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム（アウトプット）

(1) 研究集会「私たちの知らない外国人生活者のたくましく豊かな言語生活—よみかき実践を中心に—」を北海道大学で開催した（2023年8月26日、参加人数20名）。
<https://www2.ninjal.ac.jp/jll/ali/result.html> *参照

書籍・論文等による研究成果の公表（アウトプット）

(1) 論文4件が『国立国語研究所論集』26号、『社会言語学』23号、『接触場面の言語管理研究』vol.20、『キルギス日本語教育研究』7号に掲載された。

(2) 口頭発表3件を日本言語政策研究会第25回研究大会、第7回キルギス2023日本学・日本語教育国際研究大会、NINJALサロンで行った。

2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

総研大や連携大学院等の協定に基づく授業担当等

- (1) 一橋連携大学院の講義「日本語学講義A」で本プロジェクトの問題意識や方法論等について話題にした（言語社会研究科，2023 年度秋冬学期）。
- (2) 総合研究大学院の講義「言語研究基礎論ⅢA」で本プロジェクトの問題意識や方法論等について話題にした。

プロジェクト非常勤研究員の雇用

- (1) 若手研究者（博士課程在籍者）1 名をプロジェクト非常勤研究員として継続雇用し，先行研究の収集，調査票の整備，調査の実施などを通して質的研究法を学ぶ機会を提供した【若手支援】

大学院生，学振PD等のプロジェクトへの参加

- (1) 若手研究者 2 名（博士課程後期在籍者 1 名，博士課程後期進学予定者）が共同研究員としてプロジェクトに参加し，調査を担当した。さらに，若手研究者 1 名が文献レビューの執筆に携わった【若手支援】

若手研究者への発表の機会の提供

- (1) 若手研究者 1 名（共同研究員）が NINJAL サロン（2024 年 2 月 27 日）において口頭発表を行った。
- (2) 若手研究者が執筆した文献レビュー（英語文献の文献レビュー 3 本）を本プロジェクトのサイトおよび学術情報リポジトリのサイトにおいて公開した。

学術情報リポジトリ

https://repository.ninjal.ac.jp/search?page=1&size=20&sort=custom_sort&search_type=2&q=1698906667279

プロジェクトサイト <https://www2.ninjal.ac.jp/jll/ali/result.html>

【若手支援】【オープンアクセス】

若手研究者への研究費・発表旅費の支援

- (1) 若手研究者 1 名（共同研究員）に研究費・調査旅費を支援した（2024 年 2 月－3 月，都内及び関西における調査準備）。【若手支援】
- (2) 若手研究者 1 名（共同研究）の研究費・旅費（2023 年 8 月，北海道大学における研究集会および研究会議への参加）を支援した。【若手支援】

若手研究者向けのチュートリアル等

- (1) 調査シミュレーション動画を作成し，若手研究員を中心とした共同研究員が調査方法の理解を深めるための支援を行った。なお，調査シミュレーション動画は調査協力者のプライバシー保護の観点から一般公開は行わない。【若手支援】

3. 地域・社会との連携に関する計画

地域・社会との連携

- (1) 地域・社会との連携を深めるために，国際交流協会等を訪問し，連携（調査協力，共同研究者）の強化を図った（長野県（長野国際化協会長野県多文化共生相談センターほか 1 団体），北海道札幌市，埼玉県川口市）。その結果として，調査協力 3 地域と共同研究者 1 名の参加が実現した。

一般向け講義・講演会・フォーラム等

- (1) 研究集会「私たちの知らない外国人生活者のたくましく豊かな言語生活—よみかき実践を中心に—」を北海道大学で開催した（8 月 26 日，参加人数 20 名）。

<https://www2.ninjal.ac.jp/jll/ali/result.html> * 参照

研究成果の社会への還元

- (1) 先行研究文献のレビュー論文8本（外国語文献3本，日本語文献5本）を国立国語研究所学術情報リポジトリに登録，さらに本プロジェクトのサイトには学術情報リポジトリへのリンクを掲載し，研究成果のより広い範囲への発信に努めた。

学術情報リポジトリ

https://repository.ninjal.ac.jp/search?page=1&size=20&sort=custom_sort&search_type=2&q=1698906667279

プロジェクトサイト <https://www2.ninjal.ac.jp/j11/ali/result.html>

【オープンアクセス】【若手支援】

4. グローバル化に関する計画

海外の研究者の受入

- (1) 日本語教師セミナー（ジャカルタ国立大学，2023年9月25日）においてプロジェクトの紹介を行う活動を行い，海外の研究者を共同研究員として受け入れるための働きかけを積極的に行った。
- (2) 多様な視点や幅広いネットワークを本プロジェクトに取り入れるために，海外出身者の研究者を共同研究に参加するように積極的に働きかけ，共同研究員2名の参画を継続した（ロシア出身の研究者1名，韓国出身の研究者1名）。

英語による研究成果の発信等

- (1) キルギス共和国日本語教師会主催の第7回キルギス2023日本学・日本語教育国際研究大会（2023年8月22日）において，海外に向けた研究成果発信を行った（日本語）。
<https://jlkyoushikai-kyrgyz.jimdofree.com/>
- (2) 『キルギス日本語教育研究』7号に，本プロジェクトに関する研究論文が掲載された（日本語）。

5. その他

- (1) 日本語教師セミナー（ジャカルタ国立大学，2023年9月25日）において，本プロジェクトの内容や方法論について紹介した。https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20230925a/

「多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究」評価報告

令和5年度の評価

《評価結果》

計画を上回って実施している

本共同研究プロジェクト「多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究」は、日本語非母語話者すなわち日本語学習者および定住外国人の言語運用の縦断的調査によって多様な言語資源を構築して研究し、その成果を教育支援に生かすことを目的としている。実質5つの研究サブプロジェクトと1つの統括サブプロジェクトによって構成され、本年度(2023(R5)年度)は6年計画の2年目にあたる。

6つのサブプロジェクトそれぞれの4つの計画項目についての自己評価内容を縦覧したところ、各サブプロジェクトの総合評価はそれぞれ概ね妥当であり、また、4つの計画項目それぞれの全体自己評価についても、多少の上下動の要素が見受けられるものの概ね妥当であると判断した。したがって、共同研究プロジェクト全体の全項目の総合評価「A」は妥当であり、外部委員評価を「A」評価とした。

《評価項目》

1. 共同利用・共同研究について

サブプロジェクト「日本語学習者の作文の縦断コーパス研究」「日本語学習者の談話の縦断コーパス研究」「日本語学習者の作文教育支援研究」においては計画を上回る成果を出しており、また「定住外国人の談話の縦断研究」の「その他」に記載されている「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」プロジェクトとの連携協力のもとでの学会発表や、リテラシーに関する調査方法の開発に関わる発表を内外の学会などにおいて行ったことを考慮することができ、当該項目の総合評価「A」は妥当であると考ええる。

2. 教育・人材育成について

サブプロジェクト「日本語学習者の作文の縦断コーパス研究」「日本語学習者の作文教育支援研究」「定住外国人のよみかき研究」においては計画を上回る成果が見られ、「日本語学習者の談話の縦断コーパス研究」においても計画にはない成果が1つ記載されてはいるものの、総じて計画を上回るとまでは言えないと捉え、当該項目の総合評価「B」は多少厳しいとも考えられるものの、概ね妥当であると判断した。

3. 社会連携・社会貢献について

サブプロジェクト「定住外国人のよみかき研究」においては、連携強化のための活動を積極的に行い、文献レビュー論文8本の公表もあって、計画を上回って実施したと評価できるが、他のサブプロジェクトについては、計画されていた内容をほぼ計画どおりに実施したにとどまると捉えることができる。したがって、当該項目のプロジェクト全体としての総合評価「B」は妥当であると考ええる。

4. 国際連携・国際発信について

サブプロジェクト「日本語学習者の作文の縦断コーパス研究」「日本語学習者の談話の縦断コーパス研究」では、計画を上回る成果を出しているが、他の3つのサブプロジェクトは概ね計画どおりの実施にとどまっていると言える。しかし、サブプロジェクト「定住外国人の談話の縦断研究」の「そ

の他」に記載されている1件の発表は、EAJS（ヨーロッパ日本研究協会）とAJE（ヨーロッパ日本語教師会）の合同の国際研究大会で行われており、昨今の内外の日本語教育の研究・実践に大きな影響を及ぼしているCEFRを生み出したヨーロッパ地域における発信であり、国際連携や研究のグローバル化という観点からは、注目すべき成果だと考えられる。この点を考慮し、また他のサブプロジェクトの計画を上回る成果を念頭において、当該項目の総合評価「A」は概ね妥当であると考ええる。

5. その他特記事項

5つのサブプロジェクトの研究課題を見ると、高等教育段階における日本語学習者についての「コーパス研究」が2つ、同様の日本語学習における支援ツールの開発研究が1つ、後の2つは地域日本語教育の主たる対象者である定住外国人についての談話研究と読み書き研究で構成されている。昨今の日本語教育の研究領域・実践領域の多様化あるいは拡大・拡散の様相が示されていると受け止めることができる。

とりわけ、地域社会の定住外国人の日本語学習や習得の実態、複言語・複文化的な言語生活実態などについては、研究への志向が十分に形成されていない嫌いがあるが、国語研での研究プロジェクトの中に、サブプロジェクトとはいえそのような視点が導入されてくることは重要なことであると考えられる。他の共同研究プロジェクトとの更なる連携協力や横断的な活動にも注力していく必要があると言える。

言語権など人の移動と言語使用の政治性への自覚、言語の習得と摩滅・喪失の構造的把握、言語実践・言語運用の社会的・文化的被束縛性の解明など、言語観の修正・更新にも関わると思われる諸課題へのアプローチが遠からず視界に定着することを期待したい。

「開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張」自己点検評価報告

プロジェクト名：開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張

プロジェクトリーダー：小木曾 智信

令和5年度プロジェクト自己評価

全項目の総合	A
1. 共同利用・共同研究に関する計画	A
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	B
3. 地域・社会との連携に関する計画	B
4. グローバル化に関する計画	A

I. 計画期間内の概要

1. 目的及び特色

第3期までの構築分では不足する日本語史研究資料の増補を、本プロジェクト主体による整備だけでなく、開かれた共同構築環境のもとで全国の（世界中の）研究者と連携して行う。そのために、国語研の『日本語歴史コーパス』と親和性の高い標準データ形式を共同で策定し、この形式でデータを作成するための補助ツールを開発、チュートリアルを開催して普及を図る。そのうえで、標準データ形式のデータを国語研で受け入れてコーパス検索アプリケーション「中納言」を通して公開、共同利用に供する。さらに、「昭和・平成書き言葉コーパス」科研（代表者：小木曾）と連携することで上代語から現代語まで接続した真の通時コーパスとして成立させる。

なお、『日本語歴史コーパス』の増補に際しては、フィージビリティスタディを継続して機械翻訳による現代語訳付与を模索する。

2. 年次計画（6年間のロードマップ）

	目標	実施計画
2022(R4) 年度	「通時コーパス」プロジェクトの引き継ぎ OpenCHJ の環境整備 日本語歴史コーパスの増補	『日本語歴史コーパス』増補作業の引き継ぎ 「OpenCHJ 中納言」サーバーの準備 標準データフォーマットの準備・調査 拡張 Web 茶まめ（OpenCHJ 構築支援ツール）の試作 『日本語歴史コーパス』の増補（一部公開） 機械翻訳による現代語訳試行 （必要に応じ ONCOJ の更新、以下同じ）

2023 (R5) 年度	OpenCHJ の公開開始 日本語歴史コーパスの増補	「OpenCHJ 中納言」によるデータ公開 標準データフォーマットの策定 拡張 Web 茶まめ (OpenCHJ 構築支援ツール) の公開 OpenCHJ チュートリアルを開催 『日本語歴史コーパス』増補データの公開 機械翻訳による現代語訳試行 (この頃までに方針決定し、 実用可能なら『日本語歴史コーパス』増補に現代語訳付与を 含める。短期的な実用化が難しい場合は基礎研究を継続)
2024 (R6) 年度	OpenCHJ の公開 日本語歴史コーパスの増補	「OpenCHJ 中納言」による追加データ公開 OpenCHJ チュートリアルを開催 OpenCHJ に関する書籍刊行の準備 『日本語歴史コーパス』増補データの公開
2025 (R7) 年度 (前半)	OpenCHJ の普及 日本語歴史コーパスの増補	「OpenCHJ 中納言」による追加データ公開 OpenCHJ チュートリアルを開催 OpenCHJ に関する書籍の刊行 『日本語歴史コーパス』増補データの公開
	暫定評価	
2026 (R8) 年度	OpenCHJ の定着 日本語歴史コーパスの増補	「OpenCHJ 中納言」による追加データ公開 OpenCHJ チュートリアルを開催 『日本語歴史コーパス』増補データの公開
2027 (R9) 年度	OpenCHJ の総括	「OpenCHJ 中納言」による追加データ公開 OpenCHJ チュートリアルを開催

II. 令和5年度の活動

令和5年度予算額 11,648 千円

1. 共同利用・共同研究に関する計画

データベース等の構築 (アクティビティ)

- 『昭平成書き言葉コーパス』の完成版を公開した (2023 年 6 月)。
- 『日本語歴史コーパス』『明治大正編』に「布哇日本語教科書 (第 1 期)」を、「キリシタン資料」に「天草版金句集」を追加して公開した (2024 年 3 月)。

このほか、下記のデータ整備を行った。

- ・「上方絵入狂言台本」「古今集遠鏡」のコーパス整備を行った。

- ・能楽研究所との協定に基づき謡曲のテキストデータの提供を受け、一部を XML 形式に変換し、既存の辞書（中世文語 UniDic）を用いた形態素解析を試行した。
- ・OpenCHJ の外部データとして、「抄物コーパス」「雑誌キング」「帝国議会議事録」の受け入れ準備を行った
- (3) 「みんなごん」を通じたコーパス更新は 2024 年夏に延期した。
- (4) OpenCHJ 標準データフォーマットを策定して研究発表を行った。（じんもんこん・2023 年 12 月）
- (5) 「Web 茶まめ」を更新し、新しい UniDic に対応し、大納言インポート形式に対応したバージョンを公開した（2024 年 3 月）
- (6) 東京農工大学古宮研究室と連携して機械翻訳による古文の現代語訳を試行した。

国内外の大学や研究機関との組織的な連携等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) オックスフォード大学と連携して ONCOJ のデータ整備を継続した。
- (2) 国立国会図書館については、先方の都合（大規模言語モデルを前提としたデータ提供条件の整備が必要となったこと）により連携は保留となった。

他のプロジェクトとの合同の活動等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 「通時コーパス」から UniDic データベースに見出し語を追加・整備した（布哇日本語教科書から 50 語彙素・559 書字形、天草版金句集から 82 語彙素、269 書字形など）。
- (2) 言語資源開発センターと合同で「中納言」による『日本語歴史コーパス』『昭和平成書き言葉コーパス』の公開を継続した。（アクセス数：CHJ 604,371, SHC 77440）
- (3) 言語資源開発センターと合同で「みんなごん」を運用した。

異分野の研究者との共同研究・協業等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 自然言語処理分野の研究者と学際的な研究を実施し、共著の査読付き論文を刊行し（自然言語処理 20(2), 2023 年 6 月）、言語処理学会で発表を行った。（2024 年 3 月）

調査データ・データベース等公開（アウトプット）

- (1) 『昭和平成書き言葉コーパス』の完成版を公開した。（2023 年 6 月）
- (2) 『日本語歴史コーパス』『明治大正編』に「布哇日本語教科書（第 1 期）」を、「キリシタン資料」に「天草版金句集」を追加して公開した（2024 年 3 月）【重出】
- (3) 「みんなごん」を通じたコーパス更新は 2024 年夏に延期した。

公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム（アウトプット）

- (1) 「通時コーパス」シンポジウムを開催し、研究発表を 11 件行った。（2024 年 3 月）

書籍・論文等による研究成果の公表（アウトプット）

- (1) 共同研究員による『日本語歴史コーパス』を活用した研究を論文 17 件（学会プロシーディングスを含む）、学会発表等 37 件、発表した。
- (2) 『コーパスによる日本語史研究 近世編』をひつじ書房から刊行した（2023 年 12 月）

データベース等に関する講習会・講演会（アウトプット）

- (1) 『日本語歴史コーパス』『昭和・平成書き言葉コーパス』の利用法に関する講習会を 2 回実施した（2023 年 9 月 6 日、12 日）
- (2) みんなごん および OpenCHJ 構築に関するチュートリアルを開催した（2024 年 3 月）

データベース等を使った研究成果・利用実績（アウトカム）

- (1) 『日本語歴史コーパス』の中納言検索クエリ数（CHJ：60.4 万件、SHC：7.7 万件）
- (2) CHJ を利用した論文等 84 件、SHC を利用した論文数 21 件（2023 年刊行分、4 月現在の判明分、コーパス重複を含む）

2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

特別共同利用研究員の受け入れ

- (1) 特別共同利用研究員については、今年度は受け入れなし。(学振PDを1名外来研究員として受け入れた。)

総研大や連携大学院等の協定に基づく授業担当等

- (1) 総研大「言語資源学」「言語資源学演習」の授業で通時コーパスに関する講義・演習を行った。

プロジェクト非常勤研究員の雇用

- (1) プロジェクト非常勤研究員2名を雇用してコーパス構築と研究を実施した。

大学院生、学振PD等のプロジェクトへの参加

- (1) 大学院生4名、学振PD2名をプロジェクト非常勤研究員として雇用しプロジェクトに参加させた。

若手研究者への発表の機会の提供

- (1) 現代日本語史研究会を4回開催(2023年6月、10月、12月、2024年3月)して現代日本語史研究会で若手研究者の発表機会を設けた。
- (2) 「通時コーパス」シンポジウムを開催して若手研究者の発表機会を設けた。(2024年4月)【重出】

若手研究者への研究費・発表旅費の支援

- (1) 若手研究者(共同研究員)の研究発表の費用の支援を行った。(日本語学会, DH2023, EAJ, 日本語文法学会, 言語処理学会)

若手研究者向けのチュートリアル等

- (1) 『日本語歴史コーパス』『昭和・平成書き言葉コーパス』の利用法に関する講習会を2回実施した(2023年9月6日、12日)【重出】

3. 地域・社会との連携に関する計画

産業界との連携

- (1) 小学館出版局との連携協定のもとで『日本語歴史コーパス』の公開継続・更新を行った。

社会人を対象とするスキルアップの計画等

- (1) 国語科教員(国語教育科学生)に向けた『日本語歴史コーパス』の講習会については、本年度は実施しなかった。

研究成果の社会への還元

- (1) 通時コーパスを利用した成果をテレビ番組等を通して発信した。(2024年1月)

4. グローバル化に関する計画

海外の大学との連携等

- (1) オックスフォード大学と連携してONCOJのデータ整備を継続した。

英語による研究成果の発信等

- (1-1) DH2023, EAJ, ヨーロッパ日本学会でCHJを活用した研究発表を行った。
- (1-2) 上海外国語大学でSHCに関するオンライン講演を行った(2023年9月)
- (2) 新規公開データについてCHJ・SHCのウェブページを拡充した。

「開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張」評価報告

令和5年度の評価

《評価結果》

計画を上回って実施している

これまでに構築されてきた「通時コーパス」について、開かれた共同構築環境にこれを置くことによって、通時コーパスをいっそう拡大させて行く契機としようという本プロジェクトは、2年度目となる2023年度において、計画を上回って実施されていると評価する。

コーパスの拡充も順調であるし、また今後、共同構築データ（仮称：OpenCHJ）を作成・整備してゆくための土台作り、そして一部実装、外部データの受け入れ準備などは、計画を超えるペースで進んでいると見られる。教育・人材育成は、計画通りの実施と評価出来るし、社会連携・社会貢献も計画通り、国際連携・国際発信も計画通りの実施であると評価出来る。

《評価項目》

1. 共同利用・共同研究について

「昭和・平成書き言葉コーパス」の完成版が公開された。「日本語歴史コーパス」と「現代日本語書き言葉均衡コーパス」の空白を繋ぐコーパスとして、有意義な存在となった。「日本語歴史コーパス」の拡充も順調である。共同構築データ（仮称：OpenCHJ）については、そのフォーマットを策定して研究発表を行い仕様を固めるとともに、外部データについても、その受け入れ準備を具体的に進めており、通時コーパスの拡大の契機となることが期待出来る状況となった。データの整備に必要な形態素解析の環境も UniDic の改訂や web 茶まめの改訂などで進んでいることが示されており高く評価出来る。コーパスユーザーから修正情報を集積する「みんなごん」の運用も行われている。機械翻訳による古文の現代語訳の試行がなされ、現代語訳のなされていない古文データをコーパスに入れて共有する形に向けて期待が出来る試行である。

書籍・論文等によるアウトプットも順調であり、岡部嘉幸・橋本行洋・小木曾智信編『コーパスによる日本語史研究 近世編』ひつじ書房（2023年12月）の刊行により、前プロジェクトからのものと合わせて、時代別に見て行く中古/中世・近世・近代の三冊が揃ったことになり、大きな成果と言える。以上のように、共同研究・共同利用は、計画を上回って実施されていると考える。

2. 教育・人材育成について

大学院生、学振 PD をプロジェクト非常勤研究員として雇用しプロジェクトに参加させたほか、外来研究員として受け入れるなどしている。

「通時コーパス」シンポジウム、現代日本語史研究会を開催して若手研究者の発表機会を設け、また共同研究員である若手研究者の日本語学会・DH2023・EAJS・日本語文法学会・言語処理学会での研究発表の旅費等の費用を支援した。

『日本語歴史コーパス』『昭和・平成書き言葉コーパス』の利用法に関する講習会を2回実施した。上記のように、教育・人材育成に寄与する目標を、計画通り達成している。

3. 社会連携・社会貢献について

連携予定であった国立国会図書館については、先方の都合（大規模言語モデルを前提としたデータ提供条件の整備が必要となったこと）により連携が保留となったことは残念であった。

小学館出版局との連携協定のもとで「新編日本古典文学全集」を活用した『日本語歴史コーパス』の公開継続・更新を行った。社会連携を、計画通りに行ったと評価出来る。

共同研究の条にも書いた『コーパスによる日本語史研究 近世編』の刊行は、一般社会に向けて、江戸時代語の資料・コーパスについて伝える書となっており、テレビ番組において、言葉に関する一般的な疑問に対して、通時コーパスを利用した成果に基づいて説明したことなどと合わせて、社会貢献を、計画通りに行ったと評価出来る。

4. 国際連携・国際発信について

本プロジェクトに関わるウェブページの英語版については、「昭和・平成書き言葉コーパス」ウェブページで英語版解説が設置され、「日本語歴史コーパス」でも、新規公開データの英語版が拡充された。

ADHO(デジタル・ヒューマニティ組織連合)の国際会議 DH2023(7月にオーストリアで開催), EAJS ヨーロッパ日本学会の EAJS2023(8月にベルギーで開催)で, CHJ を活用した研究発表を行ったほか, 上海外国語大学で9月に SHC に関するオンライン講演を行うなど, 国際的な学会で, 本プロジェクトの成果などを発信しており, 国際発信は計画どおりに実施されていると評価する。

英国オックスフォード大学と連携しての ONCOJ(オックスフォード NINJAL 上代日本語コーパス)のデータ整備は継続されており, 国際連携も計画どおりに実施されていると評価する。

5. その他特記事項

共同構築データの仕組みで外部データを受け入れに可能にすることは歓迎されるが, 「日本語歴史コーパス」の資料をどのように拡充させていくか, または他のコーパスとの連携・統合可能かどうかを課題として検討することが望まれる。

令和5年度 センターに関する評価

- 言語資源開発センター
- 共同利用推進センター

「言語資源開発センター」自己点検評価報告

センター名：言語資源開発センター

センター長：高田 智和

令和5年度自己評価

全項目の総合	B
1. 共同利用・共同研究に関する計画	B
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	B
3. 地域・社会との連携に関する計画	B
4. グローバル化に関する計画	B

I. 令和5年度活動概要

令和5年度予算額 38,759 千円

令和5年度 成果の概要

言語資源開発センターは、研究系（所内の共同研究プロジェクト）や研究者コミュニティと連携してコーパス等の言語資源の整備・開発及びその研究・教育への活用を通して言語資源学の創成に寄与することを目的とする。令和5年度は以下の活動を実施した。

1. 共同利用・共同研究に関する計画

- (1) 複数の共同研究プロジェクトと共同で形態素解析用辞書 UniDic を整備した。
- (2) コーパス検索ツール「中納言」を安定的に運用し、データの新規公開（B-JAS 北京日本語学習者縦断コーパス）、データの追加（CHJ 日本語歴史コーパス、COJADS 日本語諸方言コーパス）、データの修正（C-JAS 中国語・韓国語母語の日本語学習者横断発話コーパス、I-JAS 多言語母語の日本語学習者横断コーパス）、及び機能拡張を行った。利用者数は年間で 69,454 名増加した。
- (3) 研究所が保有する言語資源（コーパス）を利用する外部公募の共同利用型共同研究(C)を9件実施し、所外研究者との交流を図った。
- (4) 言語資源に関する知識・技術の普及を図るため、「第2回音声生成に関する計測技術に関するハンズオンセミナー」を開催した（日本音声学会協賛）。また、「中納言」講習会を複数の共同研究プロジェクトと連携して4回開催した。
- (5) 言語資源開発センター専任職員・研究員による研究発表 11 件、論文刊行 2 件を行った。

2. 大学院教育・若手育成に関する計画

総研大及び連携大学院で言語資源に関する知見・技術の普及を図った。また若手研究者への発表の機会の確保や研究交流の場として「言語資源ワークショップ 2023」（国立情報学研究所後援）を開催した。発表の実績を記録するため『言語資源ワークショップ 2023 発表論文集』にまとめ、国立国語研究所学術情報リポジトリに登録・公開した。

3. 地域・社会との連携に関する計画

コーパス検索ツール「中納言」の大学等での活用を促進するために、授業用アカウントを発行した（131件、対象者（受講者）は4,015名）。

4. グローバル化に関する計画

英文ページ未設置の各コーパス特設サイトについて英文ページ作成に着手した。公開は「名大会話コーパス」にとどまり、次年度以降に順次公開する。

II. 令和5年度の項目ごとの状況

1. 共同利用・共同研究に関する計画

データベース等の構築（アクティビティ）

- (1) 「開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張」「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」との共同により、形態素解析用電子化辞書 UniDic の整備を行い、古文用の UniDic 11 種（ver. 2023.08）を更新・新規公開した。

<https://clrd.ninjal.ac.jp/unidic/>

- (2) 「分類語彙表データベース」の改訂作業を行った。

国内外の大学や研究機関との組織的な連携等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 研究所が保有する言語資源（コーパス）を利用する公募の共同利用型共同研究(C)を9件実施した。いずれも言語資源開発センター併任教員がコーディネータを務めている。

<https://www.ninjal.ac.jp/research/cr-project/project-4/>

他のプロジェクトとの合同の活動等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 「通時コーパス」「多世代会話コーパス」「語彙資源」プロジェクトとの連携によりコーパス検索ツール「中納言」講習会を4回開催した。【重出、「データベース等に関する講習会・講演会」参照】
- (2) 「言語資源ワークショップ 2023」を国立情報学研究所後援によりオンライン開催した（8月28～29日）。【重出、「公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム」参照】
- (3) コーパス構築に関わる所内共同研究プロジェクトと連携して、各種コーパスのデータ整備等を実施した。【重出、「調査データ・データベース等公開」参照】

調査データ・データベース等公開（アウトプット）

- (1) コーパス検索ツール「中納言」について次の通りデータ更新等を実施した。
 - ①B-JAS 北京日本語学習者縦断コーパス「中納言」データ公開（3月）※「多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究」と連携
 - ②C-JAS 中国語・韓国語母語の日本語学習者横断発話コーパス「中納言」データ修正（3月）※「多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究」と連携
 - ③I-JAS 多言語母語の日本語学習者横断コーパス「中納言」データ修正（3月）※「多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究」と連携
 - ④CHJ 日本語歴史コーパス「中納言」データ追加（3月）※「開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張」と連携
 - ⑤COJADS 日本語諸方言コーパス「中納言」データ追加（3月）※「消滅危機言語の保存研究」と連携

公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム（アウトプット）

- (1) 「言語資源ワークショップ 2023」を国立情報学研究所後援によりオンライン開催した（8月28～29日）。発表45件（口頭発表15件、ポスター発表28件、招待講演2件）。総参加者数294名。

<https://clrd.ninjal.ac.jp/lrw2023.html>

事後に『言語資源ワークショップ 2023 発表論文集』を国立国語研究所学術情報リポジトリに登録・公開した（11月）。<https://doi.org/10.15084/0002000110>

書籍・論文等による研究成果の公表（アウトプット）

（1）研究発表 11 件。論文 2 件。

データベース等に関する講習会・講演会（アウトプット）

（1）「第 2 回音声生成に関する計測技術に関するハンズオンセミナー」を、国語研共同利用推進センター共催、科研費基盤研究(B)20H01265 共催、日本音声学会協賛により開催した（8 月 31 日～9 月 1 日、於国語研）。

https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20230831a/

また、同セミナーの講義動画を国語研公式 YouTube にて公開した。（12 月）

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLZfZgVvFbh1aZB9ByasQOpSm5qQFLWVWb>

（2）コーパス検索ツール「中納言」講習会を、コーパス構築に関わる所内共同研究プロジェクトと共催で 4 回開催した。

①『日本語歴史コーパス』『昭和・平成書き言葉コーパス』『中納言』講習会【初級編】（9 月 6 日、於国語研）※「開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張」と連携

https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20230906a/

②『日本語歴史コーパス』『昭和・平成書き言葉コーパス』『中納言』講習会【初級編】（9 月 12 日、オンライン）※「開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張」と連携

https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20230912a/

③オンライン検索システム『中納言』講習会【初級編】（11 月 5 日、オンライン）※「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究」「学習者辞書用語集資源の構築」と連携

https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20231105b/

④NINJAL チュートリアル『日本語日常会話コーパス』の活用 —『中納言』の使い方—（12 月 2 日、オンライン）※「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究」「学習者辞書用語集資源の構築」と連携

https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20231202a/

データベース等を使った研究成果・利用実績（アウトカム）

（1）講習会などを通して「中納言」の利用を促進したことにより、利用者（延べ）が昨年度より 69,454 名増加し 316,851 名となった。

<https://clrd.ninjal.ac.jp/data.html>

2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

総研大や連携大学院等の協定に基づく授業担当等

（1）教員 6 名が総研大の授業「言語資源学」「言語資源学演習」「日本語情報処理」「日本語情報処理演習」を担当した（併任教員による）。

（2）教員 3 名が連携大学院（一橋大学言語社会研究科）においてコーパスに関する指導を行った（併任教員による）。

プロジェクト非常勤研究員の雇用

（1）プロジェクト非常勤研究員 3 名を雇用し、テキスト、音声に関するデータ整備を行った。

若手研究者への発表の機会の提供

（1）「言語資源ワークショップ 2023」を国立情報学研究所後援によりオンライン開催した（8 月 28～29 日）。【重出、「公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム」参照】

若手研究者への研究費・発表旅費の支援

- (1) プロジェクト非常勤研究員が学会発表をする際の参加費・旅費の補助を行った（海外1回，国内1回）。

若手研究者向けのチュートリアル等

- (1) コーパス検索ツール「中納言」講習会を，コーパス構築に関わる所内共同研究プロジェクトと共催で4回開催した。【重出，「データベース等に関する講習会・講演会」参照】

3. 地域・社会との連携に関する計画

地域・社会との連携

- (1) コーパス検索ツール「中納言」の大学等での活用を促進するために，授業用アカウントを発行した（131件，対象者（受講者）は4,019名）。
- (2) 中納言ユーザグループを運用し，ユーザー間の情報交換を図った。
<https://groups.google.com/g/chunagon-users>

4. グローバル化に関する計画

英語による研究成果の発信等

- (1) 各コーパス特設サイトについて，英文ページ未設置のサイトについて，英文ページの作成を行った。「名大会話コーパス」英文ページを公開し（3月），他は次年度以降順次公開する。
<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/nucc/en/index.html>

「言語資源開発センター」評価結果

令和5年度の評価

《評価結果》

計画どおりに実施している

共同利用・共同研究、教育・人材育成、社会連携・社会貢献の各分野で着実な成果を上げている。特に、コーパス検索ツール「中納言」の運用・改善と利用促進は高く評価できる。利用者数の大幅増加は、センターの取り組みが研究コミュニティに広く受け入れられていることを示している。

共同利用型共同研究の実施や「言語資源ワークショップ 2023」の開催は、所外研究者との交流促進に寄与している。また、総研大や連携大学院での教育活動、若手研究者への発表機会の提供や支援は、次世代の言語資源研究者育成に貢献している。

社会連携面では、「中納言」の教育現場での活用促進が注目される。一方、国際連携・国際発信については、英文ページの作成に着手したものの、活動が限定的である点が課題として挙げられる。

今後は、国際的なプレゼンス向上のための取り組み強化や、言語資源の社会実装・一般社会への還元をより積極的に進めることが望まれる。

総じて、言語資源開発センターは言語資源の整備・開発とその活用を通じて言語資源学の発展に貢献しており、その役割を十分に果たしていると評価できる。今後も、これらの活動をさらに発展させ、言語資源学の中心的な役割を担うことが期待される。

《評価項目》

1. 共同利用・共同研究について

形態素解析用辞書 UniDic の整備や、コーパス検索ツール「中納言」の運用・改善は特筆に値する。新規データの公開や既存データの追加・修正により、「中納言」の利用者数が大幅に増加したことは、その有用性と需要の高さを示している。

また、9件の共同利用型共同研究(C)の実施や、「言語資源ワークショップ 2023」の開催は、所外研究者との交流を促進し、言語資源研究の発展に貢献している。さらに、「中納言」講習会や音声生成に関するハンズオンセミナーの開催は、言語資源に関する知識・技術の普及に寄与している。

センター専任職員・研究員による研究発表 11 件、論文刊行 2 件は、センターの研究活動の活発さを示している。今後も、言語資源の整備・開発とその活用を通じて、言語資源学の発展に貢献することが期待される。

2. 教育・人材育成について

総研大や連携大学院での授業・演習を通じて、言語資源に関する知見・技術の普及に努めている。特に、6名の教員が総研大で言語資源学関連の授業を担当し、3名が連携大学院でコーパスに関する指導を行っていることは評価できる。

若手研究者の育成にも力を入れており、プロジェクト非常勤研究員3名の雇用や、「言語資源ワークショップ 2023」の開催を通じて、若手研究者に発表の機会と研究交流の場を提供している。

また、プロジェクト非常勤研究員の学会発表に対する参加費・旅費の補助は、若手研究者の研究活動を支援する重要な取り組みである。

「中納言」講習会の開催は、若手研究者を含む幅広い層に向けた言語資源活用のスキル向上に貢献していると考えられる。これらの活動を通じて、次世代の言語資源研究者の育成に寄与していると評

価できる。

3. 社会連携・社会貢献について

コーパス検索ツール「中納言」の大学等での活用促進が主な取り組みとなっている。特に、授業用アカウントの発行（131件、対象者4,019名）は、言語資源の教育現場での活用を大きく後押ししており、高く評価できる。

また、中納言ユーザグループの運用を通じて、ユーザー間の情報交換を促進していることも、「中納言」の効果的な利用と普及に寄与している。これらの取り組みは、言語資源の社会実装と教育への応用を推進する上で重要な役割を果たしている。

しかし、報告書からは一般社会向けの取り組みが見えにくいため、今後は研究成果の一般向け発信や、言語資源を活用した社会課題解決への貢献など、より広範な社会連携・社会貢献活動を検討することが望ましい。

4. 国際連携・国際発信について

各コーパス特設サイトの英文ページ作成に着手したことが主な取り組みとして挙げられる。「名大会話コーパス」の英文ページ公開は具体的な成果であり、他のコーパスについても次年度以降順次公開予定とのことで、着実に進展していると評価できる。

しかし、報告書からは国際連携や国際発信に関する活動が限定的に見える。例えば、国際的な共同研究プロジェクトの実施、海外の研究機関との連携、国際会議での発表や英語での論文発表などの活動は見られない。

グローバル化が進む言語研究の分野において、言語資源開発センターの国際的なプレゼンスを高めるためには、より積極的な国際連携・国際発信の取り組みが必要である。今後は、海外の研究者や機関との共同研究の推進、国際シンポジウムの開催、英語での成果発信の強化などを検討することが望ましい。

5. その他特記事項

報告書の「その他」の項目には特記事項がないとされているが、全体を通して見ると、言語資源開発センターの活動は着実に進展していると評価できる。特に、コーパス検索ツール「中納言」の利用者数が大幅に増加したことは、センターの取り組みが研究コミュニティに広く受け入れられていることを示している。また、複数の研究プロジェクトと連携してデータ整備や講習会を実施していることから、センターが研究所内外の協力関係を構築し、効果的に機能していることがわかる。

「共同利用推進センター」自己点検評価報告

センター名：共同利用推進センター

センター長：石黒 圭

令和5年度自己評価

全項目の総合	B
1. 共同利用・共同研究に関する計画	B
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	B
3. 地域・社会との連携に関する計画	B
4. グローバル化に関する計画	B

I. 令和5年度活動概要

令和5年度予算額 69,850 千円

令和5年度 成果の概要

1. 共同利用・共同研究に関する計画

- (1) オープンアクセス方針に沿って「国立国語研究所学術情報リポジトリ」での研究成果の登録・公開を推進した。今年度追加183件、総数3,203件となった。
- (2) 日本語研究・日本語教育研究分野の図書・雑誌論文等の書誌情報を整備した。「日本語研究・日本語教育文献データベース」に、6,409件を追加登録した。また、詳細検索等の項目追加の改修を行った。
- (3) 研究図書室収蔵図書資料の整備を進め、「国立国語研究所蔵書目録データベース」を増補拡充した。今年度の図書の受入数は冊子のみで2,318件、電子ブックを含めると2,477件となった。
- (4) 貴重図書等のデジタル化を進め、「日本語史研究資料 [国立国語研究所蔵]」に18件追加公開した。
- (5) 研究資料室収蔵資料目録の整備を進め、「国立国語研究所研究資料室収蔵資料」データベースを増補拡充した。資料群の新規公開は13件、収蔵資料目録試行版の追加登録は5,469件となった。
- (6) 音声・映像資料の媒体変換（デジタル化）を進め、『日本言語地図』調査票等の紙媒体資料のデジタル撮影（37,955枚）と音声・映像資料の媒体変換（129点）を行った。また、所内専用試視聴システム「所蔵音声・映像データベース」を増補拡張した（音声505点、映像7点）。
- (7) 媒体変換したデジタルデータについて長期保存用LTO（6点）を作成した。
- (8) 人間文化研究機構の「令和5年度 社会との共創によるデジタル・ヒューマニティーズ（DH）の推進」公募事業（データ構築補助）に申請し、研究資料室収蔵資料の目録データ「収蔵資料群概要」「収蔵資料目録」「言語地図草稿目録」の3種について、nihuBridgeの統合検索用メタデータを構築し、nihuBridgeに登録した。
- (9) 国文学研究資料館の「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」に協力し、国立国語研究所が所蔵する歴史的典籍204冊を貸出している。画像データ化は2024年度に行われる予定。
- (10) 併任教員4名を配置し、言語資源開発センターとの連携のもと、有償版コーパスの管理・公開体制の整備を進め、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』『日本語話し言葉コーパス』の増刷（複製）、及びウェブページの更新を行った。
- (11) 人間文化研究機構共創先導プロジェクト共創促進研究「学術知デジタルライブラリの構築」と連携し、国立国語研究所デジタルアーカイブサイト（NINDA）の構築を進めた。

- (12) 「BTSJ 1000 人日本語自然会話コーパス」「教育基本語彙データベース・日本語教育基本語彙データベース」を公開した。
- (13) 「鳩間方言辞典データセット整備」など、第3期中期目標期間中に実施した研究課題を中心に研究資料(新規5件、補遺6件、追加11件)を受け入れ、研究資料室に来室利用ができるよう資料整備を行った。
- (14) 情報・システム研究機構データサイエンス共同利用基盤施設社会データ構造化センターとの共催で、2023年9月8日に2023年度共同利用セミナーをWeb開催で行い、「幼児の言語資料」「諸鈍方言辞典」「国立国語研究所研究資料室所蔵音声・映像データベース」の紹介を行った。参加者は77名であった。
- (15) 2023年7月22日開催の、インドネシア共和国・ジャカルタ国立大学言語芸術学部日本語教育科主催研修会、および、2023年9月25日に同大学で開催した2023年度NINJAL日本語教師セミナー(海外)において、国立国語研究所日本語教育映像教材シリーズについての紹介を行った。
- (16) 2023年11月、「図書館総合展2023」に、国立国語研究所研究図書室がオンライン出展し、蔵書を利用した共同研究、「日本語研究・日本語教育文献データベース」、研究図書室について紹介を行った。
- (17) 2024年1月19日、第37回「東洋学へのコンピュータ利用」研究セミナーに共同利用推進センターも共催し、研究資料室資料に関する発表および資料展示を行った。
- (18) 2023年8月31日・9月1日、「第2回音声生成に関する計測技術に関するハンズオンセミナー」に共同利用推進センターも共催し、音声生成に関する計測技術の体験機会を提供した。
- (19) データベース等に多くのアクセスを得た。
- ・国立国語研究所学術情報リポジトリ ダウンロード回数45.3万
※2023年6月30日からWEK03に移行したため、前年度と集計方法が異なる。
 - ・日本語研究・日本語教育文献データベース セッション数9.2万
 - ・日本語史研究資料[国立国語研究所蔵] セッション数2.4万
 - ・国立国語研究所研究資料室収蔵資料データベース セッション数6,700
 - ・共同利用推進センター配布コンテンツ セッション数8.0万
 - ・雑誌「国語学」全文データベース セッション数4,200
 - ・研究資料室の閲覧利用者 62名

2. 大学院教育・若手育成に関する計画

- (1) 「日本語研究・日本語教育文献データベース」の開発、研究資料室収蔵資料の整備と利活用促進のため、プロジェクト非常勤研究員を6名雇用した。

3. 地域・社会との連携に関する計画

- (1) 『国立国語研究所論集』(オンラインジャーナル)を2回(25号、26号)発行した。25号より、関連データに加えて論文についても、クリエイティブ・コモンズのライセンスを付けて公開開始した。

4. グローバル化に関する計画

- (1) 韓国日語教育学会、韓国日本語学会と連携し、韓国国内で刊行されている日本語学関連文献の情報の収集を継続した。
- (2) コーパスを活用した国際的な日本語研究促進のために、ELDAによる「日本語話し言葉コーパス(CSJ)」(有償版コーパス)の配付を開始した。

5. その他

- (1) 研究資料（研究データを含む）及び研究情報の共同利用体制を整備し、2023 年度共同利用型共同研究の採択課題（共同利用型共同研究（A）8 件、同（B）2 件）に対して、研究資料及び研究情報を提供した。
- (2) 言語系学会連合との覚書に基づき、同連合加盟の日本語学会機関誌『日本語の研究』に対し、展望記事執筆のために研究文献データの先行提供を行った。

II. 令和5年度の項目ごとの状況

1. 共同利用・共同研究に関する計画

データベース等の構築（アクティビティ）

- (1) 国立国語研究所の研究成果のオープンアクセスを加速するため、オープンアクセス方針に沿って研究成果の公開を推奨し、「国立国語研究所学術情報リポジトリ」での登録・公開を推進した。今年度追加 183 件、総数 3,203 件となった。今年度は JAIRO Cloud の WEK03 移行のため2か月ほど新規登録を停止した。【オープンアクセス】

<https://repository.ninjal.ac.jp/>

- (2) 日本語研究・日本語教育研究の共同利用に供するため、当該分野の図書・雑誌論文等の書誌情報を整備し、「日本語研究・日本語教育文献データベース」に 6,409 件を追加登録し、総データ件数は、286,835 件となった。大学学術機関リポジトリ及び学協会誌公開プラットフォームに掲載された論文本文 PDF へのリンク件数は 40,968 件である。また、詳細検索等の項目追加の改修を行った。【オープンアクセス】

- (3) 研究図書室収蔵図書資料の利活用のため、図書資料の整備を進め、「国立国語研究所蔵書目録データベース」を増補拡充した。今年度の図書の受入数は冊子のみで 2,318 件、電子ブックを含めると 2,477 件となった。

<https://libgw.ninjal.ac.jp/drupal/>

- (4) 国立国語研究所が所蔵する貴重図書等のデジタル化を進め、「日本語史研究資料〔国立国語研究所蔵〕」に 18 件追加公開した。【オープンデータ】

<https://dglb01.ninjal.ac.jp/ninjaldl/>

- (5) 研究資料室収蔵資料の利活用のため、収蔵資料目録の整備を進め、「国立国語研究所研究資料室収蔵資料」データベースを増補拡充した。資料群の新規公開は 13 件、収蔵資料目録試行版の追加登録は 5,469 件となった。

<https://rmr.ninjal.ac.jp/>

- (6) 研究資料室収蔵資料の保全と再利用のため、「『日本言語地図』調査票」等の紙媒体資料のデジタル撮影（37,955 枚）と音声・映像資料の媒体変換（129 点）を行った。また、所内専用試視聴システム「所蔵音声・映像データベース」を増補拡張し（音声 505 点、映像 7 点）、共同利用環境を整備した。

<http://mereco/>

- (7) 媒体変換したデジタルデータについて長期保存用 LT0（6 点）を作成した。

- (8) 人間文化研究機構の「令和5年度 社会との共創によるデジタル・ヒューマニティーズ（DH）の推進」公募事業（データ構築補助）に申請し、研究資料室収蔵資料の目録データ「収蔵資料群概要」「収蔵資料目録」「言語地図草稿目録」の3種について、nihuBridge の統合検索用メタデータを構築し、nihuBridge に登録した。

https://bridge.nihu.jp/integrated_search

国内外の大学や研究機関との組織的な連携等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 国文学研究資料館の「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」に協力し、国立国語研究所が所蔵する歴史的典籍 204 冊を貸出している。画像データ化は 2024 年度に行われる予定。

他のプロジェクトとの合同の活動等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 併任教員 4 名を配置し、言語資源開発センターとの連携のもと、有償版コーパスの管理・公開体制の整備を進め、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』『日本語話し言葉コーパス』の増刷（複製）、及びウェブページの更新を行った。
- (2) 人間文化研究機構共創先導プロジェクト共創促進研究「学術知デジタルライブラリの構築」と連携し、国立国語研究所デジタルアーカイブサイト（NINDA）の構築を進めた。

調査データ・データベース等公開（アウトプット）

- (1) 「BTSJ 1000 人日本語自然会話コーパス」「教育基本語彙データベース・日本語教育基本語彙データベース」を公開した。
<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/btsj/>
<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/brfvep/>
- (2) 「鳩間方言辞典データセット整備」など、第 3 期中期目標期間中に実施した研究課題を中心に研究資料（新規 5 件、補遺 6 件、追加 11 件）を受け入れ、研究資料室に来室利用ができるよう資料整備を行った。
- (3) 人間文化研究機構共創先導プロジェクト共創促進研究「学術知デジタルライブラリの構築」と連携し、国立国語研究所デジタルアーカイブサイト（NINDA）の構築を進めた。

公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム（アウトプット）

- (1) 情報・システム研究機構データサイエンス共同利用基盤施設社会データ構造化センターとの共催で、2023 年 9 月 8 日に 2023 年度共同利用セミナーを Web 開催で行った。参加者は 77 名（うち海外機関所属者数 10 名、学生数 15 名）であった。
https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20230908a/

データベース等に関する講習会・講演会（アウトプット）

- (1) 上記共同利用セミナーにおいて、「幼児の言語資料」「諸鈍方言辞典」「国立国語研究所研究資料室所蔵音声・映像データベース」の紹介を行った。
- (2) 2023 年 7 月 22 日開催の、インドネシア共和国・ジャカルタ国立大学言語芸術学部日本語教育科主催研修会において、国立国語研究所日本語教育映像教材シリーズについての紹介を行った。
- (3) 2023 年 9 月 25 日にインドネシア・ジャカルタ国立大学で開催した 2023 年度 NINJAL 日本語教師セミナー（海外）において、国立国語研究所日本語教育映像教材シリーズについての紹介を行った。
https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20230925a/
- (4) 2023 年 11 月、「図書館総合展 2023」に、国立国語研究所研究図書室がオンライン出展し、蔵書を利用した共同研究、「日本語研究・日本語教育文献データベース」、研究図書室について紹介を行った。
<https://www.libraryfair.jp/poster/2023/181>
- (5) 2024 年 1 月 19 日、第 37 回「東洋学へのコンピュータ利用」研究セミナーに共同利用推進センターも共催し、研究資料室資料に関する発表および資料展示を行った。
https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20240119b/
<http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/seminars/oricom/2024-1.html>
- (6) 2023 年 8 月 31 日・9 月 1 日、「第 2 回音声生成に関する計測技術に関するハンズオンセミナー」に共同利用推進センターも共催し、音声生成に関する計測技術の体験機会を提供した。
https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20230831a/

データベース等を使った研究成果・利用実績（アウトカム）

（1）アクセス数等

国立国語研究所学術情報リポジトリ ダウンロード回数 45.3 万

※2023 年 6 月 30 日から WEK03 に移行したため、前年度と集計方法が異なる。

日本語研究・日本語教育文献データベース セッション数 9.2 万

日本語史研究資料〔国立国語研究所蔵〕 セッション数 2.4 万

国立国語研究所研究資料室収蔵資料データベース セッション数 6,700

共同利用推進センター配布コンテンツ セッション数 8.0 万

雑誌「国語学」全文データベース セッション数 4,200

（2）研究資料室の閲覧利用者 62 名

2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

プロジェクト非常勤研究員の雇用

- （1）「日本語研究・日本語教育文献データベース」の開発、研究資料室収蔵資料の整備と利活用促進のため、プロジェクト非常勤研究員を 6 名雇用した。

3. 地域・社会との連携に関する計画

研究成果の社会への還元

- （1）『国立国語研究所論集』（オンラインジャーナル）を 2 回発行した（25 号は 2023 年 7 月、26 号は 2024 年 1 月）。25 号より、関連データに加えて論文についても、クリエイティブ・コモンズのライセンスを付けて公開開始した。【オープンアクセス】

<https://www.ninjal.ac.jp/info/publication/papers/25/>

<https://www.ninjal.ac.jp/info/publication/papers/26/>

4. グローバル化に関する計画

海外の大学との連携等

- （1）韓国日語教育学会、韓国日本語學會と連携し、韓国国内で刊行されている日本語学関連文献の情報の収集を継続した。
- （2）コーパスを活用した国際的な日本語研究促進のために、ELDA による「日本語話し言葉コーパス（CSJ）」（有償版コーパス）の配付を開始した。

5. その他

- （1）研究資料（研究データを含む）及び研究情報の共同利用体制を整備し、2023 年度共同利用型共同研究の採択課題（共同利用型共同研究（A）8 件、同（B）2 件）に対して、研究資料及び研究情報を提供した。
- （2）言語系学会連合との「「日本語研究・日本語教育文献データベース」掲載データの Web 公開前の先行提供に関する覚書」に基づき、同連合加盟の日本語学会機関誌『日本語の研究』に対し、展望記事執筆のために研究文献データの先行提供を行った。

「共同利用推進センター」評価結果

令和5年度の評価

《評価結果》

計画どおりに実施している

センターの主目的である共同利用・共同研究の基盤整備に関して顕著な成果を上げている。特に、各種データベースの拡充、資料のデジタル化、研究成果のオープンアクセス化など、研究基盤の強化に大きく貢献した点は高く評価できる。

一方で、教育・人材育成、社会連携・社会貢献、国際連携・国際発信の面では、一定の取り組みは見られるものの、さらなる発展の余地がある。特に、大学院生や若手研究者向けの体系的な教育プログラムの充実、地域社会や一般市民との直接的な連携活動の強化、国際的な共同研究プロジェクトの拡大などを検討しても良いのではないかと。

総じて、センターは日本語学・言語学分野の研究基盤整備において重要な役割を果たしているが、その機能と資源を最大限に活用し、より広範な影響力を持つ組織へと発展していくことが期待される。センターの活動や所蔵資料の認知度向上、利用促進に向けた広報戦略の強化、デジタル技術の更なる活用による新たな研究支援サービスの開発などが今後の課題と思われる。

《評価項目》

1. 共同利用・共同研究について

「国立国語研究所学術情報リポジトリ」への183件の追加登録や「日本語研究・日本語教育文献データベース」への6,409件の追加など、データベースの拡充が着実に進められている。また、音声・映像資料のデジタル化や所蔵資料のデータベース化も進展し、研究資料へのアクセシビリティが大幅に向上した。

共同利用セミナーの開催や他機関との連携によるデジタルアーカイブの構築など、研究コミュニティへの貢献も顕著である。特に、人間文化研究機構の公募事業への参加やnihuBridgeへのメタデータ登録は、機関を越えた研究資源の共有化に寄与している。

このような取り組みは、日本語学・言語学分野の共同研究を促進し、研究基盤の強化に大きく貢献していると高く評価できる。これらのリソースの利用状況や研究成果への影響を詳細に分析し、さらなる改善につなぐことが期待される。

2. 教育・人材育成について

プロジェクト非常勤研究員6名を雇用した。これらの研究員は実践的な研究スキルを養う機会を得ており、若手研究者のキャリア形成に寄与していると考えられる。共同利用セミナーの開催や「第2回音声生成に関する計測技術に関するハンズオンセミナー」の共催など、研究者や学生が最新の研究手法や技術を学ぶ機会を提供している点も評価できる。

しかし、大学院生を対象とした具体的な教育プログラムや、若手研究者向けの体系的な育成計画は明確には読み取れない。データベース構築や資料整理のスキルを体系的に学ぶ機会の提供、共同研究プロジェクトへの大学院生の積極的な参加促進、若手研究者向けのメンタリングプログラムの導入などを考えてはどうか。

3. 社会連携・社会貢献について

オンラインジャーナル『国立国語研究所論集』を2回発行した。特に、論文および関連データにクリエイティブ・コモンズライセンスを付与してオープンアクセス化したことは、研究成果の社会還元という観点から高く評価できる。

また、「図書館総合展 2023」へのオンライン出展を通じて、研究図書室の活動や日本語研究・日本語教育文献データベースの紹介を行ったことも、一般社会への情報発信として意義がある。

しかし、地域社会や一般市民を対象とした直接的な連携活動や、研究成果の社会実装に関する取り組みは明確には読み取れない。今後の課題としては、研究成果をより分かりやすく一般社会に還元する方法の開発、地域社会のニーズに応じた言語関連の支援活動の展開、企業や自治体との連携強化などが考えられる。

4. 国際連携・国際発信について

韓国の学会との連携による日本語学関連文献情報の継続的な収集は、国際的な研究ネットワークの維持・強化に貢献していると考えられる。また、ELDAを通じた「日本語話し言葉コーパス (CSJ)」の国際配布開始は、日本語研究の国際的な普及に大きく寄与する取り組みとして高く評価できる。さらに、ジャカルタ国立大学での日本語教師セミナー開催や日本語教育映像教材シリーズの紹介など、海外での日本語教育支援活動も注目に値する。

一方で、国際的な共同研究プロジェクトの実施や、海外の研究機関との組織的な連携、国際シンポジウムの開催などについては明確な記述が見られない。より多くの国・地域との連携拡大、国際共同研究プロジェクトの立ち上げ、海外の研究者との人材交流プログラムの実施などが今後の課題と思われる。

5. その他特記事項

2023 年度共同利用型共同研究の採択課題に対して研究資料および研究情報を提供するなど、研究支援体制の整備に努めている点は高く評価できる。これは、センターが積極的に研究活動を支援・促進する機関として機能していることを示している。

また、言語系学会連合との覚書に基づく研究文献データの先行提供など、学術コミュニティへの貢献も注目に値する。さらに、人間文化研究機構の公募事業への参加や nihubridge へのメタデータ登録など、他機関との連携も積極的に進めている点も評価できる。

令和5年度管理業務に関する評価

業務運営の改善及び効率化に関する取組

1. 組織運営の改善に関する取組

- ・研究所の管理運営に関する重要事項について審議する運営会議については、毎回（年3回開催）議事要旨を国語研ウェブサイトに掲載するとともに、研究所の教員に関する業績評価の基準について、運営会議の外部委員からの意見を踏まえた修正を行うなど、組織運営の改善に活かした。
- ・外部評価委員会委員からいただいた研究所ホームページについてのご意見を踏まえて、共同利用推進センターのページを新設したほか、言語資源開発センターのページに同センターのミッションなどの記載を行った。
- ・多様なライフスタイルへの対応、ワークライフバランスの実現および時間の有効利用による生産性向上に資することを目的として、新型コロナウイルス感染症の5類移行後も引き続き、週あたりの勤務日数の半分以下の在宅勤務を可能とすることとし、運用にかかる規程等の改訂・整備を行った。

2. 教育研究組織の見直し（強化）に関する取組

- ・言語科学と統計科学の融合を主眼においた新しいセンター「次世代言語科学研究センター」の設置に向けて準備を進めた。
- ・総合研究大学院大学「日本語言語科学コース」を令和5年4月に新たに開設した。また、新入学生を確保するためにコース案内冊子を作成し、国内の関連分野の修士課程を設置している国公立の184大学に送付するとともに、令和5年9月18・19日に所内で大学院説明会、及び言語処理学会などの学会で配布を行うなど、積極的に広報活動に取り組んだ結果、募集人員を上回る4名が入学した（募集人員：3名程度）。
- ・機関拠点型基幹研究プロジェクトについては、各班の進捗状況を管理するために「共同研究プロジェクト推進会議」を毎月開催し、各班の活動報告、データベース構築計画・公開状況、合同シンポジウムの企画などを行い、相互に連携して研究活動を進めるとともに、自己点検・評価委員会を設置し、プロジェクト全体の自己点検・評価を行った。
- ・機関拠点型プロジェクト各班の連携を促進するため、研究発表としてNINJALシンポジウム「コーパス利用のべし・べからず」を令和5年11月5日にオンラインで開催した。
- ・言語資源開発センターを中核とする体制のもと、コーパス構築を担当する各班のメンバーが参加する「プロジェクト横断コーパス会議」を毎月開催し、コーパス構築法の共有化や問題の検討、コーパス講習会の企画など、計画的・体系的に言語資源開発を進めた。
- ・国際発信力を高めるために、国際連携室が支援して、東呉大学と共催で海外におけるチュートリアル授業（台湾）を東呉大学にて令和6年3月9日に開催した。
- ・既存の協定32件（国外16件、国内16件）に加え、消滅危機にある宮古島の言語の整備および地域文化の保全・振興に関わる活動を推進するために沖縄県宮古島市と学術交流協定を、日本語学習者の談話・作文調査を進めるために福建師範大学外国語学院（中国）・ハノイ国家大学外国語大学（ベトナム）・フエ大学外国語大学（ベトナム）・ドンア大学（ベトナム）と学術交流協定を新たに締結し、連携体制を強化した。また、コーパスを活用した産学連携研究として、SB Intuitions株式会社、株式会社リクルート、ホンダリサーチインスティテュート社（HRI）など、6社と共同研究を行った。
- ・IR推進室では、研究力向上に資するために研究成果に関するデータの収集・管理・分析を行うとともに、自己点検・評価委員会等に情報を提供した。また収集したデータに基づき国立国語研究所年報を編集・刊行した。また、「2023年度国立国語研究所IRシンポジウム」を令和6年3月7日に本研究所で開

催し、機構本部や他機関と積極的に情報交換・議論を行い、より適切な評価指標の開発を目指すなど、評価分野にも活かすべく IR 機能の強化を図った。

3. 事務等の効率化・合理化に関する取組

(1) 研究所における事務組織の見直し、事務等の効率化・合理化について

- ・勤務時間管理の効率化を目的として、勤怠管理システムの導入に向けて検討を行い、令和6年度から常勤職員に適用するための体制を整えた。
- ・事務の効率化を図るため、給与明細及び年末調整手続の電子化を行い、ペーパーレス化を進めた。

(2) 機構内機関及び機構外機関との業務の共同実施について

- ・コピー用紙の調達について、機構内3機関（本部・国文研・国語研）と2機構6機関の計9機関で共同調達を実施した。
- ・立川地区（人間文化研究機構国文研、国語研及び情報システム研究機構極地研、統数研の2機構4機関）で、自販機設置運營業務を実施し、156千円の手数料収入を得た。（5年契約4年目）

財務内容の改善に関する取組

1. 外部研究資金、寄付金その他の自己収入の増加に関する取組

- ・令和5年度に配分された科研費（新規及び継続課題）に研究代表者又は研究分担者として、常勤研究者27名のうち25名が参加した（参加率92.6%，新規課題採択率44.0%）。
- ・4機関合同（国文研、国語研、極地研、統数研）科研費説明会（R5.6.9）に教職員22名、人間文化研究機構科学研究費助成事業（科研費）説明会（R5.7.7）に14名が参加した。
- ・外部資金についての公募情報を所内グループウェアに掲載するとともに、全研究者宛てに電子メールで周知した。特に、科研費については、科学研究費助成事業の採択率向上のために、申請者が他の研究分野を含む研究者と研究計画・方法について意見交換を行う「科研費申請準備会議」（R5.5.19, 7.27-28）を実施し、更に申請準備会議前に複数の教員によるプレレビューを行い、若手研究者の育成にも配慮しつつ科研費申請を奨励・支援した（令和6年度分申請32件）。（令和5年12月末現在）
- ・令和6年1月に書籍『日本語の大疑問2』（幻冬舎新書、初版発行部数10,000部）を刊行した。これは令和3年11月に刊行した『日本語の大疑問-眠れなくなるほど面白いことばの世界』（累計発行部数74,000部）の続編にあたるもので、既刊の増刷分及び電子書籍分を含めて、約172万円の印税収入があった。
- ・「日本語話し言葉コーパス」，「現代日本語書き言葉均衡コーパス」，「日本語日常会話コーパス」及び「日本語諸方言コーパス」の有償頒布を行い、総額2,152万円の収入を得た。
- ・施設使用料について、外部への施設貸出しにより、令和5年度は全体で125万円の収入を得た。

2. 経費の抑制に関する取組

経費の抑制については、契約方法の見直しや、外部委託等の促進を以下のとおり実施した。

- ・所内各室廊下やエレベータ前、トイレに電力節減、夏期には軽装励行のポスターを掲示し、教職員に対してコスト削減・省エネ推進の啓発を図った。また、例年どおり4階テラスに遮光及びグリーンカーテンを設置し省エネを図った。
- ・警備業務、施設常駐管理業務の期間満了に伴い、前回同様複数年契約による入札を実施し、経費の抑制及び業務の効率化を図った。

- ・会議のペーパーレス化については、コロナ禍を機とした所内会議のオンライン化と、ハイブリッド開催時のタブレット端末の活用により、印刷等消耗品の削減と労務の軽減を図った。
- ・入札基準に満たない調達について、ホームページ上で広く募ることにより競争性を高め、経費の抑制及び業務の効率化を図った。
- ・給与明細及び年末調整手続を電子化することにより、印刷費、用紙代、郵便費等、経費の抑制と事務の効率化を図った。【再掲】

教育及び研究並びに組織及び運営の状況について自ら行う点検及び評価並びに当該状況に係る情報の提供に関する取組

1. 評価の充実に関する取組

- ・所内に自己点検・評価の実施、評価結果の公表及び活用に関することを目的とした自己点検・評価委員会（委員9人）と研究所が実施する共同研究プロジェクトの推進及び連携・調整を図ることを目的とした共同研究プロジェクト推進会議を連携して開催し、PDCAサイクルを管理している。
- ・自己点検及び評価の検証を行うための所外の専門家9名で構成される外部評価委員会による機関拠点型基幹研究プロジェクトの自己点検評価・外部評価を実施した。
- ・IR推進室では、研究力向上に資するために研究成果に関するデータの収集・管理・分析を行うとともに、自己点検・評価委員会等に情報を提供した。また、「2023年度国立国語研究所IRシンポジウム」を令和6年3月7日に開催し、機構本部や他機関と積極的に情報交換・議論を行い、より適切な評価指標の開発を目指すなど、評価分野にも活かすべくIR機能の強化を図った。【再掲】

2. 情報公開や情報発信等の推進に関する取組

- ・国立大学法人評価委員会の評価結果や業務実績報告書に加えて、外部評価委員会による研究系・センターの令和4年度における実績及び組織運営の評価をまとめた外部評価報告書を、ウェブサイト及び『国立国語研究所年報』を通じて公開した。
- ・研究成果を分かりやすく一般に向けて発信するため、第18回NINJALフォーラム「国語研の言語生活研究の75年：生きたことばをつかまえる・追跡する調査研究」を令和5年12月16日に一橋講堂にてハイブリッド開催し、対面・オンライン併せて190名の参加があった。また大学共同利用機関協議会主催の大学共同利用機関シンポジウム2023「現代の社会問題に挑む日本の科学」（令和5年10月22日、日本科学未来館）の担当機関として、シンポジウムの企画・運営を実施した。各大学共同利用機関に所属する10名のパネリストが登壇したシンポジウムであり、対面で68名、ニコニコ動画によるオンライン視聴者数延べ31,352名（コメント数3,218件）の参加があった。
- ・令和6年1月に書籍『日本語の大疑問2』（幻冬舎新書、初版発行部数10,000部）を刊行した。これは令和3年11月に刊行した『日本語の大疑問-眠れなくなるほど面白いことばの世界』（累計発行部数74,000部）の続編にあたり、ポータルサイト「ことば研究館」に掲載した「ことばの疑問」の記事を改訂の上、書籍化したものである。
- ・国語研ポータルサイト「ことば研究館」において、ことばに関する一問一答式の記事「ことばの疑問」25本および各種催し物、メディア掲載情報など、ことばに関する一般向けコンテンツを発信した。また、研究所の研究活動や研究者などを紹介する一般向け広報誌『ことばの波止場』Vol.13を3月に刊行した。

その他業務運営に関する取組

1. 施設設備の整備・活用等に関する取組

- ・定期的な施設・設備の点検結果及び日常的な研究所内外の施設点検等（木の剪定や伐採、通路の補修等）により、計画的な維持管理を行い、職員及び利用者の適切な予防安全に努めた。

- ・研究所内の事務室内，廊下やエレベータ前，トイレに電力節減，夏期の軽装励行のポスターを掲示し，職員に対するコスト意識・省エネ意識の啓発を図った他，4階テラスに遮光及びグリーンカーテンを設置し，昨年度に引き続き省エネを図った。【再掲】

2. 安全管理に関する取組

危機管理に関するマニュアルに基づく訓練や研修等の実施

- ・危機管理委員会を開催した。委員会では，令和5年度防災訓練の受講状況について報告があり，併せて，研究所内の避難経路及び防災備蓄品について確認を行った。また，1月1日に発生した能登半島地震への対応として1月2日に全所員宛に送信した緊急時安否確認メールの返信状況について報告が行われ，「事業継続計画（BCP）」の定期的な見直しの一環として管理部の「災害時優先業務（優先すべき通常業務）」を更新した。
- ・東京消防庁立川都民防災教育センターにおいて，令和6年1月16日，17日の両日に，VR防災体験や応急救護訓練等4種類の防災体験及び救護訓練を実施し16名が参加した。

3. 法令遵守等に関する取組

公的研究費の適正な使用に関する研修会等及び研究倫理教育等の実施，受講者の理解度チェック及び受講状況の管理監督，情報セキュリティに関する研修の実施。

- ・ハラスメント防止策として，啓発用のリーフレットを新規採用の教職員へ配布し周知するとともに，機構本部主催のハラスメント防止研修（令和5年12月13日，オンライン形式）を実施し，職場において問題となる各種ハラスメントのうち，特に研究指導の場に関する事例紹介を通じて，ハラスメントを起こさないための注意点等について啓発を行い，管理監督の立場の職員を中心に47名（録画配信受講者を含む）が本研修に参加した。
- ・日本学術振興会が提供している研究倫理eラーニングコース[eL CoRE]を，令和4年度より研修受講済みの研究者についても3年毎に再受講することとしており，令和5年度も引き続き実施した。
また，eラーニングシステムを利用したコンプライアンス研修及び研究倫理研修（機構主催）を合同で実施し，140名が参加した。
- ・研究不正行為の告発に関する事案の調査結果による再発防止策の一つとして，研究公正研修「ケーススタディ」を研究所において企画し，令和5年12月11日にハイブリッド形式で実施した。なお，受講対象は全職員とし，当日受講できない職員については，後日録画視聴で受講することとした。
- ・イベントにおける迷惑行為等への対応のため，「国立国語研究所のイベントにおけるアンチハラスメントポリシー」を策定し，研究所ホームページにおいて周知を行った。
- ・情報セキュリティインシデント（個人情報762名分のデータが保存されたノートPCの紛失事案）が発生したことの再発防止策として，関連規定の見直し及び全利用者対象の情報セキュリティ対策のための研修会（令和6年3月～4月にかけて合計2回開催及び録画配信）を実施した。また，人間文化研究機構本部主催の各情報セキュリティ研修・訓練を対象者に受講させた。
- ・令和6年度以降も公開継続予定のほぼ全てのウェブサーバ（21件）及び動的コンテンツ（25件）を対象として，専門業者による脆弱性診断を実施した。

《管理業務に関する取組の評価結果》

管理業務はきわめて良好に行われており、すべての項目で高い評価に値する努力が見られた。

組織運営の改善及び効率化に関しては、運営会議の外部委員からの意見を踏まえて組織運営の改善に活かす、また既存の学術協定に加えて、新たに国内・国外の学術協定を締結して連携を強化するなど、(1) 組織運営の改善に関する取組、(2) 教育研究組織の見直し（強化）に関する取組、(3) 事務等の効率化・合理化に関する取組、のいずれの項目でも高い評価に価する努力が見られた。

財務内容の改善に関しては、科研費採択率の向上のための「科研費申請準備会議」を行い、書籍刊行で約 172 万円、コーパスの有償配布で 2152 万円の収入をあげ、会議のペーパーレス化などで労務・経費の削減を図るなど、(1) 外部研究資金、寄付金その他の自己収入の増加に関する取組、(2) 経費の抑制に関する取組、のいずれの項目でも高い評価に価する努力が見られた。

教育及び研究並びに組織及び運営の状況について自ら行う点検及び評価並びに当該状況に係る情報の提供に関する取組に関しては、自己点検・評価委員会や共同研究プロジェクト推進会議により PDCA サイクルを管理し、外部評価委員会による外部評価を実施し、外部評価報告書を公開するなど、(1) 評価の充実に関する取組、(2) 情報公開や情報発信等の推進に関する取組、のいずれの項目においても高い評価に価する努力が見られた。

その他の業務運営に関する取組では、適切な施設・設備の維持管理による職員・利用者の予防安全に努め、さまざまな工夫により省エネを図り、情報セキュリティ対策のための研修会や研究倫理教育などを実施するなど、(1) 施設設備の整備・活用等に関する取組、(2) 安全管理に関する取組、(3) 法令遵守等に関する取組、のいずれの項目でも高い評価に価する努力が見られた。

資料

国立国語研究所外部評価委員名簿（敬称略）

- ◎ 片桐 恭弘 産業技術総合研究所人工知能研究センター長
専門： 情報科学，社会言語学
- 坂原 茂 東京大学名誉教授
専門： フランス語学，認知言語史
- 上山 あゆみ 九州大学人文科学研究院長/教授
専門： 生成文法・日本語統語論
- 岡島 昭浩 大阪大学大学院人文学研究科教授
(令和6年4月1日～) 専門： 国語史，日本語学史
- 砂川 裕一 群馬大学名誉教授
専門： 哲学，比較文化基礎論，言語文化教育論，日本語日本事情教育論
- 陳 力衛 成城大学経済学部教授
専門： 日本語史，日中言語交渉史
- 橋田 浩一 理化学研究所革新知能統合研究センター 社会における人工知能研究
グループ グループディレクター
専門： 自然言語処理
- 日比谷 潤子 国際基督教大学名誉教授
専門： 社会言語学
- 米田 信子 大阪大学大学院人文学研究科教授
専門： 言語学，フィールド言語学，対照言語学，バントゥ諸語

任期：令和5年4月1日～令和7年3月31日（2年）

◎委員長 ○副委員長

国立国語研究所令和5年度業務の実績に関する評価の実施について

1. 評価の実施の趣旨

国立国語研究所では、基幹型共同研究プロジェクト及び機関拠点型基幹研究プロジェクトにおける研究計画の実施状況について、プロジェクトリーダー・センター長が行った自己点検評価及び実績報告書の妥当性を検証するため外部評価委員会による評価を実施している。

2. 評価の実施方法

評価は、各プロジェクトリーダー・センター長が作成した自己点検評価報告書・実績報告書を踏まえて、書面審査を行った。「プロジェクトの研究活動に関する評価」の点検項目は次のとおりである。

点検項目	下位項目
共同利用・共同研究	フィールド調査・実験等（アクティビティ）
	データベース等の構築（アクティビティ）
	国内外の大学や研究機関との組織的な連携等（アクティビティ・アウトプット）
	他のプロジェクトとの合同の活動等（アクティビティ・アウトプット）
	異分野の研究者との共同研究・協業等（アクティビティ・アウトプット）
	調査データ・データベース等公開（アウトプット）
	公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム（アウトプット）
	書籍・論文等による研究成果の公表（アウトプット）
	データベース等に関する講習会・講演会（アウトプット）
	データベース等を使った研究成果・利用実績（アウトカム）
大学院教育・若手研究者育成	特別共同利用研究員の受け入れ
	総研大や連携大学院等の協定に基づく授業担当等
	プロジェクト非常勤研究員の雇用
	大学院生、学振PD等のプロジェクトへの参加
	若手研究者への発表の機会の提供
	若手研究者への研究費・発表旅費の支援
	若手研究者向けのチュートリアル等

地域・社会との連携	産業界との連携
	地域・社会との連携
	一般向け講義・講演会・フォーラム等
	社会人を対象とするスキルアップの計画等
	研究成果の社会への還元
グローバル化	海外の研究者の受入
	海外の大学との連携等
	国際シンポジウムの開催
	英語による研究成果の発信等
その他特記事項	

国立国語研究所外部評価委員会規程

平成 21 年 10 月 1 日

国語研規程第 7 号

改正 平成 28 年 4 月 1 日

改正 平成 31 年 4 月 1 日

(趣旨)

第 1 条 この規程は、国立国語研究所組織規程（国語研規程第 1 号）第 16 条の規定に基づき、国立国語研究所（以下「研究所」という。）外部評価委員会（以下「委員会」という。）の組織及び運営について定めるものとする。

(任務)

第 2 条 委員会は、次の各号に掲げる事項について審議する。

- (1) 自己点検・評価の結果に基づく評価に関すること。
- (2) 研究所の中期計画及び年度計画の評価に関すること。
- (3) 共同研究プロジェクト等の評価に関すること。
- (4) その他評価に関すること。

(組織)

第 3 条 委員会は、10 名以内の委員をもって組織する。

2 委員は、研究所の設置目的について理解のある学外の学識経験者等の中から所長が委嘱する。

(任期)

第 4 条 委員の任期は 2 年とし、再任を妨げない。ただし、委員に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(委員長)

第 5 条 委員会に委員長を置き、委員の互選により決定する。

2 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。

3 委員長に事故あるときは、あらかじめ委員長が指名した委員がその職務を代行する。

(議事)

第 6 条 委員会は、委員の過半数が出席しなければ、議事を開き、議決をすることができない。

2 委員会の議事は、出席した委員の過半数で決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

(意見の聴取)

第 7 条 委員会は、必要に応じて委員以外の者に出席を求め、意見を聴取することができる。

(外部評価の実施等)

第8条 外部評価の実施は、研究所の中期計画及び年度計画の実施に関する評価の時に行うものとする。

2 委員会は、評価の結果を所長に報告するものとする。

(庶務)

第9条 委員会の庶務は、管理部総務課において処理する。

(その他)

第10条 この規程に定めるもののほか、外部評価の実施に関し必要な事項は、委員会が別に定める。

附 則

この規程は、平成21年10月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成28年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成31年4月1日から施行する。

国立国語研究所外部評価委員会【令和5年度実績評価】（第1回）

日 時： 令和6年9月19日（木） 14：00～16：30

場 所： オンライン会議（ZOOM）

議 事：

1. 前回議事概要（案）確認
2. 令和5年度機関拠点型基幹研究プロジェクト評価について
3. 令和5年度共同研究プロジェクト評価について
4. 令和5年度「言語資源開発センター」及び「共同利用推進センター」の評価について
5. 令和5年度「管理業務」の評価について
6. その他
 - ・人間文化研究機構 第4期中期計画に係る自己点検・評価結果（令和5年度）について

資 料：

資料1	国立国語研究所外部評価委員名簿（令和6年9月1日現在）
資料2	国立国語研究所外部評価委員会規程
資料3	前回議事概要（案）（令和5年10月26日）
資料4	国立国語研究所令和5年度実績に係る外部評価 担当一覧
資料5-1	機関拠点型基幹研究プロジェクト実績報告書
資料5-2	機関拠点型基幹研究プロジェクト評価報告書
資料6-1	「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」評価シート
資料6-2-1～6-2-7	「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」自己点検報告書
資料7-1	「実証的な理論・対照言語学の推進」評価シート
資料7-2-1～7-2-7	「実証的な理論・対照言語学の推進」自己点検報告書
資料8-1	「消滅危機言語の保存研究」評価シート
資料8-2	「消滅危機言語の保存研究」自己点検報告書
資料9-1	「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」評価シート
資料9-2	「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」自己点検報告書
資料10-1	「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究」評価シート
資料10-2	「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究」自己点検報告書
資料11-1	「多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究」評価シート
資料11-2-1～11-2-7	「多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究」自己点検報告書
資料12-1	「開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張」評価シート
資料12-2	「開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張」自己点検報告書

資料 13-1	言語資源開発センター 評価シート
資料 13-2	言語資源開発センター 自己点検報告書
資料 14-1	共同利用推進センター 評価シート
資料 14-2	共同利用推進センター 自己点検報告書
資料 15	令和 5 年度「管理業務」に関する自己点検シート
資料 16-1	令和 5 年度の実績に関する外部評価報告書の構成について
資料 16-2	国立国語研究所 令和 5 年度実績に係る外部評価スケジュール
資料 17-1	大学共同利用機関法人人間文化研究機構 第 4 期中期計画に係る自己点検・評価結果（令和 5 年度）
資料 17-2	第 4 期中期計画 自己点検報告書【計画（3）】

国立国語研究所 年報 2023 年度

2025 年 3 月 28 日 発行

編集・発行

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国立国語研究所

〒190-8561 東京都立川市緑町 10-2

TEL: 0570-08-8595 FAX: 042-540-4333

<https://www.ninjal.ac.jp/>

